‘闇’の守護者

九頭竜 氷雨

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
‘闇’の守護者

【Ｎコード】
Ｎ０３３９Ｎ

【作者名】
九頭竜　氷雨

【あらすじ】
少年は‘闇’属性の波動を持っているという理由から神様に殺され転生する・・・
そして、そこは‘ＲＥＢＯＲＮ！’の世界であったが、その世界には存在するはずのない‘闇’属性のボンゴレリングがあった・・・

「なっ、なんだこれは！？なんで俺が‘女’に！！？」

・・・訂正、彼は‘闇’の過去を持つイレギュラーな‘夜代　楓香

，に憑依（？）し、少女となる。

闇の過去を持つ‘　夜代　楓香’はどのような未来を紡ぐのか・・・

※リング争奪戦からです。ちなみに原作と被ってるところはなるべくとばします。

標的０　【転生　来る！】（前書き）

二次創作は初めてなのですが、頑張って書いていきたいと思います！

標的０　【転生　来る！】

標的０【転生　来る！】

「・・・で？」

「本当にすまなかった」

今現在、俺の前に土下座中の自称：神様（笑）。

ほんと、腹立たしい。ああ腹立たしい。

・・・なんでこんなムカつくようなイケメン老人野郎に、死神ノートによろしく書き込まれた哀れな人のように勝手に運命左右されて殺されなきゃなんねーんだよ！！

「僕は死にましぇん！！」とか言って、向かい迫るトラックの前に立っていたわけじゃないのに・・・

（→古いか・・・？）

俺はただジャンプ歩き読みしてたら車に跳ねられただけだぞ！！

・・・いや、ジャンプ読むのに没頭して車に気付かなかった俺も悪いかもしんないけど・・・

「いやいや、儂がお主の運命ごと変えてしまったから、そんなことは関係ないのじゃよ」

・・・たぶん、神だから心の声も聞こえるってやつですよね～っ、ハイ。

「って、本当にてめえの意思で俺、殺されたってのかよ!!」
「だからさっきからそう言うておろうに・・・」
「・・・シニマスカ、アナタ?」
「儂は死なんよ、何せ神じゃからのう」

おう、そうだったなコラ。(怒)
だがこの怒りを何処に収めたらいいのだろうか。

「いや、ちゃんとした理由があるんだよ」
「おう、癪にさわるがとりあえず聞いてやる。もしつまんねえ理由だったら、いてまうぞ」
「まったく、怖いのう・・・」

そりゃあ、今はブラックモードですからね。

「コホン。お主、平行世界という言葉を知っておるか」
「ああ、あれだろ?俺が元からいない世界だったり、魔法とか存在する世界とか」
「ああ、それじゃ。そしてある世界でイレギュラーが発生しての」

‘イレギュラー’?

「Ｖｏｎｇｏｌａ(ボンゴレ)Ｆａｍｉｇｌｉａ(ファミリー)という組織の名を知っておるかの?」
「!!!」

それってまさかのまさか・・・

‘家庭教師ヒットマンＲＥＢＯＲＮ!’ですかぁ!!?

「そう、それじゃ。そしてその物語に酷似した世界があるのじゃが・・・」
「・・・そこに、イレギュラー、があると？」
「そうじゃ」
すると神様は真剣な表情になり、俺に質問した。
「お主、その物語をどの程度知っておる？」
「とりあえず、未来編までは完璧に覚えてるぜ」
つか、俺、ＲＥＢＯＲＮ！、好きだし♪
「ほほう・・・ならお主に問うぞ。、死ぬ気の炎、の属性は何種類？」
なんだ、簡単じゃん♪
「７種類。大空・嵐・雨・雲・霧・晴・雷の７属性。ちなみに・・・」
「はいはい、ようわかった。確かにそれで合っとるのじゃが・・・」
「？」
「・・・その世界には、もう一つ・・・、闇、という属性があるのじゃ」
え？
・・・えーーーーーっ！！！
「なっ、なんだその属性は！？聞いたこともねぇぞ！！！」
「だからイレギュラーじゃと言っとるじゃろう・・・」

う、うるへぇーっ！！

「そ、それで、その属性とはなんなんだよ」
「まあ、話を聞いてくれ。まずの、初代以来‘闇’の守護者はおらんかったんじゃ」
「それって・・・」
「その立場に立てる奴がいなかった、ということじゃ」
「つまり・・・‘闇’属性の波動を持つ人間がいなかったと？」
「よくわかっとるのぅ。その通りじゃわい」

ふむふむ、まさしくイレギュラー。

「そこで、お主の出番じゃ」
「？」
「実はの・・・お主にボンゴレ１０代目ファミリーの‘闇’の守護者の役割を担って欲しいのじゃ」
「え？」
「つまり・・・転生じゃ！」

はい？
てんせい？天声？ＴＥＮＳＥＩ？
・・・転生？

「時期は黒曜編の直後、リング争奪戦の前で・・・」
「ちょちょちょ、ちょっと待て。それじゃあ俺に‘闇’の守護者をやれってか！？」
「・・・イヤなのか？」
「ま、まあ、イヤじゃないけど」

確かに好きな漫画に介入出来るのは嬉しいけど・・・
‘闇’の守護者ってなんか怖くね!?
いかにもマフィアってカンジなんだけど。

・・・ま、この際いっか。
転生じゃん!ってことは・・・

「そんで?特典とかあるんだろうな!」

ありがたき特典付きテンプレが!

「それがのう・・・一つしか願いが叶えられんのじゃ」

んなーっ!!(ツナ風に叫んでみた)

「もともと‘闇’とは不安定なものでの。‘7?(トリニセッテ)’・・・もとい‘8?(トリニオット)’に干渉する者達にその世界の均衡を崩すような強力な力を与えてしまうと、その世界が崩壊してしまうかもしれぬ」

「え〝!?」

な、なんということでしょう・・・
世界の崩壊?
うーん・・・

・・・それはまずいっスね。

「じゃからあまり理に反するような力は・・・」

「はいはい、わかりました。そんじゃあ、格闘技が最強クラスとかでもいいですか?・・・もちろん、常識あるくらいでいいですから」

まあ、あんまり強すぎる力を持つのは面白くないからね。
でも、ヒバリさんには勝ちたいっス。
・・・狙われたとき用に。

「おお、よいぞ！！お主、話がわかるのう。それじゃあ、オマケに‘超直感（ちょうちょっかん）’に酷似した能力もあたえよう！」
「お、マジで！」

‘超直感’か・・・めちゃ使えそうじゃん！

「よし、それじゃあ「待ってくれ。もう一つ聞きたいんだけど」なんじゃ？」

これは聞いとかねば。

「なんでリング争奪戦の前というタイミング？」
「おお、重要なことを言うのを忘れておったのう」

・・・おいおい、しっかりしてくれ。

「実は、ヴァリアーに‘闇’の守護者が現れたのじゃ」
「え？」

ど、どうして‘闇’の波動を持つ者が？
今までいなかったんじゃねーの？

「わからぬ」

あんた神様でしょ！？

「それがのう、他の平行世界では起こってはおらぬ事じゃから、未来のことはわからぬのじゃ」

・・・なるほど。

つまり他世界に似たような世界がないから、少し時が進んだ世界とかもないから情報が無いってことだよな？

「その通りじゃ。じゃから儂も心配なんじゃが・・・」

「いんや、行ってやんよ、その世界に」

「・・・それでもよいのか」

「ああ、だって面白そうだし♪」

「そうか・・・よかったわい」

「・・・サンキューな、爺さん」

「な、何もお礼など・・・」

「いんや、俺が退屈な日々に飽き飽きしていたの、知ったんだろ？」

なんたって、タイミングが良すぎだ。

・・・丁度、面白い世界に転生したいなぁとか思っていたからな。

・・・なんで最初の方はキレてたかって？

車との接触の痛みがハンパなかったからだよ！！めちゃくちゃ痛かったぞ！

まあ、それは置いといて。

「・・・お主、勘がええのう」

あ、神様に誉められた。

「まあ、お主が‘闇’の波動を持っているからというのが一番の理由じゃから、気にせんでよい」
「・・・わかった」
「・・・そろそろ行くか？」
「そうだな・・・」

なんか気さくそうな神様と別れるのも辛いな。けど・・・

「よし。心の準備はオッケーだ」
「・・・ならば、いくぞ」

神様がそう言うと、俺の体が輝きだす。

さすが神様。床が開いてのパターンではないのですね。よかったっス。

「じゃあな、神さん」
「さらばじゃ、少年よ」

だんだん視界が薄れていく・・・
高揚感に満ちながら俺は旅立っていく。

・・・のだが。

神の爆弾発言によって、俺は嫌悪感を抱くことになる。

「ああ、言い忘れておったわい。お主の体、来世では‘女の子’じ

ゃからな」

は・・・ハイ？
オンナノコ？

・・・えーーーーーーーっ！！！

「ちょっと、それはど・・・」

あ～あ、奴に事情を聞く前に意識が遠のいていくよ・・・
あんの糞爺、今度会ったらタダじゃおかねぇからな！！

ジーザス・・・ｏｒｚ

標的１【俺　来る！】

標的１【俺　来る！】

・・・・・・

ドサッ

「イタッ」

あ、なんかソプラノの高い声が・・・

ま、マジで？

そこは何処かの家の部屋の中だった。

閑散としたその部屋にはベッドや本棚、勉強机に可愛い小物ガあちらこちら。

戸の開いたクローゼットの中には、まるでそこにあるのが当たり前であるかのように女の子の服がぎっしりと掛けられていた。

「はぁぁーーーーっ・・・」

本日超特大級の溜め息が出た。

そんで、今着ている服は水玉模様のパジャマだった。

・・・しかも胸の膨らみも確認出来る。

とりあえずつついてみた。

「ひゃんっ！むぐっ」

・・・俺は思わず口を塞いだ。

な、なんだ今の艶めかしい声が出た～っ！！
やっべえ、超恥ずかしいんですけど！！

あまりの女々しさと恥ずかしさのあまり、その場で悶えること五分。

・・・はぁ、落ち着いた。

と、とりあえず、安易な行動は慎もう。
俺の理性が保(も)たん。

よし、次は状況確認だ。
この部屋を出よう。

ガチャッ

そろそろとドアを開ける。

・・・マジで誰もいないようだ。

トントントンと階段を下りる（ちなみにさっきの俺の部屋の他に２つ部屋があった）と廊下があり、右手にダイニング、左手にリビン

グがあった。

リビングにはテレビとかソファーとかあり、ダイニングには台所の調理器具や食事をする大きな机と椅子もあり充実していた。

「おっ」

そこで俺はあるものを見つけた。

ダイニングテーブルの上に、神様印の手帳と黒のロッドがあった。

興味本位でそのロッドを手に持ってみる。

なんかチアリーディングのバトンみたい。

・・・悪ふざけして手でクルクルと回してみる。

「あっ」

で、床に落として・・・

ガツンッ

「なっ！」

ゆ、床に穴が！穴がぁっ！！

なんで？なにこれ、そんなに重いの！？つかなんで俺がそんなもの軽々と持てたの！！？

混乱していると、あの手帳が目についた。

おそらく、ここに真実が・・・

ゴクリと息を飲み、手帳を手に取る。
そしてぱらっとめくると紙切れが一枚ヒラヒラと落ちた。

「ん？」

とりあえず拾ってみる。

そこにはこう書かれていた。

〈‘ＲＥＢＯＲＮ！’の世界へようこそじゃ。お主に伝え忘れたことをここに記載しておくぞ。〉

なんだよ・・・つか伝え忘れるなよ！！

内容を要約する。

俺の名は夜代（やしろ）　楓香（ふうか）で、歳は１４の中学2年生。
一応、並盛中学への転入生として原作に乱入するらしい。

両親は既に他界。親戚に一度は引き取られたものの、多額の保険金の存在を知った俺（ああ、俺がここに来る前の楓香のことね）は、どうやら一人暮らしを始めたらしい。

ちなみに口調は一人称が‘オレ’で、男勝りな性格らしい。
・・・なんかよかった～。ボロとか出さずにすみそうだな。

とりあえず時計を見るとカレンダーに目がいく。

ふーん、今日が転入初日・・・

って、えーーーーっ!!

ヤバいじゃん!!?
時間は8時ちょうど!?

俺はとりあえず忙しいで並盛中指定の制服を探す。

そういえば洋服箪笥がリビングにあったな・・・

ガバッと開けると浴衣とか普段着ないものの中に、その制服があった。

箪笥の戸の裏にある鏡に制服をあてがう俺の姿が映った。

「・・・」

か、かっこいい。
いや、可愛くもあるが・・・
黒髪のストレートロングに少しつり上がった黒い瞳。
すらっとした背は比較的高そうだな、恐らくこの世界でいう山本武ぐらいはあるんじゃないか?

にっこり笑ってみた。

「くっ・・・／／／」

や、ヤバい・・・鼻血が出そうになった・・・

ギャップ萌えってヤツですか。

普段クールな女の子が笑うとめちゃめちゃ可愛いってやつ？

・・・何言ってんだ、俺。

幸い、寝起きとかではなく長い黒髪も綺麗におろされていたので、

とりあえずあとは服を着るだけだ。

でも顔ぐらいは洗っとかなきゃな。

洗面所は・・・と、階段の向こう側にあった。

バシャバシャっと洗顔し、手短にあったタオルで顔を拭く。

リビングに戻りすぐさま服を着替えようと、パジャマを脱ぐ。

「ブッ！」

って、なんでブラ着けてないの！？

いや、まあ寝るときは外すらしいけどな・・・

つか、生乳を見てしまった俺は吹いたのだ、鼻血を。

ヤバい・・・俺、出血多量で死ぬ・・・

・・・ＢＡＤ　ＥＮ「言わせねーよ！！」

危なかった・・・もう少しで俺の人生が終わるところだった。

と、とりあえず鼻血を拭いてブラを着けなきゃ・・・

箪笥の中に下着類を見つけた。

そんでブラも見つけた。

こっこれを着けろってか・・・？

数分後・・・

「よ、よし。なんとか装置完了」

バタッとソファーに倒れる俺。

後ろのフォックがきつかったぜ・・・

俺、よく生きてるな・・・

ってのんびりしている暇はねぇ！

俺は急いで制服を着ることにした。

・・・まあ、制服なだけあって、着方が難しいってことはなかった。

これで女子中学生の完成っと。

既に用意されていたカバンを持ち（もちろん中身もチェックした）、例のロッドを腰に着け（なんかベルトを見つけてそこにちょうどこのロッドを装置する場所があったので持ち歩くことにした。一応、武器なのかな）、そうそう、例の手帳も忘れずに・・・と。

玄関にある鏡で身嗜みをチェック。

まあ、問題ないだろう。

風紀に触れそうな制服の着方は止め、ちゃんと着てるし。

・・・雲雀　恭弥に目をつけられたらかなわんからな。

って、遅刻したら元も子もないじゃん！！

「行って来まーす」

俺は誰もいない家にそう言うと、玄関の戸を開けた・・・

標的１【俺　来る！】（後書き）

なんか説明不足かも・・・

標的2【転入生　来る！】（前書き）

やっとツナ登場！

標的2【転入生　来る！】

標的2【転入生　来る！】

ｓｉｄｅツナ

・・・黒曜ランドでの一騒動からはや一ヶ月。
オレはリボーンにしごかれつつも、以前とは違う日々に居心地の良さを感じていた。

確かに獄寺君は怖いしランボは五月蠅いしビアンキは以前ほどじゃないけど隙あらばポイズンクッキング出してくるし・・・

でも・・・リボーンが来てからハチャメチャだけど、友達が出来たし憧れの京子ちゃんとも話せるようになった。

なんだかんだ言って、オレ、充実してんなって思うことがあるんだ。

でも・・・・・・

ダッダッダッ

「やっべぇ、遅刻遅刻！母さん、何で起こしてくれないんだよ！！」
「あら、五回も起こしに行ったけど、ツッ君起きなかったじゃない」
「そうだぞ。ママンのせいにするんじゃねぇぞ、ダメツナ」

でも・・・

「ああ、もう間に合わないよ・・・」

ガチャッ

チャキッ

「だったら・・・死ぬ気で走れ」

「んなっ！」

でも。

「ちょっ、タンマタンマ！！」

ニッ

ズカンッ

「復活（リ・ボーン）！！！死ぬ気で走るうぅぅっ！！！」

「イッツ・死ぬ気タイム」

パンツ一丁での登校は勘弁して下さい・・・（涙）

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

タッタッタッ

なにこの身体！！？

走っても走っても、全然疲れないんですけど！？

あれですか、転生者特典ですか！？

・・・まああらゆる武道に精通しているっていうから、それなりに鍛えられているんだろうね。

確かに力持ちってことは、腰に着けている黒のロッドで確認済みだし・・・

ま、いっか。

「ウォォォ・・・」

ん？

何かがものすごい勢いで近づいてくる？

ドドドドドド

「ウォォオオオ！！！」

ああ、これは・・・

「ウオオオオッ！！！！」

走りつつも後ろを向くと・・・

額に炎を灯しすごい形相で走るパンツ一丁の沢田　綱吉がいた（笑）

。

すごいスピードで死ぬ気ツナは横切っていく・・・

「は、はえ～～～っ・・・」

あれは人間技かってほど速かった。

・・・オリンピック出れるんじゃねぇか？

――で。

何とか間に合いましたぜよ。

疲れた・・・精神的に。

・・・男子の視線が突き刺さるんだよ。

しかも何故か女子までも・・・

と、とりあえず、職員室だ、職員室！

ってどこ？

俺は玄関口へ歩いていく女の子を肩を軽く叩いて捕まえた。

「ああ、ちょっとキミ」

「は、はい。私ですか？なんでしょうか？」

なぜ敬語？しかも何故顔を赤らめる？

「職員室何処にあるか教えてくれるか？」

「えっと・・・」

彼女に職員室の場所を懇切丁寧に教えてもらったので笑顔で御礼を言った。

「・・・そうか、ありがとうな」

「／／／　いっいえっ、そんな御礼を言われるほどのことは・・・失礼しますっ」

な、なんか頬を染めて逃げるように去っていったぞ・・・女の子なのになぜ？

・・・まあ、怖がられていないだけまし、か。

うん、職員室へＧＯ！

・・・根津　銅八郎をいじってやろうと思ってたのに、もういないんだった。

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

「はぁ・・・」

オレは服を着つつ、溜め息をついた。

めちゃくちゃ恥ずかったーーっ!!
また変態扱いされるよな、オレ・・・。

・・・はぁ、教室に入ろ。

ガラガラガラ

戸を開けると、真っ先に気付いたのは獄寺君。

「おはようございます、１０代目!」
「お、おはよう、獄寺君」

この人はいつも元気だなぁ・・・

「よっ、ツナ」
「山本。おはよう」

山本もいつも通りほんわかしてるなぁ。

・・・そういやぁ、なんか騒がしいな。
もしかして、オレのパンツ一丁登校!?
でも日常茶飯事になってるし・・・

「ん?ああ、転入生が来るって言ってたぞ」
「転入生?」

山本の話によると、みんなの話では転入生は女の子でかっこよかったらしい。

女の子でかっこよかったって・・・どんな人だろう?

「・・・って、クラスのみんなが言ってたぜ。オレはまだ見てねぇけどな」
「この時期に転入生・・・１０代目、もしかしたら刺客かもしれませんね」

この人なんでそっちの方にしか考えられないのーーーっ！！（ガゴーン・・・）

「ま、まあ、確かに時期的には変かもしれないけど・・・」
「ん？そいつもマフィアごっこするのか？」

山本的解釈きたーっ！

「ちげーよ、野球バカ！つか、ごっこじゃねぇよ、ごっこじゃ！」

ガラガラガラ

「ほら、席に着けー」
「先生、来ちまったな」
「ちっ」
「ナハハハ・・・」

担任が来たのでそれぞれ自分の席についた。

「このクラスに転入生だ。入れー」

転入生、うちのクラスーっ！？

ガラガラ

あっ

た、確かにかっこよかった。
スラッと背が高くて山本ぐらいあるのかな。
なんかお姉さんって感じ。

・・・でも、どっかで見たような・・・

「は、はじめまして。夜代　楓香だ。よ、よろしく」

教室中の男子、超ガン見してるし・・・

「それじゃあ、空いてる席は・・・山本の隣だな」

そういえば、山本の席最後列で隣空いてたんだっけ。

その夜代さんは素早く移動して（きっと周りの男子のせいだな・・・）席につき、隣の山本に話し掛けていた。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

でも、夜代　楓香・・・どっかで聞いたような・・・

席に着くと俺は小さな溜め息を吐いた。

自己紹介、緊張したーっ！
みんなの視線が突き刺さるし・・・
男子のめがやばかったし・・・

特に真正面に座ってた獄寺がガンつけくるし。
・・・なんで？

つか、ツナと同じクラスって・・・
誰かの陰謀を感じる。（おもに神）

しかも隣、山本か・・・

一応、話し掛けておくか。

「山本・・・だっけ。よろしく」
「お、よろしくな。背、高いのな」
「ああ、まあな。ところで・・・」

俺は鎌を掛けてみた。

「沢田　綱吉って、このクラスにいるか？」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―昼休み・屋上

「えっ、１０代目の親戚の方、ですか？」
「うん、父さんの方の従姉なんだ」

昼休み、オレ達は屋上で昼飯を食べていた。

・・・ようやく思い出したよ。
小学校低学年のころに一度、夜代さんと遊んだことがあったんだよな・・・
そのころから男っぽくてかっこよかったっけ。

「でもオレ、忘れてたし・・・」
「道理でツナのこと俺に聞いてきたんだな。夜代さんはツナのこと忘れていないみたいだぜ」
「え？夜代さんが？」
「ああ、このクラスに沢田　綱吉っているかって」

そっか・・・オレが夜代さんのこと忘れてただけか。
なんか悪いことしたな、オレ・・・

「まあ、１０代目のご親戚なら１０代目のことをご存知かもしれませんが、そうでなかったら、やはり刺客だと考えられましたね」

オレが先に夜代さんのこと思い出しておいて良かったーっ！

「や、山本。夜代さん、まだ教室にいるかな？」
「お？教室出るときはいたけど、今はどうかわかんねぇな」
「サンキュー、山本」
「１０代目？」

「やっぱり夜代さんに謝っておきたいんだ。オレだけ忘れてたみたいだし・・・」
「わかりました、お気をつけて！」
「がんばれよ、ツナ！」
「うん、行ってくる！」

そういえば今日、学校でリボーンのヤツ見てないな・・・別に学校に来て欲しくないけど。

標的３　【接触　来る！】（前書き）

リボーンも登場！

標的３　【接触　来る！】

標的３　【接触　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

イツツツ・・・
あ～痛かったぜ。
まあ、それで質問攻めから逃げる口実が出来たんだけどね・・・

昼休み、いきなり頭が痛くなってびっくりした・・・
例の手帳にこの痛みの原因とか書いてるかな～って痛みをこらえながらトイレに駆け込んで（ちなみに女子トイレだ。躊躇している暇はなかったし、昼休みで人の出入りが激しいから男子トイレには入れなかった。心は男だけど身体は女だからな・・・）、手帳をぱらぱらと捲ると案の定書いてあった。

どうやら俺が夜代　楓香になる前の“夜代　楓香”の記憶を、俺の頭に定着させるために魂を繋ぎとめたのだとか。
・・・しかもその“夜代　楓香”が元々、俺の魂の欠片だったというから驚きだ。

いつの間に細工したんだ・・・？

まあ、とにかくそのおかげで俺が“オレ”へとなり、女の子であることに抵抗感が少しなくなった。

それと共に、幼い頃の記憶・・・初めてツナと出会ったことを思い出していた。
というよりは、“記憶の断片に存在している”って感じかな。
・・・これ、ユニが言ってた言葉だよな。
ま、いっか。

「夜代さーん!!」

トイレから出て教室に向かっていると、誰かに呼び止められた。
お、誰かと思えば・・・

「ツ・・・沢田か?オレに何か用?」
「え~と、オレ、夜代さんの従姉の沢田　綱吉ですけど・・・」
「おっ、覚えていてくれたのか」
「あ、やっぱりオレのこと、覚えていたんだ」
「ああ」

まあ、例の手帳でそのことを知った程度だったけど・・・
今は鮮明な記憶があるからな。

「ツナって呼んでもいいか?」
「うん、もちろん。ふ、楓香さん・・・」
「昔みたいに“ふーちゃん”でもいいぞ」
「え、そんな」
「ハハッ、冗談だ。さん付けはなしな」
「ふ、楓香・・・」

そしてオレは昼休みが終わるまで、ツナと昔話をしていた・・・

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

夕暮れ時の学校の帰り道、獄寺君や山本と別れたあと、オレは今日１日の出来事を思い出していた。

「楓香、昔と全然変わってなかったなぁ」

また楓香の笑顔に上気しそうになったな。まあ、威力は違うけど。京子ちゃんの笑顔とはまた違うんだよなぁ～。

今日もついていない１日だったけど、久しぶりに楓香に会えて昔話とかできてよかったな。

「つーか腹減った・・・」

ゴスッ

「イテッ!!リ・・・リボーン!いちいち頭けってくるなよ!」

「ツナがうかれた顔してたからだぞ」

頭をさすりながら塀を見ると、黒スーツの赤ん坊、リボーンがいた。

つかなんだよ、うかれた顔って・・・

「そんなことよりも、あいつ、何者だ?」
「あいつって?」
「転入生だ」
「・・・楓香のこと?オレの従姉だけど」
「そんなことはわかっている。あいつ、オレの尾行に気づいて撒きやがった」

え?どういうこと?

というか、

「いないと思ったらそんなことしてたのかよ!!」(ガーン)
「ニッ。さっさと帰れよ、ツナ」

リボーンはそう言い残して、家へと走り去った。

ほんと、何してんだよ、リボーンのヤツ。

でも、リボーンの尾行を撒くって・・・
どういうことなんだろう。

―――――――――――――――――――――

side楓香

「やっべぇ・・・(汗)」

なんか尾行されてるって思ったから撒いてみたけど・・・

リボーンだったーーっ!!
絶対目をつけられるよな・・・
トホホ

「あれ・・・楓香?」
「ん?」

あ、ツナが前方から歩いてきた。

「あれ?オレん家になにか用?」
「オレん家?って・・・!」

オレの隣の家、ツナの家ーーっ!?

「ああ・・・あそこ、オレの家なんだ・・・」

オレは自宅を指差しながらそう言った。

「んなっ!楓香、お隣だったの!?」
「そうらしいな・・・オレも今初めて知ったよ」

まったく、何してくれてんだよ、神様のヤツ!!
いや、こっちの方が逆に動きやすいか・・・

「そうだ、お隣ついでにツナの叔母さん・・・奈々さんに挨拶したいから、会ってもいいか?」
「あ、うん。いいけど。でも家の中、チビばっかでうるさいかもしれない・・・」

「ん？兄弟いたっけ？」
「いや、家に住み着いているだけだよ・・・」
「・・・大変なんだな」
「はい・・・」

落ち込むツナの肩を、オレはポンと軽く叩いた。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

「ただいま」
「おじゃまします」

玄関の戸を開けると案の定、フウ太がいた。

「おかえり、ツナ兄」
「ただいま、フウ太」
「あれ、その人は・・・？」
「あ、はじめまして。オレは夜代　楓香。ツナの従姉だ」
「そーなんだ！ボクはフウ太。よろしくね、楓香姉！」
「おう！あ、奈々さんはいるか？」
「ママンのこと？今さっき、ビアンキ姉と買い物に出かけたよ」
「あ、そうなんだ・・・」
「あ、楓香。母さん帰って来るまで家にいてもらって構わないよ」
「そうだよ、楓香姉」
「ん、じゃあお言葉に甘えるか」

フウ太とは打ち解けたみたい。

ドタバタドタバタ

「ガハハハ」

「ランボ、待つ！」

ランボのやつ、またイーピンに何かしたんだな・・・

「おっ、ちびっ子2人もいるのか。賑やかなんだな、ツナん家って」

「アハハハ・・・」

ラ「なになに、この人？」

イ「？」

楓「オレは夜代　楓香ってんだ。ちなみにツナの従姉だ」

ラ「おれっちはランボさんだもんね」

イ「イーピンです。よろしくです」

楓「おう」

ラ「楓香ーっ遊べっ！」

ツ「こら、ランボ！」

楓「いいって、ツナ。何するんだ？」

ラ「んとねぇ～、かくれんぼ」

楓「いいぜ。オレが鬼やっから、お前ら隠れていいぞ」

ラ「ランボさん、隠れるの得意だもんね！」

イ「あ、ランボ！」

ドタドタドタ・・・

「あっははは。元気なちびっ子達だな」

「ごめんね、楓香」

「いいってことよ。少し長く居座ってしまうけど、いいか？」

「全然いいよ。むしろチビ達と遊んでもらえて嬉しいよ」
「ハハッ、そうかそうか」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

パラパラ・・・

「夜代　楓香・・・」

・・・なるほど。こいつか。

ニッ

仲間（ファミリー）に誘ってみるか。

標的４　【前触れ　来る！】（前書き）

ややややっとここまできました・・・

標的４　【前触れ　来る！】

標的４　【前触れ　来る！】

キン　キキンッ

真っ暗な闇の中、ビルの屋上に金属音が響く。

ブン
ドゴオッ

長髪の男は剣を振るい、仕込み火薬を爆発させる。

ボッ

もう一人、小柄な少年は青い炎を額に灯し、応戦するために手に持ったブーメラン型の武器，メタルエッジ，を投げる。

ビッ

ドガッ

しかし長髪の男はそれを避け、壁を削っただけだった。

ブウン
パシッ

ブーメランの容量で返ってきたメタルエッジを捕まえる。

「う〝お〝ぉい。てめぇ、何で日本に来たぁ。ゲロっちまわねぇと三枚におろすぞぉオラァ」
「答える必要はない」
長髪の男の言葉に少年はかみつく。
ガキンッ
「くっ」
長髪の男の鋭い剣に、少年は吹き飛ばされる。
ガッ
が、なんとかビルの角に手をかけた。
「う〝お〝ぉい。よえぇぞ」
長髪の男は嘲笑(あざけ)う。
ピラ
「！」
ぱしっ
不意にポケットから落ちた写真を寸での所で掴む。
写真にはにっこり笑うツンツン頭の幼い子供とその母親の姿があった。

「（こんなところで・・・やられるわけには）」

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「母さん、飯まだ～～～？」

階段を下りると

ドダダダ

イ「ランボ、待つ！」

ラ「ガハハハ！」

ランボとイーピンが走り回っていた。

ほんと、元気だよな・・・

あれ？いい匂いがする。

ツ「なんだ、もうできてんじゃ・・・！」

そこには、どぉんと料理が食卓の上に所狭しと並べられていた。

もぐもぐもぐ↑リボーン

ツ「すげーこちそー！！しかも　まだ作りつづけてるーーー！！？」

じゅー　じゅー

奈「ラン、ラーンラン♪」
？「♪」
奈「あっ、楓香ちゃん、胡椒取って」
？「はいはい、奈々さん♪」

ツ「ってか・・・」

母さんの隣で制服の上からエプロンをしている見知った後ろ姿が・・・

ツ「なんで楓香も母さんと一緒になって料理作ってんのーーっ！！？」
楓「おう、ツナ。ささ、お前も食べろ食べろ」

そう言って楓香は出来たての料理をオレの方に持ってきた。

つか、部屋で音楽きいてのんびりしてたせいで、楓香がいるの忘れてたよ・・・

ツ「あ、楓香、料理できたんだ」
楓「まあね。オレ両親、いないから必然的にね」
ツ「あ、ごめん」

そういえば、昼間そう言ってたな・・・

楓「いいって、いいって。それより、味見してくれる?感想聞きた

いんだけど」

笑顔で手を横に振ると、手に持った皿に盛られた料理をオレに突き出してきた。

ツ「い、いいの、オレが味見しても？」

楓「遠慮すんなって。・・・めんどくさい、ほれ、あーん」

ツ「んなっ！！？」

ふ、楓香さん！あ、あーんって！！？

楓「ほら、さっさと口開けなさいよ」

ツ「えっ、ムグッ！」

と思ったら、無理やり口の中に入れられたーーっ！！

もぐもぐ

で、でも、

ツ「うまいよ！楓香！！」

楓「そ、そうか」

オレの勢いになんかちょっと引かれちゃったけど、本当においしかった。

ツ「そ、そういえばなんで母さん、こんなに料理を作ってるんだ？」

楓「あ、そういえばそうだな・・・」

ツ「え？楓香、知ってて母さんと料理していたんじゃないの？」

楓「いや、奈々さんの勢いに押されただけ・・・というか、ノリ？」

ノリで料理手伝っちゃったんだーーっ!!
するとビアンキとフウ太がダイニングに入ってきた。

ビ「ツナ、これはどういうこと?楓香は知らないみたいだけど、ツナは知っているんじゃない?」
フ「ツナ兄が１００点とってきたとか?」
ツ「!!え・・・?　・・・いや」

今日1日の出来事を思い出してみる。

返ってきたテストは0点だったし、体育の時間はボールを顔面で取るし、何もない所で転けるし・・・

普通に今日もダメライフだったけど・・・
自分で確かめよう・・・
オレは遠慮がちに話かけてみた。

ツ「か、母さん・・・?」

ランランラー

だめだ・・・聞こえてないや・・・

ツ「母さん!!」
奈「!?あら、ツっ君♪」

ブンブン

ツ「包丁危ないって!!」

気づいてくれたのはいいんだけど危ないって！！

ツ「どーしたんだよ？何か態度変だよ」

奈「あら、そうかしら・・・？そーいえば、ツナにまだいってなかったわね」

楓「あ、さっきの。それでですか」

ツ「え？」

そして母さんが言ったことに、オレはとても驚いた。

奈「2年ぶりにお父さん帰ってくるって」

・・・！！？

ツ「え！！？な！！！はあ～～～！！？」

楓「クククッ（ツナの百面相、おもしろっ！）」

フ「・・・？」

ビ「そんなに驚くごと？」

いやいや、驚くも何も！

ツ「み・・・見つかったんだあの人！！！」

奈「見つかったって・・・？何のこと・・・？」

え？

ツ「だって父さん、蒸発したんでしょ！？」
奈「やーねーツナったら！
だったらツナの学費や食費は誰が稼いでいるの？」

はっ

ツ「ふわっ！！そ・・・そういえば・・・！！」
奈「ちゃんと連絡とってたのよ。ツナのお父さんは出稼ぎで外国の石油を掘っている泥の男なのよ」
ツ「なっ」
フ「泥・・・」
楓「まあ、確かに泥の男だな」

楓香の言ってることはわからなかったけど、連絡とってたって！？

ビ「まあ　ツナの勘違いもわかるけど・・・私もママンがパパンの話をまったくしないから、話すのはタブーだと思っていたもの」
フ「僕は死んじゃってるのかと思ってたよ」
楓「・・・なんかかわいそうになってきた」
ツ「だ・・・だって　母さん　父さんは消えたって言ってたじゃないか！？」
奈「ああ　あれ？あれはお父さんが・・・」

―出発前に・・・

家光「行ってくるぞ、奈々」
奈「はい、あなた」

家光「奈々。おまえロマンのある男が好きだったよなぁ」
奈「ええ」
家光「ツナにはオレが消えて、星になったとでも伝えておいてくれ。その方がロマンチックだ」
奈「まあ」
家光「あばよ」

――奈「って」（ぽわわーん）
ツ「納得できるかーー！！」（ガーン・・・）
楓「ぷっはっはっはっはっ！！」

楓香、笑いすぎだよ・・・

ビ「面白いパパンね。で、いつ帰ってくるの？」
奈「もうすぐよ。絵ハガキが来たの！」
楓「ぷっ、笑えるぞ、ツナ」
ツ「・・・！」

写真に描かれた風景は、ペンギンの姿と氷河で閉ざされた世界であった。

そして、その上に書かれた文字。

《もうすぐ帰る　父》

なんで南極？
というか・・・

ツ「石油出んのかよここーー！！？」（ガーン）

標的5　【勧誘　来る！】（前書き）

初めてのフルオリジナル♪（主人公のみの話除く）

標的5　【勧誘　来る！】

標的5　【勧誘　来る！】

side楓香

遊び疲れて寝てしまったランボとイーピンを居間で寝かせると、オレはのんびり奈々さんを待つことにした。

たぶん、俺は子供の面倒見がいい方だと思う。

・・・転生前の‘俺’には妹がいた。

つまり、正確にはもういない。転生する2年前に交通事故で亡くなった。

妹はやんちゃで時折の暴走を兄である‘オレ’が諌め、彼の面倒を‘オレ’がみていた。

ガチャッ

遠くで戸の開く声が聞こえた。

・・・湿っぽい話は止めよう。

？「あらっ、誰かいるのかしら」

玄関のオレの靴に気づいたらしい。

オレは急いで玄関へと向かった。

楓「お久しぶりです、奈々さん」
奈「？えっと・・・」
楓「夜代　楓香です」
奈「あら！楓香ちゃん！？大きくなって・・・素敵な女の子になったじゃない。でもどうして？」
楓「えっと、今日から綱吉君と同じ並盛中に通うことになって・・・それで綱吉君を見つけて。オレ、隣に引っ越してきたんですよ。それで挨拶ついでに寄らせてもらいました」
奈「あらまあ！そうだったの！」
楓「すみません、引っ越してきてからお隣が家光叔父さんの家だとは気づかなかったもので・・・」
奈「まあまあ、いいのよそんなこと。元気な姿が見れてよかったわ。ご両親のこと・・・」
楓「あ、はい、大丈夫です。もうあれから8年ですから」
奈「そう・・・」
楓「あっ、し、辛気くさい話は後々で！今は、その・・・」

すると奈々さんはオレの言いたいことがわかるかのように、こう言ってくれた。

奈「おかえりなさい、楓香ちゃん」
楓「・・・ただいま、奈々さん」

その後、奈々さんから家光叔父さんが帰って来ることを、絵ハガキで知った。

sideツナ

夕食後、すぐに帰ろうとする楓香を、母さんが「もうちょっといれば？家、隣なんでしょ」と言ってもう少しいることになった。

ツ「そういえば、楓香は隣に引っ越してくるまで何処にいたの？」
楓「あー、知り合いの家に泊まらせてもらってたんだ」
ツ「へぇ」

もっといろいろ聞きたかったけど、あまり話したくないようで、楓香は話題を変えてきた。

楓「それにしてもツナ、家庭教師がいるんだって？」
ツ「えっ？あ、うん。そーなんだけど・・・」

や、やばい。リボーンのことにはふれないで欲しいんだけど・・・

リ「ちゃおっス」
楓「ん？ちゃ、ちゃおっス？」

だからリボーン、出てくんなよ～っ！

リ「オレがツナの家庭教師をやってる、リボーンだぞ」
楓「へぇ・・・こんな赤ちゃんがね・・・」

ほらーっ、絶対おかしいと思っているよー・・・

楓「小さいのに凄いんだな！」

んなっ、山本的ーーっ!?

リ「まあな。ちなみにオレはマフィアボンゴレファミリーの殺し屋（ヒットマン）だぞ。そんで家庭教師も兼ねてツナをボンゴレファミリーのボスにするために、イタリアから来たんだぞ」

ツ「ちょっ、なに暴露してんのーーっ!!」

楓「へぇ、マフィアか。面白そう!しかもツナがボスか・・・いい人選だな」

え?

面白そう?

・・・いい人選?

リ「ニッ。面白そうか、気に入ったぞ。お前、ボンゴレファミリーに入らないか」

ツ「ちょっ、なに勧誘してんの!!?」

楓「いいぜ。面白そうだし」

ツ「楓香!?」

楓「ハハッ、気にすんなって。オレとツナの仲だろ?」

ツ「気にしますって!」

楓「おっ、もうこんな時間。帰るわ。じゃあ、また明日な」

ツ「ちょっ!」

そういうと、楓香はそそくさと部屋を出ていった。

ツ「ちょっと、リボーン!変な世界に楓香を巻き込むなよ!!」

リ「心配すんな。楓香は後々役に立つからな」

ツ「わけわかんないこと言って誤魔化すなよ!!」

っていうか、楓香も楓香だよ！

なんで断ってくれないんだよ！！

ツ「はぁ・・・」

リ「情けねぇ声出すんじゃねぇ」

ゴスッ

ツ「イテッ！いちいち蹴るなよ！」

悩み事が増える一方だ・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

奈「もっとゆっくりしていけばいいのに」

楓「いえ、もう遅いですから・・・」

奈々さんの再度の好意を断る。

オレが家で１人になることを心配してくれての言葉だけに断りにくかったけど。

奈「そう？じゃあ、またいらっしゃいね」

楓「はい、またおじゃまさせてもらいます。家光叔父さんにもご挨拶したいので」

奈「あら、こんな可愛い子に会いたいって言われて。お父さん、モ

テモテねぇ」
楓「アハハハ・・・」

―帰宅後

楓「ふう・・・」

玄関前・・・とりあえず帰ってきました我が家！

楓「・・・」

チャキッ

楓「誰？」

ロッドを手にとり、伸ばす。
ちなみに、このロッドには伸縮する仕掛けがある。
他にも仕掛けがあるんだけどね。

すると、塀の陰からゆっくりと出てくる小さな影。
・・・リボーンだな。

リ「オレの殺気に気づくとは。やはり」
楓「夜代家の子かってか？最強（アルコバレーノ）の赤ん坊のリボーン」

ピクッ

おっ、少しながらも驚いている。

リ「・・・お前、なぜそれを知ってる」
楓「そう殺気立つなって。家光から聞いただけだ」

つか痛いよ、殺気が。

リ「そうか、お前が・・・」
楓「ま、あそこのとこの日本好きな少年よりかは強いと思うぜ。まっ、ツナの力になりたかったからファミリーに入るって言っただけだからな。別に他意はないよ」
リ「ニッ。そうか。じゃましたな」

どうやら帰ってくれたらしい。
ったく、心臓に悪いっての。

今のことで余計に疲れを感じたオレは、さっさと風呂に入って寝ることにした。

邪念退散、邪念退散・・・

標的５　【勧誘　来る！】（後書き）

訂正：弟→妹

標的６　【風紀委員長　来る！】（前書き）

ヒバリ至上主義の人はごめんなさい！

標的６　【風紀委員長　来る！】

標的６　【風紀委員長　来る！】

ｓｉｄｅツナ

次の日、朝の登校で獄寺君と山本、それに楓香と並んでいつもの通学路を歩いていた。

山「へー、よかったじゃねーか。親父さん、帰ってくるなんて」
ツ「・・・うん・・・ま・・・まぁ・・・」
楓「歯切れ悪いな、ツナ。よかったじゃん、叔父さん帰ってくるんだぜ」
獄「そうっスよ、１０代目！１０代目のお父様がご健在だとは・・・帰ってこられた暁にはご挨拶に伺います！！」

ご挨拶って・・・

ツ「いやいや、いーよ！あんなでたらめな奴に・・・」
山「ハハハ、なんだよでたらめって」
ツ「昔から言うことやることムチャクチャでさ・・・オレが小さい時からほとんど家にいないから何の仕事しているのか聞いたことがあるんだけど・・・」

―回想

父「ん？世界中飛び回って、工事現場の交通整理をしているのさ」

―獄「世界中・・・スか?」
山「ワ・・・ワイルドだな・・・」
楓「世界中ね」
ツ「あやしいでしょ・・・?」
獄「そ・・・そんなことは・・・」

ツ「小さい時はよくわからなかったけど、今考えるとおかしいことばっかりでさ。だいたい、2年間一度も帰ってこないなんてあり得ないよ!」
楓「まあ、な・・・」
ツ「あんな父親・・・」

今更帰ってこられても・・・

ツ「はーーー・・・っ」
獄「10代目・・・」
楓「ツナ・・・」

困るよ・・・

山「んーーー・・・なあ、このまま遊びに行かね!?」
ツ「え!?」
楓「おっ!」
獄「ナイス野球バカ!そうしましょう10代目!!」
ツ「ええ!?」
獄「あんま家庭のこととか考えすぎない方がいいっスよ。オレんちなんか　もっとどろどろのグチャグチャですしね!!」

笑顔ですごいこと言い出した!!!

ツ「でも学校・・・」
山「どーせ　今日補習だけだろ？」
獄「そうっスよ。世の中日曜ですし。たまには息抜きも必要っス。楓香さんも転入してきたばっかですし、この町を案内して差し上げたらどうっスか？」
楓「ははっ、いいこと言うじゃねぇか、獄寺」
獄「１０代目の右腕ッスから！（１０代目の親族に認めてもらえれば、右腕の座は確実だぜ！）」

また右腕宣言してきたーーっ！！

・・・ちなみに、獄寺君は楓香が従姉と知ってからずっとこの調子だ。

楓「あ、そんじゃあ、オレは用事すませたら行くよ」

楓香は転校初日で補習はないけど、学校に転入手続きの残りをしなきゃならないらしく、それでオレ達と登校していた。

山「そっか、わかったぜ。なら、日曜だしみんな呼ぶか」
獄「アホは呼ぶなよ、アホは」

もしかして三人とも気をつかってくれたのか・・・

ありがとう・・・

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ちっ、バジルとの接触、今日かよ！
戦闘でこそ、イレギュラーは一番危険なのに・・・
もしヴァリアーの‘闇’の守護者が来てたりしたら・・・

と、愚痴っている間に、並盛中の校門に着きました。
身体能力の高さに感謝だよ・・・

―先生の説明、長かった・・・

急いで商店街に・・・！

？「まちなよ」
楓「？」

今、廊下にて誰かに声を掛けられました。
しかも聞いたことがある声ですよ～～。

・・・この声。

？「キミ、転入生なんだって？僕に挨拶なしで済むと思ってるの」
楓「は、はい、すみません」
？「それにその腰の武器（もの）は何？」
楓「エ、ナンノコトデショウカ？（汗）」
？「校舎内への武器の持ち込みは禁止だよ」

武器ってわかったんですか？凄いなぁ・・・

首をカクカクさせて声のする後ろを向くと、

チャキッ

雲雀「ねぇキミ、咬み殺されたいの」

トンファーを手にもった、今一番会いたくない守護者である並中風紀委員長、雲雀恭弥がいた。

楓「ちょっ、廊下で暴れたらやばいでしょ！」

雲「そういえばキミ、沢田綱吉の従姉なんだって？赤ん坊とは知り合いなのかい？」

この人、人の話聞いてねぇーーっ！！（ゴーン）

楓「赤ん坊？あ、リボーンのことか。いや、知り合いじゃないよ」

雲「ふーん」

あ、トンファーを下ろした。

雲「・・・眠い。帰る」

帰るのかよ・・・

キュッ

チャキッ

ガキンッ！

楓「・・・って、それはないよな」
雲「ワオ。これを防いだの？キミ、面白いね」
めったに聞けない‘ワオ’、いただきました！
・・・って、こっちは面白くねぇよ！
まあ、雲雀の性格と‘超直感（仮）’で不意打ちして来ることはわかってたけどね～・・・
とっさにロッドを手に取り、伸ばして迫るトンファーの右フックを防ぎました。
あ、再度言うがロッドは伸縮するぞ。
他にも色々仕掛けがあるんだけど、乞うご期待ってことで。
つか、それで重かったんだよな、コレ・・・
ガキガキガキ・・・
楓「ここ、廊下だよ？いいのか、校舎が傷ついても」
雲「それはキミの責任だよ」
オレのどこに落ち度が！！？
楓「・・・逃がしてくれない？」
雲「ヤダ」
聞き分けのいい奴じゃないってことは、最初からわかってましたよ・・・
ガキンッ

ダッ

とりあえず一旦距離をおこう。

楓「はあ・・・しゃーねー。相手してやんよ」

雲「ふーん、急いでいるんじゃないの」

あんたが引き止めたんでしょうが！

楓「心配いらねぇよ。三秒で決着をつける」

雲「ワオ。随分と自信家だね」

もう一つ‘ワオ’、いただきました！

つか、希少性が・・・

楓「さあ・・・」

一気に殺気を放つ。

雲「！！」

楓「・・・終わりよ」

雲「なに・・・を・・・」

バタッ・・・

楓「ふう、もっと精進しなさい」

秘技、‘思考狩り’。

敵の前身にロッドの片方を叩きつけようと回転させて、寸止め。さらにそこから逆回転させ敵の背後・・・首筋を叩く。

つまり殺気で怯ませ前方を警戒させて、後方への注意を散漫させて首筋を狙いやすくし、気絶させる。

ここまでの動作を、敵の横を通り過ぎつつ行う。二秒半で。

まあ、ほとんどが殺気で怯むまでの時間なんだけど。

まあ、１０年後の雲雀なら見切れただろうね。

ん～、倒れてた雲雀をこのままにしておくのも忍びないし・・・

仕方ない、応接室に運んでやるか。

ってことでロッドを戻し、雲雀をおぶさることにした。あ、意外と軽い！（それはあなたがチート的に力持ちだからです。）

「よっと」

「・・・ｚｚｚｚ」

あ、雲雀の奴、寝ちゃってるよ・・・

疲れてんだろうな。

タッ　タッ　タッ

ガラガラ

「・・・意外と綺麗な部屋だな」

応接室には仕事をするデスクに椅子、ソファーに小さな机、そして

食器棚があった。
オレは雲雀をソファーに寝かせると、デスクの上に散乱する用紙を見て驚いた。

「お前、仕事しすぎだっつーの。ちょっとは休め。体壊すぞ」
「・・・」

聞いちゃいねぇーよな。
ま、寝てるんだから当然か。

「あんまり根を詰めるなよ。独りで頑張るのは勝手だけど」
「・・・」
「ま、そんなお前のこと、嫌いじゃないかもな♪」
「・・・・・・」

ゴソゴソ

なぁ、雲雀の奴、起きてないよな・・・
顔、背けられたけど、たまたまだよな・・・
なんか今、オレ超恥ずかしいこと言っちゃった気がするんですけど！

「と、とりあえず、しっかり休め。じゃ、じゃあな」

オレはそそくさとその場を後にし、急いで商店街へと向かった。

バトって時間くってしまった・・・

つか、オレって戦闘好き（バトルジャンキー）だったのかよ・・・orz

標的６　【風紀委員長　来る！】（後書き）

なんだろこれ・・・
フラグ？

標的7　【嵐の予感　来る！】（前書き）

※今回は原作のみです

標的7　【嵐の予感　来る！】

標的7　【嵐の予感　来る！】

ｓｉｄｅツナ

あの後、オレ達はみんなを呼んで商店街に遊びに来たんだけど・・・

ぞろぞろ

獄「アホ共はよぶなって言ったのに」

ハ「誰のことですか！」

京子ちゃんにハル、ランボにイーピン、フウ太にリボーンまで・・・

すごい大所帯になってるしー・・・

でも、やった！

京子ちゃんも来てくれた！

リ「おい、ツナ。さぼった分の補習は、帰ったらネッチョリやるからな」

ネッチョリやだーー！！

オレが悶々（もんもん）としていると、「ランボ君がいない」との京子ちゃんの言葉で我に返った。

ツ「あ、本当だ！（大変な奴を忘れてた～っ！）」

当たりを見渡してランボを探してみる。
すると・・・

ワンワン　ニャーニャー

ラ「ｚｚｚｚ」

ペットショップのゲージの中で・・・ランボが寝ていた。

ツ「違和感ないけどさーー」（ガーン）

店の人に謝っていると、

ラ「ガハハハハ、目ん玉魚雷発射！」
ツ「もー、ランボ様許してください～！！」

さらにアホ行動に突っ走るランボであった。

京子ちゃんの前で恥ずかしいーーっ！！

―はーあ・・・

さ、散々な目にあった・・・

結局ランボの世話で、京子ちゃんどころじゃ全然ないし・・・

今はランボがジュース欲しがるから買うために、みんなと別行動だ。
（ちなみにみんなはゲームセンターに行った。）

ツ「はあ・・・」
？「おつかれさま」

自販機前の休憩スペースにあるイスに座って溜め息を吐いていると、誰かが飲み物をくれた。

って！

ツ「京子ちゃん!?」
京「ランボ君すごく楽しそうだね」

京子ちゃん、あ・・・ありがとう・・・

オレのために戻ってきてくれたの？

イ「謝謝（シェイシェイ）」
京「どういたしまして」

なんだイーピンにジュース、せがまれてきたのか。

すると、京子ちゃんは近くのイスに座った。

京「ツナ君が黒曜から帰ってきた時、ホッとしたんだ」
ツ「え？」
京「もっと恐い感じになっちゅうかと思ったけど。ツナ君がいつものツナ君で、なんかホッとしちゃった」

・・・よ・・・よくわかんないけど。

ほめてもらってるっぽい！？

京「ツナ君」

じーっ

きょ、京子ちゃん？

京「何の音だろ」

ツ「え」

そして、突然の爆発音が、オレ達を襲った。

ドーン！

ドガーン！！

ドコオッ！！！！！

突然、近くの建物のルーフトップから煙が上がり、あたりは騒然となった。

ツ「な、何！？」

ガキンッ

・・・と、煙の中から、人が。

ひゅうううう

こっちに、

ツ「え」

飛んでくる――っ！？

ツ「えええっ！」

ドサッ

ツ「ぎゃあああっ」

結果、押し潰された・・・
まあ、オレがクッションになって、ぶつかってきた人は大丈夫だと思うけど・・・

ツ「いててて」
？「す・・・すみませ・・・！！お、おぬし・・・」

２１世紀におぬし？

目の前にいるこの少年は・・・
それに・・・

獄「１０代目！」
山「大丈夫かツナ！」
ツ「あいたた」
京「ツナ君大丈夫？」

あ、みんなが駆けつけてくれた！

リ「？・・・なんで、あいつがここにいんだ」

？？

あいつ？

リボーンの目先には・・・この少年？

？「なんだぁ？外野がゾロゾロとぉ。邪魔するカスは、たたっ斬るぞぁ」

今度は煙からもう一人、人が・・・って！

キラッと光る、

あ・・・あれは、剣――っ！！？

獄「けっ」

山「・・・」

ツ「あぁ

・・・何なの一体！！

そして、物陰に隠れてその様子を見ていた。

リ「嵐の予感だな」

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

ここに何故か、―ボンゴレ門外顧問組織（ＣＥＤＥＦ）のバジルがいる。
それに、あの剣の男は・・・

ゴッ　ドゴオッ

？「う〝お〝ぁい！！邪魔するカスはたたっ斬るぞぉ！！」
ツ「ひいっ、何なのあの人～！！？すんげーやばいよ！！」
バ「くそ・・・」

酷(ひで)ぇ戦闘になりそうだな・・・

つんつん

リ「女共は避難するぞ」
京「リボーン君・・・！」

とりあえず、京子達には酷だからな。

―・・・で。戻ってみると。

獄寺と山本が剣の男に倒されたところだった。
一応、‘山本のバット’を置いてきたが・・・やはり、あいつにはかなわなかったか。

ヌギヌギ・・・（着替え中）

とりあえず、気休めにしかならねぇが・・・

オレはバカツナが持ち歩かねぇ‘Ｘ（イクス）グローブ’を懐から取り出し、ツナに投げつけた。

ポフッ

ツ「な・・・え・・・？」

どど～ん

ツ「この手袋はーー！！」

リ「手相を見せる時も、真夏のうだるような暑い日も、その手袋はつけとけ」

ツ「なっ、お前この大変な時に、今まで何処にいたんだよ～！？」

リ「オレにもいろいろ事情があるんだ」

ドサッ　シュウウゥゥ・・・

・・・バジルの奴、死ぬ気モードが解けて、負けちまったか。

しゃあねぇな。

死ぬ気で戦ってこい、ツナ。

？「てめぇは死ねぇ！！」

ズカン

ガッ

ツ「復（リ）・・・活（ボーン）！！！」

？「！」

バ「！」

ツ「ロン毛！！！死ぬ気でお前を倒す！！！」

標的８　【新米仲間（ファミリー）　来る！】（前書き）

楓香の武器！

標的８　【新米仲間（ファミリー）　来る！】

標的８　【新米仲間（ファミリー）　来る！】

ｓｉｄｅリボーン

？「う〝お〝ぉい、なんてこった。死ぬ気の炎に、このグローブのエンブレムは・・・まさかお前、噂にきいた日本の・・・」

やはりツナの情報をもっていたか・・・

？「そうか、お前と接触するために！ますます貴様ら、何を企んでんだぁ！？死んでも吐いてもらうぞオラァ！！！」

ツ「うおおお！！！」

ブオッ　ガッ　グググ・・・

ツ「！？」

「う〝お〝ぉい、よえぉぞ」

ガキッ

ツ「ぎっ！」

ズザァッ

リ「死ぬ気弾じゃ歯が立たねーのか」

本当は小言弾でハイパーな死ぬ気モードにしてえとこだが・・・

あれを使うとツナは2週間、筋肉痛で動けなくなるからな。

ガキキキッ

ツ「ぎゃ！」

キーン

ドォン　キキン・・・

シュウウゥ・・・

・・・これが限界か。

ツ「はっ」

？「う〝お〝ぉい、いつまで逃げる気だぁ！？」

ツ「ひいいっ」

？「腰抜けが！！」

ドシュシュッ

ツ「わ！うわあああ！！」

ブウウン

ドガガン

？「ぐっ」

バジルがなんとか防いだみてえだな。

だが・・・

sideツナ

モクモク・・・モク・・・

バ「ハア・・・ハア・・・」

ツ「ゴホゴホッ・・・あ、ありがと・・・き、君！だ、大丈夫なの？」

バ「拙者はバジルといいます。親方様に頼まれて、沢田殿にあるものを届けにきたのです」

ツ「は？オレに？・・・つーか、親方様って・・・」

バ「ハア、ハア。これです」

？

パカッ

「なに、コレ・・・？」

それは黒い箱で、中に入ってたのは・・・指輪（リング）？

バ「何かはリボーンさんが知っています」

ツ「えっ、君、リボーンを知ってんの！？」

ってことは・・・マフィア！？

バ「リボーンさんはわけあって戦えません。これを持って、逃げて

ください」
ツ「ちょっ、急にそんなこと言われても！！」
？「う〝お〝ぉい」
ビクッ
？「そぉいぅことかぁ。こいつは見逃せねぇ一大事じゃねーかぁ」
ロン毛きたーーっ！！
？「貴様らをかっさばいてから、そいつを持ち帰らねぇとなぁ」
バ「くそっ」
ツ「ひいいっ、なんなの～！！」
どーしよー！！！
？「う〝お〝ぉい。ソレを渡す前に、何枚におろして欲しい？」
バ「渡してはいけません、沢田殿」
ツ「えっ、ちょっ！」
？「死ねぇ、ガキ共ぉ」
ドシュシュッ
剣から何か出たーっ！
バ「くっ」

ツ「ひっ」

死ん・・・だあ・・・

シュルシュルシュル

ドカーンッ！

バ「！」

ツ「んなっ！」

今のは・・・獄寺君のダイナマイト！？

でも、獄寺君は・・・

？「んぁ？何者だぁ？」

コツ・・・コツ・・・

？「名乗るほどのもんじゃねぇよ。通りすがりの・・・」

あ、あれは・・・

ジャキッ

ガシャッ

楓「ツナの仲間（ファミリー）だ！」

ふ・・・楓香ーーっ!!?

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ダッ

くそっ、まだ、ディーノがいねぇ!
・・・いや、まあオレがいるから当たり前か。

この距離じゃ、間に合わねぇっ!!

楓「ちっ!・・・あ!」

そういえば―

―1時間前

獄「あ、楓香さん!これ、差し上げるっス!」
楓「ダイナマイト?」
獄「よかったら、役立ててください!」

―って、獄寺の奴にダイナマイト、数本もらったんだっけ・・・

ごそごそ

チャッ

楓「いくぜ！」

花火職人！（笑）

ダイナマイトを着火し、オーバースローで・・・投げるっ！

バッ

シュルシュルシュル・・・

ドカーンッ！！！

ナイスヒット！

？「んぁ？何者だぁ？」

やはり無傷か・・・さすがヴァリアークオリティだな。

ズキンッ

だ・・・だめだ。今はそれは考えなくていいっ！

楓「名乗るほどのもんじゃねぇよ。通りすがりの・・・」

ジャキッ

ガシャッ

そう言いつつ、ロッドを伸ばし、刃を出して‘大鎌’の戦闘体制に

入る。

楓「ツナの仲間(ファミリー)だ！」

？「仲間だぁ？」

楓「だから引っ込め、Ｓ・スクアーロ(スペルビ)」

ス「（オレの名を知っているだと？）・・・てめぇ、何者だぁ！」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

バ「あの大鎌・・・楓香殿？」

ツ「えっ！君、楓香を知ってんの！？」

バ「あ・・・はい、もちろんです！」

もちろんって・・・ええっ！？

ツ「つか、あのでっかい鎌みたいなのは・・・」

バ「あれは楓香殿の武器、‘死神(デス・サイス)の大鎌’です」

んなっ、めっちゃ怖(こ)えーネーミング！

というか・・・

なんで楓香がそんなもの、持ってんのーーっ！！

バ「安心してください。楓香殿がいれば、なんとかなります！」

ツ「えっ、ちょっ、えーーっ！？」

―――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

解説ありがとな、バジル。

よし、いくぜっ！

ダッ

ス「はっ、てめぇが何者かは知らねぇがぁ・・・」

そういうと、スクアーロは剣を横に構える。

ス「殺(や)っちまえばそんなことはどうでもいいぜぇ！」

ドシュシュッ

ちっ、仕込み火薬！

シュルルルル
ドカドカドカッ

オレはそれを大鎌を回転させることによって防ぐ。

モクモク・・・

楓「にゃろう！」

チャッ

今度は、こっちからいくぜ！！

ダッ

ス「なっ！」
楓「おりぁっ！」

ガキンッ
ガッガッ

ス「ちっ」
楓「ふっ」

スクアーロも強いが・・・

ギンッガッ
ガッギギギッ

ス「てめぇ、なかなかやるじゃねぇかぁ」
楓「そいつはどうもっ」

ガッザザッ

楓「そんじゃ、今度はこっちからいくぜ！」

オレには・・・

ジャキッ
ダッ

ス「ぐっ」
楓「一文字（いちもんじ）・・・」

勝てんっ！！

ブッシャッ
ズシャッ

楓「狩り！！」
ス「ぐあ゛っ」

浅いか・・・

ズザザァッ

ス「ぐっ・・・てめぇ、いい腕してんじゃねぇかぁ（こいつ・・・半端ねぇ・・・）」
楓「それはどうも」
ス「まあ、今日のところはおとなしく・・・」

ん？スクアーロがツナをチラッと見・・・
「帰るわきゃねぇぞぉ！！」

ですよね～、っておいっ！！

ドシュシュッ

楓「ぐっ」

あいつ、仕込み火薬を地面に撃って、目潰ししやがった！

楓「てめぇっ！」

くっ、煙で前が！！

ツ「いでっ！」

楓「ツナ！」

オレは急いで声の方へ向かう。

・・・っと、見つけたぜ。

無事みたいだな。

楓「大丈夫か、ツナ、バジル！」

ツ「ゴホッ、うん、なんとか・・・」

バ「ゴホッ、拙者も・・・しまった！」

ツ「あ、箱がない！」

ス「・・・こいつはいただいていくぜぇ！」

楓「なっ」

バ「ああっ、ボンゴレリングが！」

ツ「ボンゴレリング・・・？」

くっ、スクアーロに奪われたか。

ス「じゃあなっ」

バッ

バ「ま、待てっ、ぐっ！」

ツ「！」

楓「おいバジル、無茶すんな」

こいつはやべーな。オレには医学の知識はねぇぞ。

・・・オレじゃあ役不足ってか。

リ「深追いは禁物だぞ」

ツ「リボーン！なんで今頃出てくるんだよ！どーして助けてくれなかったんだ！？」リ「オレは奴に攻撃しちゃいけねーことになってるからな」

ツ「な、何でだよ」

楓「あのロン毛もボンゴレファミリーだからだ」

ツ「何だってーー！！？」

まあ、ツナが驚くのも無理ねぇな。

ツ「オレ、ボンゴレの人に殺されかけたのー！？」

楓「まあ、な・・・」

ツ「つか、なんで楓香がそんなこと知ってんのーー！！？」

楓「ああ、それは・・・っ！」

人の気配！？

？「おいツナ、無事か！？」
楓「誰だ！って・・・」
あの金髪は・・・
ツ「ディーノさん！？」
キャバッローネファミリーのボスでツナの兄貴分、ディーノだった。

標的８　【新米仲間（ファミリー）　来る！】（後書き）

大鎌って・・・闇っぽいけど

標的9　【闇の天敵　来る！】（前書き）

ディーノ、恐るべしw

標的９　【闇の天敵　来る！】

標的９　【闇の天敵　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「ディーノさん！！」

声のする方を向くと、ディーノさんとその部下の皆さんが走って来てた。

楓「げっ、跳ね馬！」

あれ、楓香が怯えてる？

デ「無事みたいだな・・・あの人から頼まれて急いで来たんだが・・・ん？」

あ、ディーノさんが楓香に気づいたみたい。

ビクッ

デ「お、楓香じゃねーか！日本に来てたのか？」

楓「は、はい！あの人に頼まれて・・・」

楓香が敬語使ってる～っ！

というか、なんかビビってる？

デ「そんなよそよそしくすんなって。オレらの仲だろ？」

楓「あ、えっと、ツナ、お前にバジルはまかせた。オレは京子たちを送っていく。それじゃ、また後で」

ドドドド・・・

そう言い残すと、楓香はすごいスピードで去っていった。

な、なんだったんだ・・・

ロマーリオ「ぷっ、ボス、相変わらず怯えられてるな」

デ「う、うるせーよ・・・」

楓香とディーノさんの間に何があったんだろ・・・

ていうか、大鎌を自在に操ったり、あのロン毛より強かったり、ディーノさんの知り合いだったり・・・

楓香って何者ーーっ！

ツ「あ、あの！楓香って何者で・・・」

ファン　ファン　ファン

ロ「ボス・・・サツだぜ」

デ「ツナ、話は後だ。廃業になった病院を手配した。行くぞ」

そう言うと、ディーノさんはバジル君を抱え、去ろうとする。

ツ「ま、待ってください！！獄寺君と山本が・・・！！」

リ「あいつらなら心配ねーぞ」

山「大丈夫かツナ！」
獄「いったい何なんスか、奴は？」
ツ「二人とも！！」

どうやら無事みたいだ。よかったぁ。

リ「お前らの戦闘レベルじゃ、足手まといになるだけだ」

え？

リ「とっとと帰っていいぞ」

獄「！」
山「！」
ツ「リボーン！何てことを・・・！！」
リ「行くぞ」

ズリズル

ツ「わっ、ちょっ、おい！！」
リ「本当はあいつらも感じているはずだ」

！？

リ「あれだけ一方的にコテンパンにされて、腸煮（はらわた）えくり返ってねーわけがねぇ・・・ほっとけ」
ツ「・・・・・・」

side楓香

ふう、あぶねー・・・
つか、いきなり出てくるなよ！！
オレ、跳ね馬、苦手なんだよな・・・つか、トラウマ？

あれは2年前・・・
オレは‘あの人’の紹介で初めてディーノに会った時のこと。
イタリアのアジトを案内するとか言い出したディーノは、部下を連れずに歩き回った結果、何故か山中まで来てしまって迷い、渡っていた橋をよってきたデカい鳥を退けるために振るった愛用のムチで破壊し、ついには滝にペットのエンツィオを落とし、オレV.S.ガメラ（巨大化したエンツィオ）を実現させた張本人だ。
いや、さすがにオレもあの時は死ぬかと思ったぜ・・・
もし、あの後ディーノの部下のロマーリオが来てくれなかったらと思うと・・・ゾクゾク・・・

京「夜代さん、どうかしたの？」
楓「あ、なんでもないよ！」

いけね、今は京子やハルと家に向かっているんだった。

楓「というか、楓香でいいよ。それに同い年なんだから、‘さん’付けしなくていいよ」
京「んー、じゃあ楓香ちゃん、って呼んでいいかな」
楓「う、うん」

そ、それはそれでなんかこそばゆいな。

京「私のことも京子でいいよ」
ハ「私もハルでオッケーです！」
楓「うん、よろしく、京子ちゃん、ハルちゃん」
京・ハ「はい！」
京「それにしても楓香ちゃん、ツナ君の従姉だったんだね」
楓「まあね。同い年だけど、オレの方がツナより誕生日が早いから、ツナの姉かな」
ハ「はひっ、ツナさんのお姉さんでしたか！それにしても、クールでビューティーですね！」
楓「ははっ、はりがと。ハルちゃんも可愛いよ、もちろん、京子ちゃんも♪」
ハ「はひ～。ありがとうございます！」
京「嬉しいです！」

いわゆるガールズトークに弾んでいたオレ達だったが（一応、オレもガールだ。・・・自分で言ってて恥ずかしいっ。）、重要な用事があるのでとケーキ試食会を断った。
美味しいと噂の、ラ・ナミモリーヌのケーキ、食いたかった・・・
京子達に手を振り返しながら、オレは泣く泣く、その場を去った。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―山中外科病院

デ「バジルはどーだ、ロマーリオ？」
ロ「命に別状はねぇ。よく鍛えられてるみてーだ、傷は浅いぜ、ボス」

ツ「あの、彼は何者なのですか？やっぱりボンゴレのマフィアなんですか？」
デ「いいや、こいつはボンゴレじゃあない。だが、一つ確実に言えることは・・・こいつはお前の味方だってことだ」

え？

ツ「ちょっ、な、どーなってんの！？ボンゴレが敵でそーじゃない人が味方って・・・つーか、敵とか味方とか、関係ありませんから・・・」

ガラ・・・

楓「そうはいってられねー事情があるんだ」

ツ「楓香！？」

なんで楓香がこの病院に！？

楓「すまん、さっきは取り乱しちまって」
デ「いいって。まあ、軽くへこんだけどな・・・」
楓「な、いきなり出てくるお前が悪いんだろ！！」

あれ？普通に話してる？
さっきは、ディーノさんが突然現れたからかな。

ツ「というか、さっきの事情って・・・」

リ「あのリングが動き出したんだ」

ツ「リング？そういえば、この子も言ってた。ロン毛が奪っていったやつだろ？」

リ「ああ。正式名称を‘ハーフボンゴレリング’というんだ。本当は3年後までしかるべき場所で保管されるはずだった、ボンゴレの家宝だ」

家宝？

ツ「もしかして、すんげー高級な指輪だとか？」

リ「確かに、値のつけられない代物だが、それだけじゃねやーぞ」

楓「長いボンゴレの歴史上、その指輪のためだけに、どれだけの血が流れたかわからないっていう、いわくつきの代物だとよ」

ツ「ひいい、何それーー！！マジかよ！」

というか、

ツ「だからなんで楓香がそんなこと知ってるんだよ！」

楓「んー、少し前に‘あの人’から聞いた」

‘あの人’って誰ーーっ？

リ「‘あの人’か」

デ「‘あの人’な」

なんで二人は理解できちゃてんのーーっ！？

ツ「ま、まあ・・・結局、あのロン毛がもっていってくれたし・・・
よかったーっ」（ほっ）

デ「あ、それがなぁ、ツナ・・・」

？

どんっ

楓「ここにあるんだぜ♪」

え？

ツ「え〝え〝ーー！！？」
リ「！！」（ビクッ）

え・・・えーーーっ！！！？

ツ「な、なんで！？だってリングは奪われたはずじゃ・・・」
楓「こっちが本物だぜ♪」

って！

ツ「何で楓香が持ってんのーーっ！」
楓「ああ、‘あの人’にツナに渡すよう、任されたんだ。・・・ま
あ、タイミングを見計らってたんだ」
デ「オレも‘あの人’に頼まれて来たんだが、おそらく楓香の護衛
を・・・な。ま、そんな必要、なかったけどな」
楓「だな♪」

だから、あの人、って・・・はぁ。

楓「ま、受け取れ、ツナ」

ツ「そんないわく付きの指輪なんて、いらないって！」

楓「お前、ボンゴレのボスだろ？」

ツ「ち、ちがうよ！絶対ボスなんかにならないよ！」

楓「・・・なあ、いつもこんなこと言ってるのか？」

リ「ああ。ダメツナだからな」

ツ「あ、そうだ！オレ、家に帰って補習の勉強しなきゃ！！ガンバロ！」

楓「ツナ？」

ツ「じゃ、ディーノさん、また！！」

デ「おい、ツナ・・・？」

ツ「楓香もまた明日！リボーン、先行ってるぞ！」

バタン！

楓「逃げ足はえーな・・・」

標的１０　【沢田家の亭主　来る！】（前書き）

３０，０００ＰＶ超えました！読者の皆さん、ありがとうございます！

標的１０　【沢田家の亭主　来る！】

標的１０　【沢田家の亭主　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

バタン
バタバタバタ・・・

デ「あいつ、逃げられると思ってんのか・・・？」
リ「・・・」
楓「リボーン？」
リ「バジルは・・・囮（おとり）だったんだな」
楓「・・・」
デ「ああ・・・おそらく、バジル本人も知らされてねぇ」

・・・オレは傷ついたバジルを直視できないでいた。

リ「楓香、お前が重責を感じることはねぇぞ」
デ「‘あの人’のことだ、こうなることは読んでいただろーが。・・・相当キツイ決断だったと思うぞ」
楓「・・・そうだな。スマン、心配かけた」
リ「ニッ。そうやって悩んでいる方が、年頃の女らしいぞ」

ど、どういう意味だよ・・・（ガーン）

デ「つーかこれ、直接ツナに渡せばいいのにな。‘あの人’、オレと一緒に日本に来たんだぜ」
楓「え？そうなのか？」

リ「そーか。あいつ、来たのか・・・」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「ったく～～」

ディーノさん達から逃げ出したオレは、結局本当に家に帰ることにした。

つーか、冗談じゃないよ！そんな危険な指輪～～・・・

楓香も楓香だよ！いったい何者？

ツ「だいたいもーマフィアがらみの話は、たくさんだっての！！」

ヒラヒラ

ん？・・・！！

ツ「なんじゃこりぁ～～っ！！」

家の庭に大量の作業着に大量の上着、大量のタンクトップ・・・が物干し竿に干されていた。

って、

ツ「まさか！！」

ガチャッ

玄関に黒の土で汚れた長靴！

ツ「まさか～！！」

玄関の棚には鶴橋とヘルメット！

ツ「まさか～～！！」

ビアンキ「なんだツナ、無事だったの。パパンなら帰ってるわよ」

ツ「やっぱりー！！！」

ビ「ママンは食料の買い出しにいたわ。パパンが３０人前のごちそう、ぺろっと平らげちゃったのよ」

さっそくかよ・・・

ドタドタ

フ「ツナ兄ーー！！大丈夫だったのーー！？」

ラ「ガハハハハ」

フウ太にランボ・・・って！

フ「ぼく、ひんぱいひたんらから～～ヒック」（とろーん）

ラ「ガハーー、ツナ四人いるもんね！！」（プハーッ）

ツ「酒くせーーー！！」（ガーン）

しかもフウ太が持ってんのって！！

ツ「これ日本酒じゃないか！！」

フ「ひがうよ。パパンが水だから飲めって・・・ヒック」

ツ「なっ」

なにしてくれちゃってんのーーっ！！

ヨタ　ヨタ

ツ「あ！イーピンまで！」

ぐがあああ

ツ「！！」

居間で寝てるのって！

ぐがあああ

このふざけた感じ・・・

このアホ面・・・

ごろん　ブッ

家光「奈々～～（ハート）」

父さんだ・・・

ダメオヤジ帰ってきたーー！！（ズズーン）

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

帰ってみると、ツナが放心状態で二階へ上がっていくところだった。

ひょこっ

リ「来たか、家光。お前が息子にハーフボンゴレリングを託すってことは・・・」

ひょこっ

楓「あら、もう寝ちゃったか。叔父さん、こうなったらなかなか起きないんだよな」

楓香も来たか。まあ、久しぶりに家光と話がしたかったんだろうな。それにしても・・・

リ「楓香。オレの気のせいだといいが、あのケース中のボンゴレリングは・・・」

楓「ああ。８つだ」

８つのハーフボンゴレリング。ということは・・・

リ「そうか。‘闇’のリングまで動いているってことか。・・・厄介だな」
楓「実際、ヴァリアーの幹部の一人に、‘闇’の守護者がいた」
リ「まあ、ここに‘闇’のハーフボンゴレリングがあんだから、そんなのあたりめぇだがな。それでお前は、そいつがどんなやつか家光から聞いてんのか」
楓「元科学者で、いつもおどおどしている脆弱者だとよ。適性と科学者としてのその頭脳をかわれて、ヴァリアーに入隊したらしい。だが・・・」

リ「ああ。‘闇’のリングの適性があるってことは・・・」
楓「裏の、本性があるってことだ。‘闇’なりの・・・な」

‘闇’のボンゴレリング。初代ファミリー以来、その適性を持つものは現れなかったらしいが・・・ここにきて、か。

リ「だが、こっちは‘闇’のボンゴレリングを引き継ぐものは・・・」

までよ。まさか・・・

リ「・・・おめーがそれか」
楓「・・・どうやらオレにも適性があるらしい」
リ「わかってんのか。自分の・・・」
楓「ああ、理解している。まあ、オレの場合は‘特殊’でな・・・」
――

――リ「・・・なるほど。おめーも厄介事を持っている質か」
楓「それは、お互いさまだろ」（ニッ）

リ「ニッ。そうだな」
楓「なあ、リボーン。もしオレがそうなったら・・・オレを止めてくれるか。頼む」
リ「自分で始末つけろ、と言いたいところだが」

オレは去り際に黒帽子の鍔を指で上げながら、こう言ってやった。

リ「引き受けてやるぞ。マフィアってのは、女を大事にすんだからな」

標的１１　【リングの送付　来る！】（前書き）

ヒバリ、エンカウント（笑）

標的１１　【リングの送付　来る！】

標的１１　【リングの送付　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

翌日　ＡＭ４：１５

？「楓香～～！！！」

大音量の男の声が、オレの安眠を妨害した。

ガバッ

楓「な、何！！？火事、地震！？」

家光「朝メシ獲(と)りに行かねーか！！？」（どおんっ）

人の良さそうな顔をしている家光叔父さんが、部屋の入り口に釣り竿を担いで立っていた。

楓「家光ーーっ！？つーか、乙女の部屋に勝手に入ってくんなよ！！」

いや、自分で乙女とか言ってて、ちょー恥ずかしいんだけど・・・

どうせここの合い鍵でも持ってんだろ？まあ、この家用意したの叔父さんだし・・・

家「おお、すまんすまん」

楓「で？何の用？真面目な話」

家光叔父さんの顔がキリッとなる。

家「今からハーフボンゴレリングをその守護者達に渡しに行く。同行してくれるか？」

楓「了解。ってことで、着替えるから外で待っていてくれ」

家「オーケー」

バタン

家光叔父さんとは一週間前までイタリアで一緒にいた。

というのも、オレは叔父さんがボスとして所属する組織の仮隊員として仕事を手伝っていたのだ。

ちなみにハーフボンゴレリングはリボーンに頼んで家光に渡してもらっている。

楓「つーか、まだ4時かよ・・・」――

――家「で、なんで学校の制服？」

楓「んなもん、学校に侵入するからに決まってんだろ」

家「楓香ちゃんの可愛い私服姿、叔父さん見たかったなあ」（ゴーン）

楓「（カアア・・・）う、うるせえ！さっさと行くぞ！さっさと！」

家「お、おい、待ってくれ～っ」

なんかツンデレった楓香なのでした。

――楓「で、最後の難関だな」

山本や獄寺、京子のお兄さんの笹川了平には、ポストにリングを入れてきた。（了平にはパオパオ老子のメッセージ付きで。）

黒曜の六道骸とツナの家にいるランボには、すでに渡しているらしい。

ってことで、残るは雲雀恭弥なんだけど・・・

昨日あんな事があったから会いづらい。（汗）

会ったら絶対に即咬み殺されるよ・・・

楓「といっても、オレが行くしかないんだよなぁ・・・」

家「すまん、頼んだ！」

楓「はあ・・・了解です」―

―で、校舎内、応接室前。

夜の学校もとい、早朝の学校です。

もう日が出ちゃってますよ、６時ですからね。

そろりと扉を開けると・・・

楓「ふう、誰もいない」

よし、机の上に雲のリング置いて、ミッションコンプリート♪

後は誰にも見つからないようにそろそろと・・・

そう、誰も・・・

？「ねえキミ、こんなところで何してるの」

ビクッ

なんか、デジャブー・・・

雲雀「キミ・・・か。校舎への不法侵入で・・・キミを咬み殺す」

ひいいっ！

雲「・・・と、言いたいところだけど、キミには貸しがあるからね。それじゃ」

え？

マジで？

コツコツ・・・

・・・どうやらマジみたいだ。

負けん気が強いはずなのに、なんかキャラ変わってなくね？

ま、まあいいか。まだ早いし・・・って！

楓「雲雀のやつ・・・また根詰めてるのか？」

しゃあねー、仕事手伝ってやっか♪

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ雲雀

・・・なんなのこの女？

いきなり応接室の扉開けて入ってきたと思ったら、「仕事手伝うぞ。お前、根詰めすぎだ。体壊すぞ」なんて言ってきて、僕が帰れと言えば、「いいからいいから」と言って、勝手に資料を取っていた。僕は群れるのが嫌いなんだ。この女はわかっていないのか？

・・・ムカつくけど、仕事が溜まっていてね、早朝に来たのも早く仕事を終わらせるためだよ。だから彼女を追い出す暇もないんだ。ホント、ムカつくけど仕方なくここに居させてあげるよ。―

―ん？意外と早く終わったか。

・・・彼女も草壁よりかは使えるね。

でも僕が風紀委員に入れと言えば、「そんなデンジャラスなの、周りだけで十分だよ。じゃあな、雲雀」と言って、僕がトンファーを構える前にそそくさと部屋を出て行ったよ。

デンジャラスって何？僕は並中のためになる事をやってるだけだけど？

・・・また貸しができてしまったよ。

何がしたいんだ、彼女は？

・・・まあ、少しだけ楽になったかな。

僕は机の上にいつの間にかあった、変な形のリングを手に取ると、
そのリングにもっと面白そうなことが起きる気配がしたんだ。

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

朝の４時にいきなり父さんが部屋に来てから、ずっと眠れなかったよ・・・

チチチ・・・

家「たかいたかーい！」

ガハハハ　ガハハハハ

父さん、今度はランボと遊んでんのかよ・・・

窓からランボの姿が・・・って！

家「たかいーー！！！」

何二階まで投げてんのーーっ！！？（ガーン）

どしーん！

な!?

ラ「うわあああああ～～～!!」
家「ごめんな～～よそ見してた」

うそ・・・

家「そーだ。痛み止めの、魔法の水をやろう!」

!!

魔法の水?・・・って!!

ドタドタドタ
ガラッ

ツ「ランボに酒飲ますなって!!」
家「うおっス、ツナ～～!!」

父さん、何やってんのーーっ!!

家「お前、父さん帰ってからずっと寝てたんだもん。父さん避けられてるのかと思って、ブロークンハートだったぞぅ・・・」
ツ「昨日一日中寝てたのは自分だろ!!」

支離滅裂だよこの人ーーっ!!

つーか、実際避けるよ・・・
こんな父親やだよ!!

かっこ悪いし、恥ずかしいし・・・

家「で、どーなんだどーなんだ?学校は」

ツ「え!?」

家「さんすうだっけ?あれ笑っちゃうだろ!?」

ムリヤリ会話しようとしてるー!!
しかもズレてる!!

ツ「べ、別にわらえないよ」

家「そっかそっか。父さん、今回の滞在中にさ、ツナに父さんのいろいろな経験談を聞かせようと、いろいろメモってきたんだぞ」

ツ「え゛ーっ!!?」(ガーン)

経験談って・・・

ツ「い、いいよ別に・・・聞かなくて・・・」

家「あ、そう」

そんな浮き草みたいな人生、参考にならないから!

家「おぉ?なんだツナ、色気づいてんな。ペンダントだろ、それ」

ツ「え?」

こ、これって・・・

ツ「んなぁ!?こ、このリングって・・・ボンゴレリングとかいう、あのおそろしい~~!!?」

なんでこんな物騒なもの、オレの首に掛かってんのーー！！？

家「なんだツナ？青い顔して。何でも相談にのるぞ」

ツ「それどころじゃないよ！！」

こんなことするのは・・・

オレは急いでアイツのいる二階上がった。

ダダダッ

ツ「リボーン！！お前だな！？このリング首に掛けだの！！」

リ「ん？オレじゃねーぞ」

ツ「ウソつけ！お前以外いないだろ！？」

リ「あいつから何も聞いてねーのか？」

ツ「！？」

あいつって誰？

ツ「と、とにかく、オレ、カンケーないから！巻き込まないでくれよ！」

リ「何言ってんだ、カンケー大アリだぞ」

え？

リ「そのボンゴレリングは、次期ボンゴレのボスの証だからな」

標的１１　【リングの送付　来る！】（後書き）

オリジナルストーリーのトコだけ盛り上がるっ！

標的１２　【７＋１のハーフボンゴレリング　来る！】（前書き）

原作ばっか・・・

標的１２　【７＋１のハーフボンゴレリング　来る！】

標的１２　【７＋１のハーフボンゴレリング　来る！】

一週間前・・・イタリア・空港

ガラガラガラ・・・

家「本当にいいのか楓香？」
楓「何がですか？」
家「確かに今回は息子も関わっているし、お前にも担ってほしい役割があるのは確かだが・・・」
楓「今更だよ、家光叔父さん。バジルを日本に送った時から、もうオレの心は決まっているよ」
家「だが、相手は・・・」
楓「確かに、いくら抑えても体が反応してしまうだろうな。憎悪という感情によって」
家「なら、跳ね馬に・・・」

楓香は溜め息を吐いて、旅行鞄を引いていた足を止めた。

楓「二言はないぜ。オレが覚悟をもって決めたことだから。それにこの力は・・・」
家「わかったわかった。なら・・・息子を頼んだぞ」
楓「といっても、叔父さんも帰るんだろ、日本に」
家「ああ、一週間以内には帰るつもりだ」
楓「それに、向こうには頼れる殺し屋（ヒットマン）がいるんだろ？」
家「・・・そうだな」
楓「あまり気負わないでくれ。あんたがしっかりしてくれないと、

こっちが困る」
家「何言ってんよ。お前も息子の従姉とはいえ、家族同然だろ。娘の心配ぐらいさせてくれ」
楓「・・・ありがとよ。時間、来ちまったみたいだ。オレは行くぜ」
家「・・・道中、気をつけろよ」
楓「ああ」

そして・・・楓香を乗せた飛行機は、日本へと旅立った・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

家「お、ツナ。そんなに急いで、もう出るのか？悩み事があるなら、何でも父さんに打ち明けてみろ」
ツ「い、いいって！」

父さんなんかにマフィアの話してもしょーがないから！！

リボーンの話によると、このボンゴレリングとかっていうリングはボンゴレ正当後継者の証で、それを狙っている組織が、ボンゴレで最強とうたわれる独立暗殺部隊、ヴァリアーであるらしい。
ちなみに昨日のロン毛もその組織のメンバーで、昨日の奪っていったリングがニセモノだってばれたらその組織が奪い返しに来るらしい・・・

その組織にバレて奪い返しに来るまで、あと１０日しかないってい

うし、しかもリボーンのヤツ・・・

―「この１０日間でみっちり鍛えて、ヴァリアーを迎え撃つぞ」

とか

―「次期ボスの証であるそのリングを守り、ボンゴレ１０代目になるのはお前だぞ」

とか言うし～～っ！！

と、とにかく、早く楓香・・・はよくわかんないからディーノさんに返しに行かなきゃ！！

―――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

ツナのやつ、ディーノに会いに行きやがった・・・

まあ、こっちにとっては好都合だけどな。

家「見ろ友よ。あれがオレの倅（せがれ）だぜ・・・大きくなっちゃってな」

リ「知ってるぞ。オレが一年半、面倒見てきたんだからな」

家「ありがとよ、感謝してるぜ」

リ「ツナにはお前のこと、バラさないのか」

家「いつでも言う準備はできてんだが、うまくいかなくてな～・・・

ま、なるようになるだろ、結局自分で配るもん配っちまったし。・・・ああ、それと」

リ「ん？」
家「楓香のことも・・・頼んだ」
リ「ああ、聞いてるぞ」
家「そうか。まあ、彼女なら自分から話すだろうと思っていたがな」
リ「楓香のやつ、結構つれー過去もってんじゃねーか。だが今のあいつは明るいヤツだったぞ」
家「いろいろあったんだよ、いろいろ・・・な。・・・奈々～～（ハート）メシーー！！」
リ「・・・・・・」
８年前・・・か・・・

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ
ツ「あ～～、も～～っ！！」
ダメオヤジは帰ってくるわ、変な指輪が届くわで、ダブルでめちゃくちゃだよ～～

―中山外科病院
ディーノさん、確かここにいるはずなんだけど・・・
ガラガラ

ツ「ディーノさん、いますか？」

あれ？

山「よお、ツナ！」

獄「１０代目！！おはよーございます！！！」

ツ「二人とも！！！」

なんでここに獄寺君と山本がいんのーーっ！？

ツ「昨日はごめん！！助けてもらったのに・・・」

獄「あ、いや・・・」

山「・・・」

リボーンのやつがあんなこと言うからだよ！！

山「んなことより妙なことがあってさ」

獄「そーなんスよ！」

ツ「？」

え？二人がもってんのって・・・

山「ポストにこんなもんが入っててさ」

獄「もしかして、昨日の奴がらみかと思いまして。跳ね馬にここの場所は聞いてたんで」

ツ「ああ～～！！そのリングって、まさか～～！！」

山「なんだツナ、知ってたのかコレ」

獄「やっぱり１０代目も持ってるんですね！」

ツ「やばいって！それ持ってると狙われるんだよ！！」

ロン毛とか来るんだよ!?

ツ「つーかなんで!?なんで獄寺君と山本にも・・・!?」

?「選ばれたからだぞ」

そ、その声は・・・

ツ「ディーノさん!!リボーンも!!」

いつの間に?

リ「ボンゴレリングは全部で8つあるんだ。そして8人のファミリーが持って、始めて意味を持つんだからな」

ツ「!?」

リ「お前以外の7つのリングは・・・次期ボンゴレボス、沢田綱吉を守護するにふさわしい7名に届けられたぞ」

標的１３　【守護者の大義　来る！】（前書き）

闇の大儀、意味わかんねーって思っちゃうかも（笑）

標的１３　【守護者の大義　来る！】

標的１３　【守護者の大義　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「オレ以外にも指輪配られたの～～！！？」

リ「そうだぞ。ボンゴレの伝統だからな」

ボンゴレリングは初代ボンゴレファミリーの中核だった８人が、ボンゴレファミリーである証として後世に残したものなんだ。

そしてファミリーは代々、必ず７人の中心メンバーが７つのリングを引き継ぐ掟なんだ。

ツ「それで後継者の証とかってー！？」

獄「１０代目！！」

ツ「！？」

獄「ありがたき幸せっス！！身の引き締まる思いっス！！」

めっさ喜んでるよ！！

山「なぁ、よくわかんねーんだけど、なんで８人いるのに、７つしかリングを引き継がねーんだ？」

よくわかんないとか言っときながら、内容把握できてるーーっ！？

ってあれ？

獄「野球バカにしては鋭いとこついたな。オレも気になってたんですけど・・・」
ツ「何でだろ」
リ「まあその話は後々な。それよりか、獄寺のリングは‘嵐のリング’で、山本のは‘雨のリング’だな」
獄「そーいや、違うな」
山「ん?そーか?」
ツ「なんだ?嵐とか雨とか・・・天気予報?」
リ「初代ボンゴレメンバーは、個性豊かなメンバーでな。その特徴がリングにも刻まれているんだ」

初代ボスは
すべてに染まりつつ
すべてを飲み込み包容する
大空のようだったと言われている

ゆえにリングは
‘大空のリング’だ

リ「そして守護者となる部下達は、1つを除き、大空を染め上げる天候になぞらえられたんだ」

すべてを洗い流す恵の村雨
‘雨のリング’

荒々しく吹き荒れる疾風
‘嵐のリング’

なにものにも捕らわれず我が道をいく浮雲
‘雲のリング’

明るく大空を照らす日輪
‘晴のリング’

実体のつかめぬ幻影
‘霧のリング’

激しい一撃を秘めた雷電
‘雷のリング’

リ「そして・・・」

すべてを無に返す混沌の暗闇
‘闇のリング’

リ「・・・そんで、オレがさっき‘7人の中心メンバーが7つのリングを引き継ぐ掟がある’って言ったよな。その7つが、大空・雨・嵐・雲・晴・霧・雷だ」

ツ「・・・ってことは、‘闇’が仲間外れってこと?確かに天候じゃないよね、‘闇’って」

なんか怖そうなんだけど・・・

リ「ああ、確かに‘闇’は天候じゃねぇ。明るさとかの状態を現し

ている。元々、ボンゴレリングとは別物だからな」
デ「ボンゴレリングとは別物・・・だが、何故か同じ形をとり、初代がボンゴレ守護者の一角として、初代‘闇’の守護者はボンゴレファミリーの部下として初代ボスの力になったといわれている」
獄「ですがリボーンさん。それが何故、‘闇’を引き継ぐ掟がないことに繋がるのでしょうか」
リ「ああ。それは初代以来‘闇のリング’を継承できる者は現れなかったからだ」
ツ「えーと、どういうこと?」
リ「‘闇のリング’のみ特殊でな。リング自体が意思を持っているかのように、適性者以外は拒絶し、指に嵌めることができねーんだ。まあそんなことがあってか、その現象を‘闇の呪い’とかいわれるようになったんだ」

‘闇’のリング、怖え〜〜っ!!

獄「つまり、今まで初代の‘闇’の守護者だけが、その適性があったってことスか」
リ「ああ。だから今まで‘闇のリング’は表沙汰にはならなかったんだ。だが・・・」
ツ「ちょっ、ストップ!!!とにかく、オレはいらないから!!」

話わけわかんないし・・・
そんな話、聞いてもいらないし。

山「あの、わりーんだけどさ・・・オレも野球やるから指輪はつけねーな。話よくわかんねーし・・・」

味方ができたーー!!(ほっ)

ツ「それに、そんなの持ってたら大変なんだって!!昨日のロン毛がまた狙ってくるんだよ!?」

獄・山「「!!!」」

ツ「やばいでしょ!?しかも下手したらった１０日でだよ!!」

山「あいつ・・・来んのか。１０日で・・・」

獄「・・・」

・・・あれ？

山「これ、オレんだよな。やっぱもらってくわ」

ツ「え!!?」

タッ

山「負けたまんまじゃ、いられねー質(たち)みてーだな、オレ!」

ちょっ、山本どこ行くの!?

タタッ

獄「オレも１０日でこのリングに恥じないように生まれ変わって見せます!!次は奴をぶっ飛ばします!」

ツ「ちょっ、獄寺君まで!!」

パタン

ツ「な・・・二人とも・・・」

病院から走って出ていっちゃったよ・・・

デ「やるなー、ツナ。獄寺と山本は鍛える気マンマンになったみたいだぜ」
ツ「え〝ー！！そんな、シャレになんないって！！」（ガーン・・・）
リ「１０日間で残りの４人の守護者達も鍛えねーと、ヴァリアーには勝てねーぞ」
ツ「ま、待てって！！つーか誰なんだよ、あと４人って・・・」

ってか、リボーンのやつ、なんで着替えているんだ？

リ「どいつもお前のよく知る人物だぞ。ちなみにもうすぐ〝晴のリング〟を持った奴が来るぞ」（ぬぎぬぎ）
ツ「えっ・・・晴？」
リ「よしっと」
ツ「な！？」

その格好って・・・

？「パオパオ老師！！」
ツ「ま、まさか・・・」

この声！

了平「オレを鍛え直してくれるというのは、まことか！！！？」（ギャキイン）
ツ「きょっ、京子ちゃんのお兄さんーー！？」（ゴーン）

標的１４　【極限の晴　来る！】

標的１４　【極限の晴　来る！】

ｓｉｄｅツナ

？「パオパオ老師！！」

ツ「ま、まさか・・・」

こ、この声！

了平「オレを鍛え直してくれるというのは、まことか！！！？」（ギャキイン）

ツ「きょっ、京子ちゃんのお兄さんーー！？」（ゴーン）

なんでこの人が！？

ツ「待ってください、お兄さん！！状況わかってるんですか！？」

了「敵を迎え撃つのだろ！？相当緊迫しているらしいな！！」

え？・・・あれ？

了「昨日の出来事、１０日後のこと、指輪の話も聞いたぞ・・・」

ツ「え・・・」

ちゃんと・・・わかってる・・・！

了「全部忘れたがな！！！」（ガオオオ）

ツ「たちまち意味ねーー！！！」

ダメだこの人～～っ！！？（ゴーン）

つーか、

ツ「なんでよりによって、京子ちゃんのお兄さんなの～～！？京子ちゃん、心配するよ！」

リ「こいつはファミリーにかかせない、重要な役割があるからな」

ツ「え？」

了「極限に任せろ！！！」

たしかに晴だよ・・・どっピーカンだよ・・・（ガーン・・・）

了「ところでパオパオ老師。今日はオレのために幼なじみを呼んでいただいたとか」

ツ「え・・・？幼なじみ？」

リ「つーか、くされ縁だぞ」

ピカーッ

リ「近いな」

ツ「おしゃぶりが光ったってことは！！アルルコバレーノの・・・！？」

？「久しぶりだな、コラ！！」

ツ「こ、この声・・・！」

バザッ　バザッ

んなっ！

ツ「コロネロ！！！」
コ「元気そうだな、コラ」

ベコッ

いきなりスパルター！！

ツ「なっ、なんでコロネロがここに？」
？「だ、大丈夫か、ツナ？」

って、

ツ「なんで楓香がコロネロと？」
楓「ああ、コロネロにここへの道案内をしてたんだ。いやあ、びっくりしたぜ。ツナん家の前にワシにぶら下がったライフル持った赤ん坊がいるんだもんな。ハハッ」
ツ「びっくりで済んだんだ！？」

するとリボーンとコロネロが頭突きを互いにし始めた。

コ「お前が突然、場所を変えるからだろうが、コラ！」

ゴスッ

リ「そんでも来れないお前がわりーんだぞ」

ゴスッ

コ「言いがかりだ、コラ」

ゴスッ

リ「うるせーぞ」

ゴスッ

コ「お前が泣きついてきたから、来てやったんだろ、コラ」

ゴスッ

リ「泣いてねーぞ」

ゴスッ

コ「泣け、コラ」

ゴスッ

リ「泣かねーぞ」

ゴスッ

相変わらず仲悪いな、この二人・・

了「おう、お前が京子の言っていた楓香か」

ツ「あ、この人が京子ちゃんのお兄さんです」

了「オレは並盛中ボクシング部主将、ライオンパンチニストの笹川了平!!!座右の名は、極限!!!!」（ガオオオ）

楓「あ・・・熱い人なんだな・・・」

ツ「は、はい・・・」

熱すぎて楓香が若干ひいてるよ!!

楓「ツナの従姉の夜代楓香です・・・」

了「お!!沢田の従姉だったな!京子から聞いていたが、忘れていた!」

そんなことも覚えられないんだ、この人ーーっ!?

リ「とにかく、今回は時間がねーから、オレ一人じゃ全員鍛えられねーんだ」

あ、頭突き合い終わったんだ・・・

リ「だからリングを持つ奴それぞれに、専属の家庭教師をつけることにしたんだ」

ツ「なあっ!?か、家庭教師〜!?」

楓「ってことは、笹川先輩も守護者に?」

了「そうだ!!極限の‘晴’だ!!」

楓「た、たしかに‘晴’ですね・・・」

楓香も数分でお兄さんの本質を理解したみたいだな・・・

コ「話にあったボクサー小僧はどいつだ、コラ!」

了「オレだ!!」

コ「どれ」

ピチ　ペチ

了「？」

コロネロのやつ、なんでライフルの先でお兄さんの体、叩いてんだろ？

コ「！・・・こいつ、本当にそんな弱いのか？コラ！」

了「ああ。選ばれたファミリー８人の中じゃ、今最弱の部類だな」

コ「・・プクク」

！？・・・コロネロが笑うの、初めて見た・・・

コ「こいつはおもしろい奴を見つけたな、コラ！もし１０日間、オレのトレーニングについてこれれば、他の７人なんてぶち抜くぜ、コラ！」

了「？」

リ「（まあ、楓香は無理だろうがな・・・）」

コ「そのかわり厳しいぜ。やれるか？コラ」

了「望むところだ！！オレは負けん！！！」

コ「よし、ついてこい、コラ！！！」

了「おう！！！！」

こうしてお兄さんは、コロネロに渡されたバンダナを頭に巻き、コロネロを追いかけて駆け足で病院を出ていった・・・

パタン

って・・・

ツ「だ、大丈夫なのか、あの二人・・・」

リ「心配すんな。コロネロは何千という生徒を見てきたんだ。その

コロネロを唸らせたってことは、上手くいけば了平は何倍も強くなるぞ」

何千って・・・赤ん坊なのに、すげー。

デ「そんじゃ、オレもそろそろ鍛えに行くかな」

ツ「え!?ディーノさんも家庭教師!?」

デ「ああ、さすがに今回の件では同盟の問題でオレは手を出せねーからな。今、やってやれることはこれくらいしかねーんだ」

ツ「そんな～～!!頼りにしてたのに～～!!」

楓「あんまり無茶言ってやるなよ、ツナ。本当はまったく手を出さない方がいいんだからな」

ツ「え?」

デ「ふ、楓香、バラすなよ・・・」

楓「同盟の中で1，2を争うキャバッローネファミリーだぜ。間違っても俺らが負けたら大変なことになるのは確かだ・・・」

ツ「そ、そんな・・・」

楓「ま、俺たちが勝てばいいって話だけどな♪そんでディーノ、お前が家庭教師するのって・・・」

デ「どうやら、相当問題児らしいぜ」

楓「ご愁傷様だな・・・まあ、ほどほどにしてやってくれ。あいつ、確かに強いけど疲労を溜めやすい奴だし、そのことに気づいてねーし」

デ「ってお前、そいつともう接触したのかよ」

楓「ああ・・・いろんな意味で疲れたよ・・・」

だ、誰のことといってんだろ・・・

とりあえず、獄寺君と山本ではなさそうだな・・・

リ「心配すんな。獄寺と山本は、自分でぴったりの家庭教師を見つ

けるはずだ」

なんか心配だ・・・

あ、そーいえば、

リ「楓香、なんでここにきたの?ずっと気になってたんだけど・・・」

なんかさっきの言いようだと、コロネロの道案内はついでっぽく言ってたからな・・・

楓「そりゃあ」

ごそごそ

楓「俺も受け取ったからな♪」

・・・え?

えっ!?

ええーーーーーっ!!!?

ツ「ちょっ、なんで!?どーして楓香もリング持ってんの!!?」

リ「こいつには最も重要な役割があるからな」

ツ「最もって・・・えっと、ちなみに楓香のリングって・・・」

なんかいやな予感がするんだけど・・・

楓「‘闇のリング’だぜ♪」

標的１４　【極限の晴　来る！】（後書き）

ここまで来るの、長かった・・・

標的１５　【それぞれの修行　来る！】

標的１５　【それぞれの修行　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「んなっ！！‘闇のリング’って、あの！？」
リ「そーだぞ」
ツ「え〝ーーっ！？なんで楓香が！？というか、適性あったの！！？」
楓「ああ。ほら」

そう言って、楓香がリングを指に嵌めてみせた。

ツ「ほ、ほんとだ・・・で、でも、それ本当に適性ないと嵌められないの？」
楓「そんなにいうならツナ、お前がつけてみろ」

え？

ツ「い、いやだよ！つか、オレが嵌めたらどーなるんだよ！！」
リ「たしかビリッとくるんだ、ビリッと」
ツ「ビリッといやだーーっ！！」
リ「うるせーぞ。お前が言い始めたことだ、覚悟しやがれ」

そう言ってリボーンが楓香の持つリングを無理やりオレの指につけようとしてきた。

ツ「ひーーっ！？ちょっ、タンマ！」

ビリッとくるよーーっ!!

・・・・・・

あれ?

ツ「・・・って、あれ?普通に嵌めれたけど、このリング・・・」

楓「ん?ああ、そうか。ツナは‘すべてに染まりつつ、すべてを飲み込み包容する大空’だから、その指輪を嵌めれて当然か」

な、なんだ、よかったぁ・・・

リ「ちっ。やっぱりビリッとは無理だったか・・・」

ツ「知ってたよな!!知っててオレの指に嵌めたよな!!」

めちゃくちゃ質悪(わり)ーっ!!　(ガーン)

楓「ってことでディーノ、頼む」

デ「げっ、オレがやんのか?しゃーねぇな・・・貸してみろ、ツナ」

ツ「あ、はい。どーぞ・・・」

デ「んー、なんかがリングの空洞のところに入ってて、指が入んねーな」

ツ「え?」

ビリッとじゃないの?

リ「プッ」

ますます質　悪（わり）　ーーーっ!!!（ゴーン・・・）

楓「ま、まあこれでわかったろ?」

ツ「あ、うん、まあね」

でも、楓香が仲間だと心強いな・・・

ツ「あ、そーいえば、楓香の家庭教師は?」

楓「え?いないぞ。つーかオレは今回、家庭教師がいらねー修行すっからな」

家庭教師がいらない修行って・・・なんか凄そうだ。

ツ「ど、どんな?」

楓「精神鍛錬だ」

めちゃくちゃシンプルじゃん!!

リ「いや、今回の場合は、楓香にとっては相手が相手だ、怠ってはなんねー重要な修行だぞ」

ツ「え?でも、ヴァリアーのロン毛に互角以上だったじゃん!?」

楓「そういうことじゃないんだ・・・まあ、自分のことは自分で折り合いつけるさ。・・・ってことだから、オレは学校行くぜ。京子ちゃんに笹川先輩のこと、安心させなきゃなんねーし、第一、転入したばかりなのに休むわけにはいかないからな。じゃ」

ツ「ちょっ、まっ」

バタン・・・

行っちゃったよ・・・

―竹寿司

ガラ・・・

山「オヤジ～～～いるか～～？」
父「どーした、武～？忘れもんか～？父ちゃんはネギ切るのに苦戦中だ～～」（トントントン）
山「？な～～オヤジ」
父「どしたい？」

山「剣道、教えてくんね？」
父「！！！」

―並盛中・保健室前

ガラッ

シャマル「おっと！？・・・なーんだ、隼人じゃねーか。脅かすなよ」
獄「・・・頼みがある」
シ「なんだって？恋愛相談か～～？アドバイスとしては、まず・・・触れ！」

獄「ちげーよ!!!なあ、シャマル・・・」
シ「？」

獄「オレを弟子にしてみねーか？」

シ「・・・やーなこった!クソガキのおもりなんてしてられっか!」
獄「何でもするし、金はいらねぇよ!毎日ちょっとだけ、稽古つけてくれりゃあいいんだ」

シ「・・・おめーにゃ、もう懲りてんだよ」
獄「・・・！」

シ「そーゆー話なら・・・帰れ!!」

獄「!!・・・」

ｓｉｄｅディーノ

応接室・・・ここにリボーンが言ってた、例の問題児がいるのか。

ガラガラ

雲「・・・キミ、誰」
デ「リボーンの知り合いだ。そのリングについて話したいんだが・・

・」
雲「・・・ねえキミ、このリングに関係してんの？」
デ「え？あ、ああ・・・」
な、なんか怒ってる？
もしかして、楓香（あいっ）のせいか？
雲「ふーん・・・とにかく僕は今、機嫌が悪いんだ」
ジャキッ
雲「手っ取り早く終わらせようよ」
ったく・・・
バッ
デ「とんだじゃじゃ馬だぜ・・・オレが勝ったら指輪の話、聞いてもらうからな」
雲「好きにすれば」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「うそ～～！！ヒバリさんもリングがーーっ！！」
何でヒバリさんに～～っ！！

というか・・・

ツ「あの人群れるのキライなのに入るわけないだろー！！」
リ「だからこそ、雲のリング、がふさわしいんだ。あとはディーノにまかせとけ」
ツ「！ディーノさんとヒバリさんが！？つーかあの二人、いろいろ大丈夫なの！？」
リ「お前、人の心配してるヒマなんかねーぞ」

え？

リ「はっきり言って、ヴァリアーの強さは超死ぬ気（ハイパー）モードのお前より上だ。よっぽどみっちり鍛えねーと殺されるぞ」

あんな痛い思いしても、まだ勝てないんだ・・・って！！

ツ「ちょっ、まてって！オレは全然納得してないんだから！」
リ「レオンが大量にこしらえてくれたぞ。見ろ」

そう言うリボーンに目をやると、
斜めにかけられた弾倉が・・・

ツ「ま、まさかそれ・・・全部、死ぬ気弾・・・？」
リ「そーだぞ。そんじゃあ、修行の第一段階を始めるからな」
ツ「ちょっ、まてっ・・・」
リ「いってこい」

ズガン！

ツ「復活（リ・ボーン）！！！死ぬ気できたえる！！！」

ダダダダ・・・

リ「死ぬ気でやれよ。もし後継者争いに破れたら、お前だけじゃない。お前の仲間も皆殺しにされちまうんだからな」

標的１５　【それぞれの修行　来る！】（後書き）

後日談・・・

デ「おい楓香、恭弥になんかしただろ」
楓「え？」
デ「リングの話をするって言ったら、ムスッとしてたぞ」
楓「いや、そんなこと言われても・・・」
デ「つーか、どうやってリング、恭弥に渡したんだ？」
楓「えっと・・・応接室に進入して、その後仕事手伝ってやったりしただけだぜ」
デ「他にあいつにしたことはなんだ？」
楓「・・・ああ、前日にオレとバトって倒れた雲雀を、ソファーに寝かせてやっただけだぞ。ま、‘嫌いじゃないかもな♪’とか言っちゃったりしたけど、寝てたと思うから聞いてないと思うし・・・」
デ「・・・なんか見えてきたかも、恭弥の怒った理由・・・」
楓「？」

標的１６　【黒猫　来る！】

標的１６　【黒猫　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

―並盛中校内・昼休み

京「この子が夜代　楓香ちゃん。ツナ君の従姉なの」
楓「楓香です」
黒川「京子の親友、黒川　花よ。へぇ～、沢田の従姉か～。沢田と違って、夜代さんはしっかりしていそうだね」
楓「あははは・・・」
京「ねぇ楓香ちゃん、ツナ君、今日なんで休んでいるかしらない？もしかして、昨日怪我でもしたのかな・・・」
黒川「ん？そういえば商店街の方で爆発事故かなにかあったって・・・あれ沢田達関係してたの？」
楓「まあ、巻き込まれたんだけど・・・ツナはちょっと風邪ひいちゃったらしくて、大したことないらしいし、それだけだから怪我はしてないよ」
京「そっかぁ・・・あの後ツナ君達と会えなかったから、心配してたんだ」
黒川「沢田って、何かと厄介事引きつけてるよね・・・京子、あんたも気をつけなさいよ」
京「？」

黒川、よくわかってらっしゃる・・・

黒川「ね、夜代さん、好きな男の人とかいるの？なんかモテそうじゃん、背が高いし、スタイルいいし」

楓「え、そうかな・・・うーん、オレは今のところいないなぁ・・・黒川さんこそモテそうじゃない？学校に好きな男の子とかいないのか？」

黒川「同年代の男なんかパスパス。猿にしか見えないし」

やっぱり猿なんだ・・・

オレももし男だったら猿扱いだったんだろな・・・

黒川「ま、やっぱ、牛柄のシャツの人ね。大人さん、だったかしら」

お、大人ランボのことね・・・

京「ランボ、っていう人なんだ。ランボ君の親戚かな？」

京子ちゃん、本人です・・・十年後の。

楓「そ、そうかもね」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「うおおおぉぉ・・・」

シュウウゥゥ・・・

ん・・・岩？・・・って！！？

ツ「い〝！？んな〝ぁ～～！！？ここどこーー！！？」

リ「お前が死ぬ気でここまで来たんだぞ。本能的にやることがわかってるみてーだな。さあ、登れ」

ツ「え！！？」

登れって、この垂直な崖を！？

パキッ

あ、

ツ「うわっ、うわあああぁぁぁ！！！！」

ザバーン！！

ツ「ゲホッ、ゴホッ」

リ「あと１００ｍもありますぞ。これじゃ、とてもヴァリアーに歯が立ちませんぞ」

ツ「うるさいよ！！オレは戦う気なんてないって！！」

つーか、何時の間に崖の上から降りてきたのーー！？

リ「今頃、ニセモノのリングがヴァリアーに届けられたはずだ。犀は投げられたんだぞ。お前が嫌でも、ヴァリアーとの全面対決はもう避けられねーんだ」

ツ「ひいいい！そんなああ！！あんなヤバイ奴のいるところと全面対決なんて、考えられるかーー！！」

リ「２日だからな」

!?・・・2日?

リ「2日以内で、この絶壁を登れるようにしろ。それだけの基礎体力は、修行の最低条件だからな」

んなぁっ!?

ツ「そんなこと、できるわけないだろ!?そんなメチャクチャな特訓ってあるか!!!」

リ「メチャクチャじゃねーぞ。それは初代ボスがしたという、由緒ある修行だぞ」

ツ「・・・初代?」

リ「歴代ボンゴレのボスにも、いろんな戦闘スタイルの奴がいてな。武器もそれぞれの個性を生かしたものだった・・・ナイフだったもの、銃だったもの・・・フォークなんてのもいた」

フォーク投げちゅうのー!?

リ「その中に一人だけ、お前と同じグローブを武器に戦った奴がいる」

ツ「え!?」

リ「‘大空’と謳われた、初代ボンゴレだ。初代は歴代最強と呼ばれてるんだぞ」

初代と同じグローブ!?

リ「今回、お前がする修行はグローブを極めた初代のやり方を参考にするからな」

ツ「そんな・・・」

リ「初代はまず、いつ何時でも超死ぬ気（ハイパー）モードになれるよう、絶壁を登り基礎体力をつけたんだ。まあ、これが修行の入り口だな」

入り口って・・・まだなんかあんの！？

ツ「そ、そんなの知らないよ！！つーか、すでに筋肉痛でボロボロだぞ！？こんなの身がもたないって！！」

チャキッ

リ「そのための死ぬ気弾だぞ」

ズガン！

ツ「復活（リ・ボーン）ー！！！死ぬ気で休む！！！」（ぐがーっ）

リ「これがミソだぞ。休み方によって、修行の効率は何倍にもアップするからな。ガンガンこれを繰り返すぞ」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

楓「ふわぁぁっ！（やばっ）」

こんな大きな欠伸はみっともないよな・・・気をつけよう。

放課後、オレはバッグにいろいろ用意するものを入れて、並盛山へ

と向かっていた。

ニャー　ニャー

ん?猫?

ふと振り返ると、一匹の黒猫がオレに着いてきていた。

オレは大の動物好きで、特に・・・

楓「どうした、こんなところで。オレに着いてきたの?ほーれ、よしよし♪」

ふわふわの毛並みの猫が大好きだ。

ニャー♪

楓「ふわふわ~♪」

ふわふわがたまらないっ♪

?「あ、ちょっ、そこ、だめぇ~っ!!」

?

今、何処からか女の子の声が・・・

?「ちょっと、お願い、手を止めてぇ~~!」

も、もしや・・・

驚きのあまりオレがもふもふを止めると、その黒猫は私の手から逃

げ、地面に降りた。

？「あ～、びっくりしたじゃない。危うく昇天しそうになったよ・・・」

幻聴が、幻聴がぁ～～っ！？

？「現実逃避するなーーっ！！」

楓「だってお前、猫だろ！！？猫はニャーニャー、これが常識！！」

？「しかたないわね・・・」

あれ？猫の姿がだんだんボヤケて・・・

楓「んなっ、神！？」

猫は神の姿になった・・・

あのクソ神の。

？「って、そんなわけないでしょ。あんな奴と私を一緒にしないで頂戴。私はこのクソ神のことを知ってる者だと、あなたに伝えたかっただけよ」

あれ？また別の姿に・・・

？「どう？これがほんとの姿よ」

真っ白な羽を持つ、黒髪の幼女がそこにいた。しかも猫耳、尻尾付きで。

？「私はリリス。あのクソ神があなたが心配だからって、私をよこ

したのよ。感謝しなさいよね」

つ、ツンデレ！？

リ「一応天使なんだけど、基が猫だから猫になれるの。ちなみにあのクソ神の姿は幻覚ね」

楓「幻覚使いなのか？」

ふむ・・・修行を手伝ってもらえそうだ。

リ「とにかく」

ポフッ

リ「普段はこの猫の姿でいるから。ちなみに私たち二人は意思疎通の会話ができるから、それを使いなさい。猫と会話なんておかしいし、目立つでしょ。人間界って不便ね」

しかしそんな彼女の説明は、オレの耳には入って来なかった。

もふもふしたい欲求がピークに達していた。

だ、ダメだぁ・・・

ポフッ

リ「にゃっ！？な、何するのよ！？」

楓「ふかふか～♪よしよ～し♪」

リ「ひやっ！ちょっと、らめらさい・・・よぉぉぉっ／／／」

楓香の気が済むまで、もふもふされるリリスなのでした。

標的１６　【黒猫　来る！】（後書き）

ほぼオリジナルでいけたのに、なんかグダグダ・・・

標的１７　【嵐の修行　来る！】

標的１７　【嵐の修行　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「あーもーだめ！！体ボロボロ～～！！」
リ「３分たったら、また修行再開だぞ」
ツ「んなぁーー！ずっとやる気かよーー！！つーかもしかして、学校１０日間休ませる気かー！？」

体がもたないって！！

リ「お前の部下たちも頑張ってんだぞ」
ツ「何かっていうと、すぐそれだよ・・・あれ？そーいや、まだ指輪持ってる人全員聞いてないぞ」
リ「残ってるのは‘雷のリング’と‘霧のリング’を持つ奴だな。直にわかる、半分期待してろ」
ツ「な、半分てなんだよ！」

やっぱりあのバジルって子かな・・・
でも、ケガしてたし・・・

？「ツナさーん！！」
？「ちょっ、ハルちゃん、今声かけるのやばいって！！」

こ、この声って・・・

ハ「降りられなくなっちゃいましたー！！助けてください～～っ！

！」
楓「あーもー、だからじっとしてろってのに・・・」
上からの声に見上げると、崖の頂上からのロープに捕まって助けを求め、頂上で楓香が叫んでいた。
ツ「ハ、ハル！！？楓香！！？」
なんで二人がここにいんのーー！
楓「しゃーねー、ハルちゃん、じっとしてろよ！！ツナはさがってろ」
ハ「は、はい！」
ツ「わ、わかった」

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香
ジャキッ
ガッ　ズガガガガッ！
ツ「んなっ！？」
鎌の先を崖の壁面に引っかけて減速しつつ、崖を降りていく。
バッ

ハ「はひっ！？」
楓「しっかりつかまってろよ」
途中でぶら下がっていたハルを抱きかかえ、ストッとオレは着地した。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

楓「大丈夫か、ハルちゃん？」
ハ「はひ～、びっくりしたですぅ～」
ツ「すごいけど、なんか恐そう・・・」
危なっかしくはなかったけど、なんか見ていて恐かった・・・
ツ「ハル、危ないだろ！？」
楓「ったく、何するかと思えば、ロープで崖を降りようとするなんて」
あんたが言いますかーーっ！！？
ハ「す、すみません・・・」
ツ「つーか、何しに来たの！？」
パンツ見えたしーっ！
ハ「はひっ、そうでした！修行してるって聞いて、差し入れに来た

んです！！」
ツ「あ、ありがと」

なんか気まずいし・・・

ツ「つーか、今気づいたんだけど・・・楓香の肩に乗ってる猫って・・・」
楓「リリスってんだ。オレの友達♪」
リリス「ニャー」
ツ「そ、そーなんだ・・・」

・・・深く聞かない方がよさそうだ。

ハ「そういえば、獄寺さん途中で見たんですが、あんな修行で大丈夫なんですか？」
楓「ハルちゃん、獄寺見たのか！？」
ツ「え！？獄寺君もここに！？」

獄寺君もいるの！？

ハ「はい、滝の向こうです。声をかけたんですが、無視されたのでそのまま来ました。なんか傷だらけのボロボロでしたよ」
楓「傷だらけ！？」
ツ「んなっ、ボロボロだって！？」

獄寺君、どんな修行してんのー！？

リ「まわりに誰かいなかったか」
ハ「一人でしたけど・・・」
ツ「え・・・一人って、獄寺君、家庭教師は？」

リ「獄寺のバカ、シャマルに断られたな」
ツ「えーっ!?獄寺君の家庭教師って、シャマルだったのーーっ!?」
でも断られたって・・・
リ「シャマルがそんなムチャさせるわけがねぇ。きっと一人で間違った修行をしてやがるな」
ツ「た、大変じゃないか!!オレ、見てくる!!」
リ「まちやがれ。お前はそんなことしてる場合じゃねーぞ」
ツ「そーはいかないよ!!獄寺君、ムチャするから!!」
楓「しゃーねー、オレも行くぜ。・・・?」

---

side楓香

楓「ツナ、先行っててくれないか?」
ツ「わ、わかった」

ツナの後ろ姿を見送った後、オレは怪しい気配のする方へ忍び寄った。

チャキッ

楓「誰?・・・って」

家光叔父さん!?

楓「なんだよ、家光叔父さんかよ・・・つーか、なんでこんなところでこそこそ息子の修行風景見てるんだ？」
家光「すまんすまん、まだツナには話してないからな。もう少し、秘密にしておいてくれ」
まだ話してなかったのね・・・
楓「了解、獄寺の家庭教師のシャマルって・・・あのトライデント・シャマル？」
家「ああ、そうだ。それよりなんだ、お前の肩に乗ってる可愛い黒猫は？」
楓「リリスってんだ。オレの友達♪」
リリス「ニャー♪」
家「まあ、なんだ。一応あの家は一時的な居住地だから、ひっかき傷とかはくれぐれもつけないでくれよ」
楓「大丈夫だって♪それより、他の守護者の様子はどうだった？」
家「‘雲・雨・晴の守護者’は順調だが・・・」
楓「‘嵐’の獄寺が家庭教師つけないでやってるらしいな・・・様子、見にいかないのか」
家「そりゃあ、行くに決まってんだろ」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

どこだろ・・・・

ドゴーン!!
ドガガガ・・・
ツ「あの爆発音!獄寺君はあそこだ!!」
オレは急いで爆発音のする方へと向かった。
ガサッ
あ、
ツ「いた!!ボロボロじゃないか!!」
何で獄寺君、あんなにボロボロなのーーっ!?
?「ほっておけ」
あ、今の声・・・
ツ「あ、あなたは・・・Dr.(ドクター)シャマル!!」
隣には何故かシャマルがいた。
ツ「何してるの!?ここにいること、獄寺君知ってるんですか!?」
シ「知らねーだろーな。ほっとけほっておけ、あーゆー何も成長しねー奴は」
ツ「成長しないって・・・そーいえば、何で獄寺君は家庭教師をシャマルに・・・?」
シ「そりゃあ、ダイナマイトをすすめたのはオレだからだ」

んなっ!?

ツ「え〝え〝ーー!?シャマルって、獄寺君のダイナマイトの師匠なのーー!?」

シ「虫酸が走るからその言い方はやめろ。弟子をとるなら、チューさせてくれるプリプリ乙女と決めてんだ」

ナチュラルに変態でた!!(ガーン)

ツ「でも・・・何で?何で獄寺君を拒むんですか?ここまで来てんのに・・・」

シ「見えちゃいねーからだ」

ツ「え・・・?見えるって・・・!?」

シ「あいつにそれが見えねぇかぎり、ここで野垂れ死のうが知ったこっちゃねぇよ」

そ、そんな・・・

ヨロヨロ

って獄寺君、ダイナマイト着火したまま倒れた!?

ツ「危ない!!」

ドカーン!!・・・

ちょっ、獄寺君!!?

ツ「獄寺く・・・」

シ「待て」

？

煙が晴れていくと、そこには獄寺君の他に見知った顔があった。

ツ「あ、あれって・・・」

シ「？」

あれって・・・父さん！！？

シ「（またとんでもねーのが出て来たな・・・）」

つーか・・・！？

ツ「ちょっ、何やってんだよ父さん！！何で獄寺君と話してんの・・・え〝ー！！？」

シ「・・・」

しかもなんか獄寺君と少し話ししたら、帰っちゃったし・・・

ツ「獄寺君、大丈夫！！？」

獄「！！じゅ、１０代目！！お恥ずかしいかぎりです！！こんなブザマなところをさらしてしまって・・・！！」

シ「本当、ブザマ極まりねーな」

獄「な！？」

シ「いいか。今度そんな無謀なマネしてみろ。いらねー命はオレが摘んでやる」

獄「シャマル・・・」

シ「自分のケガは自分で治せよ、男は診ねーんだ。・・・ったく、この１０日間で何人ナンパできると思ってんだ」

ツ「・・・じゃあ！」
リ「これでコンビがひと通りそろったな」

つーか、いつの間にリボーンが！？

はっ（キョロキョロ）

つーか、何で父さんがいたんだ？
この辺で働いてんのか！？

―――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

あの工事現場のおっさんが言ってた通り、自分の命が見えてなかったのかもしれねぇ。

シャマルにダイナマイトを習った時、あいつはオレが言った「名誉の負傷」を見て指導をやめちまった。

あの頃からそのことに気づいていたのかもしれねぇ。

けど、黒曜ランドでの騒動で、オレは１０代目を守っていたはずが、実際は足を引っ張っていただけで、守られていたのはオレの方だった。
右腕として活躍できなかったことに焦っていた。

シ「ほら、さっさといくぞ」

獄「ま、まてよ！」

１０代目！オレはもっと、強くなってみせます！！

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

突然獄寺のいるところへ走っていき、ひと通り話をつけた家光に近づいて、家光に話しかけた。

家「唯一の中距離支援のお前がいねーと始まらないんだぜ、獄寺・・・」

楓「つーか、何気にツナに姿見せちゃったけど、大丈夫なの？」

家「ま、なるようになるって」

楓「で、守護者の修行の様子を見回ってた、ということ」

家「雨・雲・晴の守護者の修行は順調そうだ」

楓「嵐も大丈夫そうだし、雷は論外だし・・・」

霧は話すまでもないな。

家「楓香、お前の方はどうだ？」

楓「ま、これからだな」

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―そして、その日の夜。

父さんにいろいろ聞かないと・・・

ツ「父さんは・・・」

ぐがーーっ

奈「もう寝てるわよ」

ツ「はえっ!!!まだ9時だよ!!?」（ガーン）

標的１７　【嵐の修行　来る！】（後書き）

リリス「ねえ、ちょっと！今回の私、『ニャー』しか言ってないじゃない！どーいうこと！？」

楓「作者に聞いてくれ」

サーセン（笑）

リリス「引っ掻く！引っかき回してやるぅぅっ！！」

楓「リリス、落ち着けって！」

標的１８　【修行第二段階　来る！】（前書き）

やっとヴァリアー出た・・・

標的１８　【修行第二段階　来る！】

標的１８　【修行第二段階　来る！】

並盛山に流れる川の岸に、一人の少女が黒猫といた。
その少女、楓香は目を見開き、何かに耐えるように体を震わせていた。

楓「くっ・・・」

目の前に広がるおぞましい光景。

心の中に広がる感情。

憎悪・・・怒り・・・

楓「・・・っ！」

大切なもの奪っていった者共。

復讐・・・

ドクンッ！！

楓「！！」

復讐復讐復讐復讐復讐復讐復讐復讐復讐復讐フクシュウフクシュウフクシュウフクシュウフクシュウフクシュウフクシュウフクシュウ！！！！！！！！！！

その瞬間、楓香の黒髪がふわりと舞い上がり、根元から色が変わっていく・・・

楓「く〝あ〝あ〝ァァァッ!!!」

リ「楓香!!‘幻術’解除!」

シュウゥゥ・・・

リリスの幻術が解かれると、何事もなかったように元の黒髪に戻っていた。

ドサッ

楓「はぁ、はぁ・・・さ、サンキュー、リリス・・・」

リ「何がサンキューよ!!?こんなこと繰り返してたら、あんたの精神がもたない・・・もし精神が壊れたらどーすんのよ!!」

そう言いつつ、人型になった猫耳少女リリスは、倒れ込んだ楓香に急いで駆け寄り楽な姿勢になるように起こした。

リリスの幻術による特訓・・・

さすがに吹っ切れたかなという判断が甘かったらしい、と楓香は苦笑した。

楓「ははは・・・ごめん。でも、これは乗り越えなくちゃならねーオレの宿題だからさ・・・リリスの気持ちもわかるけど、味方まで巻き込むのは御免だ」

‘アレ’が制御不可なのは百も承知。

だから・・・

楓「・・・あんな惨状、もう見たくない・・・うぷっ！」
リ「楓香！？」
楓「我ながら細い神経だぜ・・・」
リ「楓香・・・もうっ、言ってるそばから！‘リペア’！」

ちなみにリリアは回復系の魔法も使えるらしい。結構なご都合主義である。

楓「ありがと。さ、もう一度だ」
リ「・・・もう。（ムチャしないでよ・・・）」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

シュウゥゥ

ツ「落ちる～っ！！」

また絶壁ーーっ！！

ツ「ひいっ　わっ　わーっ」

どさっ

ツ「たっ！あっ、あぶねーっ！！」

な、なんとか落ちずに頂上にたどり着いたぜ・・・

リ「よし、第一段階合格だぞ。つーことで、次は第二段階だ」

ツ「んなぁ!!?ちょっ、ちょっとは休ませろよ!!つーか修行はもうたくさんだよ!!」

リ「ヴァリアーに殺されてーのか?もっとも、次の修行も気を抜くと死ぬけどな」

ツ「な!!」

?「沢田殿!!」

!?この声は・・・!

バ「順調に第二段階とは、さすがですね!」

バジル君?どうしてここに?

ツ「バ、バジル君・・・。体、大丈夫なの?」

バ「ええ。ロマーリオ殿と親方様の薬草のおかげでかなり良くなりました」

また親方様って・・・

ツ「な、何でここに?」

バ「沢田殿の修行のお手伝いに来ました」

ツ「ええ!?手伝い!?」

リ「第二段階はスパーリングだぞ。理由は後でわかるぞ。バジルをダウンさせたらクリアだからな」

はぁ!?

ツ「何それーー!!?」
バ「では、始めましょう」
ツ「ちょっ、何言ってんの・・・!?ダウンって・・・!!」

つか、バジル君の様子が・・・(汗)

ボッ

バ「手合わせ願います」

額に炎って・・・!

ツ「死ぬ気モード!!?」
リ「バジルもガンガン攻撃していいからな」
バ「はい」
ツ「な!?死ぬ気の人、相手なのーー!!?ちょっ、待って!ヤバイって!殺されるって!!」
リ「心配ねーぞツナ。お前は修行の第一段階をクリアしたんだからな。きっと自分に驚くぞ」

何のことだよ!!

バ「沢田殿!行きますよ」
ツ「タンマ!タンマ!タンマ!無理無理、死んじゃうっ!!」
バ「え・・・?リボーンさん?」
リ「あれは日本人特有の照れ隠しだ。いけ」

え?

バ「では」
ツ「コラ！リボーン！！」（ガーン）
適当なこと言って！！

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン
バジルの死ぬ気モードによる攻撃を耐えきらなけりゃ、第一段階は無意味だからな。

ダッ
バ「行きます！！」

ドスッ
ドガッ

ツ「ぎゃっ！あ・・・」
ぐしゃっ
しーーーん・・・
さすがバジルの死ぬ気モード。ツナを軽々と吹っ飛ばしたな。
だが・・・

バ「え・・・さ、沢田殿？」
リ「まてバジル」

ビクッ

ツ「いった～～っ！！いてーいてー！めちゃくちゃいてーーっ！！？」

ニッ。第一段階は成功だな。

バ「おおっ」
リ「今までのお前なら、間違いなく気絶していたぞ。修行の第一段階で基礎体力を鍛えた成果だぞ。やったな」
ツ「全然うれしくねーよ！！このまま気絶したかったよ！！」

チャキッ

リ「じゃあ本番に入るぞ。バジルをダウンさせるんだ」
ツ「死ぬ気弾！！？」
リ「お前がバジルから学ぶことは山ほどあるんだ。しっかりな」

ツ「ちょっ・・・何言って・・・！？」

ズガン

ツ「復活（リ・ボーン）！！！死ぬ気でお前を倒す！！」
バ「よろしくお願いします」

まずは通常の死ぬ気モードだぞ。
これをクリアしなけりゃ、小言弾によるハイパー化はのぞめねーぞ。

ダッ

ツ「いくぜ――」

ビュッ　ビュ　ビュ　ビュッ

拳のラッシュ攻撃か。だが・・・

ガシッ

ツ「！」
バ「死ぬ気になりすぎです、沢田殿」
ツ「！？？」
リ「ニッ」
バ「本当の死ぬ気になるのは」

ドガッ

バ「一瞬でいいんです」
ツ「がっ！！」

ドガーッ！！

リ「やはりバジルはツナより何枚も上手（うわて）だな。さすがお前の弟子だぞ。家光」
家「そりゃ、厳しく育ててきたもん」

ガラガラ

今度はバジルに石を投げてやがる。
だが、コレで当たるバジルじゃねぇ。

バ「沢田殿。おぬしがが死ぬ気モードで五分しか戦えないのは、気力を常に放出しているからなんです。そんな戦い方では持久戦で勝てません」

パシッ

バジルはツナの投石を受け止める。
さすがだな。

バ「気力をコントロールして、長時間死ぬ気でいられるようにしましょう」

ビュッ

ボゴッ　どすーんっ

ツ「がはっ！」

バジルの投げた石はツナの頭上の崖に当たり、崩れてきた大岩がツナの上に落ちる。

ツ「うおおお」

家「より気力を使う超死ぬ気モードでは、気力のコントロールがさらに重要になってくるからな。なによりそれができねーとあの技は

ムリだぞ」
リ「だからこの修行なんだ。気力のコントロールなしにバジルは倒せねーからな」
家「うむ」
リ「ツナの格闘センスが問われるな」

――――――――――――――――――――

sideディーノ

また並盛中の屋上にやってきたんだが・・・
デ「今日は戦う前に指輪の話をしてえんだ。騙してるみてーでスッキリしねぇからな」
雲「指輪の話はもういいよ、興味ないから。あなたをグチャグチャにすること以外」

こいつ・・・相変わらず聞く耳もたねーな。
ってか、やっぱなんか怒ってないか・・・？
たしかリング渡したの楓香だったな。
あいつ、何したんだよ・・・

デ「ったく、困った奴だぜ」

雲「ねぇ。真剣にやってくれないと、この指輪捨てるよ」
デ「なっ、まて！」
雲「僕には関係ないからね。むしろ今すぐ壊したい」

デ「のやろ～～っ」

気位が高いっつーか、戦闘マニアっつーか・・・

デ「わーったよ。じゃあ交換条件だ。真剣勝負でオレが勝ったらお前にはファミリーの一角を担ってもらうぜ」

雲「・・・すきにすれば」

―――――――――――――――――――――――――――

―イタリア・某アジト

長髪の男・・・スクアーロは、今作戦の成功に浮き上がっていた。

スクアーロ「う゛お゛ぉい、お呼びかボス？ハーフボンゴレリングの褒美をくれるってんならありがたく頂戴するぜ」

するとボスと呼ばれた安楽椅子に座った男はスクアーロを手招きする。

くぃっ　くぃっ

ス「ん゛？なんだぁ？」

ゴスッ！！

ス「ぐあ゛っ！！な、何をしやがる！！？」

頭を掴まれ、机にぶつけられた男は、どこに落ち度があったかわか

らずにいた。

グシャッ

？「偽物（フェイク）だ」

ス「！！？」

？「ししししっ。本物か偽物かもわかんねーのかよ」

頭にティアラを乗せた男がこの騒ぎに気づき横槍を入れる。

ス「うるせえ、てめーは引っ込んでろぉ！！三枚におろすぞ！！」

？「ししししっ、やってみ♪」

ス「う〝お〝ぉい〝！！（ゴスッ！）いて〝っ！！」

今度は頭にワイングラスをぶつけられた。

？「うるせえ、カス共」

？「ふぅ・・・まったく。ボクは無駄働きはゴメンだよ」

？「大事な任務を無駄にしよって」

ふわふわと浮かぶ赤ん坊に吊り目の男。

？「ししししっ、ムッツリオヤジは黙ってろっつーの」

？「なぬっ」

？「そうさぁ、お前は黙ってなぁ」

ねちっこい話方をする、眼鏡をかけた男も珍しくここに来ていた。

？「‘レイ’、貴様」

？「あらー。レイ、あなた研究室から出てきたの、久しぶりじゃな

い」

小指を立てたサングラスの男もこの場に集まっていた。

？「フフフッ、何か面白い事が起こりそうだぁ」

男は眼鏡を指で押し上げつつ、さもおかしそうに不敵な笑みをもらす。

？「家光・・・」

？「まあ・・・もしかして日本に？」

？「日本に発つ・・・奴らを根絶やしにする」

――――――――――――――――――――

―同刻・日本・沢田家（夜）

楓「あ、奈々さんそれオレがやります♪」

奈「助かるわぁ♪」

楓「いえいえ。夕飯をご一緒させていただいてる身ですから」

奈「まあ！でも楓香ちゃんは家族みたいなものだから、遠慮しなくていいのよ」

楓「ありがとうございます、奈々さん」

ガチャッ

楓「お、ツナ帰って来たみたいですね」

ツ「ただいま・・・あ、楓香来てたんだ」
楓「ちす。なんかボロボロだな・・・」
ツ「そうなんだよ・・・もう疲れてメシ食う元気もないよ・・・」

とか言いつつ、ツナも席につく。

リ「しっかり食っとけ。あと一週間は修行できるからな」
ツ「え〜え〜!?こんな生活あと一週間もすんのかよ〜っ!」
奈「?」

静かに忍び寄る危機に気づく者はいなかった・・・

あ、楓香は気づいていたりする。

標的１９　【ヴァリアーの足音　来る！】

標的１９　【ヴァリアーの足音　来る！】

ｓｉｄｅリボーン

リ「五分経過」

ツ「おりゃあ！！！」

サッ

避けるバジルにツナの手刀が迫る。

ツ「うおおお！！」

ダッ

ぺちっ

バ「？」

手刀を防いだバジルは、違和感を感じ取った。

ボッ

ドガッ！

威力の上がったツナの蹴りを、なんとか耐えしのぐバジル。

ズザッ

バ「（あ、危なかった・・・）」
家「ほーお。死ぬ気の中にも強弱がついてきたな」
リ「死ぬ気タイムも伸びてきてるぞ。気力のコントロールを少しずつモノにしてきてるな」
家「修行5日目にしてここまでくるとは、なかなかやるな・・・」

ま、順調だな。

バ「よーし、次は拙者の番です。本気でいきます！」

ボッ

ツ「！？」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

本日の学校も終わり、オレはいつもの場所へ向かっていた。

楓「よーし、修行、修行っと・・・」
リリス「ねぇ、楓香。あなたが昨日言ってたヴァリアーってのが、予定者より早く来てるんでしょ？伝えなくていいの？」
楓「これ以上の原作崩壊で予想できないことが起こってしまうと厄介だからな」
リ「ふーん・・・」
楓「てか、リリス、なんで人型なんだ？」

リ「んー、猫モードで楓香の肩に乗って移動するのも悪くないけど、偶には人型モードになって自分で歩かないとね」
楓「ま、耳と尻尾さえ注意してくれるなら、構わないけどね。なんか妹ができたってカンジだし♪」

つーか、隠せるのかな？

リ「だ、誰が妹よ！というか、実年齢は私の方が何十倍も上なんだからね！」
楓「まあ、天使だしな・・・」
リ「で、でも別に楓香が私を妹だっていいたいんなら、べ、べつにそれでもいいよ・・・うん、そうよ！」

なんというツンデレ。

楓「はいはい、わかったわかった。ほんと、ツンデレだな、リリスは」
リ「ツ、ツンデレなんかじゃないわよ！だいたいそんなに、み・・・耳を、さ、うんっ！、触らないでよぉ・・・／／／」
楓「っていうか耳、隠せんの？」
リ「ま、まぁもちろん隠せるわよ・・・」
楓「ふーん。でもリリスの耳、手触りがいいなぁ」
リ「ちょっ！お願いっ、ひゃあっ！耳は、んっ！、やめてぇっ／／／」
楓「あ、ゴメン、やりすぎた？」

ペタン

リ「ううー、お嫁にいけない・・・」

そんな目をうるうるさせられても困るんだけど・・・

楓「か、神様にお嫁とかいう概念があったのか・・・？」

リ「も、もちろんあるわよ。いくら寿命が長いからといって、いずれは次の世代に継いでもらわなければならないの」

楓「そ、そうなんだ・・・」

その後、オレはリリスに謝りつつ、修行場所へと向かった・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

死ぬ気ツナ「はぁ、はぁ・・・」

バ「まだまだいきますよ！」

やはり、バジルには持久力があるな。

リ「本気のバジルにはかなわねーな」

家「次で決まるかな」

ダッ

ツ「！」

ゴッ！

バジルの右フックがツナの右頬にヒットする。だが・・・

バ「（モロに入った・・・）」
家「・・・いや」
リ「ニッ」

ガシッ

バ「！？」

ツ「うお〝お〝お〝！！！」
バ「！！」

ガッ！！

どさっ
シュウゥゥ

油断していたバジルに、ツナの頭突きが決まった。
そしてツナと共にバジルの死ぬ気モードも解けてしまった。

リ・家「「・・・・・・」」
家「見たか、友よ・・・」
リ「ああ」
家「ツナの奴、殴られた瞬間に死ぬ気をコントロールして防御力を高め、ダメージを軽減しやがった・・・まだそんなこと教えてねーんだろ？」
リ「ああ。本能的にやってのけやがったな。ま、これで第二段階はクリアだぞ」
家「我が子ながらやるじゃねーか」

ニッ。まだまだ伸びる奴だからな。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「いつつ」
リ「気づいたな」

目が覚めると、リボーンとバジル君がいた。

ツ「あれ・・・？父さんいなかった？」
リ「さーな」
バ「参りました。さすが沢田殿です、すごい一撃でした」

？すごい一撃？

ツ「え？オ、オレが・・・？」
リ「ってことで、いよいよ第三段階にいくぞ」

んなあっ！！？

ツ「ちょっ、待てって！もうたくさんだよ！帰りたいよ！！」
リ「何甘っちょろいこと言ってんだ？そんなヒマは・・・」

ぐるるるる・・・

！い、今のはリボーンの腹の音・・・

リ「夕飯に帰るぞ」
ツ「お前の腹優先かよ！！」（ガーン）

リ「ちなみにバジルの親方様も飯に来るからな」

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅヴァリアー

暗闇の中、とあるビルの屋上に厳つい男と黒衣を纏った赤ん坊がいた。

？「この町に・・・ハーフボンゴレリングが」
？「スクアーロが嘘をついてなければ間違いないね」
？「・・・マーモン、念写を頼めるか？」

マーモンと呼ばれた赤ん坊は、溜め息を吐きつつこう返した。

マーモン「非常事態だもの、仕方ないね。つけにしておいてあげるよ、レヴィ・ア・タン。君のリングは確か・・・」
レヴィ「雷だ」
マ「うむ。じゃあもう片方の雷のリングを探せばいいわけだ。いくよ」

スウーッ

マ「粘写！！！」（ずびーっ）

ぬちゃ・・・

レ「・・・いつ見ても汚いな・・・」

粘写という名の鼻水飛ばしにさすがのレヴィも引いた。

マ「む、近いよ。南に２０５m、西に８０１mだ」

レ「・・・これよりヴァリアー・レヴィ雷撃隊。雷のリングの奪還に向かう」

ザッ

レヴィ雷撃隊の三名は整列する。

レ「リングの所持者及び邪魔する奴は・・・」

バッ

レ「消せ」

レヴィの合図と共に、男達は暗闇の中へと消えていった・・・

マ「む・・・それにしても、レイはどこにいった？また別行動、とってないだろうな。あんな方向音痴のお守りなんか、僕は御免だよ」

―――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

修行後の帰り道、途中、楓香と合流した俺達は、バジル君の死ぬ気モードについての話をしていた。

楓「うーん。それじゃあバジル、あれをツナに見せたら？」
バ「そうですね」

そしてバジル君にみせてもらったのは長方形の入れ物に入った、アメ玉みたいなものだった。

バ「これは死ぬ気丸（がん）、といいます」
ツ「しぬきがん？」
バ「ええ。死ぬ気になる錠剤アイテムです。親方様が拙者専用に作ってくれたんですよ。死ぬ気弾より死ぬ気度は少し落ちるんですけどね」
ツ「！・・・また親方様か・・・バジル君の話には必ず出てくるよね・・・」

バジル君には悪いけど、指輪持ってきた人でしょ。最初から印象悪いんだよな・・・
きっとヤなオヤジなんだろうな～・・・

楓「ふふっ♪」
バ「クスッ」
リ「ニッ」

ガチャッ

ツ「ただい・・・」
家「おかえり～！！」
ツ「ゲッ！と、父さん！」

家に着き、玄関を開けるとめずらしく父さんがいた。

ツ「めずらしく起きてんだ・・・どっかでかけんの？」
家「ああ。招いてない客が、思ったより早く来ちまったらしい」
リ・楓・バ「「「！」」」

？・・・招いてない客？

リ「本当か、家光」
家「本国にいるオレの影からの情報だ、間違いない」
楓「まさか・・・？」
リ「にしても早すぎるぞ」
家「ニセのリングがこうも早く見破られるとは想定外だった。考えられるとすれは、ザンザスの超直感・・・」
楓「そうなるな・・・」

ザンザス・・・？それに超直感って・・・

ツ「な、何の話・・・？」
家「ヴァリアーが日本に上陸したらしい」

ヴァリアー？・・・って！！？

ツ「なっ！例のおっかない連中が～～！？？」

日本来たって！！来んのまだ先じゃないの！？？

ツ「つーか、何で?何で父さんが・・・?」
家「楓香はヴァリアーの闇の守護者に気をつけろ。奴の情報は少なすぎて、戦闘力は皆無だからな」
楓「ああ」
家「オレは守護者全員の安全の確認を兼ね、状況を伝えにいく。手伝え、バジル」

え?

バ「はいっ、お供します、親方様!」
ツ「!!」

今、親方様って・・・ええっ!!?

ツ「おやかたさま・・・?」
バ「はい」
ツ「・・・父さん?」
家「なんだ?」
ツ「親方様?」
家「親方様」
ツ「うそーー!!?」
楓「つ、ツナ?」
ツ「そんな・・・だって・・・」
楓「家光叔父さん、まだ話してなかったのかよ・・・」
家「すまん、楓香。タイミングがなくてな。ツナ、今は時間がない、後でゆっくり説明する」

って、何気に楓香、このこと知ったのーーっ!!?

家「とりあえず、このことは母さんにはナイショだぞ。男と男の約束・・・な！」
ツ「なぁ、ちょっ・・・」
んなこと言われても・・・
家「敵の先公隊はレヴィ雷撃隊。奴らは雷のハーフボンゴレリングを奪いにくる、しかし雷の守護者はあまりに未熟で心配だ。他の守護者にもコンタクトがとれ次第救援にいかせるが、時間もかかるだろう。お前には直接、雷の守護者の元へ保護に行ってほしい」
ツ「そ、そんな・・・」
家「楓香も気をつけろよ。いくぞ、バジル」
バ「はい」
ツ「ちょっ」
バタン・・・
父さんとバジル、家出ちゃったし・・・
つーか、
ツ「なんだよ、どーなってんだよ!!どーしょ～～!!?」
楓「まあ落ち着け、ツナ」
んなこと言われたって～・・・
リ「ここは家光の指示に従った方がよさそうだな。雷のリングを持ってる奴の保護に向かうぞ」
楓「オレは別行動とらせてもらうぜ」
ツ「んなぁっ！一緒に来てくれないのーーっ!?」

楓「すまねぇ、ツナ。向こうの‘闇’の守護者の動向が心配なんだ。‘闇’の性質上、下手したら狂気に犯された野郎とかかもしれない、他の守護者に出会っちまったらちとキツいかもだからな。見つけ出してなんとか足止めしてくるぜ」

リ「ああ」

ツ「じゃあツナ、頼んだぞ」

ツ「んなっ」

バタン・・・

楓香まで飛び出していちゃったよ・・・

リ「おい、ツナ。早く行くぞ」

ツ「ん?そういえば雷って誰なんだ?」

標的１９　【ヴァリアーの足音　来る！】（後書き）

一部おかしな世界がありました・・・

反省します　ｍ（＿＿）ｍ

標的２０　【ヴァリアーの、闇、来る！】（前書き）

更新順間違えちゃったので、急いで更新しました・・・

標的２０　【ヴァリアーの‘闇’　来る！】

標的２０　【ヴァリアーの‘闇’　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

――昨日の晩・夕食後

家「楓香、話がある」

家に帰りかけたオレを、家光叔父さんが呼び止めた。

楓「？なんですか、話って」

家「ヴァリアーの‘闇’の守護者について、だ」

楓「！！・・・何かわかったんですか！？」

家「ああ。そいつの名はレイ・カーベル。研究者であることは確かだが、過去の経歴が一切残されていなくてな」

楓「・・・名前がわかっただけですか」

名前だけわかってもなぁ・・・

家「まあ聞け。マフィアの情報網にちょっと気になる人物が上がってな・・・同姓同名の人物がいたんだよ」

楓「ふむ・・・それで？」

家「そいつの履歴に気になる組織があってな・・・」

家光はその履歴の書かれた用紙を懐から取り出すと、オレに見せてある一行を指差した。

家「ここだ」
楓「!!?まさか・・・」
家「オレも深く考え過ぎているかもしれないが・・・用心するのにこしたことはないだろうよ」
楓「・・・わかったよ・・・注意しておきます」
家「ああ、よろしく頼む。さーて、帰って寝るかぁ！」

家光叔父さんの後ろ姿を見ながら、オレはことの重大さに考え込んでいた。

そのヴァリアーの‘闇’の守護者がこのパラレルワールドの中で唯一の人物ならば、どう後(のち)に影響してくるかわからない。

リリス「しっかりしなさい、あまり気負うと体を壊すわよ。その男が何者なのかはわからないけど、落ち着いて対策を練りましょ」
楓「・・・そうだな。ありがと、リリス」

いつの間にか肩に乗っていた猫モードのリリスに励まされ、オレの気持ちは幾分か軽くなっていた。

――そして今・・・

ぴょん　すとっ

楓「お、来たのか」
リリス「まったく、私を置いていくなんて・・・」
楓「スマンスマン。家でよく寝ていたがら起こすに起こせなかったんだよ」
リ「ま、まあそれなら仕方ないわね、でも今度からは何がなんでも

連れて行きなさい。いざとなったら私が対処するしかないんだからね」

楓「わかった」

オレは塀から軽々と、走っているオレの肩にスムーズに乗ったリリスを連れその男・・・レイを探していた。

楓「ヴァリアーの連中、もうこの辺に来ているはずだ」

リ「そうね・・・」

サッとポケットから取り出した写真。

白髪に円眼鏡に少し伸びた顎髭、そして白衣を纏った男の写真。

生前のレイの姿が、そこには写っていた。

楓「亡霊か・・・はたまたドッペルゲンガーか・・・」

―――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「ちょっと待ってよ～っ！１０日後まで来ないって言ってたのに、話が違うじゃん！！」

リ「来ちまったもんは仕方ねーだろ」

そんな無責任なっ！！

？「ツナ君！」

ツ「！」

あ、今の声！

京「フゥ太君たち帰ってる？」

ツ「京子ちゃん！ハル！え、フゥ太たち・・・？」

京「フゥ太君とランボ君とイーピンちゃんと遊んでたんだけど途中ではぐれちゃって…」

ハ「先に帰ってないかと思いまして・・・」

家には・・・いなかったよな。

ツ「いや・・・まだ帰ってなかったみたいだけど…」

京「どうしよう！もしものことがあったら・・・」

ハ「心配です～・・・」

つーか悪いんだけど、今、オレそれどころじゃ・・・

リ「やべーな」

え？

リ「奴らより早く見つけねーと」

ツ「え・・・！？」

それって・・・

リ「急いであいつらを見つけるぞ」

そう言うと、リボーンは先に行ってしまった。

ツ「んなっ、ちょっと待てって！あ、京子ちゃん、ハル、フゥ太たちはオレが探しとくから！もう暗いし、帰っててていいよ」
京「うん・・・わかった、ツナ君よろしくね」
ハ「よろしくお願いします、ツナさん！」
ツ「あ、フゥ太たち見つかったら連絡入れとくから」
そう言い残したオレは、急いでリボーンの後を追った。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

楓「・・・で、ご本人が自ら登場ってか」

グォン　グォン　グォン

リリス「（しかもゴツい人型機械を三体も）」

ちなみにリリスは猫モードなので、意思疎通の会話・・・テレパシーでオレに話しかけている。

レイ「クックックッ。闇のハーフボンゴレリングの反応・・・貴女があちら側（サイド）の守護者ですねぇ」
楓「・・・あんたがレイ・カーベルか。つか、なんだよそのロボットは？」

ゴーラ・モスカ？・・・にしては一回り小さいし。

レ「クックックッ、これこそが、我が生み出した初期のモスカだぁ」

ガチャッ
キュォォ・・・

楓「！！（圧縮粒子砲！？）」

しかも三体同時！？

レ「さあ・・・実験（かり）の始まりだぁ」

ズガーーーッ！

楓「ちっ！リリス、振り落とされるなよっ！！」
リ「えっ、わぁっ！！」

砲弾を避けながら後退したオレは、抉れたコンクリートの地面を見て冷や汗を掻きつつ、反撃の策を練った。

確かモスカには緊急停止用のボタンが後ろに・・・って、んなもんこいつが付けてるはずがねぇ。

手持ちの武器で使えそうなのは・・・獄寺からもらったダイナマイト数本だな。

楓「（リリス、離れてろ！）」
リ「（わかった！）」

肩に乗ったままだと危険なので、オレはリリスを後ろに下がらせた。

バッ
ジジジ・・・
楓「いけっ！」
シュルシュル・・・
ドカンッ！！
ダイナマイトがモスカの装甲にヒットし、煙りが上がる。
効いてないと思うが・・・足止めにはなったはず。
・・・だが、
ズガガガーッ
楓「なっ！？」
オレはすんでのところで銃弾を回避した。
なぜ居場所が！？
いや、
たしかモスカには・・・
楓「サーモグラフィーか！？」
レ「クックックッ、策は良かったんですが、相手は機械ですよぉ？」
こうなりゃ、攻撃が止んでいる今の内に！

ジャキッ
ダッ

楓「先手必勝！‘一文字・・・狩り’！！」

前方にいたモスカの中の一体の装甲が斬られ、爆発した。
爆発の寸前にバックステップで爆風をかわしたオレは、残りの二体の対処方法を模索する。

レ「クックックッ、まさかモスカを一撃とは・・・まあ所詮、試作機ですからね」
楓「え・・・？」

ま、まさか・・・

レ「充分な足止めになりましたよぉ、クックックッ・・・」

楓「囮（フェイク）！？・・・って！！」

今気づいたんだが・・・
レイの姿が乱れて見える。

リ「（まさか！？）」
楓「ホログラムだと・・・！？」

よく見れば、奴の左右のモスカから、うっすらと光源が見えた。

レ「貴女は危険因子ですからねぇ、うちのボスが他の貴女側の守護者を‘かっ消す’のに邪魔ですのでねぇ」

しまった！

レ「・・・と言うことですからぁ、私はこれで失礼するよぉ」

楓「ま、待て！」

レ「あ、そうそう。この二体のモスカは置き土産だからね、‘暴走モード’にしておくから放置したら周りの罪のない一般人が巻き込まれるかもねぇ、気をつけてねぇ」

はあ！！？

《《ピー、ピー。ターゲット固定。殲滅します》》

レ「クックックッ、では」

楓「ちょっ！」

シュン・・・

あいつ、逃げやがった！！

グォン　グォン　グォン

リ「楓香、今は殺気立っている場合じゃない。こいつら早く倒して、みんなのいる場所に行かないと！！」

楓「そうだな・・・よし」

オレは下がった大鎌の矛先を上へ上げる。

楓「ちゃっちゃと終わらせる・・・行くぜ！！！」

標的２１　【ヴァリアーのボス　来る！】（前書き）

ついに・・・来た！（なにが？

標的２１　【ヴァリアーのボス　来る！】

標的２１　【ヴァリアーのボス　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「なんだって！！ランボが雷のリングを！？」

わけわかんないよ！！

ツ「なんでだよ！あいつ五歳だぞ！！おバカだぞ！？」

リ「いろいろ事情があるんだ」

どんな事情だよ！！？

ツ「だって、ランボってボヴィーノファミリーなんだろ！！ボンゴレに入れていいのかよ！？」

リ「そんなことをしたのは、初代ぐらいだな」

初代がどうかとかの問題じゃないよ！！

ツ「それにこっちがよくてもランボのボスが何ていうか！！」

リ「光栄だと泣いて喜んだらしいぞ」

ツ「なっ」（ガーン）

何考えてんだよ・・・

フゥ「こないでっ」

ツ「！」

いたっ！！

ってか、絶賛襲われ中！！？

フゥ「助けてぇ～！！」

ツ「あれって・・・！？フゥ太！！ランボ！！イーピン！！あぶない！！」

ドゴオッ！！

？「がはっ！！」

ツ「え・・・」

リ「（ニッ）」

あ、あの人は・・・！！

了「ボンゴレファミリー晴れの守護者にして・・・コロネロの一番弟子！笹川了平、推参！！！」

ツ「お兄さん！！！」

リ「まだだぞ」

ビシィ！！ドガァンッ！！

獄「ったく何でアホ牛がリングを・・・っ」

山「もー大丈夫だぜ」

ツ「み、みんな・・・！！」

来てくれたんだ！！

獄「１０代目！！」
山「なんか久しぶりだな♪」
了「オス！」
フゥ「ツナ兄～怖かったよーっ」
フゥ太たちは無事のようだ。
ツ「大丈夫だったか？イーピン怪我してるじゃん！！戦ったの！？」
ラ「ハラ減ったぞ～！ツナおんぶっぶ～」（ゴロゴロ・・・）
ツ「汚いから寝るなって！！・・・ん？」
・・・よく見るとランボの頭には雷のボンゴレリングがひっかけてあった。
ツ「おまえこんなところにリングひっかけて・・・！」（ガーン）
これのせいで狙われてるとも知らずに・・・
獄「オレにはまったく理解できないっスよ！なんでこんなアホ牛にリングが」
山「まーまー、いーじゃねーか。まずは無事ってことで」
了「しかし思ったより骨のない連中だったな。楽勝だぞ！」
た、確かに、これなら・・・！！
リ「そいつは甘えぞ。こいつらはヴァリアーの中でも下っぱだ」
山「・・・確かに、あのロン毛は強かったぜ」
獄「・・・」
リ「そうだ。本当に恐ぇのは・・・！くるぞ！」

えっ・・・!!

ザッ

レヴィ「・・・お前たちがやったのか」
みんな「!!」

な、なんなのあの人!!?凄い威圧感を感じる・・・

レ「雷のリングを持つオレの相手は・・・パーマのガキだな」
ラ「!」（ゴクリ・・・）

ヤバイ!!リボーンが言った通りだ!!明らかにさっきのてきとは格がちがうっぽい～～!!

スクアーロ「待てぇレヴィ!」
ルッスーリア「1人で狩っちゃだめよ」
マーモン「他のリングの保持者もそこにいるみたいなんだ・・・というか、レイは?」
ルッスーリア「あらー?そういえば見当たらないわねぇ」
ベルフェゴール「ししししっ、あいつはスクアーロが手こずった'闇'のを足止めにいったんだよ」
ス「ちっ、手こずってなんてねぇ、油断しただけだぁ!」
マ「どーでもいいけど、無駄働きはしたくないから助かるよ」
ツ「うわわわ・・・こ、こんなに・・・!」

それにロン毛も!?
しかも闇のって・・・楓香!?

ツ「リボーン!!楓香が・・・」

リ「心配いらねぇ。あいつはお前の何百倍強い。今は目の前のことに集中しやがれ」

楓香なら・・・大丈夫だよ・・・な。

ス「う〝おぉい！！！よくもだましてくれたなぁカスども！」
ツ「で、でたーっ！！」
山「！」
獄「あんにゃろう・・・！」
ス「雨のリングを持つのはどいつだぁ？」

雨？って、

山「オレだ」

そうだ、山本だ！

ス「なんだぁ、てめーかぁ！3秒だ、3秒でおろしてやる」
ツ「ひいいい、そんな・・・やばいよ！！！」

ガッ

ス「！！」
？「のけ」
ス「ぐっ」
レ「のけっ」
ス「う〝お〝ぉい！てめーはカンケーねーだろ！」

ザッ

リ「・・・でたな・・・まさかまた奴を見る日が来るとはな・・・
ＸＡＮＸＡＳ」
ツ「う・・・」

な、なんだ・・・この人・・・！？
威圧感がハンパないよ！！！

Ｘ「沢田綱吉・・・」
ツ「！！」（ゾクッ）

コオオオオ・・・

ＸＡＮＸＡＳの手が光りはじめ・・・た・・・？

獄「（体が・・・動かねえ・・・！）」
山「（くっ！）」
了「（ぬうっ）」

な、なんなのあれ！！？

リ「やべーぞ！逃げろ！」
ツ「えぇ！？」

リボーンがそれほど焦るのって・・・！！

Ｘ「死ね・・・」

ガッ

Ｘ「！？」

リ「！」
みんな「！！！」

？「オモシロそうなことやってるじゃない」

え？

？「アタシも・・・入れてくれないかな♪（スッ）・・・拒否権はないよ」

ゴオォォォ！！

ス「（なんつー殺気だ！！）」

そこに現れたのは・・・

X「・・・てめえ、何者だ？」
？「そんなのどうでもいいよ・・・楽しかったらなんでもいいじゃない。ワタシの大鎌でぶった切ってやるよ」

髪が白で目が赤色、黒い大鎌を持った少女が、ＸＡＮＸＡＳの前の地面に大鎌の刃を突き刺していた。

で、でも・・・

ツ「あ、あの大鎌って・・・！？」
リ「・・・（やべえな。さらに状況が悪化しやがった）」

リボーン、だんまりかよ！

でもあの服装は間違いなく・・・

ツ「楓香だ・・・」

山「！！？」

了「楓香！？」

獄「じゅ、１０代目、今、なんと・・・？」

ツ「あの服装・・・間違いなく楓香だ！」

そう、たった数分前見た、楓香の服装だ！

獄「し、しかし、雰囲気が全然違うといいますか・・・まるで別人っスよ！？」

山「それに髪の色が全然ちげーし、目の色も・・・」

了「うぬ・・・今の奴から感じられるのは、闘争心のみだ」

リ「・・・あれが闇・・・裏側か」

みんな「？」

X「・・・てめぇはここで、かっ消えろ！！」

？「フッハハハッ！そうこなくっちゃ」

ボウッ！

みんな「！！？」

X「！！・・・」

彼女の手から大鎌の刃へつたっているのは、黒い・・・死ぬ気の炎？

X「黒い炎！」

ス「んだとぉ！」
レ「ボス！」
ベ「・・・やばくね？」

な・・・ヴァリアーが、焦ってる？

X「このっ！！」

キュォォ！！

ツ「！！」

さっきよりもＸＡＮＸＡＳの手の炎が・・・大きい！？

ガッ

X「！？」
？「・・・」

な、何かが2人の間に刺さってる！？
つ、鶴橋？

？「家光？・・・邪魔しないでくれる？」
家「それはできない。オレに免じてここは収めてくれ」
？「ちっ・・・わかったよ」

な・・・！

家「ってことで、そこまでだ。ここからはオレが取り仕きらせてもらう」

ツ「と・・・父さん!!?」
獄「なっ10代目のお父様!!」
X「家光・・・」

取り仕切るって・・・ええっ!!?

?「闘争心が萎えたよ・・・」

そう言った彼女は、白くて長い髪の少女は武器をしまうと、オレに近づいてこういった。

ツ「（ごくり）」
?「こいつを・・・頼んだわよ」
ツ「え?」

シュウゥゥ・・・

か、髪が・・・髪の色が黒に!!

ツ「楓香!!」

オレはふらふらと倒れかけた楓香（?）を支える。

楓「・・・んあ、や、やっちまったか・・・」
ツ「楓香!?」
バ「大丈夫です、沢田殿。拙者が支えます」
ツ「あ、ありがと、バジル君」
楓「すまねえ、バジル・・・」

いつの間にかバジル君が近くにいたので、任せることにした。

ス「い・・・今さら口出しすんじゃねーぞ家光!!逃げ回るしか能のない腰抜けが!!」
バ「なにを!」
家「待てバジル、オレは逃げていたんじゃない。9代目からの回答を待っていたのだ・・・そしてその回答ととれる勅命が今届いた」

9代目?

家「オレは近ごろのお前達のやり方と、それを容認している9代目に疑問を持ってな。9代目に異議申し立ての質問状を送っていた。そして、その回答ととれる勅命が、今届いた」
X「・・・」

な・・・

ツ「何の話かさっぱりわかんないよ~っ!!つーか、なんで父さんが!?」
楓「門外顧問・・・それが家光叔父さんのボンゴレでの役職だ」

標的２１　【ヴァリアーのボス　来る！】（後書き）

フウ太ではなくフゥ太だったんですね、今更ながら。

標的２２　【門外顧問　来る！】

標的２２　【門外顧問　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「もんがい・・・こもん？」

リ「ボンゴレであって、ボンゴレでないもの・・・平常時には部外者でありながら、ファミリーの非常時において、ボスに次ぐ権限を発動できる。実質Ｎｏ．２だ」

ツ「な！！？父さんがＮｏ．２！？」

楓「ああ。そんで、ハーフボンゴレリングは正式な後継者の証であるボンゴレリングを二つに分けたもので、ボンゴレボス・・・９代目と、門外顧問である家光叔父さんがそれぞれに決定権を持つために二つに分けられた物なんだ」

ツ「それでこんな変な形なんだ・・・って、なんで楓香がそんなことも知ってんの！！？」

楓「そりゃあ、日本に来るまで仮隊員として門外顧問に入っていたからだ」

え？

ツ「え゛ーっ！！？ウソーっ！？」

バ「本当のことです、沢田殿。拙者も門外顧問に所属していますが、楓香殿は拙者よりも長い間、門外顧問にいたんですよ」

楓「ま、そこで家光叔父さんに鍛えてもらったんだがな」

バ「まあとにかく、沢田殿」

すると、バジル君から丸まった何かの紙を受け取った。

バ「これが9代目からの勅命です」
ツ「ちょくめい・・・？」

ボッ

！か、紙から・・・！

ツ「死ぬ気の炎！？」
楓「9代目の死炎印・・・間違いねーな、本物だ」
ツ「わっ、イタリア語で書いてある。よ、読めないよ～～」
楓「どれどれ・・・」

今まで自分は、
後継者にふさわしいのは家光の息子である沢田綱吉だと考えて、そのように仕向けてきた。
だが最近死期が近いせいか、私の直感は冴え渡り、他によりふさわしい後継者を見つけるに至った。

我が息子、ＸＡＮＸＡＳである。
彼こそが真に１０代目にふさわしい。

楓「・・・けっ」
リ「・・・」
ツ「って、あの人、９代目の息子なの！？」

だが、この変更に不服な者もいるだろう・・・現に家光はＸＡＮＸ

ＡＳへのリングの継承を拒んだ。

ツ「！」

な、なんで父さん拒むんだよ！
あの人たちにあげればいいのに～～！！

かといって私はファミリー同士の無益な抗争に突入することを望まない。
そこで皆が納得する、ボンゴレ公認の決闘をここに開始する。

楓「つまり・・・」

同じ種類のリングを持つ者同士の１対１のガチンコ勝負（バトル）だ。

ツ「んなっ！ガチンコ勝負～！？」
楓「（こいつぁ・・・）」
リ「（裏がありそうだな・・・）」

？「お待たせしました」

え？

？「今回のリング争奪戦では、我々が審判（ジャッジ）をつとめます」

だ、誰なのこの人たち・・・？

チェ「我々は9代目直属のチェルベッロ機関の者です」
チェ「リング争奪戦において我々の決定は、9代目の決定だと思ってください」
チェ「9代目は、これがファミリー全体を納得させるためのギリギリの措置だとおっしゃっています」
チェ「異存はありませんか？ＸＡＮＸＡＳ様」
Ｘ「・・・」
チェ「ありがとうございます」
家「待て、異議ありだ。チェルベッロ機関など聞いたことがないぞ・・・そんな連中にジャッジをまかせられるか」
チェ「異議は認められません」
チェ「我々は9代目に仕えているのであり、あなたの力に及ぶ存在ではない」
家「なに…っ」
ル「んまぁ残念ね～」
楓「・・・」
チェ「本来、7種類・・・今回は8種類のハーフボンゴレリングは、9代目が持つ1組と沢田家光の持つ1組計2組存在し」
チェ「跡継ぎの式典の際にその2人が認めた7名に、2組のリングを合体させた完全なるボンゴレリングの状態で継承されるものなのです」
チェ「ですが今回異例の事態となってしまいました」
チェ「2人がふさわしいと考える7名が、食い違いそれぞれが違う人物に一方だけを配ったのです」

え？それって・・・！

チェ「すなわち9代目が後継者と認めたＸＡＮＸＡＳ様率いる7名と、家光氏が後継者と認めた綱吉氏率いる7名です」

＜チェ「そこで真にリングにふさわしいのはどちらなのか・・・命をかけて証明してもらいます」

命をかけるって・・・！？

チェ「場所は深夜の並盛中学校。詳しくは追って説明いたします」

ツ「え！？並中でやんの！！？」

チェ「それでは明晩の１１時並盛中でお待ちしています」

チェ「さようなら」

バッ！！

チェルベッロ機関はその場から立ち去った。

ツ「ちょっ！まって、そんな・・・！」

カッ

ツ「ひいっ！」

バッ

・・・そして、ＸＡＮＸＡＳ率いるヴァリアーもツナを一睨みしたＸＡＮＸＡＳを追う形で去っていった。

獄「あいつら・・・勝手に話進めやがって！」

山「何かやばそうだな・・・」

了「うむ・・・」

楓「・・・サンキュー、バジル。もう大丈夫だ」

バ「あ、はい」

そ、そうだよ！

ツ「楓香、あれは・・・？」

楓「闇の守護者の性分ってのかな・・・今日はもう遅いし、後日説明するから今日は勘弁してくれ」

体調優れないしな、と言いつつ、伸ばしたロッドを杖に一人で立つ楓香を見て、並々ならぬ事情があることを察したオレたちは、楓香にそのことを追求することはできなかった。

リ「・・・とにかくお前ら、今日はもう帰れ。おそらく明日からガチンコ勝負が始まるだろうからな。気を揉みすぎて、勝てる試合に負けちまったら洒落になんねーぞ」

獄「・・・そうっスね」

山「だな」

了「うむ、その通りだ。極限帰って寝る！」

獄「ということで、１０代目、楓香さん、失礼します！」

山「じゃあまた明日な、ツナ、楓香」

み、みんな帰っちゃった・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ツ「バジル君も門外顧問だったんだ・・・」

バ「はい。親方様にはよくしてもらいました。素晴らしい日本文化

も知ることもできましたしね」
ツ「日本文化・・・ね・・・」

帰り道、ツナとバジルが話している後方で、普通に歩けるくらいに神経が回復したオレは、家光叔父さんの隣を歩いていた。

楓「やっぱり修行が足りねーな、オレも」
家「そう落ち込むな。今度から気をつければいいことだろ」
楓「そう・・・だな」
家「わかればよろしい」

ニッと笑う叔父さんに、オレはあの事について話をした。

楓「・・・家光。9代目にはここ最近、会ってないんだよな」
家「ああ・・・」
楓「9代目が心配だ。・・・オレの直感がそう警告している」
家「!?・・・まさか」

そのまさか・・・だよ。
前世の男の記憶からも読み取れることだったが、オレの超直感に近いこの能力でも、9代目の身に何かが起こっていると感じていた。

楓「急いでイタリア本部へ発ってくれ。こっちはこっちで何とかするから。・・・でも、バジルは連れていけそうにないなぁ」
家「ああ。バジルは残していくつもりだ。・・・ツナをよろしく頼む」
楓「任せとけっ♪」

――自宅にて・・・

リリス「・・・」
楓「そう怒んなって、リリス。あの場で手を貸してもらうことは出来なかったとはいえ・・・オレが悪かった、な？」
はぁ・・・と溜め息をつくリリス。
ちなみに今は猫耳、尻尾なしの人型モードである。
リ「もう原作介入するのに私を置いていくのは止めなさい。今回みたいなことが起こるかもしれないし・・・まあ、たしかにいきなり私が乱入するのは少し無理があったし、まだ対策がとれていない現段階じゃあ私が危ない目に会うかもしれないって思ったんでしょ、別に謝らなくていいわよ・・・」
楓「そ、そうか・・・よかった」
リ「まあ・・・その、心配してくれたんでしょ。一応例を言っとくわね・・・ありがと」
楓「え？あ・・・ああ」
はぁ・・・今日は長い1日だったよ・・・

標的２２　【門外顧問　来る！】（後書き）

楓香の二重人格は

‘闇’属性の波動を持つ人は人格に‘闇’を持つ

というところから来ているんです。

口調の違いにも、秘密があるんですよ、ってのはまた後々で。

標的２３　【謎解きの始動　来る！】

標的２３　【謎解きの始動　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

その夜、少し考え事があったオレは、奈々さんの夕飯をやんわりと断ると、自宅で夕飯（ちなみに自分で作った。どうやら‘夜代楓香’は一人暮らしってこともあり、料理もできるらしい）をすませ、ソファーでくつろいでいた。（というか、疲れてたからだらだらしていた。）

楓「‘レイ・カーベル’を名乗る男と、既に亡くなっているレイ・カーベルという研究者・・・偶然の一致か、あるいは・・・」

結局、‘レイ’本人はあの場に本人が現れなかった。

‘レイ’の動向が気になる・・・もしかしたらリング争奪戦に何らかの介入が見られるかもしれないが、笹川先輩の‘晴’の対決は大丈夫だろう。

あれ以上の小細工はないと思うし・・・

楓「なあリリス、何かいいアイデアないか？」

ちなみに今は室内なので人型モード。

リ「うーん、やっぱり当事者に相談した方がいいじゃない？」

楓「それは・・・そうだけど。はぁ・・・・」

不安いっぱいなオレは、思わず溜め息を吐いた。

楓「苦手なんだよな、ああいうの」
リ「苦手じゃない人はいないと思うよ・・・」
机に置かれた湯呑みに入ったお茶を啜りながら、オレはどうしたものかと考えていた。
楓「オレ面識ないし・・・ファーストコンタクトが大事っていうけど。読めない奴だし・・・なんとか会話が可能になっても、こんな話どう切り出せばいいんだよ」
リ「でも不安定要素は排除したいんでしょ？だったらその‘レイ’っていう男のことを調べるしかないじゃない」
楓「ったく・・・雲雀より難しい相手なんだよな、あいつは」
オレは残ったお茶をぐっと飲み干すと、風呂に入るためにソファーから立ち上がった。
楓「実体のつかめぬ幻影・・・とはよくいったものだな。六道骸は」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ
ツ「あれ・・・？父さんは？」
リ「さあな」
さっきまで楓香と後ろにいたはず・・・

バ「あ、親方様ならボンゴレ本部に向かわれましたよ。沢田殿に『すまん！帰ったら聞きたいこと教えてやるから、それまで頑張れ』と伝えて欲しいと言っておられました」
リ「！」
ツ「んなっ！」

そんなぁ！いろいろ聞きたいことあったのに！！

リ「おい、バジル。イタリア本部に向かう理由をあいつから聞いたか？」
バ「あ、はい。やはり9代目の様子を見に行くためらしいです」
リ「・・・」
ツ「え、何の話・・・？」

さっきから何の話かわかんないんですけどーーっ！

バ「あ、拙者はこっちですので、ここで」
リ「ああ」
ツ「あ、バジル君、また明日」

・・・9代目って、ボンゴレのボス・・・だったよな。でも様子がおかしいって・・・？

リ「おい、ツナ。さっさと帰るぞ」
ツ「あ、ちょっと待てって、リボーン！」

あ～も～っ！ごちゃごちゃしてわけわかんないよ～～っ！！

――翌日・朝

奈「ツナー、朝よー」

ツ「もう朝？って！」

ガバッ

ツ「うわぁああ！！ヴァリアーが来たぁ！！」

・・・あれ？

ツ「夢？」

あ、手に嵌めていた！

ツ「指輪がない・・・！」

ラ「ツナー、ごはんだって！」

ツ「ランボ・・・イーピン・・・と、父さんは？」

ラ「知らんもんね！」

え、知らない・・・

ツ「ま、まさか！」

指輪の話の全部が、なが～い夢だったんじゃ・・・

リ「んなわけない」

ツ「９代目の勅命、額に入ってるーーっ！！」（ガーン）

キラン

あ、

ツ「リングも指についてるしー！！！」

よく考えたら、さっき見たの左手だったな・・・リング着けてるの右手だよ・・・

リ「家光はイタリアに行っちまったが、バジルは情報収集に出たぞ」

ツ「そ、そんな・・・」

やっぱりあれは夢じゃなかったんだ・・・

ヴァリアーのＸＡＮＸＡＳとかいう人のあの目・・・！

ツ「こ、殺される・・・」（ガタガタ）

つーか！

ツ「あんなヤバイ相手なんて聞いてないよ！！ありゃ、普通から人間の目じゃなかったぞ！！」（ガタガタガタ）

リ「な。やべーよな」

ツ「な、じゃないだろ～！？そもそもなんでオレが後継者争いしなくちゃなんないんだよ！！？」

リ「・・・そんなの、オレが聞きてーぞ」

え？

リ「オレの知る9代目は、こんな血迷った戦いをさせる奴じゃねえ。おかしくなっちまったとしか考えられねーな」

ツ「な、なんだよそれ・・・」

リ「どーしちまったんだろうな」
ツ「え？」

リボーンにもわからないって・・・
ていうか！

ツ「だいたい父さんも父さんだよ！何であの人達にリングをあげなかったんだよ！！？ＸＡＮＸＡＳ達にあげればこんなことには・・・」

ならなかったはずじゃあ・・・！

リ「それはちげーぞ。遅かれ早かれお前達は殺されてた。ＸＡＮＸＡＳは抜かりない男だ」
ツ「そ、そんなあっ！」

殺されてたって・・・！

ツ「あーもー、なんでこんなことに～～！！もう無理！！修業なんて無駄だよ！やりたくないよ！！」
リ「そーか・・・学校には行けよ」
ツ「え・・・？」

あれ・・・？そ、それだけ？

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

楓「ふわぁ～っ」

朝・・・か。

結局、骸とのファーストコンタクト、どうするか思いつかなかったな・・・

楓「ま、なるようになる・・・か」

どうやらここ数年、家光叔父さんと共にいたため、思考が楽天的になってしまったらしい。

トトト・・・

楓「あ、リリス。おはよー」

リリス「おはよう。・・・楓香、寝癖すごいわよ」

楓「マジ？わー、面倒くせー」

リ「はぁ・・・いくら前世が男だからって、今は女でしょ。身嗜(みだしな)みはちゃんと整えなさい」

楓「はーい」

生返事をしたオレは洗面所で髪を解かし、洗顔をした。

楓「・・・はぁ。改めて女になってしまったことに気づかされる瞬間だな」

女の子はこういうことに時間がかかるのがよくわかった。

まあ、転生前の‘夜代楓香’もがさつだったけど、ある程度時間は割いていたようだ。

楓「ていうかリリス、料理できたんだ」

ダイニングに向かうと、すでに食卓に朝食が並べられていた。

リ「ま、まあね。これくらいできて当然よ。居候みたいなもんだし・・・早く目が覚めちゃって暇だっただけで、別にあんたのために作ったんじゃないんだからねっ」

フン、と自慢気に胸を反らした後、顔を背けるリリス。

こいつはわざとツンデレの座を狙っているのか？

はたまた素か・・・

楓「ま、まあ、サンキューな、リリス。いただきます」（もぐもぐ）

リ「・・・で、どうなのよ」

楓「う、美味いよ、リリス！」

リ「／／／そ、それはよかったわね・・・ちゃっちゃと食べちゃいなさいよっ／／／」

和食だったけど、味噌汁も魚の煮付けもめちゃくちゃ美味かった。

リリスにこんなスキルがあったなんて！

ただ、顔を赤らめている理由がわからないんだけど・・・

―楓「・・・よし、準備完了！」

転生&転校してからちょうど一週間・・・か。

楓「んでもって、今日は笹川先輩の晴の守護者対決の日、か・・・」

リ「で、結局六道骸には何時会いにいくの？」
楓「そうだよなぁ・・・霧の守護者対決までには会わねーとな」

その後は多分すぐには話ができないだろうな・・・その対決でかなり力を消耗するらしいし。

楓「ま、帰ってから考えるよ」
リ「はぁ・・・ま、私も考えといてあげるわ」
楓「サンキュー、リリス。んじゃ、行ってくるわ」

ガチャ

よーし、ツナの奴、多分落ち込んでいるだろうし、励ましにいくか。

それに・・・

楓「昨日の事も、何時かは話さねーとな・・・」

標的２３　【謎解きの始動　来る！】（後書き）

なななんと・・・！
１００，０００アクセス突破です！！
みなさん、ありがとうございます！！

標的２４　【重なる意思　来る！】

標的２４　【重なる意思　来る！】

ｓｉｄｅツナ

どうすればいいかわからなかったオレは、仕方なく通学路をとぼとぼ歩いていた。

ツ「まだ震えが止まらない・・・」

昨日のことを思い出すと、あの時の恐ろしさをも思い出してしまう。

ツ「逃げ出したいよ・・・逃げてみよっかな・・・」

？「ツナ！」

あ、

山「よ！」

ツ「や、山本っ！」

山「さすがに昨日は眠れなくてな。落ち着かねーから学校行こうと思ってさ」

やっぱり山本も、緊張してるんだ・・・

山「いやーーワクワクすんなーっ！！」

ツ「なっ！」

精神構造がちがーう！！！（ガーン）

山「ま、大丈夫だって」
ツ「え？」
山「最初はオレ、自分があのロン毛に勝つことしか考えてなくてさ。未だに状況もよくわかってねーしな」
オレもいまいちわかんないんですけど・・・
山「でも・・・みんなが揃った時、思ったんだ」
ツ「え？」
山「オレじゃなくて、オレ達の戦いだって・・・一人じゃねーんだぜ、ツナ。みんなで勝とーぜ」
ツ「や、山本・・・」
？「ったりめーだ！！あんな奴らにボンゴレをまかせられるか！」
ツ「獄寺君！！！」
獄「相手が誰だろうが蹴散らしてやりますよ！勝つのはオレ達です！まかせてください、１０代目！！」
？「よく言ったぜ、獄寺」
ツ「え・・・？ふ、楓香！！！」
楓「お前一人で背負い込む問題じゃねーんだぜ。オレ達なら勝てるって、な、獄寺、山本！」
山「だな！」
獄「もちろんっス！！」
ツ「あははは・・・」
またいつものパターンだ～～！！！
三人の根拠ない盛り上がりに巻き込まれていく～～っ・・・
山「そうだな、やっぱ野球と同じで団結力が大事だよな！」
獄「いちいち野球を持ち出すんじゃねー、この野球バカ！」

楓「まあまあ」

・・・でも、

三人にそう言われると、何とかなるような気がしてくるから不思議だよな。

あ・・・

手の震えが止まってる・・・

カサッ

リボーン「ニッ」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

side楓香

楓「そういえば獄寺、お前が持ってるそのダンボール箱、何だ？」

獄「あ、はい、これは・・・」

山「ん？獄寺、なんだこれ？紙ヒコーキ？」

獄「なっ！おいコラ、勝手に開けんなっ！」

ツ「こんなにたくさんの紙ヒコーキ、どーすんの？」

獄「修業に使うんスよ。実はまだ完成してなくて・・・今から山に行くんス」

ツ「（紙ヒコーキで修行してんのーー！！？）」

確か獄寺の家庭教師(かてきょー)はシャマルだったな。うまくいってんのかな・・・

獄「にしても、霧のリングの奴は何してんスかねー。こんな大事な時に、顔も見せずに」

山「どんな奴だろーな」

獄「アホ牛よりまともな奴であることを願うばかりだぜ・・・」

ツ「た、確かに・・・」

楓「あははは・・・」

ランボよりって・・・基準低いな・・・

つーか、その霧の奴に手間取ってんだけど・・・

山「ヒバリもいなかったよな。あいつと手合わせしてーんだけど・・・」

何気に末恐ろしいこと言うなぁ、山本・・・

恐いもの知らずというか何というか・・・

獄「あいつはきっと寝てるぜ。応接室で・・・」

その方がよっぽどいいだろうよ・・・

ツ「でも、ディーノさんと修行してるはずだけど」

楓「そういやあ、そうだったな・・・あの二人、大丈夫かな?」

ツ「た、確かに・・・」

獄「跳ね馬の奴、弱いっスからね。修業にならないんじゃないスか」

ツ「でもディーノさん、部下の前だとすごいし・・・」

楓「ま、ロマーリオがいるしな、大丈夫だろう」

ディーノの部下のロマーリオって、医学の知識もあるらしいしな。

獄「そういやあ、ずっと気になってたんですが、ヴァリアーの‘闇’の守護者って誰なんスか？」

ツ「あ、それオレも気になる」

山「昨日、あの中いたのか？」

獄「だがよ、あん時は変なロボットを入れて7人（？）しかいなかったですよね」

楓「ああ。実は昨日のあの中にはいなかった。というか、オレに戦いを仕掛けてきた‘レイ’が、向こうの‘闇’のリング保持者だ」

獄「なるほど・・・そういうことでしたか・・・」

楓「だが、正確には奴は現れなかった」

獄「え・・・どういうことスか？」

楓「奴は人型の戦闘用無人ロボット、モスカを三体、遠隔操作で動かして自分はホログラムでその場に現れたんだ」

山「ほろぐらむ？」

獄「立体映像のことだよ！そんなこともわかんねーのかよ」

山「ははは、わりぃ」

オレもわからなかったんですけど・・・

獄「ったく、野球バカが・・・」

楓「まあ、あいつはオレの足止めで動いていたんだろ？ま、これで辻褄があう」

ツ「辻褄？」

楓「この際、オレの力量も計ろうとしたってことさ」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

京「あの、ツナくん、楓香ちゃん・・・」

教室に入ってすぐ、京子ちゃんが辛辣な面もちで話しかけてきた。

ツ「？どうしたの？京子ちゃん」

楓「なんだ？」

京「最近お兄ちゃんがボクシング以外のことに夢中みたいで様子が変みたいなの・・・」

ツ「い〝っ！？」

楓「あっ（やばっ）」

それって、リング争奪戦のこと！？

ツ「え・・・えっと・・・（汗）」

楓「（言い訳考えてねーっ！）」

どーしよ・・・オレのせいだ・・・

オレがお兄さんを巻き込んだせいで・・・

ツ「京子ちゃん、ごめん！！」

楓「おい、ツナ、ちょっ」

ツ「実はお兄さんは・・・」

ガシッ

京子ちゃんに真実を話そうとした瞬間、誰かに肩を掴まれた。

？「相撲大会だ！！獄寺や山本たちと相撲勝負をするから特訓をしているだけだ」
京「お兄ちゃん！！」
す、相撲大会！？
楓「（や、やば・・・オレがもっといい言い訳考えとくんだった・・・）」（ゴーン・・・）
了「沢田も出場するんだぞ！な！沢田！！」
ツ「え…はあっ！？」
ちょっ、何の話～～っ！？
京「なんだ、そーだったの？」
京子ちゃん、理解しちゃってるーーっ！！
了「沢田！シコをふみにいくぞ！」
ツ「え！？ちょっと！」
楓「京子ちゃんの事はオレが言いくるめておくから心配するな」（ボソッ）
ツ「あ・・・うん」
オレはお兄さんに連れられて教室を出た。
―屋上
了「すまんな沢田・・・京子の奴ケンカがらみの事となると異常に心配するんでな」

ツ「え〝・・・？」

京子ちゃん・・・

了「この額のキズな・・・オレと京子がまだ小学生だった頃につけたキズだ」

ツ「・・・？」

了「近所にオレを敵対視する中学生がいてな・・・京子をつかってオレを呼び出し・・・オレを袋叩きにしたんだ・・・」

なっ！お兄さんの過去にそんなことが・・・

了「京子は未(いま)だ、それを自分のせいだと思ってるんだ・・・」

ツ「・・・そうだったんですか・・・それで」

了「なーに、どのみち京子に黙っていても問題はない！オレは勝つからな・・・まかせとけ！」

ツ「お兄さん・・・」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

黒川花「なーんか怪しくない？」

京「花・・・？」

楓「まあまあ、笹川先輩もボクシング以外に興味を持てたのはよかったじゃん。ずっとボクシング一筋だったんだろ？」

京「うん・・・そうだね！」

花「そういえば京子のお兄さん、ボクシングやってるとこしか見たことなかったなぁ・・・」

楓「やっぱそーなんだ・・・」

ホント、ボクシング一筋なんだ。

標的２５　【《晴戦》　来る！】

標的２５　【《晴戦》　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

楓「リリス、やっぱもう少し情報を集めてからにするよ」

リリス「うーん・・・まあ、それも一つの手ね」

とはいっても、霧の試合までの期間だけど。

楓「つーか、バジルの奴、家光叔父さんいねーから無理してねーだろうな・・・」

ツナが学校に行っている間は情報収集をしているらしい。午後からはツナの修業手伝っているしな。

楓「家光に任せとけって言っちゃったわけだし・・・」

とりあえず、守護者の修行状況で見に行くか♪

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―深夜１０：３０・並盛中校門

ツ「みんな！」
了「よお！」
山「オス」
獄「１０代目！」

すでに校門には、みんなが集まっていた。

ツ「遅くなってゴメン。ランボがかくれんぼ始めちゃって」
獄「１０代目を煩わせやがって、アホ牛が！！」
ツ「あれ・・・？楓香は？」
山「そーいやあ、いねーな」
獄「どうしたんスかね・・・昨日のこともあったことですし、何かあったんじゃ・・・」
了「うぬ・・・極限に心配だな。相変わらず霧の奴も姿を見せんしな」

でも試合が始まっちゃうよ・・・もし初戦が‘闇’のリング保持者対決だったら、どーしよー・・・

ツ「それにしても静かだね・・・並中でよかったんだよね・・・？」

間違ってたらどーしよー・・・
つーか、夜の学校恐(こえ)ーーっ！！

山「やつらまだ来てねーのかな」
チェ「とっくにスタンバイしてますよ」
みんな「！」

チェルベッロ！！

渡り廊下の屋根の上に！？

獄「けっ、でやがったな・・・」
チェ「厳正なる協議の結果、第一戦は・・・晴の守護者同士の対決に決りました」

晴ってことは・・・お兄さん！？

ザッ

ルッスーリア「あの坊やね」

ヴァリアーも！？

了「あいつか・・・っ」
チェ「では、あちらをご覧ください」

そこには鉄格子で周りを囲われた、ボクシングで使われるリングが設置されていた。
ってか、何これ～～！？

チェ「晴の守護者の勝負のために我々が用意した特設リングです」
チェ「今回は晴の守護者の特性を考慮したリング・・・といたしましたが、指輪（リング）争奪戦では各勝負ごとに特別な戦闘エリアを設置します」
ツ「んなーっ！！あんな大がかりのものを～～！！？」
ベルフェゴール「ケッコー金かかってんね」

しかも他のヴァリアーまでもういるし！

マーモン「でも勝負は見えてるんだ。無駄づかいだよ」
ル「ねぇ?ボスまだかしら?私の晴れ舞台だっていうのに~~」
マ「欠席みたいだね」
スクアーロ「あの男が他人の戦いに興味あるわきゃねぇ・・・」
ベ「レイの奴もいねーしな。ま、あいつもボスと同じで自分の試合にしか興味ねーだろーしな」

そーいえば、レイって人、あん時もいなかったんだよな・・・

チェ「それでは晴の守護者戦を開始します」
了「行ってくる!まかせとけ!」
ツ「お兄さん・・・」
山「なあツナ、円陣とか組まねーのか?」
獄「あぁ!?」
ツ「え?」
了「そいつは燃えるな!!1度やってみたかったんだ!!」(ガオオオ)
ツ「え゛ー!?」

なんで火がついちゃってんのーーっ!?

獄「バカヤロー!!そんなダッセーこと・・・っ」

オレと獄寺君は、山本とお兄さんに連れられ、円陣を組んだ。

了「了平ーッファイッ!!」
山「オー!!」
ツ「おー・・・」
獄「・・・・・」
了「よーし!極限力がみなぎってきたぞ!では!今度こそ行ってく

る！」
獄「（ったく、これだから体育会系は・・・）」
ツ「（自分で了平ファイって言ったよ・・・）」
そして、お兄さんはリングへと向かった。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ま、予定通り晴の守護者対決が一番だったな。
バジル「本当に皆さんと一緒じゃなくていいんですか、楓香殿」
ちなみに今はバジルと行動を共にしている。
楓「万一のための予防線だよ。ホントは近くにいた方がいいかもしれねーが・・・この状況だ」
バ「・・・はい。やはり並盛中学校は完全に９代目の手の者に封鎖されてますね」
楓「こうなると、広い視野で見てねーといけねーからな」
もし、その９代目の手の者がヴァリアー側ならば、何をしてくるか知ったもんじゃない。
バ「・・・そうですね」
楓「ま、今は向こう側にＸＡＮＸＡＳはいないらしいし、騒動を起こしてくるならばまだ先かもしれねーが、用心に越したことはねー

からな」

つーか家光叔父さんがいないから、途中で京子ちゃんを連れて来るのオレの役目じゃん。
タイミング逃さないようにしなきゃ・・・

楓「ま、バジルはまだ気楽に構えてくれていて構わねーぜ」
バ「あ・・・はい。でも何が起きても直ぐに対処出来るようにしなきゃ、やはり警戒は怠えられません」
楓「ホント、昔からバジルは真面目だな・・・息詰まらないか、そんなんで？」
バ「あ、はい。最近は親方様に教わった日本文化が息抜きになっておりますし・・・洗濯も楽しいですよ」

それってタライと洗濯板でやる奴でしょ？
やっぱ精神構造が違うよ・・・バジルも。

―――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

お兄さんとヴァリアーの守護者がリングに立つと、チェルベッロはリングの確認を行っていた。

チェ「リングは首から下げることとします。相手の一リング（指輪）を奪ったものが勝ちです」
ル「あらぁ？んまぁ」
了「！」

ルよく見りゃあなたいい肉体（からだ）してるじゃない！！好みだわぁ～」
了「なに！？」
獄「あいつ今・・・なんて言いました！？」
ツ「さ・・・さあ・・・？」

よくわかんなかったけど・・・何か気味が悪いことを言っていたことだけはわかった。

了「よくわからんが・・・オレは正々堂々たたかうだけだ」
ル「そのポーズはボクシングかしら？いけてないわねーん・・・私が立ち技最強のムエタイで遊んであげる」

むえたい？

リ「やはりヴァリアーも晴の守護者は格闘家か」
ツ「やはり・・・？」
リ「ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で砕き明るく照らす日輪となる。それが晴の守護者の使命だからな」

た、確かにお兄さんの熱さがあれば、なんとかなるかも・・・

カッ！！

！？

とか考えてたら、いきなり日輪のコロシアムが光り出した。

了「！！」
獄「まぶっ」
山「くっ」

ツ「何これ!?リングが光ってる!!!」

まぶしくて前が見えないっ!

チェ「この特設リングは晴の守護者の決戦にふさわしく設計されており、疑似太陽により照らしだされる仕組みになっております」

ツ「何それ!何も見えないよ!!」

リ「オレのサングラスを貸してやる」

んなっ、どっから出してきたんだよ、そのサングラス!?

了「(目が開けられぬ・・・これでは・・・っ)」

ドガッ

目を手で覆っているお兄さんに、ヴァリアーの守護者のパンチが懐に入った!?

了「ぐあっ!!」

ツ「ああ!!ヴァリアーの人はサングラスつけてるから自由に動けるんだ!!」

これじゃあ、一方的な攻撃じゃないか!!

山「やべーな・・・これじゃ勝負になんねーぞ・・・っ」

ツ「お兄さんにもサングラスを!!」

チェ「勝負中の守護者との接触は認められません。もし行えば失格とし、リングを没収します。」

ツ「そんな・・・!!」

フェアじゃないよ!!

獄「キタネーぞ!!」

ル「ん～～いいわ～～私の完璧な理想の肉体に近づいてきたわ～～」

チェ「それでは、晴の一リング（指輪）、ルッスーリアＶＳ笹川了平」

チェ「勝負開始!!」

そして不利（アンフェア）な状況のまま、戦いは始まった・・・

標的２５　【《晴戦》　来る！】（後書き）

ほとんど原作じゃん・・・・
気をつけよー。

標的２６　【兄の思い　来る！】

標的２６　【兄の思い　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

う・・・眩しすぎて見えません。
つーか、ぜってー総電気量ハンパねーよな・・・
どっから金が出るんだろ・・・

でも、マフィア規模だからね、常識じゃあ考えられないほどのことをやってのける人もいるからな。

あまり深く考えないでおこう・・・

それより、今一番大切なことはなーんだ？

楓「京子ちゃんを投入するタイミング、わかんねー・・・」
バ「？」

とりあえず、コロネロの姿が見えたら笹川家に向かおう。
そうすりゃあ原作同様、コロネロを探しにきたという理由で連れてこれるしな。
そして笹川先輩の最大の一撃が発動するってわけだ。

妹を思う気持ち・・・か。

笹川先輩、妹に弱いもんな。シスコン？

―――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ??

さて・・・

「私の研究結果がもうすぐ・・・クックックッ」

‘闇’の波動・・・私が長年かけてたどり着いた異質かつ最強の‘死ぬ気の炎’。

まさか達成したと思われた計画が、炎圧不足でオジャンになりかけるとは思いもよらなかった。

だが、向こうの‘闇’の守護者は実に面白い。

プロトタイプではあるが、そのモスカ三体を斬り倒すとは・・・

彼女の死ぬ気の炎の炎圧は機会がなくて測ることはできなかったが、まあそれもまだ時間があるし、戦闘データも少しはとれた。

あの研究対象は実に面白いですねぇ、クックックッ・・・

それまで十二分に利用させてもらいますよ・・・ＸＡＮＸＡＳ。

―――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

了「ぐ・・・っ！」
ツ「お兄さんっ！！」

どうしよう・・・視界を塞がれているお兄さんには敵の姿が確認できない・・・このままじゃヤバいよ！

了「く・・・っふざけるな！」

ドッ！！

お、お兄さんのパンチが・・・ルッスーリアに当たった！！

ツ「当たった！」
山「すごいパンチだ！」
ベ「ルッスーリア・・・本当に遊んでるね」
マ「当たったんじゃなくて当たりにいったんだよ」
ル「いじめちゃいや～～ん」

なっ、効いてない！？

了「なに・・・っ（だが今の感触・・・奴は空中・・・！）次は逃がさん！」

ガッ！！

今度はお兄さんのパンチがルッスーリアの膝（ひざ）に命中した。

あ、当たった！これで・・・

了「ぐあっ！！」

なっ！お兄さんの左腕から血が！？

ツ「あぁっ！」

ル「んっふふ・・・晴の守護者らしく逆境をはね返してみたのよん」

はね返した！？

ル「私の左足は鋼鉄が埋めこまれたメタル・ニーなのよ♪もうあなたの拳は使いものにならないわ」

そんな！！？

ツ「お兄さんの手が・・・っ」

リ「やべーのはそれだけじゃねーぞ。了平の奴ライトの熱にやられて脱水症状が始まってる」

ツ「そんな・・・このままじゃ・・・！」

その時・・・

？「立てコラ！！！」

青いおしゃぶりを身につけた赤ん坊が現れた。

って・・・！

ツ「コ・・・コロネロ！！」

そういえば、お兄さんの家庭教師はコロネロだったっけ！

ス「あのチビはアルコバレーノのコロネロだぜぇ」

レ「なぜ奴がここに？」

コ「そろそろ頃合だぜ・・・お前の本当の力を見せてやれ了平！！」

本当の力・・・？

了「コロネロ・・・師匠！！その言葉を待っていたぞ！！」

お兄さんはふたたび起き上がった！

ツ「お兄さんが起き上がった！！」

獄「っしゃ！」

山「でも、大丈夫なのか・・・？」

ル「立ってもいいことないわよ？あなたのパンチは通用しないんだから」

そ、そうだった・・・

了「確かに通用しなかった・・・左はな」

ル「？」

ツ「え・・・？」

左手？

リ「そーいやフゥ太たちを助けた時から・・・左しか撃ってねーな」

コ「そうだ。右は一度も撃ってねーぜコラ！」

ツ「な・・・なんで・・・？」

＜コ「一つは細胞を休めてベストな状態にもっていく目的があり・・・もう一つは奴が晴の守護者だからだ」

晴の守護者だから・・・？

了「この右拳は・・・圧倒的不利をはね返すためにある！！！」

そうか！

逆境を打ち砕き、明るく照らす日輪！

ル「んふ・・・あなたの温存しているパンチがどれほどのものか知らないけど・・・当たらないと意味ないのよ」

了「いくぞ…」

＜ベ「へぇー」

マ「なかなか雰囲気があるよ」

了「極限太陽（マキシマムキャノン）！！！」

お兄さんのパンチが・・・ルッスーリアに命中した！

ツ「や・・・やった！！」

しかし・・・

ル「ふ～～っ・・・クリーンヒットしたらちょっとやばかったかしら」

ルッスーリアはそれほどダメージを受けていない！？

ツ「そ、そんな・・・」

了「いいや・・・確かに当てたぞ」

ピシ・・・ピシ・・・

こ、この音は・・・！

パリーン！！パァンッ！！

照明にひびが入って・・・割れていった！

了「これでやっと貴様とイーブンの状態でやりあえそうだな・・・刮目！！！」

獄「芝生頭のやつ！！」

ツ「これで見える！」

リ「はなっから照明をねらってやがったんだな」

ル「目が開こうが閉じようがどうでもいいわ・・・それより信じがたいのは照明を割るほどの拳圧よ」

確かに・・・凄いよ、お兄さん！

べ「しっしし・・・ルッスーリア、奴の体をよく見てみなよ」

体？

ル「？・・・あれは・・・塩の結晶！？なるほど・・・脱水症状によって吹き出した汗の水分のみが照明の熱で蒸発し・・・残った塩分を散弾のように放ったってわけね」

了「気づいたところでもう遅いぞ！」

ル）「あっら～まだわからないの？私達とあなた達では実力に差がありすぎるのよ♪遊びにはなってもたたかいにはならないわ」

了「やってみなければ、わからん！」

コ「よく言ったぞ了平！それでこそオレの弟子だ！コラ！」

ツ「そんな・・・コロネロ!!いいのかよ!?」
コ「極限太陽(マキシマムキャノン)は全身の細胞エネルギーを放つ技だが、まだエネルギーが拳に伝わってない・・・勝機があるあとすればそこだ!もっと力を拳に凝縮させろ、コラ!」
了「おう!ゆくぞ極限!極限太陽(マキシマムキャノン)!!」

お兄さんはふたたびマキシマムキャノンを放った。

しかし・・・

グシャァッ!!

了「うわあああ!!」

お兄さんの左手同様、右手から大量に血が!!

ツ「ああ!そんな・・・っ!右手まで!!」
ル「んーーいい響きだったわ~」

コ「(細胞のエネルギー伝達率90%というところだぜ・・・今のトレーニング時間じゃこれが限界か・・・)」
ス「う〝お〝ぉい!!いつまで待たせんだぁ!!」
ル「んもうせっかちねぇ・・・言われなくても締めるわよ」
ツ「どっどーしよ~っ」

めちゃくちゃピンチじゃん!!

?「お兄ちゃん・・・?」

え・・・?今の声・・・!

ツ「!きょ・・・京子ちゃん!!?」

なんで!?なんで京子ちゃんが!!?

了「!」

ツ「なっなんでココに!?」

楓「コロネロを探してたからな、連れて来ちゃった♪」

ツ「楓香!?」

黒川「なんかやばいよ京子・・・!」

しかも黒川まで!?

ツ「え、ええーっ!?つかなんで京子ちゃんを!?ここ危険なんだよ!?」

こんな危険な場所に・・・!

楓「だーかーら、オレが連れて来たんじゃん。何かあったらオレが守るから安心しな」

そ、そうは言うけど・・・

その京子ちゃんはというと。

京「お兄ちゃんやめて・・・!!ケンカはしないって約束したのに!!」

獄「!?」

山「?」

お兄さんの戦い、普通のケンカだと思ってるー！！！

了「京子！！・・・ああ・・・たしかに額を割られた時・・・もうケンカはしないと約束した・・・」

京「！」

了「だがこうもいったはずだ・・・」

“それでもオレも男だ・・・どうしてもケンカをしなくちゃならない時が来るかもしれない・・・しかし、京子がそれほど泣くのならもう・・・オレは・・・”

了「負けんと…！！！」

お、お兄さんが！

ル「！」

ツ「た・・・立った・・・！」

そしてグッと拳をかまえる！

了「みさらせ！！！これが本当の」

ル「まったくしつこいわねぇ・・・これで終わりにしましょ」

左右のステップ後、ルッスーリアはメタル・ニーの飛び膝蹴りを放つ！

そしてお兄さんはタイミングを合わせ、右手の拳を放った！

了「極限太陽（マキシマムキャノン）っ！！！」

ピシ・・・ピシピシ・・・

ルッスーリアのメタル・ニーに徐々にひびが入り・・・そして！

バキャッ！！

ル「ぎゃあ！！！」

ドサッ

メタル・ニーが・・・砕かれた！！

ツ「お兄さんのパンチが・・・決まった！」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

よくやったぜ、笹川先輩！！

ル「う・・・うそよぉ！メタル・ニーが砕かれるなんて！！」

マ「勝負あったね。ルッスーリアにはもう、あのパンチを防ぐ術（すべ）がない」

べ「笑かすよな、あのヘンタイ」

さて・・・そんじゃあ、

楓「コロネロ、京子頼む」
コ「言われなくてもわかってるぜ、コラ」
これから起こることは・・・女子にはきついかもな。

コ「右拳が光って見えたぜ。よくやったな了平。さあ帰るぜ京子！」
京「待って！まだお兄ちゃんが・・・！」
コ「もう終わりだ。オレはねむいぜ、コラ」
黒川「ちょっと、何なのこの赤ん坊！？」

コロネロを追いかけ、京子ちゃんと黒川さんが離れていくのを確認し、人心地をついた。

了「緊張感のあるいい戦いだったぞ・・・さあリングを渡してくれ」
ル「い・・・いやよ！わたしはヴァリアーよっ、片足だって勝ってみせるわ！」
ツ「すごい執念だ・・・！」
リ「ちげーぞ」
楓「ああ・・・」

笹川先輩にメタル・ニーを砕かれたルッスーリアは、もう戦えない。
そして・・・

ル「さあいくわよ！！続けるわよ！！早く！！」
了「！？？・・・何を焦(あせ)っているのだ・・・？」

どんっ！！

突然その場に大きな音が響く。
そして・・・

ドギャッ！！
グシャァッ

ルッスーリアは背後から攻撃を受け、その場に倒れこんだ。
ルッスーリアをやったのは・・・ヴァリアー側にいる巨大なロボット、ゴーラ・モスカだった。

マ「やる時はやる・・・さすがボス補佐だね、ゴーラ・モスカ」
獄「あいつ・・・味方を・・・っ」
＜山「どーなってやがる・・・」
＜リ「弱者は消す・・・これがヴァリアーが常に最強の部隊である所以（ゆえん）の1つだ」
楓「ルッスーリアはそれに恐怖して動揺してたんだ・・・」
ツ「弱者は・・・消す・・・？そんな・・・」

お前達には苦だろうな・・・

了「おい！しっかりしろ！」
チェ「近づかないでください」
了「なにいっ」
チェ「たった今ルッスーリアは戦闘不能とみなされました」
チェ「よって晴のリング争奪戦は笹川了平の勝利です」
了「・・・」

笹川先輩もキツいだろーな・・・

チェ「今宵の勝負はこれで終わりますが、今回より決戦後に次回の対戦カードを発表します。明晩の対戦は・・・雷の守護者同士の対決です」

ツ「雷ってランボじゃん!!こいつ戦えんの!?」

明日は、意外と物語の鍵を握っていた、１０年バズーカの登場か。

チェ「それでは明晩お会いしましょう」

ゴーラ・モスカによってルッスーリアが抱えられ、笹川先輩にリングを弾き渡す。

そして、ヴァリアーとチェルベッロは去っていった。

京「ツナ君!!楓香ちゃん!!」

な、しまった京子ちゃん戻ってきちゃった!!

京「ツナ君、ホントのこと教えて?お兄ちゃん、何やってるの?」

ツ「え?いや・・・あの、えと・・・」

京「ツナ君!!」

やばっ!!えっと、何だったっけ・・・。

了「そ、それはだな・・・」

山・獄・リ「相撲大会だぜ（だぞ）！」

そう、相撲大会だ!

獄「リングでやるハイブリッド相撲大会やってんだ」

山「密かにブームなんだぜ。な、楓香?」

楓「そうなんだぜ、今日もなかなかいい試合だったな、リボーン」
リ「ああ」
京「そ、それじゃあホントに・・・」
了「相撲大会だと言ったろう、帰るぞ京子！」
京「うん！」

な、なんとか誤魔化せたみたい・・・

了「沢田、こいつは渡しておくぞ。２つのカケラを１つにするんだな・・・」
ツ「あ・・・これが本物の」
楓「ああ。晴のボンゴレリングだ。このリングケースに入れるんだ、ツナ」
ツ「う、うん・・・一つ、埋まった！」
獄「よっしゃ先勝！幸先(さいさき)いいっスよ！」
山「このままいこーぜ！！」
了「そのとおりだ！いくぞ沢田！！」
ツ「えっ、あ、ああ・・・」
獄「んじゃ、失礼します！」
山「じゃーな」

・・・こうして晴の守護者対決は幕を閉じた。

標的２６　【兄の思い　来る！】（後書き）

沢田綱吉　１０代目候補側

晴

ヴァリアー側

なし

標的２７　【雷戦前夜　来る！】

標的２７　【雷戦前夜　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツ「あーっ、父さん何考えてんだよ！ランボをこの戦いに参加させるなんて！！」

当の本人は何も知らないで寝ちゃってるし！！

リ「仕方ねーだろ。うざいアホ牛だが、そいつが雷の守護者の使命をを体現しているのは確かなんだ」

ツ「そんなこと言ったって・・・つーか、棄権だよ！ランボなんか戦わせられるわけないだろ？」

楓「それはできねーんだ、ツナ。ランボの相手、レヴィって奴は一度ターゲットを決めたら、女だろうが子供だろうが何だろうが、完膚無きまでにぶちのめす奴だ、棄権なんか通用しないと思うぜ」

あの厳つい男がレヴィ・・・って、

ツ「見た目まんまだーー！！！」

リ「それにおまえはおまえで、まだ修業が終わってねーことを忘れんなよ」

ツ「ああっ！！そーだった！！」

リ「明日から再開だ。第三段階はとうとうお待ちかねのあの弾だからな」

ツ「あの弾って・・・？」

リ「（スピーッ）」
ツ「寝んなよ！！」
楓「あはははは・・・」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―沢田家

ラ「ガハハハ！ランボさん、明日が楽しみなんだもんね！」
ツ「だから楽しくないんだって・・・」

今の現状を理解しないランボに呆れるツナ。

いや、無理だって、ランボだもん。

奈々「あ、楓香ちゃん、手伝ってくれる？」
楓「あ、はい。今行きます！」

こういうのんびりした時間って、大切だよな。

リリス『ふ～う～か～！！！』

やばっ！リリスからの念話！
忘れてたし、めちゃくちゃ怒ってるし！

楓『ごめん！後で飯作るから！』
リ『全く・・・私に黒曜のこと探らせといて・・・酷くない！』
楓『今度、ラ・ナミモリーヌのケーキ買ってやるから、カンニンして』
リ『もう・・・仕方ないわね』

何とか機嫌を取り戻してくれたようだ。

楓『で、どうだった、黒曜の様子は？』
リ『あのへそ出し女はホントに麦チョコしか食べてなかったわよ。どーゆー味覚してるのだか・・・』
楓『マ、マジなんだ・・・』

麦チョコｏｎｌｙとか・・・どんな食生活送ってんだよ。

楓『早めに彼女に会った方がよさそうだな・・・』

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

その後、すぐに楓香が帰っちゃったよ・・・
オレ、明日のことを楓香に相談したかったのに・・・

―夜中

不安でたまらないや・・・風呂にでも入ろ。

そして風呂に入り浴槽に浸かっていた。

ツ「あ〝あ〝あ〝あ〝！！！」（ブクブク）

ざばっ

ツ「ぶはっ、もぉ～いやだ、たまんないよ！！」

また修業始まるみたいだし！！
毎日あんな恐ろしい勝負！！

ざばっ

風呂に入ればマシになるかと思ってたけど、逆に考えこんじゃったよ・・・
もう出よ・・・

頭をごしごし拭きながら、今度は雷戦のことを考えていた。

ツ「ランボのボスも何でＯＫ（オーケー）するかな～・・・ランボ五歳だぞど～すんの？」

絶対殺されちゃうって！！

ツ「！」

二階に上がろうと廊下を歩くと、台所から灯りがついていた。

ツ「こんな時間に・・・・」

チビたちじゃないし・・・母さん？

ツ「誰？」

って・・・なっ！

１０年後ランボ「お久しぶりです、若きボンゴレ」

ツ「大人ランボ！！な、何でここに！？」

１０ラ「眠れずに牛乳を飲んでたら、いつの間にか１０年後に・・・」

ツ「なっ！」

１０ラ「おそらく寝相の悪かったオレが、寝ながら１０年バズーカを爆発させたんでしょう」

ツ「冷静な自己分析だーっ！」

しかし・・・

見る度に１０年の月日の長さを感じるよなぁ～。

せめて明日戦うのが、バカじゃなくてこのランボだったら・・・

ん？

ツ「って、できるじゃん！！１０年バズーカ！！」

１０ラ「？」

ツ「そーだよ！大人ランボが戦えばいいんだ！！」

これでなんとかいけそうだ！！

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―翌日

早い時間に目が覚めたオレは、朝食をとりながら窓の外を眺めていた。

楓「雨・・・か」

リリス「今日の天気、雨だけじゃなくて、雷雲も発生するらしいわよ」

まさに絶好の‘雷の守護者対決’日よりってか。

スクアーロと共にバジルが並盛町に現れてからちょうど一週間か・・・

楓「今日は日曜日だし・・・雨降ってるけど、せっかくだから午前中、商店街ぶらつかないか？」

リ「えっ？で、でも、修業は・・・？」

楓「こんな雨ん中やんのか？パスパス。ま、息抜きも必要だぜ。それにケーキ、買いに行くんだろ？」

つーか、この前食いそびれたしっ！

リ「うっ、ま、そうね」

ってことで、雨の日の商店街へゴー！

―商店街　ラ・ナミモリーヌ店内

楓「あ、ハルちゃん？」
ハ「はひ？楓香さん！」

ラ・ナミモリーヌで、ショーウインドーに陳列されたケーキを眺めるハルの姿がそこにあった。

楓「いやぁ、ここのケーキが美味しいって聞いて来たんだけど、ハルちゃんも買いに？」
ハ「あ、はい、ハルもここのお店のケーキが大好きで、特にこのモンブランがお気に入りなんですよ！時々、京子ちゃんとも来るんですよ」
楓「そっか。じゃあ、ハルちゃんに選んでもらおうかな。どれがいいかわかんないし」
ハ「はひっ？ハルが・・・ですか？」
楓「うん。今日ウチに遊びに来てる奴がいてさ、この前ここのケーキを買ってくるって約束しちゃったんだけど、やっぱ美味しいケーキ買ってやりたいわけよ。普段、世話になってる奴だし」

幻術での修業とか、情報収集とか・・・まだ一週間も共にしてないけど、けっこう手伝ってもらってるからな。

ハ「はひー・・・、じゃあ、ハルのとっておきのケーキを選びますよ！いいですか」
楓「サンキュー♪」

―商店街

楓「それにしても、よく降るね」
ハ「そうですね・・・今日は一日中降るみたいですよ」

ハルにケーキを選んでもらい、傘を差しながらオレたちは帰路を歩いていた。

楓「夜には雷も発生するらしいし・・・もっと天気が悪くなるかもね」
ハ「はひ～、洗濯物が乾かなくて大変です～」

まあ、オレは一人暮らしだし、1日ぐらいなら大丈夫だけどね。

ハ「そういえば、京子ちゃんから聞きましたよ、ツナさん達がお相撲大会してるって。ハルも応援にいってもいいですか？」
楓「なっ！」

そーいえば、リング争奪戦のこと、相撲大会ってことにしてるんだっけ！？
つか、そんな危ないところにハルを連れて行けないし！
どーしよー・・・

楓「ま、まあ、少人数だし、不定期だから何時やるかわからないから・・・たぶん無理だと思う・・・」
ハ「はひ～・・・そーなんですか。残念です～」

そ、そんなに落ち込まなくても！

楓「ま、まあ、終わったらお祝いなり何なりしてあげたらいいと思うよ。ツナ、喜ぶと思うし」
ハ「はひっ！そーですね、わかりました！お祝いの時は、ハル、頑張ります！」

どうやら復活してくれたようだ。
よかった～。

ハ「あ、楓香さん、ハルはこっちなので」
楓「あ、うん、ありがとう。またね」
ハ「はい！」

そして、オレたちは十字路で手を振って別れた。

標的２７　【雷戦前夜　来る！】（後書き）

ハルが出てきた！・・・ということで、

次回あたりから、ある企画を始動します！

って、単に氷雨がやりたかっただけなんですけど・・・

ハルの・・・（1）

ハルのハルハルインタビュー～（1）‘闇’の守護者　編～

ハル「皆さん、はじめまして！三浦　ハルです！」

リボーン「ちゃおっス。リボーンだぞ。突然だが、これに似たコーナーがあったような気がする、って気がするかもしれねぇが、これは別物だ。おそらく、お前たちが知ってるこれとよく似た企画は、別の平行世界に存在するもので、これとはかんけーねぇぞ」

ハ「はひ～、ハルには難しすぎてわかりませ～ん」

リ「わかんなくてあたりめぇだ。オレもサッパリだからな」

ツナ「わかってて言ったんじゃなかったのーーっ！！」（ゴーン）

リ「うるせぇぞ、ダメツナ。勝手に出てくんじゃねぇ」

ゴスッ

ツ「いでっ！い、いきなり蹴るなよー！」

リ「せっかくゲストで呼んでやったんだぞ。ありがたく思え」

ツ「ちぇっ」

リ「ってことで、今回は別平行世界との違いについてだぞ」

ツ「オレへのインタビューはなしーっ！？」（ガーン）

ハ「ツ・・・ツナさんは次回からも準レギュラーとハルの未来の夫として、このコーナーに出てもらいますから安心してください！」

ツ「ちょっ、何言ってんだよ、ハル！変なことも一緒に言うなよ！」

ハ「はひっ！は、恥ずかしいこと言わせないでくださいよ～」

ツ「自分で勝手に言ったんじゃん！」

リ「うるせぇぞ、ダメツナのくせに」

ゴスッ

リ「いでっ！だからいちいち蹴るなよ！！」

リ「細けぇことは気にすんな」

ハ「リボーンちゃん、落ち着いてください！こ、今回は‘別平行世界との違い’について、でしたよね」

リ「ああ。ちなみにオレのお気に入りのコスプレは‘掛け軸’だぞ」

ツ「（古風な点と服じゃない点が一緒だーーっ！！）」

ハ「はひ～。古風を感じますね。ハルのお気に入りは、八叉の大蛇です♪」

ツ「なおさら質悪いよ！つーかわけわかんないし！！」

リ「つまり、本編に差し障りのない程度で、ところどころが違ってくるんだぞ。ま、ツナのテストは相変わらず0点だがな」

ツ「んなっ！無いと思ったら、お前が持ってたのかよ！！」

リ「ニッ。これでネッチョリ、グッチョリしぼってやれるな」

ツ「ネッチョリもグッチョリもやだーーっ！」

ダダダダッ

女子マネリボーン「待ちなさい、ツナ。許さないわよ♪」

ピーッ
スィーッ

・・・いでっ、いてっ・・・

ハ「・・・で、デンジャラスな模様なので、今回はこれでおしまいです！不定期ですけど、今後もよろしくお願いします！
それでは、ハルのハルハルインタビュー、シーユー、アゲインですぅ！」

ハルの・・・（1）（後書き）

やっちゃった！
でも後悔はしていませんっ！！

標的２８　【ボンゴレの静寂　来る！】

標的２８　【ボンゴレの静寂　来る！】

ｓｉｄｅツナ

あ〜、どーしよーっ！！

大人ランボなら何とかなると思ったのに・・・――

――１０ラ「イヤですよ、たとえ子供のオレが死ななかったとしても、１０年後のこのオレが戦って死ぬかもしれないことです」

ツ「そーでしたー！！」（ガーン）

１０ラ「ってことで、子供のオレにもくれぐれも１０年バズーカは使わないように言ってくれますか」

ツ「なっ！」

このヘタレ戦わない気だーー！！（ガゴーン）――

――結局、父さんが配った雷のハーフボンゴレリングと一緒に大人ランボに渡したっていうボロボロの角も不吉だからって返されちゃったし・・・

今日の修業も、リボーンに身が入ってないっていわれて進まなかったし・・・

ツ「結局なんも解決してねー！！あー、どうしよーーっ！！何とか棄権出来ないかなーっ・・・」
ラ「長ぐつ～～ぐっつぐつ～～」

当の本人はめっちゃ浮かれて雨ん中はしゃいでるし・・・（ガーン）

ツ「楓香も少し遅れるっていってたし・・・」
山「心配すんなって、いざとなったら俺達が割って入っから」
獄「ご心配にはおよびません！１０代目！！」
ツ「みんな・・・で、でも・・・」

やっぱ、心配だよ・・・

了「極限にまかせておけ！」
チェ「そのような行為は失格とし阻止します」
ツ「！！」
チェ「そして助けようとした者助けられた者2人分のリングが相手の物となります」

そ、そんなぁ・・・

獄「あいつら・・・ふざけやがって」

チェ「あちらをご覧ください。あれが今宵の戦闘フィールドです」

あちらって・・・！

ツ「屋上！？」

ピカッ！！

雷の光に照らしだされたのは・・・大きな柱？って、

ツ「何あれ～～！！？」

―――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ家光

―イタリア　ボンゴレ総本部付近

家「・・・」

静かすぎる・・・やはり楓香の直感通り、９代目の身に・・・

？「親方様」

ん？

家「オレガノか」

彼女は門外顧問チームの一人でオレの秘書もしている信頼できる仲間（メン）（バー）だ。

オ「我々のアジトをヴァリアーにかぎつけられました」

家「皆は？」

オ「６名とも無事に脱出し、ここに向かっています」

・・・無事なら問題ない。

家「ならいい。遅かれ早かれ・・・だ、気にするな」
オ「親方様・・・やはり決行なさるのですか？」
家「ああ。楓香の直感はよく当たるな・・・」
オ「楓香ちゃん・・・が？」
家「９代目の身に何か不吉なことが起こっている・・・と」
オ「！！？まさか・・・！！」
家「この様子じゃあ、外れてそうにないな・・・明らかにおかしい」
オ「・・・」

それに・・・――

――楓「家光叔父さん・・・いや、親方様」
家「ん？なんだいきなり改まって。今までその呼び名で呼ばなかったじゃないか」
楓「はっきりいって、オレもイタリアに戻って、９代目の様子を確認しに行きたいんだ」
家「・・・」
楓「ツナの力になってやりたいから守護者としてここにいるのはわかっている・・・でも」

握り拳を解いて、キッと真剣な目でオレを見る楓香。

楓「９代目の身に何かあったら亡くなった父さん、母さんに顔向けできねぇ・・・９代目を頼む」
家「・・・任せておけ」――

――楓香の願いだ。９代目を必ず・・・

家「これより我々は、ボンゴレ総本部に乗り込む。目的は９代目の救出」

オ「はい」

家「万が一、それが叶わない場合は・・・」

いや・・・、とオレはそれに続く言葉を飲み込んだ。

家「９代目を無事を確認し、必ず救出するぞ」

オ「はい！」

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

バシャッ

水たまりを避けつつ、オレは猫モードのリリスを連れて並盛中へとひた走っていた。

楓「やっば、始まってるか！？」

リリス「もう、言ったのに！」

楓「スマン。でも今日は見ておかないとな、なんてったって２０年後のランボの登場だ、見とかなきゃ損だぜ」

リ「そういえば、昨日でこっちが勝って一勝目をあげたんだったわよね。でもリングは８つ、偶数だから四勝四敗とかになったら引き分けになるじゃない」

楓「その点は、あのチェルベッロが考えてたぜ。大空のリングを保持した方が勝ちとなるらしい。まあ、大空のリング一つで２つ分になるってことなんだ」
リ「え・・・？ってことは・・・！」
楓「そーだ」

今日の試合でランボを助けるためにツナが乱入すれば、原作通りの勝敗をあげても・・・

楓「闇戦の勝敗がカギを握ってるってことなんだよ」
リ「・・・」

しかも、相手は原作には出ない、得体の知れない男、レイ・カーベルだ。

リ「もしこの前のモスカが数体もいたら・・・」
楓「ああ・・・キツいかもしんねーな・・・」

オレは一抹の不安を抱(いだ)きながら、先を急いだ。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―並盛中・屋上

階段を上がって屋上に出ると・・・

ツ「お・・・屋上が！！」

獄「んだこりゃ！？」

六角形の角と中心に柱、それと導線がクモの巣みたいに張り巡らされていた。

チェ「今宵の戦闘エリアは雷の守護者戦んにふさわしい避雷針のエリア・・」

チェ「名付けて、レットゥリコサーキット」

そして次の瞬間、

ドォンッ！！ババババッ！！

避雷針を伝って落ちた雷が床の導線に広がる・・・！！

ツ「床が・・・光った！！」

チェ「このエレットゥリコサーキットの床には特殊な導体がはり巡らされていて、避雷針に落ちた電流が何倍にも増幅されかけ巡る仕組みになっているのです」

ツ「そんな！」

立ってるだけで焦げ死んじゃうよ！

獄「あいつら今日が雷雨だと知っててこのカードを組んだな・・・？」

ラ「ランボさんあれやるー！！」

ツ「遊園地のアトラクションか何かだと思ってるー！！」（ガーン）

最悪だ・・・

ツ「ちょ！ランボ待てって！ああ・・・また角落として・・・」
獄「１０代目をわずらわせんじゃねぇ！」

そう言うと獄寺君はランボの角を拾い上げた。

キュキュキュ～

ツ「？」
獄「これで届けてもらえるぜ」

見ると角にはペンで“アホ牛”と書かれていた。

アホって書いた！！

ラ「ぐぴゃ！！」

獄「つーか、奴ら来てんだろうなあ」
チェ「対戦相手は２時間前からお待ちです」
了「なに！？」
ツ「２時間も…！？」

しかも、ヴァリアーの他のメンバーも来てる・・・

べ「またレヴィ、２時間も前から？信じらんない」
マ「君とちがって不器用だからね・・・」
ス「う〝おぉい！！とっとと終わらせろぉ！！」

不器用って・・・

了「よし沢田！いつものいくぞ」

ツ「え！？」

獄「なっ！？」

ま、まさか・・・

とか思っていると晴戦と同じように円陣を組まされた。

了「ランボーファイッ！！！」

山「オーーッ！！！」

ツ「おー・・・」

獄「・・・」

ちょー恥ずかしいーっ！！

ラ「ガハハハ、オモロイ！もう一回！」

ツ「やんないよ！！」

二回もやりたくないよ！

山「でも大丈夫なのか？ほんとにこいつ・・・」

ラ「わかってるわ、ボケ！」

獄「この勝負、心の底からわかってなさそーっスよね・・・」

確かに・・・

ちゃんと言い聞かせなきゃ・・・

ツ「ランボ！ちゃんと聞いて・・・嫌なら行かなくていいんだぞ」

了「！」
獄「１０代目・・・」
ツ「父さんがどんなつもりで決めたか知らないけど・・・お前みたいなチビが戦うのは、やっぱおかしいよ・・・お前だってまだ死にたくないだろ？」
ラ「あららのら、ツナ知らないの？ランボさんは無敵だから死なないよ」
ツ「なあ！？」
全然理解してねーーっ！！
ラ「じゃーねー」
ツ「あ！１０年バズーカ撃っちゃダメだからな！大人ランボに止められてるんだ！あと一応これ持ってけ」
オレは昨日大人ランボから渡された角を出した。せめて何かの役に立てば・・・
ラ「ばっちい！いらね！」
ツ「いいから！」
オレはランボに無理やりでも持たせた。
ラ「じゃいくねー！」
なんで元気なの・・・？
すると今度はチェルベッロの一人に話しかけていた。

ラ「ねーねーあれどーやって遊ぶの？」

まだアトラクションだと思ってるー！！（ガーン・・・）

ツ「ランボ・・・」

チェ「それでは雷のリング、レヴィ・ア・タンＶＳランボ、勝負開始！！」

標的２９【《雷戦》　来る！】

標的２９【《雷戦》　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ラ「どーやって遊ぶのかなぁ」

んなっ！ランボの奴、なんで導体の上に乗ってんのーーっ！！

獄「アホ牛！！そこに乗るな！感電死するぞ！！」

ビカァッ！！

その時、雷が導体を伝って落ちた。

バッ

レヴィは電流をかわすが、一方のランボは・・・

ババババババッ

ラ「ぐぴゃあぁ！！」

まともに電撃をうけた・・・！

ツ「ランボぉ！！」

そ、そんな・・・

チェ「・・・念のため生存の確認を」
レ「その必要はない・・・焼けた・・・」
ラ「う・・・っうわあああ!!いだいぃ〜!!」
レ「!?」
ツ「ぶ・・・無事だ!!生きてる!!」

で、でも、なんで!?

リ「幼少のころから繰り返し雷撃を受けることで稀に起こる体質変異、雷撃皮膚(エレットゥリコ・クオイオ)だぞ」
ツ「クオイオ…?」
リ「電気を通しやすい皮膚のことだ。雷撃をくらっても脳内や内臓へのダメージがほとんどないんだぞ」
ツ「ランボすげー!!」
リ「雷撃となるだけでなくファミリーへのダメージを一手に引き受け消し去る避雷針となる…それが雷の守護者の使命だ。アホ牛の体はその使命を体現してるんだ」
レ「・・・」

ガッ!

ラ「ぴゃっ」
ツ「ランボ!!」

でも、レヴィの攻撃は防げないよ!

ラ「うわあぁあ!!」

ドガンッ！

なっ！１０年バズーカを・・・！！

１０年後ランボ「やれやれ・・・ギョウザが最後の晩餐（ばんさん）になるとは・・・」

ツ「大人ランボ！！」

ごめん、大人ランボ・・・

ス「う〝お〝おい！！部外者がいるぜぇ！！」

チェ「いいえ。彼は１０年バズーカにより召喚された雷のリング保持者です。よって勝負を続行します」

しょ、召喚って・・・

ツ「ランボ！！ごめん！やっぱり子供の君じゃダメだったんだ！！」

１０ラ「謝らないでください。こうなる気はしてたんです・・・」

するとレヴィがキッとランボを睨んだ。

恐（こ）えーーっ！！

レ「オレより目立つな」

１０ラ「お前がヴァリアーか・・・それは無理な相談だ。サンダーセット！」

あ、あれは・・・！

１０ラ「くらいな！エレットゥリコ・コルナータ！！！」

でもあれって、接近しなきゃ効かないんじゃ・・・

ドシュッ！！

すると、レヴィは傘のような武器を展開した。

ババババッ

１０ラ「ぐあぁあ！！」

傘に貯められた電撃が、ランボに直撃した。

ツ「ランボ！！」

駄目だ、大人ランボでも勝てないなんて！

１０ラ「が・・・ま・・・うわあああ！！」

ドガンッ！！

んなっ、また１０年バズーカを・・・！！

獄「更に１０年バズーカを！？」

バチバチ・・・

マ「？・・・なんだ、この威圧感は・・・」

もくもくと煙りがあがり、大きな人影が見えた。

ツ「まさか・・・２０年後のランボ！！！」

バタンッ

？「いやぁ、遅くなった、すまんすまん」

ツ「楓香！」

お、遅いよ・・・ランボが１０年バズーカを使わなかったら、どうなってたか・・・

楓「なんとか間に合ったみたいだな」

バチバチッ

ツ「あっ」

そうだ、あの人は・・・！！

２０年後ランボ「やれやれ・・・ずいぶん久しぶりに過去へ来たようだ・・・」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

やっぱ、２０年後のランボって、なんかかっこいいよな・・・

そんなことを考えていると、２０年後のランボはオレ達の方を見た。

２０ラ「あなた達にまた会えるとは・・・懐かしい・・・なんて懐かしい面々・・・」

だがレヴィはお構いなしに攻撃を仕掛ける。

レ「消えろ！！」

電気傘（バラボラ）８つを展開し、その中心にいるランボに雷を落とした。

バババッ

レヴィはランボを攻撃した。

雷の中、佇む男・・・

ツ「ランボ！！」

レ「奴は焦げ死んだ・・・ボスにも見せたかった・・・」

２０ラ「やれやれ・・・どこへ行く？」

そう言うと、ランボは腕を地面に突き立てる。

そして、

２０ラ「エレットゥリコ・リバース！！」

レ「なにっ！！？」

２０ラ「見な」

腕からの電流が一気に地面を伝わり、放出された。

レ「なにぃ！！」

ツ「す、すごい・・・これが２０年後のランボ！！」

楓「ああ、予想以上だな」

了「圧勝しているぞ！！」

獄「この勝負もらったぜ！！」

オレも２０年後ランボの圧倒的な力に高揚していた。

だが、何か忘れているような・・・

２０ラ「あなたたちに喜ばれると・・・照れる」

レ「なんとしてもお前は消す！」

２０ラ「やれやれ・・・！あれは・・・」

ランボは子供の自分が落としていった角を拾い上げ、レヴィの投げた開かれていない鋭利な電気傘の先端を角ではじいた。

ガッ！ズザァ・・・ッ

２０ラ「こんなところにあったとは・・・今の攻撃でニスがはがれまた顔を出したか・・・」

そう、あれは・・・

２０ラ「幼少の頃獄寺氏に書かれた屈辱的な文字が・・・」

その角には“アホ牛”という言葉が書かれていた。

獄「！さっきオレが書いた・・・」

ツ「どーゆーこと・・・？」

楓「あれは、家光叔父さんが２０年後のランボを呼ぶヒントとして１０年後のランボに渡した‘２０年後のランボの角’だそうだ」

獄「なるほど・・・けど１０年後のランボは気づかなかったんですね。結果的には１０年バズーカを使いやがりましたが・・・」

ランボがすぐに１０年バズーカを使おうとする行動が、１０年だっても直ってなかったのは良かった・・・

そして、２０年後ランボは、一番の技をレヴィに向けた。

レ「次は逃がさん！」

２０ラ「逃げるつもりはないさ・・・サンダーセット！エレットゥリコ・コルナータ！！！」

レ「その技はみきった・・・致命的な弱点があるからな」

ツ「弱点？」

リ「リーチが短けーんだ。角に当たらねーと効果ねーからな」

ツ「そういえば！ヤバイよ！！」

２０ラ「昔の話さ」

すると、ランボの角からの電撃が・・・！

ババババッ！！

レ「！！」

ツ「電撃が伸びた！？」

バチィィィッ！！

レ「ぬあっ！！ぐあ〝あ〝あ〝！！！」

ランボの技はレヴィに直撃した。

２０ラ「年季が違う・・・出直してこい」

圧倒的な力の差だった。でも・・・

レ「そんな・・・バカな！こ、こんなところで・・・！！ボ・・・ス・・・もう一度オレを誉めてくれ・・・！ボス！！」

そういえば・・・

この試合、ランボが負けたんだ！！！

まずい！！！

楓「ランボ！！１０年バズーカの効力がもうすぐ切れる！！！」

２０ラ「ん？楓香さん、なにを・・・」

ボフンッ！！

し、しまったぁ！！！

バババババッ

ラ「ぐぴゃあぁあ！！」
レ「！！」
ツ「ああ！！！」

２０年後のランボが・・・もとの５歳のランボに！！！

獄「ア、アホ牛！！」
ツ「ランボ！まだ２０年後の姿になって５分もたってないのに！」
楓「一発目から考えて、５分間なんだ！！」
リ「ああ、そうだろうな」

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「そんな・・・！ランボが・・・動かない！！」
レ「やはり・・・雷の守護者にふさわしいのはオレだ・・・」
ツ「ああっ危ない！！」

ガスッ

ランボっ！！！

了「いかん！！」
山「あんにゃろ！！」
リ「まて。手を出せば失格になるぞ」

で、でも・・・！！

了「く・・・っ」
獄「くそっ」

ガッガッガッ！！

レヴィは容赦なくランボを蹴りつける。

ツ「ランボ！！・・・くっ・・・」
リ「どこへいくんだ？失格になるぞ」
ツ「わかってる・・・でもオレ・・・ランボを守らなきゃ！！」
リ「・・・」
楓「・・・」

仲間を・・・守らなきゃ！！！

レ「とどめだ」
山「！！」
マ「えぐい死体が見れそうだね」
ス「う〝おぉい！！とっとと焼けぇ！！」
獄「やめろぉっ！！」

レ「死ね」

そして・・・

グワシャーンッッ！！！

次の瞬間、柱が一斉にランボの前・・・中心に倒れ、レヴィの攻撃を防いだ。

チェ「！！！」

獄「避雷針が！！」

べ「風・・・じゃなそうだ」

マ「ああ・・・あの曲がり方は、熱だね」

獄「熱が避雷針の細く弱い所を溶かして曲げてやがる・・・」

チェ「エレットゥリコ・サーキット全体が熱を帯びている。熱伝導・・・？」

チェ「！サーキットの外に！」

レ「！」

リ・楓「「ニッ」」

そして・・・

？「目の前で大事な仲間を失ったら・・・」

額に灯る炎、そしてグローブ・・・

超死ぬ気ツナ「死んでも死にきれねぇ」

超死ぬ気モードのボンゴレ１０代目候補、沢田綱吉がそこにいた。

標的２９【《雷戦》　来る！】（後書き）

話が進展（原作そのままという意味で）していないので、もう一話拾ってきマス。

標的３０　【雷戦の終焉　来る！】

標的３０　【雷戦の終焉　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

ベル「！」
スクアーロ・マーモン「！！」
レヴィ「！！！」
了平「なっ」
山本「なんだ・・・？」

皆が驚き見つめる先には、超死ぬ気モードのツナがいた。

凄まじい炎エネルギー・・・今の超死ぬ気モードのツナは昔に比べて段違いにレベルが上がってる・・・

了「だ、誰だ？」
獄「まさか・・・」
山「ツナ・・・？」

見違えたな・・・

楓「修業の成果だな」
リ「ニッ。ああ、昔とは比べもんになんねーな」
獄「ああ・・・間違いねえ・・・あれは１０代目だ！！」
山「だな、ありゃあツナだ」
了「うむ。あんなことができるのは、沢田しかいまい」
マ「・・・なるほど。エレットゥリコ・サーキットの導体は金属で

できていて、熱を伝達する働きがある。その熱が避雷針のくびれ部分にまで伝わり、溶解したため重量に耐えきれなくなり倒れたんだ」

ベ「でも聞いてなかったぜ、スクアーロ。あんなバカでかい炎を出せる奴がいるなんて」

ス「・・・（どーなってんだ、あのガキ・・・一週間前とはまるで別人だ、何をしやがった・・・」

スクアーロの奴、動揺してるな。

超ツナ「・・・いくら大事だっていわれても・・・ボンゴレリングだとか・・・時期ボスの座だとか・・・そんなもののために、オレは戦えない」

皆「！！」

シュウウゥゥ

ツ「でも・・・友達が・・・仲間が傷つくのは、イヤなんだ！！」

山・獄・了・楓「♪」

？「ほざくな」

ハッ

ドクンッ

しまっ・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

今の声！

とっさに身構える・・・が、

？「ハハッ・・・また出て来てくれて嬉しいよ・・・」

そしてオレの目の前には・・・

？「ここがあんたの死に場所だよ、ＸＡＮＸＡＳ」

白い髪の少女・・・容姿が変わった楓香がいた。

Ｘ「くっ・・・てめぇ！」

〈楓〉「ふふっ」

なっ！

リ「やべえぞ、ツナ。さっさと止めねえと」

コオオオ

！ＸＡＮＸＡＳの右手から炎が・・・！！

Ｘ「くらえ！」

リ「（ちっ、あの炎はやべえ）楓香！」

だが・・・

〈楓〉「ふふっ、そんな軟弱な炎で、ワタシに勝てるとおもって？」

グォォオオオ

皆「！！！」

楓香の手からも・・・黒い炎が！！

X「かっ消えろ！！」

〈楓〉「それ、効かないから」

あっ・・・

バシュッ

皆「！！」

ス「ウソ・・・だろ・・・」

ベ「ボスの炎を・・・」

マ「相殺した！？」

X「ぐっ！！この・・・」

チェ「お、お待ち下さい、ＸＡＮＸＡＳ様！！これ以上は！！」

X「黙れ！」

ガスッ

チェ「ぐっ・・・あ・・・」

バサッ

X「ククク・・・」

〈楓〉「？？」

X「ぷはーーーっ！！」

！！わ、笑った・・・！？（ぞくっ）

リ「！！」

〈楓〉「！！」

ヴァリアー「！！」

ベ「こいつはレアだ」

マ「いつから見てないかな、ボスの笑顔」

レ「8年ぶりだ」

X「レイ、てめーの欲しがってた研究対象（おもちゃ）だ。一割の炎圧とはいえ、オレの炎を相殺しやがった」

あ、あれで一割・・・！！

レイ「ククク・・・やはりそーでしたかぁ」

ツナ達「！！」

〈楓〉「あんたがレイか・・・」

ぬっと突然現れた、白衣の男。

こいつからも、ただならぬ威圧感を感じる。

レイ「はじめましてぇ、私がレイ・カーベル、闇の守護者対決で貴女と戦う男です。・・・闇戦が楽しみです、最高の喜劇をお見せできそうですぅ、ボス」
X「ふっ・・・楽しみだ」

リ「（あのＸＡＮＸＡＳが興味を持つとは・・・あのレイって奴は何者だ？）」
X「おい、そこのガキ。・・・てめーが一時とはいえ、９代目が貴様を選んだわけが、やっとわかったぞ」
ツ「！！」
X「その腐った戯れ言といい、軟弱な炎といい・・・おまえとあの老いぼれはよく似ている」
ツ「え！？」
X「ぷはーーっ！こいつも喜劇が生まれそうだな！！」

な・・・何がおかしいんだ・・・？

X「・・・おい、チェルベッロ」
チェ「はっ。これ以上の争いは、夜代氏の失格と見做します」
ツ「なっ！！？」
〈楓〉「ちっ・・・わかったわよ」

そう言うと、楓香（？）はＸＡＮＸＡＳから離れ、さっきまでいたところまで下がった。

チェ「・・・続けます。今回の守護者対決は、沢田氏の妨害により、レヴィ・ア・タンの勝利とし・・・」
チェ「雷のリング、ならびに大空のリングは、ヴァリアー側の物となります」

ツ「え!!?」
獄「アホ牛だけでなく、１０代目のリングまで!?」
リ「・・・」
バ「話が違う!!失格ではなかったはずだ!!沢田殿はフィールドに入っていなかった!!」
チェ「フィールドの破損は勝負への妨害と見なし、失格とするのは当然です」
ツ「そ、そんな・・・っ!!」

大空のリングまで・・・！

了「くっ」
獄「き、汚ねえぞっ!!」

オレから大空のリングを取ったチェルベッロは、ＸＡＮＸＡＳに渡した。

Ｘ「これがここにあるのは当然のことだ。オレ以外にボンゴレのボスが考えられるか」
獄「くそっ!」

ＸＡＮＸＡＳにボンゴレリングが・・・

Ｘ「他のリングなどどーでも・・・いや、闇のリングは欲しいところだ」
リ「（・・・何故、奴は大空のリングだけでなく、闇のリングまで興味をもってんだ?それに、あの白衣の男は・・・）」
Ｘ「まあそれよりも、てめえらなんか、オレの命（めい）ボンゴレの名の下、いつでも殺せる」
ツナ達「!!」

ツ「そん・・・な！！」
〈楓〉「待ちなよ」

すると、今まで黙っていた楓香（？）が一歩前に出た。

〈楓〉「そんな戯れ言、ワタシを倒してからにしなよ」
X「うっせえ。てめえらカスなど、今すぐに殺してもいいが・・・てめえらを殺るのはリング争奪戦で本当の絶望を味わわせてからだ・・・あの老いぼれのようにな」
〈楓〉「！！」
ツ「！？」
リ「！」
〈楓〉「あんた・・・やっぱり！！」
リ「何かしやがったのか・・・9代目に」
バ「！！貴様！9代目に何を！！」
X「それを調べるのがお前らの仕事だろ？門外顧問！」
リ「（やはり、楓香の言う通り・・・家光を早めにイタリアに返して正解だったな）」
ツ「どーゆーこと・・・？ＸＡＮＸＡＳは何をしたんだ？」

わけわかんないよ・・・！

X「喜べモドキども。残りの勝負も全て行い、万が一お前らが勝ち越すようなことがあれば・・・ボンゴレリングも、ボスの地位も全てくれてやる」
ツ「！！」
〈楓〉「その言葉に嘘、偽りはないな、ＸＡＮＸＡＳ」
X「ああ・・・だが負けたら・・・お前らの大切なもんはすべて消える・・・」
ツ「た、大切なもの、す、全て・・・！？」

X「せいぜい見せてみろ。あの老いぼれが惚れ込んだ力を」

・・・・・・

X「女・・・いいぞ」

チェ「はい、では明晩のリング争奪戦の対戦カードを発表します」

チェ「明日の対戦は・・・

嵐の守護者対決です」

標的３０　【雷戦の終焉　来る！】（後書き）

闇戦どーしよー・・・

標的３１　【大空と闇の決断　来る！】

標的３１　【大空と闇の決断　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

山「次は獄寺か」
了「お前なら大丈夫だな、まかせたぞ！」
獄「あ、ああ・・・」

やべぇ・・・もうかよ・・・っ
まだ技が完成してねーってのに。

X「ベルか・・・悪くねぇ」
レヴィ「ボス。雷のリングだ、納めてくれ」
X「いらねえ。次に醜態をさらしてみろ」
レヴィ「死にます」

あいつら・・・

ツ「ランボ！！！」（ダッ）

いや、今はこっちが優勢だ！

ツ「ランボ！！！」
山「大丈夫か！？」
獄「アホ牛！！しっかりしろ！！」

くそっ、あのやろー、好き放題しやがって！！

ツ「どーしよー！！」
獄「くっ、この時間で開いてる病院つったら・・・」
山「・・・ディーノさんの所ならどうだ？」
！！
獄「ナイス、野球バカ！！急ぎましょう、１０代目！！」
ツ「う、うん！！」
とにかく、急がねえと手遅れになっちまう！！

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ツ「でも、楓香が・・・」
楓「オレは大丈夫だ、ツナ。早くランボを！」
ツ「！元に戻ったの！？」
山「大丈夫なのか！？」
了「極限に心配だぞ！」
楓「ああ。リボーンもいるし大丈夫だから、急げ！」
ツ「う、うん」
獄「すみません、楓香さん。お先に失礼します！」
そう言って、ランボを抱えた獄寺にツナ達が続き、屋上の階段の扉から出ていった。

楓「だっ・・・」
リ「大丈夫か、楓香」
あいつらを安心させるためになんとか立っていたが・・・さすがに限界、その場に崩れ落ちた。
楓「ちょっと休憩すれば・・・」
リ「また無茶しやがって・・・」
楓「あはは・・・どうもＸＡＮＸＡＳを見ると、体が反応するんだ・・・」
復讐という名の・・・殺意が。
リ「まあ、そればかりは精神の問題だ。じっくり向き合うしかねえ・・・それよりも・・・」
楓「・・・ああ。９代目のことだろう？」
リ「ああ。結果的には早くに家光をイタリアへ向かわせたのはよかったが、あの時点・・・奴らが、ＸＡＮＸＡＳが初めて顔を出したあの日に向かわせたのは、何故なのか引っかかってな・・・」
楓「直感・・・だと言ったら？」
リ「直感？まさか、ツナと同じ、ボンゴレのボスが持つ、‘超直感（ブラッド・オブ・ボンゴレ）’がお前にもある・・・と？」
楓「いや、ツナ達ボンゴレのボスが持つ‘超直感’ほど万能じゃない。言ってみれば、‘予知’の方がどちらかというと能力の説明がつく」
リ「‘予知’・・・か」
楓「ん？あまり驚いてねーな」
リ「いや、思い当たる節があってな・・・」
思い当たる節？

リ「いや・・・何でもねえ。それより楓香、動けるか？」
楓「え？あ、ああ・・・」
リ「ならあいつらを追いかけるぞ」
そう言うと、リボーンは足早に屋上を出ていった。
楓「ふう・・・こりゃあ、計画を前倒しした方がよさそうだ」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ランボの眠る病室で、オレは母さんにランボのことを頼むことにした。

ツ「母さん・・・お願いだ。ランボを頼む・・・」
奈「ちょっと、ツナ・・・？どうしてランボ君がこんなケガを・・・」
ツ「ごめん、今は訳を言えないんだ・・・」
奈「言えないって・・・あなた達・・・？」
ツ「ごめん！！！」
奈「！！ツナ・・・！」

まだ、どーしても話すわけにはいかないんだ・・・

ツ「みんな・・・」

そう言い残して、オレたちは病室を後にした・・・

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

やらなきゃならないこと・・・

ストッ

先に行ってしまったリボーンを追いかけていると、猫型モードのリリスがヒョイと肩に乗った。

リリス『まったく・・・人使い・・・いや、猫使いが荒いんだから・・・』

楓『サンキュー、リリス。んで、どうだった?』

ちなみに、会話は念話みたいなもので行(おこな)っている。

リリス『うーん・・・ハッキリとはいえないけど、おそらく、原作と同じで9代目は・・・』

楓『そうか・・・そっちも何とかしなきゃなんねーな』

実は雷戦の間、ゴーラ・モスカの様子を探りに行かせていたのだ。

原作を知ってるオレだからわかるが・・・

楓『ゴーラ・モスカの動力源に、9代目の死ぬ気の炎が使われていることはわかっている・・・でも』

リリス『そうね・・・9代目を安全に捕獲するのには情報が足りないわ』

もしものことを考えると、今すぐ動くことはできない。
今のタイミングで行動を起こせば、リング争奪戦がどうなるかわからないし、万が一、あのゴーラ・モスカに助け出せば爆発する起爆装置がついていないとも限らない。

楓『しかも、まだ問題があるんだ・・・』
リリス『そうね・・・ヴァリアー側の闇の守護者、レイの発言が・・・ね』
楓『あらゆる事態に備えなければならないな・・・』
リリス『ええ。保険は必要だものね』

まずは・・・

楓「おっ、ツナ!・・・ランボの様子は・・・?」

ちょうど病院から出て来るツナ達を見つけた。

ツ「楓香!・・・うん、ロマーリオさんが命に別状はないって・・・でも、数日は絶対安静らしいです」
楓「そうか・・・」

ｓｉｄｅツナ

病院前で、リボーン、楓香と合流した。
まだ調子が悪そーだけど・・・
ランボも、大ケガをしたけど・・・無事を確認できてよかった。

・・・でも。

ツ「どうしよう・・・オレのリングも奪(と)られて、一気に不利になっちゃった・・・」
了「結局、ランボも意識を失ったままだしな・・・」
リボーン「しかも、これでＸＡＮＸＡＳが本気になったぞ。猛攻をしかけてくるだろーな」

ホント、どうしよう・・・

獄「１勝２敗・・・」
楓「いや、１勝３敗だ。大空のリングは２つ分になる・・・闇のリングも加えて、リングは８つ、偶数で引き分けという結果もでちまうからな・・・大空のリングが２つ分として調整しているらしい。晴戦のとき、そう聞いた」
獄「ぐっ・・・なら、次に負けたらもう後がねえのか・・・」

そ、そんな・・・大空のリングが２つ分だなんて。

ツ「オレ・・・本当にあの時、勝負に割って入ってよかったのかな・・・」
山「ツナ・・・」
獄「１０代目！」

リボーン「よかったぞ」

・・・え？

リボーン「部下を見捨てるようなボスは、ボンゴレにはいらねーんだ」

ツ「リボーン・・・」

楓「ふっ・・・」

確かに、ＸＡＮＸＡＳ・・・あいつは自分の守護者を見捨てていた。

・・・あんな奴には負けたくない！！

ツ「リボーン・・・オレ、もっと強くなりたい！」

リボーン「（ニッ）・・・第三段階は厳しいぞ」

ツ「うん」

仲間を守るためにも・・・ＸＡＮＸＡＳに勝つためにも、

オレは強くなる！！

標的３２　【修業第三段階　来る！】

標的３２　【修業第三段階　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

獄「くそっ・・・」

カンッ・・・カラ・・・カーン・・・

道端に落ちていた空き缶をおもいっきり蹴っ飛ばした。

１０代目たちと別れ、オレは１人、明日の勝負のことを考え、焦っていた。

獄「もうあまり時間がねーってのに、何チンタラやってんだよ、オレは！！」

１０代目が苦境に立たされてるって時に！

悪い流れをオレが変えなきゃなんねー時に！！

グシャ

ん？

？「うぃ～い」

ガッガッ

獄「酔っ払い！！？」

なんだよあのオッサン！！空き缶潰したりして！

・・・って、あいつは！

シャマル「明日に決まったらしーな、勝負（バトル）」

獄「シャマル！な、てめー、冷やかしにきたのかよ！」

シャマル「バーカ。オレの貴重な7日間を無駄にする気はねーんだよ。仕上げるぞ」

獄「！？」

仕上げるって・・・！

シャマル「うっ・・・飲みすぎた・・・」

獄「なっ！大丈夫なのかよ！！」（ガーン）

―――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―翌日

楓「よし・・・行くとするか」

リリス「お気をつけて～」

楓「ああ」

今日はリリスには留守番をしてもらった。
まあ、今日はオレの修業じゃないからな。

ガチャッ

楓「さ、みっちり鍛えてやるからな、ツナ」

―――――――――――――――――――

―中山外科病院

ガチャ

京子・ハル「「おばさん!!」」

奈々がランボの眠るベッドの傍らで看病していると、京子、ハルが病室に入ってきた。

奈々「まあ。京子ちゃんハルちゃん、来てくれたの?」
ハル「ランボちゃんは!?」
奈々「峠を越えて安定してる後は意識が戻るのを待つだけよ」

ベッドで眠る痛々しい傷を負ったランボを見て、2人は哀れんだ。

京子「ランボ君、こんなに・・・!?」
ハル「何があったんですか・・・」
奈々「昨日の雷が傘に落ちたらしいの・・・それから坂を転げ落ちちゃったみたいで・・・」

ハル「ランボちゃん・・・」
京子「そんな・・・かわいそう」

そして奈々は数日前に机に置いてあった、家光の書き置きを懐から取り出す。

ゴソッ

―黙ってツナの力になってやってくれ　父より―

奈々「あの人、何やってんのかしら！？帰ってきたらこってり絞ってやるわ！」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―並盛山　修業場

オレはいつものように、バジル君と修業場に来ていた。

リボーン「じゃあ、修業の第三段階を始めるぞ。いいか、ツナ」
ツ「うん！」
リ「第三段階は、死ぬ気のコントロールの最終形、“死ぬ気の零（ゼロ）地点突破”だ」
ツ「・・・ぜろちてん・・・？」

バ「いよいよ、初代しかできなかったという、幻の奥義に進むんですね」

初代の奥義・・・

ツ「それができれば、ヴァリアーより強く・・・ＸＡＮＸＡＳにかてるかな・・・？」

リ「さーな。あいつは強ぇからな」

バ「沢田殿・・・」

そう・・・だよな。

・・・でも、

ツ「やるよ！可能性があるならなんだって！！」

リ「ニッ。そうか」

バ「頑張りましょう、沢田殿！」

リ「まず、超モードでの死ぬ気のコントロールをものにするために、スパーリングをするぞ。二人とも、超モードになるんだ」

バ「はい」

ツ「！？二人とも・・・？」

バ「親方様にムリ言って、拙者も許可をもらおうとした・・・のですが」

？「今日はオレが相手だ」

え？

リ「おっ、やっぱりお前がツナの修業相手すんのか、楓香」

んなっ！楓香・・・！？

ツ「ちょっ、楓香相手にスパーリングすんのー！！？」
楓「そーいうこと。それより、例の物は？」
リ「ああ、こいつだ」
ヒョイとリボーンが楓香に投げたのは・・・
ツ「黒い・・・手袋？」
楓「サンキュー、リボーン」
指出しの手袋で、生地は薄そうだ。
リ「言われた通り、レオンの体内で生成された糸で織った特別製だぞ。ツナのXグローブ（イクス）と同じで、死ぬ気の炎を灯すことができるからな。・・・だが、何に使うんだ」
楓「・・・ああ。昨日、オレが白髪になって容姿が変わって別人みたいになったの、あるだろ？」
リ「ああ。確か、お前はそれを‘２ｅｄ（セカンド）モード’って名付けていたんだよな」
ツ「セカンド・・・モード？」
楓「オレが闇のリングの適性者である所以だ。２ｅｄ（セカンド）モードはオレの闇の部分・・・つまり、負の感情の塊なんだ」
ツ「負の感情・・・？」
バ「沢田殿。人がもつ四つの感情、喜怒哀楽の怒や哀のことです」
リ「初代の闇の守護者からもいえるが、負の感情の塊である闇の死ぬ気の炎は、圧倒的な威力をもっていると言われている。そのことから、初代ボンゴレのボスは初代闇の守護者を常に側に置くことによって負の感情が暴走するのを防ぎ、時として、その力でファミリーの危機を救った」
楓「まあオレの場合、家光叔父さんのおかげでなんとかなったんだ

よな」

ツ「え・・・父さん・・・？」

バ「はい、確か親方様は、楓香殿の負の感情を核とした人格と通常とを分割することによって、暴走を防ぐことが出来たんですよね」

楓「ああ。まっ、この話は今日はここまでってことでいいか。さっさと修業始めねーとな」

ツ「あ・・・うん、そーだね」

そーだよ、修業しなきゃ！

楓「話が脱線してしまったが、リボーンにこの手袋を頼んだのには、理由がある。見てな」

そう言うと、楓香は指出し手袋を嵌める。

そして・・・

楓「ぐっ・・・・」

ボウッ

ツ「なっ！」

リ「！！」

手から・・・黒い炎が！！

楓「オレもこの炎の色は好きじゃないが・・・オレは手から直接死ぬ気の炎を灯すことができる。だが、それは２ｅｄ（セカンド）モードだけだ」

リ「・・・なる程な。その手袋を媒体としているのか」

ツ「えーと・・・よく分かんないんだけど・・・」

楓「あー、要するにだ、ツナのＸ（イクス）グローブもレオンから生まれたも

ので、超（ハイパー）モードなら死ぬ気の炎を灯すことができるけど、死ぬ気弾での死ぬ気モードじゃ炎を灯すことが出来ないだろ?それと同じで、普段のオレでは炎圧が足りないんだ。その補助をこの手袋にしてもらってるわけ」

ツ「で、でも、そんな薄い生地じゃあ、オレとのスパーリングでケガしちゃうよ!?」

オレのＸ（イクス）グローブは、パンチやチョップでの攻撃に特化した形で、わりと分厚い構造になっている。でも、あの手袋は薄すぎるし、指出しだから指は保護されてないし・・・

楓「ああ。それなら心配ねえ。なにも拳で戦うなんぞ言ってねーからな」

そう言うと、楓香は肩にかけていたカバンから、何かを取り出す・・・って!!

ツ「んなっ!そ、それって・・・!!」

楓「鎌はスパーリングには向いてねーからな。鎌の次に、こいつがしっくりくるんだよなあ・・・あ、でもあいつみたいに仕込みは入れてないぞ」

細長い金属棒から横に持ち手が付いていて、それが２つ。

リ「なる程、トンファーか」

ヒバリさんみたいで恐（こえ）ぇーっ!!

そして楓香はトンファーを構え、その武器に炎を灯した。

楓「ぐっ・・・（思ったよりきついな・・・昨日の２ｅｄ（セカンド）モードが

原因か・・・）」
ツ「だ、大丈夫なの！？」

なんかつらそうなんだけど・・・

楓「大丈夫。ヴァリアーに、ＸＡＮＸＡＳに勝つには、お前が一番強くなんなきゃならねーんだ」
リ「・・・確かに、ＸＡＮＸＡＳのあの炎は“憤怒の炎”という極めて珍しい光球だ、並大抵の炎圧じゃあ負けちまう」
楓「で、この第三段階で零地点突破の他に習得してもらうのは、さらなる死ぬ気の持続力と炎圧の底上げだ」
リ「・・・確かに、オレもそれは考えた。だが、リング争奪戦までに零地点突破を含めてまで、全てを習得するのには難があるぞ」
楓「まあ、少し難があるかもしれねえが、炎圧の底上げはともかく、死ぬ気の持続力は上げねえとこの戦い、負けるかもしれないからな」
リ「・・・それはお前の直感からか？」
楓「ああ」

直感？何のことだろう・・・

楓「とにかく、オレもあいつらにボンゴレを渡したくないんだ、これくらい平気だ」
ツ「楓香・・・」

楓香も覚悟をもってやってくれんだ・・・なら！

ツ「わかった！」
リ「ニッ」

ズガンッ

ボウッ

超ツナ「楓香、恩にきる」

標的３２　【修業第三段階　来る！】（後書き）

バジルの出番を横取りしちゃった♪

標的３３　【嵐の試練　来る！】

標的３３　【嵐の試練　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

―並盛中　保健室

・・・ふぅ。ようやくできたぜ。
ちっくしょ～・・・関心のシャマルは寝てやがるしよぉ！

獄「・・・シャマル起きろ！できたぜ」
シャマル「ん？・・・あーあ、紙っぺら全部、紙ヒコーキにしちまって・・・何やってんだ、お前？」

な！！

獄「何って、修業に決まってんだろ！！新技仕上げるっつったじゃねーか！！」
シャ「んー？あー、もうヒコーキはいーんだ」
獄「なぁ～～！！？」
シャ「仕上げるっつったのはなぁ、そいつの成果がもう十分でてるからなのさ」

！！

獄「ま、待てよ・・・！！でもまだ一度もヒコーキ撃ち落としてねーぞ！」
シャ「わっかんねー奴だな～っ、だ～か～ら！こっから先はド根性

から世界じゃねえ。ナンパと同じなのよ」
獄「!?」

こいつ・・・またワケのわかんねーことを・・・

シャ「お前、ナンパする時、一番大事なのは何だか知ってっか?」
獄「はぁ!?そ、そりゃあ・・・」

い、言いたかぁねえが・・・

獄「・・・エロさ?」
シャ「(やっぱ中坊だ、こいつ・・・)」(ガクッ)

なーっ!ナンパカンケーねーだろ!!

シャ「ったく、しょーがねーなー。オラ、ここだ、ここ」

そう言って、シャマルは頭を指差す。

シャ「もてねー奴はあーだこーだいうが、結局頭が足んねーのさ。頭をちょいとひねってタネと仕掛けを作りゃー、落ちねー女なんて地球に一人もいねぇ!!」

い、言い切った・・・

シャ「わかったらほら、また紙やるから考えろ。もーヒコーキ作んなよ」

この紙、メモ用紙だったのかよ!(ガーン)

獄「つーか、いつまでも回りくどいやり方してねーで、教えてくれてもいいだろうが！！」
シャ「ほ～らきた、きたきた」

！？

シャ「たとえ答えを知っててもしねーぜ、オレはそーゆーやり方」
獄「な、なんでだよ」
シャ「あのなぁ、隼人。お前のいる世界はな、自分で自分の生き延びる術（すべ）を見つけられる奴しか、生き残れねーんだ」
獄「！」

シャ「オレのダチも素直で聞き分けのいいバカは皆しんだ・・・生き残ったのは、腹に一物もったきかん気の大バカばっかりだ」

そう言いつつ、シャマルはカプセルに入った蚊をはじき出す。

シャ「足んねー頭絞りだせ。オレは意味もなく7日間もヒコーキ飛ばしてたんじゃねーぜ」
獄「・・・・・・」
シャ「第一、おめーが弱（よ）えーと、教えたオレがかっこつかねーんだ」
獄「な！結局自分の為じゃねーか！？」（ガーン）

このすけこましが！

シャ「いいか？技ができねー限り、勝負には行かせねーからな」
獄「ふざけんなよ！何だそれ！！」

この大事な時に・・・！！

シャ「このまま行きゃ、ムダ死にするだけだ」
獄「！！？」
シャ「お前の相手のベルフェゴールって奴な、あのヴァリアーの中でも一番の天才なんだとよ」
獄「天才・・・だと？」
シャ「まあ自称って疑うかもしれねーが、奴の経歴がそう言わせてんだよ」
獄「！？」
シャ「ま、とにかく」

そう言いながら、シャマルはまた寝そべる。

シャ「考えろ。この7日間でお前は何を学んだ？」
獄「はぁ？そんなもんわかんねーよ！つーか、、一発も当たってねーのになに考えろっつーんだよ！？」
シャ「はぁ～・・・ったく、最後のヒントをやるよ。後は自分で考えな」
獄「なっ！」
シャ「逆に考えてみろ。どうやったら当たるかじゃなく、なぜ当たんねーのかをな」
獄「！！」

どうやったら当たるかじゃなく、なぜ当たらないのか・・・

獄「ヒコーキに当たんねーのは・・・不規則な運動をしているから・・・か？」
シャ「ふっ・・・」

標的がズレれば、投げたボムは当たんねえ・・・

オレはメモ用紙に計算式を書き込んだ。

ちっくしょーっ・・・どうやっても、単純にボムの量を増やすしかねえ・・・だが、それじゃ弾切れするリスクが発生する・・・

シャ「ｚｚｚ・・・」

こんやろー、マジで寝てやがる。

プーン

ん？

その音は、シャマルの蚊の飛ぶ音だった。

獄「なっ！蚊をしまってから寝ろよ！！」

ったく、空飛ぶ蚊なんて、ぜってー当たんねーだろうな・・・

！！

・・・そーいやぁ、蚊は人の血を吸うんだよな・・・当たり前だが。動く人間に、飛行しながら目的の場合まで飛ぶ・・・

あっ・・・

獄「そうか・・・機動力・・・」

ボムに機動力があれば・・・！

いける！

オレは急いでメモ用紙にその設計を書きなぐった。

獄「推進力用の火薬を後方に・・・単純に真っ直ぐ進むなら的によけられちまう・・・進む方向を変えるか？」

・・・ぜってー完成させてやるぜ！！

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

獄寺君の勝負が始まるその夜、オレはバジルに支えられながら歩く楓香と、リボーンとで並盛中に向かっていた。

ツ「・・・大丈夫、楓香？」

楓「ああ。少しまだフラッとなるが・・・」

全然大丈夫じゃないじゃん！！

リボーン「いよいよ、獄寺の勝負だな」

ツ「獄寺君ならきっと大丈夫だよね」

リ「獄寺の相手はベルフェゴールって奴でな。“プリンス・ザ・リッパー”って通り名なんだ」

ツ「プリン・・・？」

楓「“切り裂き王子”って意味だな」

え!?

ツ「おうじって・・・あの王子?!」
楓「ああ。本当に王族の血をひいているらしいぜ」
リ「だが、その常人離れしたたぐいまれなる戦闘センスを持て余し、自らヴァリアーに入隊した変わり種だ」
バ「拙者も親方様から聞きました。こと戦闘においてだけなら、ヴァリアーで最も才能があるのはベルフェゴールだと」
ツ「!獄寺君、そんな恐ろしいのと・・・」
リ「厳しい勝負になることは間違いねーな」

獄寺君・・・大丈夫かな・・・

山「よっ」
ツ「山本!お兄さん!」

校門にはすでに山本と京子ちゃんのお兄さんがいた。けど・・・

ツ「あれ?獄寺君は?」
山「何だ、ツナ達と来るんだと思ってたんだけどな」
了「まだ来ていないぞ」
ツ「ど・・・どーしたんだろ・・・?」
リ「もしかして、シャマルに止められてるのかめな」

それって・・・

リ「シャマルのことだ。勝機のねー戦いに、弟子を送り出すはずねーからな」
ツ「え!じゃあ・・・」
楓「新技ってのが、完成してないのかもな・・・」

ツ「そ、そんな・・・」

―校舎内　三階廊下

山「今日は室内なのか」
バ「しかし、獄寺殿が・・・」
了「何をしているのだ、タコヘッド・・・」
山「ぜってー来るって」
楓「ま、大丈夫だろ」
ツ「・・・・・・」

獄寺君・・・やっぱり新技が完成していないのかな・・・
でも、相手は恐ろしく強いんだ・・・
戦わない方がいいのかも・・・

ベル「逃げてどーすんだか？どうせ殺されんのに」
チェ「あの時計の針が１１時を指した時点で獄寺隼人を失格とし、
ベルフェゴールの不戦勝とします」

そんな！あと数秒しかない！

カチッ（三秒前）

了「いかん・・・」

カチッ（二秒前）

楓「・・・」

カチッ（一秒前）

山・リ「・・・」

ツ「！」

ドガァン！！

ツ「え・・・！？」

時計が爆発した！？

？「お待たせしました、１０代目！！」

あっ、この声は！

獄「獄寺隼人、いけます！」

標的３３　【嵐の試練　来る！】（後書き）

こういう風に書くと、ネタばらし？

標的３４　【《嵐戦》　来る！】（前書き）

嵐戦ってあんまり変更点作れねーって嘆く今日この頃。

標的３４　【《嵐戦》　来る！】

標的３４　【《嵐戦》　来る！】

ｓｉｄｅツナ

―並盛中学校・校舎

ツ「獄寺君！！」
了「タコ頭（ヘッド）！！」

獄寺君は時間ギリギリに廊下に現れた。

チェ「約束の時間に間に合いましたので、勝負への参加を認めます」
了「よし！」
山「あせらせやがって、元気そーじゃねーか。寝坊か？」
獄「んなわけねーだろ！遅れてすいません１０代目！色々準備に手間取りまして」
ツ「そーだったんだ・・・」

じゃあ新技、完成したんだ！！

でも・・・相手はヴァリアーの中で、一番の天才・・・
獄寺君・・・

チェ「それでは戦闘のフィールドの説明に移りますが、その前にケガのため我々の一名が交代となりましたので、報告させていただきます」

チェ「よろしく」

なっ、昨日の人と同じ・・・じゃないのか？

了「やられた奴とよく似ている・・・」

楓「そっくりさん大賞、受賞だな」

リ「チェルベッロには、いくらでも替えがいるらしーな」

チェ「今宵のフィールドは校舎の３階全てです」

チェ「もちろんこの棟とつながる東棟も含まれ、廊下だけでなくこの階にある全ての教室を含みます」

獄「（よし、オレの好きな遮蔽物のあるフィールドだ）」

チ「ただし・・・」

ガタガタガタ・・・バリーンッ！！

なっ！教室からの突風で机と椅子が外に！

獄「！！」

チェ「フィールドのあらゆる場所に、ハリケーンタービンと呼ばれるものが仕掛けてあります」

獄「ハリケーンタービン・・・？」

チェ「ハリケーンタービンは吹き出し口が４つあり、四方向にランダムに超強力な突風を発生させる嵐の装置です」

了「あの風をまともにくらったら・・・外へふっ飛ばされるぞ！」

た、確かに・・・

山「メチャクチャだぜ・・・」

楓「くらったらおしまいってか・・・」

チェ「そして今回は時間制限をもうけます」

獄「！」
チェ「試合開始から15分後にどちらかが嵐のリングを完成させ所持しなければ・・・」
チェ「ハリケーンタービンに仕掛けられた時限爆弾が順次爆発し、この階を全壊にします」
ツ「！！そんな・・・！！」

なんつー戦いだよ！

リ「最悪、嵐の指輪ごと爆破してもいいってことだ」
楓「・・・ＸＡＮＸＡＳの考えそうなことだな、守護者のリングをどうなろうと関係ねーってのは」

ＸＡＮＸＡＳ！！

リ「やはり、奴は本気になったみてーだな」
ツ「なんてことを・・・」
獄「デスマッチかよ・・・おもしれーじゃねーか」

獄寺君・・・

？「何だ？今のガラスの音は・・・ケガ人はいねーか？」
皆「！」

突然現れた1人の男がチェルベッロの胸を揉み始めた・・・その瞬間その男は。

ゴッ！！

案の定、殴られて後ろに吹き飛んでった。

？「のへー！！いやーよかった。その弾力は健康そのものだ」
ツ「シャ・・・シャマル！」

つーかあの人、何やってんのーーっ！！

マ「トライデントシャマル・・・噂では2世代前のヴァリアーにスカウトされ、それを断ったほどの男・・・」
獄「何してんだよおめーは！！」
シャ「あ？決まってんだろ？お前の勝負の冷やかしだよ」
獄「けっ」
シャ「ってわけでオレ、こっちつくから。よろしくな喪服の連中どもーーっ」

も、喪服って・・・

べ「ししし・・・少しは楽しめそうじゃん、今日の勝負の相手」
了「よし！じゃあいつものいくぞ！！」

いつもの・・・って！！

獄「なっ！？オレの勝負に円陣なんていらねーよっ！！」
ツ「あの、そういわずに・・・やんない？獄寺くん・・・」
獄「なっ」
ツ「うまくいえないけど・・・この勝負では、誰一人欠けてほしくないから。しっかり団結した方がいいっていうか・・・」
獄「１０代目・・・そこまでファミリーのことを・・・！！自分わかってませんでした！！やりましょう！！やらせてください！！」
ツ「う、うん・・・やろっか」
獄「ハイ！！」

山「ん？楓香はやんねーのか」
楓「ギクッ！」

あ、楓香がこっそり抜け出そうとしていた・・・

楓「んなもん、お前ら男だけでやってくれ・・・」
了「ならん！お前もモンゴルファミリーの仲間だろ！」（ガオオオ）
獄「モンゴルじゃねえ！ボンゴレだ！」
ツ「あ、あははは・・・」
山「いいじゃねぇか、楓香。やったほうが気合いが入るだろ」
楓「むうぅぅ・・・わかった」

恥ずかしいのか顔を真っ赤にしながら楓香も円陣の入ろうとする。

リ「こいつも入れてやれ」

するとリボーンが何かの尻尾みたいなものを投げつけてきた。

ツ「・・・？なんだこれ？」
リ「それは昨日の戦いでちょん切れた、アホ牛の尻尾の布だ・・・」
ツ「ランボ・・・」
リ「それを見ると思いだすなぁ、アホ牛のありし日の姿を」
ツ「死んじゃったみたいに言うなよーー！！」（ガーン・・・）

山「でもいいと思うぜ。ランボも円陣にいれよーぜ」
獄「ま、アホ牛とはいえ何もないよりはちたあ心強いっスしね」
ツ「みんな・・・そうだね！」

ランボの尻尾も入れて、円陣を組む。

ツ・楓・獄・山・了「「「「「獄寺ーッ、ファイッオーー！！！！」」」」」

シャ「おーおー、若いってのは恥ずかしいねぇ」

チェ「それでは両者中央に来て下さい」

獄「右腕に恥じぬよう、戦ってきます！」

ツ「え・・・あ、うん。で、でも、無理しないで・・・」

ス「う〝おぉい！！ベル、さっさと終わらせて来い！！」

ベ「しししし・・・んじゃ、行って来っから・・・」

オレたちは観覧席に入り、赤外線感知式のレーザーっていうので観覧席と戦いのフィールドが分けられた。

獄「・・・・・・」

ベ「お前、爆弾使うんだって？って、見りゃあわかるか・・・」

ベルフェゴールは獄寺君に近づき・・・

ポン・・・

ベ「肩に力が入りすぎじゃね？」

そう言って獄寺君の肩に手を置いた。

獄「・・・（こんな奴に・・・ぜってー負けねぇ。天才だろうが何だろうがな）」

チェ）「それでは嵐のリング、ベルフェゴールＶＳ獄寺隼人・・・勝負開始！！」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

相手の武器がまだわかってねー今は、迂闊に攻撃できねーな・・・

とりあえずは・・・

ピッ

ベ「導火線、短かっ」

ドンッ!!!

まずは様子見でボムを一つ奴にくらわせる・・・

さぁ、どーする?

キラキラ・・・

獄「!!」

頭上!?

ナイフ・・・!?

大量のナイフが宙に浮いている!!

カカカカカッ!!

オレはそのナイフを避けた。

べ「お前、誰相手にしてるかわかってんの？」

出し惜しみは無しだ・・・

獄「3倍ボム！！！」

バッ

べ「ん」

バ「獄寺殿の新技っ！！」

ツ「すごい！ついに3倍ボムを完成させたんだ！！」

ス・・・ッ

ベルフェゴールは、ほんの少し後ろに下がっただけだった。

なぜよけねぇ・・・

バリーンッ！！

獄「！？」

ダイナマイトは全て風によって飛ばされてしまった。

くそっ！

獄「あの機械か・・・っ」

べ「風には敏感なんだよね・・・嵐の守護者だから」

バキャッ!!バリーンッ!!

次々に突風が吹き荒れる。

ツ「突風が・・・これじゃボムが使えないよ!」

リ「それはお互い様だぞ」

だが・・・

獄「!」

目の前に2本のナイフが・・・

うそだろ――・・・!!!

ビビッ!!

ナイフは2本とも足に・・・!

獄「ぐっ・・・!」

バリーンッ!!

後ろの窓ガラスに倒れこんで、教室に投げ出された。

獄「っくしょー!!どーなってやがんだ!?まぐれか!?」

べ「王子にまぐれとかないから」

獄「!!」

べ「死ぬ程カンタンな話さ・・・吹き荒れる気流を読んで・・・目標ライン上にそっとナイフを添える」

ビュッ!!ビュビュ!!カッ!!

くそっ、なんでナイフがっ!

山「!」
了「なに!?」
バ「!!」
ツ「気流の流れを読むなんて・・・そんなこと・・・」
シャ「不利な状況を逆に利用してこんなことをやってのけちまうんだ・・・認めざるをえないな・・・奴は本物の天才だ」

アナウンス（チェ）「3ぷん経過しました」

気流の流れを読むだと・・・っ

べ「お前さぁ・・・嵐の守護者の使命って知ってる?常に攻撃の核となり・・・」

そう言いつつ、奴はナイフを浮かばせる。

べ「休むことのない怒濤の嵐。オレには出来るけど・・・お前には出来ないね」

標的３５　【嵐の反撃　来る！】

標的３５　【嵐の反撃　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

容赦なく飛んでくるベルフェゴールのナイフ・・・

シャマル「何突っ立ってんだ。立ち止まるな、隼人！」

わかってるけど・・・よおっ！！

ガガガッ

獄「ふざけやがって！！」

ビュッビュッ

またナイフっ！！

獄「くそっ、これじゃあ攻撃に移れねぇ！！」

マ「スキのない流れるようなナイフさばきで、相手の一切の動きを封じる。この風の中でこんなことできるのはベルくらいだよ」

ス「はんっ！」

カカカッ！！

獄「ちくしょう！撃てねぇ！！」

ここはいったん引くしかねぇ・・・
奴の攻撃の届かねぇ所に・・・っ

ダッ

入り口にセットして、足止めすれば・・・!!

ドガァン!!!

ベ「爆発に乗じて隠れたつもりかよ。隠れんぼ、だぁ～い好き」

くそっ、あんなこと言ってやがるが、この理科室ならなんとか・・・

獄「だいたい、あのナイフと正面でやりあうのは分が悪い・・・死角からチャンスをうかがうしかねーか・・・」

ビュッ!!ビュッ!!
スパッ!!

獄「!?」

ダイナマイトが・・・切断された!?

獄「どっから来やがった!!?」
ツ「ベルって人・・・まだ廊下にいるよ!!」
バ「では相手が見えていないのに!?」
ベ「オレ王子だからさ・・・お前らパチもんとはデキが違うんだよね」

ザクゥッ!!

獄「うぐっ」

くそっ、よけられねぇ！！モロに腹にくらっちまった！！

ツ「獄寺くん！！」

獄「ってー！！なんでだっ」

べ「うしし、もう大当たり？嵐の守護者がこれじゃあ、お前のボスも知れてんな」

獄「！！！」

オレのせいで１０代目がっ・・・

侮辱されるなど・・・！

獄「・・・」

ぜってぇ負けらんねぇ！！

だが、奴の攻撃を攻略しねぇ限りはムリだ・・・

考えろ！！

なんで死角から当たるんだ・・・！？

シャ「そーだそれでいい。天才だろーがその技にゃ必ず」

タネと仕掛けがある・・・！！

この勝負何があった・・・？

―肩に力が入りすぎじゃね？―

うるせぇ・・・！何が肩の・・・

！！肩・・・！？

そういやあ、さっきから奴のナイフは・・・！

まさか・・・

―――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

べ「怒濤の攻めのシメは、針千本のサボテンにしてやるよ」

獄「！！」

べ「バイバイ」

ビッ！！

ツ「あ！！」

了「いかん！」

ドスドスドスッ！！

べ「うししし♪サボテン一丁あがり」

な、ナイフが！！！

ツ「ご・・・！！獄寺くん！！！」
レ「・・・終わったか」
マ「見所のない勝負だったね」

バリーンッ！！

何かが窓ガラスを割って廊下に・・・
ナイフが刺さっているのは・・・

ベ「！！」
バ「あ、あれは・・・人体模型！！！」

ズズ・・・ッ

なっ！人体模型が勝手に・・・！

ツ「ひい！動いた！」
リ「バカ。よく見てみろ。首に何かからまってるぞ」

グイッ

獄「これがてめーの技の正体だ」

獄寺君！無事だったんだ・・・

よく見ると、人体模型には細長い糸が巻かれている。

獄「てめーは勝負の前、肩をたたくと同時に視認しにくいワイヤーをオレの肩にとりつけやがったんだ。そしてワイヤーをたぐりよせナイフをひっかけて投げる・・・ナイフはオレに当たる寸前までレールの上をワイヤーに沿って飛んでくるって仕掛けだ」
ツ「そ、それでナイフが獄寺くんに吸い込まれるように飛んだんだ・・・」

そんなことに気づくなんて・・・やっぱり獄寺君は凄いよ！

べ「んー、５０点ってとこかな。つか、お前こんなもんで得意になるのもいいけどさ」

ガタガタガタ・・・

獄「！？」

べ「この風じゃなんもできないじゃん」

そっか・・・さっきみたいに吹き飛ばされて当たんないんだよな。

ス・・・

獄寺君が・・・またダイナマイトを構えた！

ツ「ボ、ボム！でも・・・」
べ「それ当たんないから」
シャ「当たんねーボム当たるようにするためにナンパ返上でつきあったんだぜ。・・・かつて天才の名を欲しいがままにしたこのオレがな」
ツ「え・・・！？」

それって・・・

獄「果てろ!!!」

ダイナマイトを投げる獄寺君。でも・・・

バ「だめです!また風の壁にぶつかる!」べ「頭悪くて口あんぐり」

獄「（行け!!!）」

バシュッ!!

べ「!」

ダイナマイトが・・・ベルフェゴールに煙りを上げて飛んでいく!!!

獄「オレが下手うって、１０代目に恥をかかすわけにはいかねーんだよ」

ドガガガガッ!!!

ダイナマイトは・・・ベルフェゴールに命中した・・・

シャ「ロケットボム・・・これが６日間で奴がつかんだ技だ」

リ「方向転換するボムか」

シャ「ああ・・・仕込んだ推進用火薬の噴射であらかじめ決めた方向に２度変化する」

楓「なるほど・・・考えたな、獄寺のやつ」
シャ「隼人にもっとも足りねーのはスピードだった・・・ボムという武器の性格上、着火時間と山なりの軌道でどうしたって敵をつかまえきれねぇ。・・・そこで武器そのものの機動力をあげたわけだ。狙いがマニュアルなだけにテクニックを要するが、2度曲がれば戦略は一気に広がる」

獄寺君、すげーっ・・・

シャ「何よりあいつが生き残るために習得したんだ・・・そういう技はしぶとく決まる」
ツ「す、すごいよ獄寺くん・・・!!」
了「・・・やったのか?」
バ「わかりませんが・・・直撃しました。大ダメージにはちがいありません」
リ「そーだな」

だが、ヴァリアーはというと・・・

レ「ベルの奴・・・無傷ではあるまい」
マ「そのとおり・・・あれが始まるね」
ス「おぞましーぜぇ」

煙りの中からのそりと起き上がる黒い影。

ベ「うしししし!!あぁあ〜っ。流しちゃったよ・・・王族の血を・・・っ!」
皆「!!!」

獄「!?(なんだコイツ・・・?)」

マ「自分の血を見てから始まるのさ。プリンス・ザ・リッパーの本領は・・・」

標的３６　【怒涛の嵐　来る！】

標的３６　【怒涛の嵐　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

ベ「あ〝はあ〝ぁ～。ドクドクが止まんないよ・・っ」

様子がおかしい・・・？

どーなってやがる・・・！？

ツ「わ、笑ってるよ・・・！？」

シャ「キレたようだな・・・」

ス「相変わらず理解できねーぜ・・・」

マ「知らないのかい？ベルが自分の血を見て興奮するのは、その血に血を分けた兄の姿を見るからだ。

彼は幼少の頃、双子の兄をめった刺しにして殺したらしい。その時のことを彼は何喰わぬ顔で《ゴキブリと間違えたんだ》と言っていたよ。

そしてその時、最高の快感を得ることができたとも・・・。ベルが暗殺部隊ヴァリアーに入隊したのは殺しの興奮を忘れられなかったからだ。

・・・あの表情、無邪気でむき出しの残虐性がよみがえってる・・・」

ぐっ・・・

べ「血だよ～～、王族の血だ～～」
獄「よくわかんねーが」

糸は見破ったんだ。
もうこの風ん中ナイフは来ねぇ。
一気に行くしかねーぜ！！

ヂヂヂヂヂ

獄「ロケットボム！！」

ドシューーーッ

べ「あ〝～～？」

な、なぜよけねぇ・・・

べ「ししっ」

！！

ドガガァンッ！！

べ「あ〝はあ！！」
獄「！！」

まじかよ！！
オレのボム、全てかわしやがった！！

ツ「かわしたっ！？」

リ「ただかわしただけじゃねぇ。ムダがねぇ」
シャ「あれほどの身のこなしとは」

レ「いよいよ奴らしくなってきたな・・・」
マ「うむ。キレてこそベルの天賦の才は冴えわたる」

ベル「ししっ」

ビュッ

ナイフが飛んでくるが・・・
風の影響で狙いがデタラメだ。
ビビるこたぁないぜ!!

だが・・・

バシュッ!!

なに!!!ナイフで顔が切れた!?

獄「なに!!」
ツ「え!!?」

顔からは血が流れる・・・

獄「どーなってんだよ!!ナイフには当たってねーぞ!?」

触れずに切れるなんて・・・
かまいたち!?

べ「どかーん」
獄「！！」
なっ！！もうこんな近くに奴が！！
左手のナイフ・・・こんだけ近けりゃよけられねえ！！
べ「血ぃ」
やられる・・・！！
獄「っかよお！！」
すかさず腕のリストバンドに隠してあるチビボムを着火、奴との間に弾く！！
ドンッ！！
獄「っでーっっ・・・ブホ、ゴホッ・・・」
危なかったぜ・・・
ス「肉を切らせてでも骨を守る・・・いい判断だな爆弾小僧」
べ「あはあ〝あ〟。もっと血だ〜〜！！」
ッ「や、ヤバイよ！あの人いっちゃってるよ！！」
獄「く・・・っ」

この距離はマズい・・・っ！！

べ「待ちなよ」

ヒュッ！！ブシュッ！！

獄「ぐっ」

またナイフが当たってねーのに・・・！！
どーすりゃいいんだ！？

アナウンス（チェ）「あと6分でハリケーンタービンが爆破を開始します」

獄「時間もねーのかよ！！くっそお！！」

まずいな・・・

獄「こうなりゃあ！」

あそこなら・・・！

べ「ししし。かくれんぼ、だぁ～い好き」

オレが向かった場所は図書室。
オレは本棚の後ろに身を潜め、奴を待った。

獄「さあ来やがれ・・・思いっきりうぶちこんでやるぜ」

ツ「図書室は入り口があそこだけなんだ！」

リ「獄寺のやつ、勝者に出るつもりだな」
マ「袋小路でベルと勝負なんて、自ら寿命を縮めるようなもんだよ」

よし、来やがった！

獄「くらいやがれ！！」

ボムを投げる・・・が。

べ「ししししっ」

ボムは奴に届く前に、全て切断された・・・！

ツ「また当たってないのに！！」
バ「あんなことが・・・まるでかまいたちだ」
シャ「・・・？」

何だ、今のはおかしい・・・
切られた場所も、切り口の方向も・・・
何かが不自然だ！！

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

べ「反撃開始ぃ～っ」

ビシュッ！！

獄「ぐあっ」

ツ「ああ！獄寺くんが！！」

マ「これこそまさに嵐の守護者にふさわしい、怒濤の攻めだね」

リ「だが妙だと思わねーか？」

妙・・・？

シャ「ああ。敵はわざと外しているようにも見える」

獄「ま、まだだぜ・・・」

べ「いーやっ、でっきあっがり～～っ」

ピッ！！

獄「！？」

ピタ・・・

獄寺君が動きを止めてしまった・・・

バ「獄寺殿！止まってはダメです！！」

ツ「早く逃げないと！！」

マ「逃げないんじゃなくて、逃げられないのさ」

ツ「！？」

マ「モニターではかすかにしか見えてないけど、彼のまわりには・・・鋭利なワイヤーがはりめぐらされている」

獄「・・・！」
バ「！！」
ツ「いつのまに！どーやって！？」
シャ「やはりナイフだな」
リ「ああ」
ツ「ナイフ？」
リ「ナイフにワイヤーがつけてあったんだ。これでかまいたちの説明もつく」
シャ「うむ。これだけで2つの切断方法が生まれる。
1つ目は投げて切る場合だ。ナイフをよけたと思ってもその後で軌道がターゲット側に曲がれば、奴とナイフの間にあるワイヤーがれば内にきれこみ切りつけられる。
2つ目は設置型・・・壁にナイフを刺してワイヤーをはればそのまま見えない切断機となる。図書室に入る前にナイフを投げ隼人のボムを切ったのはこっちだ。
シャ「つまり奴は吸い込まれるトリックといいただのナイフつかいじゃなく、ナイフとワイヤー両刀づかいだったわけだ」

マ「まんまと術中にはまったね。体技だけでなく策をはれるのもベルが天才たるゆえん・・・」

べ「ししししっおっしまーい」

獄寺君・・・！

獄「お前がな・・・」

マ「？」
ツ「！？」

ヂヂ・・・ヂヂヂヂ・・・
ヂヂヂヂヂ・・・

獄寺君の足元に、大量の火薬が・・・

ツ「あ！」
バ「こぼれた火薬を導火線のように！！」

ドガガガガッ！！！

ナイフが刺さっていた本棚は、爆発により倒れた。

獄「たわんだ糸じゃ切れねーぜ・・・」

ツ「わかってたんだ獄寺くん！！」

獄「そしてこのボムの行き先は」

ドシュ！！

獄「てめーのワイヤーに案内してもらうぜ！！」
ベ「！！」

ベルフェゴールのワイヤーにボムを引っ掛けて・・・！

獄「これが嵐の守護者の怒濤の攻めだぜ」

ドガガガンッ！！！

獄寺君のダイナマイトが・・・ベルフェゴールに命中した！！

バ「決まった!!」
ツ「すさまじい・・・!」
レ「・・・バカな」
マ「これだけ撃ち込まれたらさしものベルも・・・」
ス「堕ちたな」

シャ「やりやーったな・・・いいんじゃねーか?あいつが嵐の守護者で」

獄「・・・終わったぜ」

アナウンス(チェ)「いいえ。完成した嵐のリングを所持するまで勝利と認められません。2つのリングを手にし、嵐のリングを完成させてください」
獄「けっ・・・めんどくせー・・・」

ガクッ

獄「!?」

バ「!」
ツ「獄寺くん!!」

獄「く・・・っ」

シャ「その程度の出血でフラついてんじゃねーよ、とっとと終わらせて祝杯あげるぞ。そーだビアンキちゃんつれてこいよ」

獄「なっ・・・こんな時に何言ってやがんだ!エロオヤジが」

べ「・・・」

ベルフェゴールは倒れたまま動かなかった。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

獄「ったく、バカ面しやがって・・・天才が笑わすぜ。てめーには訂正させたかったぜ、１０代目への侮辱の言葉を・・・」

でもよ・・・少しは役に立てたよな・・・

べ「あ〝・・・はあ〝・・・」

ガッ！！

獄）「！！」

ツ「！！」

マ「！！」

シャ「！」

べ「勝つのオレっ！」

なっ！こいつオレのリングをつかんできやがった！！

意識がないんじゃねーのかよ！！

獄「ってめぇ！！放せ！」

ガッ！！

こいつ、殴っても話しやがらねえ！！

レ「ベルの奴まだやれるのか？」
マ「いいや。おそらく彼を動かしているのは勝利への本能・・・負けを認めない王子の本能だ」
ス「知れば知るほど異常な奴だ」

獄「てめー！往生際が悪いぞ！」
べ「リング！！」

くそっ！！力が入ればこんな死にぞこない・・・！！
血を流しすぎたかっ！

アナウンス（チェ）「まもなく約束の時間です」

ピー、ピー・・・ドガガンッ！！

爆発音！！

獄「！？」

ツ「なっ」
アナウンス（チェ）「勝負開始から１５分経過しましたのでハリケーンタービンの爆破が開始されました。図書室の推定時刻は１分後です。なお観覧席には爆破は及びません」

ドガガンッ！！

ツ「そんな・・・このままじゃ獄寺くんが！」
楓「こいつはやべえな・・・」
リ「敵もろとも死んじまうぞ」
了「何をしているタコヘッド！急がんか！」
獄「るせー！やってんだよ！！」
シャ「いかん・・・出血とともに体力が落ちてる。このままではまずいぞ・・・」

く・・・目がかすんできやがった・・・

ス「チキンレースかぁ。面白くなってきたじゃねーか」
リ「ツナ、どーすんだ？」
ツ「どーするって・・・」
シャ「やむをえんな・・・リングを敵に渡して引き上げろ隼人！！」

獄「！！」

シャ「こんなもんでくたばるなんてバカげてる！戻れ！」

獄「ふざけんな！オレが負けてみろ！1勝3敗じゃもう後がねぇ！！致命的敗北なんだ！！」

ここは引き下がれねぇ！！

シャ「お前の相手はいかれちまってんだ！もはや勝負になっちゃい

ねぇ！戻るんだ！！」

獄「手ぶらで戻れるかよ！！これで戻ったら１０代目の右腕の名がすたるんだよ！！」

ツ「！獄寺くん、そんなこと・・・！！」

獄）「１０代目！オレが勝てば流れは変わります！まかせてください！これくらいオレが・・・！！」

山「獄寺！！」

了「タコヘッド！戻ってこい！！」

楓「早く戻れ、獄寺！！」

シャ「隼人！！修業に入る前に教えたことを忘れたのか！！」

獄「！！」

《見えてなかったのは・・・自分の命だ・・・》

忘れるかよ・・・！だからこそ！！

獄「ここは死んでも引き下がれねぇ！！」

ツ「ふざけるな！！」

獄「！！」

その時・・・１０代目の叱咤の声が聞こえた。

ツ「何のために戦ってると思ってるんだよ!!」

獄「!!」

ツ「また皆で雪合戦するんだ!!花火見るんだ!!
だから戦うんだ!!だから強くなるんだ!!
またみんなで笑いたいのに・・・君が死んだら意味がないじゃないか!!!」
リ「・・・・・・」

獄「・・・１０代目・・・」

ピーッ

獄「!!」

ドガガァンッ!!!

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「獄寺くん！」
山「獄寺！！」
シャ「・・・あのバカ・・・」
そんな・・・
ツ「そんな・・・そんなことって・・・なんで・・・獄寺くん・・・」
リ「・・・！あそこみろ」
ツ「？」
リボーンの指差す方を見ると・・・ボロボロの体を引きずりながら歩いてくる獄寺君の姿があった。
シャ「赤外線センサー止まってるぞ」
ツ「獄寺くん！！」
山「獄寺！！」
了「タコヘッド！」
楓「獄寺っ！！」
オレたちはすぐさま獄寺君に駆け寄った。
獄「すいません、１０代目。リングとられるってのに、花火見たさに戻って来ちまいました」
ツ「獄寺くん・・・っ」
リ「獄寺のやつ、命をとったな」
シャ）「ああ・・・最後に一番でかい成長を見せやがった。それを

オレの手柄なんて言うほど自惚れちゃいねぇぜ。ボンゴレボーズに一本とられたな・・・」

獄「山本！」
山）「！」

獄「後・・・頼むぞ」
山）「ん？」
獄）「オ、オレだってお前なんかに頼みたかねーんだよ！よりによってお前なんかに・・・っ」
山「・・・」

すると山本はニコッと笑い・・・

山「わーってるって」

そう応えた。

チェ「嵐のリングはベルフェゴールのものとなりましたので…この勝負の勝者はベルフェゴールとします」

ス「う〝お〝ぉい。それにしても笑える結末だったなぁ。これでいよいよ貴様らの命は風前の灯だぁ」
マ「それに未だ君たちの霧と雲のリング保持者は現われないじゃないか。出場者がいなくて不戦勝なんてオチじゃないだろーね？」
ツ「！」

そーいえば雲雀さんも霧の人もいつになったら・・・

チェ「それでは明晩の対戦カードを発表します」

ツ「！」

やばい、雲か霧ならどーしよーっ！！

チェ「明晩の対戦は・・・

雨の守護者同士の対決です」

標的３６　【怒涛の嵐　来る！】（後書き）

あ、嵐戦、やっとオワタ・・・

標的３７　【孤高の浮き雲　来る！】

標的３７　【孤高の浮き雲　来る！】

ｓｉｄｅツナ

チェ「明晩の勝負は・・・雨の守護者の勝負です」

ツ「！」

そうだ・・・

山本の相手は、激強（げきつよ）のロン毛だ・・・！

ス「この時を待っていたぜぇ。やっとかっさばけるぜぇ。前回の圧倒的力の差を思い出して逃げんじゃねーぞ！刀小僧」

ツ「！！」

山「ハハハ、その心配はないぜ」

ツ「！！」

山「楽しみで眠れねーよ」

ス「・・・ガキが」

バッ

？「失礼する！レヴィ隊長！！校内に何者かが侵入しました！雷撃隊が次々とやられています！！」

レヴィ「！何！？」

リボーン「だから言っただろ？着々と守護者が揃ってきてんだぞ」

ツ「え？」

楓香「やっべ・・・あいつ、帰ってきたのか・・・」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ??

ガスッ　ゴスッ

「があ゛っ」
「ぐはっ」

・・・まったく、イライラするよ・・・

「貴様！」

ヒュッ
ガキッ

「！！？」
「そこで這いつくばっててよ」

ズゴッ

「ガハッ・・・」

ドサッ

「！！この・・・」

「五月蝿いよ」

ガスッ　ゴスッ　ガキッ

「「「ボハッ！！」」」

・・・なんなのこれは。

「・・・なに勝手に並中で群れて暴れてんの、君たち。僕の学校で何してんの？」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

な、なんか渡り廊下の方が騒がしいんだけど・・・

レヴィ「なんだ？」

レヴィ雷撃隊　隊員「レヴィ隊長！正体不明の侵入者はまっすぐにここに向かっています！」

レヴィ「おのれ、何者だ！」

マーモン「どんなハエがくるのか楽しみだね」

スクアーロ「う〝お〝ぉい！！」

ツナ「な、何がおきてんの！！？」

楓香「やばっ、もう来ちゃったよ・・・」

リボーン「ニッ。あいつが修行から帰ってきたんだぞ」

タッ

？「ねえ、君たち・・・何してんの」

学ランに風紀委員長の腕章・・・

ツナ「ヒバリさん!!来てくれたんだ!!」

本当にリング争奪戦に加わってくれるんだ!

あの最強のヒバリさんがー!!

雲雀「校舎内への不法侵入、及び校舎の破損・・・連帯責任で、ここにいる全員咬み殺すから」

獄「なっ、オレ達もかよ!」

ツ「あの人、校舎壊されたことに怒ってるだけだーーっ!!!」（ガゴーン・・・）山「あいつ本当に学校好きな」

楓「はあぁ・・・」

レ「よくも・・・オレの部下を潰してくれたな」

チェ「あなたは沢田氏側のリング保持者ですか?でしたら勝手に暴れられては・・・」

レ「黙れ、チェルベッロ。奴はただの・・・」

そう言い、レヴィは電気傘を両手に持ち、構える。

レ「不法進入者だ!」

レヴィはヒバリさんに突進するが、ヒバリさんは半身を引いてスッと攻撃を避けた。

レ「なっ」

雲「・・・まずは君から咬み殺そうか」

レ「なに!?」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

シャ「おーおー、かっこいいねー」

獄「あのバカ、出てくるなりメチャクチャしやがって」

ツ「でもやっぱりすごいよ、ヴァリアーの攻撃をいとも簡単に」

山「ああ、さすがだな」

楓「ディーノに鍛えられて、少しは動きが変わったな」

バジル「なかなかの身のこなし・・・できる!何者なんですか?」

リボーン「奴はうちの雲のリングの守護者にして、並中風紀委員長、雲雀恭弥だ」

その雲雀に絶対、目(め)ーつけられてんな、オレ・・・

マーモン「雲ということはゴーラ・モスカの相手だね」

スクアーロ「マーモン、奴をどう思う?」

マ「確かにレヴィはヴァリアーの中でも鈍重で故障しているが、それを差し引いてもなかなかの身のこなしだね」
ス「やはり貴様は術者だな、剣士のオレには止まって見えたぞぉ。うぉ〝お〝い！！貴様、何枚におろして欲しい！！」

雲「ふうん・・・次は君？」

チェ「おやめください。守護者同士の場外での乱闘は失格となります」

了「なに！！」
ツ「やばいよ！」
山「まーまー、落ち着けって」

山本は雲雀に近づき、止めようとする。

雲「僕の前に・・・立たないでくれる」

ビッ

振りかぶった雲雀のトンファーを避けた山本は、流れるような動きで雲雀の後ろをとり、トンファーの柄を掴んだ。

パシッ

山「そのロン毛はオレの相手なんだ。我慢してくれって」
雲「！」
ツ・獄「「！！」」
リ「ニッ」
楓「ふふっ」

今の動きは・・・守式四の型だな。この時点で、ある程度習得されているな。

ス「（ん゛ん゛？刀小僧の今の動き・・・）」

雲「邪魔する者は何人たりとも・・・咬み殺す！」

ジャキッ

山「やっべ、怒らせちまった・・・！！」

楓「おい、待て雲雀！」

香ツ「ヒバリさん、ちょっと待って下さい！」

雲雀のまさにゴゴゴというような殺気を放っていたその時、

リボーン「ちゃおっス、ヒバリ！」

・・・リボーンが雲雀に話しかけた。

雲「・・・赤ん坊かい？悪いけど今、取り込み中なんだ。それに・・・」

スッとリボーンから視線を逸らし、オレを睨みつける雲雀・・・って、オレ！！？

雲「勝ち逃げは許さないよ、君もここで咬み殺す」

楓「なっ！」

やっぱ、あん時のこと根にもってたんだ・・・（ガーン・・・）

リ「ここで暴れちまってもいいが、でっけえお楽しみがなくなるぞ」
雲「！・・・楽しみ？」
リ「今すぐってわけじゃねーが、ここで我慢して争奪戦で戦えば・・・遠くない未来、六道骸とまた戦えるかもしんねーぞ」
ツ「え！」
雲「（ピク・・・）ふーん、本当かな」
リ「ニッ」
雲「・・・夜代楓香、君も戦いなよ」
楓「ふっ・・・わーったよ、争奪戦が終わりゃあ、相手してやっぜ」

争奪戦が終わったら・・・な。

雲雀は構えていたトンファーをおろす。

雲「そう・・・校舎の破損は完全に直るの」
チェ「はい。我々チェルベッロが責任もって」
雲「そう・・・気が変わったよ」

くるりと背を向ける雲雀。

雲「僕とやる前に、あそこの彼に負けないでね」
山「え・・・」

そして雲雀はスタスタとその場を去った・・・

―――――――――――――――――――――

sideツナ

山「ヒバリ・・・」

ツ「あのヒバリが戦いを止めた・・・」

リ「それだけヒバリにとって、骸から受けた屈辱はでけえんだ」

黒曜でのことは、昨日のことのようによく覚えている。

並中生徒を次々と襲い、ヒバリさんまでも‘サクラクラ病’に掛かっているという弱点を突かれ骸に捕らわれてしまった。

その後、なんとか骸たちを撃退したけど・・・

ヒバリさんの中ではまだ骸との決着はついていないんだ・・・

・・・っていうか！

ツ「つーか、あんな約束していいのかよ!!」

骸は復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄にいるんだろ！

リ「さーな」

ツ「さーなって!それに楓香も楓香だよ、あんなこと言って!」

楓「まっ、自分が蒔いた種だ、なんとかするさ」

気軽に言うし・・・つーか、楓香、もうヒバリさんと接触してたなんて・・・しかもヒバリさんに勝ってるっぽいし。

ス「う〝お〝ぉい、刀小僧!!貴様、その動きどこで身につけたぁ!?」

そ、そういえば・・・あの時のって・・・

ス「気に入ったぞぉ！これで貴様の勝つ可能性は０％から・・・やはり０％だぁ！！」

ツ・山「「！！」」

ス「明日が貴様らの最後！！首を洗って待つがいい！！じゃあなぁ」

バッ・・・

そしてヴァリアーは荒々しく去っていった・・・

標的３７　【孤高の浮き雲　来る！】（後書き）

なんか疲れた・・・

標的３８　【霧への接触　来る！】（前書き）

やっとオリジナルきた・・・

標的３８　【霧への接触　来る！】

標的３８　【霧への接触　来る！】

ｓｉｄｅツナ

―嵐戦の翌日　修業場

ツ「・・・楓香？」

楓「すまん、ツナ。ちょっと野暮用があってな。修業三時間ぶっ続けだし、少し休憩していてくれ。なんならバジルに少しの間交代してもらうが？バジル、いいか？」

バ「はい、もちろんです！拙者も沢田殿のお力になりたいですし」

ツ「いや、いいって！休憩する！」

つーか、楓香の修業、正直いって容赦ないよ・・・

体中ガタガタだよ～・・・

楓「そうか。ならリボーン、９代目の話、してやったらどうだ？」

リ「ん？ツナに９代目の話、してなかったか？」

ツ「してないよ！つーか、どんな人が知らないし・・・」

楓「そんじゃ、知っとかなきゃな。ちょっと行ってくるわ」

リ「ああ」

バ「お気をつけて」

そう言い残し、楓香は街の方へと走り去っていった・・・

‘野暮用’ってなんだろ・・・？

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―商店街

今日こそあいつに、あの話しないとな・・・

そんなこんなでぶらりとやって来た、商店街。

今の時間なら、このへんで毎度のごとく、麦チョコ、買ってるかもな。

・・・っと、

楓「おっ」

あの独特のナッポー頭（ヘアー）は・・・

唐突にクローム発見！

って・・・なんで？

楓「なんで男に絡まれてんのよ・・・」

そんな描写、あったっけ？

とりあえずダイジェストで。

ヤンキーA「やあキミ、かわいいね。お兄さん達と遊ばない？」
クローム「え、あの・・・」
ヤンキーB「いいじゃんか、遊ぼーぜ」
ヤンキーC「ぐへへへ・・・じゅるっ」

・・・最後の奴ヤバい、色々。

クローム「や、やめて、放して！！」

・・・カッチンときたよ、カッチンと。
拳で語ってやる。
ヨッシャーッ、いくぜ！！

楓「おりゃぁぁーーっ！！
ヤンキーB「ん？おい女、何を・・・」
楓「天誅！」

ゴキッ

ヤンキーA「ぐぼはっ」

ガゴッ

ヤンキーB「ぶべっ」

ゴスッ

ヤンキーC「ひでぶっ」

ヤンキーどもを無力化しました。

ヤンキーども「「「お、覚えてろよーーっ！！」」」

いや、ホントにその台詞吐くとは思わなかった・・・

楓「大丈夫か、クローム」

クローム「！！あなたは・・・」

お、警戒されちゃった・・・

まあ、コレを見せればいいんじゃね？

楓「まあ、待て待て。キミの仲間だ」

ク「仲間・・・？」

オレは首にかけてある闇のリングを見せる。

ク「あ、守護者の？」

楓「ああ。そんで・・・」

うーん・・・あんまし遠まわしに言ってもわかってくれねーかもしれないしな。

楓「・・・六道骸に話できるか？」

ク「骸・・・様？」

楓「あー、無理ならいいんだ、無理なら」

オレもあんまし会いたくないし・・・あーゆーのは苦手だ。

ク「骸様？・・・わかった。ついて来て」
楓「お、おう・・・」
あ、アポとれた・・・？

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

オレはリボーンに渡されたある人物の写真を見ていた。
ツナ「この人が・・・９代目・・・」
リボーン「なんだ、見せたことなかったか？」
ツナ「ないよ！一度だって！！」
バジル「とてもマフィアのボスには見えませんよね」
ツナ「・・・うん」

想像していた人物像とはまったく違ってて・・・

ツ「なんだか・・・優しそうなおじさんって感じだね」
バ「クスッ。沢田殿もそう思われます？」
リ「ニッ。まあ、９代目は初代を除き、武闘派と穏健派に分かれるボンゴレ歴代ボスの中でも、典型的な穏健派だからな」
バ「その方のためなら命を懸けられる・・・９代目にはそういう魅力があると、親方様に聞きました」
ツ「父さんが・・・？」
バ「それに・・・楓香殿も、９代目には大きな恩があると言ってい

ました」
ツ「楓香が！？」
リ「・・・だから今回のリング争奪戦、楓香の奴こんだけ立ち回ってんだな」
バ「はい・・・」
ツ「楓香・・・」

でも・・・この人がオレとリボーンを引き合わせたんだ・・・
そして、こんな戦いを・・・

ツ「・・・やっぱりあんまり好きになれないな、オレは。こんなことになったのも、この人のせいだし・・・」
バ「沢田殿・・・」

でも・・・

ツ「そんなこと、言ってられないよな」

みんな、厳しい修業をしているんだ。
楓香だって自分の修業もあるだろうに、オレの修業を手伝ってもらったり、学校での・・・京子ちゃん達のこともいろいろフォローしてもらったりしてるんだ・・・

オレもしっかり修業に身を入れなきゃ・・・

ツ「文句はあとで言うよ。・・・ＸＡＮＸＡＳ達に勝ってから・・・」

そうだ。ＸＡＮＸＡＳには・・・負けられないんだ！

ツ「さーて、修業修業！」

楓香、まだかなぁ〜〜。

リ「安心したぞ。昨晩、スクアーロのことをディーノから聞いて、山本が心配で修業に身が入んねーじゃねーかと思ったんだぞ」

ツ「！」

ぞりゃあ・・・心配だよ。

獄寺君もロマーリオさんに掠り傷だって言ってたけど、倒れるくらいのケガしてたし、山本の相手のスクアーロっていう奴・・・

ディーノさんの話だと、もとヴァリアーのボス候補だったらしいし、それぐらい強いらしい・・・

それに、ディーノさんの言ってた、‘流派を越えろ’って・・・

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―黒曜ランド

ク「ここ・・・座って」

楓「お、おう」

指定された長椅子は、まぁこん中じゃ一番綺麗だろうと思われるボロボロのソファーだった。（いってること、矛盾してね？）

するとクロームはオレの正面の椅子に座り、目を瞑った。

そして・・・

？「クフフフ・・・」

楓「！！」

クロームの右隣が蜃気楼のようにボヤケていき・・・

骸「ボクに用があるのはあなたですか？・・・闇の守護者、夜代楓香」

黒曜中の制服に身を包み、清楚な顔に右目の六の文字。

そして・・・

伝説のナッポー頭（ヘアー）、きたーっ！！

骸「・・・今、なにかとても失礼なことを言われた気がしますが」

楓「いや、気のせいだ、うん」

ツナの霧の守護者にして、六道輪廻の覇者・・・

六道骸がそこにいた。

標的３８　【霧への接触　来る！】（後書き）

クローム襲撃？

標的３９　【六道　来る！】（前書き）

骸さん、なかなか難しいです・・・

標的３９　【六道　来る！】

標的３９　【六道　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

あっぶねー、一応初対面だし怒らせるのはよくないな、うん。

骸「・・・で？ボクに聞きたいこととはなんのことですか？もっとも、ボクはいくら守護者と言えど、マフィアには何も答えないと思いますが」

楓「ふっ・・・その割にはオレに姿を見せているじゃねーか」

骸「クフフフ・・・それは、あなたに興味を持ったからですよ。あなたと同じ、マフィアに恨みを持つ者としてね」

！！！

楓「・・・なぜそれを？」

骸「門外顧問のボスから聞いたんですよ」

なっ！

家光の奴・・・骸の興味がひくように、オレをダシに使ったな・・・

楓「あんにゃろ～っ」

骸「しかし、実際あなたは沢田綱吉の守護者としてここにいる。矛盾していますが？」

楓「お前も同じ口だろ、六道骸。まっ、オレの場合はツナに興味があるだけじゃなくて、恩があるっつったらいいかな」

骸「恩・・・まあそういうことにしておきましょう。ボクもそうそう言える立場ではありませんからね」
楓「ま、話だけでもさせてくれ。答えるのはお前の自由ってことで」
骸「・・・まあ、いいでしょう」

これでいくらか話しやすくなった・・・かな？

―――――――――――――――――――――

―イタリア　ボンゴレ本部

パラララ・・・

銃弾が飛び交う中、門外顧問チームの二人は9代目直属の部下に応戦していた。

オレガノ「やはり気持ちいいものじゃないわ、つい先日まで同士だった者を撃つのは」
ターメリック「仕方あるまいて、オレガノ。これも9代目を救出するため」

ため息も吐く暇もなく、オレガノは周囲に注意をおくる。

オ「・・・それにしてもこの城・・・内部に一歩踏み入れると隠し通路ばかりで、まるで迷路だわ・・・」
タ「それだけボンゴレには隠すべき秘密が多いということ・・・業（ごう）が多いとも言えるがな・・・」

？「見つけたぜ、お二人方っ」

スタッと二人に近づいてきたのは、体に不釣り合いな長ライフルを持つ、これまた場違いなほどの小さな体・・・ゴーグルをした赤ん坊だった。

タ「ん？・・・ラル・ミルチか！」

ラル「家光は最深部へ突入したぜ。最後んとこではぐれたが・・・あそこまで行きゃあ大丈夫だろう」

タ「でかしたぞ、ラル・ミルチ」

オ「さすがアルコバレーノ・・・というところかしら、ラル」

ラ「からかうな、オレガノ。所詮なり損ないだ・・・オレは」――

――家光「・・・くっ、追ってこなければいいものを」

家光は9代目のいる小部屋へと、あと数歩のところまで来ていた。

追って来ていることを確認し、家光は手榴弾の安全ピンを外し、投げた。

ドカンッ！！

家光は、両側に絵が飾られている廊下に出ると、ある絵を探しだす。

家光「つきあたり・・・左の・・・カラヴァッジオ！」

バキッ！

その絵を突き破ると、とある小部屋に出た。

どさっ

家光「おー、いて・・・」

？「何の騒ぎだ？」

家光「・・・」

？「家光・・・」

家光「9代・・・目・・・」

家光は目の前で、安楽椅子に座る9代目を確認した。

9代目「首を長くして待っておったぞ。足を病んで歩けなくなったと文を送ってから、どれくらい経つかの？」

9代目「いつまでそうしておる？顔が見たい・・・」

家光「はっ・・・」

そして家光は、9代目の前に深く頭を垂れた。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

楓「お前にも関係ある話だ。この男に見覚えは？」

懐から例の男の写真を出す。

実は雷戦の時に、リリスに密かに撮ってもらっていたのだ。

骸「！？なぜあなたがその写真を？」

楓「こいつがエストラーネオファミリーの、殺されたはずの研究者

だってことはわかっている・・・こいつに見覚えがあるんだろ？」

確かエストラーネオファミリーの研究者は、骸が発つときに皆殺しにしたはず。

骸「クフフフ・・・生きていた、ということですか」

楓「いや、というより・・・こいつはクローンだ」

骸のいう男の死亡確認は取れている。

ならば、おそらく・・・

骸「クローン・・・ですか？」

楓「ああ。わずかだが、実験データが残っていてな。んで骸、憑依弾の存在は知っているな？」

骸「もちろんですよ。それを使用したという理由で、復習者（ヴィンディチェ）の牢獄に入れられたのですからね」

もちろん、それだけじゃないと思うが。

楓「思い出したくないかもしれねーが、そのクローンは憑依弾が基になっているんだ・・・それの応用でな」

骸「応用？」

楓「名称は不明だが、使用者が死亡すると、対象の生物（いれもの）に憑依・・・いや、転生することができるらしい」

骸「・・・なるほど」

六道輪廻の礎、人は生死を繰り返し迷い続ける・・・それを強制的にねじ曲げる。

そして、一番の問題は奴がヴァリアーの‘闇’の守護者であるとこ

ろにある。

楓「そんで、もっと厄介なことがある・・・人工的に‘闇’のリングの適性を持つ個体を造り、そいつに転生したのがこの男だということだ」

骸「しかし、転生前と同じ容姿とは・・・」

楓「何かそこに意味があるのかもしれない。単なるナルシスト、ってことなだけなのかもしれないが・・・」

骸「フム・・・どちらにせよ、おそらく彼は相当な自信家なのでしょうね」

楓「そのおかげでその人物にたどり着けたんだがな」

骸「クフフフ。皮肉なことですね」

楓「まったくだ・・・サンキューな、骸。助かったぜ。なかなかあいつの情報が少なくてな」

骸「・・・あなたに礼を言われるようなことはしていないと思いますが」

まったく・・・お前ほど霧の守護者に匹敵する奴は早々いねーよ。

楓「それでも・・・だ。気にすんな」

骸「クフフフ・・・おや、そろそろ時間です。クロームもこれ以上の負担はかけられませんので・・・」

霧戦があるしな・・・

楓「そうか・・・じゃあな、骸」

骸「では、これで・・・（また会いましょう・・・）」

骸の姿がスッと消えると、クロームがくらっと倒れかける。

トスッ

オレはサッと近づいて支えた。

楓「・・・と。大丈夫か？」

ク「だ、大丈夫・・・」

にしても、こいつ・・・

楓「クローム・・・ちゃんと食べてるのか？」

ク「え？ええと・・・あの、その・・・」

楓「はあ・・・」

華奢なのはわかるけど、軽すぎるよ、クローム・・・

頭を抱えるオレ。

マジで麦チョコだけの生活かよ・・・

肩にかけたカバンから、弁当箱（主にリリスが持ってけって言った）を取り出す。

ポスッ

ク「え？」

楓「これ、食っときな」

膝の上に置かれた弁当箱を見て、あたふたするクローム。

楓「その、なんだ、ちゃんと食っとけよ。お節介の猫が作ったんだからな」

ク「ネコ・・・さん？」

まあ、リリスって猫神（？）だしね。

楓「そのネコさんにありがとうと言っとけばいい。伝えといてやるよ」

ク「ええと、ありがと。・・・それと、あなたも」

あなたも？

楓「？お、オレは・・・なにも」

ク「さっきは助けてくれて・・・ありがと」

楓「うぐっ」

恥ずかしがるクロームの赤らめ＋上目づかいが効果抜群だったオレは、も、もしかしてレズってことになるのか！？

で、でも、オレ前世が男だったし・・・

・・・ま、いっか。

楓「ふふっ、また来るよ・・・」

ク「あ、はい！」

オレは城島達（犬と千種のこと）が来る前に、そそくさと帰っていった・・・

骸「（クロームを頼みます・・・）」

標的４０　【静寂の雨　来る！】（前書き）

雨戦直前・・・！

標的４０　【静寂の雨　来る！】

標的４０　【静寂の雨　来る！】

―スクアーロに勝つには流派を越えるしかないぜ・・・山本―

ディーノの言葉を思い出し、山本は道場で寝転がっていた。

山本「（流派を越えるっつってもな・・・）」

カタ・・・

ツナ「あの・・・ゴメン、邪魔しちゃったかな」

リボーン「ちゃおっス」

楓香「よっ」

修業後、ツナは山本が心配になり、道場に顔を出していた。

ツ「修業終わってちょうど帰り道に道場あるから寄ってこーかなーなんて・・・」

山「よお！」

リ「どーだ？流派を越えられそーか」

ツ「（いきなり核心・・・！！）」

山「ハハ、その話か。さーな、やってみねーとわかんね」

ツ「！」

楓「ははっ、そうか」

山本剛「よお、ツナ君じゃねーか！」

ツ「こっ、こんにちはっ」
剛「あい、こんにちは。・・・おや、そっちの嬢ちゃんははじめましてだな」
楓「あ、はい。ツナの従姉の夜代楓香です。よろしくお願いします」
剛「おお、ご丁寧なこって。山本の父親の剛だ。よろしくな」

山「なんだよ、オヤジ」
剛「今日あたりなんだろ?例のチャンバラ」
山「なっ、何で知ってんの、オヤジ!?」
剛「バーロー、わからーな。って・・・本当はツナ君のお父さんから聞いたんだけどな」
ツ「!父さんから!?(つーか、あの人山本のお父さんに何言ったの~~!?)」
剛「相手は恐ろしく強(つえ)ぇ剣士らしーじゃねーか」
ツ「!・・・」
山「ああ、強(つえ)ぇよ」
剛「ってことならこいつを持ってけ、タケシ」

叔父さんが山本に渡したのは・・・竹刀だった。

山「ん、なんだ?竹刀じゃねーか。のわりに、やけに重いな」
剛「たりめーよ。鋼(はがね)でできてんだからな」
山「え?」

おじさんは山本から再び竹刀を受け取ると、竹刀の秘密を話し始めた。

剛「こいつは時雨蒼燕流継承者が8代前から受け継いできた、‘時雨金時’だ」

右手に持った一本のキュウリを左手に握る竹刀の刀身で叩く。

剛「普通に使えば見た通りのただの竹刀と同じ・・・キュウリ一本切れやしねぇ」

すると、叔父さんはキュウリを軽く上に放り投げた。

剛「だがよ・・・時雨蒼燕流でこいつを抜けば・・・」

スパッ

竹刀を振り下ろすと同時に・・・キュウリが刃物で切ったみたいに細切れになる。

皆「！！」

剛「刀身が潰れて・・・刃を剥く」

その手に持つのは竹刀ではなく、一振りの刀だった。

剛「蒼燕流以外の型じゃ、竹刀に戻る。時雨蒼燕流専用の刀だ」

ツ「すげっ」

楓「おおっ」

山「おもしれーっ」

竹刀に戻った刀を見て、皆、驚嘆した。

リ「山本のバットの、竹刀版って感じだな」

ツ「でっ、でも、今日はこの刀、使えないんじゃあ・・・」

剛「なんでー、そりゃあ？」

山「今日の相手はいくつもの流派を潰してきた強者でさ。そいつに勝つには、流派を越えた動きをしねーとダメなんだってさ」
その話に叔父さんは激怒する。

剛「何言ってやがんでぃ！！バカも休み休み言いやがれ！！！」
皆「！！」

叔父さんは時雨蒼燕流のあり方を話し始めた。

剛「いいか！？時雨蒼燕流の八つの型ってのは、継承者により実戦の中で培われ、磨かれ積み上げられた全てに意味のある、無駄のねぇ動きなんだ。それを超えるなんて、おこがましいやぃ！！！」
山「・・・（汗）
」ツ「（ディーノさんと意見が食い違ってるーー！！）」

山「まーまー、オヤジが時雨蒼燕流に誇り持ってんのはわかっけどさ」
剛「そんな次元の話してんじゃねーよ！！いいか！」

―時雨蒼燕流はなぁ！完全無欠、最強無敵よぉ！！！―

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅディーノ

―山中外科病院

獄寺が負けて1勝4敗か。もう後がない。
そして次の相手は・・・スクアーロ。

獄寺「だあっ！てめー、ちゃんと巻きやがれ！！」
ロマーリオ「おいおい、動くなっての坊主」
ディーノ「・・・」
獄「・・・おい、ディーノ。そんなに山本が心配かよ」
デ「まあ・・・な。スクアーロの強さはオレもよくわかってる方だと思うぜ。
　昔、オレがマフィア専門の学校に行ってたときのことだが、あの頃からスクアーロは飛び抜けて剣の才に長けていた。学校を出てからも様々な剣士に勝負を挑み倒し、そしてその技術を吸収していって今の剣のスタイルを完成させたといわれている。・・・ヴァリアーのボス候補だっただけのことがあるんだ」

流派を超えなきゃ勝てる相手じゃない。

獄「んなこたぁ、昨日もう聞いてんだよ。・・・ったく。」

確かに昨日話したな・・・

獄「確かにあのロン毛は強いかもしんねぇ、でもよ・・・！オレ達はもう負けられねぇ。勝つしかねーんだよ！」
デ「！！・・・心配になってきた。オレも試合見に行くぜ」

もしもの場合でも・・・な。

獄「けっ」
ロ「ああっ、もう動くなって言ってるだろうに」
獄「なーっ！！いつの間にこんなぐるぐる巻きにしやがった！！？」

ロ「これが男の治療だ」
獄「ふざけんな！これじゃあ動けねーだろうが！」

ガラッ

了平「おっす、獄寺。・・・なんだそれは？」
獄「あっ、芝生頭！！？てめーでいいから、解きやがれ！」
了「その姿・・・極限にいいではないか！！！いくぞ、タコ頭（ヘッド）！！」
獄「んがぁっ！解けーーっ！！」
デ「おい、了平」
了「む？」
デ「今日の試合・・・お前はどう思う？」
獄「！！」
了「そんなこと、決まっとるだろうが・・・」

了平はスッと拳を引き締め、そして・・・

了「極限に勝利に決まっておるだろうが！！打倒ヴァリアーだぁ！うぉぉっ、極限っ！！」

思いっきり握り拳を突き上げる了平。

獄「ぐがっ、うっせーぞ、この芝生頭！！」
了「なに！？極限の勝利は、極限のパワーが必要なのだぁ！！獄寺は負けるとでも言うのか！」
獄「んなもん、勝つに決まってんだろうが！！とにかく、おめーはもう少し静かにいられねーのかよ！」
デ「！！」
了「む・・・確かにそうかもしれんが・・・極限にムリだぁーっ！！」

獄「開き直るんじゃねぇ！」
了「ではいくぞ、タコ頭（ヘッド）！！」
獄「解いてからつけてけーーっ！」

騒がしく出ていく2人を見ながら、オレは山本の可能性にかけてみようと思った。

あいつらが信じた山本なら、なんとかなるかも・・・な。

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

―並盛中

その夜、オレ達5人（道場にいた者＋バジル）は雨の守護者対決のため、並盛中に他の守護者より一足先に来ていた。

ツ「山本・・・どーするつもりだろう・・・」
リ「さーな」
楓「山本の叔父さんは流派を超えるなって言ってたけどな」
山「♪」

山本はいつも通りの感じで、‘時雨金時’片手に前を歩いていた。

流派を超えられるか、そしてスクアーロに勝てるか・・・オレはそのことについてあまり心配していなかった。

・・・確かにその結果を知ってるってのもある。

でも、オレみたいなイレギュラーが存在するこの世界では、何が起こるかわからない。未来が変わるかもしれない。

けど・・・

山「んー、まだ誰も来てねーな」

ツ「（どっちが正しいんだ～～!?相手はあの激強のロン毛だってのに～～っ）」

ツナも悩んでるみたいだけど・・・

？「う〝お〝ぉいっ!!」

バッ

スタッ

スクアーロ「よく逃げ出さなかったな、刀小僧!!活け造りにしてやるぞおぉ!!」

バ「S（スペルビ）・スクアーロ!!」

ツ「でっ、でたーっ!やっぱこえーっ!!」

楓「!!・・・」

山「そうはならないぜ、スクアーロ」

ヒュッ

‘時雨金時’を一振りし、刀に変形させる山本。

山「オレがあんたを、この刀でぶっ倒すからよ」

ス「ん、変形刀か・・・」

ツ「ってことは・・・流派を超えるんじゃなく、時雨蒼燕流で・・・」

山「オヤジが無敵ってんだから、無敵なんじゃね？」

ス「無敵だぁ？オレは自ら無敵とほざいたバカ共を、何百と葬って来たぞぉ！！」

ツ「ひいいいっ！そんなぁ！！山本、その選択はやっぱりやばいんじゃ・・・！！」

山「本当・・・やべーよな・・・サヨナラのチャンスにバッターボックスに立つみてーにゾクゾクするぜ」

ツ「！！山本・・・」

バジル「山本殿、こんな時に何を・・・？」

ツ「そっか・・・そーだよな。忘れてた」

バ「え？」

楓「ふふっ♪」

リ「ニッ」

リング争奪戦前、初めて山本に会ってからずっと感じていた・・・常に平常心をもち、自分らしさを保つ、山本の強さ。

・・・リボーンの言ってたことが今なら分かるぜ、山本が生まれもっての殺し屋（ヒットマン）だっていってたこと。

そこから感じる、信頼感こそ・・・

ツ「あれが山本なんだ・・・昨日のスクアーロの話を聞いても自分の修業に集中できたのは・・・」

―山本なら、何とかしてくるそうな気がするからだ―

標的４１　【《雨戦》　来る！】

標的４１　【《雨戦》　来る！】

ｓｉｄｅツナ

オレ達が他のメンバーが来るまで待っていると、ヴァリアーのスクアーロ、そして謎の多いチェルベッロ機関の人達まで来た。

チェルベッロ「失礼します。今宵の対決フィールドは校舎Ｂ棟です。Ｂ棟へおこしください」

ツナ「また校舎。今度はどんなフィールドなんだ・・・？」

スクアーロ「う〝おぉい！それはどこだぁ！？」

チェ「こちらです」

ス「待ってるぞぉ！」

山本「あぁ」

そう言い残し、スクアーロは一足先にその校舎に向かったようだ。

了平「遅れてスマンな！こいつを連れてきたんでな」

？「～～～！！」

なっ！

京子ちゃんのお兄さんと、包帯をぐるぐるに巻いたミイラが・・・！！

ツ「ファラオーーッ！！」

獄「ち・・・違うっス！オレっス！（ファ、ファラオ・・・）」

ツ「獄寺くん!?」
楓「ははははっ、なんだよそのカッコ!」
獄「オレの意図じゃないんス!ロマーリオのおっさんが、これが男の治療だ、とかぬかして大ざっぱに包帯巻きつけやがったんスよ!」
それは包帯をグルグルに巻かれた獄寺君の姿だった・・・
というか、

ツ「ケガ、大丈夫なの?」
獄「ほとんど掠り傷っスよ。ロマーリオのおっさんが大げさに巻いているだけっス」
了「安静が必要なのだが・・・どーしても行くというので手を貸したんだ」
獄「借りてねーよ!勝手についてきたんだろ!!勝負の行方も知れずに殺られたらたまんねーからな」
山「心配性なのな」
獄「おめーがお気楽すぎんだよ!!」

獄寺君と山本達、また喧嘩(?)してるし・・・
でも・・・みんなを見てると、少しだけ気持ちが楽になった。

---

side楓香

その後、一行は対決フィールドである校舎B棟まで来たのだが・・・

ツ「あ、あれ?」

校舎の様子が明らかに違ったいた。

ツ「窓が塞(ふさ)がれてる!!?」

山「入口も・・・みてーだな・・・」

窓、扉が塞がれ、穴という穴が全て塞がれていた。

楓「なんだ、これは・・・」

リ「ここから入れるみてーだぞ」

ザァァァ・・・

ツ「・・・?」

中から音が聞こえてきた・・・

山「何の音だ・・・?」

楓「噴水の水・・・?ってそれはねぇか・・・」

ガチャ・・・

皆「!!」

扉を開けて、いきなり飛び込んできたのは・・・

ザァァァ・・・

噴水なんか綺麗なものではなく、

無惨に破壊された校舎内・・・そしてその間を縫うように水が、上から大量に流れ落ちている光景だった。

ツ「何これ!?」
獄「校舎の原形とどめてねーじゃねぇか・・・」
楓「崩壊寸前じゃん・・・」

いや、建物全体を支える柱などは最小限残ってる・・・チェルベッロ機関の職人の腕の良さ（？）か？

チェ「これが雨のバトルのための戦闘フィールド・・・“アクアリオン”」
皆「!!」

再びチェルベッロ機関が現れ、フィールドの説明をするが今回は省略する。

要は上からの水が下の階に溜まっていき、次々と下の階から水で埋まっていくらしい。

了「まるで沈没船だな・・・」
バ「徐々に足場の確保が難しくなっていきますね」

そして一定時間が過ぎると・・・

チェ「獰猛な生物が、フィールド内に放たれます」
ツ「ええっ!?ドーモーな生物っ!?」

？「面白そーじゃん♪」
皆「!!」

その声の方を見ると・・・

ツ「ヴァリアー！！」

上の階を見上げると、ヴァリアーの姿があった。

べ「うししし・・・朝起きたらリングゲットしてんの。王子すげー♪」

ベルフェゴールが昨日の戦いで手にした嵐のリングを見せつけてきた。

獄「くそっあんにゃろ！」

獄寺は悔しそうに呻く。

ザッ

そして、ヴァリアーの後ろから・・・

ツ「ＸＡＮＸＵＳ！！」

ＸＡＮＸＵＳが前へ出てきた。

バジル「楓香殿！！」

楓「大丈夫・・・さすがに慣れた」

もう試合を乱す訳にはいかねーからな・・・

お前にはもう少し、大人しくしてもらうぜ・・・‘フウカ’さんよ！

ＸＡＮＸＡＳ「ん?今回は仕掛けてこねーのか?」
楓「うっさい。さすがにやべーからな」
Ｘ「・・・まあいい。負け犬はかっ消すだけだ。てめーらか・・・」

ＸＡＮＸＡＳはスッとスクアーロを盗み見る。

Ｘ「このカスをだ」
ス「な・・・ってめぇ!!」

そう言い残し、再び奥へと消えていくＸＡＮＸＡＳを、スクアーロを睨んでいた。

？「よっ、来たぜ」
ツ「ディーノさん!」
楓「ディーノ?」

後ろからの声に振り向くと、なんと跳ね馬ディーノだった。
というか、来ること忘れてただけだけどな、オレが。

ディーノ「山本、お前の勝負見させてもらうぜ」
山「うぃっす」

ま、ディーノの心配もわかるけどな・・・

ディ「恭弥の奴も昨日突然リング争奪戦の話を聞いてくれてな」

あ、雲雀も来てんだ♪

ツ「昨日まで知らなかったのー!?」

ディ「たぶん見に来てるぜ」―

―その頃、並中の屋上には、学ランを羽織った・・・雲雀の姿があった。

雲雀「皆殺しにすれば早いのにね・・・」

雲雀はそんなことを呟きながら見ていた・・・その時。

雲「・・・？」

雲雀はどこかからか気配を感じた・・・

そして、それは体育館の屋根の上からで、人の影が3つあった・・・

？「山本武・・・勝って自分のところにまで繋いでもらおう・・・」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

リボーン「もう1勝3敗で後がねーからな。いろんな意味で注目の一戦ってわけだぞ」

了平「よーし！！そうと決まれば、円陣に雲雀もいれるぞ！！」

ツナ「い〝っ！？」

ひっ、ヒバリさん!!?

獄寺「あいつは無理だろ・・・」
山本「ハハッ、だな」
楓香「来たらどーなるか」
ツ「絶対殺される・・・」
楓「まさに台風のごとく・・・な」
ディーノ「オレもそう思うぜ・・・」

けど、

了「特例などオレが許さん!!」

お兄さんは諦めていないようだ・・・

ツ「まーまー、そのかわりってわけじゃないけど、バジル君いれちゃだめかな・・・」
バ「え、拙者も・・・いいんですか?」
獄「１０代目が言うのならオレはいいぜ」
楓「おっ、それいいんじゃね?」
山「運命共同体だからなっ」

バジル君も参加してくれることになった。そして・・・

ツ「もちろんランボも・・・」

オレはポケットからランボのしっぽを取り出した。

リ「それを見ると思い出すなぁ・・・アホ牛の在り日を」
ツ「そのネタはもういいって!!」

山「ハハっ、気に入ってんのな」

じょ、冗談はそれくらいにして・・・

了「よし!!山本ファイッ!!!」

皆「オーーーっ!!!」

チェ「では雨の守護者は中央へお集まりください。尚、今回は水没するため観覧席は校舎の外となっており、勝負の様子は壁に設置された巨大スクリーンに映しだされます。」

チェ「守護者以外の方はすみやかに退室してください」

気合いを入れ直した山本は、チェルベッロの指示に従って中央へと歩き出す。

了「じゃあしっかりな、山本!!」

楓「行ってこい、山本!」

獄「負けんじゃねーぞ」

山「オッケ」

ツ「じゃ、じゃあ・・・がんばって!」

山「おう!あとでな」

朗らかにフィールドに向かう山本の背を見ながら、オレは無事を祈った。

山本・・・気をつけて・・・

ｓｉｄｅ山本

チェルベッロ・・・っつったっけ？
野球でいう審判に従って、オレはスクアーロの待つ上の階へと瓦礫を伝って上がった。

チェルベッロ「尚、制限時間は無制限です」
スクアーロ「う〝お〝ぉい！！まだ懲りないらしいな・・・一週間前に逃げ出さなかったことを後悔させてやるぞぉ！！」

お、言うねえ！

山「ハハッ、やってみなきゃわかんねーぜ？」
ス「はっ、カスが・・・」

そして試合開始の合図が響く・・・

チェ「それでは雨のリング争奪戦・・・」
チェ「Ｓ（スペルビ）・スクアーロＶＳ山本武・・・勝負開始！！」

ス「とばすぜぇ！！」

開始と同時にスクアーロが前に出た。

ビュッ！！

オレはスクアーロの剣をかわす・・・が。
ドシュッ！！

スクアーロは例の刀からの火薬を繰りだした。

山「!!」

ツ「そーだあの武器・・・刀の刃から!!」

獄「仕込み火薬!!」

ドゴォッ!!

山「っと!!」

ス「ほう・・・よけたか」

オレはその攻撃をよける。けっこうギリギリだったな。

山「あっぶねー・・・あんたに負けてから毎日やってたイメトレのおかげだな」

やっぱ、イメトレは基本だな♪

ス「イメトレだぁ?カスがぁ・・・こいつもイメージ・・・」

また前に出るスクアーロ。だが・・・

ス「・・・できたか?」

さっきとは動きが違う!?

ピシャ・・・

山「!」

スクアーロが目の前から・・・

山「消えた・・・？」

バッ！！

山「！！」

後ろから！？

ガッ！！

ス「う〝おいっ！！」

ツ「何だ今の！？」

楓「なかなか・・・」

バ「速い！！」

ス「あれがオレの力だと思ったら大間違いだぁ！！死ねぇ！！」

山「！！！」

スクアーロの刀の刃から、また仕込み火薬！！

やばっ！！

ディ「あの距離では！！」

ドォンッ！！

sideツナ

スクアーロは爆発をよけ、山本の姿だけが見えなくなった・・・

獄「！！」

ツ「山本！！」

ス「フッ」

スクアーロは勝利を確信するかのように鼻で笑った。

だが・・・

ス「！？」

ドウッ・・・

ツ「な、なんだ！？あの煙の形・・・！？」

リ「山本の奴、抜いたな」

楓「ああ」

ツ「えっ！？」

抜いた・・・？

楓「時雨蒼燕流の型の一つ」

リ「ああ、これが時雨蒼燕流・守式七の型・・・」

“繁吹き雨”

煙りのように舞う水渋きが、山本を囲むようにたっていた・・・

ス「何だとぉ！！？」

標的４２【静寂に迫る鮫　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

ヒュッ

山本はスクアーロの剣の仕込み火薬を時雨蒼燕流でかわし、時雨金時を一振りした。

ツ「す、すごい！ロン毛の爆風をかわしたよ！！」

ディ「あれが山本の時雨蒼燕流・・・この短時間でよくここまで・・・」

リ「まったくだぞ。この１週間山本がほとんど寝ずに稽古（けいこ）していたのは知っていたが、型を覚えるのと実戦で使うのとではまるで次元の違う話だからな」

実戦経験はつくってやれなかったからな・・・

とくに剣などの近接戦闘は、そういう経験がものをいうことがほとんどだ。

リ「ましてや命がけの勝負だ。カタギの人間がいきなり臆することなく戦えるとしたらよほどのバカか・・・生まれながらの殺し屋だぞ」

ツ「な！？山本が殺し屋って・・・何言ってんだよリボーン！！」

ツナはまた変なこと言って！！って顔をしているが、確かに山本は

スゴい逸材だな。

ディ「・・・だが、これ以上時雨蒼燕流に頼るのは危険だ」

ツ「！」

楓「・・・」

べ「ふーん・・・まさかスクアーロの剣術をかわすなんてな」

マ「ふん。まあまあ出来るようだね」

そしてスクアーロは・・・

ス「う〝お〝おい！！！図に乗るなぁ！！！ヒヨッ子がぁ！！！」

再び剣から仕込み火薬を出し、それを床に溜まる水の左右に打ち込み、山本の行く手を水柱で塞いだ。

山「（やっべ、塞がれたっ）」

ス「切るっ！！！」

山「えーっと、こんな時は・・・こいつだ」

チャプ・・・

迫るスクアーロの剣に対し、山本は時雨金時の先を水に浸け・・・

ザッ！！

勢いよく剣を上にあげ、水を巻き上げる。

ス「！！」

獄「な・・・何だ!?」
リ「時雨蒼燕流、守式弐の型・・・」
ス「ちいっ」
“逆巻く雨”
ツ「・・・!!」
バ「水の壁で姿をくらました上に身を縮めて防御・・・あれではあたりません!」
ツ「やっぱりすごいよ!山本も時雨蒼燕流も!!」
リ「だといいんだけどな・・・」
ツ「!?」
楓「スクアーロの奴が・・・」
ディ「喜んでいる様に見えるな・・・」

---

side山本

ス「う〝おぉい小僧!!なぜ防御の後打ちこんでこなかった!!」
山「?」
ス「てめぇはオレに唯一傷をつけることができた最後のチャンスを潰したんだぞぉ!!」
チャンス?・・・何のことだ?
ツ「え・・・?」

べ「ししし・・・」
マ「どうやらスクアーロは確信したみたいだね」
了「負け惜しみを言いおって！ハッタリに決まっている！」
山「ハハ、最後って・・・ずいぶん言ってくれるな」
・・・でも、
山「言っとくけど時雨蒼燕流は、これだけじゃないんだぜ」
今までの型はすべて守式！
今度は攻式で・・・攻める！！
ス・・・ッ
オレは時雨金時を構えると、一気にスクアーロとの距離を詰めた。
獄「！」
ツ「山本が初めて・・・前に出た！」
そして素早く切りかかり・・・
ヒュッ
ディ「（速い！！）」
ブオッ

バ「山本殿の手に・・・刀がない！！」
リ「時雨蒼燕流、攻式五の型・・・」
五の型をスクアーロに食らわせた。
ザシュッ！！
“五月雨”
ツ・獄「！！」
バ「今のは・・・っ」
リ「五月雨・・・一太刀のうちに刀の持ち手を入れ替え、軌道とタイミングをずらす変幻自在の斬撃だ」
獄「ま・・・まーまーやるじゃねーか」
ツ「すげぇ、山本・・・」
楓「・・・」
ベ「めでたい連中だな」
マ「ヴァリアーのボス候補になるということがどれほどかわかってないね」
ス「う〝おぉい！！」
山「！」
ス「効かねぇぞ・・・」
ツ「！」
山「あり・・・？」

スクアーロは・・・無傷？

ディ「スクアーロは・・・無傷だ・・・！！」

ツ「な・・・！？間違いなく当たってたのに！」

楓「山本の刀の軌道に合わせて、一瞬身をひいて避けたんだよ・・・一瞬の判断でな。まるで・・・」

リ「ああ。奴に動きを読まれたいたとしか考えらんねーな」

ツ「そんな・・・どうして！？」

ス「う〝お〝おい・・・お前の使う無敵の流派とやらはこんなものかぁ！？」

山「！」

ディ「（まずいな・・・やはり怖れていたことが・・・）」

ス「それとは別に1つ腑（ふ）に落ちねぇことがある・・・貴様なぜ今の一太刀に刃ではなく峰（みね）を使った？」

獄「！」

ツ「峰打ち・・・？」

山「そりゃあオレはあんたに勝つためにやってんで・・・殺すためじゃねーからな。・・・師匠にはやめとけって言われたけどな」

ツ「えっ、・・・師匠？」

楓「ふふっ（山本らしいったら、らしいか・・・）」

ベ「ナンセーンス」

マ「ふざけてるね」

ス「う〝おぉい！！ずいぶんナメてくれたなぁ！！その生意気な口をきけなくしてやる！！」

ザッ！！

山本は再び逆巻く雨を繰りだした。

ス「（ニヤ・・・ッ）」

ザバァッ！！

スクアーロは山本と同じように、剣で水柱を作った。

山「！？」

ディ「これではお互いに視界が！！」

リ「先に見つけた方が勝ちだな」

山「・・・！」

スクアーロは山本の背後に回っていた。

そして・・・

ガキィッ！！

皆「！！」

山「・・・」
ス「!!・・・んだとぉ!!」

スクアーロの攻撃を・・・

山本は捉えていた。

山「ハハッ、やっぱり師匠に言われた通り、オレは後ろが狙われやすいのな」
ス「ぐっ・・・ふっ・・・ハッハッハッハッ!!」

ツ「!」

ス「そうだぁ・・・お前の剣は、確かに型はなっているかもしれねぇ・・・だが、所詮付け焼き刃。まだ実戦がなってねぇ。だから背中ががら空きなんだぁ・・・だが」

交えていた剣を離し、一端距離をおくスクアーロ。

ス「何故、今の今までのほほんとしてやがったぁ!さっきまでとは構えが違うじゃねーかぁ!!」

獄「さっきまでとは構えが違う・・・?」
ツ「それって・・・」

山「・・・これも師匠の直伝でね。出来るだけ、自分の手の内は相手に見せねーように教わったんだ。っても、今の相当ヤバかったからな・・・」
ス「くっ、ガキがぁ・・・」

ツ「すっ、すごいよ山本！」
ディ「ああ・・・だが、師匠とはいったい・・・」
リ「ニッ（お前のおかげで山本の負傷が免れたぞ、楓香）」

・・・リボーンは知っていた。
というのも、リボーンは山本の修業をちょくちょく様子見にきていたからだ。
ツナの修業相手をしているといっても、楓香がツナに割いていた修業時間はそう長くなかった。
というのも、まだツナがついていけるレベルではないからだ。
体を壊すことは良くないこと（もちろん、リボーン本人もそういう考えを持っているが・・・）と判断した楓香は、時間制限をつけてツナの戦闘力の底上げに徹底している。
そして、その他の時間をバジルとのスパーリングに当てているのだ。

そのバジルとのスパーリング中に、楓香は山本のいる道場へと足を運び、自分一人では出来ないスクアーロとの差・・・実戦の差を少しでも埋めようと山本の父にも秘密で、竹刀で修業相手をしていたのだ。
もちろん、気づいていたようだが・・・

楓「盗み見はなしだぜ、リボーン」
リ「ニッ。やっぱバレてたか」

そういった会話を交わしたのも、真新しかった。

楓「みんなには内緒にしてくれっか？とくにバジルとかには」
リ「ああ。今は猫の手も借りてぇぐらいだからな・・・」

そして去り際に一言。

リ「だが、あんまり無茶すんなよ、楓香」
楓「・・・ああ。サンキューな」――

楓「（だが・・・）」

それでも・・・スクアーロの優勢は変わらない。

ス「う〝お〝おい・・・確かにさっきよりかはマシになったが・・・」

再び剣を構えるスクアーロはニヤリと笑った。

ス「貴様に勝利は万に一つねぇ！オレの剣技を喰らえ！！」

ダッと駆け込んでチャプッと音を残して姿を消す。

山「（どこだ・・・！！）」

気配が２つ！？

ス「死ねぇ！！」

ビュッ！！

獄・了「！！」
ツ「山本！！」

ドパッ・・・

山「ぐっ・・・・」

深くはないものの、切られた脇腹を抑える山本・・・

ス「どうだぁ・・・痛いかぁ!?やはり眉唾ものだぁ!!最後に絶望的なバッドニュースを教えてやる。貴様の技はすべて見切ってるぜぇ・・・その時雨蒼燕流は、昔ひねりつぶした流派だからなぁ!!」

山「!」

パシャ・・・

山本は痛みに耐えきれず・・・その場に座りこんだ。

ツ「し、時雨蒼燕流を・・・昔つぶしただって・・・!?」

標的４３　【蒼燕流　来る！】（前書き）

雨戦終盤・・・！

標的４３　【蒼燕流　来る！】

標的４３　【蒼燕流　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

スクアーロ「剣帝という男を倒し極めた剣を試すため、オレは強ぇ相手を探していた。
　そんな折(おり)細々と継承されている完全無欠の暗殺の剣が東洋にあると聞いた。それが‘時雨蒼燕流’・・・
　見つけたぜぇ！継承者と弟子の３人をな！貴様と同じ八つの型を使いやがった！　だが、所詮(しょせん)は古典剣術の亜流(ローカル)！！すべての型を受け！！見切り！！刻んでやったぞぉ！！」

ツナ「そ、そんなことって！」
リボーン「おそらく本当の話だぞ」
楓香「ああ。スクアーロの技の見切りは、反射レベルってよりもその技をすでに知っていて見切っている感じだからな」
ツ「・・・！！」
バジル「なんて奴だ・・・山本殿の時雨蒼燕流まで・・・！」
ディーノ「（スクアーロ・・・剣帝を倒したのは伊達(だて)じゃない・・・）」
ツ「じゃあ、山本の技はもう全部効かないってこと・・・？」

そう・・・なるな・・・

山本「聞いてねーな、そんな話」

獄寺「！」

ス「ん〝ん？」

それでも、山本はよろけながらも立ち上がる・・・

山「オレの聞いた時雨蒼燕流は・・・完全無欠、最強無敵なんでね」

ス「あ〝ぁ？」

山「ハハ、まだやってみなきゃわかんねーって」

ス「もう・・・加減はしねぇぞぉ」

そう言うと、スクアーロは剣を構えた。

今までとは違う殺気で・・・

ツ「！」

マ「スクアーロが牙を剥く・・・」

山「いくぜ」

ドシュッ！

スクアーロの仕込み火薬を避ける山本・・・

だが、

ガッ！

スクアーロは臆することなく校舎の柱を鋭い剣撃で削り、山本に向けて破片を放った。そして、それを避けようとする山本だったが・・

・

ザクッ！

山「！！」

ツ「山本！！」

そして、破片は山本の右目に刺さってしまった。

山「ぐあっ！！」

ス「動きだしたら止まらねーぞぉ！！

山「くっ」

下がる山本を追撃するスクアーロ。

そのスクアーロの動きに対し、山本は反撃に出た。

山「（時雨蒼燕流・・・攻式五の型・・・）」

獄「！！」

“五月雨”・・・

タイミングをずらす五月雨を繰り返した山本。

しかし、スクアーロは完全に見切っていた・・・

ス「（ニヤ・・・）」

ガキィィィィィ・・・

スクアーロと山本の剣が互いに合わさり、

山「！！」

何故か山本の動きが、止まった・・・

獄「！？」

ツ「山本・・・？」

楓「くっ・・・」

バ「山本殿！！なぜ動かない！！」

ス「死ねっ！！」

山「くっ」

ガッ！！

山本はすぐさま自分の硬直した左腕を殴って、硬直を解いた・・・

が。

ザシュッ！！

山「がっ」

ザバァッ！！

山本は後ろに飛ばされてしまった。

獄「山本！！」

ス「う〝おぉい」

山「っつ～」

マ「スクアーロが放ったのは鮫衝撃（アタッコ・ディ・スクアーロ）・・・
　渾身の一振りを強力な振動波に変え相手の神経を麻痺（まひ）させる衝撃剣・・・」
べ「自分の腕殴って硬直解くとは・・・やるじゃん」

マ「・・・でもアタッコ・ディ・スクアーロの衝撃は素手をバットで殴られるより強いんだ、しばらくあの手は使い物にならないだろうね」

マーモンの言ったとおり、山本は打たれた右手を庇うようにしていた。

ス「う〝おぉい!!顔色が悪いぞぉっ!!」
山「!」

それでもスクアーロの追撃は止まず・・・
タタッ

それに気づいた山本は、上の階へ向かった。

ス「う〝おぉい!!逃がすかぁ!!」
山「っつ〜」

上の階に足をかけ、安心した・・・かと思いきや・・・

ガタガタガタ・・・

山「!」

ガガガガッ！！

下からスクアーロの剣が山本を襲った。

ス「散れ、鮫の牙（ザンナ・ディ・スクアーロ）！！」

ザバァンッ！！

凄まじいスクアーロの剣撃で床が崩れ、山本は下の階に真っ逆さまに落ちた。

獄「や、山本・・・」

ツ「山本ー！！」

楓香「・・・」

？「・・・あれでは・・・」

霧に包まれた影が、呟く・・・

？「S（スペルビ）・スクアーロ・・・恐ろしい男・・・」

side山本

ＸＡＮＸＡＳ「何年経っても、変わりばえのしねー野郎だ」
マーモン「さすがスクアーロというところかな、ちゃんと最後に雨の守護者の使命を体現している」

上から流れ落ちる水が、階下の山本（てき）に落ちていく様は・・・

マ「戦いを清算し流れた血を洗い流す鎮魂歌（レクイエム）の雨・・・」

ス「さあ小僧！！心臓を切り刻んでやるぞぉ！！」

ツ「山本・・・！！」

・・・オレは崩れ落ちた瓦礫の上で、実力の差を嘆いていた。

山「ちくしょ・・・こーも一方的かよ・・・負けたなんて知ったら、オヤジ怒るんだろーな・・・」

ス「まだやるか？得意の時雨蒼燕流はどぉしたぁ！！継承者は八つの型すべてを見せてくれたぜぇ？最後に八の型・・・“秋雨”を放ったと同時に無残に散ったがなぁ！！」

！！

八の型、“秋雨”・・・？
なんだよそりゃ・・・聞いたことないぜ・・・？

八の型は・・・

オレはしばらく考えた・・・

―八の型はな、八つ目に出来た型よぉ・・・・―

！！

そっか・・・

山「そーいうことかよ・・・オヤジ！」

ツ「山本ー！！」

ス「う〝お〝ぉい！！ガキども！！刀小僧の無様な最後を目ん玉かっぽじってよく見ておけぇ！！」

獄「！」

ツ「山本・・・！！」

ス「ん〝？」

ザパァ・・・ッ

オレはスクアーロに本当の時雨蒼燕流の強さを知らしめるため、再び立ち上がった・・・

ス「う〝おぉい寝ていろ！！そのままおろしてやるぞぉ！！」

スクアーロは剣をブンブン振り回しながらそう言った。

けど・・・

山「そーはいかねー・・・時雨蒼燕流は、完全無欠、最強無敵だからな」

ベ「頑固なやつ・・・」

マ「強がり言ったところで…あの体じゃ何もできやしないくせにね」

ス「カスが!!まずはそのへらず口から切り落としてやる!!」

スクアーロの仕込み火薬と剣撃が周囲の水を撒き散らす・・・

ズザザザッ

―剛「精が出るなー、武」

山「おう、オヤジ」

剛「ほい、差し入れだ」

山「おっ、サンキューな」

道場で型の修練をしていると、親父が仕事着で差し入れを持って入ってきた。

剛「どーだい、蒼燕流の八つの型はモノにできそーかい?」

山「ま、やるだけやるさ。実戦でやってみねーとわかんねーな」

剛「そーか。ハハッ、そーだよな」

山「でも、今んとこ一番しっくりくるのが八の型・・・だな。なんかわかんねーけど、一番打ちやすいんだよ。なじむっつうか・・・」

剛「!」

すると親父は嬉しそうに頷いていた。

剛「ほーう、やっぱ似てんだなー。ほーう、そうかいそうかい」

山「？なんだよ、やけに嬉しそうだな」

剛「ハハハッ。八の型は八つの中でも八番目に出来た型でな」

山「ん？型に順番なんてあんのかよ？」

剛「おうよ。その日は突くような激しい雨の中で出来たって話だ・・・」―

・・・オレはようやくスクアーロと同じ階まで上がり、構えをとった。

山「・・・いくぜ、時雨蒼燕流・・・」

ツ「山本・・・！」

獄「あいつ、まだ・・・！」

ディ「いかん！！」

ス「う〝お〝おい・・・脳細胞がねぇーらしいなぁ！！その構えは知ってるぞ！！さぁ打てぇ！秋雨を！！」

ツ「山本！！」

ス「（終わりだぁ！！）」

時雨蒼燕流・・・攻式八の型・・・

時雨金時の握りに力が籠もる。

そして・・・

ドッ！！！

“篠突く雨”

オレは“篠突く雨”を放った・・・

ス「な・・・にぃ・・・」

その山本の剣撃を避けられず、スクアーロはモロに喰らった・・・

ツ「！」

X「・・・」

ス「ぐはっ」

ツ「あ、当たった・・・」

レヴィ「どーなっている・・・！？」

山「ハハハ・・・やっぱりな」

ス「ぐ、ぐはっ・・・！」

ふらふらと立ち上がるスクアーロを見て、やっぱりオレの考えは当たっていたと確信した。

ス「貴様！！時雨蒼燕流以外の流派を使えるのかぁ！？」

山「いんや、今のも時雨蒼燕流だぜ」
ス「！！」

そしてオレは言った・・・

山「八の型“篠突く雨”は・・・オヤジが作った型だ！」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

獄寺「！？」
ツナ「！！」
リボーン「なるほどな。それで八代八つの型なんだな」
ディーノ「ん？」
リボーン「時雨蒼燕流にとって継承とは変化のことなんだ」
楓香「・・・」
ツ「変化・・・？」
楓「おそらく、山本の親父さんとスクアーロが倒した継承者ってのは、同じ師匠から一から七までの型を継承されて、その後それぞれが違う八の型を作ったんだろうな」
ツ「え・・・？」
バ「同じ流派を名乗りながらですか…？」
リ「時雨蒼燕流の継承者は、先人の残した型を受け継ぎながら新たな型を作り、そして弟子に伝えていくんだ」
バ「で、ですが、それでは継承の度に枝分かれして無数の型が生ま

れてしまうのでは？」

リ「逆だぞ。むしろ今まで途絶えなかったのが不思議なくらいだ」

楓「1度きりといいシビアな継承法・・・変化には進化だけでなく退化もある。その中で最強を謳い、あえて強者から狙われるんだ」

リ「まるで自分で自分を追い込むみてーにな・・・ゆえに時雨蒼燕流は気と才ある者途絶えた時世から消えることも仕方なしとした滅びの剣と呼ばれる」

ス「う〝おぉい！！ガキ・・・」

立ち上がるスクアーロは吐き捨てるように言った。

ス「正直ここまでやるとは思ってなかったぞ・・・だからこそその峰打ちは解(げ)せねぇ。

真剣勝負をナメやがって・・・

それともまだオレの知る型と違う型があるのか？」

山「ん・・・？ハハハ。残念ながら一から七の型はあんたが知ってる型と同じだぜ」

なっ、そんなこと言っちゃっていいの！！？

ディ「！バ、バカ正直にバラしやがった・・・」

ス「やはり死ぬしかねぇようだな！！一度喰らった篠突く雨はすでに見切った！！」

ツ「そ、そんな！」

でも、山本は表情を変えずにいた。

山「さすがだぜ、そうこなくっちゃな・・・んじゃいってみっか。

時雨蒼燕流・・・九の型」

ス「！！」

標的４４　【蒼燕流九の型　来る！】

標的４４　【蒼燕流九の型　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツナ「きゅ・・・九？」

・・・って、ことは！！

リボーン「山本の奴、新たな自分の型を放つ気だぞ」

楓香「時雨蒼燕流九代目を継ぎ、九の型を収める・・・」

ディ「なるほどな。常に流派を超えようとする流派・・・もしそれができるのならば、確かに時雨蒼燕流は完全無欠、最強無敵・・・」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ山本

スクアーロ「何だぁそのふざけた構えは野球でもするつもりか！？」

オレの構えは、確かにスクアーロの言うとおりバッターボックスに立つ打者そのものだ。

だが・・・

山本「あいにく野球（こいつ）しか・・・とりえがないんでね」

―・・・いつの間にか、時雨蒼燕流の八つの型を野球の打席と例えて考えていた自分がいた。

ハハッ・・・獄寺に野球バカっていわれるだけあるな・・・

―楓香「お前が時雨蒼燕流が完全無欠、最強無敵だというなら・・・その義を貫け・・・山本」―

楓香・・・

んなら、9の型、9番打席のラストバッター・・・

サヨナラホームラン・・・と、いきますか!!―

リボーン「この一撃でケリがつくな」

ディーノ「ああ・・・」

ツナ「で、でもあの竹刀・・・時雨蒼燕流でなくちゃ使えないんじゃ!?」

リ「だからこそ・・・山本の父は山本にあれを持たせたんだ」

ツ「!」

楓香「あの竹刀を変形させることができなければ・・・山本に最強の剣術を継ぐ資格がないということだな」

ツ「そんな危険な賭(か)け・・・!!」

バジル「!スクアーロが動きました!!」

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

スクアーロは剣を構えると、山本に突っ込んでいった。

スクアーロ「図に乗るなよガキ！！オレの剣の真の力を思い知れ！！」

ズアッ！！

バ「！水がえぐられていく！！」

マーモン「鮫特攻（スコントロ・ディ・スクアーロ）。まさかここで剣帝を倒したスクアーロの奥義が見られるとは・・・」

剣帝を倒した奥義というだけあって、凄まじい剣の筋だった。

だが・・・

山「いくぜ・・・」

ピシャ・・・ッ

ス「！？」

すくい上げた水柱に山本は隠れ、スクアーロの奥義をかわした。

山「時雨蒼燕流、攻式九の型・・・」
ス）「で、どーした!?」

ズァァ・・・

だが、スクアーロは素早く反応して方向転換し、再び山本に突っ込む・・・

ガキン!!

ギリギリで剣を交える山本・・・
そして後退する山本をスクアーロは攻める。

了「山本!!」
獄「ギリだぜ!」
ディ「（やはり、無理なのか・・・）」
楓「・・・」

ス「とどめだぁ!!」

しかし、山本はスクアーロの背後に・・・

ツ「!!」

ス「（逆!!?ここまでやるとはな・・・だがオレの剣に）」

カチン！！

ス「死角はない！！」

義手であったスクアーロの左手は背後を向き、剣が背後の山本を貫いた・・・

―雲雀「！」―

ツ「義手！？」

山本を剣で貫いたスクアーロはニヤリとした。

しかし・・・

ス「・・・！？」

手応えがない・・・

ドバシャッ！！

背後から流れ落ちた水・・・

ス「（まさか・・・オレが切ったのは・・・！）」

リ「水面に映った・・・影か」

背後にいたと思われた山本は、スクアーロの目の前にいた・・・
そして山本は時雨金時を振り下ろした。

ガッ！！

―・・・“うつし雨”・・・・―

ス「（これが・・・敗北・・・・）」

チッ・・・パシッ

山「はぁ、はぁ・・・」

山本はスクアーロの首に提(さ)げられていた雨のリングの鎖を時雨金時で絶ち、舞い上がったスクアーロのリングをキャッチした。

そしてスクアーロはその場に倒れこみ・・・
再び立ち上がることはなかった。

ツ「山本・・・あんなすごい技をとっさに・・・？」
リ「ニッ。だから言っただろ？あいつは生まれもっての殺し屋だって」
ツ「ぶっ物騒なこと言うなって！！」
楓「見てみろ」

カチッ

山「はぁ、はぁ・・・勝ったぜ♪」

山本はリングを2つに合わせて微笑んだ。

やったな・・・山本！！

オレは山本の勝利を心の中で祝った。

ベルフェゴール「ぶったまげ」

マーモン「まさかこんな事がね・・・」

レヴィ「ボス・・・」

ＸＡＮＸＡＳ「・・・スクアーロ・・・」

―オレは例の計画が成就（じょうじゅ）するまで髪は切らねぇ。オレの願掛けだ―

―まあ見てろ、御曹司。これから先、お前はオレを仲間にしたことに感謝する日が必ず来る―

Ｘ「スクアーロ・・・」

そしてＸＡＮＸＡＳはニヤリと笑い・・・

Ｘ「ぶはぁっ！ざまぁねぇ！！

負けやがった！！カスが！！」

そう言ってＸＡＮＸＵＳは声をあらげて笑った。

X「用済みだ」
レ「ボスが直接手をくださなくとも」
マ「僕がやってこよーか？」

チェ「お待ちください。今アクアリオンに入るのは危険です。規定水深に達したため、獰猛な海洋生物が放たれました」

山「ん？」

チェルベッロ機関が放った海洋生物。
それは・・・

ツ「さ・・・サメっ！？」

大きな人食いサメだった・・・（ジョーズ？）

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

山「ちょ、待てよ・・・スクアーロはどーすんだ？」

倒れて動かないスクアーロを見てそう言った山本。
けど・・・

チェ「スクアーロ氏は敗者となりましたので生命の保証はいたしません」

山「やっぱりな・・・んなこったろーと思ったぜ。・・・よっ」

・・・山本は倒れたままのスクアーロの手を自分の肩にのせて立ち上がらせた。

獄「！」

ツ「山本・・・」

ベ「何だよあいつ」

マ「まさか助けるつもりじゃないだろーね・・・」

楓「・・・」

獄「てめー、バカかっ」

山「普通、助けね？」

バ「その体ではスクアーロをかついでいくのは無理です！」

確かに・・・今の山本は怪我してるんだ・・・

ザザ・・・

山「げっ」

近づいてくるサメから逃げるように、山本は上へと急ぐ。

了「血の臭いに反応してサメが寄ってきたぞ！」

獄「で、でけぇ！！」

山「ハハッおっかねー・・・でもまだ届かねーさ」

しかし・・・

ガラガラガラッ!!

山「!」

ツ「山本!!」

サメの突進による柱の破壊で、山本とスクアーロのいた足場が崩れ落ちてしまった・・・

山「やべっ」

そして、サメが2人に近づいてくる・・・

その時。

ス「おろせ・・・」

山「?」

スクアーロが山本にそう呟く・・・

ス「剣士としてのオレの誇りを、汚すな・・・」

しかし、このままでは確実に・・・

山「でも、よ・・・」

ス「う〝お〝ぉいっ!!うぜぇぞ!!」

ガッ！！

スクアーロは渾身の力で、山本を別の岸へと蹴り飛ばした。

山「！」

ス「ガキ・・・剣のスジは悪くねぇ・・・
　あとはその甘さを捨てることだ・・・」

ザンッ！！

山「スクアーロ！！！」

そして、サメはスクアーロを襲い・・・
スクアーロの姿が水面に現れることはなかった・・・

X「ぶはーっははは！！！最後がエサとはあのドカスが！！」

ＸＡＮＸＡＳの笑い声が静かな観客席に響いた・・・

X「過去を1つ、清算できた」

山「・・・っくしょー・・・」

山本はそう呟き、時雨金時を力強く握った・・・

獄「・・・んだよっ」

チェ「雨のリング戦は山本武の勝利です。次回の対戦カードを発表します」

ツ「こ、こんな終わりかた・・・」

こんな戦い・・・
めちゃくちゃだよ・・・

チェ「明晩の対戦は・・・

霧の守護者同士の対決です」

次は霧の守護者対決・・・
・・・って!!

ツ「ついに来たぁ!リボーン、霧の人って・・・どーすんだよ!?」

リ「あぁ、わかってるぞ。いよいよ奴の出番だな」

・・・その時、バジル君があることに気づいた。

バ「そういえば・・・楓香殿の姿が見当たりません・・・」

ツ「えっ・・・?」

標的４４　【蒼燕流九の型　来る！】（後書き）

やっと雨戦が終わった・・・！

標的４５　【未来への布石　来る！】

標的４５　【未来への布石　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

山本が勝利し、スクアーロが負けた雨の守護者対決・・・

原作通りっちゃあ通りなんだけど・・・

楓香「スクアーロ・・・お前に死なれちゃ困る」

・・・知っているというのは罪なことだ。
知っていれば回避出来る事も、時には見過ごさなければならない。

でも・・・

ミシミシ・・・

楓「・・・最悪は回避出来る・・・か」

こう言っちゃあなんだけど、‘夜代楓香’としては、ヴァリアーの連中がどうなろうと知ったこっちゃない。

でも・・・

未来に起こるであろう新たなる壮絶な戦いに、スクアーロは山本の力になるだろう・・・

チャキッ・・・

亀裂が入って今にも壊れそうな校舎の壁を見ながら、オレは時を待った・・・

ドガーーンッ!!

サメ「ガァァァッ!!」

楓「・・・はぁぁぁっ!!!」

ズガーーンッ!!!

楓「“16連斬”!!」

サメ「グァァッ・・・」

ズサッ・・・

向かってきたサメを瞬時の鎌での斬撃によって、スクアーロを救出した。

ブンッ

ガチャ・・・

楓「・・・ディーノの部下の皆さん、ロマーリオ、いんだろ?」

ガサガサという音と共に、黒服の男達が現れた。

ロマーリオ「ハハハッ、嬢ちゃんにはかなわねーな。おい、スクアーロを運び出すぞ」

ロマーリオの指示で、血まみれのスクアーロは運ばれていく。

さて・・・こんな返り血の状態じゃあ、みんなと合流するのはよしたほうがいいな。
直接、帰りますか。

楓「・・・じゃーな」

ロ「・・・待ってくれ、嬢ちゃん。一つ聞いていいか」

ロマーリオは片手を振って去るオレを呼び止めた。

楓「ん?」

ロ「ヴァリアーを憎んでいるはずの嬢ちゃんが・・・なぜスクアーロを?」

ディーノとロマーリオさんにはあの話（オレがヴァリアー嫌いだってこと）をしてんだっけか・・・

楓「んなもん・・・」

とっさの言葉が見つからなかったオレは、山本を真似て振り向きざまに言ってやった。

楓「普通、助けね？」

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅディーノ

―中山外科医院

ディーノ「そうか、楓香が・・・」
ロマーリオ「幸い、救出が早かったんであまり重傷ではなかったぜ・・・」
ディ「・・・そうか」

あの時あそこにいなかったのは、そんなことしてたからか・・・

ディ「・・・よし、病院の手配は出来たか？チェルベッロの奴らに嗅ぎつかれねーようにしねぇとな」
ロ「だがよ、ボス・・・」
ディ「楓香のことはオレに任せとけ」
ロ「・・・オーケー、ボス」
ディ「んな顔すんなって。楓香なりに考えあってのことだろうと思うぜ」

運ばれるスクアーロを横目に、ディーノは考えていた。

にしても・・・か。
明日にでも、話してみっか。

―しかし結局、スクアーロのことやボンゴレ本部からの緊急伝達などで聞けずじまいになってしまう、ディーノであった・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

バタン・・・

やっと帰ってこれた・・・

楓香「うっ・・・」

フラッ・・・

トスッ

リリス「・・・お疲れ様、楓香」

楓「サンキュー・・・リリス・・・」

小柄なリリスが疲労で倒れかけたオレを、なんとか受け止めてくれた。

リ「無料しすぎ・・・二人分の修業相手とその合間を縫っての自分の修業・・・」

楓「ははは・・・まあ、明日からは山本の修業はナシだし、少し楽

になるから大丈夫だよ・・・」

自分が感じている以上にボロボロなのを、今知った。
結構無理してたんだな、オレ・・・

リ「まったく・・・‘リペア’」

ふわりと温かい風が体中を包み込み、幾分かの疲労が取れ、立てるくらいまで体力が回復した。

楓「ありがと・・・」
リ「あんたと私じゃ体格差があるんだから、あれ以上支えられなかったわよ・・・」

フンッと怒ったようにそっぽを向きながらも頬を染めるリリスに苦笑しつつ、オレは風呂の支度をしにいった。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

―翌日

ツナ「はぁーっ・・・」

今日何回目のため息だろうか・・・
昨日の対決を見てからというもの、心が晴れない。

あんなことがあったんだ・・・だから知りたいのに・・・

霧の守護者がいったい誰なのか・・・

ツ「修業しに行くか・・・」

そう言って、オレは部屋を出た・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

―並盛山

超死（ハイパー）ぬ気ツナ「・・・・・・」

コロネロ「・・・おい、コラ」

リボーン「なんだコロネロ」

コ「あーやって突っ立ってんのが修業なの？コラ！」

リ「ちげーぞ。死ぬ気の零地点突破のタイミングをはかってんだ」

コ「零地点突破？」

リ「まあ見てろ」

とは言ったものの、ツナの様子は一切変わらない。

コ「・・・・・・どれくらい待つんだ？」

リ「・・・今日中には無理かもな」

コ「おいコラ、リボーン」

するとコロネロは頭突きをしてきた。

コ「だったら早くオレをここに呼び出したワケを話せ!!」

ゴスッ

リ「そーだったな」

ゴスッ

リ「コロネロ。お前、ヴァリアーのマーモンって奴、どう思う?」

コ「!?」

・・・これがオレが聞きたかったことだ。

コ「あの趣味の悪いカエル乗せたチビか」

リ「ああ。あのダッセーカエル乗せたチビだ」

コ「・・・!まさかアルコバレーノだっていうのか?コラ!」

バジル「!!」

リ「まーな」

・・・確証はねえ・・・ってのも、

コ「でも、おしゃぶりは光らなかったぜ」

・・・そうだ。オレたちアルコバレーノは、互いのおしゃぶりが近づくと共鳴して光り輝く。

しかし、奴に近づいた時にはおしゃぶりが光らなかった。

コ「それにアルコバレーノの7人の行方は、欠番も含めて全員わかって・・・!!あいつだと・・・?」

コロネロも気づいたようだな。

そう・・・それを抜くと奴があいつだと考えられる。

リ「まだわかんねーけどな」

コ「もしそーなら、こっちの奴に勝ち目はねーぜ」

リ「なんでだ?こっちの霧の守護者も知らねーくせに」

シュウゥゥ・・・

ん、ツナが死ぬ気モードをといたか。

ツナ「そーだよリボーン!!昨日の後もわからずじまいだし!!」

バジル「沢田殿!」

楓香「・・・」

ツナ「もう教えてくれてもいいだろ!!こっちの霧の守護者!!」

リ「まだだぞ。教えちまうと修業が手につかなくなっちまいそーだからな」

ツナ「逆だよ!!このままじゃ、気になって修業に身が入らないよ!!」

教えたらぜってー混乱すんのにな・・・

オレはふと楓香のほうへ目をやる。

・・・こんままじゃあ修業になんねーか。

リ「・・・しょーがねーな。じゃあ、山下りてジュース買ってきてくれ。コロネロの分もな」
ツ「なんでそーなるんだよ!!」（ガーン・・・）
バ「沢田殿、拙者も一緒に・・・」
リ「甘やかさなくていいぞ、バジル」
バ「・・・あ、はい、わかりました。すみません、沢田殿」

オレが目でバジルにあることを伝えると、バジルも理解したようだ、ここに残ると言った。

ツ「い、いいよバジル君。大丈夫だから。楓香は何にする?・・・楓香?」
楓「・・・え?ああ、なんでもいいぜ」
ツ「?」
リ「さっさと行きやがれ、バカツナが」

ゴスッ

ツ「いたっ!いちいち蹴んなよ!」

とぼとぼ歩き出すツナがだいぶ遠くになってから、オレはコロネロをつかんだ。

リ「おいコロネロ。オレ達も行くぞ」
コ「お、おい。わかったから離せ、コラ」

ｓｉｄｅ楓香

バジル「リボーンさん！・・・行ってしまわれましたね、楓香殿。・・・楓香殿？」

フラッ
ドサッ

・・・オレは思わず地面に座り込んだ。

バ「楓香殿！？」
楓香「いっつつっ・・・やっぱリボーンにはバレてたか」
バ「っ！！また体を酷使しているのですね・・・楓香殿」

バジルはオレを支えながら立ち上がらせた。

楓「あんがと、バジル」
バ「まったく・・・あなたの悪い癖ですね。・・・沢田殿を手助けするのはわかりますが、自分の体調も少しは気遣ってください」
楓「・・・なあ、バジル。お前、なんでオレがここまでしてツナの修業を見てるんだって思ってんだろ？」
バ「・・・いえ、そんな・・・」
楓「いや・・・別にお前を責めてるワケじゃねーよ。そういやあ、バジル。お前にはオレの過去、話してなかったな」
バ「え・・・？あ、はい。ですが・・・」

・・・オレがまだ門外顧問のメンバーだった頃、その話はいつしか禁句になっていた。
・・・けど。

楓「・・・まあ、長い付き合いだし、お前には話してもいっかなって思ってんだ・・・」

バ「・・・いいのですか？」

少し緊張するバジルにオレはふっと笑うと、こう言った。

楓「聞いてくれるか？オレの過去・・・マフィア界の、大きな、罪を」

標的４５　【未来への布石　来る！】（後書き）

～後日談～

楓香「そういえば、ありがとな」
リリス「ん？」
楓「弁当さ、ホントはオレが作ったらよかったんだけど、なかなか時間とれなくてさ・・・」
リ「べ、別にいいわよ、あれくらい。・・・私もクロームちゃんが心配だったからね」
楓「そっか・・・ってかリリス、お前料理できたのな」
リ「当たり前よ。天使なんだから」
楓「猫神だもんね」

標的４６　【闇の過去　来る！】（前書き）

やっときました、楓香の過去！

標的４６　【闇の過去　来る！】

標的４６　【闇の過去　来る！】

バジル「楓香殿の・・・過去？」

結局、ツナは黒曜の二人に会って伸びてしまい、バジルに飲み物を買ってきてもらった。
ちなみにリボーン達も今はここにいない。

山を下りた近くの公園までオレはバジルに支えられながら歩き、オレ達は公園のベンチに座っていた。

楓香「せっかく同じ門外顧問チームだったのに、話してなかったなーと思ってさ。それに、さっきの答えにもなるしな」
バ「いくら辛くても、沢田殿の力になること・・・ですか？」
楓「ああ。もしかしたら、一種の罪滅ぼしだって思うかもしれねーが・・・」
バ「罪・・・滅ぼし・・・？」

オレはバジルに・・・昔話、オレの‘罪’を話し始めた。

―――――――――――――――――――――――――

―それは8年前のこと・・・―

ワタシは孤独だった。

大好きなお父さんとお母さんがいなくなったから。

みんな嫌いだ。

ワタシからお父さんとお母さんを奪っていったから。

全部

ワタシの大切なもの

奪っていっていった・・・

自分も嫌いだ・・・

「フフフ・・・・・・」

―そして‘闇’が生まれた・・・―

赤く染まった景色・・・

闇の力を暴走させたワタシは家に閉じ込められた・・・

――数ヶ月後のある日、家に親戚を名乗る叔父さんがきた。

ワタシのことを連れ去りにきたのかもしれない・・・

もしくは・・・

でも、そんなこと、どーでもよかった。

こんな暗い場所にいるよりかは・・・

―ワタシはイタリアから日本へと渡った。

その親戚のおじさんはワタシに他意なく優しく接してくれた。
ワタシは他人の感情に敏感になっていたから、すぐに優しい人だとわかった。

こんなワタシを優しく扱ってくれるなんて・・・

そしてようやく外に出れ、嫌な思い出しかなかったあの国からも出られることは、少なからずワタシの心を軽くしたのかもしれない・・・

着いた時には無くなっていた食欲も少しは湧いてきた。

―家光叔父さんに連れられたのは、どうやら叔父さんの家らしい。

家光叔父さんの妻・・・奈々さんと、ワタシと同じ位の背のツンツン頭の男の子が、叔父さんの帰りに手を振っていた。

しばらくワタシは沢田家に厄介になることになった。

叔父さんの息子、綱吉君は優しい男の子だった。

何も喋らないワタシの手を取って、一緒に遊んでくれたりしてくれた。

彼は積極的にワタシに接してくれた。

彼の大空みたいな心が、ワタシの闇に少しずつ明かりを照らしてくれた。

ワタシはこの男の子を慕うようになった。

でもその半面、彼に、彼の家族にワタシの本性を知られることが怖かった。

――とある日。
優しそうな叔父さんが沢田家を訪れた。

でもワタシは警戒した。硝煙と血の臭いがしたからだ。

家光叔父さんと同じ臭い・・・でも家光叔父さんは少し前と違って信用していたし、嫌いじゃない。

でもこの叔父さんは得体が知れない・・・

――次の日、ワタシが部屋で本を読んでいると、綱吉君の泣き声が部屋に響いた。

「うわ〜〜んうわ〜〜ん」

綱吉君は優しい子だったけど泣き虫でもあった。

パタンと本を閉じるとワタシは声のする庭へと駆け寄った。

ガラス越しに外を見ると、綱吉君がどこかの子犬に遊びをせがまれていた。

ふと右を見ると、家光叔父さんとあの叔父さんがいた。

家光叔父さんがいるなら問題ないか。

その時だった。

あの叔父さんが何かに見入るように驚いた顔をしていることに気づいた。

そして目線の先には未だに泣いている綱吉君だけど、何故か子犬が逃げるように去っていっていた。

あの叔父さんが何かしたのか、それとも・・・

すると家光叔父さんが綱吉君を抱きかかえると、あの叔父さんが綱吉君に近づいて・・・

人差し指を綱吉君の額に当て・・・

ボッ

指先に炎を灯した!?

すると、綱吉君は目が虚ろになり、家光叔父さんの腕の中で眠ってしまった。

家「9代目?」

?「これでいい。この子には力がある・・・だが、まだ早い。来るべき時が来れば、力は解放されるだろう・・・」

家「9代目・・・」

ワタシはその会話を半分と聞いてなかった。

そんなことより・・・

何、あの炎!?

本能がその炎を危険とみなした。

綱吉君の額に当てられた炎・・・綱吉君が危ない!

あの叔父さんは危険だ!

・・・でもあの人は大人・・・子供のワタシじゃ勝てない。

自分の手を見た。

薄汚れた血の痕が、一瞬フラッシュバックした。

「ぁ・・・ぁ・・・」

自分がどうなるかわからない・・・今度こそ殺されるかもしれない。

でも、もうワタシの・・・ワタシの大切なものを奪われてたまるか！！

――その夜、ワタシは作戦を決行した。

ワタシとその叔父さんは並盛山に来ていた。ワタシが2人っきりで話がしたいと言うと、あっさりと着いてきてくれた。

少女一人に何も出来ないとでも思っているのだろうか。

「ねぇ、叔父さん・・・叔父さんは沢田家に何しに来たの」

「ん？私は家光・・・君の叔父に休暇で日本に誘われたんだよ」

嘘・・・

「いやあ、日本はなかなかいいところだね」

嘘・・・・・・

「家光の息子の綱吉君もかわいいか」

「嘘よ！！？」

「？どうしたのかな、急に」

「またワタシから奪いに来たんでしょ」

そう考えると、心の震えが止まらない。

「？君は何を・・・」

「許さない」

怒りが、怒りの感情が止まらない。

「許さない、許さない許さない許さない！！」

ワタシは黒い感情に包まれた。

そして、

「アナタヲ・・・コロス！！」

・・・そこでワタシの意識が途絶えた。

標的４７　【闇の罪と大空　来る！】

標的４７　【闇の罪と大空　来る！】

暗い闇・・・ワタシの心。

ワタシの味方は両親だけだった。

・・・・なのに

・・・また独り。

ぐるぐると渦巻く意識の中、優しげな男の声が聞こえた・・・・・・・

――――「おお、気がついたか。よかった」

目を覚ますと、誰かの安堵の声が聞こえた。

ワタシは地面に横たえられ、あの叔父さんの上着を掛けられて寝ていた。

・・・そして、優しげにワタシを見るあの叔父さん。

「どう・・・して・・・・」

喉がカラカラになりそうだった。

どうして・・・

どうして貴方は・・・

「まだそうやって笑っていられるの！！？ワタシが闇で襲ったんだ

よ！！ワタシが・・・」

自然と頬に涙が伝った。

闇の力を使って叔父さんに攻撃を仕掛けた。

どういう理屈かわからないけど、この力は幼いワタシが無防備でも大人に勝てる・・・
下手すれば殺してしまうほどの力だった。

・・・しかし、有り余る力には代償がある。

その力を使うと、ワタシは数日間動くことさえままならない。

の、はずが・・・

今、ワタシ自身の体には痛みはない。

というか、無傷だ。

なのに、目の前の叔父さんは片腕の歯型の傷から血を流し、体中を傷だらけにしつつも、微笑んでいた。

何故この人はそんな・・・

「私は別に怒ってはいないよ。君は綱吉君が盗られると思って、行動したのだろう？」

「え？どうしてそのことが・・・」

心を・・・読まれた？

「‘超直感’、というものでね。それに、私は綱吉君を君から盗ろうとは考えてはいないよ」

その真っ直ぐな瞳に、嘘は感じなかった。

「じゃあ、あれは・・・」

「ボンゴレファミリー・・・というマフィアを知っているかい？」

「!!?あ、はい。もちろん知ってます」

ボンゴレファミリーといったらイタリアの知る人ぞ知るマフィアだが、
伝統、格式、規模が断然と高く、イタリア内ではマフィアというよりヒーロー的な存在の組織だ。

「私は一応、そこのボスをしていてね」

その言葉を聞いて、ワタシは真っ青になった。

あのボンゴレファミリーのボス!?

その人物にワタシは怪我を負わせたの!!?

そ、そんなことを・・・ワタシが・・・!!

ふと浮かんだ綱吉君の笑顔・・・

彼には・・・あの家族だけは・・・

「ごめんなさいごめんなさい!!どうか許してください。如何様な

処罰も受けますから、どうかあの家族だけは！！」

沢田家は関係ない、ワタシが勝手に起こしたことだ。

それなのに、もし沢田家にまでワタシの共犯とされたら・・・

これ以上、失うことはっ・・・！

「これこれ、落ち着きなさい。私は何も怒っていない、話を最後まで聞いてはくれないか？」

「え？あ、はい」

な、なんだろ・・・

「君だからこそ、このことを話そう・・・綱吉君は、次期ボンゴレファミリーのボスとしての力を持っている」

「？」

ボスとしての・・・力？

――ボンゴレファミリーのボス・・・９代目は懇切丁寧にボンゴレファミリーの歴史や、死ぬ気の炎、について話してくださった。

「・・・そしてあの時、綱吉君から死ぬ気の炎のパワーを感じた。それがあの子犬を怯えさせたのだ。動物はそういうことに敏感だからね」

「それでですか・・・」

「だが、その力はまだ幼い綱吉君には早い」

「そう・・・ですね。力を持ってしまえば、人は強欲になってしまう」

「私の息子のようにな・・・」

「？あ、あの、なにか・・・」

「いや、なんでもないぞ」

９代目の顔に少し陰りが見えたのは・・・気のせいかな？

「だからこそ、時が来るまで封印したのだ」

「そうですか・・・」

「それで・・・私に話があったのだろう?」

え・・・?

「そ、それは・・・」

「あの時は無かったとはいえ、今はあるのだろう?」

「・・・はい」

・・・ワタシは話した。

ワタシは両親のこと、そしてワタシ自身の持つ狂気のこと・・・

・・・話し終えたワタシは、何だかすっきりした。心に残った痛みが少しとれたような気がした。

「そうか・・・それで、君は何がしたい？」

「え？」

「君は力を欲している。だがそれを何に使う？」

確かにワタシは力を欲しているかもしれない。

昔のワタシなら、両親を殺した者達への復讐をするために力を使うと即答できる、が・・・

「・・・君にその復讐の対象となる人物を教えよう」

「・・・え？」

言葉を疑った。

何故そんなことを話す？

「私が勝手に話すことだから、聞きたくなければ耳を塞ぎなさい」

ワタシは自然とコクンと頷いてしまっていた。

「・・・君の両親が殺されることになってしまった事件がある。

事件名を‘ゆりかご’。

そしてその事件を起こす原因となったのが・・・」

・・・まさか。

「・・・私だ」

――その後、９代目とワタシは帰りが遅いことに心配した家光叔父さんに発見された。

９代目は私のことを話さず、山の斜面で滑って転んでしまったともっともらしい嘘（？）でごまかしてくれた。

歯形とかで絶対ばれるのに、家光叔父さんは何も言わなかった。

そして、９代目は帰り際にこうおっしゃった。

「欲する力を何に使うか・・・決まったら、私が帰る時までにわしに伝えなさい。力になれるかもしれない」

ワタシは混乱していた。

９代目の息子、ＸＡＮＸＡＳ（ザンザス）が起こした‘ゆりかご’を、あえてワタシに教え、それが復讐の対象であることを教えたのは何故だろう。

ワタシは自分の真意をはかられていることに、少なからず気づいていた。

――――9代目が日本を発つその日、空港で9代目にワタシは言った。

その答えを。

「9代目！ワタシは・・・力を望みます！」

「ほう・・・何故かね。それは」

怪訝そうな顔せずに微笑んで見つめて問う9代目のお言葉を、ワタシはあえて遮った。

そしてワタシは言った。

自分に言い聞かせるように。

「復讐ではありません。それでは何の解決にもなりません。でも・・・」

今は違う。大切なものが出来たから。

ワタシより弱い、けど温かい・・・守ってあげたい存在がいるから。
この‘闇’を抑え、そして・・・

「ワタシは綱吉君に救われたんです。もし彼が棘の道へと進んでしまっても、ワタシは彼を守りたい・・・そして、そのために守る力が欲しいんです。このワタシの‘闇’を抑え、次期ボンゴレファミリーのボスとなる彼の助けになれるように！」

その言葉を聞き、９代目は微笑んだ。

「そうか・・・なら、家光に力になるように言っておこう。家光なら君の力になる。それでよいな？」

「あ、はい！ありがとうございます！！」

そして９代目は日本を発(た)った・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

バジル「そんな・・・ことが・・・」

話を聞いていたバジルは絶句していた。

楓香「ああ。家光叔父さんにはオレが門外顧問に入る際にこの話をした。・・・９代目はオレが家光叔父さんに話すまで秘密にしてくれていた。自分から話すのがよかろうと・・・」

それでも家光叔父さんはオレを拒まず、以前と変わらぬ態度で接してくれた。

ふぅ・・・と息をはいたオレは、ベンチの背にもたれかかった。

楓「・・・軽蔑したか、バジル？」

少し肩を落としたような様子のバジルを見て、オレはそう聞いた。

バ「はい、少しだけ・・・」

やっぱり・・・か。

バ「今の話を聞いて・・・楓香殿を少しでも悪く思ってしまった自分に・・・ですけど」

！！

バ「拙者は・・・門外顧問のメンバーとして、楓香殿とチームを組んで色々な任務をこなしたりして、絆を深めあったつもりになってしまっていました・・・」

顔を上げたバジルは、ぐっとこらえるような表情をしていた。

バ「しかし、今この話で楓香殿を少しでも疑ってしまった拙者は・・・」

トスッ・・・

バ「！！」

楓「・・・そんな、そんなことないよ・・・」

バ「楓香・・・殿・・・？」

オレは頭を抱えていたバジルを正面から抱きしめていた・・・

楓「みんな・・・優しすぎるよ・・・」

改めて感じる・・・

こんな温かい人たちに、オレは支えられているんだって・・・

楓「もういいから・・・ありがとう、バジル・・・」

バ「あ、いえ、そんな」

慌てるバジルに、オレは伝う涙を拭いながら微笑した。

こんな温かな日々が続けばいいと、そう願った・・・

――‘闇’はすぐそこまで来ていたとは知らずに――

標的４７　【闇の罪と大空　来る！】（後書き）

―あの後

バジル「あの・・・楓香殿？」

楓香「ん？どうした？」

バ「そろそろ・・・放してくれませんか？」

楓「なんでだ？」

バ「その・・・楓香殿の胸が当たって・・・／／／」

楓「ふふっ、わざと当ててんの♪」

バ「ふ、楓香殿！放してください～～っ！／／／」

楓「やだ♪」

・・・恥ずかしがるバジルをいじって遊ぶ、楓香なのでした。

―――――――――

折角のシリアス～な終わりが台無しです。

・・・というか楓香、キャラ変わってね？

§　　§

氷雨（※作者名）「いやぁ、ついに折り返し地点ですね（リング争奪戦の）」

楓香「まったく・・・てか、作者とオリ主の会話って初めてじゃね？」

「・・・・・・」

氷雨「・・・これからも、‘闇の守護者’をよろしくお願いします！あと、ご意見、ご感想もよろしく！」

楓香「おいっ！終わりかよっ！」

標的４８　【クローム襲撃　来る！】（前書き）

骸「クフフフ・・・
　さあ、霧戦（ボクの舞台）の始まりです！」
楓香「あ、今日はまだ出番じゃないっスよ」
骸「・・・・・・クハッ！」

標的４８　【クローム襲撃　来る！】

標的４８　【クローム襲撃　来る！】

ｓｉｄｅリボーン

リボーン「お前ら大人しくしてると・・・ただの嫌な感じの中学生だな」

城島　犬（けん）「うるへー。嫌な感じは余計（よけ）ーら！！」

ツナの奴、山を下りてこの店に来たとき、復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄から脱獄した黒曜の２人を見て伸びちまったな・・・

犬「あんまりなめてっと、ど突くっつの！」

リ「おっ、出たな、カバチャンネル」

犬「サイだっつの！これ角（つの）！」

自分の能力で伸びた鼻を指し必死にアピールする犬をよそに、その相方（？）である柿本　千種（ちくさ）は面倒くさそうにして、ため息を吐いていた。

千種「もーやめなよ犬。今は他にやることあるし」

犬「うるへーっ！」

リ「ツナの奴、情けねーな。もっと喜ぶかと思ったのに」

犬「？」

リ「黒曜ランドでの戦いの後ツナの奴、オレが何か情報をつかんでるんじゃないかとあの戦いを想い出す度に聞いてきてな・・・よほどお前達が心配だったみてーだな」

犬「くっ・・・・・・・」
千種「・・・・・・・」
犬「ゲッ！こいつ何で出来てんの！？あの変な女といい、なんでこんなにウゼーの！？」

・・・ん？

リ「変な女？」
千種「夜代　楓香とかいう女・・・クロームが世話になったって・・・」
リ「ニッ、そうか」

楓香の奴、すでにあいつに接触していたんだな。

犬「・・・こいつ触るとウザいのうつる！！行こーぜ、柿ピー」
千種「・・・」

犬「てめーにはもったいない霧の守護者らって、ボンゴレに言っとけ！んじゃあ、夜な」
リ「ニッ、ああ」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ家光

―イタリア・ボンゴレ本部・最深部

９代目「・・・どうした家光。何か言いたいような顔だな」

くっ・・・

家光「9代目・・・あなたの後継者の座を巡って、毎晩ボンゴレの若い血が流れています・・・」

9代目「無論、知っておる。勅命を送ったのはわしだからな。楽しませてもらっているぞ」

な、何を言ってらっしゃるのだ・・・

家光「なぜです！」

9代目「掟を忘れたのか？後継者はボスと門外顧問の二人が認めなくては・・・」

家光「9代目。あなたは武力の強さで物事を判断するような人間ではなかった・・・

これもすべて、あの日のことが原因・・・」

9代目「・・・・・・」

家光「やはりはっきりさせておくべきだったのだ・・・

ＸＡＮＸＡＳのことを・・・

‘揺りかご’で何があったのかを」

9代目「・・・ゆりかご、二度とそれを口にするなと言ったはずだ」

家光「・・・・・・」

9代目「もしや家光・・・貴様、わしを詰問するために、この騒ぎを起こしているのか？」

！

家光「いいえ・・・私はあなたを救出しに参りました」

9代目「救出？・・・かつてボンゴレの若獅子（じし）と呼ばれたお前らしくない、的外れな答えだ・・・」

な、何故そんなことを・・・

9代目「何故その必要がある・・・この通り、最近すっかり脹脛（ふくらはぎ）の調子もよくなっての・・・」

すると9代目は椅子から立ち上がり・・・立ち上がった！？
おかしい、9は足を悪くされていたはず・・・

チャキッ

9代目「もうお前の力を借りずとも、ボンゴレはやっていける」

9代目が・・・オレに銃を・・・！？

家光「9代目・・・」

9代目「今までご苦労じゃった。
一足先にいって、息子を待つがいい」

ズカンッ！

そして銃が城内に鳴り響いた・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ｓｉｄｅツナ

！

あ・・・れ？

いつの間にか、オレ寝ていたのか・・・
するとリボーンの姿が目に入った。
ツナ「リボーン・・・ここ、どこ・・・？」
リボーン「ん・・・やっと起きたか。霧のリング争奪戦の戦闘フィールドだぞ」
ツ「そーだ、争奪戦！！」

っていうか、どっかで見たことある天井・・・って！？

ツ「ここ、体育館！！？」

並盛中の体育館であった・・・

獄寺「１０代目、お加減は！！」
楓香「大丈夫か、ツナ」
了平「やっと起きたか！」
ツ「みんな！！」
獄寺君に山本に京子ちゃんのお兄さんに楓香、バジル君がそこにいた。

ツ「あ、ありがと・・・！」

あ、そうだった！

ツ「山本・・・大丈夫なの？その・・・目とか・・・」

山本「ん？ああ、ロマーリオのおっさんが心配ねーってさ」

ツ「よ、よかった・・・」

昨日の怪我が心配だったオレは、ほっとした。

にしても・・・何でオレ寝てたんだ？？

・・・そーいえば、寝る前に誰かに会ったような・・・

すると獄寺君が言いにくそうに言った。

獄「１０代目・・・まだ霧の奴・・・姿を現しません・・・」

ツ「ええ！？そんな！！」

了「本当に存在しているのか、そいつは・・・」

獄「くそっ、敵ももう来てるってのに・・・」

よく見ると、講堂の方にすでにヴァリアーがいた。もちろんチェルベッロ機関も・・・

そして、黒いフードを被り顔を隠した、明らかに小さすぎるヴァリアーの霧の守護者がいた。

あの小さいのが霧の守護者・・・
そうだオレ、見方の守護者のこと聞こうとしてジュース買いに行って・・・

ツ「ん?あれ?なんだっけ!?何か大事なことを忘れてるよーな・・・」

その時・・・

ぞくっ!

ツ「!!」

体中に悪寒が走った。

な、何だ・・・今の感じ・・・

ガラガラ・・・

扉の開く音・・・

リ「・・・こっちの霧の守護者のお出ましだぞ」

ツ「・・・!」

そこには・・・

黒曜中のあの2人・・・犬と千種がいた・・・って!!

ツ「あ〝あ〝!!そうだった!!」

オレが眠る前、あいつらに会ったんだ!!

山本「あ、あれ・・・?あいつらって」

獄寺「バ・・・バカな!!」

そうだ・・・山本と獄寺君は黒曜ランドで戦った相手・・・

バッ

獄寺君はボムを懐から出し、2人を警戒した。

獄寺「何故こんな時に!!」

リボーン「落ち着け、お前達。こいつらは霧の守護者を連れてきたんだ」

獄寺「何言ってるんスか、リボーンさん!だってこいつら・・・!」

そう、獄寺君も気づいたようだけど・・・

獄寺「ま、まさか・・・!霧の守護者とは!!」

山本「・・・こいつらが連れてくるってことは・・・」

そ、そんな・・・

ツナ「う、うそだ・・・霧の守護者って・・・ろ・・・」

そんな、あいつが・・・!!

ツナ「六道骸(ろくどうむくろ)!!」

・・・すると、黒曜の2人の陰から現れる、独特な髪型の影・・・

?「クフフフ・・・クフフフフフ・・・」

あの独特の笑い声・・・

でも・・・

声が・・・違う・・・?

そして、その人影は骸の背格好をかたどっていた上着を脱ぎ捨てた・・・

バサッ

?「Lo(イ) nego(ナ)」

ツ・獄「!!」

マーモン「・・・む?」

?「Il(ワ) mio(が) nome(ナ) e'(は) Chrome(クローム)」

それは黒曜の制服をきた・・・

？「Ｃｈｒｏｍｅ（クローム）　髑髏（ドクロ）」

右目に黒い髑髏の眼帯を付けた・・・少女だった。

ツナ「六道骸じゃ・・・ない！！？」

標的４８　【クローム襲撃　来る！】（後書き）

漢字はルピに出来なかったよ・・・

標的４９　【《霧戦》　来る！】

標的４９　【《霧戦》　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

クロームの出現に皆、茫然としていた。
・・・まあ、名前とかおかしいだろ！っていうのと、六道骸じゃなくて知らない女の子が現れたことに驚いているのだ。
まあ名前はオレも同感。

骸よ・・・自分の名前のアナゲラム

六道骸
←
ロクドウムクロ
←
クロウムドクロ
←
クローム髑髏（ドクロ）

ってのは分かるけど・・・

昨日見たばかりのクロームの着ている黒曜の制服風の制服を見てみる。

・・・いや、だってさ・・・

Ｍ（エム）　・　Ｍ（エム）が着ていたあの黒曜の制服とは、全然丈が違うじゃ

ん!!
それに・・・まあまだ夏過ぎたぐらいで暖かいから今はいいけど、
ヘソ出しはちょっと・・・

バジル「クローム・・・ドクロ?」
了平「ん?だ、誰だ?この女子は・・・」
ツナ「・・・あ・・・・え?」
山本「ツナの知り合いか?」

犬「・・・・・・」
千種「・・・・・・」

犬と千種は無言でいる・・・

ツ「霧の守護者って・・・この娘(こ)って・・・六道骸じゃ・・・ない・・・?」

獄寺「騙されないでください!!そいつは骸です!!」

すると獄寺はクロームを指差してツナに言った。

獄「骸が憑依してやがるんです!!目的のためなら手段は選ばねえ!!あいつはそういう男です!!」

クローム「・・・信じてもらえないのね」
獄「ったりめーだ!!10代目!!あの武器を見て下さい!それに、眼帯で怪しい目を隠してる!!」
ツ「・・・」

そして・・・ツナの超直感が気づく。

ツ「六道骸じゃ・・・ないよ・・・」

獄「い〝っ!?」

千種「・・・・・・」

獄「そ、そーなんスか!?」

ツ「いや、あの・・・なんとなくだけど・・・」

ク「かばってくれるんだ」

ス・・・

するとクロームはツナに近づき・・・って。

あ、忘れてた。

ク「ありがと・・・ボス」

ちゅ・・・

クロームはツナの左ほっぺたにキスをした。

な、なな・・・って感じでツナの顔が赤くなっていく。

青春だなぁ・・・オレ、男捨ててんのな（泣）

・・・というか、

ツ「え〝え〝ーー!!／／／」

獄「んな〝ーー!!」

犬「ゲ・・・!!」

楓「ぷっはっはっはっ!!」

何やってんだっての、クロームの奴（笑）。

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

さささ、さっきのって・・・

キスーーーーっ！！！！？

獄「何してんだ、テメーー！！！」

ク「あいさつ」

ツ「なっ！！？」

どこの国の人ですかぁーーっ！！

獄「ふざけんな！！１０代目から離れろ！！！」

山「まーまー」

楓「落ち着けって、獄寺（笑）」

楓香、めっちゃ楽しそーだ・・・

べ「しししっ、へー、あれがね・・・もっと仙人（せんにん）みたいなジーサンが来るのかと思ったな。女かよ」

レ「よ、妖艶（ようえん）だ・・・」

マ）「ファンタズマが興奮している・・・」

マーモンの頭の上のカエルが四股を踏んでた・・・

マ「やはり敵の守護者は特殊な人間のようだな・・・」

カエルって四股踏むんだ・・・↑※踏みません。

了「で、どーするのだ?仲間に入れるのか?」

獄「なっ、入れるわけねーだろっ!!こんなどこの馬の骨かもわかんねぇような奴っ!!」

犬「んあ?てんめー聞き捨てなんねーびょん・・・(怒)」

千種「・・・・・・」

千種も静かに―ヘッジホッグ(武器)を構えていた。

獄「来るならこいや」

そして獄寺君もまた武器のダイナマイトを構える・・・

って、やばいじゃん!!

ク「犬・・・千種落ち着いて」

犬・千「!」

ク「あなたたちが決めることじゃないよ・・・」

え?

するとクロームはさらにオレに言った。

ク「ボス・・・私霧の守護者として失格かしら」

ツ「いっ!?」

ボ、ボスってオレ！？

ク「私は霧の守護者として戦って・・・」

ツ「え、えっと・・・（汗）」

ク「でも・・・ボスがどうしてもダメって言うなら従う・・・」

なっ！？

ツ「ちょっ、そっ、そんなの急に言われても・・・！だ、大事なことだし・・・！」

楓「ツナ、ボスなんだからお前が決めな」

ツ「なっ！ちょっ、楓香！？」

リ「でも霧の守護者として戦える奴はクロームしかいねーぞ」

ツ「！」

獄「リ、リボーンさんまで何てことを！！」

でも、リボーンの言う通りだ・・・

黒曜の連中がからんでいるとはいえ・・・

それに、あの女子も山本や獄寺くんと同じように父さんが選んだんだ・・・

それにこの娘（こ）・・・

楓香の言うとおり、ここは・・・

オレは苦悩の末・・・決心した。

ツ「じゃあ・・・たのむよ」

獄「な！！いいんですか！？１０代目！！」

ツ「うまく言えないけど・・・他に霧の守護者として戦える人はい

ないみたいだし・・・それに、彼女じゃなきゃいけないのかもって思うんだ・・・」

ク「（ほっ・・・）ありがと・・・」

楓「よく言ったぜ、ツナ」

獄「・・・！」

犬「ざまーみろ！」

これでよかった・・・んだよな。

するとその時、後ろから何かのぶつかる音が聞こえた。

ツ「！？」

バサッ・・・

鳥が羽ばたくような音がする・・・

振り向くとそこには・・・

ツ「コロネロ！！」

相棒のワシ（ファルコ）に吊られたコロネロの姿があった。

・・・ってか、なんで扉に頭ぶつけてんの？

了「師匠！！もう京子と寝ている時間では・・・」

コ「だからおねむだぜコラ！！だが敵の霧の守護者の正体を見極めねーとなんねーからな」

頭ぶつけてんの、寝ぼけてたんだ・・・（ガーン・・・）

リ「やっぱ気になったんだな」
リ・コ「・・・」

リボーンとコロネロはマーモンの方に目をやった。

マ「・・・フン。マヌケ面さげた奴が増えたか・・・この戦いでもっとマヌケ面をすることになるだろうがな」

どういう意味だろ・・・？
それに・・・

ツ「そういえばディーノさんは?今日は来てくれないのかな・・・？」
山「そーいやまだ来てねーな」
楓「あ、ああ。ディーノなら急用ができたって言って、今日は来れねーみたいだぜ」
なっ!?

ツ「こんな時に、そんな・・・」
楓「まあ大丈夫だってツナ」

でもめちゃくちゃ不安だよ・・・

ク「あの・・・」

するとクロームは何故か楓香に近づき・・・

楓「ん?」
ク「昨日は・・・ありがとう」

そう言って布で包まれた何かを楓香に差し出した。

楓「あ、ああ、わざわざ箱返しに来てくれたのな、サンキュー」
ツ「えっ？ちょっ、楓香、クロームと昨日合ってたの！？」
獄「そ、そうなんスか？」
楓「ん？まあな」
ツ「んなっ！」

クロームのこと知ってたの～～っ！！？

楓「悪いな、家光叔父さんに会うのはいいが、ツナには内緒にしとけって言われてたんだよ」

父さん何言っちゃってくれてんのーーっ！！（ガーン・・・）

楓「つーか、礼ならこいつに言ってくれ」
リリス「ニャン」

リボーン・コロネロ「！」
山本「お？」
了平「ぬ？」
獄寺「なっ！」

マーモン「む・・・？」

あれ・・・？

楓香の肩に、いつの間にあの黒猫が・・・？

獄寺「ふ、楓香さん・・・その黒猫、最初からいましたっけ・・・

？」
楓香「何言ってんの、いたじゃん」
獄寺「そ、そうでした・・・か」

みんなが混乱してる中、クロームはいたって普通に黒猫を撫で始めた。

ク「ありがと・・・猫さん」
リリス「ニャン♪」

しかもクローム、ホントに猫にお礼言ってるよ・・・
何のだろ・・・

チェルベッロ「・・・そろそろ時間ですが」

あ、そうだった。

了「む・・・よ、よし！では円陣いくぞ！！」
山「よっしゃ」
ツ「あ・・・そ、そーだね」

クロームも一緒に・・・

ク「いい」

あ、あれ・・・？

ツ「え？」
ク「いらないよ。そんなの」

拒否られちゃったよ・・・
しかも駆け足でフィールドに向かうし・・・

ツ「あ・・・」
了「何だあいつは・・・」
山「ノリわりーな・・・」
楓「しかたないだろ、恥ずかしいんだって（汗）」

ま、まあ確かにそーだけどね・・・

ク「いってきます」

クロームの後ろ姿を見ながら、オレは未(いま)だに彼女に疑問を抱いていた。

あの娘(こ)、骸じゃないと思うけど・・・
なんだろうこの感じ・・・

チェ「今回の戦闘フィールドは体育館全てで、館内の物は何を使ってもかまいません。尚、このフィールドには特殊装置は用意されておりませんのであしからず」
ツ「え・・・？何もないの・・・？」

他の守護者対決ではいろいろあったのに・・・

リ「霧の守護者の特性にはよけーなもんはいらねーんだ」
楓「無いものを在るものとし、在るものを無いものとする・・・・
そうして敵を惑わし、ファミリーの実体をつかませないまやかしの幻影・・・それが霧の守護者の使命だからな」

チェ「観覧席は同じ館内の指定スペース内とします。嵐戦と同じように赤外線感知式レーザーが設置されていますので気をつけてください」

すると、オレ達のいる場所に、上からセンサーの柵で囲われた檻が降りてきた。

チェ「それでは霧の対戦マーモンＶＳクローム髑髏
・・・バトル開始！！！」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

ざあ、お前の戦いを見せてもらうぜ、クローム。

楓香『あ、あの計画は六道骸がこちら側に来てからね』
リリス『りょーかい』

ヒュンヒュンヒュン・・・

最初に動いたのはクローム。
彼女は三叉の槍を回転させ・・・

ト・・・ン

床に軽く触れた。
その瞬間、

ビキッ！！

体育館の床に罅（ひび）が入っていき・・・

ドゴゴゴッ！！

激しい地響きを立てて、床が崩れ浮き上がった。

ツ「うわぁ！！」

獄「床が割れた・・・！？」

リ「落ち着けオメーら。ツナは知ってんだろうが」

なる、あれが地獄道だっけ。

ちなみに、オレはリリスのおかげで幻術にかかっておらず、かかっているかのようにさらに幻術をかけてもらってるって寸法。

楓香『サンキュー、リリス』

リリス『これくらい朝飯前よ』

ふんっと胸を反らすように言うリリス（猫モードなのではっきりとはわからないけど）をかわいいと感じてしまったオレがいた。

タン！タン！

マ「やはり僕と同じ術士か・・・」

するとマーモンは宙に浮かび上がった床の残骸を足場にひょいひょいっと飛び移りつつ、軽々とクロームへ近づき・・・

マ）「でもこんな子供だましじゃ僕から金は・・・」
ク「！」
マ「とれないよ」

ドッ！！

クロームの至近距離にまで接近し、顔から触手のようなものを出し、

ク「きゃあっ！！」

触手がクロームを捕えた。

顔から触手とか、マジ怖いっす。
趣味悪(わ)りぃ・・・

リリス『なかなかのホラーね・・・』
楓香『まったくだよ・・・』

そしてその瞬間、浮かび上がった床が消えて・・・

ツ「！？」
山「あれ？戻ったぜ？」

床は何事もなかったかのように、もとに戻っていた。
クロームの幻術が解けたのだ。

リ「あそこを見ろ」

リボーンが指差す先には・・・

ツ「あ！！」
ク「・・・・っ・・・・・！！」

マーモンに捕らえられたクロームの姿があった。
今度は触手プレイですか・・・

獄「な・・・っ」
ク「あぁ・・・っ！！」
ツ「そんな・・・！」
マ「弱すぎるね・・・見せ物にもなりゃしない」

コ・・・ッ

ク「誰に話してるの？」
マ「！？」

ダムダム・・・

マーモンが触手で捕えたはずのクロームは、いつの間にかバスケットボールに姿を変えて・・・

ク「こっち・・・」

すでにクロームはマーモンの背後にまわっていた。
つーか、マーモン隙ありすぎです、後ろとられたら終わりだよ。

バジル「え！？」

了平「女がバスケットボールになったぞ！？」
獄寺「なぁ！？」
ツナ「ど、どーなってんの！？」
コロネロ「幻覚だぞコラ！」
ツ「げんかく！？」
楓香「クロームの・・・な」
リボーン「互いに譲ることなく幻をつくりだす息もつかせぬ騙し合い・・・こんなすげー戦いはめったに見られるもんじゃねーぞ」

はい、マジぱねえっス。

リリス『あの子、なかなか幻術の扱い上手いわね・・・』
楓香『確かに・・・ここ数日でここまでとは・・・な』
リリス『まあ、楓香よりかは手際がいいんじゃない？』
楓香『なっ、にゃろーっ』

・・・まあ骸の方がもっと凄いけど。
早く出てこないかなぁ～～。

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツ「げんかくって・・・！！骸の地獄道！！」
獄「！１０代目！！やっぱりあいつは骸なんスよ！！」
獄寺君はそう確信ついたように言うけど・・・そんなはずは・・・

それにもし骸だったとしても、いったいどーいうつもりなんだよ・・・？

何しに来たんだよ・・・！？

マ「よかったよ。ある程度の相手で・・・」

そう言うと、マーモンは触手から紙に変わったものをしまう。

・・・って、あれトイレットペーパーじゃん！！？

（本人が言うには、特殊な紙、らしい。だがあの金にケチくさいマーモンのことだ、きっと・・・）

マーモン「なんか失礼な事を言われたような気がするけど、まぁいい・・・これで思う存分アレを使える、あのマヌケチビ2匹の前でね」

バキンッ！！ジャラララ・・・

何か金属類の外れる音、そしてマーモンの服の下に隠れていた、あるもの、から鎖が解かれる・・・

コ・リ「！！」

そしてマーモンは宙に浮かび、服の下から鎖が落ち・・・

マ「ファンタズマ、いこう」

頭に乗っていた，趣味の悪いカエル，の姿が変化し始めた。

マーモン「（む・・・また失礼な事を言われた気がする・・・）」

（き、気のせいです。）

コオォォォ・・・

そしてマーモンの胸元から藍色の光がもれる。
そして、それに共鳴するかのように・・・
コオォォォ・・・

リボーンとコロネロのおしゃぶりが、それぞれ黄色と青の光を放った。

コ「あの巻きガエルと藍色のおしゃぶり・・・生きてやがったのかコラ！」
リ「やはりな。奴はアルコバレーノの・・・バイパー」
ツ「う、浮いてる！！あいつもアルコバレーノ！？」

た、確かに赤ん坊みたいだし、めちゃくちゃ強そーだけど。

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

コ「ああ。奴も最強の赤ん坊、虹の一人(アルコバレーノ)だぜ」
リ「藍色のおしゃぶりのバイパー・・・アルコバレーノ一(いち)のサイキック能力をもつとも言われている術士だ」
獄「なっ！サイキックって・・・超能力じゃないスか！？そんなオカルトな！！」

けどそんなオカルトが好きだったりする獄寺君。
喜んでいるらしい微妙な表情の違いを読み取れたよ・・・

コ「行方不明になったと聞いていたが、まさか生きていたとはな。・・・だが、なぜ今までおしゃぶりが光らなかったんだ？コラ」
リ「よくわかんねーが、さっきのクサリみてーのでおしゃぶりの機能を封印してたみてーだな」

マモンチェーンの先駆けですね。
おそらくヴェルデの開発したものじゃないか？

マ「バカチビ共にはわからぬ研究の副産物さ。お前達と違って僕は怠(おこた)らなかったからね」
コ・「！」
マ「呪いを解く努力を・・・」
コ・リ「・・・」
ツ「・・・何の事？」

オレも途中までしか知らないからな・・・わかんないや。

楓香『そういえば、リリスはどこまで知ってんの？』
リリス『楓香ほどじゃないわよ・・・』

そーなのかー。

コ「ヤバいぜ。あのバカチビ相手じゃ並の術士じゃかないっこねーぜコラ！」

リ「なめんなコロネロ。クロームは並の術士なんかじゃねぇぞ」

ク「誰だろうと・・・負けない」

リリス『さっきの話を聞いてもあの子、ちっとも動揺してないわ』

楓香『ああ・・・』

これがあの娘（こ）の強みかもしれないな・・・

クロームの過去を知るオレには分かる。

誰にも相手にされない孤独を・・・

クローム髑髏（ドクロ）。

本名は凪（なぎ）。

家は裕福だが、両親は彼女に見向きもしない、とても環境の悪い場所にいた。

というのも実の父親は他界、今の父親は母親が再婚した相手で血はつながっていない。

母親は、父親が亡くなったショックで凪への愛をなくしてしまい、今の父親がそれを支えている。

だが、そんな今の父親もそのことに少し気にはしている様子だったが、彼の仕事は海外への出張の多いものでもはや父親にとっては半分お荷物扱いだった。

それでも、彼女はそれでも懸命に生きていた。
だが・・・

―ある日の夜中、ふと目が覚めた凪の耳に居間から聞こえてくる声が聞こえてきた・・・

―ねえあなた・・・あの娘(こ)、最近何考えてるかわからないし・・・鬱陶しくて仕方ないわ―

《！！》

―だが・・・君の子供だ。面倒をみる責任はある―
―あなたの気にしているのは体面・・・でしょ？―
―そうだが・・・―

《あ・・・ぁぁ・・・》

その晩、彼女が眠ることはなかった・・・

そして翌日、あの事故が起きた・・・

そして、彼(むくろ)に出会った。

―彼女は彼に出会うことで、過去の自分を捨て、クローム髑髏(ドクロ)として生きることにした。
でも彼女は、過去の自分を諦めた卑怯者なんかじゃない。

そうすることしか、他に生きる道はなかったんだ・・・

今の彼女には心から信じる人がいる。
その人が過去にどんな大罪を犯した者かということを知ったとしても、それでも彼女は彼の事を信じ続けるだろう。

―そこが今の・・・私の居場所だから・・・・―

そう言って・・・

タッ！！

クロームはマーモンに向かって走り出す。
そして、宙に浮くマーモンに向かって三叉の槍を振りおろした。

ビュッ

マ「けなげな攻撃だね・・・」

だが、それは布石。

ヒュンヒュンヒュン・・・

マ「！？」

マーモンに次々とどこからともなく現れた無数の大蛇が絡みついた。

マ「ムム・・・この大蛇、幻覚ではないのか」

解こうにも解(ほど)けない締め付けにマーモンが気付いたようにそう言う。

了「やるではないか！！」

獄「ケモノを召喚するあの技は・・・」

ツ「骸の能力(スキル)畜生道だ！！」

獄「１０代目！間違いなくあの女骸に憑依されてますよ！！」

ツ「だ、だけど・・・」

どうやらツナは超直感で彼女が六道骸でないと踏んでいるのだろう・・・

バッ！！

ツ「！」

山「な・・・」

マーモンはおしゃぶりから光を放ち、巻きついていた大蛇を吹き飛ばした。

マ「僕もそろそろ力を解放するよ・・・君の正体はその後でゆっくり暴こう」

ク「ふっ！」

カッ！！

クロームが再び床に槍を打ちつけ、幻術を放つ。

ゴポゴポ・・・ドドドドドッ！！！

そしてクロームの幻術により、床から複数の火柱があらわれた。

了「うおっ」

獄「あちっ！」

X「・・・」

リリス『なかなかのリアリティのある幻術ね。だけど・・・』

マ「確かに君の幻覚は一級品だ。一瞬でも火柱にリアリティを感じれば焼けこげてしまうほどにね」

マーモンは颯爽としていた。

そして・・・

マ「ゆえに弱点もまた・・・幻覚！！」

ピキィィィン！！

ク「！」

クロームの幻覚の火柱は、さらに強力なマーモンの幻覚よって完全に凍りついてしまった・・・

コ「不覚にも幻覚にかかっちまったぜ・・・コラ」

リ「オレもだぞ・・・さすがバイパーだな」

楓香『リリスはかかんなかったのね』

リリス『ギリギリだったけどね・・・』

さすが虹(アルコバレーノ)、といったところかな。

マ「幻術とは人の知覚・・・すなわち五感を司(つかさど)る脳を支配するということ。術士の能力が高ければ高いほど支配力は強くなる」

ビキビキ・・・ッ

ク「！」

すると、マーモンの幻術によりクロームの足下が凍りついていく。

マ「どうだい？忌まわしきアルコバレーノの力は」

ク「・・・！」

マ「もう何を念じても無駄だよ。君はすでに僕の幻覚世界の住人なのだからね」

リリス『クロームがマーモンの幻術に呑まれたわね・・・』

クロームは幻術を再びかけようとするが、すでにマーモンの術中。

ブゥン！！＜

ク「きゃあ！！」

マーモンの幻術によりクロームの体が宙を舞い・・・

ドサッ！！

ク「あう・・・っ」

そのまま床に叩きつけられてしまった。

コ「やべーぜコラ」

リ「だな」

ク「う・・・っ」

ギュ・・・ッ

クロームは骸との繋がりである三叉の槍を大事そうに握りしめた。

それに気づいたマーモンは、

マ「ムム・・・うやらその武器は相当大事なもののようだね」

クロームに最後のとどめを刺すかのように、幻術で三叉の槍の実体を解こうとした・・・

ク「!ダメ・・・っ」

ス・・・ッ

ク）「ダメーーーッ!!!」

パァン・・・!!

しかしクロームの必死の訴えもむなしく、三叉の槍は粉々に破壊された。

そしてその瞬間・・・

クローム「ぐふっ！」

クロームが吐血しその場に崩れ落ちた。

パタ・・・

ツナ「な、何が・・・！？」

バジル「顔が土色に・・・」

了平「お、おい！！あれを見ろ！！腹が！！」

苦しそうに呻くクロームの腹が・・・

陥没した。

獄寺「陥没していく・・・！！」

ツナ「んなっ！これも幻覚～～！？」

マーモン「ムム・・・これは現実だ。どーなっている？何だ、この女・・・」

リリス『ねえ、これって・・・』

楓香『そう、これが彼女にかけられた、骸の強力な幻覚だ』

そう、クロームにかけられた骸による強力な幻術が解け、腹が陥没し始めたのだ。

リリス『？彼女は元々あの状態だったとでも言うの？』

楓香『そう、彼女が本名‘藤崎凪（なぎ）’から‘クローム髑髏（ドクロ）’に変わっ

たあの事故で内蔵と右目を失ったんだ』
リリス『な、内蔵を失ったって!?でも、私は彼女の内蔵が幻覚だって気づかなかったわよ!!?』
楓香『・・・骸の幻術は、あの虹のバイパー(アルコバレーノ)・・・マーモンを越える強力なものだ、リリスが気づかなったのもおかしくはない。もっとも・・・』

・・・といっても、彼女の腹はそう見えるようにオレがしているだけなんだけどね。

リリス『まったく、私は大筋しか内容を把握していないんだから、そういう重要なことは話しなさいよ・・・
それにしても、貴女も大概規格外ね・・・』
楓香『んなもん、決まってるじゃん』

念話でそう返すオレの、後ろ手に隠している右手の中指・・・
そこには、インディゴ色の核石が埋め込まれ、その石の表面の左右を本体から伸びた網目状のものが囲う、‘インディゴ色の炎が灯った指輪(リング)’が着けられていた。

標的４９　【《霧戦》　来る！】（後書き）

とりあえず、伏線ってことで。

今回、一番長いかもね。

あと、藤崎家の一族ｗ

標的５０　【六道輪廻と闇の計略　来る！】（前書き）

久々の更新です（＾＾；）

標的５０　【六道輪廻と闇の計略　来る！】

標的５０　【六道輪廻と闇の計略　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

ボウッと灯る右手のリングは、過去のオレ・・・すなわち転生前の夜代楓香がある指示の下、手に入れた物だ。

まあ、簡単に手には入る代物では決してないが・・・

記憶によればこれは数年前、まだ門外顧問チームだった頃にバジルとの任務の最中に手に入れた、‘曰く付き’のリングだったりする。・・・その頃のオレは、このリングが何なのか知らなかったので、何に使うのかわからず、ただ‘曰く付き’故に厳重に封印した後、ある指示の下オレが保持していた。

今のオレならこれが何か‘知っている’から、その危険の度合いがわかるんだけどね。

リリス『修業の半分の時間をソレ使うのにとっていたのは知ってるけど、貴女の話だと相当危ない物なんでしょ？

・・・大丈夫なの、呪いとか？あの時は大丈夫大丈夫の二言で押し切られたけど・・・』

楓香『あれ？話してなかったっけ？

転生してきたあの日、神様の粋な計らいで他にも上限付きの

願い事を3つ、叶えてもらったんだよな、そんで呪いとか受けない体質になってるからオレ』
リリス『なっ！そんな話、神様から聞いてないわよ！？』
楓香『あ、そーなのか？』

あー、それであんなにしつこく聞いてきたのか。

―実は、転生してきたあの日に手に入れた、例の手帳の最後のページに、3つの中に何も書かれていない枠とその説明が上に書いてあった。

《この枠内には願い事をそれぞれ一つづつ書き入れてくれ。流石に能力が一つというのも可哀想じゃなと思った儂の粋な計らいじゃ。多少の上限はあるが、叶えてやるぞ》

おお、アリガタし！

まあ、今のままでも強いんだけど・・・とか思いつつ、ちゃっかりとりあえず2つ書いてやった。

楓香最強伝説・・・もとい、力の強化の為にね。

一つは呪いの類いを受けない体にすること。

書いた瞬間、枠と共に書いた文字が消えていった。

バグかと思ったけど、どうやらオッケーなら消えていくらしい。

説明書はちゃんと読みましょう。

って、字が小(ちっ)さすぎて気づかないよ！！

とか言いつつ、２つ目を書き始める。

だがこれはどうだろう・・・その上限とやらに収まるのか？と、過去の自分にある物を手に入れる指令を出して欲しい・・・と、書いたのだ。

今の自分じゃなくて過去の自分には流石に無理かな・・・？

歴史とか今から変えない方が良さそうだし。

と、思ったのだが、文字の消滅と共にある記憶が流れてきた。

バジルとの任務で手に入れた、例のリングの記憶だ。

どうやら、さほど過去を変えずに手に入れられたらしい。

よし、これで幻術が使える・・・！！―

オレは霧の守護者とかに転生したわけではないので幻術は使えない。

そんな初期設定はない。

なら、あれを使えばオレも幻術が使えるんじゃないかと思いついたのが・・・リング。

ディーノの話によると、この時代、すでにリングの力について研究が進んでいる状態である。
まあ、この時代のディーノが雲雀に‘この先の戦い、リングの力によって戦局が左右する’と、リング争奪戦終了時に話していたらしいから、当たり前なのだが。

まあ、今、オレがリングを使用している彼らに知られるとマズいからこっそりとね・・・

リリス『で、まだなんでしょ、本命は』
楓香『うん、あいつが出てきて、空間を引っ掻き回してくれてからだな。今のは肩慣らしってところかな』

幻術に乗せて、クロームに声を飛ばす。

楓香『お疲れ、クローム。後はあいつに任せておけ』

クローム「！・・・（コクッ）」

オレだけに見える倒れてはいるが幻術の内蔵のあるクロームは小さく頷き目を閉じた。

―クフフ・・・上出来でしたよ、クローム―

！！

出たな・・・って、予想通りだけど。

―君は少し休みなさい―

ツナ「・・・・・！！」（ぞくっ）

・・・ツナも骸に気づいたようだな。

ベル「なーんだ、フタを開ければマーモンの圧勝かよ。しかもアルコバレーノの力もちょっとしか見れねーしさ」

レヴィ「これで全てが終わったな。・・・ん？」

クロームの肢体から霧のようなモノが噴き出し、クロームの姿を隠していく・・・

シュウウウウ・・・

了平「霧が娘を包んでいくぞ！」

マーモン「なーに。最後の力を振り絞って自分の醜い死体を隠そうとする・・・女術士によくある行動パターンさ」

X「・・・・」

リボーン「！？どーした、ツナ？」

頭を抱えてうずくまるツナに、真っ先にリボーンが気づく。

ツナ「・・・来る！」
山本「ツナ！？」
ツナ「あいつが・・・あいつが来る！！」
山本「あ、あいつ・・・！？」

ツナ「来る！六道骸が・・・
　　骸が・・・来る！！」

マーモン「ムム！？」

するとクロームに変化が現れた。
左手には構築されていく黒い棒が握られ、さらに黒い手袋がはめられる・・・

？「クフフフ・・・クフフフ・・・」

ものすごい勢いでクロームの姿を取り巻く霧が発生し、クロームの姿を完全に包み込んだ・・・

みんな「！！？」

マーモン「ムム？男の声・・・？」

コッ・・・
ドドドドドッ！！

突然霧の中から現れた地割れが一直線にマーモンを襲う・・・

マーモン「ムギャッ！！」

ドサッ

？「クフフフ・・・」

そして霧が晴れ、中から・・・

六道骸「随分粋がっているじゃありませんか・・・マフィア風情が」

・・・六道骸が現れた。

リリス『すごい・・・これが彼の幻術なの・・・？』

楓香『ああ・・・』

彼の幻術だからこそ、クロームにかけられた幻術の内蔵にリリスは気づかなかったのだろう。

リリスはオレのサポートで幻術の力を神様に与えられたらしい。

それより強い幻術って・・・どんだけ強いんだよ、骸。

楓香『まあ、彼の術に乗じてあの物騒極まりない機械人形を調べるんだけどね。タイミングは幻覚汚染が始まってからだ。術のサポートよろしく』

リリス『了解(りょーかい)っ。でもさ、調べる必要あるの？』
楓香『もちろんさ。この世界にはオレの他にもイレギュラー、いるだろ？』
リリス『あの胡散臭い白衣の男？』

もちろんＤｒ．シャマルのことではなく、ヴァリアーの闇の守護者、レイ・カーベルのことである。

楓香『あいつもモスカの研究者とみたんだ・・・原作から改変されている可能性は高い、慎重に越したことはない』

つまり、何が言いたいかというと、原作では９代目が捕らわれている場所がゴーラ・モスカの中で、９代目の死ぬ気の炎があの機械人形の動力源にされているのだが・・・
もし彼(レイ)がモスカの動力源を死ぬ気の炎でなくても動かすことが出来たとしたら、彼らは別の行動をとる可能性がある。
ヴァリアーが最強舞台といわれる所以(ゆえん)、任務成功確率が９０％以上でないと遂行しない、「ヴァリアークオリティ」だ。
で、もしそれに沿って原作での方法が原作とは違うあらゆる出来事から（例えばオレがいることとか）廃棄されているかもしれない・・・

まあ、９代目の救出は家光から、イタリアの９代目が偽者だったという報告を受けてからだな、それまでは動けない。

だからこその下調べだな。

まあ、みんなが骸（かれ）の登場に呆けている間の会話と思考だったりして。

バジル「だ・・・」
了平「誰だ・・・？」

あ、骸知ってるのって黒曜ランドへ行ったメンバーだけだったね。

獄寺「六道骸・・・！！・・・間違いない」
ツナ「骸・・・無事だったんだ・・・」

骸「クフフフ・・・お久しぶりです、ボンゴレ」

骸は不敵な笑みを浮かべて、ツナへと顔を向けた。

骸「舞い戻ってきましたよ・・・輪廻の果てより」

ツナ「・・・」（ぞくっ・・・）

コロネロ「奴が霧の守護者の正体なのかコラ」
リボーン「ああ（ニッ）」

マーモン「ウム・・・六道骸、どこかで聞いた名だと思ったが、思い出したよ」

マーモンは床から再び浮かび上がった。

マ「たしか一月前だ。復讐者の牢獄で脱走を試みた者がいた。そい

つの名が六道骸」

獄寺「なあ！！」

リリス『ヴィンディチェの牢獄？』

楓香『・・・マフィア界の掟を破った者は、罪を裁かれ罰を受ける。そして手のつけられねー凶悪な犯罪者は復讐者によって彼の地へと幽閉される・・・』

リリス『恐ろしい所なのね・・・』

楓香『オレも・・・』

リリス『？』

楓香『いや、何でもねぇ』

リリス『そ、そう？（なんとなく、顔色が悪い気がする・・・）』

レヴィ「あの鉄壁と言われる復讐者の牢獄を・・・」

ツナ「ま・・・っ、また脱走したのーー！！？」

マーモン「だが脱走は失敗に終わったはず。更に脱走の困難な光も音も届かない最下層の牢獄にぶち込まれたと聞いたよ」

リ・楓「・・・」

ツナ「！！」

犬・千種「・・・・・・」

骸「クフフフ・・・ボンゴレが誇る独立暗殺部隊ヴァリアーの情報網も、たかが知れてますね」
マーモン「ム」
骸「現に僕はここに在る」
マーモン「面倒くさい奴だなぁ。いいよ、はっきりさせよう」

するとマーモンからの吹雪の幻術が骸に向けられた。

マーモン「君は女についた幻術だろ」

グオオォォ・・・

骸「おや」

吹き荒れる吹雪が骸を足から凍らせていく・・・

ツナ「うわあ!!」
バジル「吹雪です!」
了平「寒い!凍えて死んでしまうぞ!」

骸「おやおや?」
マーモン「幻術でできた術士に負けてあげるほど、僕はお人好しじゃないんだ」

そして・・・ついに完全に骸の体は氷に包まれてしまった。

バジル「ああ!」
了平「完全に凍ってしまったぞ!!」
獄寺「じゃあ、あの骸は・・・幻覚!?」
ツナ「そんな・・・」

マーモン「さて、化けの皮を剥がそうか」

すると、止めとばかりにマーモンは幻術でハンマーになる。

リリス『ホント、趣味悪いわね・・・』

楓香『まあな・・・』

顔がハンマーだぞ、恐(こ)えーよ。

マーモン「もっとも砕け散るのは、さっきの女の体だろうけどね」

ツナ「ああっ！」

山本「やべぇ！」

マーモンの接近に骸は微動だにしない。

・・・だが。

ヴヴ・・・ン・・・

右目の数字が〈一〉に変わり・・・

ズバンッ！！

骸の手前まで接近していたマーモンは、地面から突然現れた植物の蔦に捕らえられていた。

ギュルルル・・・

マーモン「！！！」

ツナ「え！？」

レヴィ「！？」

そしてその蔦の蕾が開き・・・花が開いた。

コロネロ「蓮の・・・花・・・・」

骸「クフフフ・・・」

ジュウッ・・・・

すると骸を取り巻いていた氷が溶け始め・・・何事もなかったかのように骸はその場に立っていた。

骸「誰が幻覚ですか？」

そしてマーモンに巻かれた蔓は一層締め付ける力が増し、マーモンは呻いた。

マーモン「ムグ！！何て・・・力だ・・・！く、苦しい・・・」

ベル「うわ・・・あいつ、何者？」

コロネロ「あのバイパーを圧倒してるぜ・・・」

リボーン「あれがツナの霧の守護者、六道骸だ」

標的５１　【廻る幻術　来る！】

標的５１　【廻る幻術　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

六道骸・・・奴が現れてから、戦局は一変した。

ったく、あの野郎、何のつもりでここに現れやがったかは知らねーが。

守護者対決に首を突っ込んでくるのは・・・どういう了見だ？

ま、まあ、確かにあいつの幻術はハンパねー、あのマーモンとかいうアルコバレーノを圧倒しているのは目に見えてわかる。

この霧戦で負けるわけにはいかねーから、客観的に見ればあいつが霧の守護者として戦って敵に勝っていることは悪いことじゃあない・・・

だがよ・・・オレ達は忘れたわけじゃねーぜ。

あいつのやらかした事だけは！

この試合が終わったら・・・

ぜってーあいつの目的を暴いてやる！

１０代目の右腕にかけて！！

ｓｉｄｅ山本

オレは直で見たってわけじゃないんだけど、黒曜ランドでツナが戦ったっていうあの六道骸がここにいるってことにさすがにビビったぜ・・・

どーいう手品で現れたのかはわかんねーけど、あいつは徒者（ただもの）じゃねぇってのはわかる・・・

幻術ってんだっけ。

これが現実の出来事じゃないってことは師匠の話から理解したつもりだったけど・・・

ギュッ、ギュッの、バッ、バッって感じで。

リアリティ？ってんだっけ、それが高くて現実に起きている天変地異みたいだったぜ・・・

こんなわけのわかんねぇ幻術に詳しい師匠は、やっぱすげーのな♪

ｓｉｄｅツナ

黒曜の2人がここにいることからもしかして・・・とは思ってたけど。

ツナ「やっぱり本物なんだ・・・」
獄寺「しかし・・・だとしたら、さっきまでの女はどーなるんですか」
リボーン「クロームと骸を分けて考えちゃダメだぞ。クロームがいるから骸は存在し、骸がいるからクロームは生きていられるんだ」
みんな「・・・!?」
ツナ「い、意味わかんないよ」

リボーン「今は・・・こーするしかねーんだ」（ボソッ）

骸「さぁ・・・どうします、アルコバレーノ。のろのろしてると、グサリ・・・ですよ」
マーモン「ムム・・・図に乗るな!」

マーモンはカッとおしゃぶりを光らせ蔓から逃れると、幻術で複数の分身体を造り骸に攻撃を仕掛ける。だが・・・

骸「惰弱な」

ヴヴ・・・ン・・・

骸の右目が〈四〉に変わり、その目に死ぬ気の炎が灯った。

ダッ

骸は分身したマーモンに一気に詰め寄ると、三叉の槍で叩き落としていく。

ツナ「あの目の炎は・・・格闘スキルの修羅道だ！！」

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

マーモン「ムムゥ！！格闘のできる術士なんて・・・邪道だぞ！！輪廻だって僕は認めるものか！！！」

骸「ほう」

だが、その言葉は負け惜しみにしか聞こえない。

マーモン「人間は何度も同じ人生を無限に繰り返すのさ。だから集めるんだ・・・」

マーモンの頭に浮かぶ蛇（ファンタズマ）が円形の金色に輝く板に変わり、さらに強力な幻術を骸に仕掛けた。

マーモン「金をね！！」

マーモンの幻術により床が裂けたようになり、そして床が円形をかたどっていく。さながらトンネルの中にいる感じだ。

ツナ「わあっ」
山本「うおっ、床が！」
コロネロ「バイパーの奴、力全開だぜ、コラ」
リボーン「そーするしかねーだろーな」

リリス『もうそろそろ？』
楓香『ああ。サポート頼む』
リリス『オーケー』

骸「クハハハ！・・・強欲のアルコバレーノですか。面白い・・・だが」

ブンブン

マーモンの幻術に対抗するように、骸はさらに強力な幻術を上乗せする。

ガッ

回転させていた三叉の槍を左右に迫る床に触れさせる。

骸「欲なら僕も負けませんよ！」

円形になる床のあらゆる場所から火柱が立ち、視界を塞ぐ。

ドドドドドドドド！！！

ベル「す、すんげっ」
レヴィ「夢でも見ているのか・・・う、うぷ」

了平「ぐむ・・・ふらつく・・・」
獄寺「吐き気が・・・するぜ・・・」

コロネロ「幻覚汚染が始まってるぜ、コラ」
リボーン「ああ。脳に直接作用する幻覚をこれだけ立て続けにくらってんだからな」

リリス『楓香・・・いける？』
楓香『大丈夫だ・・・・よし！』

オレはオレで・・・この騒ぎを利用させてもらうよ、骸。

ボウッ
シュワワワ・・・

この時、騒然となったこの空間で、オレの怪しく光る右手に気づく者はいなかった。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

マーモン「ムッ、これほどの幻術能力・・・お前、どこで・・・」
骸「地獄界にて」
マーモン「ふざけるな！」

ピキイイイ

今度は火柱が凍りついたよ！
・・・！？
なんだ・・・っ！！？

ツナ「うっ、うう・・・頭がっ・・・！！」
山本「ツナ・・・？」
獄寺「１０代目！！」
了平「沢田！？」

痛い・・・っ！

ツナ「頭が・・・割れそうだ・・・」
山本「大丈夫か、ツナ？」
ツナ「何だ・・・？この感じ・・・！！」

すると、頭の中にある映像が流れてくる・・・

六道骸と黒曜の２人が復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄脱走した日のこと。

・・・そして父さんがクロームに憑依した姿の骸に、霧の守護者となることを頼んだことを・・・

ツナ「父さん・・・！」

知らなかった・・・こんなこと・・・骸、お前・・・

さっきの映像・・・骸が暗い水槽の中に入れられていた映像がまぶ

たの裏に焼き付いていた。

ツナ「骸・・・」

・・・戦いは激しさを増していた。

マーモンは小さくなった分身体を造り、三叉の槍を回転させて防ぐ
骸の隙をつき後ろをとる。

マーモン「とった！」
骸「！」

そして黒い袋へと姿を変え・・・

マーモン「死ね！」

パクンッ

骸を包み込んでしまった。
さらに蛇(ファンタズマ)がその袋より一回り大きな輪となり内側に鋭利な角を複数
現し、袋を締め上げた。

グサッ！！

ツナ「ああ！！」
山本「お、おい！！」

犬「骸さん！」
千種「・・・！！」

オレ達は最悪を危惧した。

が・・・

グ・・・グッ・・・！！

マーモン「ば・・・バカな！」

強固な拘束は吹き飛び、中から蔦に守られた無傷の骸が姿を表した。

・・・そして一言。

骸「堕ちろ・・・そして廻れ」

その右手には霧のハーフボンゴレリングが2つ、握られていた。

標的５１　【廻る幻術　来る！】（後書き）

なかなか進まない・・・

標的５２　【霧雲架かる空　来る！】（前書き）

四日ぶりの更新です。
でも短っ・・・ってほど進んでないです・・・

標的５２　【霧雲架かる空　来る！】

標的５２　【霧雲架かる空　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

楓香《・・・ふう、お疲れ、リリス。やはり9代目はいたぜ。・・・少し衰弱しているがな》

リリス《なら、はやく・・・》

楓香《ダメだ。家光叔父さんからの電報が届いてからだ。モスカの中に9代目が閉じ込められていると知っていることに疑われてしまうからね》

リリス《・・・オーケー、仕方ないわね・・・》

・・・まあ、今んとこは無事だし原作通りだから良しとするか。

骸に借りが出来ちまったな。

レヴィ「ばかな、あのマーモンが！？」

バジル「勝った・・・」

了平「圧倒的だぞ・・・」

犬「へへ」

骸は手に入れたハーフボンゴレリング２つを握り、チェルベッロに尋ねた。

骸「このリングを一つに合わせるのですね？」
チェルベッロ「は、はい・・・」
マーモン「まだだよ！！」

制裁・・・を恐れてだろう、マーモンは負けを認めず骸の前に再び姿を現した。

マーモン「ハア・・・ハア・・・少し遊んでやれば図に乗りやがって！！！僕の力はまだまだこんなものでは・・・！！」

しかし、すでに骸の姿は目の前から消えて、マーモンの背後を取っていた。

骸「ご存知ですよね？幻術を幻術で返されたということは、知覚のコントロール権を完全に奪われたということを示している」

そう、すでに骸の勝利は確定していた。圧倒的な力によって・・・

骸に知覚のコントロール権を奪われたマーモンは、自分のペット（？）のファンタズマが首に巻き付いて締め上げていると錯覚した。

マーモン「グゲッ！や、やめろ、ファンタズマ！！」

そして床が崩れ落ちていき、マーモンは底なしの闇に落ちていく・・・

骸「さあ、力とやらを見せてください・・・さあ！」
マーモン「ムギャッ！！」
骸「クハハハハ！！どうですか？アルコバレーノ。僕の世界は！！」

・・・うん、そして骸はマト〇ックスの〇オみたいにマーモンの中に入って行ったよ。

楓香《なんか気持ち悪い・・・》
リリス《最後までフルパワーね》

マーモン「んぷっ、ンムーッ！！」

そしてマーモンがボコボコに膨れていく・・・

マーモン「ムムム！！やめろ！死ぬっ、死ぬぅぅーーっ！！」
骸「君の敗因はただ一つ。僕が相手だったということです」

・・・うん、その通りだね。
オレもイヤです、あんなのと戦うの。

グロッキーになりそう・・・

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

sideツナ

獄寺「な・・・」
骸「これで・・・いいですか？」

あ、圧倒的だった・・・

チェルベッロ「・・・・・霧のリングはクローム髑髏のものとなりましたので、この勝負の勝者はクローム髑髏とします」

コロネロ「あのバイパーが・・・」
ベル「シシ・・・粉々かよ」

ツナ「え、ちょ・・・っ、そんな、そ、そこまでしなくても・・・」
骸「この期に及んで敵に情けをかけるとは・・・どこまでも甘い男ですね、沢田綱吉。心配無用・・・と言っておきましょう。あの赤ん坊は逃げましたよ。彼は最初から逃走用のエネルギーは使わないつもりだった・・・抜け目のないアルコバレーノだ」

なっ、ま、まあよかったかも・・・

X「・・・ゴーラ・モスカ。争奪戦後、マーモンを消せ」

ひいっ、こ、こえーっ！

骸「まったく君は、マフィアの闇そのものですね、ＸＡＮＸＡＳ」
X「・・・」
骸「君の考えている恐ろしい企てには、僕すら畏怖の念を感じますよ」
X「・・・」（ピク・・・）

ん？何の話だろ・・・？

骸「なに、その話に首を突っ込むつもりはありませんよ。僕もいい人間ではありませんからね。ただ一つ・・・君より小さく弱い、もう一人の後継者候補と・・・」

すると骸はこちらの方・・・楓香に顔を向けながら言った。

骸「闇たる彼女をあまり弄ばない方がいい」

X「・・・」

ツナ「!?」

そう話すと、骸はこちらに近づいてきた。

千種「骸様!!」

犬「すんげーー!!やっぱつえー!!」

獄寺「てんめー、どの面下げて来やがった!」

山本「おい、獄寺!!」

骸「そのくらい警戒しておいた方がいいでしょうねぇ。僕もマフィアなどと馴れ合うつもりはない」

ツナ「!」

骸「僕が霧の守護者になったのは、君の体を乗っ取るのに都合がいいからですよ、沢田綱吉」

獄寺「なっ!!」

嘘だ・・・それだけじゃないくせに・・・

獄寺「やはりてめーっ」

ツナ「あっ、ちょっ、待って獄寺君!!と、とりあえず・・・あ、

ありがとう」

骸「フ・・・」

あ・・・今、少し笑ったような・・・

骸「・・・借りは返しましたよ、楓香」

楓香「おう、ありがとな。（お前は休め・・・）」（ボソッ）

骸「（そう・・・ですね）少々・・・疲れました・・・この娘を・・・」

フラッ

楓香「おっと・・・」

トスッ・・・

楓香は骸からクロームに変わった彼女が倒れるのを、優しく受け止めていた。

了平「また女になったぞ！どーなっている！？」

楓香《骸のやつ無茶して力使い過ぎたな・・・まあ、原作通りだけど》

リリス《あれだけの幻術よ・・・これでまだまだいけるなら普通じゃないわ》

いや、元々普通じゃないと思う・・・

犬「こいつすぐくたびれるびょん、これだから人間は・・・」

ツナ・獄寺・楓香「（てめーも人間だろ!!）」

あ、思わず突っ込んでツナと獄寺の心の声にハモったぜ・・・

―――――――――――――――――――

sideツナ

楓香「ってことでこの子、一晩家で預かるから」

ツナ「んなっ」

え!!?

犬「んあっ!!?てめー何のつもりら!!」

楓香「どーもしないよ。つーか、」

ああ・・・「この娘(こ)が麦チョコしか食べてないこと、骸にバラすぞ」とか「んあっ、てめー、そ、そんな脅しには屈しないびょん!」とか言い争ってるよ、この二人・・・

千種「やめなよ犬・・・骸様がこの人ならいいっていってただろ?」

みんな「?」

ツナ「骸・・・が?」

side楓香

犬「あ～～っ、好きにしやがれっ!!」

千種「犬・・・」

そう吐き捨てて犬が先に走り去るのを追いかけるようにして、千種もこの場を去った・・・

ま、借りだし、これだけは譲れないぜ。

そして一瞬の沈黙を破ったのは獄寺だった。

獄寺「ど、どういうことスか、楓香さん!黒曜の一人を庇うなんて!」

やっぱりそう来ると思ったぜ。

楓香「でも、この娘のおかげでこの試合勝ったんだろ?」

獄寺「で、ですが・・・」

あ～、歯切れ悪いなぁ～～っ・・・

ツナ「そ、それよりこの子、内蔵は大丈夫なの?」

楓香「ああ。骸の強力な幻術によって正常に機能している。呼吸の乱れもないし・・・単に疲れて寝ているだけだ」

リボーン「おい、楓香。お前・・・」

楓香「ないない。ってか、家光叔父さんに頼まれてんの。Hai

ｃａｐｉｔｏ？」
リボーン「・・・そうか。まあ、あの様子じゃあ家光の判断は間違っていなさそーだからな・・・」
楓香「獄寺もいいか？」
獄寺「あ、はい。１０代目のお父様がそうおっしゃっているなら・・・」

楓香《ってことで、すまないけど明日までは猫モードでよろしく。ホントはサポートお願いしたいけど、クロームにバレてはいけないからね》
リリス《りょーかい・・・はぁ・・・》
楓香《サンキュー、リリス》

ってことで・・・

さて、どうなるのかな。この後。

―雲雀「やっと僕の出番かな・・・」―

だからってトンファー向けてこないでください・・・

る～る～る～↑現実逃避している

標的５２　【霧雲架かる空　来る！】（後書き）

次回あたりから大分原作から反れそうですよ。
でもストックがない・・・

なかなか出番が回ってこないヒバリさんに咬み殺されるわ、ホント・・・

ヒイィッ！

標的５３　【闇の落胆？　来る！】（前書き）

（、・ω・、）

標的５３　【闇の落胆？　来る！】

標的５３　【闇の落胆？　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

―帰宅後・・・

オレは抱きかかえていたクロームを客間のベッドに寝かすと、彼女の規則的な小さな寝息を聞きながら今日の出来事を頭ん中で整理していた。

で、

楓香「はあぁぁぁぁ・・・・・・」

リリス「楓香、なに辛気臭い顔してんのよ・・・」

盛大な溜め息を突いてしまったオレを誰が責められようか。

だってよ・・・

楓香「不戦勝とかどんなオチですかぁーーーっ！！！」

はい！！？闇戦終了！！？

リリス「しっ！！クロームちゃんが起きちゃうでしょ！！」

楓香「す、スミマセン」

怒られたし・・・

あの狸仮面のせいだ！！

―一時間ほど前のこと・・・

チェルベッロ「・・・では明日の守護者対決を発表します」

チェ「明晩の対決は・・・

闇の守護者対決です」

よっし、やっときたか！

さっそく明日の午前中のトレーニングメニューを組まなければ！！

少々バトルジャンキーになっているオレがいたが気のせいだ。

チェ「・・・が」

え？

“が”って何？

チェ「ＸＡＮＸＡＳ様の闇の守護者、レイ・カーベルは棄権されたので・・・」

チェ「沢田綱吉氏側の闇の守護者・・・夜代楓香は不戦勝となります」

楓香「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？？」

リボーン「！」

みんな「！！？」

え、なに、ふり？

ツッコまなきゃいけないのか？

楓香「・・・マジ？」

リリス《・・・楓香》

楓香《・・・なに?》
リリス《その・・・・・・
ドンマイ♪》
楓香《（＝’ー’）・・・ｏｒｚ》

オレは心の中でｏｒｚ状態になった。

リボーン「・・・おい、どーいうつもりだ、ＸＡＮＸＡＳ」
ＸＡＮＸＡＳ「・・・ああ?」
リボーン「闇の守護者対決を放棄すれば四勝四敗となって、次にヒバリが勝てば、すでにお前が大空のリングを手に入れているとはいえ、ツナ達の勝利は決定するぞ。・・・大事な局面での試合を放棄するのはおかしくねーか?」

まあ、確かに。

弱者はいらない・・・ボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーだからこそ、この選択は不可思議だ。

ベル「なんであいつが棄権なんだ?」
レヴィ「まさかあの研究バカ、逃げ出したのか・・・」

Ｘ「るせえ。オレがボスだ。あいつはオレが辞退させた。オレの判断に口出しをするな」

ベル・レヴィ「！！？」
みんな「！！」

リボーン「・・・・・・」

ギロリと睨みつけるＸＡＮＸＡＳに怯える皆・・・

Ｘ「それともオレに意見するのか？」

威圧感を漂わせながらＸＡＮＸＡＳはそう言ったその言葉に、ヴァリアーの二人は焦りながら弁解し始めた。

ベル「いや、ボスの判断は正しいよ・・・」
レヴィ「う、ぬ、ボスはいつも正しい」

Ｘ「ふっ、カスは黙っていろ」

ベル・レヴィ「・・・」

Ｘ「おい」

ピンッ

楓香「おっと・・・」

Ｘ「そいつをくれてやる」

楓香「！」

・・・ＸＡＮＸＡＳが弾き寄越した物。
それは紛れもない本物の“闇のハーフボンゴレリング”だった。

Ｘ「そんなもの、どーでもいいからな・・・」
楓香「・・・・・・」

どういうつもりだ・・・ＸＡＮＸＡＳ・・・？

そういうと、奴は部下を連れ去って行った・・・

楓香「・・・リボーン、どう見る？」
リボーン「奴の意図はわからねーが、あのレイって男が何らかの理由で対決に参加できねーってことは確かだな。・・・あのＸＡＮＸＡＳがただで棄権したってことはねーからな、おそらくとんでもねーことを企んでいるにちげーねえ」
楓香「警戒しておいた方がよさそうだな・・・――

―・・・って事があったのさ（涙）

もしかしてあのレイって奴・・・自身だと弱いとか？

オレ達は静かに眠るクロームを起こさないよう、そっと部屋の扉を閉めた。

トントントン・・・

階段を下りると先に降りていたリリスが料理をしていた。
クロームはぐっすりだし、今なら大丈夫だろうと人型モードに移行している。

リリス「～～♪～～♪」

リリスも疲れてるだろに・・・
「楓香、霧の幻術で疲れてるでしょっ、あんたは休んでなさいっ！」って自分が夕食を作るってきかなかった。

・・・サンキューな、リリス。

オレはドサッとソファーに腰を下ろすと、レイのことを考えていた。

・・・そういえば、あいつとの初めての戦闘はプロトタイプのモスカが三体・・・あいつ自身が戦った訳じゃないからあいつ自身の戦闘力はまったく分かっていない。

今、オレが持ってるレイの情報は、

↓レイ・カーベルという同姓同名のエストラーネオファミリーの研究者がいて、瓜二つの顔であること。（しかし、年齢的にはズレが

あり、おそらく本人自身ではなく禁弾を使って転生した者だと考えている。）

↓ゴーラ・モスカの作成者であること。

↓9代目の監禁に一枚噛んでいること。

・・・よく考えたら、情報が全然集まっていないじゃん。骸へ話した“魂依弾（こんい）”（オレ命名。レイが使ったと思われる禁弾のこと）についても資料はある筋から手に入れたが、実際に使用しその通りの効果が出たのかははっきりとは分かっていない。

リリス「まあ闇戦がないってことは少し時間が出来たってことでしょ。その時間を利用して何なりと対策を考えなさいよ」

楓香「む・・・そーだな。ポジティブにいくか・・・いただきます・・・ん、おいしい」

リリス「ありがと／／／」

笑顔でそう言ったら顔を赤らめていた。

やっぱり疲れてるんじゃないのかな。

――リリスに作ってもらった夕食を食べ、風呂に入り寝仕度をしていると、二階のクロームが寝ている客間からクロームとは違う気配を感じた。

楓香「っ！」

リリス「幻術による気配が二階から・・・」
楓香「もしかして・・・」

オレはおそらくその気配の人物であろう男に近づいた。
因みにリリスには猫モードで一階に待機してもらっている。

ガチャ・・・

楓香「はぁ・・・」
？「お久しぶり・・・というのは語弊がありますね」
楓香「クロームの容態でも見に来たのか・・・骸？」

やはり・・・というべきか。

クロームの眠るシングルベッドの傍らに、白のワイシャツにジーンズというラフな格好をした六道骸が静かに佇んでいた。
勿論、有幻覚ではあるが。

骸がぐっすりと眠るクロームの頭を撫でていることは目の端に捉えつつ気恥ずかしいので無視し、壁に背中を預けたオレはそう問いかけた。

骸「それもありますが・・・少し思い出したことがあったので・・・ね。うちのクロームも世話になっていることですので。マフィアと馴れ合うつもりはありませんが、いろいろと世話になった貴女にはこれだけはお伝えしておいた方がよろしいかと」
楓香「あ、ああ」

・・・何の話だろ？

推測出来るのは“９代目がゴーラ・モスカに監禁されている”ことか？
でもそれはマフィア界・・・ボンゴレの問題であるから首を突っ込んだりしないだろう。骸とＸＡＮＸＡＳとの会話からもわかることだし・・・

骸「久しぶりの戦闘の最中、少し昔の忘れていたことを思い出しましてね・・・先日の話の中で出て来た例の特殊弾のことですが・・・」
楓香「・・・それがどうかしたのか？」

骸はクロームの頭を撫でていた手を止めると、驚きの情報を語った。

骸「思い出したのですよ、貴女が話していた憑依弾を応用したと思われる禁弾・・・あれは当時の化学技術では実現不可能と揶揄され、未完成で実用化は皆無であったということを」

標的５３　【闇の落胆？　来る！】（後書き）

べ、別に戦闘シーン書くのがめんどくさかったからとかじゃないんだからね！

・・・はい、嘘です（半分）

まあ大空戦まで待ってくださいね。

標的５４　【闇の苦悩　来る！】（前書き）

なかなか更新出来ないっス・・・

標的５４　【闇の苦悩　来る！】

標的５４　【闇の苦悩　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

骸から告げられた情報に、オレは言葉が出なかった。

楓香「なっ・・・じゃあアイツは・・・」

骸「おそらく、貴女の推理通りではないことは確かでしょう・・・ただ彼、“エストラーネオファミリーのレイ・カーベル”は死ぬ気の炎の研究に着手しており、ボンゴレの死ぬ気弾にも手を出していたことから憑依弾を作製した研究者の一人であることは確実ですが・・・ね」

“エストラーネオファミリーのレイ・カーベル”が死ぬ気の炎の研究をしていたという情報は有り難い。

だが、マズい・・・唯でさえ少ない手掛かりが一つ減っちまったぞ！

楓香「・・・なら、奴は一体・・・」

骸「それを調べるのは貴女の仕事ですよ・・・といいたいところですが、僕も彼に興味を持ってしまいましたから今更関わらないという方が無理ですよ。僕の方でも調べておきましょう」

なっ、あの骸が協力してくれるなんて・・・

楓香「そ、それは有り難いけど・・・お前、復讐者（ヴィンディチェ）にいるんだから無理じゃ・・・それに、今回の守護者対決でまだ疲れが・・・」

骸「クフフ・・・幻術の方ですが、貴女のおかげで力を上乗せさせてもらいましたから、予定より少ない力で戦えました・・・なので、お気になさらずに」
楓香「あっ、やっぱり気づいていたのか、オレが幻術使っていたこと」
骸「当たり前です。まあ、何故貴女が幻術を使えるかについては問いません。それに上乗せについては貴女の幻術のラインを借りて幻術の流れをスムーズにかつ効率よくしたという意味ですので。・・・僕の幻術による空間の乱れ利用したようですが、その点には貴女に借りが出来ましたから、貸し借りなしであのことについては僕も口出しするつもりはありませんよ」
楓香「さ、さいですか」

戦いの邪魔をしたとか言われるかと思ったぜ・・・

骸「クフフ・・・まあ、僕に出来る範囲ですがね・・・。今回みたいに昔の記憶から気づく事もあるかもしれませんし、それにこういう場所の方が入る情報があるんですよ。僕は特殊ですからね」

た、確かにこうやって意識を外に出す事が出来ているしな。

楓香「・・・なら、頼んだ」
骸「いいですよ、別に貴女に頼まれる事ではありませんからね。僕の自己満足ですから。それに退屈なんですよ、ここって」
楓香「あ、あははは・・・まあ、よろしく頼むよ」

乾いた笑いに対し、骸はフッと小さく笑った。

骸「・・・これで失礼しますよ、夜代楓香。クロームを頼みます・・・」

楓香「・・・任せとけっ！」

オレは消えゆく骸にサムズアップした。

――そんで、翌朝・・・

・・・昨日は色々あったな～。

オレは部屋を出て朝の準備を済ませると、先にクロームの様子を見に行っているリリスの元へと向かった。

ガチャッ・・・

リリス「あ、楓香。この子、そろそろ目を覚ますよ」

楓香「サンキュー、リリス」

朝日が差し込む部屋には、ベッドの側にある椅子にちょこんと座ったリリス（猫モード）と、ベッドに眠るクロームの二人（？）がいるだけだった。

そのクロームもようやく目を覚ました。

クローム「ん・・・あ、あれ？えっと、ここは・・・」

楓香「おっ、起きたか」

クローム「あ・・・あの・・・」

楓香「あの後君が倒れちゃったからここに運んだんだ・・・あいつ

ら（犬や千種）ほったらかしにしそうだからな。骸にも頼まれたし（間接的にだけど）」
クローム「骸様が・・・あの、ありがとう・・・」
なんか顔を赤らめてもじもじしているクローム。
・・・確か優しくされることに慣れてないんだっけ。
楓香「大したことしてないって」
クローム「でも・・・」
楓香「あ、それより腹減ってないか？」
クローム「え、あの、大丈・・・」
きゅるるる・・・
楓香「ぷっ・・・」
クローム「／／／／／」
楓香「ははっ、とりあえず下（一階）に降りるか。行くよ、クローム」
クローム「は、はい／／／」
恥ずかしさのあまり真っ赤になったクロームを連れて、オレは階段を下りた。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ツナ「ヒバリさん！！」

吹き飛ぶヒバリさんのトンファー、そして迫るゴーラ・モスカ・・・

雲雀「くっ・・・」

片膝をつき、モスカを睨みつけるヒバリさん。

だな、モスカの最期の攻撃がヒバリさんに襲いかかろうとしていた・・・

そ、そんな・・・ヒバリさんが・・・

ガチャッ・・・

キュォォオ！！

ツナ「やっ・・・やめろーーっ！！！」

ヒバリさんっ！！――――――――

――――・・・・ガバッ

・・・あれ？

夢・・・・・？

・・・目が覚めるとそこは自分の部屋。
さっき見たのは夢だったことにようやく気がつきホッとした。

ツナ「ゆ、夢かぁ・・・」

まだ朝早いし・・・

・・・まったく、

ツナ「リボーンが昨日、あんな事言うからだよ・・・」――

――昨夜

それは夕飯の時のこと・・・・

ツナ「・・・でも、ヒバリさんなら何とかなるよ。めちゃくちゃ強いし」

何たって、あのヒバリさんだよ！
恐いけど、戦いの強さに関してはリボーンも認めてるほどだし・・・

リボーン「・・・わかんねーぞ」

ツナ「えっ！！？」

リ、リボーン！！？

ツナ「わ、わかんないってどーいうことだよ！」
リボーン「・・・あのＸＡＮＸＡＳが、次の対決で負けたらボスの座を諦めるってんだ、よほどの自信があるとしか考えられねえ」
ツナ「そ、そんな・・・」
リボーン「ってことだから、明日もみっちり修業だからな」
ツナ「みっちりやだーっ！！」――

――って、イヤなことまで思い出しちゃったよ・・・

ツナ「あーっ、気になって寝れないし・・・」

早めに家出てディーノさんに聞きに行こ・・・

――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

朝食を食べ終えたオレは、同じく食べ終えたクロームが「犬と千種が心配だから・・・」と言ってきかないから、黒曜ランドのすぐ近くまで送ることにした。（そのまま修業に移るため、リリス（猫モード）もついて来ている）

クローム「あの、ここで・・・」
楓香「ん？ああ、そうだな」
クローム「いろいろありがとう・・・」（ペコッ）

楓香「いえいえ。あっ、今日の夜の対決は見に来る？」
クローム「あ、はい。それじゃあ・・・」
楓香「おう♪」
クローム「猫さんも・・・」
リリス「ニャン♪」

クロームはまたぺこりと頭を下げると、全力疾走で黒曜ランドへと走っていった。

リリス『あの娘って、恥ずかしがり屋さん？』
楓香『だな。んじゃ、修業行きますか！』

クロームの姿が黒曜ランド内へと消えて行くのを確認してから、オレ達は修業場へと向かった・・・

―――――――――――――――――――――

ゴボボボ・・・

とある廃棄工場の一角に、筒状の緑色の液体の入った生命維持装置が設置されていた。
その装置の前には白衣の男が恍惚とした表情で立っていた。

？？？「・・・もうすぐですよ、レティスフィア様・・・」

そして彼はこう高らかに言った。

「“ボンゴレ初代の闇の守護者”である貴方様の復活は！！」

怪しく光る装置のガラスの中には、白銀の髪の女性が入っていた・・

・

“闇の守護者”が紡ぐ物語は加速していく・・・・

標的５４　【闇の苦悩　来る！】（後書き）

未来編のゴーストみたいな？
ボンゴレ初代の話とかは未来編からにしようかと思ったのですが・・・

まあ、リング争奪戦ではおそらく初代闇の守護者しか出さないと思います。

ご意見、ご感想等々ありましたら、お待ちしています。

標的５５　【連絡　来る！】（前書き）

・・・なんの？って話ですね。
まあ、読めばわかりますｗ

標的５５　【連絡　来る！】

標的５５　【連絡　来る！】

ｓｉｄｅディーノ

ロマーリオ「ボス、準備が出来たぜ」

ディーノ「おう、わかった」

恭弥の雲戦を控えた日の早朝、オレ達は昨日からの用事を終えとある病院から出ようとしていた。

予定より早く終わったのは、予めこの病院を楓香が調べていてくれたこともある。

万が一の事も考えて用意した情報だと言っていた楓香だが、用意がよすぎるような・・・

まあ、この際関係ないか。

偏(ひとえ)に、楓香のおかげだな。

――――そしてオレ達が拠点としていた中山外科医院に向かおうとしていた時だった。

部下からのとある場所からの報が入った。

ロマーリオ「・・・っ!?ボス、電報だ!」

ディーノ「何っ!よし、内容は?」

オレはこの連絡がやっと来たことに安堵していたが、少し不安と緊張感を感じていた。

だが部下の前だ、そんな顔してられねえ。

オレはなるべく冷静を取り繕った。

ロマーリオ「イタリア本部にて、――――――――――――」

――――――その内容を聞いて、オレは驚いた。

ディーノ「・・・何っ!!?それは本当か!?」

ロマーリオ「間違いねぇぜ。ボンゴレ門外顧問の認証コードが入ってんだ」

それなら間違いねえな。

内容が内容だ・・・早く知らせねぇと!!

ディーノ「ロマーリオ！オレはリボーンに話を・・・いや、楓香に話してくる！！」

ロマーリオ「ん？リボーンさんに話すのが筋じゃないんですかい？」

ディーノ「そうしたいのは山々だが・・・これは門外顧問の指令だ。
・・・それに、実はまだ楓香は正式には門外顧問チームから外れていないことになっているらしいんだよな」

ロマーリオ「！？そりゃあ、初耳だ！あの嬢ちゃん、まだ門外顧問チームのメンバーってことになってるんですかい！！？」

あー、この説明はしていなかったか？

ディーノ「・・・大丈夫だ、お前の危惧していることはねーぞ。
そもそも、楓香が門外顧問チームだったことは表沙汰にはなってないんだ。
将来、ツナの力になりてえっていう、あいつの意思を汲んでな」

ロマーリオが言ってるのは、ボンゴレとはいえ別の組織としている“ボンゴレであってボンゴレでない”門外顧問チームのメンバーが、そのボンゴレの次期ボス候補の沢田綱吉を守護者する“闇の守護者”となることは、あってはならないということだ。

・・・そのこともあって、秘密裏の門外顧問メンバーだとしても危険だとオレも家光に進言した。

だが、あいつが任せろっていうから結局、直接的ではないにしろ楓香は門外顧問チームから抜けたって雰囲気で話したんだっけ？

ディーノ「ロマーリオ、この話は他言無用だ。」

ロマーリオ「!?・・・了解しやした」

ディーノ「ってことで、オレは楓香に口頭で伝えてくるから少しの間、この場を頼んだぜ」

ロマーリオ「オーケー、ボス。・・・っと、ボス!?せめて部下を・・・」

??

・・・ロマーリオが何か言っているような気がしたが、構わずオレは急いで楓香の家へと向かっていった。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅボンゴレ門外顧問チーム

――――――数分前・・・イタリア

ボンゴレ門外顧問チームのターメリック、オレガノ、そしてラル・ミルチは、なかなか連絡をよこさない家光の身に何かあったのではないかとボンゴレ本部内を手分けして探していたが・・・

ターメリック「・・・そっちはどーだ、オレガノ！！」

オレガノ「ダメ！誰もいないわ・・・」

ラル「こっちも違うな」

再び合流したものの、三者ともこの複雑なボンゴレ本部の地下施設に参っていた。

オレガノ「そう・・・」

ラル「まさか再度突入することになろーとはな・・・家光の奴、どこで油売ってやがる・・・」

さすがに出来損ないと自負しているアルコバレーノのラル・ミルチも今の状況に焦りを感じていた。

ターメリック「親方様のことだ、ドンパチやってりゃ今に顔を出すさ」

オレガノ「・・・・・・」

ターメリック「心配なのか・・・」

オレガノの無言をそうとったターメリックだが、オレガノは心配していただけでなくこの地下施設の怪しげな部屋の扉に不信感を抱いていた。

オレガノ「何かしら、これ・・・」

ガラガラ

鉄や油の臭い・・・機械兵器の開発に使われたであろうこの研究室は、大きな人型の機械人形の試作品など、怪しさを醸し出していた。

オレガノ「何なの・・・？これは・・・」

ターメリック「・・・何か記録が残っているかもしれない。手分けして探そう」

ターメリックに続き清とした研究室に入った2人は彼の提案に頷き、ここで行われていた研究内容を調べるために研究資料や記録などが残っていないかを探し始めた。

ターメリック「・・・塗りつぶしてはいるが、こいつは旧イタリア軍の兵器に関するレポートもあるぞ」

オレガノ「軍!?何故そんなものが・・・」

ターメリック「噂だとばかり思っていたが・・・」

ターメリックは心当たりがあるようで、2人に話し始めた。

ターメリック「大戦後・・・イタリア軍が隠滅しようとしたワケありの研究を、裏でマフィアが買い取ったと聞いたことがる・・・」

オレガノ「そんな・・・じゃあ、この施設はまさか・・・!」

ラル「おいっ!お二方、これを見てくれ!!」

先ほどからずっとこの研究の神髄となるであろう資料を探していたラル・ミルチはようやく見つけ出すことに成功し、2人に呼びかけた。

パラ・・・

ターメリック「な、なんだこれは・・・」

それは、モスカの設計図の概略だった・・・

ターメリック「こんなものを造りだそうとしていたとは・・・ボンゴレ上層部は正気か!!?」

ラル「全くだ・・・」

オレガノ「・・・」

そこに書かれているモスカのスペックは凄まじく凶悪なモノだった。

武器の扱いに特化しているアルコバレーノのラル・ミルチでさえも震え上がる程のモノだ。

ラル「・・・こっちにも記録が残っているが・・・!!

・・・どうやらその“モスカ”とやらはヴァリアーに届けられたようだぜ・・・」

ターメリック「なに!」

オレガノ「何を考えているの?9代目は・・・そんなものを何に使おうっていうの!?」

ボンゴレの歴代ボスの中で最も穏健的な9代目からは想像がつかない行動に、度々三人は驚きを隠せない。

ターメリック「・・・こりゃあ急いで親方様を探した方がよさそうだな・・・そばに居(お)られるであろう9代目にも今回の件とこいつの

ことをお聞きしなければ・・・」

オレガノ「・・・そうね。行きましょう、・・・ラル？」

ラル「ああ、わかった・・・（9代目に何があったというんだ・・・それに・・・）」

・・・ラルはもう一つ、気になるものが随分前にヴァリアーの手に渡っておりこの研究室で修正されたと思われる、兵器とはほど遠いが逆に目がついたあるモノの名称に視線を向けた。

ラル「（生体ポット・・・何故こんなモノがヴァリアーに・・・）」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

さーて、今日の修業はどーしょっかな。

楓香『とりあえずＸＡＮＸＡＵＳを見ても狂気に駆られることはなくなったし、後は奴(やっこ)さんの攻略、及び対策だが・・・』

リリス『手掛かりがないのよね、戦闘データの』

楓香『そーなんだよな～・・・』

レイ・カーベル本人の戦いを見たことがないことから対策の立てようがない。

そもそも、あいつに戦闘力はあるのかすらさえわからない、ただの研究者なのかもしれない・・・

モスカをもっさり持ってこられても、萎えるしな・・・

ヴァリアーがオレ達守護者を襲撃してきたあの日、オレはプロトタイプのモスカと交戦している。

・・・確かにあの時のモスカは強かった・・・だが、

楓香「・・・そういえばモスカって、プロトタイプとはいえ弾が貫通しそうなほど装甲弱かったっけ」

リリス「？」

何か・・・見落としているような・・・

・・・先ほどから何回か通りの向こうに見かける金髪の男の事ではなさそうだな。

標的５５　【連絡　来る！】（後書き）

今回の楓香の出番少なっ！！

次話は2、3日中にうpすると思いマス。

１２／２６
加筆修正

標的５６　【掟破りの証拠　来る！】

標的５６　【掟破りの証拠　来る！】

ｓｉｄｅボンゴレ門外顧問チーム

ボンゴレ門外顧問チームのオレガノ、ターメリック、ラル・ミルチは家光と合流するためにボンゴレ地下施設をひた走っていた。

ターメリック「くそっ、ＧＰＳがきかない・・・」

ラル「なんつーこった・・・兵器用の研究室（ラボ）といい、まったくここは悪魔城だな」

家光を探しつつも、オレガノは数分前に立ち寄った研究室で開発されていた機械人形が気になっていた。

オレガノ「・・・ねぇ、ヴァリアーに届けられた人型のアレ・・・

やはり対人戦闘用なのかしら・・・？」

ターメリック「まさか。あんなもん対人に使ったらお釣りがくるぜ」

もし対人に使われたら・・・

考えただけでもゾッとする、あんなもに適うわけがない。

ターメリック「第一、装備が凶悪すぎる」

ギッ・・・・・・・

その時・・・地下道の側面の壁からミシミシとイヤな音が・・・

オレガノ「？・・・何のおｔ」

ガッ！！

ぬっと現れた黒い影。
壁を突き破って現れたのは・・・

皆「！！」

今一番出会いたくない、あの“モスカ”であった。

ラル「や、奴だ！！」

ドガッ

ターメリック「がっ！」

オレガノ「ターメリック！！」

突然現れたモスカの突進にターメリックは巻き込まれ、横に飛ばさ

れたてしまう。

ガチャッ　ドンッドンッ

応戦するためラルも躊躇することなくライフルの引き金を引き焦点をモスカに向けるが・・・

チュイン！チュイン！

ラル「オレの弾丸を弾いただと！」

ラルの発砲も虚しく、モスカの装甲に弾かれダメージを与えられない。

ターメリック「ムダだ・・・逃げろ！」

吹っ飛ばされたターメリックを庇うようにオレガノは拳銃をモスカに向かって発砲するが、ラルの弾丸同様まったくの無傷で、迫るモ

スカの動きを止めることはなかった。

オレガノ「（こんなところでっ！）」

――――万事休す！

キュイィィ・・・

・・・・・・

シーーーーン・・・・・・

・・・かと思われたが、モスカの動きが後一歩で停止した。

皆「・・・？」

オレガノ「止まった・・・？」

？「こいつを止めるには仮死状態にでもなって感知されないように近づき、背後の非常スイッチを切るしかないですよ」

突然の男の声。

そして、突然モスカの背後からヌッと現れた人影に皆警戒する。

ターメリック「！誰だ！！」

モレッティ「間に合ってよかった。味方です、モレッティと申します」

モレッティと名乗る男・・・そしてその名前を聞きターメリックは思い出す。

ターメリック「知っているぞ！“殺され屋”のモレッティ。ボンゴ

レ本部で親方様のスパイをしているという！！」

モレッティ・・・

彼は自分の意思で自分の心臓を止め仮死状態になる“アッディーオ”を使う通称、“殺され屋”のモレッティである。

モレッティ「ここからは私がお供します」

ターメリック「助かった・・・」

ラル「オレもヒヤッとしたぜ・・・まさかここでヴァリアーに届けられた兵器と対面するとはな」

モレッティ「いいえ・・・こいつはプロトタイプでしかありません」

皆「！！」

ラル「プロトタイプ・・・だと・・・！？」

唖然とする一同。
モレッティがいなければ対処すらできなかったこの兵器より、それ以上に恐ろしい兵器など、想像がつかなかった。

モレッティ「ヴァリアーに送られたものはこいつの比ではありません。非常停止ボタンもついていないあいつが、一度暴れ出したら誰にも止めることなど・・・」

ラル「なんだと・・・」

オレガノ「まさか、それって・・・」

最悪の事態だった。

ターメリック「まさかすでにヴァリアーが日本のリング争奪戦に・・・導入しているのか!!?」

ｓｉｄｅヴァリアー

ヴァリアーが日本に置いている拠点で、ヴァリアーの嵐の守護者、ベルフェゴールはベランダの手すりにもたれかけ退屈そうに空を仰いでいた。

ベル「あ～あ、つまんねー。マーモンいないから、イジる相手いねぇじゃん」

レヴィ「・・・」

ベル「つーか、こんなムッサイオヤジと2人とか、すげー萎える・・・」

レヴィ「なぬ!?」

そう、普段はボスの側にいる、ヴァリアーの雷の守護者、レヴィ・ア・タンが何故かベルの側にいた。

ベル「なぬ、じゃねーよ。ま、五月蝿いスクアーロがいなくなっただけでもよしとするか。・・・つーか、なんでお前がここにいんだよ？」

レヴィ「貴様を見張るためにいるのだ」

ベル「ぜってーちげえだろ。・・・あれか、ボスに部屋を追い出されたところってか」

レヴィ「ぬっ！！」

ベル「・・・図星かよ」

レヴィ「・・・ボス・・・」

しんみりとするレヴィの放つ空気にさすがのベルも嫌気が差し、よく毎度同じことを繰り返すなぁと呆れながら早々にその場から退散するのであった。

ｓｉｄｅボンゴレ門外顧問チーム

皆「「「親方様（家光）！！」」」

モレッティの案内により家光が待機している場所まで移動したオレガノ達は、ようやく家光と合流できた。

オレガノ「親方様！撃たれたのですか！？脇腹から血が・・・！」

家光のスーツの腹部には穴が空いており、そこから少量の血が付着していた。

家光「いや、これは手についたただの擦り傷の血がここを押さえたときに付着したものだ」

オレガノ「しかし、服に穴が！？」

パニック状態になっているオレガノを家光は制する。

家光「落ち着け、オレガノよ。・・・これをみてみろ」

家光はガバッと上着のスーツをめくるが・・・

裏地に弾による突起物は見られるが、玉は貫通していなかった。

オレガノ「まさか・・・防弾板!?」

家光「・・・楓香に救われたんだよ。あいつがこのスーツを用意してくれたんだ・・・」

オレガノ「彼女が・・・」

そう、家光が着用しているスーツは、イタリアに戻る前に日本にて楓香から受けとったものだった。

家光「まったく・・・今回ばかりは楓香に助けられてばっかりだ。
　イタリアへ発つ際も背中を押してもらって、こうして早期に
9代目の救出に向かえたからな・・・」

ターメリック「・・・そうだ、9代目は!?」

家光「そこだ、最も・・・」

家光が指差す方には、手足を拘束され意識を失っている9代目が座らされていた。

ターメリック「な、何故9代目を・・・!」

家光「こいつは影だが」

皆「「「「偽者!!!?」」」」

そして皆は理解した、何故家光が撃たれたのかを。
9代目にそっくりな偽者が家光を撃ったのだ。

しかし・・・それならばとターメリックが家光に聞く。

ターメリック「では、9代目は何処へ!?」

家光「部屋に一週間前の9代目専用ジェット機のスケジュールをみつけた」

モレッティ「!?・・・たしかその頃、9代目専用機はエンジン整備のためドッグに・・・」

モレッティはつい先日知った情報を思い出し、それは関係ないと踏んだ。

だが・・・

家光「そいつは違う。本物の9代目は・・・

既に日本に飛んでいる」

皆「「「「「！！」」」」」

家光「そして・・・さっきこいつに吐かせた情報が一番重要だ・・・」

家光は影から聞いた話を語り出した・・・

９代目の息子である、ＸＡＮＸＵＳが引き起こそうと企んでいる、恐ろしい計画を。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

楓香「・・・で、なんでオレの家に来るはずだった貴方がここにいるわけ？」

前回の金髪の男が今、目の前にいたりする・・・

どうやらこの男、オレに会いに来たらしいのだが・・・

ディーノ「あれ・・・おっかしいな～、こんなに楓香の家遠かったか？まあ、ここでお前に会えたからいいか、周りに人いねぇし。
お前に伝えなきゃならないことがあるんだよ。イタリア本部からだが・・・」

おいおいおい、

ちょっ、ちょっとストップ！！

気になるキーワードはあるけど！！

楓香「まてまてまて。お前、何時中村病院を出た？」

ディーノ「ん？6時前だったか？」

楓香「なっ・・・」

この人何時間放浪したの～～っ！！？

このダメ男、部下いないとすぐこうなるんだよな・・・

リリス『前に聞いたあの話・・・冗談かと思ってたけど、本当だったって今納得したよ・・・』

リリス・・・あの“楓香とディーノの愉快（？）な1日”、信じてなかったのかよ・・・

ディーノ「ん？どーかしたのか、そんな暗い顔して」

楓香「もういいです・・・」

この人、自分のこのダメダメな体質を理解していないっぽいから何言っても無駄なんだよな・・・

はぁ・・・・・・

楓香「それで・・・イタリア本部からのって何ですか？」

そう、それはオレがもっとも知りたい情報だ。
オレは少し緊張気味に聞いた。

ディーノ「イタリア本部にいる門外顧問からの通達だ」

そして、予想通りの答えが返ってきた。

ディーノ「今リング争奪戦はヴァリアーに操作されている
９代目による正式な戦いにあらず
ヴァリアーに捕らわれた９代目の安否を確認
次第、リング争奪戦を中止せよ

9代目の保護を最優先指令とする」

楓香「!?・・・了解。やっぱり9代目の意思ではなかったか・・・」

リリス『これで・・・』

楓香『ああ。ようやく9代目を保護できる』

オレはその事実を初めて知ったかのように驚きつつ、内心でやっと9代目の保護に向かえることに喜びを感じていた。

ディーノ「・・・オレもあの9代目がこんな争いを起こすはずがないとは思っていたが、まさかヴァリアーが9代目を捕縛していたと

は・・・」

ギリッと悔しげに歯を噛み鳴らしているディーノに、オレはさっそく元・・・いや、現門外顧問チームとしてディーノに進言した。

楓香「ディーノ・・・いや、キャバッローネファミリーのボスとして、ボンゴレ門外顧問チームから要請したい。

今日の雲戦が終了次第ヴァリアーを拘束、9代目の居場所を聞き出し9代目を保護することに力を貸してくれ。正式な要請書は後になるが」

それに対して待ってましたとばかりに即答するディーノ。

ディーノ「もちろんだ、ボンゴレ同盟ファミリーとして9代目の危機をほうっては置けねえ。同盟の元、尽力させてもらうぜ」

楓香「頼んだ。・・・オレはもう1人の門外顧問チーム、バジルにもこのことを伝えに行く。・・・ああ、それとリボーンにもな」

ディーノ「オレもこの後にリボーンにもこの事を伝えようと丁度思っていたところだ、ありがたい。

なら、オレ達は今日の夜の作戦を練り準備をしておく。
出来次第、連絡を入れる」

楓香「オーケー、オレもそれなりに準備しておく。戦闘になるかもしれねーからな」

ディーノ「おう、ならオレは急いで戻るぜ、じゃあな」

よし、とりあえずは先手を打てそうだ。

オレはようやく9代目救出に本腰を入れれることに安堵した。

――――――――――だがその時、9代目の影の男が既に目を覚ましほくそ笑んでいることには、

家光一同も、オレも気づくことはなかった・・・――――――――――

それよりも・・・

楓香「ちょっ、おい、待てディーノ！！」

ディーノ「ん？なんだよ？」

オレはダッと駆け出すディーノを急いで止める。

また、こいつは・・・と呆れながら。

何故なら・・・

楓香「中村病院は・・・あっちだ」

・・・ディーノが格好よく走り去ろうとしていた方向は、中村病院とは真逆だったからだ。

ホント、しまらねえよな・・・

ディーノ「おう、すまねぇ。サンキュー」

楓香「っ!!だからそっちじゃねーって!!」

ホントこの人、どーにかしてください・・・

久しぶりに、ロマーリオを不憫に思った楓香であった。

標的５６　【掟破りの証拠　来る！】（後書き）

ディーノオチ

１２／２６
加筆修正

標的５７　【安堵と変化　来る！】（前書き）

雲戦はまだです・・・
というか、なかなか進まない（－‘－）

標的５７　【安堵と変化　来る！】

標的５７　【安堵と変化　来る！】

ｓｉｄｅツナ

雲戦当日の早朝、ディーノさんにヒバリさんのことを聞くために中山外科医に向かっていた。

ツナ「ディーノさん、昨日は用事でいなかったけど・・・いるかな？」

すると、病院の前には・・・

山本「・・・ん？おっ、ツナ！！」

獄寺「おはよーございます、１０代目！！」

了平「おう、来たか沢田！！」

ツナ「あれっ、みんな！！」

既に獄寺君に山本、京子ちゃんのお兄さんがいた。

山本「ツナも気になったんだな、ヒバリのこと」

ツナ「う、うん・・・」

獄寺「ったく、跳ね馬の奴こんなときになんでいねーんだよ」

了平「極限に待ちくたびれたぞ」

獄寺「てめー、まだ来てから五分しか経ってないじゃねーか！この芝生頭！」

了平「なにおぅ、タコ頭（ヘッド）！！オレは3分しかじっと待っていられないのだ！！」

獄寺「自慢することかよ！！」

山本「まーまー」

ツナ「あははは・・・」

みんな朝から元気だなぁ、特にこの二人は・・・

ディーノ「おっ、お前らこんなところでなにしてんだ?」

楓香「あんたがいないから待ってんでしょうが・・・」

ツナ「ディーノさん、楓香!」

そうこうしていると、ディーノさんと楓香が走って近づいてきていた。

獄寺「おはよーございます、楓香さん!!
　　ディーノ、てめーなんでいねーんだよ!ロマーリオのおっさんがもういるはずだっつーから来たのによ!」

楓香「例によってそこら中を走り回ってたんだよ・・・で、こいつ1人だと何時たどり着くかわかんねーからついてきたんだよ・・・」

ディーノ「心配性だな、楓香は」

ツナ&獄寺「「（やっぱこの人（コイツ）、自覚してねーっ！！）」」

楓香に連れてきてもらってよかったよ、ホント・・・

ディーノ「そんじゃ、立ち話もなんだしとりあえず中入れって」

獄寺君がキレて暴れそうになるのを山本と了平が諫めながら、オレ達は病院内へと入った。

ツナ「・・・そういえば楓香、クロームは？」

楓香「ああ、あの娘（こ）なら元気だぜ。
　飯食った後、黒曜ランドまで送ったから今は家にいないけどな。まだいていいって言ったけどあの二人組が心配なんだとさ」

ツナ「そっか・・・よかった・・・」

ｓｉｄｅヴァリアー

その日、暇で暇で仕方なかったベルフェゴールは、地元の殺し屋（ヒットマン）狩りをするために並盛商店街に足を延ばすことにした。

しかし、意気揚々と歩いていたベルフェゴールも、標的を見つけられずにだんだんとつまらなくなってきたようだ。

ベル「日本（ジャポン）は殺し屋（ヒットマン）が少ねーからつまんねーな・・・つーか、いねーし」

それもそのはず。ここ数日で付近に潜伏していた殺し屋（ヒットマン）のほとんど・・・いや、全員がこの並盛町から消えたからだ。

・・・ベルフェゴールの手によって。

――――結局、ベルフェゴールは暇つぶしにこの前出会った“オヤジ”の店に行くことにした。

その店の名は・・・

“竹寿司（たけずし）”

――――ガラガラ

店の戸を開けると、活気の良い店の主人の声が聞こえてきた。

オヤジ「へい、いらっしゃい！おっ、この前の坊主じゃねーか！よく来たな！」

ベル「ししっ、オヤジ、今日もあれ見せてくんね？今日は金払うからさ」

珍しく金を払うと言ったベルフェゴール・・・

というのも、マーモンが要求してきた見物代がマーモンの敗北&逃走により浮いたために気分がよかったからだ。

普段のベルフェゴールなら「金は払わないよ、だってオレ、王子だもん」で無銭飲食するのだが・・・

・・・これを言うのも二度目だが、今日は気分がよかったのだ。

オヤジ「おう、なら今日は大物いくぞ！」

板前のオヤジはそう言うと、１メートルを軽く超える体調の魚を空中に放り上げ・・・

スパッ　スパスパッ！！

トストストスッ！

・・・見事に船盛りの上を鮮やかな赤身の刺身が飾った。

そしてベルフェゴールはというと・・・

ベル「やるなー、オヤジ」

と、表面上冷静を装うが、

内心では・・・

ベル「（すっげー、見てるだけでなんか楽しくなってきた♪）」

と、かなり興奮していた。

オヤジ「どーだい坊主、やってみるか？」

ベル「ししっ、やるに決まってんじゃん」

オヤジの誘いに乗り、キラリと怪しく光るオリジナルナイフを取り出したベルフェゴールは・・・

スパッスパッ！！

オヤジさんが投げよこした魚を同じように刺身にした。

オヤジ「おっ、なかなかやるじゃねーか！だがこちとら寿司屋の主人だい、負けられねーぜ！」

ベル「ししっ、オレだって負けねーし。だって王子だもん♪」

――――――こうして二人は互いに競い合うように魚を捌いていき、この戦いはオヤジさんの息子が帰ってくる少し前まで続いたとさ。

（捌いた魚はベルフェゴールとオヤジさんが責任をもって美味しくいただきました。）

――――――その後・・・

その店の主人、山本剛（つよし）の息子の山本武が帰宅すると、未洗の皿の山が目に入った。

武「なあ親父（オヤジ）、その積み上げられた皿はなんだ？」

剛「おうよ、いい腕の魚捌きをする坊主が来てな。ちょっとばかり羽目外しちまってんだ」

オヤジが羽目外すほど・・・いいことがあったんだろうなあ、と武は喜んだ。

武「ははっ、よかったな、親父（オヤジ）！」

剛「おうよ！」

その正体がベルフェゴールだったとは、その時は山本武も知る由もなかった・・・

―――――――――――――――――――――

ベルフェゴールがヴァリアーの拠点から並盛商店街にたどり着いたころ・・・

ｓｉｄｅツナ

オレ達は病院内でディーノさんにヒバリさんの修業の具合を聞いていた。

ディーノ「恭弥は完璧に仕上がってるぜ。家庭教師としての贔屓(ひいきめ)目なしにも強(つえ)ぇぜ、あいつは」

よ、よかった・・・

山本「ふぁ～～っ、なんか安心したら眠くなってきちまったよ・・・」

ディーノ「ん?なら仮眠とったらどうだ?部屋ならすきなように使っていいぜ」

山本「んじゃ、オレ寝てくるわ」

了平「うむ、オレも極限に眠いから寝る!」

獄寺「あっ、ちょっとまてお前ら!!すみません、オレも少し仮眠とってきますのでお先に失礼します、１０代目!」

ツナ「ちょっ、ま・・・」

バタン・・・

み、みんな安心して寝に行っちゃったよ・・・

楓香「おっ、もうこんな時間か、オレも修業にいかなきゃ。ってことでツナ、また夜にな」

ツナ「えっ？」

バタン

楓香も修業に行っちゃったよ・・・

というか、

ツナ「もう戦わなくていいのに・・・なんで修業なんか・・・」

ディーノ「まあ、楓香も想うところがあるんだろう・・・」

想うところって・・・？

オレにはよくわかんないけど・・・

でもディーノさんのお墨付きなら安心だな。

あれ・・・？安心したら何だかオレも眠く・・・

？「お前も修業だぞ」

ツナ・ディーノ「「（ギクッ！！）」」

こ、この声は・・・

リボーン「今日中に死ぬ気の零地点突破を完成させるぞ」

ツナ「リボーン！！」

黒スーツの赤ん坊、リボーンが窓から侵入していた。

・・・っていうか何気にディーノも反応してたような・・・

ディーノ「（生徒んときのクセでオレまでビクッとちまったぜ・・・（汗））」

それに修業って・・・

ツナ「つか、何言ってんだよ!!今日の勝負で決まるんだぞ!!もうオレが修業する意味なんてないんじゃ・・・」

リボーン「最終決戦だからこそだぞ。お前、もしもの時どーすんだ？」

!?

ツナ「もしも・・・？」

ディーノ「リボーン、その件についてなんだが話したいことがある」

リボーン「！わかったぞ。おいツナ、お前は先に修業場に行ってやがれ。バジルが先に待ってるぞ」

ツナ「わ、わかった・・・」

もしものことも気になるけど・・・

ディーノさんの話ってなんだろ??

ｓｉｄｅディーノ

バタン・・・

ディーノ「・・・行ったか・・・」

リボーン「で、話ってのはなんだ?」

ディーノ「ああ。実はイタリアの家光から連絡が入ってな」

リボーン「!!・・・聞かせろ」

――――――そして、オレはリボーンに家光からの連絡の内容をすべて話し、それと同時に門外顧問チームとしての楓香の判断の話もした。

リボーン「・・・なるほどな、だから奴はあんなに自信満々だったのか」

ディーノ「ああ・・・」

流石のリボーンも顔をしかめているな・・・

(なかなか掴めないリボーンの微妙な表情の変化がわかる、長年リボーンの弟子として共にいたからこそのスキルだろうな)

リボーン「・・・なら、その楓香の選択肢は間違っちゃいねーな」

・・・客観的にみればその方法が最善だろう・・・だが・・・

ディーノ「確かに今回のリング争奪戦は今夜で終わり・・・かつ恭弥が勝てば二度とＸＡＮＸＵＳにツナに手出しできないようになると思う。

だがよ、９代目の命も大事だ。早めに行動を起こした方が・・・」

リボーン「お前もわかってんだろ?今は様子を見るしかねえ、９代目の命は向こうが握ってんだ。

それに、あのモスカってのが動いている限り９代目は無事だろーし、下手に手を出さない方がいいだろーな・・・」

!!

そう言われれば言い得てそうだな・・・

ディーノ「・・・まあ、そうするしかねーか・・・」

リボーン「だな」

ディーノ「そんじゃ、オレ達キャバッローネファミリーはリング争奪戦終了直後に動くぜ。それなら同盟の問題とかも引っかからないだろーしな」

リボーン「ああ、そうしてくれ」

・・・なんか暗い話で雰囲気が悪くなっちまったな・・・

あ、そういえば・・・
ずっと気になっていたんだが。

ディーノ「・・・なあ、リボーン、レオンはどこにいんだ?」

リボーン「ああ、レオンなら・・・」

そう言うとリボーンは球体のレオンを出してきた。

リボーン「ここにいるぞ」

球体のレオン・・・って!!

オ、オレも見たことがあるが・・・

ディーノ「!!おい、レオンのその姿って・・・」

リボーン「ああ・・・

何故かわかんねーが、マユの状態になっていたんだ」

標的５７　【安堵と変化　来る！】（後書き）

１２／２５
加筆修正

標的５８　【下された難題　来る！】（前書き）

久しぶりにアクセス解析見たら

・・・４００，０００アクセス・・・

お、驚きました。。。。

みなさんありがとうございます！

標的５８　【下された難題　来る！】

標的５８　【下された難題　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

さて・・・と。

今、修業場にはオレしかいない。

というのも、リリスは天界の緊急性のある仕事で呼ばれたらしい。

猫(リリス)の手も借りたいってほど忙しいらしい・・・

ということで、今オレは自主トレとしての攻撃の技の型を復習することなどを今日の修業としようとしている。

オレ、“夜代楓香”の武器は多種多様である。

それは転生時の特典のおかげであり、転生前の“夜代楓香”の鍛錬のおかげである。

まあ、“夜代楓香”が武器としては大型の“大鎌”による攻撃を主体としているのはそれなりに理由(わけ)があるのだが・・・

まあ、それは置いといて。

・・・また、“夜代楓香”の身体能力は相当高かったらしい。
その事から門外顧問チームとして活動していた頃は重火器を主に扱っていた。

・・・ちなみにあのアルコバレーノのコロネロを育て上げたラル・ミルチにもしごかれた記憶があった・・・

ブルブルッ・・・

まあ、今となっちゃあいい思い出だけど。

おっと、話がそれた。

オレは開けた場所に出ると、先日リボーンに頼んでレオンに作製してもらったグローブをはめて大鎌を解放する。

ガチャッ

楓香「はっ！やっ！！」

シュンッ！！

このグローブのおかげで修業の成果も効率よく出ており、レオン様々といったところだ。

ズゴーンッ！！

例の神様印の手帳の最終ページにある願い事の欄に記載して似たようなものを手に入れようと考えていたりしたこともあったが・・・

バゴーン！！！

切り札は最後まで取っておくものだな。

ドゴーーン！！！

楓香「っと・・・考え事をしながらの修業は疎かになりやすいな、悪い癖が出たぜ。家光叔父さんに怒られるよ・・・」

・・・気がつくと辺り一面焦土と化していた。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

修業場への道中、オレはリボーンに言われた言葉を反芻していた。

『もしもの時・・・』

ディーノさんから太鼓判をもらった雲戦だけど、リボーンの言う“もしもの時”が起こるなら・・・

それに山本や獄寺君、京子ちゃんのお兄さんもまだ怪我が治ってない。

クロームだって昨日の試合で疲れているだろうし、

骸だって・・・

！

そうだ・・・骸は今も寒くて真っ暗な・・・

『同情すんなよ。お前は、あいつがやった事を忘れちゃなんねーんだ』

！！

それは昨日、リボーンに言われたオレにとって痛切な言葉だった。

そうだよな・・・忘れちゃいけないんだ。

骸が起こした、“黒曜ランドの事件”のことを・・・

およそ一月半前、相変わらずリボーン達がいろんな騒ぎを起こしていたけどこれといって平和（？）な日々に、突如として彼らは現れた。

彼らは黒曜中の制服を着込み、フゥ太の“並盛中喧嘩の強さランキング”にそって並中生徒を襲っていった・・・
並中最強の風紀委員長のヒバリさんも黒曜中生徒にやられ、さらに彼らはオレを狙っていて・・・

そしてオレ達（オレ、山本、獄寺君、ビアンキ）は黒曜中生徒がいる黒曜ランドにて激しい戦いに巻き込まれる。
黒曜生の攻撃によって傷を負ったり骸に操られたり・・・

小言弾による超死ぬ気（ハイパー）モードでなんとか骸を倒したものの、彼が起こしたこの戦いはオレを非日常へと駆り出した・・・

彼らのしたことは間違っていた、でも骸もマフィアによる抗争の被害なんだ・・・

あーもう、わけわかんないよ〜〜っ！！

そして、オレはその迷いを振り払うかのように修業場へと走り出した。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅディーノ

リボーン「・・・オレもそろそろツナの修業を見に行かなきゃなんねー、あとは頼んだぞ」

ディーノ「ああ、任せておけ」

・・・リボーンが病院を出るのを見届けたオレは、先ほどまで話していたレオンのマユ化について考えていた。

あの現象をオレは見たことがある・・・いや、その時のことを鮮明

に覚えている。

リボーンによると、レオンがマユ化するときは生徒が成長を見せるとき・・・

オレの時はファミリーが窮地に立たされたあの時で、レオンから生まれた鞭（ムチ）とエンツィオ（特殊なカメで、普段は手のひらサイズだが水を吸うと巨大化し狂暴化する）を駆使してファミリーの窮地を脱した時だ。
また、オレの弟弟子（おとうとでし）のツナも“Xグローブ”と小言弾をレオンから受け取りファミリーの窮地を脱したという。

つまり、レオンのマユ化はリボーンの生徒が窮地に立たされた時におこる現象で、今のリボーンの生徒はツナ、確かに窮地に立たされているともいえるがツナはもう“Xグローブ”を持っている。

・・・となると、レオンが他の誰かをリボーンの生徒として認識しているってことで、そいつが近い未来に窮地に立たされるってことか??

ディーノ「わからねー・・・」

・・・それより今は今夜の事を考えねーと。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリリス

―天界―

リリス「えっ、それって・・・」

神様「すまんの、秘密にしていて・・・」

リリス「そんな・・・あんまりじゃないですか！！！」

神界の上層部が全員一致で可決した。

その内容が悔やめない・・・

リリス「彼に・・・彼女にこれ以上重圧をかけるのですか!?それも、彼女の知らない所で!!」

神様「儂にはどうにもできぬのじゃ・・・あの三つの願い事を叶える事が、儂にできる最大限の手助けなのじゃよ・・・」

それでも・・・

リリス「あんまりじゃないですか!!彼女の行動が、彼女の住む世界の運命を左右するなんて!!」

一急遽、私がこの天界に呼び出されたのはこの事を彼女を補助する私に伝えるため。

その内容は私・・・いや、私達にとってとんでもなく理不尽な事だった。

神様「じゃが、彼の者が復活すれば平行世界にもその影響が及び、天界にも多大なる被害を被ることになるのじゃ」

リリス「だからといって、そいつが復活すればその世界を消滅させるなんて・・・」

話の規模が大きすぎてまだよく理解できないよ・・・

神様「・・・すぐにとは言っておらぬ。奴が復活したとしても、その魂を封印できれば消滅から免れる事ができる」

リリス「封・・・印・・・？」

！！

まさ・・・か・・・・・！！？

神様「そのために君を呼んだのじゃよ、リリス・・・初代闇の守護者レティスフィアの友よ・・・」

標的５９　【闇の縁者　来る！】（前書き）

冬はめちゃくちゃ眠くなる・・・

ｚｚＺ・・・・・

標的５９　【闇の縁者　来る！】

標的５９　【闇の縁者　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ようやくたどり着いた修業場にはすでにバジル君が待っていた。

バジル「あっ、沢田殿！」

ツナ「バジル君、ゴメンね待たせて」

バジル「いえ・・・あれっ、リボーンさんは？」

あ、そういえばリボーンは遅れるんだっけ。

ツナ「えっと・・・ディーノさんと話があるみたいで遅れてくるって・・・」

バジル「そうですか。なら、いつものスパーリングを先にして、体を温(あった)めておきましょう」

えっと・・・

ツナ「そー・・・・だね」

そう言いつつ自然にXグローブを手に填めるオレは、最近この修業に慣れてきてしまってるなーって少し落ち込んだ。

バジル「では・・・」

バジル君は死ぬ気モードになるため死ぬ気丸を取り出し飲み込む。

ゴクリ・・・

ボウッ

バジル「準備オーケーです！」

バジル君の額からは勢いよく青色の死ぬ気の炎が灯り、バジル君は自分の武器にも炎を灯し構えた。

よし・・・

オレも死ぬ気丸を飲み込み・・・

ゴクリ・・・

ボボゥッ！！

超ツナ（ハイパー）「いくぜ」

シュンッ

ガキンッ

ガガガッ！！！

吹き上がる砂埃の中、スパーリングが始まった。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

・・・修業開始から数十分後、モワワンと上空に小さな煙が立ち込めそこから黒猫が飛び出してきた。

楓香「おっ、おかえり」

リリス「うん、ただいま楓香」

・・・？

なんとなく、表情が暗いような気がするが・・・

今は猫モードだしはっきりとはわからない、だから何でって聞くのもなんだかな～。

まぁ・・・その時がくれば教えてくれるはずだ、それまで待とう。

楓香「・・・じゃ、幻術ヨロシク」

リリス「わかったわ」

そしていつもと変わらない幻術による修業が始まった・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリリス

もしかしたら彼女も私の行動の違和感に気づいているかもしれない・・・

でも、まだあのことを彼女に話すわけには、知られるわけにはいかない。

――リリス「！！！・・・知ってらしたんですね」

私の上司にあたる神様がそれを知らないはずがないか。

神様「もちろんじゃ。そしてお主なら・・・彼の者がどれだけ危険か理解しているじゃろう」

もちろん・・・危険性は知っている。

けど、封印って・・・

リリス「しかし、私は封印まで立ち会っていません。どのように封印されたかまでは・・・」

神様「その方法は・・・儂が教えよう。彼の者をよく知っているお主になら口頭での封印方法の説明を理解出来るはずじゃ・・・」――

・・・その方法を聞いた時、私は無謀だと思った。

下準備は出来ているけど、ほとんど運任せって・・・

いや、楓香任せだ。

私は旧知の友に祈った・・・

―お願い、どうか楓香を守って下さい・・・レティスフィア・・・―

――――――――――――――――――――

雲戦が始まろうとしていたその夜、並盛山の一角から爆発音と共に閃光が放たれた。

ｓｉｄｅツナ

ボウッ

ズゴゴゴッ！！！

バジル「さ、沢田殿！！大丈夫ですか！！」

ツナ「あ、あぶね～～」

今オレはバジル君に頼んで初代が編み出したといわれる“零地点突破”を使えるようになるため、その修業をしていたんだけど・・・

リボーン「ヘタしたら死ぬところだったぞ、バカツナめ」

ガッ

ツナ「んぎゃ！！！」

リボーン「余計なこと考えてたな」

ツナ「いでっ！！追い討ちかけんなよ！！」

途中から合流したリボーンはスパルタだし、すぐ蹴ってくるし！！

ツナ「つーかまだやんの！？もう行かないと、ヒバリさんの試合始まっちゃうよ！！」

心配で集中なんかできないよ！

リボーン「ヒバリのの勝負は獄寺や山本にまかせて、お前は技を完成させることだけに集中しろ」

ツナ「そんな！！本気で言ってんのか！？」

リボーン「オレは本気（マジ）だ」

！？

ツナ「え・・・？リボーン・・・」

それって・・・

リボーン「ＸＡＮＳＵＳのことだ、一波乱あるに違（ちげ）ぇねー・・・
（それに楓香も試合がねーってのに修業に行っていた・・
・万全の状態で雲戦を観戦するためだろうな）」

ツナ「うっ・・・」

確かに・・・オレもなんかイヤな予感がするんだけど。

―――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

その夜、オレ達三人の守護者が並盛中昇降口前に集結した。

・・・もちろん、リング争奪戦最後の雲の守護者対決を見守るためだぜ。

因みに楓香さんは遅れてくると伝言があった。

獄寺「いいかてめーら!!何が何でも勝つぜ!!」

最終決戦だ、気合い入れねーとな!

山本「おい何言ってんだ?戦うのヒバリだぜ?」

了平「お前がいきり立ってどーするのだ?」

なっ!

獄寺「んなこたわーってんだよ!!

　　１０代目はオレらを信頼して留守にしてんだ。オレらの前で黒星を喫するわけにはいかねーだろーが!!」

１０代目はオレ達に任せてくださったんだ・・・失態を曝(さら)すわけにはいかねーんだよ!!

山本「ハハハ!変な理屈だな」

獄寺「てめーには一生わかんねーよ!!このバカッ!!」

了平「タコヘッド!!!オレもわからんが何故か極限に燃えてきたぞ!!!」

なっ、こいつもかよ！

バカ二人を構っている間に校舎の奥から気配がした。

あいつは・・・

山本「今日の主役の登場だぜ」

ヒバリか・・・

雲雀「君達・・・何の群れ？」

獄寺「んだと、てめー！」

群れってなんだよ、群れって！

バカ二人と一括りにすんじゃねー！！

山本「まーまー。えっと、オレ達は・・・」

了平「応援に来たぞ！！！」

不本意だが１０代目に頼まれたんだ、妄りに無視するわけにはいかねーからな！

ヒバリ「ふうん・・・目障りだ。消えないと咬み殺すよ」

なっ！！

了平「なんだその物言いは！！極限にプンスカだぞ！！！」

ヒバリッ、こ、こいつ・・・好き勝手言いやがって！！

山本「まーまー、落ち着けって。気にすんなヒバリッ、なっ？オレ達はぐーぜん通りかかっただけだから」

雲雀「そう」

けっ・・・

ザッ！！

すると遠くに黒い大きな影・・・奴が現れた。

あいつは、あのデカ物は・・・

グオングオン・・・

来やがったな、ゴーラ・モスカ！！！

雲雀「そうか・・・

あれを咬み殺せばいいんだ」

ヒバリは奴を獲物を見つけたかのように睨みつけていた・・・

ハルの・・・（2）（前書き）

怖いモノみたさにハルを入れてみたw

ハルの・・・（2）

ハルのハルハルインタビュー～（2）‘闇’の守護者　編～

ハル「皆さん、こんにちは（こんばんは）！そしてお久しぶりです！
　ハルのハルハルインタビューの時間です！」

リボーン「おい、ハル。まだやるのか？」

ハル「もちろんですよ、リボーンちゃん！あ、ツナさんは修業中なので今日は不参加ですぅ～よよよ・・・」

リボーン「いいからさっさと始めろ」

ハル「は、はい！そうですね！あらためまして、今日のゲストは！」

ウィーン・・・↑上からゲストが下ろす機械音

楓香「よっハル、リボーン。呼んでくれてありがとな」

リボーン「ちゃおっス、楓香」

ハル「はい！ツナさんの義姉さん、夜代楓香さんです！」

楓香「で、オレは何話せばいいんだ？」

ハル「えーっと、まずは・・・誕生日とか、血液型とか、身長とか・・・でしょうか？」

楓香「ふむふむ、オッケー。誕生日は６月６日で、血液型はＯ型、身長は１７６ｃｍで体重は・・・」

ハル「はひっ、ストップ、ストップです！体重までは言わなくてもいいですよ、乙女の秘密です！」

楓香「そ、そうなのか？（そーいうもんか？）」

ハル「そうなのですよ！簡単に話してはいけないのですぅ！あ、でも、ハルだけには教えてもらえますか？」

楓香「（何故に?!）あ、ああ、いいけど・・・ゴニョゴニョ・・・」

ハル「ふむふむ・・・は、はひ～っ、その身長でその体重・・・羨ましいです～～・・・」

楓香「そ、そうか?」

ハル「そうですよ!この前，ハル感謝デー，で京子ちゃんとケーキを食べたのがいけなかったのですかね・・・」

リボーン「おい、ハル。さっさとインタビューの続きをしやがれ」

ハル「はひっ、そ、そうでした!えっと・・・楓香さんは日本に来る前はイタリアにいたんですよね」

楓香「ツナんとこの親父さん、家光叔父さんにいろいろ鍛えてもらってたんだ」

ハル「はひ～、ツナさんのお父様にですか。しかしいろいろとは・・・何を鍛えてもらったんでしょうか?」

楓香「うーん、たとえば武術かな」

ハル「ブジュツ・・・ですか？」

楓香「格闘技とか・・・有り体に言えば合気道とか？いや、それは軽すぎるか・・・」

ハル「はいはーい、合気道ならわかります！

　ハルは新体操をしているのですが、最近街の中でそうとうデンジャラスなことが度々起こっているらしいので、自衛のために習った方がいいという話をよくしますね！」

楓香「街の中がデンジャラス？・・・どんな事が起こっているんだ？」

ハル「あ、楓香さんは引っ越してきたばかりなんですよね？ん～・・・突然爆発音が聞こえたりとか、空で何かが爆発したりとか、キケンな毒物で・・・」

楓香「そっ、それって・・・

（ランボの手榴弾とかイーピンの一筒時限超爆（ピンズじげんちょうばく）じゃん！

！？）」

リボーン「ニッ」

ハル「あ、あとあと！裸で爆走する男がいるらしいのですよ、怖いですぅ～」

楓香「（そ、それって・・・ツナのことじゃ・・・）」（ガーン・・・）

ハル「・・・でも、そんな非日常なこと、起こるはず内ですよね～」

楓香「もう足突っ込んじゃってるって！」

ハル「はひっ！！？ど、どうしたのですか、楓香さん？」

楓香「い、いや、何でもないよ（ツナ並みにツッコんじゃってるよ・・・）」

リボーン「おっ、楓香もついにツッコミ係りか？」

楓香「なっ！（イヤだよ、そんなポジション！）」

ハル「ツッコミ？・・・よくわかりませんが、久しぶりのインタビュー、楓香さんの話を聞けて楽しかったです」

楓香「そ、そうか、あははは・・・（オレは何か疲れたよ・・・）」

ハル「それではまた次回！ハルのハルハルインタビュー、シーユー、アゲインですぅ！」

リボーン「ちゃおちゃお」

楓香「（ツナ、お前の苦労がワカタヨ・・・）」

ハルの・・・（2）（後書き）

オリキャラとか出てきたらまたしようと思います！（たぶん）

標的６０　【《雲戦》　来る！】（前書き）

ようやくヒバリさんキタって感じです・・・（＾＾；）

標的６０　【《雲戦》　来る！】

標的６０　【《雲戦》　来る！】

ｓｉｄｅ獄寺

あのデカ物とヒバリの戦い。

オレ達は今、戦闘フィールドに来ているのだが・・・

了平「こ・・・」

獄寺「ここが・・・」

校内の中心にある最も広くて何もないはずのグラウンドに・・・

チェルベッロ「そう、これが雲の守護者バトルの戦闘フィールド。

クラウドグラウンドです」

有刺鉄線で張り巡らされた八角形の閉ざされたフィールドに・・・

了平「な、何ということだ・・・運動場が!!」

機関銃が八角形の頂点に設置されていた。

獄寺「ガ、ガトリング!!?」

チェルベッロ「雲の守護者の使命とは、

何ものにも捕らわれることなく独自の立場からファミリーゆ守護する孤高の浮き雲。

故に最も過酷なフィールドを用意しました」

・・・チェルベッロの奴らの説明によれば、あのガトリング砲はある程度近づいたら自動的に射撃する自動砲台らしい。

あと地中にも重量感知式のトラップ・・・まさしく地雷ってモンが埋め込まれてる。

了平「まるで戦場ではないか！！」

その言葉には同感だぜ、芝生頭・・・

するとＸＡＮＸＵＳ側の連中がぬかしやがった。

レヴィ「怖けりゃ逃げろ。てめーらのボスのようにな」

ベル「ししししっ」

こ、こいつら・・・！

獄寺「ふざけんな！！１０代目は逃げたんじゃねぇ！！！」

山本「ツナは来る必要ねーのさ。

ヒバリはうちのエースだからな。あいつは負けねーって」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ楓香

っと・・・

楓香「間に合ったか？」

リリス「ええ、まだ始まっていないようだし・・・」

するとＸＡＮＸＵＳの笑い声が聞こえた。

ＸＡＮＸＵＳ「エース・・・

ぶはーはっはっ！！！そいつぁ楽しみだ！！」

あのヤロー、ぬかしやがって・・・

ぎりぎりと握り締める拳で何とか怒りを収めているオレに、リリスは心配して話しかけてくれた。

リリス「楓香、大丈夫よね・・・？」

楓香「あ・・・・・・ああ。この前みたいな失態は見せられねーからな」

ましてや9代目救出作戦もこの後控えてんだ、オレがしっかりしないでどーすんだって話だな。

・・・ツナも今は零地点突破を身につけるために修業中。

もしかしたら・・・というかこの作戦が上手くいけば大空戦がなくなるし、修業の意味なくなっちまうかもな。

零地点突破を完全に習得する機会を逃しちまうかもしれねーけど、あとで何とかしてオレが教えればどーにかなるだろ。

世界の修正力とか働いてどっかのタイミングで自然とマスターするかもしんねーし。

・・・それを言っちゃあ、その修正力とかが発動してしまって作戦が失敗するとかねーよな、そっちの方が心配だ・・・

ようやくたどり着いたグラウンドには巨大な戦闘フィールドの外に山本達が固まって集まっていた。

山本「お、楓香！」

楓香「すまねえ、遅くなった！」

獄寺「いえいえ、今始まるとこっスから！！」

了平「そうだ、まだ大丈夫だぞ！円陣も組んでないしな！！！」

えーー、組み終わってから来ればよかったかな～～・・・

雲雀「ふん・・・」

・・・フィールド内の雲雀がこっちをチラッと見た気がした。

―――――――――――――――――――――――――

暗闇の中、２つの炎が拮抗すれば離れを繰り返していた。

並盛山のとある場所で、ツナは未だ零地点突破の感覚を掴めずに修業を続けていた・・・が。

ボウッ！

迫るバジルの攻撃にツナは感覚を研ぎ澄ませ、炎の変化を感じ取ろうとする。

リボーン「そこだぞ、ツナ」

家庭教師（かてきょー）であるリボーンの言葉にツナはキッとさらに感覚を研ぎ澄ませた。そして・・・

ドォオオンッ！！！！

凄まじい爆発音と共に辺りの地面の岩やらが舞い上がった。

ガラガラ・・・

その爆発を遠目から確認したリボーンは、ツナがいるであろう場所に走り寄った。

バジル「沢田殿!!しっかりしてください!」

ツナ「うう・・・」

バジルもこの修業の危うさに気づいていたが、ツナの頑張りに乗じて付き合っていた。だが・・・

バジル「リボーンさん、もう限界です!これ以上は沢田殿の体が壊れてしまいます!」

リボーン「・・・・・・」

そもそも死ぬ気モード相手に死ぬ気モードを一瞬解くというのは自殺行為だ。

リボーンだからこそ、ツナのその修業の相手をしようと考えていた
バジルだが、さすがに危険を感じた。
体を壊したら元も子もないのだ。

しかし・・・

ツナ「ハァ・・・ハァ・・・待ってバジル君・・・
今、炎が・・・」

・・・ツナが何かを掴めたらしい。

ツナ「な、何となくだけど・・・初代がこの技でやろうとしたこと
が・・・わかった気がした・・・」

バジル「沢田殿・・・」

リボーン「そーか・・・」

それでもまだ何となくのレベル・・・

さすがのリボーンもツナに問いかけた。

リボーン「どーすんだ？これで切り上げるか？」

しかしツナは首を横に振った。

バジルが何か言いかけようとした言葉をツナは遮るように言った。

ツナ「だって・・・リボーンの言うとおりだよ・・・こんなこと考えたくないけど・・・」

ツナの頭に今朝の夢の光景が過ぎる・・・

ツナ「もしも・・・もしもヒバリさんが雲戦で負けたりしたら・・・」

バジル「沢田殿・・・」

ツナ「そ、その時は・・・」

どうなるかわからない・・・

しかし・・・

ツナ「みんなを・・・守らなきゃいけないから・・・」

――そのために手に入れた力だから――

――――――――――――――――――――――――――――

ヒバリとモスカが戦闘を開始しようとしているその時、ディーノ率

いるギャバッローネファミリーはその様子を隠れて見ており、９代目救出の突入のタイミングを計っていた。

ｓｉｄｅディーノ

ロマーリオ「ボス、全員配置についたぜ」

ディーノ「よし・・・そろそろ始まっか」

皆をグラウンド周辺に無事に配置させ、オレは一安心した。

何故ならチェルベッロの奴らがでしゃばってくると予想していたからだ。

だが、実際何の妨害もなかったらしい、順調にいって何よりだ。

・・・そこんとこが少し引っかかるが。

ロマーリオ「ボス・・・いいですかい？」

ディーノ「何がだ？」

ロマーリオの質問の意図がわからずにオレは聞き返した。

ロマーリオ「いくら恭弥が強くなったっていっても、相手はヴァリアーのボス補佐だ、ハンパねーぜ。それに・・・」

ロマーリオは　フーッ　と一息付き煙草に火を着け吹かす。

ロマーリオ「その補佐の人型機械の中に９代目が捕らわれてんだ、その機械も心配しなきゃならないんだ・・・

近くで見てやらなくていいのかよ」

ディーノ「・・・・・・」

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

黒曜の奴らは遠くで観戦しているが・・・

まぁいい。楓香さんも来たんだ。

獄寺「いくぜ、いつもの！！」

山本「おう！」

了平「うぬ！！」

楓香「あはは・・・はぁ・・・」

オレ達はいつものように円陣を組み・・・

皆「「「「ヒバリーッ、ファイッ！！！オーー！！！」」」」

よし！気合いが・・・って！

獄寺「コラ芝生頭！！声が小ちーせーぞ！！」

了平「なぬ！？ヒバリ本人が入らんのでイマイチ燃えんのだ！！」

楓香「あれで・・・かよ」

山本「しっかし、最初に一番円陣嫌がってた獄寺がこんなにやる気とはな」

ま、まあどちらかといえば・・・いゃ・・・だが！

獄寺「ったりめーだ!!
　　１０代目がいたら、きっとこうした筈だ!!」

負けんじゃねーぞ、ヒバリ・・・

１０代目のために!!

sideディーノ

確かに、あのゴーラ・モスカの資料を・・・家光から送られた資料を見たときは驚いたぜ。

遠目に円陣が終わった楓香達を確認・・・そして開始の合図が聞こえた。

チェルベッロ「それでは初めます。

雲雀恭弥

勝負（バトル）開始！！！」

ガチャン！！！

試合開始の合図と共に・・・

ドウッッ！！！

ゴーラ・モスカが恭弥に向かってジェットで突っ込んでいく。

ロマーリオ「な！！ホントに飛びやがった！！」

送られた資料でモスカの構造を確認したロマーリオもさすがに驚いていた。

だが・・・

オレはロマーリオに言った。

ディーノ「あのな、ロマーリオ・・・恭弥には」

ジェットで突っ込むモスカはさらに、

ガチャン！ズガガガ！！！

手からの発砲により恭弥に攻撃を与えようとする・・・

それに対し、恭弥はふらっと・・・しかししっかりとした足取りで
モスカに突っ込み・・・

右トンファーを上段に構え・・・

ディーノ「ゴーラ・モスカなんて奴・・・・・」

一気に振り下ろし・・・

ガキッ！！

さらに刺したトンファーを支点に・・・

ゴキャッ！！！

左トンファーで・・・・

――眼中にないみたいだぜ――

右腕を千切り壊した。

ビシビシ・・・・ドオン！！！！

右腕とその他諸々に深い傷を追ったモスカは倒れて爆発を起こした。

雲雀「・・・・・・・」

カチ・・・

・・・そして恭弥は2つの雲のハーフボンゴレリングを一つにした。

ロマーリオ「な・・・・・・・・はっ！」

瞬時に終わってしまった戦闘に唖然としていたロマーリオもようやく復活した。

ロマーリオ「きゅ、９代目！！」

ディーノ「大丈夫だろう、そっちはな。右腕の損失による爆発だ、本体・・・９代目の捕らわれている器官は無傷だろう」

何はともあれ良くやったぜ、恭弥！

・・・と、言いたいところだが。

あの恭弥がこれで止まるはずがねぇよな・・・・・・

雲雀「これ、いらない」

チェルベッロ「へ？あの・・・」

・・・と言って今だ呆けているチェルベッロにリングを渡し・・・

雲雀「さあ、おりておいでよ・・・そこの座ってる君」

椅子に座っているＸＡＮＸＵＳに対して・・・

雲雀「サル山のボス猿を咬み殺さないと、帰れないな」

挑発しやがった・・・

ったく、しょーがねぇな。

ディーノ「いくぜロマーリオ！恭弥を止めたら作戦開始だ！！」

ロマーリオ「オーケー、ボス！」

オレ達の本番はここからだぜ！！

標的６０　【《雲戦》　来る！】（後書き）

打ち切りみたいって言わないで～～～っ！！ｂｙ氷雨

１２／２５

零地点突破を習得する→零地点突破を完全に習得する　と加筆修正

標的６１　【雲戦終了、そして・・・　来る！】

標的６１　【雲戦終了、そして・・・　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

雲雀の戦いを見て、オレ達は終始無言になっていた。

・・・・・・

リリス『・・・・・・』

いやぁ、あっけなかったね・・・

うん、瞬殺って感じだな。

リリス『彼・・・めちゃくちゃ強いわね・・・』

楓香『そーなんだよな・・・』

おそらく今の雲雀相手は苦戦しそうだな・・・

雲雀との初めての接触の時の戦いは・・・まあ殺気も殺しての本気の一撃だったからな。

でもさ、あれがまぁ、あん時の雲雀の強さを1とすると、今はその5倍ぐらい・・・か？

つーか、この一週間てディーノにどんだけ鍛えられたんだよ!!

今の奴なら体術だけなら苦戦する、うん、絶対。

あれ・・・？神様にもらったチート能力は・・・？

？？

・・・まあとにかく、さすが最強の風紀委員長、雲雀恭弥・・・

成長速度ハンパねー・・・・・・

と、とりあえずあいつを押さえるのはディーノに任せよう。
オレがでしゃばったらどうなるかわかんねーからな・・・

ブルブルッ

リリス『ふ、楓香、大丈夫・・・？』

必死に頭を降り出すオレに、リリスは優しく話しかけた。

楓香『あ・・・ああ、うん、ちょと現実逃避したいなーとかは思ってないよ、ホントダヨ？』
リリス『なんでカタコトなのよ・・・』

いやぁ、あの時余裕な感じで見せつけちゃったから根に持って一生、会う度に勝負を仕掛けてきそうでイヤになったからじゃないよ、ホントダヨ？

リリス『前途多難ね・・・』

うっさい・・・クスン・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

獄寺「なっ・・・」

了平「なんと・・・」

山本「ハハ・・・あっという間に終わっちまったな」

まったくだぜ・・・

まあこれでオレ達の５勝でリング争奪戦勝利だぜ。

やりました、１０代目！！

ディーノ「まーまー、落ち着けって恭弥。あとで楓香が相手するからさ」

楓香「なっ、オレかよ!?」

雲雀「ふーん・・・ならいいかな。キミには貸しがあるからね」

・・・ディーノの奴も雲雀を押さえたし、無事に終わったぜ。
(楓香さんのことは・・・すみません楓香さん!オレにはどうにもできないっス!!)

だが、

――このリング争奪戦がこうもあっさりと終わる筈もなかった・・・

パチパチパチパチ・・・

??「いやぁ～、素晴らしい戦いでしたぁ。私の自慢のモスカを倒すとはぁ・・・」

皆「！！」

ＸＡＮＸＵＳ「ふっ・・・・」

そろりとＸＡＮＸＵＳの背後から現れた男・・・

その男は白衣を纏う・・・
レイ・カーベルだった。

ディーノ「・・・おい、何故モスカに近づこうとする？」

・・・何故かディーノが焦りながらそう言ったように聞こえた。

レイ「アレを回収に来たのですよ」

ディーノ・楓香「！！」

跳ね馬だけじゃなく・・・楓香さんも驚いている？

ディーノ「駄目だ！！お前達が無断でそのような危険な兵器はオレ達が処分する！」

レイ「はぁ・・・わかりました、仕方ないですね」

ディーノ「（意外とあっさり引きやがったな・・・こっちにとっては好都合だが）」

どうやらあのモスカは相当危険なものらしい・・・ヒバリの奴、良く勝てたな・・・

だが、レイはこう続けた。

レイ「ですがぁ・・・まだ終わりではありませんよ、諸君」

は・・・?何言ってんだ奴は??

獄寺「おいてめー、何が言いてーんだ!!リング争奪戦はたった今、ヒバリの勝ちで総合でオレ達の勝ち、てめーの出番はとっくの昔に終わってんだよ!!」

ディーノ「獄寺の言うとおりだ。既にボンゴレ次期候補者、沢田綱吉とその守護者の勝ちに終わった、お前達は潔く負けを認めたはずだ・・・

それともお前は棄権を今から取り消すとでも言うのか?」

そんなことは許されねーからな!!第一、てめーらのボスが認めたんだ。

だが奴は相変わらずの口調でこう言ってきた。

レイ「いえいえ、そんな無粋な真似はしませんよぉ。

・・・ただキミ達に紹介しておきたいモノがありましてねぇ。

時間が足りなくてお見せできなかったものですから、それくらいはよろしいでしょ?」

・・・そういやぁ、奴の隣の縦長の機械はなんだ?

中に何か入っているのか？

楓香「けっ、なら見せてもらおうじゃないか。争奪戦が終わったすでにオレ達には関係ないがな」

確かにそうだな、決着がついた今となっちゃあ何を出してきても意味ないぜ。

だが・・・

奴の後ろにいるＸＡＮＸＵＳのニヤリと笑う顔に・・・

一握の不安を感じる・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅボンゴレ門外顧問チーム（イタリア）

家光率いるボンゴレ門外顧問チームは、静まり返ったボンゴレ本部で９代目の保護の連絡を今か今かと待っていた。

オレガノ「しかし・・・あのモスカという兵器は即破棄されるでしょうか？」

家光「なに、９代目は戦いを好んでいらっしゃらない方だ、あのような凶悪な兵器はすぐさま破棄命令が下されるだろうさ。
・・・９代目自身もそのモスカに酷い目に合わされているんだ、間違いないだろう」

オレガノ「そう・・・ですよね」

ホッとため息を吐くオレガノに家光は苦笑した。

オレガノ「笑わないでくださいよ・・・本当に恐ろしかったのですからね、突然現れた時は」

ターメリック「さすがに命の危機を感じましたよ・・・」

モレッティ「全くです」

家光「すまなかったな・・・オレもあの資料を見て驚いたよ。まあ、

オレだけなら9代目が利用されていることはわからなかったが・・・
」

パンッと景気よく楓香からもらった防弾版入りのスーツを叩く家光。

家光「こいつがなかったら、この影にヤられてたかもしれない・・・
あいつのおかげだな」

――すると、さっきまで静かにしていた両手両足を拘束された9代目の影がいきなりこう言った。

男「・・・今いつ時だ」

いきなりの言葉に警戒した皆だったが・・・

今の縛られた男には何もできない。

家光「・・・そろそろ雲戦が始まったころじゃねーか?それがどーした」

そう答えて不審に眉を上げて問う家光に、

――彼は突然笑い出した。

男「ククク・・・・ククククッ・・・・」

家光「ん?なんだ・・・・?」

男「ヒャッハハハッ!!!」

家光「!!」

男「あいつのおかげ・・・だと?あの夜代(ほのか)仄香の娘のことか?」

家光「!!?何故お前がそのことを!?」

夜代仄香・・・その人物はまさしく夜代楓香の母親の名前だった。

男「だったらな・・・その小娘に感謝するのはおかしいと思うぞ」

そう吐くその男にターメリックは胸ぐらを掴んで怒鳴った。

ガシッ！

ターメリック「貴様が彼女の何を知っているというんだ！！返答次第ではただではおかないぞ！」

ターメリックがこれほどまでに怒るのも、門外顧問チームは理解していた。

楓香は８年間共に任務をこなしてきた仲間だ、その仲間を侮辱するようなことを言われたことでターメリックが怒るのもムリはない。

だが・・・その男はまたさも楽しそうに話し始めた。

男「ヒーヒヒ、おまえらよお・・・そのモスカの他にヴァリアーが調達していたモノを知ってっか？」

ターメリック「な、何のことを言っている！？」

ターメリックやオレガノにはわからなかったが、ラル・ミルチには思い当たる節があった。

ラル「生体ポット・・・生命維持装置とそれに準ずる化学薬品のことか！！？」

皆「！！」

男「そーだ、それだよ、ヒヒッ」

家光「生体・・・ポットだと・・・！？」

男「何故あれがヴァリアー内で取り扱われていたかわからねーだろ。
そりゃあそーだ、ヴァリアー闇の守護者、レイ・カーベルが行(おこな)った研究のすべての記録をもみ消したからな！」

そして一呼吸置くと、その影は満面の恐ろしい笑みでこう言った。

男「８年間稼働し続けた・・・例の事件からずっと機能していたその生体ポットの中に入れられていたのが・・・

白い髪の女だってことをよ！！」

オレガノ「白い髪の・・・」

家光「女・・・だと・・・・・・っ！！！」

突然言葉を途切らせて驚愕する家光に、皆の注意が集まり、理解した・・・

オレガノ「親・・・方？」

ラル「なんだ、わかったのか！早く言え！！！」

家光が何かに気づいたことを・・・

家光「８年前の“ゆりかご”・・・白い髪・・・消えた女性・・・

・・・

・・・・・・・・まさか」

――――そして家光は叫んだ。

家光「・・・中止だ」

オレガノ「えっ、何を・・・」

家光「中止だ！！今すぐ雲のリングの争奪戦を中止させ、

楓香を保護するんだっ！！！！」

――しかし、時はすでに遅し・・・

時は無情に過ぎ行き加速していく・・・

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ三人称

リリス『ふ、楓香、何かイヤな予感がするからやめておきなさいよ・・・楓香？』

―ダメだ、聞いちゃイケナイ―

楓香の頭では“超直感（偽）”が警告を鳴らし、リリスもそう言うが・・・

彼女は何かに取り憑かれたように彼の行動を許してしまった・・・

楓香「いいぜ、見るだけ見てみよーじゃんか」

その言葉にレイはニヤリと笑うと・・・

レイ「・・・それでは、彼女を紹介するとしよう・・・」

パチンッ

指を鳴らし・・・

バサッ・・・

皆「！！！！？」

楓香「なっ・・・・・・・」

包み隠していた布を落とし、

緑の溶液に浸る・・・生体ポットに入れられた、

白い服を着た女性の姿をさらした。

そして彼女の顔はまさしく・・・

獄寺「楓香・・・さん?」

――“夜代楓香”にそっくりだった。

だが彼女は“夜代楓香”ではない。

なぜならその“夜代楓香”はその生体ポットを凝縮し、目を離さずに震えていたからだ。

だが、その彼女を知る者が一人いた。

絞り出すような声。

しかしこの静まり返ったレイのステージでは、誰もがそれを聞き取った・・・

楓香「かあ・・・・・・・・さん・・・・」

白い病院服みたいな物を着、

白く澄み切った長い髪。
それがゆらゆらと生体ポットの中で揺れている・・・

・・・そしてその姿は紛れもなく己が母親の姿。

8年前のあの日、最後に母を見たあの時から変わらない姿で。

標的６１　【雲戦終了、そして・・・　来る！】（後書き）

うん、ようやくここまで来たって感じです。

標的６２　【滅む心　来る！】（前書き）

シリアスパートです

標的６２　【澱む心　来る！】

標的６２　【澱む心　来る！】

ｓｉｄｅ楓香

――目の前の光景が理解できない。

忘れるはずがない母親の顔がそこにあることが・・・

転生前の“夜代楓香”が、体の操作権を乗っ取ったかのように体が動かなかった。

――ありえない。

彼女は紛れもなく“死んでいた”はずだ。

なのに・・・

リリス『・・・楓香っ！！ふうかぁ―っ！！！』

リリスの念話での必死の呼びかけも遠くから聞こえてくるような錯覚を覚える。

ただ、奴(レィ)の言葉だけは・・・あいつの言葉だけが心まで届いた。

レイ「彼女は夜代仄香、８年前のマフィアに関わる事件で命を落とされました・・・何故彼女が亡くなったか知っていますかぁ？」

楓香「っ・・・・・・・！！」

リリス『楓香、聞き入れちゃダメ！！』

・・・そしてレイは両手を宝かと上げ恐ろしく闇がかった笑顔で言い出した。

レイ「８年前、ある研究にて私は彼女が闇の守護者の末裔だと知ったのですよぉ・・・そして！！

彼女の死の瞬間に、魂から闇の力を入手しようとしたんですが失敗しましてねぇ・・・

あのモルモットの分際のせいでその娘に移されてしまったんですよぉ・・・・・・」

皆「「「「「！！！！！」」」」」

とても聞くに耐えない内容だったけど、それを止めることができるものはいなかった・・・

レイ「貴女の闇を頂戴しに来ましたよ・・・夜代楓香・・・研究対象の貴女の闇を！！」

楓香「ぁ・・・・・・」

バリン！！・・・・

――ワタシの中で何かが砕ける音がした・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ門外顧問チーム（イタリア）

オレガノ「えっ・・・楓香ちゃんの・・・お母さん？」

9代目の影をしていた男を合流した他の仲間に監禁しておくように言って引き渡し、その後家光からその生体ポットの正体を聞いた一同は驚愕した。

さらに家光は話を続ける。

家光「ああ・・・8年前、あの“ゆりかご”で夜代夫妻が亡くなったのは話したよな？

そして彼らの死後、オレはまだ幼かった2人の娘、楓香を引き取るために夜代家に出向いたのだが・・・――

―8年前のイタリア（回想）―

家光「なっ・・・詠楓（えいか）が・・・

くっ・・・・」

夜代家の夫である夜代詠楓はオレの昔からのダチで、その妻の仄香は昔から家族ぐるみで付き合う仲だ。

その2人をまさかボンゴレの抗争に巻き込まれるとは夢にも思わなかった・・・

後日オレは楓香のいる夜代家に向かい、そこで・・・

子供「誰・・・」

家光「！！キミ・・・は・・・・・・・」

仄香そっくりの・・・彼女の娘、楓香を見た――

――オレが楓香と始めて出会ったのはその時だ・・・
あいつもはじめの頃は誰も信用しようとせず、孤独に生きようとしていた。大切な家族を奪われたからな」

オレガノ「始めて聞きましたよ、その話・・・」

家光がこの話を門外顧問チームの皆にも秘密にしていたのは、“ゆりかご”が少なからずとも関わっていたこともある。
最も、別の要因が大半を占めているが・・・

ターメリック「まさか“ゆりかご”の裏でそんなことが起きていたとはな・・・」

ラル「気づかなかったのもムリないぜ。あの時のＸＡＮＸＵＳのク

ーデターは大勢の犠牲者が出たんだ・・・
　まだ知りもしない、楓香の両親と面識がなかったオレ達はそんなことなどその大勢の犠牲者のうちの一つであると、当時なら考えてしまっているだろうからな・・・」

勿論家光も責めることはできなかった。
家光自身も彼らを救うことができなかったのだから・・・

家光は彼らの話をし始めた。

家光「ああ・・・
　彼、当時は“琴風（ことかぜ）”の名字であった詠楓も、ボンゴレ門外顧問チーム・・・俺の右腕として共に様々な激戦を乗り越えてきたんだ」

オレガノ「！！！旧姓は琴風・・・確かに聞いたことがあります、私が門外顧問チームに入隊させていただい前年度まで親方様の・・・“若獅子（わかじし）の右腕”と詠われた男・・・
　彼の引退時期が不鮮明になっていたのもそのため・・・だったのですね・・・」

彼はポケットから手帳を出し、最初のページに挟んでいた8年前以前に撮られた楓香の家族の写真を皆に見せた。

オレガノ「楓香ちゃんのご家族・・・温かそうな・・・楓香ちゃんが笑顔でいられた頃の写真ですね・・・」

ラル「いい笑顔だな・・・」

ターメリック「ああ・・・」

モレッティ「そう・・・ですね・・・」

こんな緊迫した状況でも、写真の中の両親に挟まれて写っている幼き日の楓香の笑顔はとても心を和ませた。

家光「そう・・・だな・・・
　楓香がオレ達と共にいた今まで一度たりとも楓香の本当の笑顔を見たことがなかったからな・・・」

しかし家光は楓香に笑顔が戻る希望を失ってはいなかった・・・

家光「（だがつい最近見た楓香には少しだが笑顔が戻っていた気がする・・・）」

それは、あの日・・・楓香がツナに感じたという温かさと、９代目と楓香が交わした誓いにあるその先に、沢田綱吉という希望を見いだしたからかもしれない。

家光は現在拠点としているボンゴレ本部のとある基地からそっと外にでると、ひしゃけた煙草を取り出し火をつけて吹かした・・・

家光「（息子よ・・・楓香の笑顔を頼んだ。

お前なら・・・楓香も心を開くことができるだろう・・・）」

家光は朱に染まる空を見上げ、遠くにいる家族達の無事を祈った。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ・・・三人称

突然現れたレイの・・・最後の嘲笑の言葉が楓香の何かを壊した。

それは楓香が長年押さえてきたモノ・・・

憎悪を加速させるモノ・・・

――それが一瞬にして楓香の纏う空気を変えた・・・

そしてそれは殺気となり、周囲に飛び交う。

雲雀「っ！！？」

ディーノ「！！

まずいぞ！！」

山本・了平「「！！」」

それはＸＡＮＸＵＳサイドにも届いていた。

ベルフェゴール「げっ、なんかヤバげじゃん・・・」

レヴィ「なぬっ！？」

ＸＡＮＸＵＳ「・・・ふっ」

ベルフェゴールやレヴィは驚きの声を上げていたが、ＸＡＮＸＵＳは小さく笑っていた。

リリス『ま、まずいっ！！楓香、ふうかーーーっ！！！』

肩に乗るリリスもその変化に気づいたが、

時すでに遅しだった・・・

ボワッ！！ブォォォッ！！！

リリス『きやっ！！』
ディーノ「おっと・・・大丈夫か？」
リリス「ニャー・・・（あ、ありがとう・・・）」

肩に乗るリリスは楓香が発する風の風圧で飛ばされたが、それに気づいたディーノが難なく受け止めた。

雲雀「っ・・・」

ディーノ「にしてもっ・・・」

山本「すげえ風だぜ、吹き飛ばされそうだっ！！」

獄寺「楓香さんっ！！」

了平「おい、一旦離れるぞっ！！」

了平の案に皆は楓香から離れる。

ディーノ「（やべえな・・・こいつぁオレにも何が起こってるかわかんねー、せめてバジルがいたら対処法を知っているかもしれねぇ・・・）」

その時・・・

ツナ「みんなっ！！！大丈夫！！？」

バジル「あ、あれは！？」

リボーン「ちっ、一体何が起こってんだ？」

獄寺「１０代目！！」

山本「ツナ！？」

了平「沢田！！」

ディーノ「お前らっ、ようやく来たかっ！」

ツナ達がようやく修業を終えてグランドにたどり着いた。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ビュォォォ！！！

ツナ「なっ、風！！？」

バジル「すごい風ですっ！」

校舎を横切ってグランドに急ぐオレ達は、前方からの突風に行くてを遮られた。

リボーン「ちっ、悪い予感がする・・・急ぐぞ」

ツナ「っ！！わかった！」

バジル「はいっ！」

少し治まってきたのを見計らい、オレ達は急いでグランドに向かった。

すると・・・

ツナ「あっ、クローム！？」

校舎前にいるクローム達黒曜の３人が目に入った。

クローム「ボスっ！！」

犬「何が起きているびょん！？」

千種「めんどいけど・・・説明して」

３人とも校舎の後ろで風が治まるのを待っていたらしい。

詰め寄ってくる犬と千種に、オレ達はあわてて言った。

ツナ「オ、オレ達も修業場から今来たばかりで・・・」

バジル「状況が掴めていません、一体何が・・・」

犬「ああーっ！ならあれを見るびょん！！」

ツナ・バジル「！！？」

リボーン「！！」

犬が苛立ちを隠せず頭をかきむしりながら指差した方向には・・・

ツナ「な、なに・・・コレ・・・」

楓香を中心に風が吹き始め、何かが舞っていく・・・

それは・・・

ツナ「あれは・・・黒い炎・・・」

バジル「ふ・・・楓香殿！！・・・っ、沢田殿、あれはおそらく２ｎｄ（セカンド）モードです！！」

ツナ「！？で、でも・・・」

楓香自身から前に受けた説明をオレは覚えているし、雷戦の時にも見たことがある。

けど・・・

――オレはあんな禍々しい炎見たことがない・・・

リボーン「・・・とにかく何があったのかわからねー、あいつらと合流するぞ――」

――そしてオレ達は獄寺君達と合流した。

合流してすぐにディーノさんにリボーンが説明を求めた。

リボーン「ディーノ、一体何があった?」

ディーノ「・・・恭弥の勝ちでリング争奪戦が終わったって時に、あの生体ポットを引き連れてあのレイって男が現れたんだ。

・・・で、あの生体ポットの中に入れられているのが・・・

・」

その時、続くを遮るように――

楓香「お前が母さんを殺したのか・・・？」

――楓香の静かな声が響いた。

それに・・・

ツナ「かあ・・・さんだって・・・・！！？」

バジル「まさか・・・」

リボーン「やべえな・・・楓香を止めねーとまずいことになる」

でも誰もが楓香の言葉を遮ることが出来ずにいた。

そして、その時の楓香は、

――いつになく無表情で・・・

楓香「ワタシの両親の殺害はあなたの差し金だったのね・・・」

――いつになく殺気を放ち・・・

楓香「ワタシが追っていた・・・闇を向けるべき相手はあなたなのね・・・」

――いつの間にか髪は真っ白に染まり・・・

〈楓香〉「アナタが・・・ワタシの標的（ターゲット・・・・」

――その瞳は真っ赤な瞳で絶望と怒りのみを灯し・・・

ジャキン！！

まるで罪を裁く死神の如く、大鎌を構えた。

〈楓香〉「さあ・・・死合いを始めましょう、レイ・カーベル！！！」

そう、楓香はその怒りから・・・

フォン・・・

バシュッ

〈楓香〉「・・・っ！！？」

――普段の冷静な楓香なら避けられるモスカの光線銃の攻撃を脇腹に受けてしまった・・・

カンッ・・・

取り落とした楓香の武器は地面に刺さり・・・

ドサッ・・・

まるでスローモーションの映像を見ているかのように、

――ゆっくりと楓香の体が崩れ落ちた・・・――

ツナ「ふ・・・・・ふうかぁーーーーーーっ！！！！？」

標的６２　【澱む心　来る！】（後書き）

次回

【嵌められた罠　来る！】

標的６３　【嵌められた罠　来る！】（前書き）

もっそい進まない・・・

標的６３　【嵌められた罠　来る！】

標的６３　【嵌められた罠　来る！】

ｓｉｄｅツナ

一瞬で殺気による楓香との壁が消滅し、オレ達は崩れ落ちる楓香の元に駆け寄った。

ツナ「楓香っ！！」

バジル「楓香殿！！」

や、ヤバいよ・・・

２ｎｄ（セカンド）モードの解けていない楓香の側にしゃがんだオレは、顔を歪ませて息を荒くする楓香の脇腹の傷口から血が止まらずに流れ出ている姿を見て顔を青ざめた。

ギュオン　ギュオン・・・

ディーノ「くそっ、今のは光線はモスカが・・・！？お前ら伏せろ

っ！！！」

キュイイイ・・・ズガーン！！

ディーノさんの叫び声と共に、機械音と砲撃音が響く。

ツナ・バジル「！！」

突然のことに倒れた楓香の側にいたオレ達にはそのことに気を取られ、回避する術（すべ）がなかった。

獄寺「１０代目！！くそっ！」

それに気づいた獄寺君はとっさにボムを着火し・・・

ジジジ・・・

獄寺「間に合えっ！！！」

バッ！！

ドカンッ！！

オレ達に弾丸が届く前に撃ち落とした。

ディーノ「くっ・・・よくやった獄寺！！ロマーリオ、応急措置は！？」

ロマーリオ「っ、済みましたぜ、ボス」

いつの間にか楓香はディーノさんの部下であるロマーリオさんに手当てされていた。

楓香の猫・・リリスも楓香に近づき心配そうに鳴いていた。

シュルルル・・・

ドンッドンッ！！ドドンッ！！！

獄寺「なんつー砲撃だっ！！」

山本「大丈夫スか、笹川先輩！！」

了平「ゴホゴホ・・・何が起きているのだ！！？」

なっ、みんなめちゃめちゃなモスカの砲撃を避けているけど・・・

いったいなにが起きているんだ・・・・！！？

――すると、ＸＡＮＸＵＳがニヤリと笑いながら言い出した。

ＸＡＮＸＵＳ「・・・なんてこった、オレ達は回収しようとしたが・・・

向こうの奴らに阻まれたため

モスカの制御がきかなくなっちまった」

なっ・・・

獄寺「なに!?暴走だと!!?」

ドドドドドドド・・・・・

ドガドガドガッ!!!!

止まない砲撃の中、ＸＡＮＸＵＳは不気味な笑みを浮かべて笑い出した。

ＸＡＮＸＵＳ「ぶはーはっは!!こいつは大惨事だな!!」

獄寺「あのヤロー、端っから勝負に関係なく、モスカを暴走させて皆殺しにする気だったんだな!!」

そんなことを・・・っ!!

尚も止まらない砲撃は校舎にも深い傷をつける。

リボーン「ちっ、本当にあのモスカ暴走してやがる。無差別に砲撃を撃ち込んでいるぞ」

ディーノ「とにかく、楓香を安全な場所まで動かさねーと」

ロマーリオ「だが今の状態じゃ、急いで動かすのも危険だ。傷口が開いちまう」

ツナ「そんな・・・っ」

ＸＡＮＸＵＳ「お前らもお陀仏だな、そこの女もな!!」

っ・・・ＸＡＮＸＵＳっ!!

でも奴の言うとおりだ・・・

早く楓香を移動させないと、あのモスカっていうのがまた攻撃してくるだろうし、でも・・・

楓香「はぁ・・・はぁ・・・くっ・・・」

苦しげに息を吐く楓香がやっとの思いで紡いだ言葉は・・・

楓香「ツナ・・・みんな・・・逃げて・・・」

皆「！！！」

ツナ「っ！！・・・・・・」

自分のことよりもオレ達に気をかける楓香だった・・・

ゴゴゴッ・・・

獄寺「なっ、また飛んで来やがったっ！！」

獄寺君の声で、モスカが飛んで近づいてくるのに気づいた。

あいつが来たらみんなが危険だ！！

楓香も・・・

ツナ「・・・オレはっ！！」

――オレは決心した。

・

ポケットから『２７』と甲に描かれた手袋を取り出し手にはめる・・

そして予め楓香が緊急用にとバジル君にもらった“死ぬ気丸”を取り出し・・・飲み込んだ。

決意と共に。

―みんなを・・・護るんだ！―

ゴクッ

ボウッ！！

オレは迫り来るモスカを目で捕らえると、グローブの炎を吹かし、駆け出した。

超ツナ「あいつを止めてくる」

リボーン「まっ――――――」

リボーンが何かを言った気がするが、モスカを止めることで頭が一杯だった今のオレには届かなかった・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅディーノ

モスカを止めるには壊すしかねぇ。

だが、オレ達は知ってしまった・・・

――モスカの中に9代目が捕らわれていることを・・・

そのことが頭の中を巡りどうするべきか考えていたオレは、ツナの咄嗟の行動に気づくことができなかった。

リボーン「待てツナ!・・・っ!!?」

ディーノ「どうしたリボーン?・・・っ、ツナっ!!?」

ようやくリボーンの叫び声によりツナが死ぬ気モードでモスカに突っ込んでいることに気づいた。

リボーン「ディーノ・・・ツナを止めて来い」

ディーノ「くっ、わかっているが・・・ってリボーン!?お前どうした!!?」

その時、オレはリボーンの異様に気づいた。

・・つい先ほどからリボーンが一ミリも動かず、しかもまさかの焦りが見えるのだ。

リボーン「ちっ・・・（体が動かねえ！）、ディーノ、何故かわからねーが動けねーんだ・・・さっさと行きやがれ」

ディーノ「！！？それって・・・」

リボーン「いいから行ってこい、バカディーノ。あのことをお前も知ってんだろ。・・・オメェの弟弟子（おとうとでし）のピンチを救ってやれ」

ディーノ「リボーン・・・」

常時驚いた。リボーンがそんなことを言うなんて・・・

リボーン「・・・さっさといかねーと、後で制裁を下すぞ」

ディーノ「げっ、それは勘弁だぜ。行くぜ！！！」

オレはファミリーと弟弟子（おとうとでし）を守るため、愛用の鞭を持って駆け出した・・・

・・・だがオレはすぐに気づく。

獄寺「おいディーノ！！１０代目を加勢するのはいいが、お前の攻撃が届くのかよ！！」

獄寺の言うとおり、ツナ達は空中で戦っていた。

・・・って！！！

ディーノ「なっ！！おいおい、あいつら空中で戦ってるじゃねーか！！？届かねーっつーの！！」

オレは悪態を吐いて、ツナ達が降りてくるのを待つしかなかった。

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ三人称

ディーノが葛藤している間に、超死ぬ気（ハイパー）モードになったツナはモスカの攻撃を皆から反らすため、炎を吹かし一気に空中に踊り出た。

ギリギリまで接近してからの上昇によりそれに目がいったモスカは宙に上がるツナに砲撃する。

ズガガガガ・・・

ツナはさらに炎を吹かし、迫り来る弾丸に炎が接触するように撒き散らし・・・

ボワッ!!

ドガドガドガドガッ!!!

全ての弾丸を破壊した。

レヴィ「な!!何ーっ!!?」

ベルフェゴール「・・マジ?」

獄寺「と・・・」

山本「飛んでる!!」

驚愕する皆をよそに、ツナは自分に向かってくる弾丸を右手を前に出しグローブの炎圧を上げて炎の盾を作りつつ、モスカに一直線に近づき・・・

バキッ

スタッ・・・

モスカの左腕をもぎ取った・・・

レヴィ「な、何をしたんだ!!なんだ、今の動きは!!?」

ＸＡＮＸＵＳ「・・・・・・」

・・・戦闘においての初歩である攻撃の一つ、モスカに搭載されている兵器を潰すこと。

雲雀に壊され左腕だけになったが、それでも手からの連弾の射撃は厄介と踏んだツナは、早々に排除したのだ。

超ツナ「おい、デクの棒」

ビシビシ・・・ドウッ！！！

ツナはモスカの方を向き、左手に持つモスカの左腕を炎で破壊し・・・

超ツナ「お前の相手は、オレだ」

モスカ《ジジジ・・・キケン・・・ヒョウテキコテイ

ハイジョセヨ》

・・・ツナはモスカを挑発し、モスカの攻撃目標を皆から離れさせることに成功した。

標的６３　【嵌められた罠　来る！】（後書き）

次回は明日か明後日に更新します。（＊・ω・）ノシ

標的６４　【戦いの旋律　来る！】（前書き）

ムムム・・・

標的６４　【戦いの旋律　来る！】

標的６４　【戦いの旋律　来る！】

ｓｉｄｅ三人称

地上にいるディーノ達から離れるようにしてツナは空中に躍り出た。

ツナ「（よし、追ってきている・・・っとっ！！）」

獄寺「圧縮粒子砲（あっしゅくりゅうしほう）！！？」

下からとんでくるモスカの放つビーム状の砲撃に危険を“超直感”で感じたオレは、その攻撃を避け発射口がモスカの腹の部分にあることを見切った。

ツナ「（あそこが発射口・・・攻撃力が高いのなら、早めに潰す！）」

なめらかな動きでその場で左に一回転、その勢いでモスカの腹部に殴りかかるがすでにモスカはツナの上へと飛んでいた。

キュォォオ・・・

しかしツナは前方に炎を吹かしモスカのさらに上へと移動し、モスカがそれを追うようにツナのいる位置へ発射口を向けた瞬間・・・

ツナ「遅い」

ツナは発射口を上へ向け目標を固定しようとするその動きのタイムラグを狙って、ツナはタイミングよく高炎圧の右パンチを決めた。

ズゴーン！！

ギュイィィ・・・・・・

ツナに粒子砲発射口を破壊されたモスカは、その勢いのまま地面に堕ちていき、活動を停止した。

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

ストッ・・・

シュウゥゥ・・・

ツナ「ふう・・・」

オレが地上に降り立ち死ぬ気モードを解くと、みんなが賞賛してくれた。

獄寺「す・・・スゴいっス、１０代目！！」

山本「だな！」

了平「うむ、流石だな！！」

雲雀「フン・・・」

・・・何はともあれモスカを倒すことはできた。

ツナ「これで・・・」

これで安心して楓香を病気に運べ・・・・

キュイイ・・・

ディーノ「っ!!油断するなっツナ!!!」

ツナ「え・・・なっ!!」

キュォォオオ!!

モスカの砲撃起動音!!?

焦りつつ後ろを振り返ると、背中から伸びる銃口がオレに向けられていた・・・

まだ動いていたなんて・・・

――油断していた・・・っ！！

死ぬ気モードを解いていなかったらっ・・・！！！！

――その時、何がオレの右を横切った。

え・・・・っ！！？

「ツナを・・・」

それはオレが守られ、守りたい家族の一人。

真っ白な髪が視界を横切り・・・

「傷つけるなぁぁぁっ！！！！」

ザンッ！！！

楓香の叫び声とモスカが破壊され爆発の轟音が響いた・・・

ＸＡＮＸＵＳ「（ニヤリ）」

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

楓香に真っ二つに斬られたモスカの装甲・・・

そしてその中から現れたのは・・・

バタッ・・・

〈楓香〉「きゅう・・・・だいめ・・・・」

ツナ「！！！？」

ツナの圧縮粒子砲の破壊で装甲を貫通して腹に当てられた傷と、楓香に斬られた大きな傷を負った９代目だった・・・

楓香「ぁ・・・ァァ・・・・・」

――守ろうとしていたものが自らの手で崩れ去り・・・

ガンッ!!カラン・・・カラン・・・

――血に濡れた手から武器を取り落とし・・・

ドサッ・・・

――膝から崩れ落ちた楓香の髪はまるで生気を失ったかのように黒に戻り・・・

ツナ「楓香っ！！」

ディーノ「そんなっ・・・・・・・」

リボーン「ちっ・・・・・・・」

事情を知るリボーン達が急いで9代目の元に駆け寄り・・・

リボーン「やべえな・・・相当危ねー状態だぞ」

ロマーリオ「ボス、急がねーと！！」

ディーノ「分かっている！！おい、担架を持ってこい！！」

そしてディーノの部下達が集まり・・・

ＸＡＮＸＵＳ「おい、何勝手なことをしている。てめーらの行動はもう遅(おせ)えんだよ。

・・・よくも９代目を」

バジル「くっ・・・知ったような口をっ！！」

ＸＡＮＸＵＳ「だが、沢田綱吉とその守護者にシジイは殺られた。それが事実だ」

皆「！！！」

ツナ「そん・・・な・・・９代目・・・が・・・っ！！！」

ＸＡＮＸＵＳ「現に・・・」

そして虚空に現れる黒い人影。

――それはリボーンが考えていた最悪の事態のさらに上をいった・・・

ツナもあの夜・・・黒曜ランドで見たおぞましい存在感を放つ者達・・・

ツナ「復讐者（ヴィンディチェ）が・・・・

なんで・・・・」

そして奴らはこう言った。

復讐者（ヴィンディチェ）「イマ・・・ヤシロフウカノ“ツミ”ヲ、セイサンヲスルトキガキタ」

――――――――――――――――――――

――皆の視線が宙を飛び回り戦闘を行うツナとモスカに注がれていたその頃。

ｓｉｄｅリリス

リリス『こんなにボロボロになってっ、“キュア”！！』

他の皆が楓香から目を離した隙に、楓香の修業で不可欠な回復魔法の最大値にある“キュア”を使って傷を塞いだ。

彼女に死なれたら・・・

――すべてが終わるのだから。

楓香「うぐっ・・・うう・・・・・」

リリス『楓香っ！大丈夫！！？』

私の声に気づいたのか念話で返す楓香の声は弱々しかった。

楓香『あ、ありがとう、リリス・・・

ワタシは大丈夫だから・・・』

・・・ん？・・・ワタシ？？

リリス『ま、まさか・・・』

〈楓香〉「でも・・・

ツナを脅かすあのキカイニンギョウハコワサナイト・・・

」

何時もの楓香じゃ・・・・・・ない？

そして楓香は素早く立ち上がり、落とされた武器を取ると・・・

――モスカを破壊した・・・

起こるべき出来事だったのかもしれない。

あの神様に頼まれたのに・・・

私は涙してあの黒い悪魔に楓香が捕まる所を見ていた、いや、見ていることしかできなかった・・・

――私では彼女の運命を変えることはできないんだ・・・

私の意識だけが天界に送還されるのを感じた・・・

――そして今、この瞬間からが綱吉達の戦いの始まったのだった・・・

標的６５　【断罪されし闇　来る！】（前書き）

時間が取れない・・・ｏｒｚ

標的６５　【断罪されし闇　来る！】

標的６５　【断罪されし闇　来る！】

ｓｉｄｅツナ

ツナ「復讐者（ヴィンディチェ）・・・・・・」

忘れもしない、あの恐ろしい死に神のような姿を・・・

―やめとけツナ・・・奴らに逆らうと厄介だ・・・―

・・・黒曜ランドでリボーンがそれ程言っていた相手だ、オレ達は手も足も出ない。

そして、

ジャラジャラ・・・
ガシッ

まるでそれが前提であったかのように楓香の首に拘束具が取り付けられた。

かつて骸が復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄に連れていかれたみたいに・・・

けど、まだオレには何が何だかわからない。

奴らはこう言った、“楓香の罪を清算する”と・・・

それはいったい何のことなんだ・・・？

ツナ「なっ・・・何を・・・」

復讐者（ヴィンディチェ）「コノヤシロフウカガオコシタカコノジケンデノ“ツミ”、
ソシテコンカイノボンゴレノボスヲフショウサセタ“ツミ”。
コノフタツノ“ツミ”ニヨリ、ヤシロフウカヲロウゴクニユウヘイスル・・・」

楓香「ぐっ・・・」

そして今の楓香のその瞳には・・・

何も移されていなかった。

・・・その楓香に言葉をかけられないのは、その姿をオレは前に見た気がするからだ。

それに、

ツナ「ゆう・・・へい・・・？」

獄寺「楓香さんが復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄に・・・！？」

ツナ「そんなっ！！？」

ふ、楓香が・・・なんで・・・

オレはこの時、今朝の夢のように災厄な事態が起こっていることに気づいた・・・

ツナ「や・・・やめろーーっ！！！！」

けど、それは夢じゃなくて・・・

オレの叫び声もむなしく、楓香と復讐者（ヴィンディチェ）の姿は闇夜に消えていった。

そこには寂しげに楓香の大鎌がぽつんと残されていた・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ？？？

周囲を見渡せば何もない真っ白な、それでいて空虚な世界にいることがわかる。

オレは・・・いや、“俺”はこんな所で何をしているのだろうか。

あの神に転生させられ、何故か女として生きなきゃならねーって怒っていたその俺が、こうも早く順応していたのは何かあるとしか思えない。

つーか、あん時からおかしかったんだよな。

転生の次の日の、“夜代楓香”という過去の記憶を入れられてから。

確かに女になってしまった（転生前の“俺”から見て）ことに対しての羞恥心はなくなった、けど・・・

あの日から“俺”が俺でなく、“夜代楓香”になってしまっていた。

過去の犯した“罪”に捕らわれ、身動きのできない少女、“夜代楓香”を演じているようだった。

――これはあの“神様”によるミスなのか？

――それとも、何か不測的な事が起こっているのだろうか？

そして突然現れた俯く男。

――うむ、全くわからない。

そもそも・・・

神様「本当に、すまなかった」

――土下座している目の前の“神様（笑）”は何をやっていたんだ・・・？？

いや、まあ土下座なのだけど。

――――――――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

楓香が消えた空間を呆然としていたオレ達は、ＸＡＮＸＵＳの嘲笑で現実に戻された。

ＸＡＮＸＵＳ「ぶはーはっはっ、ざまーねえな」

皆「！！」

ツナ「ＸＡＮＸＵＳっ！！」

ＸＡＮＸＵＳ「ああん、なんだその目は？」

ふんっと鼻で笑うＸＡＮＸＵＳは・・・

ＸＡＮＸＵＳ「てめーが自分の部下に罪を負わせたんじゃねーか」

え・・・？

獄寺「てめっ、何言ってんだっ！！」

獄寺君はそうＸＡＮＸＵＳの言いように対し怒鳴るが、ＸＡＮＸＵＳはそれを無視して言った・・・

ＸＡＮＸＵＳ「沢田綱吉。そもそもてめーは・・・てめーが９代目を手にかけたんだぞ」

！！！

ツナ「オ・・・オレが・・・？」

ＸＡＮＸＵＳ「誰だ？じじぃを容赦なくぶん殴ったのは」

ツナ「！！」（ビクッ）

ＸＡＮＸＵＳ「誰だぁ？じじぃを真っ二つに切ったそれを部下にさせたのは？」

あの時の楓香の声・・・

―ツナを・・・傷つけるなぁっ！！！―

それはオレを守ろうとして言った言葉・・・

オレが・・・

ツナ「オレが・・・9代目を・・・

楓香を・・・・」

その時だった。

ズズ・・・

今まさにディーノさんの部下によって担架に乗せられる9代目が少し動いたのに気づいたのは。

そして・・・

？？？「悪いのは・・・私だ・・・」

荒い、苦しげな息継ぎの中、

９代目の声が聞こえた・・・

弱々しいながらも、オレの耳にはちゃんと聞こえていた。

ツナ「きゅ・・・９代目っ！！」

９代目「やっと会えたね・・・綱吉君・・・」

ツナ「！！」

９代目「すまない・・・こうなったのはすべて私の弱さゆえ・・・

私の弱さが・・・」

・・・そしてそこに、その9代目の話す中に答えがあった。

9代目「ＸＡＮＸＵＳを・・・・

長い眠りから目覚めさせてしまった・・・

そして・・・・

“闇”の炎を再び灯すことになってしまった・・・」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

“闇”の炎・・・

連想されるのはやはり“夜代楓香”のこと。

だが、それがＸＡＮＸＵＳとどうカンケーするんだ??

・・・こいつは上司兼監視者の家光に聞かなきゃわかんねー話だろうな。

だが9代目が今オレ達に伝えてー話ってのはそこじゃなくて。

リボーン「眠りとはどーいうことだ?ＸＡＮＸＵＳは揺りかごの後、ファミリーを抜けボンゴレの厳重な監視下に置かれたはずだぞ」

ツナ「ゆりかご・・・?」

ああ、ツナは知らねーんだよな。

リボーン「8年前起きたボンゴレ至上最大のクーデターのことだ。

　反乱軍の首謀者が9代目の息子ＸＡＮＸＵＳであるという恐ろしい事実は機密扱いにされ、知るのは上層部とこの戦ったボンゴレの超精鋭のみだがな・・・」

・・・この時に“ゆりかご”自体の記憶は残っていないが、その戦いの中で楓香の両親が殺されたという記録が残っている。

それにも何かカンケーがあるはずだ。

９代目「ＸＡＮＸＵＳの時は・・・８年間止まったままだったのだ・・・あの時のまま眠り続けていたのだよ。

恐ろしいほどの怒りと執念を増幅させて・・・」

止まったまま・・・？

リボーン「いった何が・・・」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

リボーンはわかって・・・いや、多分リボーンにも何のことだかわからないことをオレがわかるはずもなく、オレは９代目にこう聞くしかなかった。

ツナ「いったい、何が・・・」

9代目「ゴホッ・・・」

吐血する9代目にオレは思考が停止してしまった。

ツナ「大丈夫ですかっ!?しっかりして下さい!!」

9代目「綱吉君・・・いつもキミのことはいつもリボーンから聞いていたよ・・・好きな女の子のことや学校のこと・・・友達のこと・・・」

えっ・・・

9代目「キミはマフィアのボスとしては・・・あまりにも不釣り合いな心を持った子だ・・・

キミが今まで一度だって喜んで戦っていないことも知っているよ・・・

いつも眉間にシワを寄せ・・・祈るように拳を奮う・・・

だからこそ私はキミを・・・

ボンゴレ10代目に選んだ・・・」

？？

ツナ「え・・・！？」

９代目はＸＡＮＸＵＳを選んだんじゃ・・・

９代目はその手をゆったりと跪くオレの額に持っていき・・・

ポウ・・・

弱々しい死ぬ気の炎を灯した・・・

それはすごくあったかくて懐かしい・・・

懐かしい・・・？

そしてようやく気づいた。

ツナ「オレ・・・この人を知っている・・・！！」

9代目とは昔・・・・！

ふと脳裏に浮かぶのは、空虚な瞳を持つ少女・・・楓香と始めて会ったあの時のこと・・・

そうか、あの時の目だったんだ・・・

さっきの楓香の目は。

9代目「キミなら・・・キミになら楓香君の心の“闇”を溶かせる・・・」

そうしている間にも、9代目の指先に灯す炎は弱くなっていく・・・

9代目「すまない・・・頼んだよ綱吉君。君で・・・よかった・・・」

そうして・・・

――9代目の指先が額から離れ、地に落ちた。

ツナ「待って・・・!!」

待って、オレはまだ、なにも・・・なにも出来ていないのにっ!!

ディーノ「!!お、おいてめーら、急いで運ぶぞ!!」

ロマーリオ「お、おう!!」

手が止まっていたディーノさんの部下達ははっと我に返り、急いで9代目を担架に乗せようとしていた。

ツナ「9代目、9代目ー!!!」

リボーン「・・・・・・」

そしてあの男は言った。

ＸＡＮＸＵＳ「よくも９代目を！！！！」

ツナ「！？」

ＸＡＮＸＵＳ「９代目へのこの卑劣な仕打ちは、実子であるＸＡＮＸＵＳへの・・・そして崇高なるボンゴレの精神に対する挑戦と受け取った！！」

ツナ「な！？？」

ＸＡＮＸＵＳが・・・９代目をっ！

ＸＡＮＸＵＳ「しらばっくれんな！９代目の胸の焼き傷とてめーの部下がやらかした翳斬りの傷が動かぬ証拠だ！！
　ボス殺しの前にはリング争奪戦など無意味！！オレはボスである我が父のため、そしてボンゴレの未来のために・・・

―――――――――――――――――

貴様を殺し、仇を討つ！！」

side獄寺

あ、あいつ・・・・っ!!

ツナ「――――!!?」

ベル・レヴィ「!」

了平「な・・・」

獄寺「なに!」

山本「!!」

雲雀「!」

リボーン「・・・」

な・・・・

獄寺「な・・・何を言ってやがる!あいつが9代目を!!」

奴が9代目をっ！！

リボーン「これが・・・この状況が狙いだったんだな」

ツナ「え!?」

狙い・・・？

リボーン「・・・ただリング争奪戦に勝ち、次期ボスになったとしても、“ゆりかご”の一件を知る連中はＸＡＮＸＵＳの就任に反対し、これからも抵抗するだろう」

・・・たしかに、その“ゆりかご”ってのでクーデターを起こしたという背景があるＸＡＮＸＵＳに対する反発は、計り知れないものだろうからな。

リボーン「だが、ツナを悪役に落とし入れ、あまつさえツナのファミリーである楓香がそれに加担したとでもいって弔い合戦で9代目のカタキを討ったとなれば別だ。

多くのファミリーから絶対的な信頼を得ることができる」

くっ・・・確かにそう考えると辻褄が通る・・・

認めたくねーが、１０代目が利用されたのは確かなのだろう・・・

くそっ、不甲斐ねぇ、オレがいながらっ！

リボーン「それに、本来１０代目をかとなるはずだったツナより強ければ、自分が真の正統後継者であることの証明にもなる。そうなれば、抵抗勢力の排除もわけはねーぞ」

バジル「ではＸＡＮＸＵＳは、ボスとなるのと同時に独裁体制をつくるために・・・！！？」

リボーン「仕掛けられた罠だったんだ。事故であろうとモスカがツナの守護者を殺れば、遅かれ早かれツナが倒しに来ると読んでたんだろう」

ツナ「そんな・・・そ、そんな事のために・・・！！」

チェルベッロ「憶測での発言は謹んで下さい。全ての発言は我々が公式に記録しています」

な・・・・・！！

山本「あいつら・・・・！」

獄寺「やはりチェルベッロはＸＡＮＸＵＳ側についていやがったんだ！！」

最初から怪しいと思っていたが、ここまで加担していたのかっ！！

その時、オレ達は初めてリボーンさんのその静かなる怒声を聞いた。

リボーン「好きにしやがれ。オレはもう、キレてんだ」

―――――――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

チェルベッロ「！！」（ゾク・・・）

リボーンのこんなに怒っている所を見たことがない・・・

リボーン「・・・だが、9代目との誓いは守って手は出さねーぞ。・・・生徒の勝負にはな」

9代目との誓い・・・

多分それは9代目に頼まれたというオレにたいしての家庭教師（かてきょー）としての発言だと思う。

正直、オレはマフィアのボスなんかになりたくないし、関わりたくない。

けど・・・

リボーン「・・・まあ、オレがそう言っても、戦いが嫌いなオレの生徒がどーするかは知らねーけどな・・・」

9代目をこんな事のために利用して、仲間を・・・楓香をあんな目に合わされて・・・

オレは立ち上がり、言葉を紡いだ。

ツナ「ＸＡＮＸＵＳ」

ＸＡＮＸＵＳ「・・・・・・・」

――オレは・・・

ツナ「そのリングは・・・返しもらう・・・」

――決して・・・

ツナ「お前に・・・」

――好きなようにはさせないっ！！

ツナ「お前に9代目の後は継がせない！！」

標的６６　【大空の覚悟と謎　来る！】（前書き）

難産・・・

標的６６　【大空の覚悟と謎　来る！】

標的６６　【大空の覚悟と謎　来る！】

リボーン「よく言ったぞ、ツナ（まだまだあまちょろいが、少しは成長を見せたな、ツナ）」

ツナの宣言に対し、ＸＡＮＸＵＳは嘲笑する。

ＸＡＮＸＵＳ「ふっ、ボンゴレの歴史に刻んでやる、ＸＡＮＸＵＳに楯突いた愚かなガキが一人いたとな」

だが・・・

獄寺・山本「「一人じゃないぜ！」」

ツナは一人で戦っているのではない・・・

獄寺「１０代目の意志は・・・」（サッ）

クローム「ボスの意志は・・・」（ジャキッ）

山本・了平「オレ達の意志だ！」

雲雀「個人的に」（チャッ）

沢田綱吉には志しを共にする仲間（ファミリー）がいた。・・・雲雀はあくまでも群れるつもりはなく個人としてだが。

彼らもそれぞれ武器（えもの）を構えて戦闘体制に入った。

それに対してＸＡＮＸＵＳ側の守護者もいきり立った。

レヴィ「来るかガキ共！！」

ベルフェゴール「いいねぇ」

ＸＡＮＸＵＳ「反逆者共を根絶やせ」

ディーノ「（ぐっ・・・マズいな・・・・とにかくこの混乱の中で９代目の搬送は上手くいったが、キャバッローネのボスであるオレ

には手が出せねぇ）」

ロマーリオ「（ボス・・・）」

この場にいるディーノはボンゴレの同盟ファミリーのボスとして何もできず、苛立ち歯ぎしりした。

その時今まで沈黙を持していたチェルベッロがそれに待ったをかけた。

チェルベッロ「お待ち下さい！」

皆「！」

チェルベッロ「9代目の弔い合戦は我々が仕切ります」

了平「なに！！」

チェルベッロ「我々にはボンゴレリングの行方を見届ける義務があります」

そう主張するチェルベッロに獄寺は今までの対応から批判した。

獄寺「何言ってやがる、ＸＡＮＸＵＳの犬が！！」

チェルベッロ「口を謹んで下さい、我々は９代目の勅命を受けています。我々の認証なくしてはリングの移動は認められません」

チェルベッロは懐から９代目の死炎印の入った勅命書を広げてその場にいる者達に見せつけた。

バジル「よくも抜け抜けと！その死炎印は、９代目に無理矢理押させたものだな！」

ＸＡＮＸＵＳ「（ニヤッ）」

ツナ「くっ・・・」

ＸＡＮＸＵＳが加担したであろうこの勅命書を見て、ツナも一層怒りを覚える。

さらにチェルベッロは説明を続けた。

チェルベッロ「我々は勝者が次期ボンゴレボスとなるこの戦いを・・・

“大空のリング戦”と位置付けます」

チェルベッロ「すなわち今まで行われてきた８つのリング争奪戦の最終戦です。いかかでしょうか？ＸＡＮＸＵＳ様」

ＸＡＮＸＵＳ「悪くねぇ」

チェルベッロ「それでは明晩、並盛中にみなさんお集まり下さい」

チェルベッロがそう言い終わると、ベルフェゴールはつまんなさそうに挑発した。

ベルフェゴール「あーらら、モドキに執行猶予あげちゃったよ」

了平「なに！」

獄寺「てんめー！！」

ディーノ「落ち着けお前ら」

ディーノはこのタイミングでの戦闘はマズいと踏んで二人を諌める。

何故なら・・・

ディーノ「最終戦は明日だ・・・」

リボーン「ツナは修業で力を使い果たしてたんだ、グッドニュースだぞ」

そう、ディーノもリボーン同様にツナが疲労していることに気づいていた。

・・・このまま戦っていれば確実に負けていただろう。

ＸＡＮＸＵＳ「フッ、明日が喜劇の最終章だ。せいぜい足掻け」

ピンッ

パシッ

ツナ「！」

ＸＡＮＸＵＳは大空のハーフボンゴレリングの一つを指でツナに弾き渡すと、右手に灯る炎を閃光弾のようにしてこの場を去った・・・

皆「！」

リボーン「・・・」

了平「消えた・・・女達もだ・・・」

バジル「っ、ディーノ殿、９代目は！？」

ディーノ「ああ、さっきのゴタゴタの際に病院に部下達に搬送させてもらった」

リボーン「あの傷はヤバかったからな・・・」

だからこそ一刻も早くディーノは搬送した。

ディーノは弟分（ツナ）を気になりながらも、９代目の様子を見に行くことにした・・・

ディーノ「ロマーリオ、オレも・・・」

だが、走り出そうとするディーノをロマーリオが制した。

ロマーリオ「ボスはあいつらについてやってくだせぇ。・・・９代目の方は俺達がなんとかするからよ」

ディーノ「っつ・・・すまねえロマーリオ・・・」

ディーノは部下の気遣いに感謝し、そして一人孤立していた己が生徒を見やった。

・・・雲雀は随分と大人しくしてた。

リボーン「・・・オレ達の受けたダメージはあまりにもでかい・・・」

ディーノ「くっ・・・」

門外顧問のチームからの連絡によってたてられた9代目救出作戦が完全なる失敗に終わった今、その責任はオレ達にもあった。

楓香を止められなかった・・・

リボーン「でもな・・・」

雲雀のそれに気づいた獄寺は驚いて言った。

獄寺「おい、珍しく大人しくしてたじゃねーか」

雲雀「この状況があの草食動物の強さを引き出しているなら

・・・まだ手は出せないよ」

山本「・・・！」

山本達が雲雀の見つめる先に目をやると、

――そこには静かに佇む沢田綱吉の姿があった。

雲雀「それに・・・」

雲雀は地面に突き刺さる主を失った大鎌に近づき・・・

ジャキッ

獄寺「！」

それをを手に取った雲雀は、それを短いロッドまで収納するとそれを学ランのポケットに入れた。

雲雀「これは風紀委員が預かるよ」

山本「おい、ヒバリ！」

獄寺「なっ、てめっ、ヒバリ！」

楓香の武器を風紀委員の名目で勝手に持ち去ろうとする雲雀に、山本は焦り獄寺は突っかかる。

・・・しかし雲雀は静かに言った。

雲雀「・・・彼女が再び姿をみせるまでね。
勝ち逃げは許さないよ、夜代楓香」

獄寺「！！ヒバリ・・・」

雲雀は楓香が戻ってくると信じている・・・

獄寺「（だが、あの復讐者（ヴィンディチェ）は別格・・・っても）」

獄寺は自分達のボスである沢田綱吉の姿を見て・・・

獄寺「（落ち込んでいられねー、１０代目はまだ諦めてらっしゃらないんだ・・・オレ達守護者が足引っ張らねーようにしねーと！）」

その緊張感の中を突き破る者が一人。

リボーン「帰るぞ」

ドカッ

ツナ「ぎゃ！」

リボーンの蹴りが容赦なくツナに入れられた。

リボーン「明日の勝負までにしっかり充電しねーとな」

ツナ「なんでいちいち蹴るんだよ！！？」

リボーン「なんとなくムシャクシャしたんだ」

ツナ「どんな理由だっ！」

いつものやりとりを見ながらディーノは顔を綻(ほころ)ばせ、小さく呟いた。

ディーノ「まだ希望は潰えていねーんだな、リボーン・・・」

―――――――――――――――

ｓｉｄｅ？？？

？？？「はぁぁぁぁ・・・・・・」

ため息がただただ口から漏れていく・・・

神様「いや、ほんとにすまぬ・・・」

突然土下座で登場とかするから何を言うかと思えば・・・
とにかく、この神（笑）「（笑）とはヒドくないかｎ「うっせぇ！
つーかてめーが悪いんだろうが！」ハイ、スミマセン・・・」がと
んでもねーことをぬかしやがった・・・

？？？「俺を別の世界に再転生させるだと！！」

ぶざけたな、神様（という名の偽善者）。

神様「（偽善者）って・・・ぐすん」

年甲斐もなく涙ぐむこの神（偽）には同情すらわかねえ・・・

・・・まあ、そう勧める神（〆）も俺のそれが俺のためっていうんだよな・・・

？？？「だが断る！」

神様「フォッ！？何故じゃ！？」

・・・ったく、いろんなこと勝手にしておいて、神（＼（☆ｏ☆）／）のクセに全然わかってねーな・・・

なんか知らんが、省略された神（ｏｒｚ）の話の内容をまとめてみよう。

神様「（ｏｒｚ）って・・・ｏｒｚ」

・・・まあ、なんか言っているが、無視する方向で。

前回の土下座↑　理由を聞かせろ

←

ぽつりぽつりと話はじｍ　↑さっさとしやがれ！！・・・（；ω；）

←

天界の上層部が忌避しているある存在についての説明　↑それが俺の・・・“夜代楓香”の行動・・・というか存在に密接している・・・と

←

それに気づいたのは俺を転生させてからで知らなｋ　↑つまりてめーの責任かボケェ！！！

←

ピチューン！　↑死なない神（ë）に制裁を！

←

再び　ｏｒｚ　という名の土下座（無限ループ）　↑今ここらへん

つまり、神（？？）が起こしたミスのせいで俺だけでなく、世界に死亡フラグが立ってしまった・・・ｏｒｚ

何この嫌がらせ？

とりあえず、この神（愚者）に制裁を加え、何故俺が断るのかをとことん言葉と肉体言語で教えてあげよう。

フッフッフッ・・・　↑黒オーラ全開

神様「ちょっ・・・ちょっっま・・・・・・・・・・・・

――俺の俺による俺のためのＯ☆ＨＡ☆ＮＡ☆ＳＨＩ大会が開催した・・・

――そのまま　キタ―（・∀・）―！！　でお待ち下さい――

？？？「おい神（逝ける屍）。・・・返事がない。やはり逝ける屍のようだ」

神様「――――」

・・・しかし、何故今俺がここにいるのか頭から床に突っ込みそこから生えている足がピクピク痙攣している神（犬神家っ！）に聞くことを忘れていた俺は、放置することを諦めて仕方なく引き上げることにした。

自分でやっといてだが、面倒クセー・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅディーノ

ＸＡＮＸＵＳ達が姿を消したあの後、少なからず傷を負っていたツナ達をロマーリオに診せることと今後の対策について話合うことが

相俟って、オレ達は一度“中山外科病院”に集まることになった。

その道中ツナから少し離れた後方で歩いていたオレは、隣で毒づくリボーンに苦笑しながらもあのことについてリボーンに聞いた。

リボーン「まったく・・・ワケわかんねー事だらけだ。・・・一番怪しいのはあの楓香が連れていた猫だな」

・・・リボーンの話だと、皆が復讐者（ヴィンディチェ）に気をとられていた時もあの黒猫を監視していたらしい。

、

オレもだいぶ前からあの猫が気になっていたが、流石にあん時は気づかなかったぜ・・・

オレはガシガシと頭を掻いて苛立った。

ディーノ「まさか楓香が消える瞬間、忽然と姿を消したとは・・・」

リボーン「信じらねーかもしんねえが、あの後姿を見せねーからな」

手元にいたその黒猫がオレから離れたのはツナがモスカに向かった時だ。

おっと、そういえば・・・

ディーノ「・・・そういや、体は大丈夫なのか?」

リボーン「ん?何のことだ?」

惚けるリボーンにため息を吐きつつ、オレはリボーンに問いかけた。

ディーノ「・・・ツナが超(ハイパー)モードでモスカを追撃しに行った時のことだ、いろいろあってうやむやになったがいつから動けるようになったんだ?」

リボーン「・・・9代目がモスカの中から現れてからだ。あのタイミングってことは恐らく向こう側がオレを動かさねーようにするために何らかの方法で足止めしたんだろう・・・」

奴らが何をしたのか知らないが、足止めにはなっていたな・・・

ディーノ「そうか・・・それに楓香の傷の完治も気になるな」

あの場にいたほとんどの者が気づいていたであろう治癒された楓香の傷・・・

リボーン「ああ。ありえねー話・・・だが、動く事もままならねーのにあの動き、ましてやあのモスカへの攻撃には体全体での攻撃だ」

ディーノ「それに復讐者（ヴィンディチェ）が現れた時にもなんとか肉眼で外見では怪我が完治しているのが確認出来た」

リボーン「楓香の治癒が行われたとすれば、オレ達がツナの戦闘に気をとられていた間だな。

・・・そう考えると、ちょうどその時楓香のそばにいたあの黒猫が怪しいってことになる」

リボーンの監視のおかげであの黒猫が怪しいってことはわかったが、今はそれ以上の情報は望めないだろう。

ディーノ「黒猫が鍵を握っているのか・・・恐らくＸＡＮＸＵＳとは関係ねーと思うがな。ツナには話してねーが」

どうやらツナもそのことに気づいていたらしくついさっきオレ達に聞いたきたが、オレ達もそのことに気づいたことのみを伝え黒猫のくだりははぐらかした。

リボーン「これ以上悩みを増やせばパンクしちまうだろーからな」

sideツナ

オレ達は並盛中からようやく“中山外科病院”にたどり着いた。

みんなが病室で治療を受けている間、オレは外で一人考え込んでいた。

ヒバリさんはどこかに行っちゃったけど・・・

ヒバリさんもいつもと様子が違っていたような気がする。

それは並盛中の生徒でもある楓香が捕まることになってしまったからかもしれない。

楓香・・・

リボーン「また落ち込んでやがるのか、ツナ」

いつの間にかそばにいたリボーンの声に否定しようとしたけど言葉が詰まる。

落ち込んでいない・・・っていったら嘘になるから。

けど、それはオレが9代目に傷を負わせてしまったことがほとんどで、楓香のことは何故かそれほど心配にはならなかった。

あの（ヴィンディチェ）（・・）復讐者に捕らえられたにもかかわらず、オレはわりと焦っていなかった。

・・・何故か。

それはあの楓香が復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄なんかに入れられるはずがないっていう楓香の強さを知っていることからと・・・

他にも理由があった。

ツナ「リボーン・・・あのさ、オレは楓香は無事だって信じてるんだ」

リボーン「？・・・それは楓香が強ぇ（つえ）からか？だが奴らは・・・」

オレはリボーンの言わんとすることを遮り、首を横に振った。

ツナ「違う・・・何となくだけど・・・あの時とは違う気がするんだ」

リボーン「あの時？・・・黒曜の時か？」

ツナ「うん・・・

なんかあの時の復讐者（ヴィンディチェ）、今考えると黒曜ランドと時となんか雰囲気が違っていたような気がしたんだけど・・・」

リボーン「！」

ディーノ「本当なのか、ツナ！！？」

突然現れたディーノさんの声に、オレは吃驚して慌てた。

ツナ「えっ！！？あ、あの、もしかしたら気のせいかもしれないんですよ！でも・・・」

リボーン「ニッ。わかったぞ。楓香のことはオレ達に任せて、お前は明日のことに専念してろ、そのためにもさっさと帰って体力を充電しやがれ」

ディーノ「そうだな、オレにはこれくらいしかできねーが、こっちは任せとけ」

リボーン、ディーノさん・・・

ツナ「わかった・・・そうする」

―――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅリボーン

バタン・・・

ディーノ「ツナは行ったぜ・・・で、さっきのツナの話だが」

リボーン「ああ。冷静に考えるとわかることだったな」

そもそも復讐者（ヴィンディチェ）があの瞬間に現れたのはおかしい。

まるでタイミングを見計らったかのようだった。

それにあのレイって男のわけわからねー行動。

楓香を憤慨させてことを起こすなら、他にも方法がいくらでもあったはず・・・
楓香の母親の体をこの8年間、あんなモンに入れて・・・全く、何がしたいのかわかんねえ。

リボーン「やはり納得いかねーな、何故奴らがあの場にいたのか」

ディーノ「わからねえ・・・とにかくあの話の真偽を確かめない限りは・・・」

レイや復讐者(ヴィンディチェ)の言う“罪”が何なのかがわからねーと・・・

――その時、オレ達の耳に“声”が響いた。

???「事実ですよ」

リボーン・ディーノ「「!!」」

今の声は・・・

クローム「あの・・・」

ディーノ「クローム？」

いつの間にか、そろそろとクロームは近くまで来ていた。

だがさっきの声はもっと低い、男の声だ。

クローム「えっと・・・骸様が話があるって・・・」

ディーノ「！六道骸が！？」

なるほどな・・・

リボーン「さっさと姿を見せやがれ」

するとクロームの隣に骸がフッと現れた。

ディーノ「六道骸！」

骸「おやおや、そんなに僕を警戒しなくてもいいですよ。今日は“夜代楓香”への借りを返しに来ただけです。それにそんな力は残っていませんから」

・・・おそらく昨日の戦闘でまだ全快ではないのだろう、幻術で構築された少し骸の姿が透けて見えているからな。

そして骸は静かに口を開いた。

骸「クフフフ・・・お久しぶりぶりですアルコバレーノ、キャバッローネの１０代目ボスである“跳ね馬”ディーノ。

・・・といっても、昨日の今日ですが」

標的６６　【大空の覚悟と謎　来る！】（後書き）

今回が最長だったりして

ーーーーーー

今更ながら
ＸＡＮＸＡＳ→ＸＡＮＸＵＳ
に訂正（とりあえず６０話から）
（ご報告ありがとうございます海人様）

標的６７　【闇の背負う“罪”　来る！】（前書き）

主人公（楓香）が出てこない・・・

標的６７　【闇の背負う“罪”　来る！】

標的６７　【闇の背負う“罪”　来る！】

ｓｉｄｅリボーン

ディーノ「お前は・・・六道骸！」

突然オレ達に用があると言ってきたクロームの隣には・・・幻覚で構築された六道骸の姿があった。

・・・だが、骸は昨日の試合でだいぶ疲労していたはずだ。

そいつが、昨日の今日で姿を現したってことは・・・

リボーン「・・・お前がこのタイミングでオレ達の前に現れたってことは・・・そのことを話すためか？」

骸は相変わらずの調子で答える。

骸「クフフ・・・彼女には大きな貸しができてしまいましたからね・・・マフィアなどに貸しは作りたくない、早く清算させていただきたいのですよ」

彼女・・・楓香に貸し？

もしかして、楓香はすでに何か掴んでいたってのか？

リボーン「だが、何故お前がそれを知る？」

骸「とある案件で復讐者（ヴィンディチェ）に残る記録を調べていましてね・・・その中にあったのですよ。

彼女が関わっている“ゆりかご”の裏で起きた・・・
夜代楓香が両親と過ごした屋敷で起こったとある事件。
記録によれば、関係者によって名付けられた事件名がありましてね。

“紅一円舞（べに）”と・・・――――

――――8年前のその日。

楓香の父、夜代詠楓（えいか）は妻である仄香の親戚かつ友人であった沢田家光からの連絡を受け取った。

その内容は、数十キロと離れていないボンゴレ本部で起こっているクーデターについての警告・・・

表向きは関係性のないと認識させている門外顧問との関係を知るものがいれば、このに乗じて狙われる可能性があることを示唆するものだった。

詠楓は仄香と娘・・・楓香を当時一番安全と思われた自宅である屋敷内に匿い、事が鎮静するまで凌ぐつもりだった・・・

屋敷内に内通者・・・ヴァリアー幹部が潜んでいたとは知らずに――――

――――・・・そこまでが記載されていた真実の内容の抜粋です」

骸の締めくくりにディーノがツッコむ。

ディーノ「いや待て。話が途中すぎないか？」

・・・ん?

オレはあることに気づき、骸に確認した。

リボーン「おい骸。それは本当なのか?」

骸「おそらくは。復讐者(ヴィンディチェ)にその詳細が残っていないとなると・・・
そうとう敵は手ごわいですよ」

ディーノ「え?ちょっ、お前らだけで話し込むなよ!」

・・・ディーノはまだ骸が言わんとすることに気づいていないようだ。

リボーン「・・・やっぱりディーノはまだまだだな。骸がさっき言ってたことを思い出してみろ」

ディーノ「なっ!ちょっ・・・!!

・・・あ、そうとうことか？」

リボーン「ようやく理解できたみてーだな」

骸が最後に言った言葉・・・

“そこまでが記載されていた真実の内容の抜粋”

ディーノ「つまり・・・その後に書かれていることの内容には、信憑性がないってことか？」

つまり何者がによって歪められた偽の情報。

マフィアを“掟”によって裁く復讐者（ヴィンディチェ）に残っている記録がそうならば・・・

リボーン「おそらく、その事件の中で起こしたと思われる・・・内容の確定しない“罪”のことを、復讐者（やつら）は言ってたんだろーな」

ディーノ「そうか・・・それに楓香の母親の体がヴァリアーの手の内にあると知った今なら・・・

その情報操作もヴァリアーの手によって行われたと考えるのが

自然だな」

リボーン「そーだな。・・・あのレイって男が考えていることはまだわかんねーが、今回、復讐者（ヴィンディチェ）が捕縛に踏み切ったところから見ると、その事件での“罪”を裁くための材料が一歩手間であったことを示しているのは間違いねーな」

それが今回の“９代目に致命傷を負わせた事実”が最後の一ピースとなり、楓香は・・・

――ところが、骸は含み笑いをしてこう言った。

骸「ふっ・・・まだあなた達は何か勘違いしていませんか。僕が本当に伝えようとしていることを」

リボーン「・・・何が言いてーんだ、骸」

――――――――――――――――――――――――――――

side???

オッス、おら???!!

・・・??

俺の名は???!!

・・・・・・

???「おい、神（┏（、∀、）┗）!!何故、俺の名前が地の文に反映されない!」

神様「いやあ、儂（┏（、∀、）┗）にもよくやからんよ」

???「よぉ・・・神（（、∀）ゃ）なのにか?」

神様「神（（、∀）Ь）でもわからないことはあるぞぃ」

???「いい加減だなぁ・・・ネ申は」

神様「は・・・儂のせいにするでない！」

???「いいや、髪（もない）のせいだねそれは」

神様「は・・・は・・・恥ずかしいじゃろ、神のクセに髪がないというのは！」

???「恥ずかしかったらカツラ被ってこいよ、神（ハゲ）」

神様「毛をぞんざいに扱うとは・・・

けしからん！！！」

・・・・あ。

???「“ん”」

神様「ん・・・・な・・・・あ・・・・ｏｒｚ」

???「あ～あ、神（弱者）のクセに“しりとり”で負けてやんの。
・・・なにが“全能なる神に何しよっとね！！”だか・・・

何故に東北弁だったし」

・・・あの後、俺は神（世紀末）にしこたま怒りをブツケていると奴が逆上し出したので、
“しりとり”で俺が負けたら度の過ぎた（俺はそうは思っていない。むしろ・・・クックックッ（黒））行為を謝り、
俺が勝ったら“てめえの知っていることを全部吐け！！さあ吐け！！さっさと吐けぇ～～！！”させることを約束の下、ゲームを開始したのだ。

因みにゲームの内容は、近い未来ヴァリアー内でブームになるであろう“会話しりとり”をチョイスした。

神様「し・・・仕方ないじゃろ、髪は儂の悩みなのだ」

???「駄菓子菓子・・・もとい、だが、しかし、結果が全てなのだよ。クックックッ」

神様「疲れるのぉ・・・お主の相手は」

???「はぁ・・・俺も疲れたよ」

・・・つーか、だいたいこんなことしてるヒマはねーっ!!

神様「よし、約束は約束じゃ!お主に儂の知ることを教えようぞっ!!」

???「・・・つーか、まだ“しりとり”続けてんのか?いいじゃん・・・」

神様「“ん”!!」

???「だからもういいだろ!!」

sideリボーン

リボーン「・・・何が言いてーんだ、骸」

オレ達の推理が間違っている・・・と？

骸「確かに僕はあの夜代楓香が過去に起こしたと思われている事件は事実である・・・
　そしてその事件について記録は僕がお話したまでの内容が真実であることもまた事実・・・

と言いましたが、

　8年前のあの時に彼女が復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄に幽閉されなかった理由はそうではありません。

・・・彼女を捕らえる理由が復讐者（ヴィンディチェ）になかったのですよ」

？

リボーン「だが、復讐者（ヴィンディチェ）に記録が残ってんなら、その事件で“掟”を破った者がいるはず・・・

・・・！！」

まてよ・・・

そもそもオレは何故８年前のその事件で楓香が“掟”を破ったと考えたんだ・・・？

ディーノ「リ、リボーン？」

復讐者（ヴィンディチェ）が言ったからだ。“罪を清算しにきた”と・・・

！！

骸「・・・ようやく気づきましたか」

リボーン「そうか、オレとしたことが・・・」

ちっ、オレはあのことが気になっていて、あん時はそれ所じゃなかったからな・・・

ディーノ「？何がわかったんだよ」

リボーン「復讐者（ヴィンディチェ）の情報収集は絶対だ。それを骸（おまえ）が信用できないってんのがおかしーんだ」

骸「そうですね。僕は信用していないなどと一切言っていませんよ」

ディーノ「なっ・・・」

骸「僕がお話した内容は真実であるとまでしか言っていません」

ディーノ「なら最後まで・・・その記録について話せばいいのに、何故そんな言い方を！」

ディーノが騙されたとばかりにいきり立っているが・・・

リボーン「そいつは岡戸違いだぞ、ディーノ。・・・もともと骸はマフィアに手を貸す奴じゃねーんだ。楓香の借りありしの情報だぞ」

骸「最も、彼女に借りを返すためとはいえ、万全でなかった僕の力ではあの時にすぐにお伝えすることはできませんでしたので・・・」

リボーン「そりゃあ仕方ねーと思うぞ。まさかあいつがあのタイミングで戻ってくるとは思わなかったからな」

それにあいつのあの力には意識してねーと勝てねーほどあれに関しては一流だからな。

ディーノ「ちょっ、おいリボーン、オレにも説明してくれ！」

リボーン「これだからダメダメなんだ。・・・まあ、お前はあの試合には立ち会っていねーし、経験がねえから仕方ねーかもしんねーが」

骸「クフフフ・・・
　まあ、既に・・・沢田綱吉はその違和感に気づいていたようですが・・・」

ディーノ「違和感・・・？」

それは、ツナが言っていた“黒曜ランドに現れた復讐者（ヴィンディチェ）”とは違うかもしれないという話・・・

骸「仕方ありませんね・・・僕もあまり時間がありませんし。端的に言いますよ」

ツナが“超直感”で気づいた違和感。

それは・・・

骸「あの復讐者（ヴィンディチェ）は・・・

アルコバレーノであり僕と同じ霧の術者であるマーモンが造りだした

・・・幻覚です」

標的６７　【闇の背負う“罪”　来る！】（後書き）

☆教訓☆

シリアスとシリアスの間にグダグダなギャグを挟むのは・・・ダメですねｗ

最後に。

Q．クローム空気の件について。

A．・・・幻覚ですｗ

標的６８　【仮説と帰るべき場所　来る！】（前書き）

今回最長カモ！

オリジナルもそこそこカモ！

標的６８　【仮説と帰るべき場所　来る！】

標的６８　【仮説と帰るべき場所　来る！】

ｓｉｄｅディーノ

ディーノ「なっ！！
復讐者（ヴィンディチェ）が・・・幻覚だった、だと！」

リボーンの話だと、昨日逃走を図ったマーモンがまさか昨日の今日で捕まるとは思いもしなかった・・・とのこと。

そいつが復讐者を幻覚で構築し、楓香を捕まえた・・・となると。

リボーン「だが、一番の問題はそこじゃねぇ。・・・楓香がヴァリアーに奪われたということが問題だ」

ディーノ「奴らが楓香を欲する理由・・・」

そこでリボーンが最も筋が通っているであろう推測されるその理由を述べた。

リボーン「おそらく、あのレイって男・・・あいつが楓香を・・・いや、“闇”の死ぬ気の炎を欲しているのが理由なのは確かだろーな」

ディーノ「い〝っ、それってかなりまずかねーか!!?」

おいおい、あの何を考えているかわかんねーレイって奴か!!?

リボーン「とは言っても、今はオレ達に出来ることは何もねーんだ・・・」

骸「・・・ですが、そのレイという男の目的とやらが本当なら夜代楓香の身の安全は心配ないでしょう」

リボーン「精神面は心配だがな・・・」

身の安全は心配ない・・・
だが精神面が・・・最後に見た楓香の目には何も宿っていなくて空虚だったからな。

フッ・・・

骸「おや・・・」

考え込んでいると、ふと骸の発した声に気づいたオレ達は、骸の姿が薄くなっていくのに気づいた。

クローム「骸様！」

今まで一言も喋らず話が終わるのを待っていたクロームが骸の変化に不安げに叫ぶ。

骸「ふう・・・そろそろ限界のようですね、安心してくださいクローム、まだ力が十分に戻っていないだけですからね」

クローム「・・・はい」

リボーン「・・・感謝するぞ、骸。楓香の借りを返すため・・・とはいえ、お前の情報が役に立った」

骸「・・・おやおや」

諭すようにクロームにそう言った骸は姿が薄れていく中、一転して驚きの目でリボーンを見・・・だがすぐにいつも通りの不敵な笑みを見せた。

骸「クフフ・・・まさかあなたに礼を言われるとは思いもしなかったですよ、アルコバレーノ。ですが・・・ありがたく受け取っておきますよ」

リボーン「ニッ。そうしとけ」

ディーノ「オレからも礼を言うぜ、サンキューな」

骸「クフフ・・・では、またお会いしましょう。

・・・輪廻の果てで」

そして骸はそう言い残し、完全に姿を消した。

ｓｉｄｅツナ

オレはリボーンに先に帰っているように言われ、家路をトボトボと歩いていた。

ツナ「はぁぁ～～っ」

今日何度目だろう・・・ため息を吐くのは。
心配事だらけだ。

９代目のこと・・・

楓香のこと・・・

それだけじゃない。

みんなの怪我もまだ完治してないし・・・

―“完治”といえば・・・

ツナ「楓香のあの大怪我が消えていたなんて・・・」

リボーンに聞いても何故傷口が塞がっていたのかわかんないって言ってたし。

そして、明日が最終決戦・・・

――そんなこんなでごちゃごちゃ考えていると、突然後頭部に・・・

ゴスッ

ツナ「いでっ！」

・・・追いついたらしいリボーンの蹴りが入った。

リボーン「なにトボトボあるいてやがる。さっさと帰るぞ」

ツナ「なっ！いちいち蹴るなよ、リボーン！」

痛む頭をさすりながらリボーンにツッコむ。
だがいつも通り、あっさり返される。

リボーン「愚痴言ってるヒマがあったら、キビキビ歩け。明日おめーがへこたれてっと、ファミリー全体の指揮が下がるんだ」

ツナ「なっ、だからファミリーとかじゃ・・・――

――いつも通りに振る舞うリボーンに、自然と苦悩も薄れていた。

そうだ、だからこそ・・・

修業で気力が少ない今のオレには・・・明日全力を尽くす為には休息が必要。

――今は・・・オレはオレの出来ることをやろう。

――――――――――――――――――――――――

――数分前・・・

ｓｉｄｅディーノ

クロームにこのことを口止めすると、それをこくんと頷いて了承したクロームは「犬と千種が心配・・・」と言って病院から飛び出していった・・・

ディーノ「とにかく・・・争奪戦に力を貸せない分、楓香のことはオレ達も協力する。
・・・もちろん９代目のことが一番最優先だが」

リボーン「そうだ、９代目の容態は！？」

いつになく意気込むリボーンに、オレは急いでわかったことを話した。

ディーノ「それがよ・・・実は見た目ほどそう酷くなかったんだよな。命に別状はないらしい。・・・あの時9代目が意識を失ったのは死ぬ気の炎を奪取された疲労からだそうだ」

するといきなり容赦ない一撃がオレの腹に入った・・・

ゴスッ

ディーノ「ぐへっ」

・・・リボーンの。

リボーン「それを早く言いやがれ」

ディーノ「痛(い)つつつ・・・いきなり蹴るなよ、リボーン！」

リボーン「さっさとオレに教えねーおめーが悪いんだろーが」

ディーノ「お前に教える前に、骸が来ちまったんだよ！」

リボーン「それでもだぞ」

ディーノ「（理不尽だーーっ！）」

今更ながらにリボーンの理不尽さに頭を抱えた。

ディーノ「リボーン、ツナに9代目のこと・・・
　それと、楓香のことはオレに任せておけ・・・そう伝えといてくれないか？」

リボーン「そうだな・・・明日の決戦を控えるツナにはそれが最良だろし、オレもレオンがこんな状態だ、あまり手出しできねーからな。
　・・・わかったぞ」

リボーンの了承をとれたオレは部下を引き連れて楓香を捜索するた

めに病院を出ようとし、去りがけにリボーンに一言伝えた。

ディーノ「・・・なら、今日の所は解散ってことで。・・・ツナを頼むぞ、リボーン」

同じく病院を出てニッと笑ったリボーンは、クイッと帽子の唾を上げると言った。

リボーン「面倒みんのはあたりめーだぞ。オレはツナの家庭教師(かてきょー)だからな」

オレは蹴られた腹をさすり去っていくリボーンを見ながら、まったく昔と変わらねー家庭教師(かてきょー)だぜと言いつつも、リボーンの走り去る道を一瞥すると自然と笑みが浮かんだ。

―――――――――――――――――――――――――――――――

――決戦当日・・・並盛中一屋上

ｓｉｄｅツナ

今朝、「さっさと学校に行きやがれ。中学生が中学行くのは当然だぞ」とリボーンに言われて家を飛び出したオレは、いつもより早々と校舎内に入ったこともあって、時間潰しに・・・いや、もっと他の理由があるんだけど・・・

登校時のリボーンの話では、昨日の廃墟と化した校舎はまだ修復されておらず、どうやらチェルベッロの術士が校外をぐるっと囲って幻術でごまかしているらしい。

・・・今までの戦いも校舎内から響いていた爆発音に周りに住む人達が気づかないのも、その術士のおかげらしい。

――屋上にたどり着いたオレは、フェンスに寄りかり空を見上げていた。

昔は・・・悲しかったこと、つらかったこと・・・ことあるごとにこの屋上に足を運んで空を見上げていた。

負った心の中の傷が、癒やされる気がするから・・・

でも、リボーンと出会って、獄寺君や山本達とも友達になれて・・・

憧れの京子ちゃんとも仲良くなれて・・・

そりゃあ、いろいろハチャメチャで大変な日々だったけど・・・

というか、今思い出した出来事だけでも、非日常的過ぎる・・・――

――

・・・あ～～っ!!

えっと、そんなことじゃなくて、何が言いたいのかというと。

大切な仲間が出来て、
失いたくないモノが出来て、
失わないために強くなろうとして、

――オレの居場所が出来て。

・・・そういえば、あれから（リボーンと出会ってから）ここに1人で来たこと、なかったっけ・・・？

リボーンのおかげでそんな暇なかったってほどいろいろあったからなぁ。

・・・リボーンといえば昨夜家に帰った後、9代目の無事を聞き安堵のため息がこぼれたことが、記憶に新しい。

―キミなら楓香君の“闇”を溶かすことができる・・・頼んだよ、綱吉君―

ツナ「！」

・・・９代目に託された楓香のこと。

彼女のことはディーノさんが何とかするって言ってたらしいけど・・

・

―いいかツナ。何があっても・・・ＸＡＮＸＵＳにリングを渡すなよ。オレが修業をつけてやったんだ、約束だよ―

楓香につけてもらった最後の修業での言葉。

・・・そーいえば、最近男っぽい口調が和らいできた気がするけど・・・気のせいかな？

とにかく、楓香との約束を守る為には、争奪戦が終わるまでは動くわけにはいかない。

そしてもう一つ気になっていたことがある。

それは9代目が伝えようとしていたもう一つの何か。

ツナ「9代目は・・・」

あの時・・・楓香のことの他に、何か伝えようと・・・

??「おはよう、ツナ君!」

ふと後ろから声がかかった・・・

ツナ「京子ちゃん!」

振り向くとやはりその声は京子ちゃんのだった。

ツナ「おはよう」

京子「!・・・・・・」

・・・若干頬を染めてるのはなんでだろ?風邪かな?

それになんでオレがここにいるってわかったんだろ・・・？

京子「あ・・・リボーン君がここにいるって」

え？

ツナ「あいつが？」

京子「ふふっ、本当だ。リボーンの言ってた通りだね。今日のツナ君の顔、新幹線みたい！」

ツナ「ええ！？シンカンセン！！？」

新幹線ってどんな顔ーーっ！！？

オレのツッコミを皮切りに可笑しくなって、二人して笑い出してしまう。

京子「あはは／／／」

ツナ「はは／／」

やっぱり京子ちゃんの笑顔は太陽だな。

京子「これ・・・ツナ君に」

すると、京子ちゃんはポケットから何かを取り出し・・・

ツナ「お守り？」

受け取ったのは“安全必勝”との言葉と、魚の絵が入ったお守り・・・

ツナ「って、えーーっ！！？これ、オレに！？」

お守りって・・・争奪戦の！？

京子「最近、夜の相撲大会でケガ人が多いでしょ？だから安全祈願！と必勝祈願も！」

ツナ「（まだ相撲大会だと思ってる・・・！）」（ガーン・・・――）

まったくの見当違いだった・・・バレたかと思ってビックリしたよ・・・

京子「それに・・・これも・・・」

そう言った京子ちゃんから、

“快復祈願”との言葉と“楓（かえで）”の絵が入ったお守りを受け取った。

ツナ「！これは・・・」

京子「うん・・・楓香ちゃん、体調が優れないって・・・今日もお休みしているからね。・・・具合、大丈夫なのかな？」

ツナ「えっ！あ、うん・・・・」

そうか、学校にはそう伝えているんだ。

でも・・・楓香は・・・

京子「渡しておいてくれる?本当はお見舞いに行きたいんだけど、先生から止められてるから・・・「あんまりたくさんでお見舞いに行ったらいけないし」って。ツナ君なら渡せると思ったんだけど・・・ダメかな?」

・・・いや、

ツナ「・・・わかったよ、京子ちゃん。必ず楓香に渡しとく」

絶対に・・・

オレは京子ちゃんに心配させないように、平然を取り繕った。

京子「えと・・・頑張ってね、ツナ君！」

あ・・・

ツナ「ありがとう！

オレ・・・次の戦い・・・

負けるワケにはいかないから」

京子「！／／／」

そう言ったら、また京子ちゃんが頬を染めていた。

・・・やっぱり風邪かな？最近寒くなってきたし、屋上だから冷えるし。

京子「え・・・あれっ、えと・・・あ、そーだ！」

ツナ「？」

京子「獄寺君や山本君の分もあるんだよ」

なっ！

ツナ「（オレの分だけじゃないのねーー！？）」

なはは・・・そう、だよね・・・

京子「それにこのお守り、みんなで作ったの」

ツナ「へ？みんな・・・？」

京子ちゃんに聞き返したその時、

ハル「ツナさーん!!」

ハルの声が・・・って、

ツナ「ハル!!?なんでお前が!?」

京子「ハルちゃん!」

何故ハルが並中の屋上に現れた・・・!?

ハル「今日、学校お昼からなんです。だからお守り一緒に配るために潜入しちゃいましたよ」

ツナ「潜入って!!つーか、並中の制服!!」

しかも、ハルは何故か京子ちゃんと同じ並中の制服を着ていた・・・

ハル「へへー、ビアンキさんが用意してくれたんですよ！」

ビアンキ、何してくれちゃってんの！！？

さらに・・・

フゥ太「ツナ兄（にい）！！」

フゥ太の声が・・・って、

ビアンキ「殺しに比べれば、ちょろいもんよ」

ツナ「お前達まで～～！！！」

制服姿のビアンキ、フゥ太、そしてイーピンまでもが屋上に来ていた・・・って！

ツナ「見つかったらどーすんだよ！」

ビアンキ「そん時はそん時よ」

無計画ーーっ!!

ツナ「何言ってんの!困るって!
だいたいビアンキ中学生に見えないよ!!」

ビアンキ「それ、どういう意味!?」

ツナ「ひいっ」

ビアンキの両手にはポイズンクッキングが・・・

ボケツ掘ったーーっ!

side out

ツナ達がワイワイ騒いでいる屋上の片隅でこっそりとリボーンがその様子を見、呟いていた。

リボーン「忘れんなよ、ツナ・・・

お前はここに帰ってくるんだぞ。

・・・楓香も一緒に・・・・な」

―――――――――――――――――――――

――某研究所・・・

暗い室内で静かに黒髪の少女を簡易寝台に寝かせる白衣の男が1人。

そして、男の口調はいつもと違って柔らかいものになっていた。

白衣の男「・・・仄香姉さん、ようやくこの時が来ました・・・そして」

男は言葉を切ると、側にある台の上に置かれた写真立てに写る自分の隣で微笑む女性に目をやり、言った。

「もうすぐ会えるよ・・・千雨（ちさめ）」

その顔は、何かを決断したように見えるが、

その目は何かにとりつかれたかのように虚無だった・・・

標的６８　【仮説と帰るべき場所　来る！】（後書き）

話の時間軸が逆転してしまったカモ・・・

次回からようやく“大空戦”カモ！

誤字訂正

―今回の獲得スキル（笑）―

・ツナは　風邪かな？スキルを　手に入れた！

・・・カモ？

――――――――――――――――――――

さっそくですが、皆様に問いたい！

Q最近の文章形式と前のと、どっちの方が読みやすいんでしょう？

コメントにて意見を募集しております！！！

標的６９　【守護者召集と計画の始動　来る！】（前書き）

もう？？？の名前が決まってて、出すタイミングを見失っている件について（＾＾；）

標的６９　【守護者召集と計画の始動　来る！】

標的６９　【守護者召集と計画の始動　来る！】

ｓｉｄｅ？？？

ブーーッ・・・ブーーッ・・・

・・・・・・は？

この神（甘味）、今何て言った？

いきなりのことで皆さんもわからないと思いますが・・・って、俺も何言ってんだ？

ブーーッ・・・ブーーッ・・・

・・・とにかく、神（略）は言いました。

―OH，ついに時が来たのじゃぁアァアァアッ!!―

なんのーーーーっ!!?

ブーーッ・・・ブーーッ・・・

?!?!「てか、さっきから鳴っているこの警報機から発せられる音みたいなのはなに!?

ずっと気になって仕方ないんですだけどぉ!?・・・って、警報!!?」

な、なんかイヤな予感が・・・

神様「うむ。これは緊急時に作動するものでの、“ある合図”でもあるんじゃ」

あいず?

すると神（会津?）は指で輪っかを作って口にくわえ・・・所謂口笛を鳴らそうとした。

の、だが・・・

ふゅ～～っ　ふゅ～～っ　（、3､）＞＃＃＃

・・・・・・

なんとも気が抜ける音ですね。
でもあなたの挑戦は終わりました、諦めてください。

すると神（３ω３）は、何事もなかったかのようにどこかからか笛を取り出し、鳴らし・・・

・・・って、最初からソレ使えよ！

そして、神（イタい子）はようやく笛を鳴らして・・・

ピィィィィィィ　ゴホッ・・・ィィィィィィィィ・・・（´∀`）
・・・＊'-'

???「いや、咽せるなよ。そしてやり遂げたって顔すんな」

何故か長かった笛の音も気にせずに、神（スルーですか、そうですか）は上を見上げ・・・

キランッ

神様「おぉぉｏｈｈｈ・・・・」

堕ちてくる物体を・・・

ズゴゴッ

神様「ごぼへっ！！」

手で受け取ろうとして頭皮で取った（刺さった）。

って！

？？？「おい、大丈夫なのかよ！」

神様「問題な〝い〝のじゃっ！！クウゥゥッ！！！」

刺さった物体・・・見た目木刀×2を抜き、そして何もなかったかのように・・・いや、実際は滅茶苦茶痛みを我慢しながら地面に突き刺した。

つか、問題ないって、Yってなってるよ!クジラか!!

その二振りの刀（木刀）に血が付着し、妖刀みたいに見えた俺の目はおかしくなかっただろう・・・

神様「真面目な話、上層部はさきの世界を消そうと考えとる輩が多くてな、すでに退路は断たれたのじゃよ」

???「なっ！」

いきなり木刀の件から話を切り替えられたが、内容が内容だけに驚いた。

すでにチェックメイトかよ！

実は神（ｖｅｒ．１，１）にあの話をすでに聞かされた後だったりする・・・

そん時はかなり落ち込んだ。

自分が鍵を握らされていたなんて・・・

その時言った神（・υ・）の言葉。

神「まあ、儂のせいでもあるんじゃがの（´ー`）」

やっぱてめーのせいかよ、神（（´Д`）ノヴェア）ーーーっ！

！――――――

――と、一悶着があったりするのだが・・・

神様「・・・お主はまだあきらめておらぬのじゃろ？」

そりゃあ・・・

？？？「当たり前だ。・・・このまま終わってしまったら、俺の名前“？？？”で固定されちまうじゃねーかよ」

神様「それもそうじゃの」

・・・と、メタ発言はおいといて。

？？？「第一、仲間捨ててオレだけ逃げられっかよ。そこまで人間ガタきてねーぜ」

まだ十数日しか過ごしていないけど、なかなかどうして毎日が輝いて見えた・・・

？？？「それに・・・気づいたんだ。

あの場所・・・時間が、居心地がよかったんだって」

神様「・・・そうか、なら手を貸そうぞ」

そう言うと、神（頭からＹ）はさっきの木刀を投げよこした。

もちろん血は拭き取られていたが。（いや、そのままだと軽くひくから。因みにすでにＹの傷は治っているらしい）

・・・って、木刀？

神様「Ｆｕ，Ｆｕ，Ｆｕ。お主に与えた“最強クラスの格闘スキル”を、お主自身はまだ使いこなせてないからのう」

？？？「？ドウイウコト、それ？？」

・・・俺は“夜代楓香”として修業前の雲雀に勝ったんだぞ。

・・・修業後の雲雀にはあんな簡単には勝てねーと思うが。つか、レベル上がりすぎ。

神様「・・・そのスキルを全開で使用したら、並盛町がぶっ飛んでたぞ」

・・・へ？

マ・ジ・DE？

今更だけど、それなんてチート？

つーか、

？？？「んな危険なもん装備させるなよ！第一、俺の・・・“楓香”の体が持たねーんじゃねーかよ！！？」

神様「む、その点は抜かりないぞ。発動の瞬間に合わせて、体にプロテクトがかかるからの、負荷が一切除外されるわい」

そ、そーなのかー。

神様「うむ。だからこそ、今まで所謂リミッターみたいなもので、そのスキルを封じていたのじゃ」

・・・もし知らないで作動してたら・・・

神様「・・・すでにお主の力によって世界が崩壊していたかもしれ

ん・・・」

チートばねぇ・・・

？？？「それで、この木刀になんの意味があるんだよ？」

いつまでも　木刀ｏｎ床＝放置　というワケにもいかないので、拾った。

・・・うむ、フツーの木刀だな。“山本のバット”みたいに変形するでもないし。

神様「・・・その力を制御するために木刀を用意したのじゃ・・・

オリャアッ！！」

？？？「なっ！」

ブオンッ！

いきなりの神（gd gd）が手に持つ、もう一つの木刀で上段から斬りかかってきやがった！

ガキッ！

俺はとっさに木刀を横に倒してその一撃を防いだ。

すると・・・

ブオォォォッ！！！

後方を疾風が通り過ぎ・・・

ズザザザッ

ハの字に二本の斬撃の痕が入った・・・

って！！

???「う〝お〝ぉぉい！なんだ、今の攻撃はぁ！！！」

あまりの出来事に口調がスクアーロになっていたが、そんなこと気にしない。

神様「・・・お主のリミッターはこの空間では外れておる。それに儂が合わせた斬撃じゃ」

？？？「なっ！」

そのリミッターが外れて“最強クラスの格闘スキル”を発動中なのか、俺！！？

神様「この空間は地上よりも１００倍くらい頑丈じゃ、少々暴れたところでどうともならぬ。
　格闘スキルと言っても“剣術”もいろいろなところで密接しておるからのお、今回は格闘ではなく剣術にさせてもろうたぞ。
　・・・本来ならば先の儂の攻撃なんぞ、カウンターで返せるはずなのじゃ。
　じゃが・・・お主はまだその力を使いこなせておらぬ！！戦って、刻ませてもらうぞぃ！！」

？？？「はっ！！？」

この神（以後“ジジイ”）、ぬかしやがった！

だが・・・面白い！！！

今こそこのジジイに鉄槌を！！

？？？「しゃらくせえ、こっちからいかせてもらうぜ！！――――

・・・そう思っていた時期もありました。（・ω・）

――――体内時計で二時間後・・・

俺と神（ジジイ）の攻防戦は、神殿の床やら壁やらをボッコボコにぶっ壊すほどの嵐となり、やはり未だに続いていた・・・今は止んでいるが。

?:?「はぁ、はぁ・・・」

二時間とか無理ッス。

だが、息を切らす俺に対しジジイは・・・

ジジイ「どうしたのじゃ?もうダメなのか?儂はまだまだいけるぞい」

余裕しゃくしゃくで木刀を指先で器用にくるくると回していた。

・・・正直言って、立っているのも精一杯。それをわかってあのジジイは言ってやがるんだろう。

つーか何者だ、あのジジイ?:?

あっ、神（爆笑）か。

ちっ、神（神んライダー）なだけあって奴にはかなわねえ。

・・・だが、俺はまだ奴に言わなければならない。

俺は有らん限りの力を振り絞って、フラフラする体をしゃんとし・・

・

ウィィン　ウィィン

木刀を正面に構え・・・

？？？「とりあえず・・・」

ブーーッ・・・ブーーッ・・・

地面を蹴り・・・

？？？「さっさと警報機、止めてこいやじじいっ！！（ボケェッ）」

ジジイ「ぶげらっ！！」

よおぉぉし、一発入ったぞ！！ギャグ補正で！！（←メタ発言）

因みにバックミュージックとしてずっと鳴っていたりする。

正直、うぜー・・・

――――――――――――――――――――

――大空戦－直前

ｓｉｄｅツナ

オレはリボーンと並中に向かう前に、ランボの容態を確認するために山中外科病院に足を運んだ。

リボーン「昼に一度意識を取り戻して、相当ウザかったらしいぞ。まだまだ安静が必要らしいけどな」

スヤスヤと個室のベッドで眠るランボを見、リボーンの話を聞いてオレは安堵した。

ツナ「ハハ、よかった・・・ランボ」

リボーン「ママン達が交代で看病してくれるから安心だな」

ツナ「うん・・・」

そしてオレは・・・朝から気になっていたことをリボーンに尋ねた。

ツナ「あのさ、楓香は・・・」

リボーン「まだ見つかってねーぞ」

ツナ「・・・!!そんな・・・」

リボーン「・・・キャバッローネファミリー総出で情報取得に尽力しているらしーが、未だ見つかっていないらしい」

ツナ「そっか・・・」

リボーン「今日の召集であのチェルベッロがどう判断するかしんねーが、人数的にもこちらが不利だ。ボスのお前がしっかり引っ張っ

ていかねーと負けちまうぞ」

ツナ「わかってるよ・・・って、オレはマフィアのボスじゃないし！」

危なくツッコむのを忘れるところだったよ・・・

リボーン「ってことで、お前に新兵器があるぞ」

なにが、ってこと　だよ！

っていうか、

ツナ「シンヘーキ！！？」

まさか・・・

物騒なモノじゃないだろーなぁ・・・

リボーン「こいつだ」

そう言うと、リボーンは少し大きめのアタッシュケースをオレによこした。

リボーン「そん中にはバトル用のマフィアスーツが入ってっぞ」

ツナ「！！？」

マ、マフィアスーツだって！！？

着たらそれこそ存在が物騒だよ！！

リボーン「レオンの体内で生成された糸で織った特別製だぞ。死ぬ気の炎でも簡単には燃えねーんだ」

なるほど・・・

いや、確かに相手はあのＸＡＮＸＵＳだし、アリガタいんだけど・・・

ツナ「マフィアスーツって・・・オレ、マフィアのカッコすんのかよ！？」

慌ててアタッシュケースを開けると、そこに入っている服は・・・

カチャ・・・

ツナ「あれ・・・？」

リボーン「安心しろ。見た目は並中の制服と一緒だ。オレのスーツと素材が同じって意味だぞ」

ツナ「ほっ」

リボーン「レオンがガンバってくれたからな」

うん、まずはレオンに礼を・・・

で、

よーく見ると、リボーンの背中に丸いレオンが。

え・・・・？

丸い・・・レオン・・・

！

どこかで見たことがあると思ったら・・・！！

ツナ「・・・なんでレオンがマユ化してんのーっ！？」

リボーン「やっと気づいたか」

ずっとそうだったのーー！！？

ツナ「えっ、なんでそんな姿に・・・？」

リボーン「そんなもんオレに聞くな」

即答！！？

ツナ「いやいや、お前のペットじゃないの！？」

リボーン「・・・オレもレオンのすべてを把握してるワケじゃねーんだ、そもそもまだマユになったのは三回・・・いや、四回目だか

らな。
　ただ先の三回が“オレの生徒が窮地の中で成長した時”という共通の条件の下だったからそうだと思っていたんだ」

な、なるほど・・・

オレがレオンから“Xグローブ”を受け取った時みたいに・・・？

リボーン「まあ、このスーツはちょうどレオンがマユになっちまう前だったからなんとか用意出来たんだ。・・・（ボソッ）楓香の提案のおかげで・・・な」

後半は聞き取れなかったけど、確かにレオンがこの状態だと作れないだろーし・・・

オレも楓香の提案で、バジル君から“死ぬ気丸”を分けてもらったんだけど・・・
リボーンの話だと、死ぬ気弾・・・小言弾はあの時と同じでラスト一発しか使えないらしいから、万が一には後半の練習時と同様に“死ぬ気丸”を使うことになるよな。

リボーン「安心しろ。マズくなったら最後の一発だが使ってやっぞ。それに、そのスーツにはオマケがついてるからな」

ツナ「う、うん？オマケ？」

オマケってなんだろ？

リボーン「とにかく、そいつに着替えたら行くぞ。リング争奪戦、最後の戦いに」

ツナ「うん」

オレは鎖に通されている昨日ＸＡＮＸＵＳから返された大空のハーフボンゴレリングを一瞥し・・・着替え始めた。

――――――――――――――――――――

――黒曜ランド

クロームが黒曜ランドに帰って来、ポツリポツリと昨日の骸の話をし、なかなか話が進まず犬がキレ、千種がめんどいと言いつつも止め、クロームがまたポツリポツリと話し――――

・・・と無限ループし、ようやくその話を終えた所だ。

《※ここからはダイジェストでお送りします》

犬「じゃあ骸さんは・・・
　ボンゴレ9代目がアレに入ってるって知ってたんらな」

クローム「・・・たぶん」

犬「そんで、骸さんは試合終わってから今まれずっとあの女の用件かなんかで調べもんしてて、昨日姿を見せたんらな」

クローム「・・・うん」

犬「らったらなんで教えねーんらよ!骸さんが姿見せるって!」

クローム「あの時犬達いなかったし・・・骸様すぐに帰っちゃったから・・・」

犬「ムキーーッ、バカ女のクセに口答えすんらよ!!」

クローム「・・・ごめん・・・」

千種「で・・・骸様からは?」

クローム「まったく反応がないの・・・そっぽ向いてるみたいに・・・」

犬「なんだそれ！？」

クローム「骸様・・・まるで他の人に、話しかけてるみたい・・・」

犬「骸さんと連絡とれないんじゃ、お前ますますいる意味ねーびょん！！」

千種「・・・犬」

犬「なんらよ柿ピー！こいつの肩持つの気なのかよ！」

千種「そうじゃない・・・もういい、めんどい・・・」

犬「ウキーッ、なんかしっくりこねーびょん！」

クローム「犬・・・ごめん・・・」

犬「ああっ、どさくさに紛れて謝って許されると思ってんろかよ！バーカ！」

千種「・・・・・・」

クローム「私・・・」

千種「並中・・・？」

クローム「うん」

犬「ん?てめーら何の話らよ!!」

千種「さっきクロームが説明してた・・・また教えるのめんどい・・・」

犬「さっき??さっ・・・あーーっもうっ、そんらもん覚えてねーびょん!!」

クローム「招集されてるの」

犬「そうそう招集・・・ってバカ女、何勝手に答え言っちゃってんだびょん!」

クローム「・・・ごめんなさい」

千種「・・・めんどい」

犬「あーーっ、もうっ、だから――――

・・・永遠に続きそうなので割愛する。

そしてクロームは並中に向かった・・・とだけ言っておこう。

―――――――――――――――――――

街灯が照らすT字路に、守護者三人が集結した。

誰となく話しかけることもなく、少しの沈黙の後、山本が一言で皆が動き始める。

山本「行くか・・・」

獄寺「ああ・・・」

良平「うむ・・・」

彼等の向かう先は、普段とは打って変わった戦場と化すであろう並盛中学校であった。

ｓｉｄｅ獄寺

並中に向かっていると、背後から遅れて俺達を追いかけて来たバジルの声がした。

もちろん遅れる理由は聞かされていたが・・・

バジル「皆さん!!」

山本「ツナ達と来るんじゃなかったのか・・・?」

バジル「ええ・・・イタリアにいる仲間と交信してて・・・」

イタリアの仲間ってことは・・・

獄寺「門外顧問チームか・・・で、どうだたんだ?」

バジル「ダメです・・・
　ディーノ殿の話では親方様達は無事で、何らかのアクションを起こすはず・・・しかし、無事を確認してから未だに連絡がとれない状況にあるとのことです」

獄寺「跳ね馬は手ー出せねーし・・・まあ、楓香さんの居所を調べてくれんのはありがてぇが、この戦いで何が起きても周りは頼りにできねーな・・・」

山本「なーに、ツナが勝つさ」

獄寺「ったりめーだ!!第一、10代目以外にボンゴレのボスがつとまる奴なんていねえ!!」

ノーテンキな野球バカに言われなくても、んなこと決まってんだよ！

バジル「あの・・・ディーノ殿から聞いた話なのですが・・・」

山本「？」

・・・バジルがディーノから聞いた話では、９代目と門外顧問を除いたボンゴレの上層部全員がＸＡＮＸＵＳを支持していたっつー話だ。

だがよ・・・

獄寺「いいか、新入り。
　１０代目ってお人は凄すぎて、わかる奴にしかわかんねーのさ」

バジル「は・・・？」

山本「ハハハッ、そんなわかりにくかねーだろ？」

獄寺「な！？」

山本「どちらかっつーとあいつの凄さって、わかりやす過ぎて見落

としちまうんじゃね？」

なっ、なに笑顔でぶっこいてんだよ！！

獄寺「意味わかんねーんだよ！！野球バカが！」

山本「えっ、そうか？」

良平「というか、そもそも沢田は凄いのかわからん時がある」

獄寺「なに！？」

良平「だが、そこが奴の並だが並ではないところだ！」

なっ！

獄寺「て、てめーらこんがらがること言うんじゃねえ！！」

山本「？つまりどーいうことだ？」

良平「うーむ、よくわからなくなったぞ！！」

ダメだこいつら、話になんねえ・・・

１０代目の凄さがわかってねえてめーらに、１０代目の凄さを叩き込んでやる！！

ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

言い合いするツナの守護者達に、バジルは感じた。

バジル「（そうか・・・
この方達はずっと以前から、
沢田殿の非凡な平凡さに気付いているんだ・・・）」

懐から取り出す、数年前にイタリアで撮った、門外顧問チーム集合写真。

本来はこういう物証を残すことは、組織・・・マフィアとして許されなかったが、

バジルにとっては、人生の起点だったといえようその日に撮った写真を、親方様・・・家光自身が許可したのだ。

楓香の上目づか・・・説得でチームからの反対を押しのけたということがあったことも確かだが・・・

バジル「（楓香殿、貴女が沢田殿の力になるために、毎日あのような厳しい鍛錬をしていたのも今なら理解できると思います・・・だから）」

―沢田殿の窮地を・・・早く戻って来て手を貸してください、楓香殿―

その願いは叶うのか・・・

今のバジルにはあの時の楓香の空虚な目が脳裏に映り、自信を持てないでいた・・・

標的７０　【仲間の祈り　来る！】（前書き）

更新が遅れました・・・ｏｒｚ

こちらでは半月ぶりの氷雨です。

年明けからいろいろ忙しくて・・・

もう一方の小説もストックでうｐしてるんですよ～～～・・・

今後の更新の方も、まあまちまちと進めていく予定です。ペース的には週に２～３話くらいかと。

――頑張りたいです・・・

標的７０　【仲間の祈り　来る！】

標的７０　【仲間の祈り　来る！】

ｓｉｄｅバジル

八年前、拙者が楓香殿と出会ったあの日のことは今でもはっきりと覚えている。

孤児であった拙者を親方様に拾われたのも丁度その日のこと。

「はっ・・・はっ・・・」

当時拠点としていたアジトの裏庭で長い黒髪をポニーテールにして、一心不乱に木刀を振っている同い年ぐらいの少女を見た。

それはもう・・・一生懸命強くなろうと必死で、楓香殿に始めて合った拙者は声を掛けることすらできなかった。

「ああ、彼女かい?俺の“はとこ”にあたる娘なんだが、つい最近俺達の組織に入った、新入りだ。

・・・まあ、あいつもいろんな柵抱(しがらみ)えてるんだ、同い年っつーこともある、話し相手になってくれねーか?」

「は、はい・・・」

・・・それから事あるごとに楓香殿に話しかけようとしたのは、親方様にそう言われたからというよりかは、同い年である楓香殿が何故こうも必死に己を鍛えることに専念するのかがとても気になっていたのだ。

しかしながら、相変わらず相手にもされない毎日・・・

「あれでも昔よりかはマシだ」と笑いながら言う親方様は、こうも言っていた。

「何かに専念する直向(ひたむ)きさは買ってやれ。そして人と接する大切さを教えてやってくれねーか？
・・・結局、あいつが心を開いたのもあいつやお前と同い年の俺の息子だ」

「親方様の・・・ですか？」

「ああ。俺だって可愛い妻子持ちの家庭の大黒柱だぞ？
そうは見えんかもしれんがなぁ・・・」

「い、いえ、そんなことは！！？」

すこし拗ねたように言う親方様に、拙者は慌ててそう言った。

「まあ、なんにしてもだ・・・
あいつは・・・楓香はある人の役に立ちたいとばかりに必死にあーやって己を磨き上げようとしている。
だが、この組織で生きていく以上、チームワークってのが不可欠になる。個人の腕っ節の良さだけじゃ、やってけねーんだ。
・・・あーいう奴は、すぐに追い出されちまう」

「え・・・なら！
楓香殿に何故そのことを教えないのですか！！？」

・・・親方様は彼女に何を求めているのでしょうか・・・

「こういったことは、自分で気づくのが一番なんだ。頭の回転が悪い奴は、この組織ん中じゃあすぐにお陀仏だからな。
・・・まあ、といってもまだまだガキに違いねぇ、当分の間は好きにさせるさ」

下される任務を通じて、その事に気づかない限りは楓香殿に正しい鍛え方を教えない、という話を聞いて、
楓香殿が時々体を壊してしまっている理由がムリな体力作りにあるようやく理解できた拙者は、まだまだ己も未熟者だと実感したのだった。

そして、ある日のこと。

「オレは・・・・間違った修業をしていたんだな」

「えっ・・・・・・・」

楓香殿の声を初めて聞いたのは、彼女の自嘲の言葉だった。

「お前がオレの修業に何度も見に来てくれてんのは知ってんだ、まあ気づいたのは最近だけどな・・・」

「はい。でも拙者は・・・」

「まあ、お前から話かけてもらった回数は多すぎて覚えちゃいねーが、それにオレは一回も応えなかったのは覚えている。
・・・何故だかわかるか？」

「わかりません・・・」

もしかして・・・拙者が何か楓香殿に気に障るようなことをしてしまったのではないか・・・

しかし返ってきた言葉は、驚愕する内容だった。

「オレが臆病者だからだよ」

「え・・・・・・・??」

臆病・・・者?

「今もお前の顔さえ見ずに話してんだ・・・」

「あ・・・」

そうか、今拙者に不意に声をかけたのは、拙者の姿が見えない位置にいたからだ。

「ストップ。お願いだからそこを動かないでくれ」

「は、はい・・・」

音を立てず、ほんのすこし足を進めただけで拙者が移動しようとしたことを察知した楓香殿の感覚は、すごいものだった。

「あー、そのなんだ、顔を合わせた途端にまた言葉が詰まっちまうことなりかねないからな、すまない」

「あ、いえ、拙者は気にしてませんから。
・・・それよりも凄いですよ、拙者が動いたことに気づいたのは」

すると、楓香殿は少し心苦しそうに言った。

「まあ、なんだ、オレは“化け物”だからな・・・」

「え・・・・」

「話・・・聞いてくれないか？」

――それから拙者は、楓香殿から自らを“化け物”といった“力”の話を聞いた。

そしてその時の話の最後に、楓香殿は拙者に言った言葉。

「もし、オレが完全な化け物に堕ちたときは・・・・・・

構わず殺してくれ」

それは願いであり楓香殿にとっての戒めであった。

しかし、そんなことはできないと。

仲間として、拙者には無理だと反論しようにも、楓香殿のその真剣な目からは逃れることはできずに・・・

そして思い出すたびにはっきりと否定できずに、そのまま今日に至っている・・・・――――

「楓香殿・・・」

昨日のあの時、あの瞬間。

拙者には楓香殿の“想い”が崩れようとしているように映って見え

た。

・・・・・それは、９代目のあの話を聞いていたからかもしれない。

でも、拙者は知っている。

彼女の芯の“強さ”を。

それは戦闘力だけではなく、誰かを守りたいと想う“心”の強さ・・・・・

“彼”が強くある限り、その道を照らし出しているだろうから・・・

だからこそ、

今は無事に帰ってくるのを祈るばかりです・・・

――しかし・・・

「楓香・・・殿・・・・・？」

まさか、こうなるとは思いもしなかった・・・

――――――――――――――――――――

ｓｉｄｅツナ

オレ達が並中にたどり着いた瞬間、中庭の方に異変が起こった。

ドオォォ・・・・

静まり返っていた校舎内に、爆音が響き、その中庭にたどり着くと熱風が吹き荒れていた。

リボーン「向こうも体調はいいみてーだな」

さっきの爆音はＸＡＮＸＵＳが起こしたもの・・・

相当あいつが強いことも、理解している。

けど・・・

ツナ「ＸＡＮＸＵＳ」

ＸＡＮＸＵＳ「来たかカス・・・」

この戦い、負けられない！！！

―――――――――――――――――――

ｓｉｄｅ獄寺

１０代目のご到着と共に、チェルベッロの奴らが姿を現した。

チェルベッロ「お待ちしておりましました」

チェルベッロ「これで沢田氏側の守護者は、嵐、晴、雨・・・」

チェルベッロ「そして霧の守護者が揃いました」

霧・・・！

校舎の向こうから現れたのは・・・

獄寺「髑髏（どくろ）・・・！」

チェルベッロ「残りは雲と雷と闇ですね」

ツナ「え、残りって・・・」

ザッ

雲雀「用件は何？」

ツナ「ヒバリさん！！」

ヒバリが現れた・・・？

ツナ「用件？」

了平「オレ達と一緒だな」

クローム「守護者は必ずくるようにチェルベッロから・・・」

確かにチェルベッロにそう言われていたが・・・

チェルベッロ「そうです、命ある守護者全員に強制招集を発動しました」

ツナ「強制招集・・・？」

リボーン「奴もいるぞ」

まさか・・・

ヴァリアー側の守護者、ナイフ野郎に雷、それと・・・

マーモン「ム」

ルッスーリア「もっとソフトにお願い～～～！超重傷なのよ！！」

了平「生きていたのか！」

獄寺「ベッドごと・・・！？」

霧に、簡易ベッドに固定された晴まで現れた・・・

つーことは、まさか・・・！

チェルベッロ「沢田氏側の雷の守護者も来たようですね」

ツナ「ランボ！」

アホ牛もかよ！！

俺達守護者の集合ってのは、こういうことかよっ！！？

ツナ「な、なんでランボまで！？意識取り戻したばっかりなんだぞ！！」

？「ランボも守護者だから・・・だろ、チェルベッロ？」

皆「！！？」

い、今の声は・・・！！？

校舎の影から表れたのは・・・

ツナ「ふ、楓香・・・？」

リボーン「・・・・・・」

楓香「なんとか間に合ったようじゃん。来たぜ、ツナ」

校舎の奥から現れた、復讐者（ヴィンディチェ）に攫われたはずの楓香さんの姿が、そこにあった。

標的７０　【仲間の祈り　来る！】（後書き）

訂正：親方殿→親方様

標的７１　【闇の帰還　来る！】（前書き）

またまた更新が遅れました・・・

標的７１　【闇の帰還　来る！】

標的７１　【闇の帰還　来る！】

さすがのリボーンも、内心焦っていた。

「（・・・どーいうことだ？

何で楓香がここにいるんだ？

ＸＡＮＸＵＳが楓香を逃がした？

だが、何のメリットがあるってんだ？）」

次々と浮かんでいく疑問の数々。

その突然の楓香の出現に、当然ツナも驚く。

「なっ、楓香、な、何で・・・・・・」

「守護者の招集は絶対。生死が判明している限りは・・・な」

楓香の意味ありげな答えに、山本が気づく。

「生死・・・それって、スクアーロがここにいねーのもカンケーしてんのか？」

「はい。スクアーロの生存は否定されました」

「・・・・・・・」

チェルベッロの回答に、山本は落胆、一同は無言になる。

その時、奇妙な喋り方の男の声がした。

「まあ私は生きてますがねぇ？」

「「「「！！？」」」」

「・・・・・」

突然現れたＸＡＮＸＵＳ側の闇の守護者、レイにツナ達は騒然、リボーンはピクリと眉をしかめた。

「てめー、守護者戦すっぽかしといて、何ノコノコ現れてんだ！」

「いやいや、体調が悪かったものですから仕方ないでしょ？」

「けっ」

憤怒する獄寺にしれっとするレイ。

楓香は無言、リボーンはＸＡＮＸＵＳを見やった。

・・・だが、ＸＡＮＸＵＳ側の守護者でさえ、そのことに口を出さない。

「（あいつらが容認してるってわけか。何があるだってんだ？）」

ＸＡＮＸＵＳでさえ何も言わないこの状況に、リボーンは警戒心を強める。

「守護者が揃ったところで、大空戦の説明を始めます」

「おい、それって強制招集にカンケーあんのかよ？」

淡々と説明を始めようとするチェルベッロに獄寺が横槍をいれる。

「勿論です。何故なら・・・

大空戦では、７つのリングと守護者の命をかけていただくからです」

「リングと、守護者の命をかける・・・？」

チェルベッロの説明にツナが反応する。

「そうです」

「ちょっ、何言ってんの！！？ランボはケガしてるんだぞ！！？ランボを返せ！！」

ツナの猛攻にチェルベッロは冷静に言葉を返す。

「下がってください。状況はヴァリアー側も同じです」

「そーよ、ガタガタ言わないの！」

ベッドごと連れてこられたヴァリアーの晴の守護者、ルッスーリアも苦しそうにしながらも同意する。

「招集がかかったらどんな姿だろうと集まる。それが守護者の務めよ！」

「その通りだよ。
僕もＸＡＮＸＵＳ様の怒りが収まって、力になれる機会を窺っていたのさ」

「ししし、よっくゆーよ、マーモン。捕まったけど殺されずにすんで、饒舌になってやんの」

「ムッ」

「お黙り、ベルちゃん！」

ＸＡＮＸＵＳ側のやりとりにかかわらず、ツナはチェルベッロに猛反発した。

「えっ、ちょっと待ってよ！！まだ納得は・・・」

「できなければ失格とし、ＸＡＮＸＵＳ様を正式なリング所持者とするまでです」

「ぐっ」

「のやろー」

チェルベッロの即答にツナは消沈、獄寺は毒づいた。

「ランボ・・・」

「心配すんなってツナ。ランボは俺たちが守るからなっ、笹川先輩？」

「うむ。その通りだな」

落ち込むツナに楓香はそう言い、了平も同意した。

「・・・・・」

そんな楓香をリボーンはじっと睨みつけているが、本人はいたって気づいていないようだ。

尚もチェルベッロは試合の説明を進行する。

「では、まず守護者のリングを回収します」

「なに！？」

その言いように了平はすぐに反応する。

「死に物狂いで取ったこのリングを返せというのか！？」

「真の守護者であるならば、心配する必要はないでしょう」

食い掛かる了平にチェルベッロはあっさりと返す。

「最終的にボンゴレリングは、必ず持つべき主人の元へいくものです」

「・・・？」

守護者の殆どは理解していなかったが、楓香やリボーンはこの意味を理解していた。

・・・つまり、最終的にはツナ側かＸＡＮＸＵＳ側のどちらかの守護者達全員がリングを所持することになるということだ。

「ではこちらへ」

「納めてください」

チェルベッロ２人は、それぞれツナ側とＸＡＮＸＵＳ側のリングを持つ守護者のもとに向かい、リングを受け取る。

因みに、雲雀がなくしたと言うハプニングがあったが、チェルベッロはすでに彼自身から戦いの直後に預かっていたので問題はなかった。

「はい、これで最後？」

「たしかに受け取りました」

最後に楓香から“闇のリング”を受け取ったチェルベッロは、台に嵌ったリングを皆に確認するように見せる。

「それでは、改めて大空戦のルールを説明させていただきます。大空戦も他の守護者同様、リングを完成させる事が勝利条件の一つとなります」

「ただしフィールドは学校全体」

「広(ひれ)ぇな」

「・・・・・・」

チェルベッロの説明に山本、獄寺は少し驚く。

「広大なフィールドでの戦いを観戦できるよう、観覧席と各所に小型カメラと大型ディスプレイ、そして守護者の皆様にはカメラ搭載型、モニター付きリストバンドを用意しました」

チェルベッロからそのリストバンドを受け取った守護者達は、それぞれ腕につける。

「なるほど、小型テレビか」

「いえ、笹川殿、テレビは見れないかと・・・」

「これで何時でもボクシングの試合が見られるのだな！」

「で、ですから、校内の映像しか映らないかと・・・」

「ハハッ、ツナがドアップだぜ」

「い〝っ！」

「何っ、山本、それどのチャンネルだ！」

「ご、獄寺、何意気込んでんの・・・」

「何言ってるんスか、楓香さん！１０代目のお姿が映っているならば、拝見しねーいと！！」

「い、いいよ、獄寺君・・・」

「アハハッ、いつになく意気込んでんのな」

「あったりめーだ！！１０代目の有志を、この目に焼き付けなきゃなんねーだろーが！！」

「・・・君たち、あまりうるさくすると、咬み殺すよ」

ワイワイガヤガヤ騒ぐツナ達を後目に、チェルベッロの説明は続く。

「では守護者の皆様は、リストバンドを装着し次第、各守護者戦が行われたフィールドに移動してください」

「ぬ？フィールドだと？今更どういうことだ？」

その指示にレヴィが横槍を入れる。

しかし、チェルベッロは相手にしない。

「質問は受け付けません。従わなければ失格となります」

「ったく、ムカツク女だぜ」

「見てるだけじゃなさそーじゃん。
楽しみ♪」

獄寺は毒づく一方、ベルフェゴールは喜悦する。

「（ゴホンッ）では、やるなら今しかないか・・・」

「え？」

突然咳払いしそう言う良平に、ツナは疑問符を浮かべる。

「円陣だな♪」

「１０代目！気合い入れましょう！！」

「！そ・・・そうだね」

「ま、まあ、しゃーねーな」

山本だけでなく獄寺まで意気込む様子に、断ることはできないツナ。

それは楓香も同じようだ。

「お前達はそこにいればよいからな。
１０ｍルールに改訂したからよいんだ！」

「？・・・（コクッ）」

「フンッ」

よいよい、とばかりに腕を突き出す良平に、何のことかわからない
クロームはとりあえず頷き、雲雀は鼻を鳴らした。

「１０ｍルール？」

「おう、よく聞け沢田。１０ｍルールとは、１０ｍ以内の者は円陣に入ったとみなす極限ルールだ」

「なんじゃそりゃ！！？」

了平のテキトーな説明に、獄寺は噛みつく。

「・・・なら、オレはいいよな？」

「いいじゃねーか、楓香！」

「ッ！ま、まあいいけど・・・」

一歩後ずさる楓香を山本が捕まえる。

ピクッと反応する楓香、山本も楓香の一瞬の変化に気づくが、されるがままにズルズル円陣に組まされる楓香を見て、気のせいかと忘れる。

「よーしいくぜ！！」

獄寺のかけ声と共に、

「「「「「沢田ファイッ!!オーーッ!!!!!」」」」」

皆の気持ちが一つになった。

標的７１　【闇の帰還　来る！】（後書き）

ははは・・・ぜんぜんすすんでないや・・・ｏｒｚ

標的７２　【闇の戦場　来る！】

標的７２　【闇の戦場　来る！】

円陣を済ませたツナ達は、それぞれツナに声を掛ける。

「では１０代目、後で」

「ボス、気をつけて」

「頑張れよ、沢田」

「ｚｚｚ・・・」↑ランボ

「無茶すんなよ、ツナ」

「（イラッ）」＃

「ツナならやれる・・・頑張れ！」

「楓香、みんな・・・」

そして守護者がそれぞれのフィールドへと分散していった。

ｓｉｄｅツナ

・・・とうとうここまできた。

この一週間、様々なことがあった。

友達が・・・仲間が傷つきながらも戦い、そしてオレ達はまたあの争いのない平和な日々を取り戻すため頑張ってきたんだ・・・

無意識にポケットの中にある、京子ちゃん達からもらったお守りを握りしめていた。

・・・不安もいっぱいあって、今でも緊張でガクガクだけど――――

「いよいよだな！」

っ、この声は！

声のした方を見ると・・・

「コロネロ！Ｄｒ．（ドクター）シャマル！」

「骨拾いにきてやったぞ」

「野次とばしにきたぞ、コラ！」

「（感じ悪！！）」

ペットのワシに吊り下げられたコロネロと、白衣の男、Ｄｒ．シャマルが観戦・・・だと思うけど、来てくれていた。

な、なんかいつもと変わんないや・・・

――――・・・いつの間にか、不安や緊張が薄れていた。

「全員各フィールドに到着したようです」

「！」

チェルベッロの報告に、オレはモニターを通し確認する。

・・・ん？

「あれ・・・真っ暗で何も映ってないカメラがあるんだけど」

「はい、それで構わないので」

・・・？

「これ・・・楓香んとこの・・・？」

獄寺君、山本、ランボ、京子ちゃんのお兄さん、ヒバリさん、クロームのフィールドの映像はある。

そう、“闇の守護者”のフィールドのみが映されていないのだ。

「ちょっ、どーいうことですか！！？」

「これが闇のフィールド・・・《ゼロ・ヴィジョン》。

“すべてを無に返す、混沌の暗闇”の使命の通り、極限までに何もない暗闇の中、方向感覚を失い混沌とした空間の中で戦うフィールド。

勿論、校舎内の何れかの場所に設置されたフィールドで、暗闇といっても人工的な暗幕で作られたもので範囲もありますが、暗幕の場所自体は巧妙に隠されており、戦う当人達以外にお教えすることはないのであしからず」

「尚、このフィールド内に限り、他の守護者の侵入を不正行為とします。あくまで故意に・・・ですが」

「なっ！」

「それって・・・楓香がその暗幕からでるまで、オレ達は手が出せねーってことかよ・・・」

チェルベッロのあまりな説明にオレは声を失い、山本が簡潔にまとめた。

「はい」

「大丈夫だツナ。お前はお前の戦いに集中してくれ」

「楓香！」

声のみ・・・だが、紛れもない楓香の声にツナは安堵する。

「ってことは、楓香のところにもこの棒があるのか？」

「あー、わからないけどあるかも」

お兄さんは自分のすぐ側にある、フィールドの真ん中に突っ立っているポールを見て言い、楓香は曖昧にそう答えた。

「はい。各フィールドに設けられたポールの頂上には、フィールドと同じ種類のリングが置いてあります」

「ん・・・！？リング・・・
まさか、また奪い合えってのか・・・？」

「ってことはさーー、オレ達も戦えちゃうわけ？」

チェルベッロの説明に獄寺君とベルフェゴールが聞き返す。

「どうぞご自由に」

「え！！？」

チェルベッロの素っ気ない返答にオレは焦った。

そして・・・

「ただし・・・できればの話ですが」

戦いの火蓋が切って落とされたんだ・・・

――――――――――――――――――――――――

チェルベッロの発言に、それぞれ疑問符を浮かべる。

だが、それが開戦の合図だった。

グサッ！

「「「「「「！！？」」」」」」

「あっ！」

「ぐっ！」

「うっ！」

「くっ！」

突然、みんなの呻き声がモニター越しから伝わってきた。

「!?」

「なっ、何なの・・・!?」

リボーンとオレは突然の出来事に驚く。

そして、チェルベッロから驚きの説明が返ってきた。

「ただ今、守護者全員にリストバンドに内蔵されていた、毒が注入されました」

―――――――――――――――――――――――――

守護者全員に毒が注入された・・・

その事実に、ツナ達は戸惑いを隠せずにいた。

「なんだって!!?」

「デスヒーターと呼ばれるこの毒は、瞬時に神経をマヒさせ立つことすら困難にします。
そして全身を貫く燃えるような痛みは徐々に増してゆき、３０分で・・・

絶命します」

チェルベッロの説明に、ツナ達は絶句した。

「ど、どーゆーことだよ!!
大空戦なのに、なんでみんながこんな目に!!」

「大空であるボスの使命だからです」

「！？」

ツナの訴えに、淡々と述べるチェルベッロ。

「晴・雷・嵐・雨・霧・雲、そして闇・・・

すべてに染まりつつ、
すべてを飲み込み包容することが、
大空の使命」

「守護者全員の命がボスの手に委ねられる戦い。それが大空戦なのです」

「委ねるって・・・こんなの！！」

間違っている、と続けようとしたツナをチェルベッロが遮る。

「毒の進行を止める方法が一つだけあります。
それは守護者のしているリストバンドに、同種類のリングを差し込む事です」

「!?」

「リストバンドの凹みにリングを差し込めば、内蔵されたデスヒーターの解毒剤が投与される仕組みとなっています」

「つまり、この戦いでは大空のリングだけでなく、守護者のリングも重要な要素になってくるんだな」

「その通りです」

リボーンの言葉にチェルベッロが同意する。

「そして、大空戦の勝利条件は一つ。

ボンゴレリング全てを手に入れることです」

チェルベッロはそう言うと、八つの穴の開いたはめ込みが連結された、殊な形のチェーンをツナ、ＸＡＮＸＵＳに渡す。

「このチェーンに全てのボンゴレリングをセットできます」

「わかったよ!!急ごう!!早くしないとみんなが!!」

焦るツナに、ＸＡＮＸＵＳは小さく薄笑いを浮かべる。

「では最後に一つだけ。
勝負開始後は一切の部外者の外部からの干渉を禁止します。特殊弾も然りです」

「了解したぞ」

チェルベッロの説明にリボーンは頷き、ツナはイクスグローブを装着した。

まさにその時・・・

ガンッ!!

突然、ＸＡＮＸＵＳの一撃がツナに入り、

ドォン！！！

「！！」

「沢田殿！！」

ツナは校舎に吹き飛ばされてしまった。

「ザ、ＸＡＮＸＵＳ様！！まだ・・・！」

「早く始めたいと言ったのは向こうだぜ」

チェルベッロの言葉に、ＸＡＮＸＵＳは皮肉にもそう返す。

砂煙の立つ校舎からは、ツナの姿が確認できない。

「は・・・それでは・・・・！」

「しかし今の攻撃で沢田氏が・・・」

焦るチェルベッロの２人、バジルはＸＡＮＸＵＳに猛抗議する。

「卑怯だぞ、ＸＡＮＸＵＳ！！」

「あぁ？
特殊弾を撃つ前はまずかったか？」

すでに決着はついたとばかりに鼻で笑うＸＡＮＸＵＳ。

だが、相手が悪かった。

「なめんなよ、オレを誰だと思っている」

その小さな体に不釣り合いな銃の口からは、硝煙が立ち込めていた。

リボーンの言わんとしていることに気づいた面々は、砂煙の晴れた校舎の方を見るが・・・

「・・・焦げ跡？」

煤けたような校舎の跡。そして、それが薄くなって伸びていく先には・・・

「いいかツナ、あいつの言ってたとおり、ＸＡＮＸＵＳは片手間に戦える相手じゃねーぞ。
七人の守護者を救出しながらの交戦は命とりだ。まず・・・」

「わかっている。先にこいつを片付ける」

校舎の壁面、中頃に壁に垂直に・・・まるでそこが地面であるかのように立て膝でリボーンにそう返す、超死ぬ気（ハイパー）モードのツナの姿があった。

傷を負った姿が見られないところから、ツナはグローブに灯る死ぬ気の炎を噴かして勢いを上に殺し、今の場所にいることが推測できた。

・・・数日前までのツナならできるはずもなかった芸当だった。

「沢田殿！」

「・・・カスが」

バジルは安堵し、ＸＡＮＸＵＳは忌々しげに睨みつける。

そしてツナはすくっと静かに立ち上がると、改めて言い放った。

「さあ・・・始めよう」

標的７２　【闇の戦場　来る！】（後書き）

ようやく１４巻が終わったよ～～。

次回から戦闘描写、死ににイキマス・・・ｏｒｚ

標的７３　【《大空戦》　来る！】（前書き）

久しぶりの投稿。
はい、スランプですネ・・・ｏｒｚ

次回こそもっと早く更新したい今日この頃です・・・

標的７３　【《大空戦》　来る！】

標的７３　【《大空戦》　来る！】

超死ぬ気（ハイパー）モードのツナの言いように、ＸＡＮＸＵＳは嘲笑する。

「片付けるだ？」

「はっ、昨晩のあの程度の力でか？」

「昨日のオレと同じに見えるか？」

問いに対し問い返すツナの挑発に、ＸＡＮＸＵＳは先のダメージを緩和したことを思い出し、調子付きやがって・・・とばかりに殺気を強める。

それに気づいたチェルベッロは我に返り、急いで行動を起こす。

「観覧される方はこちらへ！急いで下さい！」

「観覧席は校舎裏の一面です。守護者戦と同様、赤外線センサーにより出ることはできませんのであしからず」

チェルベッロはそこで言葉を切ると、校舎の角を見やる。
そこには、黒曜の二人組が隠れていた。

「あなた達もです」

「ゲッ、バレてんの」

「犬・・・」

「なっ！柿ピー、オレのせいらとでもいうのかよ！」

「・・・」

「むっきーっ！」

「めんどい・・・」

黒曜のやりとりを傍目に、チェルベッロが戦いの合図を発した。

「それでは大空のリング、
ＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）　ＶＳ．（バーサス）　沢田綱吉
勝負（バトル）開始！」

―――――――――――――――――――――

――闇の守護者フィールド

ｓｉｄｅ　？？？

デスヒーターとは・・・さすがにイタいな・・・

だが・・・

カチャカチャ・・・

「ほら」

チャリン

プシュッ

開始直後の暗闇の中、彼女に渡された“闇のリング”で解毒され、すぐに収まった。

「ふぅ・・・」

ボウ・・・

「さて・・・あまり時間がないわ。さあ、始めましょう」

ようやく立ち上がる私ぬ対し、彼女は素知らぬ顔で武器の先に“死ぬ気の炎”の灯りを灯し、周囲の視界を確保する。

・・・同じ毒を盛られたというのになんて奴だと思うが、今はそんなことはどうでもいい。

「ほら、“素体”を安全なところに」

「わかりました」

・・・正直、＞彼女＜の体を素体扱いするのは忌々しいが、これも＞彼女＜・・・しいてはＸＡＮＸＵＳ様のため・・・

そう、計画さえ完了すれば・・・

私は彼女の灯す明かりを頼りに、件の生体ポットを隅の方へと寄せる。

チラッと彼女を見やると、リストバンドのモニターに目を向けていた。

・・・モニターの光に反射する、＞彼女＜の目にソックリな彼女の赤い瞳に魅せられた自分が、悔しくて私は目をそらした。

―――――――――――――――――――――

校舎の壁面で構えるツナに、ＸＡＮＸＵＳは余裕の笑みを浮かべる。

「やはり、何も変わって見えんぞ」

ボウッ

その言葉を皮切りに、ツナはグローブの炎を噴かしてＸＡＮＸＵＳに急接近する。

ＸＡＮＸＵＳの後ろをとったツナはグローブで横に一閃、それを避けたＸＡＮＸＵＳは裏手でツナを狙う。

それを右手グローブで去なしたツナは、即座のＸＡＮＸＵＳの蹴りを・・・

ボウッ！

「ちっ」

前方に炎を噴かすことによって回避、一度ＸＡＮＸＵＳから距離をとる。

「ほう・・・やるじゃねーか」

「沢田殿！」

Ｄｒ．シャマルはツナの動きに感心、バジルも喜々とする。

これこそ、修業で楓香から進言された“ヒットアンドアウェー”戦法。

リボーンの修業で体力はついた・・・とは言っても、ツナには一向に経験が足りない。

さらに、ＸＡＮＸＵＳに体格で劣るツナにとって炎の推進力はあるものの、ふっ飛ばされやすく長時間の近接戦闘は危険だ。

また、ＸＡＮＸＵＳの戦法はわかっていないため、様子見も含めてツナにそれを見極めるためでもある。

だが、ＸＡＮＸＵＳもファミリー上層部からも最強と謂われた男。

「そんなものか」

ツナの再度の直線攻撃を見切り、ツナの突き出す右腕の手首を掴むと・・・

「あ？もう逝くかと聞いてんだ」

キュォォオオ

「そいつはやべーぞ」

観覧席のリボーンの言うとおり、ＸＡＮＸＵＳのもう片方の手に“炎”が収束していき・・・

ドッゴーーーーン！！！

その“炎”は、ツナがいた場所を貫き、校舎へと放たれた。
ツナは“超直感”で危険を察知、もう片方のグローブを噴かして上方に逃げたが・・・

ズアッ！！

「「「「！！！！」」」」

一瞬にして炎に曝された校舎が風化し、トンネルのように大きな穴と化した。

「おい・・・鉄筋の校舎だぜ・・・」

「風化した・・・！？」

「あれが奴の“憤怒の炎”だ」

シャマル、バジルの驚愕に、リボーンがその正体を答えた。
その間にも、ツナは掴まれた手に炎を灯して拘束を解き、校舎の壁まで距離をとった。

「憤怒の・・・炎？」

「死ぬ気の炎は指紋や声紋と同じで、一人一人個性によって形や性質が異なるんだ」

バジルの問いに、リボーンが答える。

「それは楓香殿の“黒い炎”のように・・・ですか？」

「そうだぞ。
そしてＸＡＮＸＵＳのは極めて珍しい、光球の炎だ。
歴代ボンゴレのボスでは唯一武器を持たず、素手で戦った2代目

だけがこの炎だったという。

この炎の特徴は、全てを灰に帰す圧倒的な破壊力。
そして2代目が激昂した時のみこの炎を見せたことから、今では死ぬ気の炎とは別に、憤怒の炎という」

リボーンの説明が終わるとともに、ＸＡＮＸＵＳがツナに問う。

「何故お前と同じ武器をつけた初代ボンゴレが日本へ逃げるようにして隠居した？」

「！？」

「2代目との勝負を恐れてだ」

「！！」

ＸＡＮＸＵＳはさらに続ける。

「軟弱な死ぬ気の炎が憤怒に焼かれたとあっちゃ、最強の名が廃るからな」

ＸＡＮＸＵＳは右手にその炎を収束させながらツナに言い放った。

「この炎にびびったんだ」

「・・・確かにあの校舎が風化した様はただならねぇ強さを秘めてるってか」

「・・・沢田殿があの炎を避けていなければどうなっていたか」

シャマルや冷や汗を伝わせるバジルもその恐ろしい強さを痛感していた。

だが・・・

「試してみるか？」

「！？」

ＸＡＮＸＵＳの挑発にも動じず、ツナは再び静かに校舎壁面に垂直に立ち上がった。

「貴様の炎とオレの炎・・・どちらが強いかを」

「何？」

その表情は窺い知れないが、壁面をトンッと軽く蹴り自由落下と炎による加速したツナは、弾丸のごとく一直線にＸＡＮＸＵＳへと向かい、その拳を、

「それ程消えたきゃ・・・かっ消えろ！！」

ＸＡＮＸＵＳの突き上げた右手の炎と、ツナの放つ右手の炎がぶつかり合い、拮抗。

「あぅ！！」

「ちっ！」

その余波で、近場にいたチェルベッロや観覧席まで突風に襲われる。

そして・・・

ドゴッ！

その拮抗を破ったのは、

「お、おい・・・こいつぁ・・・」

「はい・・・沢田殿の炎が、ＸＡＮＸＵＳの炎を・・・上回った！！」

観覧席の皆は歓喜した。

ＸＡＮＸＵＳはツナの攻撃を赦し、対面の校舎まで吹っ飛んでいき、ツナは静かに地面に着地していた。

リボーンもその様子にニッと笑う。

「修業の成果だな。
総合的な破壊力はＸＡＮＸＵＳの炎が上かもしれねーが、ツナは炎をコントロールし一か所に集中させることによって、ＸＡＮＸＵＳの炎を突き破ったんだ」

一転して、だが・・・とリボーンは続ける。

「こんなもんでくたばるＸＡＮＸＵＳじゃねーぞ」

ツナはＸＡＮＸＵＳの突っ込んだ方へと右手の炎を前に・・・盾にして、接近する。

・・・が。

ドンッ

「っ！？」

いきなりその場から閃光、そして砲撃がツナへと放たれた。

「沢田殿！！」

「炎の盾（シールド）を突き抜けたぜ！！コラ！！」

「あれは・・・！！」

観覧席の面々は驚愕し、そのＸＡＮＸＵＳが下に放った砲撃で宙に踊り出てき、そしてその場に着地したのを見た。

「・・・・・・
カスごときに武器をとるとはな・・・」

「！！」

ツナ達はそのＸＡＮＸＵＳの手にある武器に目を見開く。

そして、リボーンが静かに言った。

「ＸＡＮＸＵＳも武器を使うのか。しかもあれは7代目と同じタイプ」

ボンゴレ7代目・・・その男を象徴していた武器とは。

「2代目の炎に7代目の“銃”・・・

こいつは凶悪な組み合わせだな・・・」

この時、暗闇の中その様子を映像で見ていた少女はほくそ笑んでいた。

その時が来るのを今か今かと待つように・・・

標的７３　【《大空戦》　来る！】（後書き）

なにげにツナが原作より強かったり。

まあ、そうでないといろいろと・・・ですのでｗ

閑話　【3年A組、“リボ山”先生！！！】（前書き）

お久しぶりです、氷雨です！
いろいろあってようやく復活しましたが、まだ続きは作成中なのでこうご期待。
いろいろの内容は“作者ページ”の方で。

閑話　【3年A組、“リボ山”先生!!!】

閑話　【3年A組、“リボ山”先生!!!】

ツナ「って、なんなのこれーっ!!?」

リボ山「うるせーぞ、生徒は教師に従っていればいーんだ、さっさと座りやがれ」

ゴスッ

ツナ「へぶっ!」

楓香「大丈夫か、ツナ。
　でも、今のリボーンには何を言ってもムダだぞ・・・」

ツナ「ふ、楓香・・・（楓香もリボーンに染められちゃってるーーっ!!?）」ガーン

山本「ん?小僧がどこかにいんのか?」

ツナ・楓香「（この人、まだ気づいてないのねーー・・・）」ガーン

獄寺「けっ、あん時の先公かよ」

ツナ・楓香「（この人もーーっ!!）」ガガーン

リボ山「そこの二人が黄昏てるが、さっさと出席をとるぞ」

了平「おう、さっさと来い!オレは1分しか待てんぞーっ」

ツナ「なんでお兄さんがいるんですかーっ!?」

了平「ん?それはパオパオ老師に呼ばれたからだーーっ!!!」

リボ山「ニッ」

ツナ「（あいつの仕業かよ!!しかも・・・）」

リボ山「んじゃっ、主席を取るぞ。クローム髑髏」

クローム「コク・・・」

リボ山「返事がねーってことは欠席だな」

クローム「（ガーン・・・）」

ツナ「なんで黒曜のクロームまでいんのーーっ!?しかも欠席扱い!!?」ゴーン

リボ山「次、獄寺隼人」

ツナ「（スルーしたーーっ!?）」

獄寺「・・・けっ」

リボ山「よし、いるな」

ツナ「（返事ならなんでもいいのねーー・・・）」

リボ山「笹川兄妹」

京子「はい！」

了平「極限！！！」

ツナ「（しかも、まとめちゃってるし・・・）」

リボ山「よし、次、ダメツナ」

ツナ「はい・・・って、確かにお前からいっつもそう言われてるけど、酷くないっ！！？」

獄寺「おい、先公！！１０代目になんてことを！！」

リボ山「次、ビアンキ」

ビアンキ「あら隼人、先生にそんなこと言っちゃダメよ」

獄寺「ふげぇっ！！ア、アネキ・・・なん・・・で・・・」

バタッ・・・

ビアンキ「それは、そこに愛があるからよ」

ツナ「ちょっ、獄寺君!?てか、ビアンキ、意味分かんないから!!」

山本「大丈夫か獄寺?先生!保健室まで送ってっていいっすか?」

リボ山「それなら心配ねーぞ。保健係のビアンキが連れてくぞ」

ビアンキ「大丈夫、隼人?」

獄寺「ふげぁっ!!」

楓香「ビ、ビアンキ・・・」

ツナ・楓香「(この人絶対わざとだ・・・)」

ビアンキ「大丈夫っ、隼人！」

獄寺「ふがぁぁっ！！！！」

・・バタン

リボ山「んじゃ、引き続き主席を取るぞ」

ツナ・楓香「（さも何もなかったように振る舞ってる・・・）」ゴーン

リボ山「次、」

ガラガラ

楓香「えっ」

ツナ「んなっ！！？」

リボ山「・・・雲雀恭弥」

雲雀「・・・赤ん坊の誘いで来てみたけど、君も強そうだね」

ツナ「ヒバリさんーーーっ！！？」

雲雀「？・・・群れるのは嫌いだけど、楓香もいるようだし、面白そうだね」

ガチッ

雲雀「・・・僕も混ぜてよ、咬み殺し合い」

楓香「なっ、待てヒバ「ちなみに今ならツナも付いてくるぞ」「んなっ！」おい、ちょっ、リボーン！それは不味いって！」

リボ山「んじゃ、楓香がみっちり付き合うらしいぞ」

ヒュッ！

楓香「ちょっ、わかったわかった！ツナ、あとは頼んだぜ！」

雲雀「・・・来なよ」

ヒュッ

ガキィンッ！

ヒュッヒュッ・・・・・・・・

リボ山「・・・さて、雲雀と楓香は早退だな。あとでみっちり補習だな。次、行くぞ」

ツナ「（理不尽だ・・・）」ゴゴーン・・・

リボ山「次、山本武」

山本「おう」

リボ山「よし、次、ラ・・・」

ガラガラ

ランボ「ガハハハ！呼ばれて飛び出て、ランボさんとーじょっ！！！」

リボ山「・・・ル・ミルチ」

ラル「どうしてオレがこんなことしなければならんのだ・・・」

ツナ「ラル、居たのーーーっ！！？」

ランボ「ラ、ランボさんとー「てめーは呼ばれてねーぞ」ぐぴゃっ！
が・ま・ん～～～～っ
うわぁぁぁ～～～～ん」

ツナ「（泣いちゃったし・・・）」

リボ山「うるせーぞ」

ヒュッ

ゴスッ

ランボ「ぐぴゃっ！！」

ツナ「（チョークが砕けたーーーっ！？）ちょっ、やり過ぎだぞ、リボーン！」

リボ山「カチンと来たんだ、カチンと」

ランボ「うわぁぁぁぁぁ」

チャッ

ツナ「な、１０年バズーカ！？」

カチッ

ドンッ！

モワワワーン

１０年後ランボ「・・・・やれやれ、どうやらまた過去に来てしまったようだな」

ツナ「大人ランボ！」

１０年後ランボ「お久しぶりです、若きボンゴレ。ところで、この集まりはなんですか？」

ツナ「ああ、それは・・・」

リボ山「だからお前は呼ばれてねーぞ。というか、誰も呼ばねーぞ」

ツナ「相変わらずひでーっ！」

１０年後ランボ「（ガーン・・・）わ、若きボンゴレ、し、失礼します」

ツナ「は、はい・・・」

１０年後ランボ「ガ・マ・ン・・・」フラフラ

バタン・・・

ツナ「（相変わらずミジメだ・・・）」

リボ山「よし。ってことで、授業を始めっぞ」

to be continued・・・??

閑話　【3年A組、“リボ山”先生！！！】（後書き）

また、いつか続きを書こうと思います、たぶん、きっと、おそらく、ｍａｙ　ｂｅ・・・

本編の話は3～4日以内ぐらいにうpしようと思ってます。

標的７４　【守護者の参戦　来る！】（前書き）

セリフなど、原作とは少しずつ変えていこうと思います。

標的７４　【守護者の参戦　来る！】

標的７４　【守護者の参戦　来る！】

両手に持つ銃を構え憮然と立つＸＡＮＸＵＳの周りには、未だに先ほど放った銃弾の熱気が漂っていた。

「じゅ・・・銃だって・・・！？」

「ボンゴレにはいろんな戦闘スタイルのボスがいたが、銃を主力武器にしたのは７代目だけだ。
７代目は射撃の腕だでなく、炎の性質からも銃をチョイスしたと言われている」

驚くバジルに、リボーンが説明する。
ボンゴレファミリーボス７代目は、他の歴代のボスの中でも宿す死ぬ気の炎が一際弱かった。
だからこそ、ボンゴレファミリーに伝わる被弾、“死ぬ気弾”・・・死ぬ気の炎を一時的に圧縮して吸収するというその性質に着眼して

それを武器にし、圧倒的な破壊力を持って、ボスの座に君臨したといわれている。

そこまでの説明を聞いた、バジルは7代目が“炎が一際弱かったから”という前提の下で死ぬ気弾が使われていたことに気づき、待ったをかける。

「待ってください！！ＸＡＮＸＵＳの炎は7代目と違い、破壊力抜群の憤怒の炎です！！
そんな炎を蓄積して一点に集中させたら・・・！」

「ああ、とてつもない破壊力、貫通力になるだろうな。
あの一撃をくらったら、ツナといえど相当やべーだろーな」

だが・・・と続けようとしたリボーンは口をつぐむ。

（あいつの修業のおかげで少しは強くなったとはいえ、その楓香が様子がおかしかったんだ。
この戦い、楽観視はできねーな・・・）

リボーンは闇の守護者の姿を思い出し、帽子を目深に被った。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ディーノ

「ったく、厄介なことになっだぜ、スクアーロの奴は相変わらず、口を割らねーしよぉ・・・」

雨の守護者の座を賭けたあの試合、俺たちは万が一の為に校舎の裏側に待機していたのだが、先にその場にいた楓香がサメに飲み込まれたスクアーロを助け出した。
そして幸いにも致命傷を負わずにすんだスクアーロは、オレ達が密かに病院へと運んだのだ。

・・・それと9代目の容態だが、相当やばい状態だ。
負傷した傷よりも、むしろあのゴーラモスカとかいう軍用兵器に死ぬ気の炎を吸収されていたせいで、気力の低下、及び回復力の低下により、今でも死の縁をさ迷っているらしい。

そんなこんなで、オレは最後の希望を設備のいい病院へと送ったのだが・・・

「（リボーンの奴、流石に9代目のためとはいえ、あの病院を紹介するとはな・・・）」

リボーンの古い知り合いの研究所に隣接するその病院は、最先端の技術を兼ね備えてるって話だが、どうも黒い話が絶えねぇらしい。

・・・まあ、腕は確からしいからなぁ。

その古い知り合いというのがリボーンと不仲らしい・・・が、その技術力を見込んで、敢えてリボーンは9代目を託したのだ。

で、今のオレ達はというととある連絡を待っているんだが・・・

と、

「ボス、門外顧問から連絡がきやしたぜ」

ロマーリオの呼びかけにオレは先を促す。

「で、何だって？」

「・・・どうやらすでにイタリアを飛び、このジャッポーネに向かっているところだそうだ」

「そうか。（・・・ん？ここにだって？）
・・・他には何か言ってなかったか？」

「9代目のこともそうだが、どうやら確かめたいことがあって直接確認したいらしい・・・」

「？　何だそれ？」

確かめたいこと・・・の中身は結局分からなかったが、とにかく門外顧問の連中はここに来るらしい。

それに・・・あのＸＡＮＸＵＳのことだ、なにか不吉な予感がする。戦いには手は出せねーが、万が一の時のツナ達の手助けになればいいが・・・な。

―――――――――――――――――――――――――――――――

「あぁ？とっとと片付けるんじゃなかったのか？
それとも、超直感が死を予感したか」

「・・・・・・」

ドンッ！

ＸＡＮＸＵＳの挑発に答えず、ツナはＸＡＮＸＵＳのその手に持つ銃を警戒しながらも、Ｘグローブの推進力でＸＡＮＸＵＳに向かって特攻する。

だが・・・

「ダニが。高速移動がてめーの専売特許と・・・」

ＸＡＮＸＵＳは銃口を下に向けると、

「思うなよ」

ドンッ！

地面に炎を放ち、垂直に空に飛び上がってツナのパンチを逃れる。

ツナも炎の推進力で追いかけるが、発砲の反動で宙を移動するＸＡＮＸＵＳの、不規則な動きによってことごとく交わされる。

「弾を推進力にしてやがる・・・これで機動力は並ばれたぜ、コラ」

「何て奴だ。あんな動き、２代目も７代目もできなかったはずだ」

流石のリボーンとコロネロもＸＡＮＸＵＳの動きに驚きを隠せないでいた。

そして、ついにはＸＡＮＸＵＳに背後をとられ・・・

コオオオオ・・・

「！！」

「散れ」

銃口から放たれる炎。

「（チラ）」

「！？」

それに気付いたツナは炎の盾で防ぎつつも後ろに受け流した。

だが・・・それは明らかに不自然だった。

ドンッ

「（なぜあんな避け方を？）」

バジルはツナの行動に疑問を持つが、リボーンはその真意に気づいていた。

「あの方向はやべーんだ」

「！！？」

ドゴオッ！！

受け流したＸＡＮＸＵＳの弾、その先にあったのは・・・

「「体育館！！」」

「あそこにゃあ、確か・・・！」

「霧の守護者が！！」

「ドクロ！」

その事に気付いたＤｒ．シャマルとバジルは声を上げ、流石の犬も焦りを感じた。

「くっ・・・」

同じくツナも焦りを見せていたが、

「ボ・・・ボス！あと少しで当たってたよ！・・・」

「はぁ・・・はぁ・・・」

「ツナが一瞬引き付けたおかげで、髑髏は無事だぞ」

煙が晴れた先に見えのは、マーモンとクローム髑髏に危うく当たりかけた銃弾のあとだった。

リボーンもモニターでそれを確認し、観客席の一同はほっと肩をおろした。

タンッ・・・

「ふっ、そうか・・・」

再び校舎に着地したＸＡＮＸＵＳは、同じく降りてきたツナを嘲わ笑った。

「ほざいていたな、守護者は死なせんと。

・・・それで貴様は何を得た」

「？」

「オレは部下が死のうがどーでもいいが・・・見ろ」

「！」

それに答えるかのように、ＸＡＮＸＵＳ側の守護者達も必死で声を上げる。

「お願いボス！助けて！！な・・・何だってしちゃう！！」

「もう・・・負けないよ！！一生ついてくよ！
ハア・・・ハア・・・
財産も半分あげるから！」

「リング・・・集めんの・・・手伝うからさ～・・・」

「お助けを・・・そして何なりと・・・ご命令を！！」

晴、霧、嵐、雷の守護者の懇願する声を聞いて、ＸＡＮＸＵＳは満足げに高笑いした。

「ぶはははは！！これこそが大空だ！！！」

そして再び炎を2丁拳銃に充填し・・・

コオオオオ！！

「施(ほどこ)しだ！！」

ドゴオッ！！！

「なに！？」

「嵐と雷のボールが！！」

嵐と雷のフィールドに聳え立っていたポールが、ＸＡＮＸＵＳの銃弾によって倒されていた。

ベルフェゴールとレヴィは、転がってきたリングを解毒の穴に刺す。

カチッ　プシュッ

「ししししっ、助かった～」

カチッ　プシュッ

「ありがたき幸せ！」

「！」

「リ・・・リングが奴らに！！」

シャマルとバジルは驚嘆し、ＸＡＮＸＵＳは高笑いする。

「ふっはっは、どーしたモドキ、このやり方は想定外だったか？」

「・・・・・・」

「お前もやりたきゃグローブでも投げつけろ！！ぶっはははは！！！」

バジルは悔しげに声を上げる。

「くそ・・・あいつ・・・！こんなの反則だ！！」

「まずいぜ、解毒された敵の守護者が野放しになる・・・」

シャマルの言う通り、既にベルとレヴィは行動に出ていた。

「ししししっ、爆弾少年には毒でもがき苦しみ、死んでもらって・・・さーてと」

「まず、牛ガキを殺す」

ツナは急いで仲間の下に向かおうとするが・・・ＸＡＮＸＵＳに路を阻まれてしまう。

「あぁ？何処へ行く」

「くっ・・・（まずい・・・ランボやみんなが・・・！！）」

「・・・ツナの奴、何焦ってんだ？」

「リボーンさん・・・」

リボーンの言葉に、バジルは訝しむ。

「・・・確かに、ＸＡＮＸＵＳも型破りな男だが、お前の守護者もただもんじゃねーはずだぞ」

「「？」」

校舎から外に出たベルは周囲を見渡しながら、一番近いフィールドへと向かおうとしていた。

「闇んとこは手出しできねーしな。
こっからだと、雨が近いか・・・！？」

・・・その時、

ヒュッ

キンッ

突然飛んできた何かに、リングを弾かれてしまう。

そして、現れたのは・・・

「・・・!!お前は・・・・」

「ふうん、よくかわしたね」

雲の守護者にして最強の並中風紀委員長・・・

「君・・・天才なんだって?」

雲雀恭弥だった。

標的７４　【守護者の参戦　来る！】（後書き）

誤字、脱字のご報告、感想も待ってます！

標的７５　【吹き荒れる天候　来る！】（前書き）

と共に、吹き荒れる私の経済事情ｗ

標的７５　【吹き荒れる天候　来る！】

標的７５　【吹き荒れる天候　来る！】

「君、天才なんだって？」

突然の雲雀の登場によって、今まさに、流れが変わろうとしていた。

「「！」」

「！！」

「あいつぁ」

「ヒバリ殿！？」

「何故・・・」

その事実に、観覧席の一同は驚いていた。

もちろん、チェルベッロも他ならない。

直ぐに雲のフィールドをモニターで確認すると・・・

「!?あれは一体・・・」

「雲の守護者のポールが!!?」

ポッキリと土台を折られて倒れた、雲のポールが存在していた。

「どうやらヒバリの奴、自分で倒して解毒したようだな」

リボーンの予想に、チェルベッロは否定する。

「あ、ありえない・・・」

「デスヒーターは野生の象ですら歩行不能となる猛毒・・・」

「束縛を嫌う、ヒバリの意地の力だ。だからこそあいつは・・・

何者にも捕らわれることなく、独自の立場からファミリーを守る、孤高の浮き雲！！」

リボーンの話にバジルは待ったをかける。

「確かに・・・しかし、敵の守護者は二人、幾らヒバリ殿が強くても・・・」

「まあ待て。本物の守護者達は使命だけでなく、関係性も天候に酷似しているんだぞ。

雲は時に他の天候の契機となり、嵐を巻き起こすことがある」

同時刻、雷のフィールドには、レヴィが凄まじい形相でもう一人の雷の守護者を探していた。

「おのれ牛ガキ、何処へいった？
焼け死んだか・・・？」

「ゴホ・・・ゴホ・・・」

「（ニヤリ）」

雷のポールが倒れたことによる粉塵で咳き込むランボの声がレヴィに聞こえてしまう。

レヴィは標的を目視すると、一目散に走り出した。

「いまミンチにしてやるぞ！！その忌々しい才能と共に！！」

「ランボ殿！！」

バジルの悲痛な声に、

「待ちな」

シュッ

ドガンッ

「ぬおっ」

一人の男が応えた。

レヴィの行く手を遮るように飛んできたモノ。それは・・・

「なっ、なんだ・・・？
・・・！！」

ダイナマイトを両手に構えた・・・

「てめーの相手はオレだ」

嵐の守護者、獄寺隼人だった。

「ハヤト・・・！」

「！！」

「言っただろ？雲は嵐を巻き起こす」

驚くシャマルとバジルにリボーンがニヤリと笑う。

「え・・・っ！！

そうか、ヒバリ殿は嵐のリングを、獄寺殿に弾いたんだ！」

そう、雲雀が弾いたリングはＸＡＮＸＵＳが先ほど開けた穴から獄寺の下へと飛んでいったのだ。

チャキッ

ス・・・

そして、モニターの向こうには、それぞれの獲物を構える二人の守護者の姿があった。

「始めようか、天才君」

「大空戦で余計な雑音は立てさせねぇ」

その様子をモニター越しに見たＸＡＮＸＵＳは、苛立つように呟く。

「フン、意気がりやがって。うっとうしいカス共が」

「おい」

「！」

「オレとの戦いに集中しろ」

そして頼れる仲間達の復活もあって、再びツナとＸＡＮＸＵＳ、大空の戦いが始まろうとしていた。

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　門外顧問

「まったく・・・９代目のチャーター機が見つかってよかった」

ヴァリアーによって押収されていたチャーター機を見つけ出した門外顧問一行は、「すぐに日本に戻るぞ」との家光の指令にもあって直ぐ様手続きを取ったあとイタリアを発った。

機内には親方様こと沢田家光、秘書のオレガノ、護衛のターメリック、そしてなり損ないと自負するアルコバレーノのラル・ミルチが搭乗していた。

因みに家光の影をしていたモレッティは、イタリアに残って引き続き影としての仕事を家光が頼み、今はいない。

「親方様、やはり・・・」

オレガノは向かいに座る家光に話を切り出す。

「いや、ダメだ。言ったはずだ、お前にはもう・・・」

「!!・・・分かってます、ですが・・・」

渋るオレガノに家光は「はぁ～～～・・・」と深い溜め息をつき、
頭をがしがしと掻きむしると、

「あいつと同じで強情だな、全く・・・どうせ言っても聞かんのだろ？」

「っ・・・すみません」

肩を落とすオレガノ。
すると、小さな影がひょこり現れる。

「全くだ、いらんところまで似て、お前は・・・」

「・・・ごめんなさいね、ラル・ミルチ。あなたには・・・」

「今更だぞ、“オレガノ”。それに教官としての血が騒いだだけだ」

プイッと顔を背けるラルに、オレガノは「（相変わらずね）」と内心喜んだ。

「ま、辛気くせぇ話はあと、あと。とにかくだ・・・」

オレガノに家光はニッと笑いかける。

「まっ、全部終わったら、いいんじゃないのか?ってことだ」

「家光・・・」

「なっ、親方様、本気ですか!?いくら私から言い出したとはいえ・・・」

呆れ返るラル、ゆったりと腰掛けながら気楽そうに言う家光に、オレガノは驚いて待ったをかける。

家光が口を開きかけたその時、ターメリックが到着の知らせが入った。

「親方様・・・まもなくです」

「!!・・・ああ、皆、気を引き締めていくぞ」

「「「はい!!」」」

門外顧問もまた、戦いの終着へと赴いていく・・・

「・・・オレも本当は会わせてやりてーって思ってたんだな。全く、“親方様”としては失格だな」

部下の慌ただしい作業を見ながら、そう溜め息混じりに呟く家光だったが、その顔は誇らしげだった。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　超ツナ

・・・ヒバリさんと獄寺君のおかげで敵の守護者の心配は無くなったが、ＸＡＮＸＵＳの憤怒の炎はやはり凄まじい。

「くっ・・・」

いくら炎を一点に集中したオレの炎でも、ＸＡＮＸＵＳの不規則な加速と回避には超直感で分かっていても、体がついていかない・・・

ガキイッ！！

しかも、拳が決まったと思えば、片方の銃で止められ・・・

キュオオオ・・・

ドドドンッ！！！

もう片方の銃口が放たれ、オレは避けるため再び距離をとる。

・・・スピードとパワーが徐々に増してるのは気のせいか？

「フッ・・・」

速いっ!!?

避けきれ・・・

「がっ!」

ドゴオッ

不味い・・・このままじゃ・・・

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

ったく、ヒバリの奴、オレに貸し作って、どーいうつもりだ・・・
と、言いてぇところだが、今は。

オレと対峙している男・・・向こうの雷の野郎はここで倒すために、
オレは策を練っていた。

「貴様は嵐の爆弾男！邪魔立てするなら消すまでだ」

そんなほざいたことを抜かすコイツは、確かに電気傘を使ってたな・
・・？

・・・ならっ。

「ハッ、雷電も出てねーのに、どーやって消すんだ？
あの電気傘の技さえ来なけりゃ、てめーなんぞ怖かねーぜ」

すると奴は得意そうに言った。

「ぬ・・・？
ふふ、そうか・・・バカめぬかったな」

・・・掛かったぜ。

「雨天時にしか出せないような技で、ヴァリアーの幹部にまでなれると思うか!!

レヴィ・ポルタは!!」

そして奴は肩に背負う六本の電気傘手を掛け、

「全天候技だ!!!」

ドシュッ!!

宙に展開した。

「・・・だろーな」

「なに!?」

簡単な挑発に乗りやがって。

オレは“例のボム”に火を点けると・・・

ヂヂ・・・

「待ってたぜ・・・てめーの電気傘が全部開く、この時を!!」

ドシュウウ・・・

展開した電気傘の全てにロケットボムを打ち出し、

ドガガガガガガッ！！！

・・・全て撃ち落とした。

「パ、電気傘（パラボラ）が！！？」

「てめーと遊んでるヒマはねーんだ」

ヂヂヂ・・・

「果てろ」

だめ押しだっ！！

ドシュウウッ！！

「ぬ、ぬおおお！！！」

ドガガガガ！！！

奴に着弾したことを確認したオレは、急いで雷のリングを回収、さっきから気に掛けていたその場所に走ると・・・

「ゴホ・・・ゴホ・・・」

「しっかりしろ、アホ牛」

急いで外れた酸素ボンベをつけ、

「雷のリングは・・・お前のもんだぜ」

カチッ　プシュッ

「（スヤ・・・）」

腕の装置にリングを嵌め込んだ。

・・・これで毒は中和されたはずだ。

「・・・・・・」

・・・早く他の連中も助けねーと！

空を見上げると、１０代目とＸＡＮＸＵＳの凄まじい空中戦が繰り広げられていた。

ついさっきまでのことを思い出し、オレはランボを連れて駆け出した。

「・・・１０代目の手を守護者のことで煩わせられっかよ！！
こいつはオレの仕事だ！！」

楓香さんのことが一番気にかかるが、手を出しちまえば失格・・・畜生、なんつールールだ。

とにかく、急いで他の守護者を集めねーと話にならねぇ。

あのヒバリが自力で脱出しやがったんだ、もしや楓香さんも・・・

・・・どうか無事でいてください、楓香さんっ！！

―――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　雲雀

「オレもおまえ知ってるよ、エース君だろ？」

「ちがう、一文字もあってないよ」

僕は風紀を乱す君たちを咬み殺しに来ただけ。

“天才”と呼ばれていた目の前の男は何故か笑っていた。

「・・・しし、変な奴・・・

でも何だか一気に」

すると彼は無数のナイフを宙に舞わせて、

「楽しくなってきちゃった」

周囲に浮かばせた。

・・・面白いことするね。

僕はトンファーを構えながら言った。

「ふうん・・・曲芸でもするのかい？
足ケガしてる分のハンデをあげようか」

もっとも、あげるつもりはないけど。

「ごケッコー、だってお前も足引きずってん・・・」

だって今、僕は・・・

「じゃん」

機嫌が悪いんだ。

互いに踏み切った僕達の噛み殺し合いが始まる。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　バジル

さすが獄寺殿です。ランボ殿も無事のようですし、安心しました。

そして今、モニター越しの、ヒバリ殿の戦いも始まりました・・・

ビュッ！！

「数を撃っても意味ないよ」

ガキィンッ！！

殺到するナイフを次々とトンファーで打ち落としていくヒバリ殿。
そのナイフは校舎に突き刺さっていく。

しかし・・・

ブシャッ

「！？」

次の瞬間、不自然な切傷が、ヒバリ殿を襲う。

「あの切れ方、やはりワイヤー！？」

まさか・・・！？

「あいつ、ベルフェゴールがナイフとワイヤー使いって事、知らねーんじゃねーか？」

Ｄｒ．シャマルの呟き通り、ヒバリ殿は迫り来るナイフを打ち落としはするが・・・

「まずいっ！もがけばもがくほど、ワイヤーが切り刻む！！」

ベルフェゴールのワイヤーによって複数の傷をつけられたヒバリ殿は、遂にトンファーを取り落とし・・・

カラン・・・カラン・・・

どさっ・・・

地面に座りこんでしまった。

「！！」

「ヒバリ殿！」

「ししししっ、天才の勝ちー。
つーかオレ、負けなし？そりゃ王子だもんな」

そしてベルフェゴールはナイフを取り出すと・・・

「バイバイ」

ヒバリ殿へと・・・

「（フッ・・・）」

パシッ!!

しかしナイフは全て、ヒバリ殿の手に捕まれていた。

「!」

「う・・・」

「受け止めた!!」

それだけじゃない。

「へぇ、なるほど、ナイフに糸がついてたんだ。まるで弱い動物が生き延びるための知恵だね」

ヒバリ殿はそのごとに薄々気づいていたようだ、実際よく見るとヒバリ殿の傷は殆ど浅く、戦いに支障は無さそうだ。

そしてヒバリ殿は再びトンファーを手に取り、立ち上がると・・・

「そういうことなら・・・」

ジャラララ・・・

トンファーの先から鎖と玉鎖が飛び出し、

「一本残らず撃ち落とせばいいね」

ヒュン　ヒュン　ヒュン

全てのワイヤーを断ち切った。

・・・嵐戦の時にも見たが、やはりあのトンファーにはいろいろな

仕掛けが施されているらしい。

「や、やっべ・・・」

「覚悟はいいかい」

「っと、パスいち！」

「！？」

ヒバリ殿の攻撃を避けたベルフェゴールは焦りながらもヒバリ殿に言った。

「自分の血（ち）ー見て本気になんのも悪くないけど、今は記憶飛ばしてる場合じゃないからさ。
だってこれ集団戦だぜ？他のリング取りに行こっと」

・・・確かに、奴の言うことにも一律ある。

「それに、それだけダメージ与えれば勝ちみたいなもんだしな。
バイビ」

去り際にナイフを投げつけ、それを弾くヒバリ殿。
だが、深追いせずにいた。

「口ほどにもないな」

そう言ってヒバリ殿は、ベルフェゴールとは逆の、雨のフィールドへと向かおうとしていた。

その時、沢田殿と対峙していたＸＡＮＸＵＳが・・・

「おいおい嘘だろ？もう精一杯か？」

コオオオオ・・・

――怒りの爆発（スコッピオ・ディーラ）！！！――

ドドドドド！！！

「連射！？」

沢田殿へと・・・

ドゴオッ！！！！

凄まじい攻撃を放っていた。

標的７５　【吹き荒れる天候　来る！】（後書き）

まだまだつづく大空戦。ようやくあの技が・・・

標的７６　【新技　来る！】

標的７６　【新技　来る！】

「おいおい嘘だろ？もう精一杯か？」

キュオオオ・・・

そう吐き捨てたＸＡＮＸＵＳは、銃弾に“憤怒の炎”をありったけ込め・・・

――怒りの暴発（スコッピオ・ディーラ）！！！！――

ドドドドド！！！！！！

「連射！？」

バジルの言う通り、複数の弾丸が合わさったその一撃は・・・

ドドウッ！！！

「直撃！」

「沢田殿！！」

シャマルとバジルの叫びも虚しく、ツナを地面に叩き落とした。

「実力の差がこれほどとは・・・　今の一撃、かなりやばいぜ・・・コラ」

「直撃を凌いだだけでも、
ラッキーとしなきゃな」

「リボーンさん、凌いだとは・・・？」

「装備に救われたか」

そう呟くＸＡＮＸＵＳの目先には、抉れた地面から再び立ち上がろうとするツナの姿があった。

「レオンが服にしたおまけのおかげで、助かったようだな。
・・・もっとも、これも楓香の提案でツナのベストだけ１０倍の厚みにしたんだがな」

「なるほど・・・だが、お前のレオンは今はマユ状態だぜ、コラ。
・・・いつの間に仕込んだんだ？」

コロネロの質問に、バジルが代わりに答える。

「それは拙者から。
・・・実はあの戦闘服は、随分前にこの戦いを予期した楓香殿の提案によって、用意されていたものなんです」

「もっとも、完成したのは昨日だがな」

「・・・予期？どういうことだ、コラ」

「あの楓香ちゃんがか？」

コロネロ、シャマルは、楓香が“予期した”というところに反応する。

「その件に関しては、オレも憶測でしか分からねぇ。
・・・まあ、今は、だ」

「・・・？ああ、そうだな」

「だが、今のでそのベストも吹き飛んだぞ、。しかもＸＡＮＸＵＳはまだ余裕だぜ、コラ！」

返ってきたのはリボーンの含みのある返答だったが、シャマルとコロネロは再び状況が変わったモニターを見やる。

「それはツナが一番分かってるはずだぞ」

「！！沢田の奴、何をする気だ、コラ」

「ツナの奴・・・あれをぶちかます気だ」

モニターに映るツナは、荒い息を整え、指でダイヤをつくるような構えをとると、

ス・・・・・・

フッ

ボウッ！！

一気に炎を放出し始めた。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

オレは修業の第三段階で編み出した“技”が奴に勝つ勝機とみて、炎を一気に放出した。

「フハハハ！勝ち目がないと見て、ヤケになったか」

ＸＡＮＸＵＳの高笑いを他所に、オレは炎に変化を加える。

・・・正直な所、相当辛い。

未だに不安定なこの技では奴に勝つことは出来ない。

・・・なんとか、この戦いでマスターして見せる！！

そして、炎は。

ヒュオオオオ・・・

ボウッ！ボウッ！ボウッ！ボウッ！ボウッ！

瞬き始める。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　リボーン

ツナの、あのノッキングするような炎は・・・

「ちがう・・・沢田殿はやる気だ！」

「ああ」

だが・・・ＸＡＮＸＵＳの様子がおかしい。

「あの炎・・・まさか!?
死ぬ気の・・・零地点突破!!」

「・・・なんであいつが知ってんだ?」

それに焦っているように見える・・・まさか、な。

「させねえ!」

そう叫んでツナに猛攻を仕掛けるＸＡＮＸＵＳ。
これじゃあ、零地点突破すら・・・

―――――――――――――――――――――

フィールドの暗闇の中、ＸＡＮＸＵＳの猛攻をモニターで確認する

少女はそれを横目に、筒状の生体ポットを覗き見る。
それを傍目で見ていたレイは、内心舌打ちする。

「（“彼女”はこの作戦に不可欠ですが、危険人物には間違いない・・・その時は・・・）」

一方、その少女はモニターに映るツナの、炎の瞬きを見て呟く。

「零地点突破を習得するとは、想定外だったわね。
まったく、いらぬ置き土産をしてくれたものね、ジョットは」

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

アホ牛を抱え、オレは一番近い晴の守護者フィールド・・・芝生頭のところへと向かって廊下をひた走っていたが・・・

「ん・・・なんだ、あれは・・・？」

不意に目に入った黒い天幕。
あれは・・・

「闇のフィールド・・・！」

だが、今は手は出せねぇんだ・・・っ！
とにかく、今は晴のフィールド！

「急がねぇーと！！」

三階廊下を走っていたその時。

ドゴオォォォ！！！

運動場の方から・・・！

「１０代目！！？」

まさか、奴に！？

だが・・・

「くっ・・・すみません、１０代目・・・」

今のオレじゃあ１０代目の足手まといになるだけだ・・・

だからこそ、オレは・・・

「オレの仕事をさっさと済ませねーと！」

ダッ

それまで待っていてください・・・！

―――――――――――――――――――――――――

ドゴオォォォォォ！！！

「沢田殿！！」

シュウウゥゥゥゥ・・・

ツナのノッキングする炎の変化を恐れたＸＡＮＸＵＳの猛攻を受け、ツナは死ぬ気の炎も消え、グッタリと地面に倒れていた。

その痛々しい姿に、観覧席一同は言葉を失った。

そしてＸＡＮＸＵＳは、ツナを見下ろし、

「くだらねーサルマネしやがって」

と荒い息で吐き捨てた。

そして銃に憤怒の炎を収束させていくＸＡＮＸＵＳは、ツナにとどめを刺そうとする。

だがその時・・・

ボオゥッ！！！！　ドオオオオ！！！！！！！！！！

「！」

再びツナの額に死ぬ気の炎が蘇り、死ぬ気の炎を吹き上げて、浮き上がった・・・・！！

「リボーンさん！」

歓喜するバジルに、リボーンが答える。

「ああ、どうやら成功したようだな。

“死ぬ気の零地点突破”！」

再び静かに佇むツナに、ＸＡＮＸＵＳも絶句していた。

標的７６　【新技　来る！】（後書き）

次が終われば、オリジナル展開突入・・・かも？

標的７７　【大空の終戦　来る！】

標的７７　【大空の終戦　来る！】

「どーなってやがる、確かにツナは直撃をくらったはずだぜ、コラ」

「ＸＡＮＸＵＳの憤怒の炎を中和したんだ。死ぬ気の逆の状態になってな」

リボーンの説明にコロネロ達は驚く。

零地点突破とは普段のニュートラルな状態を０地点とし、死ぬ気モードの状態ををプラスとした場合の、逆のマイナスの状態になる境地のこと。

マイナスになることによって、敵の炎を受けても吸収することでダメージをなくすことができる。

ツナのノッキングする炎は、そのタイミングを測っていたとのこと。

だが、ＸＡＮＸＵＳは不敵な笑みを浮かべ・・・

「それが初代が使ったという、零地点突破か」

「そうだ」

「ぷふ・・・ぶっはははは!!!こいつぁケッサクだぁ!!!」

ツナの返答に突然笑い出した。

「!?」

「誰に吹き込まれたかは知らんが、零地点突破はそんな技ではない!!!」

「!!」

自信満々にそう言いきったＸＡＮＸＵＳは、更に続ける。

「腐ってもボンゴレの奥義だぜ、使い手がそれほどダメージを受ける、チャチな技なわけねーだろ!!」

「知ったような口を!!」

「・・・確かに、奴の言う通りだな」

「!!」

「実際、ツナはＸＡＮＸＵＳの炎を吸収仕切れずに摩耗している。
それに、たとえ修業が成功していたとしても、初代が編み出した

零地点突破とは別物になる可能性が高かったからな・・・」

「そんなっ!!沢田殿は何のために・・・何のために血の滲むような修業を!!」

リボーンの言葉に、バジルは憤りを隠せない。
この凡そ一週間、ともに辛い修業を切り抜けてきた者として、そうならずにはいられない。

しかし・・・

「しっかり狙えよ・・・」

「!!」

「次は上手く・・・やってみせる」

スッ・・・と静かにツナは今までとは違う構えをとった。

「あの構えは・・・」

「ブラッド・オブ・ボンゴレ・・・ツナの超直感が何かを掴んだな」

そしてツナの炎が再び変化をみせる。

「零地点突破・・・“改”」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　？？？

白い空間に突然現れた、仮想フィールドの建物は既に原型をとどめておらず・・・

ドゴッ

「くっ・・・このっ！！」

ガギギッ！！！

「燕返し（笑）」

「危ねっ！！ちょっ、危ないだろ、神（向こう見ず）！！

つーか、（笑）ってなんだよ、燕返し舐めんなよっ！！」

「ムダ口を叩けるほどに育てたのは誰じゃ？」

「その件についてはどうもっ！（いくぜ！）」

チャキッ！

――偽・時雨蒼燕流・・・攻式零の型・繋――

木刀と見た目をとる獲物（それ）を腰の位置で構え、少年は見た目老人な神（めんどい）・・・に向かって抜刀の横の一閃を・・・

――細雨（こまあめ）――

シュガガガガ！！！！

縦に横、複数の斬撃に変化させ、神に放った。

「むほっ！？」

神はその外見に似合わない機敏な動きで、回避していくが――

――地雨（じあめ）――

不規則なモノから、全て等しく統一されたモノに変化した斬撃は、
弾数を隠すように重なり・・・

ズガァァァッ！！！！

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

・・・・・・・・・・・・

「・・・・・・・・・」

ハラリ・・・・・・・・

「・・・合格じゃ」

佇む神の右袖には、大きな斬り込みが入っていた。

―――――――――――――――――――――――――

大空戦・・・大空のリングを掛けた戦いは、佳境をむかえていた。

「ふっ、まだ零地点突破とぬかしやがるか・・・
本物の零地点突破に、そんな構えはねえ！！」

「またあいつ・・・零地点突破は初代しか使えなかった技、根拠もないクセに！！」

言い切るＸＡＮＸＵＳにバジルは激怒。

「まさか・・・な」

リボーンはそう静かに呟く。
ツナはそれに対し、

「オレはオレの零地点突破を貫くだけだ」

と退かない。
ＸＡＮＸＵＳは嘲笑うかのように、ツナへの猛攻を開始する。

「全く、小賢しいカスだ。二度とその技の名を言えぬよう、かっ消

してやる」

ドウッ！

「次元の差を・・・」

発砲の反動による高速移動で、

ドガッ

「ぐぁっ」

ツナへ急接近し蹴り飛ばし、間髪入れずに、

キュオオオ・・・

「思い知れ！！」

ドドドドド！！！！！

弾丸を浴びせる。

「沢田殿！」

思わず叫ぶバジル。モニターに映るツナは、何とか立ち上がるがＸＡＮＸＵＳの炎を吸収しきれずダメージは大きい。

「何が改だ。話にならんな」

だめ押しとばかりにＸＡＮＸＵＳは・・・

――炎の蕾（ボッチョーロ・ディ・フィアンマ）！！！――

激しく降り注ぐような炎の弾丸に、ツナは追い込まれる！！

「ぐあぁ！！」

「ふはははは！！絶望を味わえ、クソモドキが！！」

だが嵐のような炎の中、危なげながらも立つツナの目に、ＸＡＮＸＵＳは・・・

「（この絶望的状況で、あの面・・・あの目！！同じだ・・・あの時のおいぼれと・・・）」

“すべて分かってるような、目をしやがって！！”

ギリッと奥歯を噛み締めるＸＡＮＸＵＳは、トドメとばかりに最大圧の憤怒の炎を銃に吸収させていく。

“アイツのことなんか、こんなカスどもに分かるわけねぇ！！”

「ふざけやがって！！どいつもこいつも・・・カスの分際で！！」

キュオオオォォォォ！！！！！

そして・・・

「オレに楯突くんじゃねえ！！！」

――決別の一撃（コルポ・ダッティオ）！！！――

ドゴオォォォォォ！！！！！！！！！！

圧倒的な炎弾が、ツナに直撃した・・・

「沢田殿！！」

「・・・・・・」

「ハァ・・・ハァ・・・死期を早めやがって・・・カスが・・・」

荒い息でそう吐くＸＡＮＸＵＳは、ツナの終わりを悟り・・・

ボウッ！

「次はオレの番だ、ＸＡＮＸＵＳ」

背後からの声に目を見開いた。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

プシュッ

「ぐっ・・・ス、スマンなタコ頭（ヘッド）・・・」

「しばらくふらつくぜ」

ようやく晴のフィールドにたどり着いたオレは、芝生頭の解毒剤をかける。

「オレは先に行って他の連中を助けにいく。アホ牛を預かってくれ」

負傷している今のオレじゃあ、こいつを守りながら戦うのは無理だ。

「おう、だったらオレ達のリングももっていけ」

確かに、オレが１０代目に会う方が早いかもな。

「それと、ルッスーリアも助けてやりたいのだが・・」

「なっ」

ベッドごとな敵の守護者を助けたい・・・と。

「ったく、しょーがねーな。１０代目もそうするだろーしな」

芝生頭のリングを受け取ったオレは不本意ながらも敵の守護者に解毒剤のリングを嵌めたあと、急いで他の守護者のフィールドに向かった。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　山本

プシュッ

「ふぅ・・・サンキューヒバリ、助かったぜ」

流石にキツかったぜ・・・

「校内で死なれると風紀が乱れるんだ。死ぬなら外へ行ってもらう」

「アハハ、なんだそりゃ」

ヒバリらしい言葉な♪

トス・・・

と、ヒバリはフラフラと壁の方によろめいた。

「だ、大丈夫なのか、ヒバリ？」

どうやらヒバリも相当やられたらしいな・・・

「・・・何のことだい？」

あ、相変わらずなのな・・・

よし。

「選手交代だ。こっからはオレが引き受けた！」

急いで他の守護者を助けねーとな！

「じゃあ、僕は夜代楓香のところにいくよ」

「なっ、ちょっと待て、ヒバリ！？」

―――――――――――――――――――――――――――

観覧席の皆が驚く中、再び炎を灯し立ち上がるツナに、ＸＡＮＸＵＳは舌打ちする。

ボウッ！

炎の加速で接近するツナに対し、ＸＡＮＸＵＳは銃口を地面に向けて放ち、宙へと逃れる。

「ぐっ！（まだ立てる・・・だと！？んなことあるはずがねぇ！！）」

だが、

シャッ！

「！！？」

ドガッ！

「ＸＡＮＸＵＳのスピードに・・・追いついている！！？」

なんとツナはＸＡＮＸＵＳの速さについていき、蹴り上げて地面に落とす。

観覧席のバジル達もそのことに驚きを隠せない。

「ぬぅっ！！のやろう・・・！！」

そして再びツナへと飛翔するＸＡＮＸＵＳに対し、ツナはＸＡＮＸＵＳとの間に炎の壁を作りＸＡＮＸＵＳを惑わせば・・・

ボワッ！！

「ガハッ！！」

ズゴアァァン！！

背後に廻り、裏手で撃ち落とす！

「ぐっ・・・おのれ！！」

キュォォォオオ！！

砂煙の中、ＸＡＮＸＵＳは銃口を空中に舞うツナへと定め、対してツナは再びあの構えを取り・・・

ドドドドドドドドドドドッッッ！！！！！！！

――炎の連弾（マルテッロ・ディ・フィアンマ）！！！――

炎の連撃・・・それが一塊となったすさまじい一撃を放った！！だが。

ドゴッ！！・・・キィィィィ・・・フッ

ツナに直撃した炎は構えた手の中心に収束されていき・・・

「ふっ！！」

ボウッ！！

「！！？」

すべての炎がツナの手の中に消え、勢いを増した激しく額の炎が放出される。まるで・・・

「あれは！！」

「なるほど・・・それで“改”なんだな」

驚くバジルにリボーンは何か気づいたのか納得したように頷く。

「どーいうことだ、コラ」

「ツナの奴、ＸＡＮＸＵＳの炎を吸収するだけでなく、自分の力に変えてるんだ」

その事実に、ＸＡＮＸＵＳはより怒りを燃やす。

「こんな、ことが・・・こんなことがあるわけねぇ！！」

ＸＡＮＸＵＳの叫びを合図にツナが急接近、右パンチを繰り出しＸＡＮＸＵＳはそれを腕で防ぐが。

ブゥンッ！！

「なっ」

弾くようにして腕を払ったツナは、逆手のパンチがＸＡＮＸＵＳの

顎に入り、

「がはっ！！」

ドガァァァァン！！！！！

校舎へとぶっ飛ばされていった・・・

標的７７　【大空の終戦　来る！】（後書き）

次回、急展開・・・！！

標的７８　【闇の襲来　来る！】（前書き）

今回は短いです、すみません・・・
できれば明日、もう一話うpしたいです・・・

標的７８　【闇の襲来　来る！】

標的７８　【闇の襲来　来る！】

「うぅ・・・」

ガラガラと瓦礫の中から立ち上がるＸＡＮＸＵＳは、怒りの眼差しでツナを捉えた。

「くっ、このオレがまがいモノの零地点突破ごときに・・・あんなカスごときに・・・」

ＸＡＮＸＵＳはより憤怒を焚き付け、そして・・・
その炎・・・いや、ＸＡＮＸＵＳの雰囲気が変わっていく。

「くそが・・・クソがが・・・

・・・この、ド畜生がぁぁっ！！！！」

「！！」

怒声と共に、ＸＡＮＸＵＳの顔にアザのようなものが浮かび上がり、どす黒く変わった憤怒の炎が周囲を取り巻いていく。

「よくもカスの分際で・・・
許さねぇ・・・！！」

キュオオオ・・・

「ぶっ殺す！！！！」

―――――――――――――――――――――――――

観覧席から見えるモニターに映るＸＡＮＸＵＳの豹変に、一同は驚きを隠せないでいた。

「古傷・・・？」

「なんて奴だ・・・ここにきて、更に炎が増幅してやがる」

「奴の実力は底無しか・・・」

バジル、リボーン、コロネロに応えるように、この場にいないはずの、聞き覚えのある呟きが聞こえてくる。

「あれは怒りだぁ・・・」

「！？」

「こ、この声は・・・！！！」

声の方に振り替えると、ディーノ達キャバッローネと・・・

雨戦でサメに喰われたはずの、スクアーロが車椅子で現れた。

「スクアーロ！！！
ディーノ殿、これはいったい・・・」

「ああ、それはな・・・」

ディーノはあの日・・・雨戦終了直後の出来事を皆に話した。

勿論、楓香のことも・・・

「楓香殿が・・・！？」

「ああ・・・理由は聞いてねーが、あいつが助けたのは事実だ。まあ、オレはこいつに何としても聞き出すべきことがあったから・・・だな」

―――――――――――――――――――――――――

砂塵を上げながら、どす黒い炎を周囲に発散するＸＡＮＸＵＳは三度ツナに接近する。

「死にさらせ！！」

ボウッ！！

対し、ツナは冷静に直撃を避け、カウンターでＸＡＮＸＵＳを殴り付ける。

だが・・・

「それが・・・どうした！！」

ツナの一撃に耐えきるように・・・

「うおおおおおお！！！」

雄叫びと共にツナは宙に弾かれる。

「散れ！！！」

ギュオオオオ！！！！！

ドゴオォォォォォォ！！！！！

そのどす黒い弾丸を前に、ツナは零地点突破・改の構えをとるが・・・

「！！」

何かに気づいたように焦りながらも、ツナはその場から急上昇、ＸＡＮＸＵＳの弾丸を避けてしまう。
さっきまでとは威力の違い過ぎるＸＡＮＸＵＳのその炎に気づき吸収しきれないと“超直感”したのだ。

「ぶっ殺す！！！」

ギュォォオオオオ！！！！！！

そしてついに、ＸＡＮＸＵＳは怒り任せに銃に炎を込め・・・

ボボウッ・・・

対してツナは目を閉じ炎の勢いを弱めると、宙に舞い上がった瞬間銃を投げ捨て憤怒の炎を両手に収束させたＸＡＮＸＵＳに・・・
手を組み真っ向勝負を仕掛けた。

「うおおおおおお！！！」

「ぐおおおおおお！！！」

ＸＡＮＸＵＳの憤怒の炎とツナの死ぬ気の炎が拮抗し、輝きを増していく。
そして・・・

カッ！！！

ゴオオオオオオオオオオオン！！！！！

凄まじい爆音と煙とともに、辺りは真っ白に染まった・・・

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

「ハッ・・・ハッ・・・」

くそっ、まずいな・・・血を流し過ぎて目眩がするぜ・・・

「ぐっ・・・」

ガタ・・・

フラフラと校舎に寄りかかるっつー情けねぇ有り様・・・

だが、このことは１０代目にも、他の連中にも伝えなきゃなんねぇ・・・

オレは三つのリングが通っていたはずの鎖を、握り締めて再び足を進めた・・・

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　山本

ドゴオォォォ！！

「うわっ！！」

雨のフィールドから獄寺達のいるフィールドへと急いで向かっていたオレは、間一髪で校舎を突き抜けて飛んできた砲撃を避け、地面に転がって受け身をとった。

「な、なんなんだ、いったい・・・！」

ガラガラガラ・・・

そして瓦礫の中から現れたのは・・・

キュオン　キュオン・・・

「なっ、うそ・・・だろ・・・！？」

「くっくっくっ・・・」

巨大な大男のような影がはっきりしてきたときには、ヒバリが倒したはずのゴーラ・モスカとその後ろからレイ・カーベル。

そして・・・

ガラ・・・

「ふふっ、山本なら避けれると思ってたよ」

「何かの冗談じゃ・・・ねーよな・・・・」

目の前に現れた見覚えのある影は・・・

「何せ・・・

ワタシがかてきょーしたんだから」

痛む傷口をおさえつつ、オレは荒い息でその影を睨み付けた。

そして・・・

「なんで・・・

なんで楓香が敵といるんだ!!?」

静かに微笑む楓香は、まるで人が変わったような目をしていた・・・

―――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ・・・

「・・・くらい、くらいよぉ・・・」

空虚なその世界の中で、小さな少女は今にも壊れそうな雰囲気で踞っていた。

そして、伸ばした手で掴もうとするものは・・・

「たすけて・・・たすけてっ、――――――――!!!」

標的７９　【集う守護者達　来る！】（前書き）

パソコンの不調＋データ消滅というオワタな事実・・・

なんかいろいろすみません―（ー―ー）―

標的７９　【集う守護者達　来る！】

標的７９　【集う守護者達　来る！】

吹き荒れる白煙がグラウンドを覆っていく姿に、観覧席の面々は見入っていた。

現れるのは沢田綱吉か、それともＸＡＮＸＵＳか・・・

「「「・・・・・・！」」」

そして晴れた白煙の中から先に現れたのは・・・

「そんなっ！！」

「当然の結果だ」

バジルの叫びも虚しく、先に現れたのはＸＡＮＸＵＳだった・・・

モニターを見るスクアーロも勝利を確信していた。

だが・・・

勝利の笑みでなく、ＸＡＮＸＵＳは何かに驚いているようだった。

それは・・・

「そう慌てんな、奴の手を見ろ」

「「「・・・！！！」」」

それはリボーンの一言でその疑問は晴れた。

「ＸＡＮＸＵＳの手が・・・凍ってる！！？」

「これは・・・」

そう呟くのは、続いて白煙から現れたツナ。

彼もグローブから上がる冷気に目を見開いて驚いていた。

そして、そのモニターを観覧席から見ていたスクアーロの表情が驚嘆へと豹変する。

「まさか、この現象は・・・

あの時と・・・！！」

「そうか・・・恐らくこれが、初代の編み出した零地点突破」

「「「！！」」」

リボーンの答えに、観覧席の一同はざわめく。

それは、ツナ達が求めていた、初代の技だったのだ・・・！

「そんな・・・バカな・・・」

自分の氷の閉ざされた手を、固まったように見ていたＸＡＮＸＵＳが声を漏らす。

「なぜだ！！ありえん！！
お前みてぇなカスに、ボンゴレの奥義など・・・！！」

錯乱するようにそう吐くＸＡＮＸＵＳに、ツナはある真実を叩き出す。

「そのキズ・・・
お前が前にも、全身に零地点突破を受けた証拠」

「！！！」

それはツナの持つ“超直感（ブラッド・オブ・ボンゴレ）”からきた答えかもしれない。
だがこれだけは分かっていた。

「もうお前の拳に炎が灯されることはない・・・
お前の負けだ、ＸＡＮＸＵＳ」

その“零地点突破”が、どんなモノかは・・・

だが、そこで諦めるＸＡＮＸＵＳではない。

「・・・何を言い出すかと思えば・・・っ、
ふざけやがって！！！！」

バキァッ！！

「これごときで！！」

必死の形相で手の氷を叩き割ろうとする。
だが・・・

「やめておけ、ＸＡＮＸＵＳ・・・
９代目につけられたその傷ではすまないぞ」

「！！！」

諭すように言うツナに、ＸＡＮＸＵＳは明らかな動揺をみせる。

それは、ツナの零地点突破に怖じ気づいたわけではなく・・・
その９代目に重なって見える、その大空のような瞳に気圧されていたのだ・・・！

だが、それを発散させるかのように怒鳴り散らすＸＡＮＸＵＳ。

「だまれ！！　オレは名に一Ｘ（１０）の称号を二つ持つ男、ＸＡＮＸＵＳ！！！

てめーごときに屈すると思うか！！勝つのはオレだ！！

ボンゴレの１０代目は・・・このオレだ！！！」

ボボッ

半分壊れた氷から炎を出しながら接近するＸＡＮＸＵＳに、ツナは静かに炎をノッキングさせると・・・

ゴスッ

「ぐあ〝っ」

拳をＸＡＮＸＵＳの懐に一撃、そして・・・

「うぐ・・・！！」

膝をつくＸＡＮＸＵＳが見たのは、

「いくぞ・・・」

“２７”と甲に記された手袋をした、ノーマル状態のツナだった。

そして。

シュウウウウ・・・

その手袋は、Ｘグローブへと変わり・・・

――――零地点突破・初代（ファースト）エディション――――

ツナの最後の一撃が、ＸＡＮＸＵＳを捕らえた瞬間だった・・・

――――――――――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

「ぐおぉ！！」

肩を捕らえたオレの両手から、凄まじい冷気が押し寄せＸＡＮＸＵＳを凍らしていく。

だが、このような状況でも、ＸＡＮＸＵＳの瞳の怒りは変わらなかった。

「なぜだ・・・なんでお前は・・・」

「うるせぇ！！老いぼれと同じことをほざくな！！

知ったような口を・・・オレと・・・“千雨”のことも・・・！

！」

９代目・・・？

“ちさめ”・・・？

そして・・・ＸＡＮＸＵＳはそう言い残して・・・

ピキィィィィィィィィ！！！

氷の監獄に、閉じ込められたのだった・・・

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ディーノ

モニターの向こうでは、ツナが大空のハーフボンゴレリング二つを一つに嵌めていた。

そして、

「・・・もう、この氷が溶けることはない」

「「！！」」

ツナの一言に、観覧席一同は驚く。
それが示しているのは・・・

「あの氷は死ぬ気の炎と逆の力をもった、負の圧縮エネルギーみてーだな」

「リボーンさん！！では、この勝負は・・・！」

「ああ、ツナの勝ちだ」（ニッ

この大空戦の勝者が、沢田綱吉であることだった。

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　リボーン

ツナの“零地点突破・初代エディション”で凍ったＸＡＮＸＵＳ。
そして、ツナの“超直感”によって導き出されたことは・・・

「や・・・やった！！」

「ＸＡＮＸＵＳは・・・冷凍仮死状態か、コラ」

「ああ。おそらく・・・
“揺りかご”の後、８年間眠っていたのと同じようにな」

「「！！」」

「なるほど・・・これで話がつながるな、コラ」

９代目が初代と同じ“零地点突破”を使えていた事実。
ＸＡＮＸＵＳはおそらく、９代目に・・・

「さあ、話してもらうぞ、スクアーロ。
８年前の揺りかごであったことを・・・」
「お前らの想像通りだ。９代目に奴は凍らされた、
・・・それだけだぁ」

やはり、な。
どーやらディーノもスクアーロが“揺りかご”の、その真実を知っていると、確信していたようだ。

いつまで経ってもへなちょこだが、オレの生徒だっただけのことはあるな。

だが・・・

「（そのＸＡＮＸＵＳが今、再び現れたのは・・・９代目の零地点突破から逃れたってのは、どーいうことだ？）」

そしてその疑問は。

「おっと、ごくろーさん♪」

「「「！！？」」」

「ふう・・・か・・・？」

・・・闇の守護者の来襲によって、明かされることになる。

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　山本

くっ・・・脇腹が熱っぽい。
さっき避けたとき、また傷口が開いちまったか・・・

だが、そんなことを気にしていちゃあ、目の前の奴らには勝ち目はねぇ。

そもそも・・・

「っ・・・何故なんだ、楓香！」

「ふふ・・・」

問いかけても不敵に笑うだけの風化。
様子もどこかおかしい。

オレは“時雨金時”を正面に構え、敵の闇の守護者、レイにも警戒する。

だが・・・

「今のを避けましたか・・・」

「まあ目的は果たしたんだ、早く終わらせない？」

「なっ、いつの間に!!?」

感心するレイに、右手に持ったあるものを掲げた楓香。
それは・・・

「雨のリングが!!」

雨のリングとヒバリから預かっていた、雲のリングだった・・・

標的７９　【集う守護者達　来る！】（後書き）

この先どうなるのやら・・・ですね

標的８０　【闇の来襲　来る！】

標的８０　【闇の来襲　来る！】

・・・明らかに楓香の様子がおかしい。
戦いの終わった大空のフィールド内に現れた楓香に対して、ツナはそう確信した。

「おっと、ごくろーさん♪」

「っ、楓香・・・」

先の戦いで見せた髪や目に変化はない・・・
だが、疲労から膝をつくツナに手を貸すでもなく、楓香はＸＡＮＸＵＳに近づいていく。・・・既にＸＡＮＸＵＳはツナの零地点突破・初代（ファーストエディション）で封じられ、溶けることのない氷の世界に閉じ込められているにもかかわらず。

「何をする気だ、楓香？ＸＡＮＸＵＳはすでに眠りについている、これ以上は・・・」

「ああ、そーいうのじゃないから」

そう言い残し、楓香が向けた視線の先には・・・

「しししっ、まさかお前がガキらを裏切るなんてな♪」

「どーいうつもりか知らないけど、ボクは利用させてもらうだけだよ」

ベルフェゴールとマーモン、そして・・・

「うう・・・」

手首を縛られ、デスヒーターにより憔悴しているクローム髑髏の姿がそこにあった。

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

楓香が・・・敵？

衝撃的な事に、思考が停止しそうになる。

だが・・・

（・・・何かがおかしい？）

超モードのより鋭敏になった“超直感”が、その考えを否定していた。

とにかく、一番に考えなければならないのはクロームの救出、そして・・・

「ししし・・・リングコンプしたし、さっさと始めよーぜ」

「ムム・・・言われなくたって分かってるよ」

「リング・・・！！」

ＸＡＮＸＵＳ側に渡ってしまったリング・・・山本達の、最悪の状況が頭を過(よぎ)った。

ブンッ！

「よそ見はいけないな」

「！！」

そして目の前には、いつの間にか握られていた、黒い炎で形作られた禍々しい大鎌を振り上げる楓香が・・・！！

避けるには間に合わない！！

その時。

「ツナ！！」

「１０代目！！伏せてください！！」

「！！」

ドゴオォォォン！！

山本、獄寺君の声と共に、爆風が楓香の一撃を妨げた・・・

Ｓｉｄｅ　山本

見たことのない、黒い炎で形作られた大鎌を構える楓香。
・・・楓香が元々持っていた武器はヒバリが持っているはず。そして今の楓香が持っているのは、実体をもっていないかのようにユラユラと・・・いや、おそらく闇の炎自体なんだろな。

それに２対１・・・いや、３対１か。
リング取られちまったし、取り返す方法も、今のオレじゃあこいつらから逃げ切る自信もねぇ。

「さようなら」

振り上げられた大鎌を避ける術はなくて・・・

「すまねぇ・・・ツナ・・・」

そして・・・

――――極限太陽（マキシマム・キャノン）！！！！――――

――――３倍ボム！！！！――――

「山本！大丈夫か！！！！？」

「はぁ、はぁ・・・ぐっ
野球バカ、生きてるか！？」

「タコ頭、無理をするな」

「うっせー、これくらいでヘコタレてたら、１０代目の右腕がつとまらねーんだよ！」

「お前ら・・・」

頼もしい仲間達が、そこにいた・・・！

Ｓｉｄｅ　獄寺

間一髪ってことか。
山本を狙っての一撃、あれはぜってーいつもの楓香さんじゃねぇ。
しかも復讐者に捕らわれたはずが突然現れ、敵側についている・・・
オレは躊躇することなく、ボムを放った。

ドゴオォォン!!

「山本!大丈夫か!!!?」

「はぁ、はぁ・・・ぐっ
野球バカ、生きてるか!?」

合流した芝生頭の攻撃に合わせて飛ばしたボムは狙い通りの場所に命中したが、さすがに体力も削られふらつくぜ・・・

「タコ頭、無理をするな！」

「うっせー、これくらいでヘコタレてたら、１０代目の右腕がつとまらねーんだよ！」

「お前ら・・・」

どーやら山本は無事のようだし、あのレイっつー男や楓香さんは・・・！？

「な、いねぇ！？」

「ははっ、逃げられちまったな・・・」

「だが、山本が無事なだけいいではないか」

暢気なこと言ってんじゃねーって返したいところだが、今の負傷したオレ達じゃあ苦戦しちまうだろーからな・・・

「ただ、リング取られちまったのはマズいな・・・」

「ああ・・・だが、奪われたリングの分、オレ達は無事だぜ」

「おう、ランボもこの通り、大丈夫だぞ」

「まあ、今はオレ達と一緒にいるとそれだけ危険だが、保健室や校舎内も危険だからな・・・バカの癖に考えたな、芝生」

「なぬ!!ただのバカではないぞ!!ボクシングバカだ!!!」（ガオオッ!!）

「うるっせーぞ、芝生!!」

「ははっ、まあまあ。先輩は元気なのな」

ったく、バカ二人相手にしてっと疲れるぜ・・・

だが、山本、ヒバリが無事ってことは、残る守護者は後一人・・・

「ちっ、まあいい。つーことは、あと一人は・・・!!」

「あと一人・・・霧のあの娘か!」

「なぬっ!!体育館ではないか!!?」

「てめーら、急ぐぞ!!」

「「おう!!」」

骸のってところは癪だが、あいつも守護者だ・・・

急いで助けねーと、１０代目に顔向けできねーぜ!!

―――――――――――――――――――――

楓香がツナを攻撃しようとした映像に、観覧席は唖然となる。

「そんな・・・まさか楓香殿が沢田殿を・・・！」

「落ちつけバジル。・・・どーやらオレの感じていた違和感は合っていたようだな」

「違和感？」

シャマルの問いに、リボーンが冷静に応える。

「たしかに表面上は楓香そのものだ。
だが、意識が完全に２ｎｄ（セカンド）モードの“負の意識”・・・それも、対象がＸＡＮＸＵＳでない、何者かになってやがる」

「２ｎｄ（セカンド）モード・・・！！しかし、何故そうだと・・・」

「バジル、楓香の手をよく見てみろ。今のあいつは素手（すで）だ」

「・・・ああっ！！」

バジルは思い出す。

――オレは手から直接死ぬ気の炎を灯すことができる。だが、それは２ｎｄ（セカンド）モードだけだ――

「楓香の話が正しければ、今のあいつは２ｎｄ（セカンド）モードってことになる。もしくは・・・」

「・・・？」

「いや、なんでもねぇ。（その２ｎｄ（セカンド）モードですらない可能性もあるが、今はまだそう判断できねぇ）とにかく・・・」

モニターには氷に閉ざされたＸＡＮＸＵＳに近づくマーモン。

「さあ、ボスが次期ボンゴレの後継者になるための儀式がととのったよ」

「ムダだ・・・ＸＡＮＸＵＳは眠りについた・・・」

「いや、ボスは再び復活する」

マーモンの手に握られた、守護者達のボンゴレリング。

明らかに何かをやらかす様子に、リボーンは続けた。

「何が起こったとしても、オレ達は手が出せねぇ。厄介なことになっちまったな・・・」

リボーンは、マユになり未だ変わらず眠り続けるレオンをチラリと見やった・・・

標的８０　【闇の来襲　来る！】（後書き）

ヒバリさん、何処いった？ｗ

標的８１　【ブラッド・オブ・ボンゴレ　来る！】（前書き）

ＲＥＢＯＲＮ！のＯＳＴを聞きながら書いていました。
やっぱり捗ります（笑）

相変わらずの亀更新ですが、どうぞ。

標的８１　【ブラッド・オブ・ボンゴレ　来る！】

標的８１　【ブラッド・オブ・ボンゴレ　来る！】

「なぜ　リングを半分づつ保管するのか・・・そしてボンゴレの正統後継者にしか授与されないのかわかるかい？
それはリング自身にも秘められた力があるからさ」

マーモンは続ける。

「ボスにかけられた9代目の零地点突破が溶かされた床には、７つの小さな焦げ跡が残っていたという・・・」

「！！（７つの・・・焦げ跡？）」

マーモンの手中にある、嵐・雨・雷・雲・霧・晴のリング。
そして・・・

「誰がやったかはさだかではないがこの形跡は一つの事実をさす」

「・・・・・・！」

ツナはその変化に気づき、握りこぶしを持ち上げる。
開いた手の中の大空のリングから、ボウッと炎が灯り出す。

つまり、７つの焦げ跡の残り一つは、大空のリング。

「思ったとおりだ」

マーモンの両手の中にあったリングも同じように炎を上げる。

「見るがいいさ」

マーモンはその炎を“零地点突破・初代エディション”で凍ったＸＡＮＸＵＳに近づける・・・・と。

ジュウウゥゥゥ・・・

「・・・！」

「零地点突破の氷が・・・溶けていく！！」

観覧席も溶けるはずがなかった“氷”が溶けるという現象に驚きを隠せないでいた。

マーモンはさらに続ける。

「これだけではないよ。７つの完全なるボンゴレリングが継承され時、リングは大いなる力を新たなるブラッド・オブ・ボンゴレに

授けるといわれている」

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　家光

思えば、この戦いは序章から不可思議な点が多すぎた。

俺達、門外顧問・・・いや、俺がＸＡＮＸＵＳを何者かによって放たれたことを聞いたのは１０日前。

ツナが９代目の指令で――おそらくそれも今回の黒幕である者の仕業だろうが――復讐者（ヴィンディチェ）の牢獄から脱獄した骸を倒したとの朗報を聞き、俺は裏に何かあると感じ楓香（あいつ）を日本に送り出した。

何者かによって一時的に奪われたハーフボンゴレリング・・・管理を任せていた部下は今も昏睡中だ。

“黒の炎を操る何者か”に襲われたという証言を残して・・・

「・・・親方様、着きました。急ぎましょう」

「ああ、わかった」

８年前から俺の秘書として門外顧問にいるオレガノ。

全てはあの事件から始まっているのだということを、今更ながら気づかされていた・・・

―――――――――――――――――――――――

ツナはマーモンの“ブラッド・オブ・ボンゴレ”という言葉に反応する。

「！

ボンゴレの・・・血に・・・？」

ＸＡＮＸＵＳとの闘いの疲労から、ようやく顔を持ち上げるツナ。

しかし、その手のひらに乗った大空のリングが、突然キンッと音をたてて弾かれてしまう。

「返してもらうぜ」

弾かれたリングが炎を出し続けたまま、ベルフェゴールの足元に落ちる。

「なっ、てめっ！！ナイフ野郎！！」

「おっと、動かないでよ」

「くっ、楓香さん・・・！なぜ！！？」

獄寺達はそのベルフェゴールに近づこうとするが、ベルフェゴールに代わってクロームに闇の炎の大鎌を突きつける楓香に遮られる。

「だいたい、これは正統後継者のリングだし」

歯をむき出しにして笑うベルフェゴールは、リングをナイフに引っ掛けかざす。

「ししししっ、ついにボンゴレリング全部コンプ！」

「こっちも準備できたよ」

ドサッ

そして・・・全ての氷が溶け、氷の牢獄から抜け出したＸＡＮＸＵ

Sは、未だ全身から蒸気を上げ続けながら、その場で仰向けに倒れる。

「おかえりボス！」

「いよいよだよ」

ＸＡＮＸＵＳの傍に嬉々としてよる二人。

「リングを・・・よこせ・・・」

弱々しく横たわったままだが、目つきだけは鋭く覇気のある声で命令するＸＡＮＸＵＳ。

「もっちろん。
これは、あんな亜流のニセモノじゃなくて９代目の直系のボスにこそふさわしいからね」

すでに炎が消えているが、そのリングは間違いなく“大空のボンゴレリング”だった。

ツナ「！ま・・・まて・・・」

あせる声でＸＡＮＸＵＳにそういうが、動けそうにないツナ。

「結局、最初からこうなるって決まってたのさ」

マーモンはリングをザンザスの首にかけられた鎖にはめ込んでいく。

チェルベッロも見計らってか、この場に集まっていた。

「くそっ・・・退いてください、楓香さん!!」

「楓香!!」

「いかん!!このままでは・・・!」

焦る獄寺達だが、相変わらず薄笑いを浮かべ佇む楓香には隙はなかった。

・・・既に時遅し。

「どいつもこいつも新ボス誕生のために立会いごくろーさん」

ベルフェゴールはＸＡＮＸＵＳの手を取り、最後の“大空のリング”をはめ込もうとしていた。

―――――――――――――――――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　リボーン

「そんな！！」
「！！」

悲鳴を上げるバジル、今まさにマーモンによりリングの力を引き出す詞が紡がれようとしていた。

「受け継がれしボンゴレの至宝よ。
若きブラッド・オブ・ボンゴレに大いなる力を！」

「・・・！」

歯噛みするツナ。

だが、指にはまった大空のリングが輝きを上げる。
・・・鎖にはめられた守護者のリングも。

カァァァァ！！！

「こ、れは・・・！！」

光輝く大空のリングを高く掲げるようにしながら、立ち上がるＸＡＮＸＵＳ。

「力だ！！！とめどなく力があふれやがる！！！」

・・・ついに、リングがＸＡＮＸＵＳの手に渡っちまった。

「これがボンゴレ後継者の証！！ついに！！ついに叶ったぞ！！」

これがオレ達の恐れていた最後。

・・・９代目、すまねぇ。

「これでオレはボンゴレの１０代目に・・・」

・・・だが。

その時、モニターの端に映っていた楓香がニヤリと笑っていた。

「！！」

・・・まさか。

喜びに目を輝かせるＸＡＮＸＵＳが次の瞬間目を見開き・・・

ドクン！

「がはっ！！！」

鼓動のように脈を打って輝いていたリングの炎が収束し出し、ＸＡＮＸＵＳは全身から血を吹き出し・・・

倒れた。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

目を見開き、血を吐き出して倒れたＸＡＮＸＵＳに、オレはあるこ

とに気づいてしまっていた。

「がはぁ！！」

「ボス！」

「どうしたんだ！？ボス！」

血を吐き出し続けるＸＡＮＸＵＳに慌てて近寄るベルフェゴールとマーモン。

オレが気づいてしまったことの一つは・・・

「リングが・・・ＸＡＮＸＵＳの、血を・・・

拒んだんだ・・・・・・」

リングがＸＡＮＸＵＳを拒んだこと。

そして・・・

「あっはははははっ！！！」

「！！」

「ぐっ・・・クソアマが・・・」

静まりかえったこの場をつき壊すように高笑いし出した楓香は、さも可笑しそうに、そして・・・

「どうやら運命には逆らえなかったようね、ＸＡＮＸＵＳ。
貴方の幸運は今・・・尽きたわ！！」

・・・ＸＡＮＸＵＳがリングに選ばれないことを知っていたということだった。

標的８１　【ブラッド・オブ・ボンゴレ　来る！】（後書き）

ＸＡＮＸＵＳの“幸運”、そして”運命”とは・・・！？

（ジャンプ風に）

標的８２　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】

標的８２　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】

Ｓｉｄｅ　ディーノ

ＸＡＮＸＵＳが血を吐き出して倒れた瞬間、一転してスクアーロの表情が驚愕に変わった。

「バ、バカな！！・・・まさか！！」

・・・やはりというべきか、どうやら心当たりがあるらしい。

８年前の、あの事件の出来事を。

そしてオレはスクアーロにその話を促した・・・

「スクアーロ、話してもら・・・」

その時。

「あっはははははっ！！」

「「「！！」」」

突然高笑いする楓香の声が、オレの思考を遮った。

・・・なぜなら、その聞こえてくる声は彼女のモノでないと錯覚するほど、ぞっとするものだったのだから。

―――――――――――――――――――――――――

「（これを・・・９代目は伝えようと・・・っ！）」

ツナは後悔していた。

あの時・・・９代目が死ぬ気の炎の灯った指でツナの額に触れた時。

・・・楓香と同じ、深い“闇”を纏ったＸＡＮＸＵＳに気付いたとき。

超直感で気づいたそれは、９代目がＸＡＮＸＵＳに深い思い入れがあること。

そして、９代目がＸＡＮＸＵＳを次期後継者の座から遠ざけていたこと。

それは・・・

「・・・さぞかしいい気味だろうな！
・・・そうだ、オレと老いぼれは・・・
血なんか繋がっていねぇ！！」

「「「！！」」」

そのことに劣等感を感じているかのようにそう吐き捨てるＸＡＮＸＵＳ。
そのことに皆、驚きを隠せない。

「・・・ＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）・・・」

「うるせぇ！同情すんな、カスが！！
ぐっ・・・がはっ！！」

ドサッ

ＸＡＮＸＵＳはそう叫ぶが、すぐに血を吐き再び倒れてしまう。

「「ボス！」」

急いで駆け寄るベルフェゴールとマーモン。

「ったく、なっさけないなぁ・・・」

「う・・・るっせぇ・・・」

嘲笑する楓香にＸＡＮＸＵＳは毒づく。
そしてＸＡＮＸＵＳは震える手で指から抜け落ちた大空のリングと、
腰の守護者のリングのチェーンを握ると・・・

ブンッ

「おっと」

「「！！？」」

「「ボス！？」」

「・・・さっさと始めやがれ」

「わかってるよ」

ＸＡＮＸＵＳの突然の行動に驚くツナ達と、ベルフェゴール、マーモン。

何故なら・・・

「ボンゴレリングは手に入った・・・さあ、闇の復活だ」

そのボンゴレリングを受け取ったのは、夜代楓香だったのだから。

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

「ぐっ・・・何をする気だ、楓香」

ＸＡＮＸＵＳがあれほど執着していたリングを今の楓香に渡すということは、楓香がこれから起こすだろうことが何か、ＸＡＮＸＵＳは知っているということ。

ベルフェゴールやマーモンが驚いていることから、彼らには知られていない、何かを。

そして・・・

「・・・君たちに教えてあげようか、なぜワタシがＸＡＮＸＵＳの

運命ことをしっていたか」

「なにを・・・！」

楓香の言葉に、オレ達は驚愕した。

「それはね、ツナ・・・

ＸＡＮＸＵＳを氷の牢獄から解き放ったのは、ワタシだからだよ」

――――――――――――――――――――――――

「バカな！？楓香殿がそんなこと・・・！」

バジルは完全に動揺していた。

ＸＡＮＸＵＳが解放された時期が定かではない今、親方様・・・ツナの父で門外顧問のトップであり楓香の監督をしていた家光に確認を取らない限り、はっきりと嘘だとは言い切れなかったのだ。

「・・・なぜ、今そんなことを?」

静かにそう尋ねるツナ。

だが、楓香は問いに応えることなく小さく笑うと。

「レイ、準備は?」

「見ての通り・・・ですよ」

「「!!」」

現れたのは、怪しく輝く“キングモスカ”。

それも一回り大きい。

モスカの戦闘力は周知のこと。

獄寺達に緊張が走り、そして・・・

ヒュッ

ギィンッ!!!

「「「!!!」」」

「・・・並中の風紀を乱しているのは、君かい？」

「ふふっ、どーだろうね」

いつの間にか楓香がモスカの前に移動、そして突然現れた雲雀のトンファーと楓香の黒大鎌が肉薄していた・・・

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ディーノ

「ヒバリ殿！？」

「恭弥のやつ・・・！」

楓香と対峙するのは、血を流しながらもその獲物（トンファー）を構える恭弥だった。

ギギンッ！！

弾くようにして、拮抗していた武器が離れ、それぞれ距離をとる。

「校内で勝手に暴れまわるのはやめてくれない？」

「ふふっ・・・正当防衛だよ、ワタシに非はないはず」

不敵に笑うだけの楓香に、眉を吊り上げる恭弥。

「ふぅん・・・でも、君を咬み殺すという事実は変わらないよ」

「へぇ・・・で、結局は何が言いたいの？」

・・・まあ、あの恭弥なら。

「君に貸しを返しにきたんだ・・・（ジャキッ）いくよ」

今の楓香を止めるはずだ。

「ようは殺り合いたいわけ・・・ねっ」

ダッ

キィン　キィン！！

凄まじい攻防戦に、オレ達は息を飲む。
だが・・・

「ヒバリ殿・・・やはり凄い」

「ああ、だが・・・」

「・・・今のヒバリじゃあ、あいつに勝てねー・・・」

・・・すぐに変化は現れる。

ギギッ

「とりあえず、僕はあのガラクタを風紀委員として没収しなきゃならないんだけど・・・邪魔しないでくれる？」

「ふふっ、それは厄介ね。でも・・・」

恭弥がそう挑発するも、

ガキイッ！！

「全力じゃないみたいね・・・そこがら空きだよ！」

ボウッ！！

瞬発的に上がった大鎌の炎、勢いを増したその蹴り（いちげき）は・・・

「！！」

ドゴッ！！

ドゴオォォォォォォン！！！

校舎まで吹っ飛ばし、恭弥は激突してしまった。

「雲雀殿！！？」

「恭弥！！」

「ヤベーな・・・いくらヒバリといえども、先の戦いであれだけ体力を消耗してんだ。

いくら強くなったっていっても、今の奴に勝つことは難しいだろーな」

・・・リボーンの言うことはもっともだな。
オレが家庭教師（かてきょー）として鍛えたこの七日間、恭弥は以前と比べものにならねーほど強くなった。
アイツの成長スピードはハンパねー、体術なら楓香にも劣らない・・・はずだ。
・・・まあ、楓香もあの頃と比べて強くなったろーし、そこらへんは正確じゃあねーが、とにかく全快の恭弥なら何とかなったかもしれねぇ。
だが・・・

「今は恭弥を、ツナ達を信じるしかねーか・・・」

ガラガラ・・・
その音は恭弥の吹っ飛ばされた校舎から聞こえてくる。
そして砂煙が晴れ、そこには・・・

「く・・・っ・・・校舎の破損、罪状が増えたよ」

「・・・意外と頑丈なのね」

ムスッとした顔で楓香を睨み付ける恭弥。
だが、恭弥はダメージのためか身動きがとれないでいた。

――――――――――――――――――――――――

「ムム・・・」

「極限、無事のようだな、ヒバリは・・・」

「ししっ、よそ見はダメだぜ」

ヒュッ

キンッ！

「っと、獄寺！」

「このっ、くらえ！」

ヂヂヂ・・・

ドドドドド！！

山本、了平はベルフェゴールやマーモンの相手を。
ベルフェゴールのナイフを刀で弾いた山本、獄寺はツナの盾になる位置に立ち、ボムでマーモンの幻覚を吹き飛ばしつつ、相手に攻撃を仕掛ける。

・・・楓香の、大鎌に灯る炎は混沌の黒。

雲雀を吹っ飛ばした時に上がった炎の気配に、ツナは“超直感”で気づく。

ツナはそれを先ほどから感じとっていた気配。

それは・・・

「（あのモスカから、同じ炎の気配がする・・・？）ぐう・・・っ」

「！大丈夫ですか、１０代目！！」

「・・・ああ」

額の炎は揺らいでいるが、未だ“超死ぬ気（ハイパー）モード”のとけていないツナは片膝を着きつつも立ち上がる。

モスカから感じた“ソレ”。
嫌な予感は増していくばかりだ。

「（それに、さっきの楓香の言ってたことは・・・）・・・獄寺」

「っ、ど、どーしたんスか、１０代目!?」

どもってしまったのは、いつもとは違う呼び方に動揺したんだと錯覚する獄寺だが・・・

「みんなを、頼む」

その動揺は、ツナが醸し出す雰囲気からだった。

「わ、わかりました、１０代目!!」

ツナは獄寺の返答を確認すると、一気にグローブに炎を溜め込み。

キュオオオ・・・ゴウッ!!

一気に空中に踊り出る、そして・・・

ボボゥッ　ガッ!!

ググ・・・

「・・・へぇ、まだ動けたんだ」

「お前は・・・オレが止めてみせる」

雲雀を追撃しようとする楓香の前に躍り出たツナは、炎の灯ったグローブでその大鎌を止めた。

標的８２　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】（後書き）

ヒバリ無双、したかった・・・

標的８３　【解き放たれし闇　来る！】（前書き）

いつも通り、短くてすみません（汗）

標的８３　【解き放たれし闇　来る！】

標的８３　【解き放たれし闇　来る！】

「オレが・・・オレがお前を止めてみせる」

ツナの言葉に、自分の闘いに横やりを入れられたヒバリは更にムッとなるが、ダメージが抜けきってない今の状態では、身動きがとれないのも確かだ。
だがそのツナの宣言も、楓香は嘲笑うように鼻をならして一蹴りにする。

「ふふっ、威勢はいいけど・・・」

だが一瞬にしてツナの握っていた炎の大鎌は四散、そして楓香の姿がぶれ・・・

ボウッ

「背中（うしろ）ががら空きだよ」

「ぐっ！」

ガッ！

背後に現れた楓香の一撃を超直感で回避、ツナはグローブの炎を噴かして一旦空中に逃れた。

ボボゥッ！！

そして、炎を噴かし再び楓香に接近する。
直線的なツナの攻撃に、呆れ返ったように息つく楓香。

「はあ・・・せっかくあんただけは見逃してあげようと思ったのに・・・」

スッと目つきが変わる楓香、その瞬間・・・

「まったく・・・残念だよ」

ボボゥッ！！

「！！？（なんて殺気だ・・・っ！）」

しかしツナは殺気に負けず、突っ込んでいく。

「はあぁぁぁ！！！」

右腕を振りかぶり、最大級に炎圧を高めた拳を放った。

・・・だが。

ガシッ

「！！」

「ねぇ・・・つまんない」

楓香はツナの渾身の一撃を・・・真っ正面から防ぎ、左手でツナの右手を握りしめていた。
そして退屈そうな目でツナを見つめる。

グググ・・・

「ぐっ」

ボウッ

「ちっ」

ツナは右手に再び炎を集中させ、楓香の拘束から空中に逃れた。

「ふふっ・・・修業でのワタシが本気だったとでも思うわけ？」

「・・・・・・」

無言で楓香を見るツナ。
それを応えととった楓香は、

「ま、それはないか。何か勘違いしちゃってると思っちゃったよ！だって・・・」

そう呟く楓香の手からさらに大きな黒の死ぬ気の炎が舞い上がり・・・

「闇の炎の前では、たとえ大空をもってしても勝てないんだから！！」

それは大鎌を巨大なものとし、そして・・・

ボボゥッ！！

その炎圧により楓香の体が中に浮き、空中で待機していたツナに急速に接近した。

「（・・・！？）くっ！」

「がっ！！」

ズゴゴゴンッ！！

ツナは瞬時に目の前に現れた楓香の右フックの攻撃を左手でガードしたが、その場で回転しての右足での蹴りがツナの脇腹に入り、そのまま地面へと飛ばされたてしまう。

「１０代目！！」

「ツナ！！」

「ぐぁっ・・・」

獄寺、山本の叫びも虚しく、ツナの額の炎が・・・

シュウゥゥ・・・

「沢田殿の超（ハイパー）モードが！！？」

「・・・」

青ざめるバジルに、リボーンは無言でモニターを見つめる。
そして、さすがのディーノも焦りを隠せない。

「おい、チェルベッロ！！
ＸＡＮＸＵＳはリングに選ばれなかった・・・戦いは終わったはずだ！！
オレ達が加勢しても問題ないはずだ！！」

チェルベッロは顔を見合わせると頷き、観覧席、戦闘フィールドに聞こえる放送をかける。

「それでは。
ヴァリアー側を失格とみなし、勝者を沢田綱吉氏とします。
よって、試合終了のため観覧席を解放します」

チェルベッロは遠隔スイッチで赤外線センサーを解除する。

だが・・・

「よし。
行くぜ、コラ」

「・・・待て、まだ解除されてないぞ」

何処からか取り出した暗視ゴーグルで、赤外線センサーが解除されていないことを視認したリボーンはコロネロを止めた。

「甘いよ、細工しておいたのさ」

マーモンの台詞にコロネロは焦る。

「なに!?なら、中から・・・」

「無駄です。内部からの衝撃で観覧席内に内蔵された爆弾が爆発する仕組みなのです」

「「!!」」

チェルベッロの説明により、リボーン達は身動きがとれなくなってしまう。
さらに、追い討ちをかけるようにベルフェゴールが言う。

「ししっ、さらに絶望的な事実を教えてやるぜ。
生え抜きのヴァリアー隊が５０名、此方に向かってるっことをな」

「「!!」」

「僕ら幹部クラスほどじゃあないけど、その次に戦闘力が高い精鋭

でね。
今のフラフラな君たちなら楽々倒せるだろうさ。
圧倒的な武力も相まってね」

「なっ!!くっそーっ、オレ達だけでやるしかねーのか!!?」

「そいつは、やべーな・・・」

ベルフェゴールとマーモンに毒づく獄寺と山本。

獄寺達はベルフェゴール達に足止めをくらい、ツナの援護はおろか・・・

「それに、この娘がいることをお忘れなく」

「うぅ・・・」

「髑髏!!」

「・・・!」

いまだ解毒されておらず憔悴するクロームもレイに捕まっている状態。

そして・・・

「・・・準備は整いましたよ、“闇の”」

「そう・・・じゃあ、始めましょうか」

横目でモスカを見つめていたレイの一言により、“闇”の完全なる復活の儀式が・・・整った。

楓香はツナから目を離すと、黒く輝きを増す“モスカ”の前に立つ。

「“沢田綱吉”・・・キミは気付いてたと思うけど、この“モスカ”はフェイク。
・・・中身が重要なのよ」

そして、それを合図に、モスカの装甲が・・・弾け飛んだ。

「「「!!」」」

そして、闇の炎を纏う“ソレ”に、守護者のリングと大空のリングを掲げ、述べた。

「ボンゴレリングよ、全ての鍵がそろった!!今、闇を統べしリングを、

呪縛から・・・解き放て!!」

グオォォォ!!

「あぁ・・・・・」

そう言った瞬間、楓香から“黒く、丸い炎”が抜け出し、まるで糸の切れた操り人形のように膝をついてしまう。

そして、間髪入れず“ソレ”はその炎を吸収し輝きを増して・・・

ドゴオォォォォォ!!!

ガラガラ・・・

「ふふ・・・」

輝きは爆風へと変わり、中から・・・

「フフフ・・・」

妖しく笑う、“夜代楓香”でない女性の声、生体ポットの中にいた楓香そっくりなその女性の姿がそこにあった。

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅツナ

黒い炎を纏う、まるで“死神”と化したその姿は・・・

「・・・まさか！お前は・・・！！？」

「「「！！」」」

「フフフ・・・ついに完全な覚醒に至ったわ・・・！！」

そして高笑いするその女性は・・・

「楓香の・・・お母さん・・・！！？」

・・・だが、ありえない。

楓香のお母さんは、すでに・・・！

“彼女”は、いまだ倒れるＸＡＮＸＵＳの方に目を向けていた。

「まったく・・・感謝するわ、ＸＡＮＸＵＳ。

まさか、こんな戯れ言を信じるなんてね」

それにピクッと反応したＸＡＮＸＵＳは、怒気を含んだ声をもらす。

「・・・てめー、このオレを騙したのか？」

「当たり前でしょ、だって・・・」

蔑むように睨み付ける“彼女”の瞳には、憎しみが込められていた。

「あたしがマフィアに協力するなんて、ありえないんだから」

・・・何が起こっているのかわからない。

ハッキリと超直感で掴めたのは二つだけ。

一人称は変わっているが、話し方が先ほどまでの楓香と同じだということ。

そして・・・

その時、混乱するオレの耳には・・・

「逃げ・・・て、ツナ君・・・」

弱々しい声の主は、

紛れもなく“ふーちゃん”の声だった。

標的８４　【窮地、そして・・・　来る！】（前書き）

お久しぶりです・・・テストやらなんやらで更新が滞った氷雨です。
ども、遅れてスミマセン・・・

標的８４　【窮地、そして・・・　来る！】

標的８４　【窮地、そして・・・　来る！】

「逃げ、て・・・ツナ君・・・」

弱々しくも、必死でそのことを伝えようとする“楓香”。

それは、先ほどまでツナが感じていた違和感のない・・・

だが、８年前のあの日に出会った時の“楓香”そのものだった。

「・・・どうやらまだ残っていたようね、魂はすでに砕かれたはずなのに」

「！・・・砕かれた？」

ツナのつぶやきに、“ネロ”は不敵な笑みで応える。

「ふふっ・・・ちょっとした衝撃で脆くも砕けた魂のおかげで“あたし”は完全に夜代楓香の表に出れたわ。

もっとも、闇の心にまかせて、炎を無理に使用した代償もあって・・・ね」

Ｓｉｄｅ　バジル

「“闇の心”・・・まさか！？」

「・・・おそらく、２ｎｄモードのことだろーな」

普段は纏うことの出来ない、闇の死ぬ気の炎を大鎌に灯したスタイルはまるで・・・

「だが、これで辻褄があうな」

「え・・・リボーンさん？」

「ＸＡＮＸＵＳを目の前にしての数回の２ｎｄモード・・・
普段の状態に戻ったときは、常に楓香は自分で立っていられねーほどだった」

「！」

「確かに・・・今の嬢ちゃんの様子に似てんな」

Ｄｒ．シャマルの言う通り、楓香殿は地面に膝をつき動けそうにない。
しかし・・・

「ですが、２ｎｄモードなら・・・楓香殿の姿までもが変わってしまうはずです！
この戦いに現れた楓香殿は・・・」

「ああ。だからスジが通るんだ。
・・・２ｎｄモードの楓香の正体は、“あいつ”じゃなかったってことにな」

「・・・どーいうことだ、コラ」

そうコロネロ殿が問う。

「・・・確かに、２ｎｄモードの楓香は好戦的で闇の炎を手に灯していたが、あくまでもその行動目的は“ＸＡＮＸＵＳを憎む”という負の・・・闇の感情からだったのは確かだ。
だが、“ネロ”はＸＡＮＸＵＳに何らかの協力関係にあった・・・ということは、２ｎｄモードの楓香とは別の意思として考えるべきだろーな。

それに、それだけが問題じゃねーようだぞ」

「!それって・・・」

そう続けるリボーンさんに聞き返そうとしたその時、

「ふざけ・・・やがって!!」

チャッ・・・

いつの間にか立ち上がっていたＸＡＮＸＵＳが、“ネロ”に銃口を向けていた。

―――――――――――――――――――――――――

“ネロ”は唖然とするツナ達から視線を外すと、“夜代楓香”の方に不敵な笑みを送り・・・

「それにしても・・・窮地に立たされても“ボンゴレ”を心配するなんて、相変わらずの“美しい友情”だね」

「っ!」

鋭い目付きで楓香を睨み付け、楓香はビクッと震える。

「・・・まあいいわ、体は手に入ったし、“ボンゴレ”には用はないわ」

フッと嘲笑(あざけ)った、その時。

「・・・ハァ・・・ハァ・・・
ふざけ・・・やがって!!」

「「!!」」

フラフラと立ち上がり、憎しみの眼差しで“ネロ”を睨めつけるＸＡＮＸＵＳの姿があった。

チャッ

キュオオオ・・・・

「かえ、せ・・・
この・・・クソがぁ！！」

顔中に広がっていくアザが、ＸＡＮＸＵＳの怒りを表している。

キュオオオ・・・！

ドドッ　ドドドドドッ！！！

打って変わって“ネロ”に対峙するＸＡＮＸＵＳ、“ネロ”はＸＡＮＸＵＳの、憤怒の炎の嵐を軽々と避けていく。

ツナの“零地点突破・初代エディション”によるダメージをものともしない勢いで“ネロ”を追撃するＸＡＮＸＵＳに、観覧席の皆が驚く。

「ＸＡＮＸＵＳ！！？」

「なんつー執念だ・・・」

「執念・・・そんな生易しいもんじゃねぇ」

「「！」」

バジル、シャマルの呟きに、突然、口を開くスクアーロ。

「どーいうことだ？」

先を促すリボーン。

そして、スクアーロは重い口を開いた。

「・・・ＸＡＮＸＵＳにとって今回の計画は“標的”であり、

ボスの座に着く一つの理由だった」

――１０年前

その時代、剣帝と恐れられていた男を倒したスクアーロはより高み

を目指して世界を旅していた。
そんな時だ、ボンゴレファミリー主催で開かれた、とあるパーティーでＸＡＮＸＵＳと出会ったのは。

スクアーロはＸＡＮＸＵＳを一目見た瞬間、「奴には敵わねぇ」と悟った。

ボスとしての器（うつわ）を兼ね備えた、他者を威圧する覇気。
当時のボンゴレ上層部が、次期ボスの座は彼だと揶揄していたことは噂で承知の上だったが、スクアーロは自分の肌でその強さを感じ、彼についていくことに決めた。

・・・そして、ＸＡＮＸＵＳが９代目の息子としてボンゴレボスの座に執着する理由を、
その後ＸＡＮＸＵＳが引き起こしたクーデター、“ゆりかご”の起点を、スクアーロが知ってしまったのもその頃だった。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

ＸＡＮＸＵＳの猛攻を、“ネロ”は巧みに避けていく。

共闘しようにも、自分の戦闘スタイルでは援護には向いていない。

目の前を行き交う闇と憤怒の炎。

・・・だが、その戦いも終焉を迎えた。

キュォオオオ！！

「くらえ！！」

――怒りの暴発（スコッピオ・ディーラ）！！！――

ドドドドド！！！

すさまじい弾丸が“ネロ”の迫る。

そして。

「ふふっ・・・アリガト。その炎・・・

……いただくわ」

「！！？」

“ネロ”の展開する闇の炎に肉薄するＸＡＮＸＵＳの弾丸。

そして、変化はすぐに表れた。

「ａｓｓｏｒｂｉｒｅ（きゅうしゅう）・・・」

だんだんと炎の中心から渦巻くようにそれぞれが混ざり合い・・・

フッ・・・

ボボゥッ！！！

「な！？」

「「「！！」」」

「ムダよ、ＸＡＮＸＵＳ。あなたの炎は・・・あたしの大好きな“負の炎”なのだから」

ＸＡＮＸＵＳの驚嘆と共に、“ネロ”不敵な笑みと勢いを増した炎の大鎌を構えなおした・・・

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　バジル

「ＸＡＮＸＵＳの弾丸を・・・」

「っ！！」

唖然とする拙者達だが、スクアーロは叫び、暴れだした。

「う〝お〝ぉい！！オレをここからだせぇ！！」

「っ、スクアーロ、おとなしくしろ！」

ディーノ殿があわてて止めに入るが、止まらない。

そして・・・

「うるせえ！どのみち、奴はたおせねぇんだ！こうなった以上・・・！」

チャキ・・・

「おい、スクアーロ。てめー、“ヤツ”の何を知ってんだ」

「ぐっ・・・」

「お、おい、リボーン！？」

静かに殺気をこめて銃口をスクアーロに向けるリボーンさんが、この場の収拾を付けた。

「・・・楓香が“ヤツ”に取りつかれていたというなら、９代目の零地点突破からＸＡＮＸＵＳを解放したのは“ヤツ”だったってことになる。

・・・つーことは、お前たちヴァリアーの、少なくとも部隊長であるお前は知っていたはずだぞ。・・・今回の計画とやらを知っていたのならなおさらな」

「・・・う〝ぉい、チェルベッロ、聞こえてんだろ？

・・・オレの声を向こうに流せぇ。オレは奴に伝えなきゃならねぇことがある」

不測の事態と化したこの大空戦は、すでに沢田殿の勝利で終結していた。

チェルベッロは「わかりました」と短く返すと拡声のボタンを押した。

「聞こえてるかぁ・・・クソボス」

「！・・・生きてやがったか、カスザメ」

突然拡声器のより聞こえてきた死んだはずのスクアーロの声に、ぴくっと反応するＸＡＮＸＵＳ。
それは“ネロ”も同じだった。

「・・・あら、あなたもいたのね、Ｓ・スクアーロ（スペルビ）。
ねぇ、この男うるさくてしたがないの。どーにかしてくれないかしら？」

「“契約”をたがえたのはてめーだろうが、“ネロ”！！」

声を荒げて吠えるスクアーロ。対して“　ネロ”は楽しげにからからと笑う。

「“契約”？それは“ＸＡＮＸＵＳがボンゴレのボスの座についたら”、でしょ？
・・・でも、ＸＡＮＸＵＳはなれなかった。当然の結果」

「いや！てめーは知っていたはずだ！！ＸＡＮＸＵＳがリングに拒まれることを！
そしててめーも知っていたはずだ・・・ＸＡＮＸＵＳの・・・裏切られた悔しさと恨みを！！」

「！！
カスザメが・・・てめーに俺の何がわかる！知ったような口をきくんじゃねぇ！」

叫び続けるスクアーロに反応したのは、ＸＡＮＸＵＳだった。

「いいやわかる！知っているぞぉ！！」

「なら言ってみろ、カスが！！！」

「・・・・・・」

「ああ？言えねーのか！！」

無言のスクアーロ。だが、彼はその思い口を開いた。

――――――――――――――――――――

スクアーロがＸＡＮＸＵＳにつき従い始めて半年、ＸＡＮＸＵＳには独自の部隊がスクアーロによって形成されていた。

ボンゴレファミリーに古くから存在した暗殺部隊“ヴァリアー”。

表向きはスクアーロを次期ボスとして成り立っていたが、あくまでＸＡＮＸＵＳがボンゴレ９代目の後継ぎとしてボスに座に君臨するその時まで。

暁には、直属部隊となりＸＡＮＸＵＳを、ボンゴレ１０代目を補佐する予定だった。

だが、あるときスクアーロはボスの奇行に気付いてしまった。

スクアーロが“ヴァリアー”の次期のボスとしてＸＡＮＸＵＳにつき従っていたのは理由があった。

確かにＸＡＮＸＵＳはボスとしての気質を兼ね備えていたが、彼自身が部下を従えるなど、彼の性格からいってもお門違いだったからだ。

当時、一番ＸＡＮＸＵＳの近くにいたであろうスクアーロには、当たり前のようにそれを理解していた。

いつものように自由奔放にボンゴレ場内を闊歩しているはずのＸＡＮＸＵＳが、その日も見当たらなかった。

不定期だが、ＸＡＮＸＵＳは誰にも言わず、時々ボンゴレ場内からいなくなることがある。特に最近は頻繁に。

もっとも、その後をついていこうとした者がＸＡＮＸＵＳによって瀕死状態にされたのもスクアーロは知っていた。

そして知ってしまった。

ＸＡＮＸＵＳが抱える、一つ目の秘密に。

「あら貴方、ＸＡＮＸＵＳのお友達？」

「・・・てめぇ、誰だぁ」

それは城内の隠された一室にいた、流れるようなプラチナブロンドにルビーのような瞳が特徴的な、若い女性だった。

標的８４　【窮地、そして・・・　来る！】（後書き）

“この小説はどこに行くのだろう”としみじみと思う今日この頃

標的８５　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】（前書き）

他作者のみなさんのおっしゃるのと同じような大学生の忙しさを、自分も味わう日々を送っている氷雨です・・・
でも、週二回は投稿したいのです（願望）

標的８５　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】

標的８５　【ブラッド・オブ・ボンゴレ？　来る！】

“ＸＡＮＸＵＳを知っている？しかもお友達だと？”

彼女の言いようにスクアーロは混乱する。
まるで彼女がＸＡＮＸＵＳを知っていて、しかも親しい関係にあるようにふるまっているからだ。

自然と右手の義手・・・刀に力がこもる。
だが・・・

「あっ、いけないっ！」

ガシッ

「っ！！？」

いつの間にか掴まれていた左手。そして思っていた以上の力でぐいっと引っ張られ・・・

「なっ、何しやがる！！」

「しーっ、静かに。少しの間、ここに隠れてて」

バタンッ！

一瞬にして、クローゼットに押し込まれてしまった。

「くそっ！」

スクアーロは突然の自分の身に起こった出来事に驚いていたが、不測の事態は日常的な彼にとって冷静さを取り戻すにはそうかからなかった。

未だに信じられないが、彼女の行動速度なら右手の義手・・・自分の武器（カタナ）を引き抜かれていただろうが、幸いそれは健在だ。

つまり・・・

「（・・・俺から武器を奪わなかったことを後悔しろぉ！！）」

扉ごと掻っ捌いてやる！！と勢いよく刀を振り上げ、そして・・・

カチャ・・・

「そろそろ来ると思ってたわ。ＸＡＮＸＵＳ」

「フン・・・」

「っ！！！（なっ、ＸＡＮＸＵＳだと！！！！！？）」

突然耳に入ったＸＡＮＸＵＳの声で、スクアーロは慌てて寸止めする。

「・・・ただの気まぐれだ」

ＸＡＮＸＵＳはそうボソッと呟くと、彼女はクスクスと笑う。

その様子に、スクアーロは唖然となる。

「（あ、ありえねぇ・・・あの女！
クソボスと会話してるぞぉ！！）」

一番側近にいるスクアーロでさえ、一言会話を交わせばまだいいもの。

最近では何かある度に、ＸＡＮＸＵＳはスクアーロを様々なモノで殴り付ける。

決して会話が成り立っているわけではなく、寧ろ彼女の話に素っ気なく返すのみだが、それはスクアーロにとって異様な光景だった。

ますますあの女、怪しい・・・とスクアーロは出るに出られないクローゼットの中で冷や汗を拭う。

「ふふっ・・・ごめんなさいねＸＡＮＸＵＳ、こんな遠いところまで」

「・・・かまわねえよ、千雨。
クソジジイにはウゼェことに既に知られているが、他のカスどもが群がってくるのはそれはそれでウゼェ」

「９代目を“クソジジイ”なんて・・・相変わらずね」

「・・・うるせえ」

少し呆れたように言う彼女に、ＸＡＮＸＵＳ視線をそらす。

・・・ますます怪しい、とスクアーロは混乱気味に・・・いや、すでに混乱してしまっていた。

その後数分間のことをスクアーロは覚えていない。
ＸＡＮＸＵＳは数回、その女性と会話を交わしたあとその場を立ち去った――

「・・・で、あなたの話も聞かせてくれるかしら」

「なあっ！！！？（ゴスッ！）っつ！！」

いつの間にか目の前にいた彼女に驚いたスクアーロは、クローゼットの天板に頭を強打してしまう。

「あらあら」

「う〝おぉい！！〝あらあら〟、じゃねーーっ！！」

ガァァァと叫びおこるスクアーロに、彼女はくすくすと笑うだけ。もしも彼の部下たちが見ていたなら、スクアーロの剣幕に全速力で逃げるか、必死で命乞いしていただろう。

だが〝ぜってー掻っ捌く！！〟と意気込んでいたスクアーロも彼女を見てアホらしくなり、驚くことに深いため息を吐くのみでクローゼットからのっそり出てくるのだった。

――「・・・それがあの人との出会いだった」

ＸＡＮＸＵＳはスクアーロの話に少なからず驚きを見せ、苦々しげにギリッと奥歯をかみしめる。

「！！・・・そうか、まさかてめぇが“千雨”を知っていたとはな」

「あの時の出会いは偶然だったがＸＡＮＸＵＳ、てめーが唯一“名”で呼んだ彼女のこと俺はまだしも、てめーが忘れるわけがねぇ。そして、この計画の目的にはすぐに見当がついていた、だからこそ、目的を告げずにいたてめーの計画に賛同したんだぁ。・・・てめーの裏切られた悔しさと恨みに賛同してな」

そして、スクアーロはこう続けた。

「そして・・・てめーは彼女が消息を途絶えてから変わっちまった、その真実を知っちまってな」

―――――――――――――――――――――――――

８年前、ＸＡＮＸＵＳが引き起こした“ゆりかご”。
スクアーロは戦いの中で負傷、意識がもうろうとする中、ＸＡＮＸＵＳがついに９代目を追い詰める場面に出くわす。

「なぜだ・・・なぜ、おまえは・・・」

「うるせぇ!!それはてめーが一番よくわかっているはずだ!!
俺がてめーとは血なんか繋がっちゃいねぇ、俺をボンゴレのボスにするつもりはなかったことを!!!」

「（!!?）」

スクアーロはＸＡＮＸＵＳの叫びの戦慄する。
そして・・・ＸＡＮＸＵＳは吐き捨てるようにこう続けた。

「それだけじゃねぇ、てめーは何もかも俺から奪ったんだぁ!!

てめーに頼ったのが間違いだった・・・千雨を殺したてめーに!!!」

「（なっ!!?）」

「！！・・・なぜ、それを・・・・！！？」

驚嘆の声を上げる９代目。
その反応に、ＸＡＮＸＵＳは・・・

「クソジジイ・・・てめーだけは、かっ消す！！！！！」

怒りを、両手に宿した憤怒の炎を増幅させ、ダッと駆け出すＸＡＮＸＵＳ。
そして、９代目は・・・

「・・・すまない、家光。やはり、私には・・・」

ノッキングする、ステッキの先端に灯した死ぬ気の炎をＸＡＮＸＵＳの向け、そして・・・――――

「・・・それが、“ゆりかご”の真実だぁ」

そう言い、語り終わるスクアーロ。
だが内容が内容だけに、バジルは反論する。

「そんなっ、9代目がそんなことをするがない！！」

「おちつけ、バジル」

「ですが、リボーンさん・・・」

いきり立つバジルを制するリボーン。

「おめーがここで言いて―ことはそんなことじゃないはずだぞ、スクアーロ」

「ったりめーだ！！

クソボス、てめーは・・・いや、俺たちは躍らせれていたんだ」

そしてスクアーロは画面の向こうの・・・“ネロ”を睨みつけ、言った。

「計画的、かつ巧妙的な策で“彼女”を暗殺した・・・

“ネロ”、てめーにな」

標的８６　【真実、そして・・・　来る！】（前書き）

お、お待たせいたしました（汗）

標的８６　【真実、そして・・・　来る！】

標的８６　【真実、そして・・・　来る！】

「ふふ・・・」

スクアーロの宣言に、“ネロ”は笑い出す。

「！！てめぇ！！」

「なに、ＸＡＮＸＵＳ？今更でしょ、そんなこと」

「ぐっ・・・クソがぁ・・・」

ＸＡＮＸＵＳは“ネロ”を睨みつけるが、彼の死ぬ気の炎は荒い息を漏らしている様子のまま、すでに枯渇していた。

そして“ネロ”はさらに続けた。

「それに、９代目はこの体の持ち主・・・“千雨”の秘密を知っていたみたいだし」

「「「！！」」」

“ネロ”の一言に、ツナは感じていた違和感の理由を理解した。

だが・・・

「・・・おい、それじゃあ!?てめーの体は楓香さんのお母様の体じゃねーってのか!!?」

獄寺が皆を代弁するように言い、それに対し“ネロ”はつまんなそうに応える。

「ほんと、無知って怖いのね。“闇”を継承しなかった彼女なんて、あたしが欲すると思う?」

「(“闇”を継承しなかった・・・?)けど、楓香は“母さん”って・・・!」

ツナは楓香が母親だと認識していたことを思い出す。

反ってきた応えは、予想外のものだった。

「見間違えるのも当然。

“彼女”・・・“夜代千雨”は、“夜代仄香”の双子の妹なのだから」

Ｓｉｄｅ　リボーン

「・・・バジル、双子がマフィア界でも忌み嫌われているのを知ってるか？」

「はい、今はその考えも大分緩和されていますが・・・まさか！」

「そうだぁ、“彼女”は夜代家から追放されて、９代目に引き取られていたんだぁ」

苦々しげにそう語るスクアーロ。

・・・そーいうことか。

「おそらく、９代目がボンゴレ本部でかくまっていたんだろーな。それは双子ってだけじゃなく、“闇”の力を継承してしまったこともあって。

闇の炎は、妬み、怒り、悲しみ・・・人間の感情に比例し、その炎圧は増す。

闇の炎の実体がマフィア間で公にされて・・・いや、知られてねーのは、そのためなのかもしれねーな」

「・・・どーいうことですか、リボーンさん？」

「マフィアの世界はあめーもんじゃねーってことだ。

人の生死がありふれているこの世界じゃ、家族や友人を奪われ心

に深い闇をもつ者など、数知れねーだろうからな。
・・・しかもその炎を扱うにも適性あってのことだ、”彼女”は標的にされやすい。９代目はその監視と、彼女の身を守るためにそばに置いたんだろうな。

そしてＸＡＮＸＵＳは少なからず、“千雨”に好意を抱いていた」

「・・・９代目はそのことを知っていたようだが、ＸＡＮＸＵＳのその変化に気付いた９代目は息子であるヤツのことを思って容認していたんだぁ」

確かに、スクアーロの言うとおりなら９代目の最後の一言もうなずける。

「９代目は“彼女”を失ったことを悔やんでいたが、ボスとしてＸＡＮＸＵＳの反逆を容認することはできなかった。そして楓香の母親である“夜代楓香”をも失い、せめてもの娘である楓香を救おうとしたんだ」

「“ネロ”はその弱みに付け込み、９代目を幽閉した・・・といったところか」

ディーノの言うとおり、９代目がヴァリアーに利用された原因がそうであれば、納得できるだろう。

・・・・・・。

歴代ボスの中でも、穏健派とされる９代目の思想が裏目に出たとは

な・・・

そして、

「ま、余興はここまでね」

戦闘フィールドの沈黙を破ったのは“ネロ”。

・・・問題は・・・“ヤツ”の目的だ。

“夜代千雨”が双子の妹だという事実に皆声を失うが、その沈黙を破ったのは“ネロ”だった。

「ま、余興はここまでね」

再び殺気を放つ“ネロ”に、守護者たちも構えを取る。

くるくると黒大鎌を回す“ネロ”は炎圧を上げつつ、ツナのいる方向へとゆっくり足を進める。

「なっ!!１０代目!!」

獄寺はツナに近づく“ネロ”を追うが、ベルフェゴール、マーモンがそれを遮るように立ちふさがる。

「ししししっ、おっと」

「ここから先は通さないよ」

「くそっ、どきやがれ!!」

「ツナ!!」

「沢田!!!」

獄寺、山本、了平が叫ぶが、ツナは動くことができない。
そして、大鎌の先端をツナの間近に向け、“ネロ”は憎しみのこもった声色で言った。

「アタシの標的は、次期ボンゴレ１０代目、沢田綱吉・・・

あなたよ」

ツナにすさまじい殺気を向けている“ネロ”。そして超死ぬ気モードの解けてしまっているツナは、体が竦んでしまっていた。

「ひっ！！」

「さようなら・・・」

振り上げられた切っ先は・・・

ガキィッ！！！

「ふう・・か・・・・！？」

「へぇ・・・」

漆黒の髪をなびかせ、“夜代楓香”がツナの前に立ち、金属の棒で切っ先をとらえていた。

「ワタシの前で・・・ツナ君には指一本。

あなたに触れさせない！！！」

Ｓｉｄｅ　ツナ

オレを庇うように立つ楓香は、いつかの日の光景と重なって見え、頼もしく感じた。

けど・・・

カンッ！

「くぅっ！！」

すぐにそれははじかれてしまう。

・・・今の楓香は戦う術（ぶき）がない。

あの炎の大鎌に切られてしまう・・・・！！

だが、“ネロ”はフッとほくそ笑むのみで、大鎌を引いた。

「そう・・・やっぱりあなたの行動原理は沢田綱吉・・・仲間（ファミリー）を守ること」

余裕を見せる“ネロ”に、オレは嫌な予感を感じた。

・・・それは。

「騎士(ナイト)気取りは結構。けど、いいのかしら？・・・レイ」

「・・・はい」

チャキ・・・

「ううっ！」

「「「！！！」」」

悲鳴の先にはうつろな表情でクロームの頬に小刀を翳す、レイ・カーベルの姿があった。

「他のお仲間さんが、危なくて・・・よ？」

「クローム！！」

「おい、レイ・カーベル！！てめーはその女に裏切られたってのに、まだ従うってのかよ！！！」

そう叫ぶ獄寺君だけど、レイは顔色一つ変えず・・・むしろ無表情でクロームの拘束を解かないでいた。

「無駄よ。彼はすでにアタシの制御下にあるのだから」

「「「!!?」」」

そう淡々と、“ネロ”は語る。

「ヤツの“闇”に付け込んで傀儡にするのは容易だったわ、アタシに裏切られた彼に、生きる目的なんてないんだから。ま、そういうわけだから・・・」

チャキ・・・

「あなたはどちらを選択するの、“夜代楓香”?」

――――――――――――――――――――――――

“ネロ”にそう聞かれ、硬直する“楓香”。

だが、“ネロ”は容赦なく、“楓香”に告げた。

「答えは無言、どちらも放棄する・・・いや、沢田綱吉を選択する

ってわけね。
・・・やって」

“ネロ”の命令に、レイは小刀を振り上げる。

「ま、まて！！」

「髑髏（どくろ）！！」

「・・・！！」

楓香、観覧席にいた黒曜の二人の叫びもむなしく・・・

「や、やめろーーーーーっ！！！」

「ふふっ、“さようなら”」

その時。

ガキィン！！！

――・・・させると思いますか？――

何処からともなく現れた、三叉の槍によって防がれ・・・

ヒュッ！！
ガスッ！！

「ガハッ！！」

そしてレイをふっ飛ばし、

スッ・・・

拘束を解かれ、倒れるクロームを腕で優しく支える青年。

「！？おまえは・・・！！」

“ネロ”は驚きの表情でその青年を睨みつけ、彼は槍に引っかけられたリングチェーンから“霧のリング”を抜き、クロームの腕の装置にはめ込み・・・

チャラ・・・プシュッ

「う・・・」

毒から解放されたクロームを一瞥し、そして・・・

「クフフフ・・・僕の駒をマフィア風情に弄ばれるのは少々、いただけませんね」

その瞳に六道輪廻を宿す男、六道骸はそう静かに告げた。

標的87　【ボンゴレの覚悟　来る！】（前書き）

亀更新＋駄文＝オワタ＼（＾ｏ＾）／

標的８７　【ボンゴレの覚悟　来る！】

標的８７　【ボンゴレの覚悟　来る！】

「あんたは・・・六道骸！」

「クフフ・・・」

不敵に笑う骸に、“ネロ”はそのイレギュラーに眉をひそめる。

「・・・何故？あんたはこの戦いで力を使いすぎて、しばらくはこちらに来れないはずだよ」

「クフフ・・・さあ、何故でしょう？」

茶化す骸に、“ネロ”は呟く。

「・・・まさか、偽物？」

「あなたにそう思われるのも無理はありませんね。

・・・ですが、現に僕はここにいる」

落ち着き払ってその目で“ネロ”を見据える骸。

その声に、ようやくクロームが反応する。

「うぅ・・・！
むく、ろ・・・さま・・・？」

「もう少しおとなしくしていなさいクローム。解毒されたとはいえ、まだ痺れは抜けてないでしょうから」

「・・・はい」

そして、クロームは安心しきったように骸に寄りかかる。

「さて・・・なんともマフィアらしいやり方でクローム人質にしていましたが、次はどんな手段(て)をとるつもりですか、“ネロ”？
・・・いや、“闇の炎”の根源と言ったほうがいいでしょうかねぇ」

「・・・レイ、その男を殺(け)しなさい」

「！」

ガキィッ！！

背後からの小刀の一振りをなんとか“三又の槍”で受け止めた骸はどの重たい一撃に顔をしかめつつも、クロームを背後に移らせる。

「骸様！！」

「・・・おや、先ほどの一撃であなたは気を失ったはずですが？」

「・・・・・・」

沈黙を貫くレイに、その違和感に気付く。

「・・・“マインドコントロール”ですか」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

骸・・・あいつが何でここに！？

「ム・・・なぜあいつが・・・？」

「ししししっ、なんか楽しくなってきたぜ」

目の前に立ちふさがる２人も驚いている・・・

だが、これで大きく動ける！

「おい、山本!!１０代目と楓香さんのいる地点まで突っ切れ!!」

「え、獄寺!?」

「何を言っているのだ、タコ頭(ヘッド)!」

バカ二人がごちゃごちゃ言ってるが、とにかく今は１０代目と楓香さんを援護することが優先だ・・・

近接戦闘に、あの大鎌相手にはむかねぇオレじゃあ、“ネロ”に対抗することはできねぇ。芝生頭もな。

・・・気にくわねーが、山本が一番適材だ!

「ししっ、行かせないっての!」

「てめーらふせろ!“２×２倍ボム”!!」

まだ完成しちゃあいねー技だが、足止めぐらいなら!!

「うわっ!!」

「ムッ!」

ドドドドドッ!!!!

視界を遮るように、辺りに土埃が舞う。
そして、オレは芯の詰まっていない“ロケットボム”を手に構え・・・

「山本!!“こいつ”を追え!!」

「!りょーかい!!」

目をつむり、１０代目までの道筋に”ロケットボム”を・・・

「（いけっ!!）」

・・・沿えた。

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　“夜代　楓香”

突然現れた骸の登場によってクロームは解毒され、ピンチは免れた・
・・けど、“ネロ”に操られているレイによって膠着状態。

そして、“ツナ君”の命を狙う“ネロ”。

ワタシが・・・守らなければ。

ワタシを“闇”から救ってくれた、“ツナ君”を守ることが、ワタシの生きる意味だから・・・

ーー■■は、“妹”を守れなかったーー

ーーもう、あんな思いをしたくないからーー

ーー■■は強く、誰にも負けないように・・・ーー

霧がかかったように脳裏にかすめるその思いは、

ーーみんなを、守れるように・・・ーー

ワタシを後押ししてくれる。

カラン・・・

疲労できしむ体に顔をしかめつつも、ワタシは転がる金属棒をつかみ、“ツナ君”の前に立つ。

すると、守護者たちのいるほうから爆音が響いた。

―――――――――――――――――――――――――

「クローム、動けますか？」

「はい、なんとか・・・」

「なら・・・下がっていなさい！」

ガキィッ！！

「・・・・・・」

「くっ・・・操り人形ですか。少々、やっかいですね」

「骸様！」

不敵な笑みを浮かべながらも焦りを見せる骸。
周囲には骸とレイが打ち合う金属音が響く。

しかし、すぐに変化は現れる。
骸が自ら距離を取ったのだ。

「（太刀筋が変わった？いや、迷いがなくなった・・・？）」

「まったく、あたしとしたことが・・・これくらいのブラフで動揺

するなんて」

「？」

「・・・どうやらスキルを使うほどの力のないようね。
所詮は有幻覚、あんたなんか人形で押さえれば脅威じゃないわ」

そう、骸は現れてからというものスキルを使わず、体術のみで戦っていた。“ネロ”はそれに気づき失笑する。

「クフフ・・・あなたのおっしゃる通り、僕は今スキルを使えません。ですが」

ドスッ

「ぐっ！」

隙を突き、骸はレイを吹っ飛ばす。

「操り人形ごときに・・・僕の戦闘力を侮ってはいけませんよ」

「けど、足止めにはなるわ」

そう言い、“ネロ”は視線を骸からツナへと向ける。

「何度も言うようだけど、アタシの標的は沢田綱吉よ」

「クフフ・・・それはどうでしょう、彼には頼もしい騎士がついているようですから」

「騎士？」

いぶかしげに“楓香”を見やる“ネロ”。“楓香”は金属棒を震える手で握り睨みつける。

「ふふっ・・・笑わせないでよ、こんな弱弱しいのが次期ボスの騎士だって？
ボンゴレも落ちたものね」

ドドドドッ！！

“ネロ”は守護者のいる方向から発生した爆音と同時に駆け出し。
大鎌が金属棒に肉薄するが、それも一瞬のこと。

「そんなガラクタじゃあ、ねっ！！」

「楓香っ！！」

真っ二つになる金属棒。

そして・・・

ガキィッ！！

「よっと・・・間に合ったみてーだな」

「へぇ・・・」

「山本！！」

滑り込むようにして大鎌を受け止めたのは、爆風から抜けてきた雨の守護者。
だが、

「でも、そんな手負いの守護者が一人増えたところで・・・
死ぬ気の炎も纏ってないガラクタじゃ、アタシを止められないよ」

その勢いのまま“時雨金時”は弾かれ・・・

「ぐぁっ・・・」

回し蹴りによって蹴り飛ばされてしまう。
そして楓香の目先にその切っ先を突きつける“ネロ”。

「くっ・・・」

「ま、邪魔をするなら貴女も・・・ね」

フッハハハッ！！と高らかに笑う“ネロ”の姿はまさに楓香の命を刈り取ろうとする死神と化していた。

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　楓香

その時、

ツナ君が迷うことなく、ワタシを庇うように引き寄せ、前に出る。

「まて・・・お前の相手はオレのはずだ・・・
ふうちゃんは・・・楓香は関係ない」

「彼女がそれを邪魔するの、関係性大ありだわ。
それに、超（ハイパー）モードの解けた君に何が出来るのさ？」

「ぐっ・・・・・」

「それに・・・もう彼女は“闇の守護者にはなれない”」

「！！」

「や、やめて・・・」

ツナの守護者でいられない・・・

繋がりが・・・

もう・・・共にいられなくなって・・・

「闇を宿(す)べし者しか‘闇’のリングは使いこなせない・・・“ネロ(あたし)”という存在が彼女の中からいなくなった今、ボンゴレ“闇の守護者”としてはいられないのよ、夜代楓香!!」

「っく・・・ぁ・・・」

目の前が真っ暗になった・・・

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

楓香の目から光が消える瞬間を見た・・・

オレはかける言葉が思いつかない。

・・・そして、“ネロ”は勝ち誇ったように言った。

「そしてワタシは強い・・・生半可な覚悟じゃ、ワタシには勝てないよ」

覚悟・・・

「確かに・・・お前の言うとおりだ」

「!!
ツナ・・・君・・・」

「・・・でも」

オレの脳裏にかすめるもの。
このリング争奪戦・・・何が起こるかわからないこの戦いの中で、
オレ達はここまでくることができた。
でも・・・とてもじゃないけど、みんなが無事とは言い切れない。

京子ちゃんのお兄さんは両腕を大怪我して。

ランボは昏睡状態まで陥って。

獄寺君も掠り傷って言ってたけど、その傷は深くて。

山本は失明するかもしれないほどの怪我をして。

クロームも解毒されたとはいえ、まだ万全じゃなくて。
ヒバリさんも、ベルフェゴールとの戦闘で傷ついて。
・・・みんな、本当にボロボロだ。
「でも・・・楓香がいてくれて・・・
修業の相手もして、鍛えてくれて・・・
支えてくれたからこそ・・・」
――オレは・・・オレ達はまだここで戦っていられるんだって・・・
――
「！！」
「楓香がいなかったらＸＡＮＸＡＳに勝てなかったかもしれないし、
そこで倒れていたかもしれない・・・楓香がいてくれたから、まだ
戦っていられるんだ・・・」
「・・・そうっスね。楓香さんがいてくれたからこそ、ここまでこ
れたんスよ」
そうツナに相づちをうち、ボムを両手に構える獄寺。

「だな。・・・オレ達だけじゃあ、ここまでこれなかったな」

そう言って、竹刀を支えにして立ち上がる山本。

「うむ。極限に楓香は強い。そしてオレ達の仲間だ！」

そう言い、ファイティングポーズをとる了平。

「私も・・・夜代さんにはいろいろお世話になったから・・・」

「クフフフ・・・僕もマフィアに借りは作りたくありませんからね」

そう言って、三叉の槍を構えるクロームと骸。

「・・・夜代楓香には借りがあるからね、きっちり返させてもらうよ。それに・・・」

ゆっくりながらもしっかりとした足取りでフィールドに舞い戻る孤高の浮雲。

雲雀は不敵に笑い、チャキッとトンファーを構えた。

「・・・全力の夜代楓香を咬み殺したいんだ。余計なことはさせな

いよ。
勝ち逃げは許されないからね」

「みん・・・な・・・・」

「“闇の守護者”なんかじゃなく、‘夜代楓香’を待ってるんだ・・・だから」

オレはグッと拳を握りしめ・・・覚悟を心に。

そして、再び額に炎が灯り、手袋からグローブへと変化する・・・

キュオォォォッ！
ボウッ！！

「！？」

そして・・・オレ”は“ネロ”を睨みつけ、叫んた。

「お前は・・・オレ達が倒す！！」

すると・・・“ネロ”は心底おかしそうに笑いだした。

「くく・・・くっははっ!!!とんだ茶番だわ!!
そういう仲間意識とか友情とか・・・」

そして俯く“ネロ”の纏う炎が増大していき・・・

「美しいものほど・・・コワシタクナル!!」

それは“ネロ”の“狂気”を表しているかのように、その荒れ狂っていた。

ツナ達の周囲に漂い始める霧が隠れるほどに・・・

標的８７　【ボンゴレの覚悟　来る！】（後書き）

ようやく・・・！！

標的８８　【“闇”の守護者　来る！】（前書き）

Ｓｉｄｅ　リボーン

ちゃおっス。
氷雨に変わって、今日はオレ様が来てやったぞ。
まったく・・・氷雨はダメツナ並みにダメダメだな。
せっかくオレ様のぷりちーな活躍っぶりを書かせてやってるのに、
単位落として再履修で時間とれなくて書けねーなんて・・・

・・・オレがジキジキにかてきょーしてやらねーといけねーな。（ぇ

ダメダメな氷雨のやつはオレがミッチリ鍛えとくから、安心しとけ。

んじゃ、始めっぞ。

標的８８　【“闇”の守護者　来る！】

標的８８　【“闇”の守護者　来る！】

「ツナ！」

「山本、ここはオレがいく」

「！・・・わかった、頼んだぜ！」

山本に視線を向けたツナは山本に頷き返すと、臨戦態勢の“ネロ”に向きなおる。

「いくぜ」

ボボッ！！

右手のグローブに炎を収束させたツナは、後方に放ち一気に“ネロ”へ接近、拳と大鎌が肉薄する。

「はあっ！」

「クッ！！・・・確かに炎圧は上がったわね。けど・・・」

「！」

ツナの拳をはじくと背後に高速移動した“ネロ”は、その背に武器を振りかざす。

ツナは“超直感”でその攻撃を直感、上空へと逃れ回避する。

「メンドウな、お前ごときが初代（プリーモ）のチカラを・・・！」

憎しげにツナを睨みつける“ネロ”。その怒りを表すかのように、黒の炎は勢いを増す。

炎圧がさらに上がった“ネロ”はさらに優勢となり、ストッと目の前に着地するツナに視線を向け“ネロ”は怒りの中に笑みを浮かべる。

――すでにあんたはアタシに勝てない・・・！――

だが、ツナは“超直感”でその怒りの根源に気付き、“ネロ”に問いかけることによってその炎の勢いは途絶えた。

「なぜ・・・おまえは初代（しょだい）を憎む？」

「っ！！」

それは“ネロ”の核心を突く一言だった。

「・・・確かに、お前の怒りの矛先は常にオレだと、そう確信していた。

だが、お前が“超直感”のことを口にした瞬間、闇の炎の勢いが格段に変わった」

「・・・・・・」

ギリッと奥歯をかみしめる“ネロ”。

「お前が“闇の炎”なら、初代からいた“初代闇の守護者”の中にお前はいた・・・つまり」

「ふふっ・・・あははっ・・・」

「！」

俯き、自嘲するように笑う“ネロ”の雰囲気に、ツナは息をのむ。

「知ってる・・・どころじゃないわ。

“初代闇の守護者”と共に生き、ボンゴレに力を貸していたアタシにとって、あの男とは“知っている”程度の仲じゃない」

“ネロ”は思う。

最初から気に入らなかった。

仲間のために力をふるうその精神。

さらに、その心を見透かしたような瞳の奥に眠る“超直感”。

――“闇の守護者”としてではない、お前に・・・いや、お前たちに力を貸してほしい“レティスフィア”、そして“ネロ”・・・――

それ故に、ツナに初代ボンゴレボスの姿が重なって見え・・・

「あんたに・・・何がワかル・・・」

「!」

その言葉は、

「初代・・・ボンゴレに裏切らレタこの憎シミが・・・

貴様ナドニ、理解サレテタマルカ!!」

“ネロ”の狂気と化した瞳を表していた・・・

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　リボーン

「“ネロ”の様子が・・・!」

「ああ、完全に暴走しちまってんな」

理性を無くしちまったみてーに暴走する“ネロ”の攻撃を避けていくツナ。

・・・攻撃力が増したといっても、ヤツの攻撃は単純なものだ。危

なげながらもツナは“超直感”でさばき切っていた。

こうなったのが、ツナが言ったその一言が原因なら・・・

「（“ネロ”と初代の間に、何があったんだ・・・？）とにかく、オレたちにできることは一刻も早くここから抜け出すことだ」

「ですがリボーンさん、チェルベッロの言っていることが本当ならば、ここから出るには・・・」

「外から装置を解体しないといけねーってことか」

ディーノの言うとおり、外からセンサーを解除しねーとここから出れねぇ。

なら・・・

「ディーノ、家光たちはここにくるんだろ？」

「っ！そうか、門外顧問が来てくれれば・・・！」

家光たち門外顧問がすでに日本についていると聞いている、ならそろそろこの場に来るはずだ。

だが・・・

「問題は・・・ヴァリアー部隊の動向だな」

「！？

親方様たちが、ヴァリアー隊と・・・！」
鉢合わせになっちまってる可能性が高ーな。

「ししししっ、もう遅いってーの」

「いくら門外顧問といっても、数には勝てないだろうさ。あきらめることだね」

回線が開きっぱなしのチェルベッロによる拡声器で、今の会話が無効にも聞こえていたらしく、獄寺たちを足止めするベルフェゴール、マーモンが反応する。

「まっ、一人抜けちゃったけど、あの様子じゃ役に立ってないみたいだし」

「面倒だけど、これ以上は向こうにはいかせないよ」

「ぐっ・・・くっそーっ！」

獄寺が悪態を吐くが、あいつらの消耗具合じゃあ突破することはおろか、ツナを援護することすらできねぇ。

・・・と、その時。

ガキイッ！

骸がレイの隙を突いて弾き飛ばし、

「クフフフ・・・その心配はいらないでしょうねぇ」

不敵に笑い、そう呟いた。

「どうやら彼も、こちらに向かってるようですし・・・ね」

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　門外顧問

「ヴァリアー隊！？」

「かかれ！」

ベルフェゴールら幹部の命令により集結したヴァリアー隊員が、ツナ達の戦地へ向かう門外顧問と鉢合わせとなるまではものの数分だった。

さらに、現在わずか数名しか隊員を率いていない門外顧問は、戦力の差に気付いてしまう。

日本に着くまでの長時間のフライト中も緊張の抜けないものだったため、家光達、門外顧問の疲労は計り知れないものであることも、一つの問題だった。

さらに彼らは部下といってもボンゴレ独立暗殺部隊ヴァリアーの精鋭部隊。

多勢に無勢で打つ手のない家光達は、すぐに追い詰められ、家光は分断されてしまう。

流石の最強(アルコバレーノ)の赤ん坊であるラル・ミルチも、最後まで敵の狙いとなるだろう家光を守護していたが・・・

「くっ！この戦力差では・・・！」

「死ねぇっ！！」

「っ！しまった！！」

「親方様！！」

「くそっ、家光！！」

ここまでかと、家族を脳裏に浮かべて覚悟を決める、家光・・・

その時、男の叫びと共に凄まじい風が吹き抜けた。

――暴蛇烈覇（ぼうじゃれっぱ）！！！――

グオォォォ！！！

「「ぐあぁぁっ！！」」

目の前に迫っていたヴァリアー隊員を吹き飛ばしていくその暴風が収まったその先には・・・

「お、お前は・・・！！」

「取り込み中すまない。オレも同行させてくれないか？」

――――――――――――――――――――――――――――――

ガキイッ！

幾度と交わる拳と大鎌。

狂気により、“ネロ”の攻撃力は上がっていた・・・だが。

「クっ」

「はあぁっ！！」

ダッ

炎圧を上げたツナの拳をバックステップで避けた“ネロ”は憤りを隠せずにいた。

「くっ！ナゼアタシの大鎌を・・・！」

「・・・」

無言を貫くツナはおそらく、今の“ネロ”の太刀筋が読みやすくなっているからだろうと推測していた。それに、狂気の中に恐れが見える。

「（・・・けど、何を恐れているんだ？）」

一方、“ネロ”は膨大な死ぬ気の炎を操りながらも、その揺らぎに自らが動揺していることに気づき内心で悪態を吐く。

「（くっ・・・ヤツの顔が初代と重なって見てしまう・・・！意識しないようにしていたが、やはりヤツのアレを見てしまったからか・・・っ！）」

自らの身に起こった怒りの根源、その古き記憶が脳裏に映し出され、一瞬体が硬直してしまう。

“すまない、友よ。
だが、今のオレには・・・”

――ふざ、ケルナ・・・！――

“ネロ”はあの時のことを忘れはしない。

ボンゴレに裏切られたことを・・・

ふと視界に入るのは、怨めしくもレティスフィアに似る闇の継承者だった少女。

そして・・・

“フフ・・・”

「そうカ・・・闇の力ヲ出しきれナイのハ・・・貴様がいルからカ！」

「っ！？ま、まてっ！」

“ネロ”の急変に、ツナは反応が遅れてしまっていた。

先の攻防で立ち位置が入れ替わってしまっていた・・・突然踵を返して駆け出す“ネロ”にツナは半歩遅れて炎を噴かし高速移動に転じる。

そして、その矛先は・・・

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

迂闊だった・・・
“ネロ”との攻防に集中しすぎていたせいで、守るべき“楓香”を危険に晒すなんて！

せめて彼女の手に、身を守るものがあれば・・・！

「くっ、させねぇぜ！」

山本も何とか楓香への直線コースを遮るが・・・

「邪魔よっ！」

ガキィッ！

「ぐぁっ！」

「山本っ！」

疲労で受け止めきれない“ネロ”の一撃に弾き飛ばされてしまう。

死ぬ気の炎による推進力で距離を詰めるが、間に合わない！！
必死に手を伸ばすが届くはずもなかった・・・

ザザッ・・・

いち早く回避をとろうとする“楓香”だが、直ぐ様“ネロ”に遮られてしまう。

「くっ！」

「これで・・・」

スッ

振り上げられた大鎌は・・・

「さよならっ！！」

「「「ふうかーっ！！」」」

両手をクロスし守りに入る“楓香”の・・・

――・・・時はきたぜ、“楓香”――

纏う霧に阻まれた。

それはツナも聞いたことがない、男の声で。

「・・・だれ・・・だ?」

――「取り違えるなよ、門外顧問。オレはお前たちを助けにきたのではない。ボンゴレに・・・」――

「勘違いするなよ、“ツナ”。俺はお前たちを助けにきたんじゃない。“ツナ”、お前に・・・」

奇しくもそれは・・・

――「「礼を言いにきた」」――

迫る敵の手から門外顧問面々を守った、マフィア界でも北イタリア最強と恐れられた“ランチア”の台詞と同じものだった。

黒く一回り大きな、顔を隠すように目深にかぶった帽子。

そして全身を覆う黒いマント・・・

幻術によって構築された細い木刀をもつ謎の男によって、大鎌の切っ先は微動だにせず受け止められていた。

標的８９　【魂の共鳴　来る！】（前書き）

長いラグがあった前回の投稿にもかかわらず、読者の皆様からのご感想をたくさんいただきました！本当にありがとうございます！！

・・・内容そのものをタイトルにしようとしたら、こうなってしまいました。

決してとある鎌職人的な描写はないので、あしからず。

標的８９　【魂の共鳴　来る！】

標的８９　【魂の共鳴　来る！】

それは位相のずれた世界。

幾度となく響く爆音。
真っ白な空間に瓦礫があるだけ・・・いや、元々の神殿のような建物はその面影をわずかに残しつつもそれへと変化していたのだ。
その光景が、先程まで行われていた戦闘の激しさを現していた・・・

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　？？？

「・・・どうやら、お主が今世も迷いに捕らわれ、身動きがとれなくなっていたことは気づいておるようじゃな」

「！」

時間があまりないというのにピタリと手を止めた神（まじめモード）の一言に、“俺”は薄々気づいていた“楓香から弾き出された理由”が正しかったことを証明された。

だが、しかし・・・

「・・・当たり前だろ？夜代楓香は“夜代楓香”であり“俺”でもあるのだから」

「そりゃあ、そうじゃのお・・・」

前世での“俺”が捕らわれていたもの。
それはただひたすらに過去を“後悔”することだった・・・

“俺”がたった一人の家族を失ったのは2年前、丁度“俺”の人生が終わりを迎えた暑い真夏の日と同じくらい暑い日だった。

あの日から“俺”はずっと望んでいたのかもしれない。“彼女”を失い生きる意味をも失ったことで、この世を去ることを・・・

「おっと、ネガティブ思考に。・・・これも全部テメーのせいだぜ、神」

「・・・本当にすまぬの」

「お、おい。マジメに返すなって！
ったく、調子狂う・・・」

思わずガシガシと頭を掻きそうになったが、後でめんどくさくなりそうなのでやめた。

というか、何故こんなシリアスモード全開なんだ。

「謝んなよ、神。どちらかというと、“俺”はまた大切なことを思い出すことが出来て感謝してるんだぜ？」

――あの日、“俺”は今世に転生した事故と奇しくも同じく居眠り運転のトラックに“妹”と共にひかれた。
迫りくるトラックに逐一に気づいた“俺”は、数秒後にくるであろう衝撃から“妹”を守るために抱きしめるようにして目を瞑ったところから意識を失った。

・・・数時間後にとある総合病院で意識を取り戻した“俺”は――事故現場からこの病院が近くにあったという理由もあったことを後に知ったのだが・・・――奇跡的に一命をとり止めたのだと、担当の看護婦さんに聞いたのだった。
さらに幸いにも後遺症は残らないらしく、数週間後には退院できるともその時聞いた。

しかし、そんな明るい話ばかりであるはずがなかった。

「妹は・・・棗（なつめ）は無事ですよね？」

その時、看護婦さんの顔に影を落としたのに“俺”が気づかないはずがなかった・・・――

「・・・けど、“俺”はこんなところで止まってちゃいけないんだ。
信じられる友が出来た。

笑い合える仲間が出来た。
“俺”は“後悔”していないぜ、神」

退院後のあの頃の“俺”は、ただただ棗を救えず自分だけが生きていることに“後悔”していた。
・・・でも。

「それに・・・な」

――棗（なつめ）は信じてるよ、お兄ちゃんのこと。
どんなことがあろうと・・・絶対に諦めないって――

それは俺たち兄妹が二人きりになってしまった日のこと。
墓地の前で泣く妹をただ静かに抱きしめ、困らせまいと涙をこらえていたその夜の一言。
中学生になったばかりの妹だったが、棗なりに涙を流さずにいた俺を心配しての一言だろう。あれから“シスコン”の座を獲たのは言うまでもない。

そして・・・今、“俺”はここにいる。

「この世界に初めてきたときにテメーが言ってたこと、“俺”はしっかり覚えてるぜ？」

“俺”が闇の波動を持ってるということ。

それはこの“窮地”を脱する鍵になるはず。

「ふむ・・・」

何か納得したようにアゴヒゲを撫でているが、俺は肝心なこと、テメーから聞いちゃいねーぜ」

「おお、そうじゃった」

お、声に出ていたか。
まあいいや。

「確認をとりたい。“俺”が戦場に戻る鍵は、やはり・・・」

その起源は、“俺”の“後悔”という負の思考の渦・・・
そして恐らく其を理解しからこそ、“闇”の波動を・・・“闇”の炎の適正を得たのだろう。

「・・・お主の考えておる通り、じゃ」

なら・・・

――あとは“楓香”、お前が気づく番だぜ？――

自然と手が、今着込んでいる戦闘服のポケットに入っていた手帳に触れ、“俺”はそれを壊れ物を扱うようにそっと取り出して開き・・

・

二年前のオレと、幼き日のオレの妹・・・棗（なつめ）が軒先で写る写真を見つめていた。
自然と笑みがさす。

ホント、こんまま終わっちまうなんて冗談じゃないよ。
“俺”がここに・・・“この世界”に転生してきた理由、分かってるのかってこったな。
上層部かなんだか知らないけど、勝手にツナ達の世界を・・・消させやしないよ。

・・・脳裏にツナや獄寺、山本達の姿や京子やハルの姿が浮かぶ。
あの時、転生したとき“俺”は確かに決断した。

――もう、“俺”のような奴を作らせねぇ。“俺”の目の前で誰も悲しまねーようにしたいんだって・・・――

「おい神、この手帳だけ持っていっていいか？」

もう二度と迷わねーように、そしてそれが“俺”の戒めとなるように、“俺”はそれをお守りとして持っていくことを望んだ。

「うぬ・・・よかろう、それがお主の力となるなら。自宅の食卓の上に置いといておくからの」

神も俺の気持ちを汲み取ってくれたようで、アッサリ許可してくれ

た。

・・・いや、こんなもんを何も言わずにポケットに忍ばせたくらいだ、最初からそのつもりだったのかもしれない。

ま、だが今“俺”に出来ることは・・・

「さ、続きを始めるぜ？」

「・・・そうじゃの」

幾分となれたが、“過去”とも“今”とも重心の違う体に早くなれることと・・・

“楓香”を・・・みんなを“信じる”のみ、だな。

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

“ふーちゃん”の危機を救ったのは顔や体を隠すように被った、全身黒ずくめの男だった。

そして、聞いたことがない“声”。だが・・・

「（何故だろう、彼がいることで・・・）」

「・・・いくぜ、“ネロ”？」

「ぐ・・・ジャマをスるなぁっ！！」

ガキイッ！

互いの武器が肉薄していた状態から後方へ距離をとる“ネロ”が振るう一撃を・・・

「っ、らあっ！！」

「！？」

弾き返す彼からは・・・

「（俺たちはまだ戦える・・・！）」

それは、まるで楓香に感じていた安心感そのものだった。

そして、

「・・・遅いよ、“龍ちゃん”」

「全く、危機一髪とはこのことだぜ、“楓香”。それと“ちゃん”はやめてくれ」

“ふーちゃん”も安堵の表情を浮かべていた。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ“夜代楓香”

“闇”の波動が私の中から感じることができなくなっているのは、意識が表層に上がったときから気づいていた。
でも、知らぬふりをして・・・私はツナ君を圧倒的な不利の中でも守るために抗い続けた。
ツナ君たちとの繋がりは、“闇の守護者”としての私だと思っていたから。

・・・“ネロ”からその事実をみんなに知られ、私は再び絶望の縁に立たされた。

けど・・・ツナ君たちがその繋がりはもっと強固なものだと教えてくれた。
だから、私は“諦めない”。

・・・たとえ、“闇”の炎がなくても。

仲間を“信じる”この心があるかぎり。

――棗（なつめ）は信じてるよ、お兄ちゃんのこと。
どんなことがあろうと・・・絶対に諦めないって――

・・・お兄ちゃん？
そうだ、“私”は・・・“オレ”は・・・！

再び発生した“オレ”の中から感じる“闇”の波動に反応したのだろう“ネロ”が、その炎の大鎌の切っ先で私を捉えようとする。

・・・その時。

――時は来たぜ、楓香――

それは、肌身離さずもっていた“ヘルリング”から発生する濃霧。
そして徐々に姿を表した、その後ろ姿は・・・
“オレ”であり“夜代楓香”であり、言うなれば“私”でもある。

「・・・遅いよ、“龍ちゃん”」

「全く、危機一髪とはこのことだぜ、“楓香”。それと“ちゃん”はやめてくれ」

もう一人の闇の守護者・・・いや、“彼”こそが真の“闇の守護者”。

“朝岸龍牙（あさぎしりゅうが）”が、参戦した。

標的８９　【魂の共鳴　来る！】（後書き）

話が進んでないように見えるのは気のせいかしら？（そんなわけない

あ、ようやくオリ主の名前が明かされましたね。何のひねりがない

のは仕様です（ちょっ

標的９０　【《闇戦》　来る！】（前書き）

ようやく更新できました！
なかなか納得できるものができなくて・・・といっても相変わらずの駄文ですが。
夏期休暇はなかなかパソコンを触らせてもらえず・・・遅れてすみませんｍ（＿＿；）ｍ
それでは・・・どうぞ。

標的９０　【《闇戦》　来る！】

標的９０　【《闇戦》　来る！】

Ｓｉｄｅ　龍牙

名乗っといて今更だが、前世の名を捨てたわけではない・・・が、龍牙はすでに死んでいる。
それは、神にあった時点での必然的な真実だ。それでも“楓香”がそう呼ぶのは、俺がこういった形で表に出てきてしまったからだろう。
あっさりと理解できたのは実際、未練はなかったのだろうな。
あのころの俺は、確かに自らの内に秘めた“闇”を克服していただろうが、こうしてみんなに会えてとても充実した日々を送っている今と比べて。

・・・“夜代楓香”として転生したその日から。

いくら“ＲＥＢＯＲＮ！”というこの世界の未来史になり得るであろう物語を知ろうとも、それは俺にとっての現実で・・・
夜代（オレ）楓香にとっての全てで。
俺は・・・ツナと同じく、大切な仲間を失わないがために神との戦闘に必死に喰らいついていた。

「アンタ・・・何者？」

そう言い、訝しげに眉を潜める“ネロ”。
まあ、いきなり目の前に現れたんだ、さらに黒ずくめ且つ顔すら隠しているという怪しい格好。
・・・、俺が姿を隠しているのは、それなりの理由があったりするのだが。

だが・・・今は何者かは答えられねぇな。
それに、ツナや他のみんなからも視線を感じる。

「とにかく加勢するぜ。あいつを倒すんだろ？」

「ツナ君・・・」

「・・・わかった、頼む。
山本、楓香を」

「あ・・・ああ、わかった」

“楓香”の後押しもあってか、コク・・・と頷きそう返すツナと戸惑いつつも了解をとる山本。
ホント、超死ぬ気モードのツナは寡黙だな。

「・・・ってことで、俺が何者だとかそんな野暮なことは聞かないでおこうぜ？」

それに対し、フッと鼻で笑う“ネロ”。

「・・・まアそうダナ、アナタも楓香ト同じ・・・
死に逝ク者なド興味はナイ・・・！！」

興味ない、か。
・・・けど。

「俺のスピードについてこれたらな・・・！」

少し前の俺とは、訳が違うぜ？

俺はこの戦いに終止符を打つため、駆け出した。

――――――――――――――――――――――――

「やれやれ・・・やっと行きおったか」

タイミングはバッチリなんじゃが、如何せん体が持たぬわい・・・
と愚痴を垂れるだけ垂れたのは、転生させたはずの朝霧龍牙をこの空間にて先程まで鍛えていた神だった。
と、次の瞬間、何処からともなく小さな黒い影が神の背後に現れる。
そして、その小さな影は呼びかけた。

「っ！神様・・・」

「おお、問題なさそうじゃの。うむ、こちらも上手くいったぞ」

「はい、それと・・・すみませんでした」

頭を垂れる小さな影。
それに神はふぅ、と息を吐く。

「なんじゃ、まだ気をもんどったのかの？」

「っ！しかし、私がついていながら・・・！」

「くどいぞ、リリス！」

「！！」

“渇！”とばかりに叫ぶ神に、猫耳少女リリスはビクッと震え・・・

「あ・・・」

ドゴォォォォ・・・

・・・神自ら何処からか出現させた、中央にドデカく“渇”と書かれた背景板が倒れる音に猫耳を塞ぎ、神が下敷きになり潰されていた。

「ぬぉぉ・・・ちょっと遊び過ぎたわい・・・」

「はぁ・・・色々と考え過ぎてた私がバカみたいだわ」

おお、いて。とのそりのそり背景板の下から這い出てくる神（ギャグ要員）に、落ち込んでいたリリスも呆れ返っていた。

「・・・少しは落ち着いたかの？」

「・・・お陰様で」

リリスはそう短く返すと、明後日の方向を向いた・・・いや、その先にある何かを見ていた。

「で、楓香・・・いや、“彼”はどうやって戻ったの？
たしか貴方の話じゃ今の段階では“夜代楓香”の体に戻れないって言ってたわよね？」

リリスはそれが解決する今の今まで、神界の上層部の動きを見張っていたのだ。
リリスは猫神といえど神格化してからそう経っていない。それにより、彼女が隠密性に秀でていることを知る者は数少ない。

「・・・“彼”の魂そのものは、不安定ながらも夜代楓香の深層部に眠っていたことは、話しておるな？」

「ええ」

リリスはそう短く答え、それを解決するために神が“彼”の意識をこの境界につれてきたことを思い出す。

「そして、その解決策として二つ通過しなければならぬ点があった。
一つは今の主人格・・・“夜代楓香”に“彼”を再認識させること」

そして神はリリスに、先の一部始終を簡単に説明した。

「・・・そう、それは彼らが解決してくれたのね？」

「うむ」

「そっか・・・ほんと、よかった・・・」

リリスは目頭を押さえ、グッとあふれ出そうな涙を堪えた。
リリスは楓香の側でツナ達を見極め、彼らなら大丈夫だろうと踏んでいたが、心の何処かで不安に思うところがあった。あの時の楓香の絶望に満ちた瞳が忘れられなかったのだ。

そしてそれはリリスにとって、古い記憶に鮮明に残るほどであったある事件と重なってみえたこともあってだろうが・・・

「・・・落ち着いたかの？」

至って穏やかに尋ねる神に、リリスも落ち着きを取り戻していた。

「・・・ええ。

でもそれだけじゃ、現時点で彼が表にでることは出来ないはず・・・」

“夜代楓香”がもう一人の自分でもある“彼”に気づいたとしても、不安定だった二つの魂の均衡が崩れ、一時的にもハッキリと別れてしまった今となっては容易に“彼”が主人格となることはできない。

もどかしそうに、リリスは先を促す。

それに神はニヤリッと笑った。

「だからこその“ヘルリング”じゃ」

「・・・へる・・・りんぐ？

・・・そうか、偽装（カンファメント）のヘルリング！」

それは転生後、楓香が望み、手に入れたこの世に６つとない、呪（ヘル）いの指輪（リング）という新たな力。

それによって、まだ術士として不安定な“楓香”であっても、“有幻覚”として“彼”を表の世界へ出現させることができたのだ。

もっとも・・・

「でも、それはそのリングを肌身離さずもって持っていたから出きる芸当よ。

一度ヴァリアーに捕らえられちゃった楓香の手元に、未だにあったのは奇跡ね」

「ところがどっこい、奇跡でもないんじゃぞ？

・・・と、それはよいとして」

意味ありげにはぐらかされたリリスはムッとなるが、宙に映された楓香達の映像を見て・・・“ネロ”の姿を見たリリスは一瞬スッと目を閉じ気を引き締め、その開かれた目にはいつになく真剣な眼差しだった。

「私達が残してしまった業（ごう）・・・
彼女の覚悟を見届けなきゃ・・・ね」

「・・・というかお主、口調が戻っておらぬか？儂は気にせぬが」

「・・・もう敬う気持ちなんか飛んでいったわよ」

「儂の扱い、酷くないかの」

ジト目で神を見やるリリスに、涙目になる神。
どうやっても、しまりがない神だった。

―――――――――――――――――――――

“龍牙”が駆け出した次の瞬間、“ネロ”の目の前には刃が迫っていた。

スッ・・・！

「！！」

「なっ、速ぇ（はえ）・・・！」

消えたように移動した“龍牙”に、それを見ていた山本達は驚く。

寸でのところで反応した“ネロ”は紙一重で避けつつ黒い炎の刃を形成、“龍牙”は沿えるようにして軌道をそらし懐に潜り込み、“ネロ”を蹴り上げた。

ゴッ！

「ぐっ・・・」

宙に躍り出た“ネロ”は、勢いを殺さず“龍牙”から距離を取りつつ数メートル離れた位置で着地した。

・・・着地地点のすぐ後ろで、脇に木刀を構える“龍牙”に気付かずに。

「（一刀流、完成形・・・！）」

そして、今。

「霧雨！！」

ズザァッ！！！

「ぐアっ！！」

木刀の刃が、“ネロ”をすり抜けていった。

「ク・・・ぅ・・・」

まるで斬られたかのように、後ずさる“ネロ”には苦悶の表情が写る。そして、ついに膝を着いてしまった。

―――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　獄寺

「なっ、今の技・・・！」

“霧雨”・・・

野球バカの技に似てる・・・？

「どうやら今の斬撃は、“ネロ”のみを斬ったようですね」

！

背後から聞こえた、今の声は・・・

「「骸・・・！？」」

クロームを支えつつも、今にも消えそうな六道　骸だった。

「クロームを頼みます。力を使いすぎました・・・」

「なっ、待ちやがれ！てめーの相手はどうした！」

い、いきなり押し付けられてたまるか！

それよか、こっちもナイフ野郎の相手をしてんだ！そんな余裕は・・・

「・・・ん？何してたんだ、オレ？」

「ム・・・？これは？」

対峙していた二人の動きが止まったのは、丁度その時だった。

・・・あきらかに様子がおかしい。

「どうしたというのだ？」

正直いって、嵐戦でナイフ野郎にやられた傷で体力を殆ど持っていかれちまってる、芝生頭も血を流しすぎてることもあり、そろそろ部が悪い。

骸は使えそうにねーし、これ以上戦いが長引くのは避けてぇが・・・

と、その時。

カララン・・・

「・・・なんか王子、疲れちゃったし。
止めにしね？」

「ム・・・そうだね」

「て、てめーら、何のつもりだ！」

いきなり降参の意思表示をするナイフ野郎とマーモン。
だが、それに答えたのは骸で・・・

「おそらく“ネロ”のマインドコントロールが解けたのでしょうね。
ボスであるＸＡＮＸＡＳが負けてしまった以上、“ネロ”に手を貸す必要はなかったはずですから。
・・・彼も“ネロ”が一撃を入れられた瞬間、別人のように態度を翻(ひるがえ)しましたし。
今は彼らの手に渡っているようですが」

「獄寺殿、笹川殿！」

「「！」」

今の声は・・・バジル！？

「無事か、お前ら！」

「親方殿、楓香殿が！！」

「だが、我々が手を貸すことは・・・」

「ああ、今は手を出さねーほうがいいかもしれねーな、家光」

振り向けば跳ね馬にバジル、門外顧問とリボーンさん達が駆け寄ってきていた。

そして・・・

「レイ・カーベル・・・！」

ディーノに肩を貸されてやってきたのは、まさかの敵の“闇”の守護者だった。

だが、そいつは・・・

「私がみなさんに迷惑をかけたようで・・・本当に申し訳ありません」

「「！！？」」

突然、誤ってきやがった・・・！！

「ど、どーいうことなのだ・・・？」

「てめっ、今さらどーいうつもりなんだ！！！」

「落ち着け、獄寺！」

骸が言った通り、確かに別人のようだが・・・油断ならねえ！
ディーノはそう言うが、ここは・・・

「覚えていないようですよ、マインドコントロールされていた今までのことを」

「！」

覚えていない・・・だと！
だが、骸が言い放ったそれは・・・

「・・・どうやら本当らしいぞ。そもそもこいつは、“夜代家”の人間だったからな」

リボーンさんの衝撃的な言葉によって、確固たるものとなってしまった。

――――――――――――――――――――――――――――――

“龍牙”は叔母である千雨の体を傷つけることなく“ネロ”のみを斬ったことに、“ネロ”自身も驚きを隠せなかった。

「どう・・・シテ・・・」

チャッ

“龍牙”が木刀を一振りすると、霧が舞う。

「俺は有幻覚で、こいつも有幻覚。
お前が“闇の炎”であるなら、てめーだけを切るなんてほかないぜ？」

とある空間での神との戦闘で使用した、山本との修業からつかんだ技、“霧雨”。
“龍牙”はさらに改良を加え、“ネロ”のみを斬る技としたのだ。

「（とは言うものの・・・）」

姿を隠すための黒マントは、すでに裾から有幻覚の構築が崩れてきていた。
“龍牙”・・・いや、夜代楓香も予想以上に“死ぬ気の炎”を消費していたのだ。
ヘルリングのお陰とはいえ、この“龍牙”でいる状態が何時までもつか、分かったものじゃない。

「（さっさと片つけねーと、やっかいだな）」

“ネロを封じる方法”は彼女の恐れからすでに気づいていた。
だが、今封印してしまえば、先に彼女が言った通り・・・“楓香”が、夜代楓香が闇の守護者である資格を失ってしまう。

・・・それについても、“龍牙”はおそらく成功するだろう、最も簡単な一つの解決案を見い出していた。
この姿を彼女に見せればいい。その為に“龍牙（オレ）”は“朝岸龍牙”で

あることを捨てた。

「（俺の姿を見せれば上手くいくかもしれない。・・・でも、それじゃあ、）」

――すまない、■■■■■。オレが未熟なばかりに・・・――

もう、それはただの記憶の一片とだけでしか、残されていなかった言葉。

“龍牙”がこの世界にやってきた理由（いみ）。

「（何も・・・解決しない）」

“龍牙”は迷いを振り払い、再び足を進めた・・・

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　楓香

――たすけて・・・くらいよ・・・――

聞こえる、彼女の助けを求める声が。

――おねがい・・・だれか・・・――

今更だけど、私は何故気づいてあげられなかったのだろうと後悔していた。

今ならハッキリと聞こえる“彼女の本心”。
ずっと一緒にいたのに・・・耳を貸そうとしなかった。
だって私は、そんな貴女に怯えていたから。
もしかしたら、私が特殊な“転生者”だったからかもしれない。
けど、その“記憶”があったからこそ私はあの日、決意したんだ。

――もう二度と、大切な人を失わないように・・・――

・・・千雨さんを、お母さんと勘違いして心が砕け、その負の感情に反応して出てきてしまった“彼女”。

“ネロ”を止める方法は“龍ちゃん”も気づいている。けど、それじゃあ駄目なんだよね。

なら・・・“私”の出番かな。

「っ！
楓香、まだ・・・」

「ツナ君、大丈夫だから。・・・これは、私の戦いだから」

制するツナ君をなだめる。
ツナ君にも感謝しなきゃ。

もしかしたら私という“イレギュラー”がいなきゃ、こんなことにはならなかっただろうし、ツナ君達自身の力でこの戦いを乗り越えていただろう・・・と考えなかったってことはない。

けど、ツナ君は私を“仲間”だと認めてくれた、
・・・本当はツナ君を守らなきゃならない私が、いつの間にか彼に守られていた。
そして“ネロ”の標的はツナ君、今度は私が彼を守らなきゃ、だけど・・・

一度だけワガママを聞いて欲しいな。

「どこにいくつもりだい、夜代楓香」

「！」

ヒュンッ

パシッ

っと、不意に飛んできた、慣れ親しんだモノを手に掴む。
それは・・・

「ヒバリ！」

「これ以上風紀が乱れるのはごめんだね、早く終わらせなよ」

戦いを共にしてきた武器・・・雲雀が投げ渡したものだった。

と、ふらっと倒れそうになり、山本が慌ててかけよる。

「お、おい、大丈夫なのか」

「・・・余計なお世話だよ」

ムスッとしながらその腕を振り払う雲雀。

私はクスッと笑うと、ツナ君の方へ目を向ける。

「ツナ君・・・」

「・・・わかった」

ツナ君も渋々と言った感じで通してくれた。

・・・彼もこの修業で強くなったんだ。私も“覚悟”を決めなきゃ。

ふらつく体を足で踏ん張り、私は歩みを進めた。

「“龍ちゃん”、私も戦うよ。
これは“夜代楓香”の問題だから」

「！」

しっかりとした足取りで“龍牙”の隣に立った“楓香”。
そして“ネロ”はそんな“楓香”を睨み付ける。

「クっ・・・キサマ・・・！」

「ごめんね、“ネロ”。私が弱いばかりに、貴女を受け止められなくって」

「・・・」

“龍牙”はうつ向き、静かにその懺悔を聞いていた。
２ｎｄモードと名付けた、夜代楓香の状態はただ“闇”の心に衝動的な暴走によるものだった。
それが、夜代楓香の疲労に繋がり、“彼女”への負担にもなっていたのだろうという答えに、“龍牙”は至っていた。

「フザ・・・けるな・・・！」

楓香のその言葉に、その瞳に再び意思を宿す“ネロ”。

「また、わかったような口を・・・！」

「『心を閉ざすな、ネロ！』」

「！」

“龍牙”の、“楓香”でない女性の声と重なって聞こえてくる突然の叱責に、驚く“ネロ”。

「『今のお前なら分かるはずだ・・・初代が何故お前を封じたのかを』」

「・・・！うるさい！」

「『唯一、心を許していた人がいなくなって、お前は初代達に刃を向けてしまった』」

「うるさい、うるさいっ！！」

吐き捨てるようにして否定する“ネロ”に、“龍牙”は止まらない。

「『それでも彼はお前を生かし、俺達に託したんだ。心を許せる、相棒（パートナー）の存在に』」

「うるさい、そんな言葉で・・・！」

「遅くなってごめん・・・でも、今ならハッキリと言える」

“楓香”はその思いを・・・“ネロ”に告げた。

「“闇”の力とか、マフィアとか関係なく・・・私は“ネロ”を助けたいんだ」

「！！」

そして、“楓香”はなんの躊躇もなく、“ネロを”・・・

抱きしめた。

“ネロ”は突然のことに混乱する。

彼女の大切な“モノ”を壊そうと思ってた。

“憎きボンゴレ”を壊そうと思ってた。

なのに突然・・・何故？

「『“ネロ”、今一度聞くぞ。お前が欲するのは《怒り》か？《憎しみ》か？・・・《負の心》か？それとも・・・』」

そして、“龍牙”がから発せられたその言葉は・・・

「『《仲間》か？』」

“ネロ”の心を突き動かすのに、十分だった。

ゴオッ！

「きゃっ！」

「『っと』」

突然、黒い炎が“ネロ”を中心に舞い踊る。

弾き飛ばされた“楓香”を難なく受け止める“龍牙”は、“ネロ”の言葉を待った。

荒々しくうねる闇の炎。
だが、それは制御を失っているように暴走していた。
そして“ネロ”は静かに口を開いた。

「たす・・・けて・・・」

それはまるで、幼子のようで・・・

「助け、てよ・・・」

それは一番、聞きたかった言葉で・・・

「あたしを・・・助けて！」

「っ、獄寺！」

「なっ、んだこれは！」

ディーノに指摘され、骸から受け取ったボンゴレリングのチェーンの異変に気づく獄寺。
そして、それは・・・

「っ、“闇”のリングに・・・炎が！？」

『“ネロ”。お前の覚悟、しかと受け取ったぜ』

完全に女性の声となった“龍牙”の黒マントが、溶けるようにして消えいく。

そして、そこには・・・

「レ、レティ・・・？」

“ネロ”にとって忘れもしない・・・良き理解者であり相棒（パートナー）であった・・・

初代闇の守護者

“レティスフィア”の姿が、そこにあった。

標的９０　【《闇戦》　来る！】（後書き）

補足。

《偽装のヘルリング（カンファメント）》

保有者：夜代楓香

形状：通常のＡランクの霧リングに酷似したリング（十年後の骸が所持していた瞳（マッキャロ）のヘルリングに並ぶ能力を持つ、２つ目のヘルリング）

世界に６つしか存在しない超レアな霧属性の呪いのヘルリングの１つ。他のヘルリング同様、使用者の精神と引き換えに戦闘力を何倍にも引き上げる戦力倍加という力を持つ。

偽造（カンファメント）のリングの能力を使用すれば、あらゆる物の本質を見透かし、また対象の人物の情報を手に入れることで無二の変装使いとなる力が得られる。

また、このリングによる幻術での偽装は強固で、たとえ術者が亡くなったとしても、その幻術は術者の魂をもって半永久的に持続する。そして、名だたる殺人鬼が不可能犯罪の記録を遺したのも、このリングによる幻術の偽装が原因だともいわれている。

ただし、その機能と並行し高度な術士でなければリングを使用していない限り、リング自体の存在すら気づくことはない。

現在の使用者である楓香は、神による体質の付与により呪いなどを一切受け付けないので、精神を喰わせずとも死ぬ気の炎の炎圧さえ上げれば力を引き出すことができる。

おそらく、いままでで最長になりました・・・いろいろ詰め込みすぎたかと。

次回は二～三日後にて。（＾＾）ノシ

標的９１　【救済、そして・・・　来る！】（前書き）

すごい難産です。また修正するかもです
では、どうぞ＼（＾＾）／

標的９１　【救済、そして・・・　来る！】

標的９１　【救済、そして・・・　来る！】

その声から男と思われた人物は、幻覚によるフェイク。
その髪は雪のように白く、その瞳は大空のように青い・・・
まるで数年後の楓香をさすような、一人の女性がそこにいた。
そして、その姿に“ネロ”は驚きを隠せない。

「な、なんで・・・」

何故なら、彼女は“ボンゴレ”に殺されたはずだ、それにもし生きていたとしても時間軸において悠久を生きる“ネロ”と違い、すでにその命を終えているはず。
混乱する“ネロ”に、慌てたように彼女は言った。

『ちょっと、気を抜くんじゃない！』

ダッ！

「“ネロ”ちゃん！」

勢いを増す炎に、飛び込んだのは“楓香”だった。
このままじゃまずいと判断した《レティ》は幻覚構築された木刀を

後ろ手に構え、そして・・・

――2連斬!!――

二閃の斬撃が黒い炎を“楓香”から遠ざけ・・・

――――《“ネロ”・・・いくらボンゴレが強くても、やっぱりお前には相棒(パートナー)だ。
けど、オレがずっとお前のそばにいることはできない》

《レティ・・・》

《それでも・・・“ネロ”、お前の信頼できる相棒(パートナー)が現れるまで、オレは見届けてやるよ》

《・・・うん!》

――――――蘇(よみがえ)るあの時の記憶、そして約束。

ギュッ・・・

「大丈夫・・・絶対、守るから」

「あぁ・・・」

ちりちりとその服を焦がしながらも、しっかりと・・・二度と放さないように抱きしめる“楓香”。
そして・・・

「お願い、“帰ってきて、ネロ”！」

『・・・そこがお前の居場所、そうだろ、“ネロ”？』

「・・・はいっ！」

それに応えるように闇は四散する。

そして、再び闇の守護者は・・・ここに顕現した。

―――――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ“龍牙”

・・・これで終わった、か。

「１０代目！楓香さん！」

「沢田殿！楓香殿！」

そう駆け寄ってくるのは獄寺、バジル。
そして遅れて門外顧問や守護者たちがここに集まってきていた。

「！楓香・・・」

「家光叔父さん・・・お願いします」

そして“ネロ”という魂の核が抜けた、千雨さんの亡骸を門外顧問・・・家光とオレガノが“楓香”から受け取り、優しく真っ白な布で包める。

が・・・

「千雨に触るんじゃねぇ！！クソどもが！！！ぐはっ！！」

「！！
ＸＡＮＸＵＳ（ザンザス）・・・」

闘志を燃やすも、すでに憤怒の炎の枯渇と疲労で動けないＸＡＮＸＵＳ、ツナはそんなＸＡＮＸＵＳに向ける言葉が見つからなかった。

「ＸＡＮＸＵＳ様・・・」

「チェル・・・ベッロ・・・」

仰向けに倒れるＸＡＮＸＵＳに近づくチェルベッロ。
ＸＡＮＸＵＳは恨みがましく睨みつけるしかなかった。

「おま・・・え達の・・・望み通りだ・・・
予言が当たり・・・満足か・・・」

「お言葉ですが・・・これは我々の望みでも予言でもありません。
全ては決まっていたこと。あなたの役割を終えたのです」

意味深な発言を残すチェルベッロ。
ＸＡＮＸＵＳは予言といった・・・もしやこれも予測された未来だったのか？

「・・・タヌ・・・キ・・が・・・
うぅ・・・」

ＸＡＮＸＵＳはそう言い残し、意識を失った・・・

「・・・オレガノ、ターメリック。彼女を頼む。

楓香の家族だ。くれぐれも、丁重に・・・な」

「っ！待て、家光！！」

そう呼び止めるのは他でもないスクアーロだった。

「・・・こんなこと頼めた義理じゃねーが、ＸＡＮＸＵＳが唯一愛した人間だ。
せめて、最後は居合わせてやってくれねーか！頼む！！」

「「！！」」

「スクアーロ・・・お前・・・」

車いすの上ながらも家光に深々と頭を下げるスクアーロ。その姿に長年彼を知るディーノも驚いていた。

まさか、スクアーロが頭を下げてまでＸＡＮＸＵＳの願いを叶えようとするとはな・・・その忠誠心、さすが未来の作戦隊長だぜ。

けど、これだけのことをやらかしたんだ、さすがの家光も・・・

「・・・５日後、改めて正式な葬儀を行おう。
・・・もっとも、９代目のご意向次第だが」

「「親方殿！？」」

「これは俺達“門外顧問”の責任でもある。・・・それに彼女もそ

のほうがいいだろう」

「！！・・・すまねぇ」

・・・どうやら家光叔父さんにも、思うところがあったんだろうな。
それにしても、９代目の意向・・・？
いや、もしかしたら・・・

千雨さんが亡くなった日、何が起こったのか・・・家光叔父さんも知っているのではないか？
まあ、こうして無事解決したんだ・・・

――もしかすれば、お主は選択に駆られるかもしれぬ・・・――

ふと疑問が頭を過る。

まて、こんなアッサリと？
確か“ネロ”は膨大な“闇”を操っていたはずだ、正気に戻った彼女自身、把握できないほどに。

「どうしたんだ、ツナ？」

「１０代目・・・？」

そんな事を考えていると、ふと俺は超死ぬ気モードを解かずにいる

ツナに山本達が不思議そうにしている姿を捉えた。

・・・と、それは突然。

―ゾクッ!!―

「『楓香!』」

「えっ、な・・・」

悪寒の先に、俺達は同時に駆け出す。

“ネロ”が無事戻ってきてくれたことに安堵し、俺は油断していた。

まさか・・・

“闇”の集合体が、“楓香”を射ぬかんとしていたなんて。

幸いそれほど離れずにいた俺は、“楓香”の前に踊り出る。

防御をとれるはずもなく。

ズドッ!!

『あっ・・・』

俺は“闇”に貫かれた。
“闇”によって受けたダメージは大きかったようだ・・・自らの消滅を感じてた。
――最後にカチリという音が聞こえたような気がした・・・――

――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　ツナ

“リュウちゃん”と呼ばれていた彼・・・いや彼女に皆の視線が集まる。
消滅という、最悪の形で。

「っ！！楓香！」

目の前で“彼女”が消えたからかもしれない。
名を叫べども、気を失ったように返事がなかった。

「うそ、だろ・・・！」

「な、なんなのだ、あれは・・・！」

獄寺、お兄さんの驚く声が聞こえる。
そして、視線の先には・・・

グォオ〝オ〝オ〝オ〝オ〝・・・ッ!!!!

闇夜に染まることがないほどの真っ黒な何か。
ただ、それは・・・

【ニクイ・・・!】

「「!!?」」

負のオーラを・・・心に響く程の叫びを放っていた。

「っ、マズイ!おめーら、下がれ!!」

ディーノさんの叫び声に、皆、放たれるその“闇”から離れていく。
だが・・・

「10代目!?」

「・・・・・・」

膝を着きうつ向いて動かない楓香を、オレは守るように立った。

「こいつが狙っているのは、楓香だ。
オレが・・・止めてみせる！！」

楓香を守ると誓った筈なのに・・・！

負のオーラに充てられ、焦燥感に囚われたオレは・・・

「はあぁっ！！」

ホボウッ！！

死ぬ気の炎を乗せたパンチを放った。

・・・が。

グォオ〝オ〝ーッ！！

「くっ！！？」

まるで巻き込まれるように拳を絡めとられてしまう。
オレは慌てて逃れよう炎を吹かした。
だが・・・

「（びくともしない・・・！）」

それほどまでに、既に戦闘によって気力が残っていなかったことも

あってか、そこから逃れる術もなく・・・

「じゅ、１０代目！！」

「ツナ！！」

「沢田！」

「ボスっ！！」

皆の声が聞こえる・・・既に炎がオレを貫かんとしていた。

そして、オレは浅はかな行動にようやく気づいた。

そして、

「（みんな・・・ゴメン）」

ドオオォォォォッ・・・

目の前で“闇の炎”が舞った。

――――――――――――――――――――――――

ツナは死を覚悟していた。
けど・・・

「（あたたかい・・・？）」

その暖かな何かに包まれているような感覚。
そして・・・

――待たせた、ツナ――

その声の主に、目を見開くツナ。
なぜなら、それは・・・

ググッ・・・

「そんな生ぬるい炎じゃ、オレは倒せねーぜ？なんせ、オレは・・・」

「！
ふう・・・か・・・」

炎を纏いし大鎌で“闇”の一撃を受け止め、艶やかな黒髪を靡かせた・・・

「ツナの仲間（ファミリー）だからな・・・！！」

１０代目ファミリー“闇の守護者”、夜代楓香がそこにいた。

標的９１　【救済、そして・・・　来る！】（後書き）

楓香、ついに完全復活・・・！？

標的９２　【新アイテム　来る！】（前書き）

またまた遅れてすみません・・・

標的９２　【新アイテム　来る！】

標的９２　【新（ニュー）アイテム　来る！】

Ｓｉｄｅ　？？？

（うっ・・・？）

目を開けると、一面の青々と茂る芝生と青空。

・・・どうやら、例の神殿みたいなところじゃないし、なら、ここは？

俺は不思議そうに自分の手を見つめた。

『っ・・・？俺は“闇”に殺られて消えたはず・・・』

それは俺にとって最大の汚点となったであろう、最後に残っている記憶だった。

――ヤツの“闇の炎”には気を付けるのじゃぞ？それは、お主の存在すら焦がすからの・・・――

あの時に神がいつになく真剣な表情で放った言葉が蘇る。
多くは語らなかったが、俺には理解できていた・・・

・・・あの“闇の炎”に触れれば、存在ごと消されることを。

死ぬ気の炎を灯した武器ならどうやら防ぐことはできるようだったが、俺は無防備な腹を貫かれたのだ。
有幻覚とはいえ、ヘルリングによって極限まで高められた“リアリティー”により、俺は直後に意識が暗転した。

まさか、異世界トリップ!!?

・・・いや、それはないか。

だが、それじゃあ今の俺は・・・

「幽霊?いいえ、あなたは“私”よ」

『!・・・ふう・・・か?』

いつの間にか目の前に現れた、並盛中学の制服に身を包んだ、“夜代楓香”。
そして、彼女は呆れたようにため息を吐く。

「はぁ・・・まだ気づかないの?」

『・・・？あっ！』

よく見ると、俺自身も“夜代楓香”だった。

ってことは・・・

「魂の結合が上手くいったみたいよ」

『！』

・・・そうか、ギリギリ間に合ったってことか。

ホッと安堵のため息を吐くのも束の間、“彼女”は首を横に振る。

「けど・・・アレは解決しなかった、一応伝えとく。・・・といっても、既に《一つの魂》なんだから、分かると思うけど」

アレというのがなんなのかはスグに理解出来る。

・・・神が警告していた事が、起こっちまったか。

『！・・・ゴメン』

「なんで貴女が謝るの？」

不思議そうに首を傾ける“彼女”。

なんでそんな・・・

・・・ああ。

『？・・・そっか、そうだよね』

そうだったな、謝る必要はないか。
コクッと頷き、笑顔になる“彼女”。
何せ・・・

「『オレ達は“夜代楓香”。“闇”の守護者だから・・・！』」

その言葉が合図となり、俺は・・・いや、楓香（オレ）は現実世界に戻っていった。

――がんばって・・・楓香！！――

少女の応援する声が聞こえたような気がした・・・

――――――――――――――――――――――――

ガキイッ！

「よっ！」

ダッ！

“闇の集合体”からの攻撃を弾いた楓香は、ツナと共に地面に降り立つ。

「まったく、無茶しないでよ」

「・・・ごめん」

少し落ち込むツナに、楓香はクシャッと頭を撫でる。

「まっ、説教はあとあと。とにかく・・・」

グオォォォォォォッ！！！！！

“闇”は猛獣のような怒涛（どとう）の叫びを上げる。

何重にも聞こえるその不協和音は、楓香達の体の奥深くまで響いていた。

そして、吹き荒れる殺気と、命を脅かす炎。

・・・だが、楓香達の“覚悟”は折れることはなかった。

「・・・アイツを倒さなきゃ、ね」

「・・・ああ」

正直のところ、ツナも楓香も死ぬ気の炎を殆ど残していなかった。
ツナは楓香の修業を受けて本来よりもその許容量は増えてはいたが、
先の戦いであとわずか。
そして、楓香も同様。

・・・しかし、二人には切り札があった。

「ツナ、ヤツの弱点は分かるな？」

コクッと頷き肯定を示す。
ってか、ホントに寡黙なのな、と楓香は内心苦笑いする。
ツナはその弱点に、すでに気づいていた。
それは、“ネロ”から超直感で感じた恐怖心。
それは・・・

「「（やつが一番恐れているのは・・・
ツナ（オレ）の零地点突破！！）」」

“闇”の全てが死ぬ気の炎で出来ているためにもっとも有効とされる技・・・

遠い過去に、初代ボンゴレボスが“ネロ”を封じるために使用した、

ボンゴレの奥義だった。

ヤツが待ってくれるとは思えない、と考えた楓香は、ツナに要点だけ伝えることにした。

「ツナ、オレがヤツを引き付ける」

「!!だが、それは・・・」

何か言いかけるツナを、手で制す楓香。

「いいから、聞いて。
ヤツに奥義を当てるには、接触しなきゃならない・・・
オレがなんとかして隙をつくるから、その隙に」

「わかった、頼む」

「りょー・・・かいっ!!」

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　バジル

ダッ!と駆け出す楓香殿に、“闇”は炎の弾丸を放つ。

ドゴゴゴゴッ・・・！！

「避けた！！」

すんでのところで右へと避け、楓香殿は更に“闇”のいる地点から反時計回りに駆け出す。

「楓香殿は、何を・・・？」

「楓香のやつ、ツナからヤツの注意を引き離そうとしてるのか！？」

「ああ。
どうやらこの戦い、ツナが鍵を握ってるようだな」

拙者の問いに答える、ディーノ殿とリボーンさん。
しかし、沢田殿が鍵を握っているとは、どういう・・・

「そうか！
ＸＡＮＸＡＳの憤怒の炎を封じた“零地点突破”なら、“闇”を封じることができる・・・！」

「だが、楓香も疲労はそうとう溜まってるみてーだな。
動きにいつもの精彩がねぇ」

ディーノ殿の言うように沢田殿の、ボンゴレの奥義が“闇”に届けば勝てるようですね。
しかし、リボーンさんの言う通り、いつもの楓香殿ではなく・・・

危なげに“闇”の弾丸を避けて・・・！

「くっ！」

ドゴォッ！

その時、楓香殿が一瞬立ち止まり、弾丸が直撃した・・・！？

「ああっ！」

「直撃！？」

「いや、当たってねーようだぞ」

舞い散る粉塵の中から、躍り出るようにして大鎌の切っ先を“闇”に向け飛び出す楓香。

「はあっ！！」

それをゆらりと後ろへ避ける“闇”。

そして・・・

シャッ！！

一気に加速、“闇”の背後を取った沢田殿。

「（行けっ、ツナ！！）」

楓香殿は“闇”に猛攻撃を仕掛け、注意を完全にそらした・・・

・・・はずだった。

ズンッ！

「っ！！」

ゆらゆらと縦横無尽に動いていた“闇”の炎が、まるで意思を持ったように槍のようなものが沢田殿へと延びていったのだ。

「ツナっ！！」

ボボッ！

“超直感”でその危険を察知した沢田殿は回避、だが零地点突破のチャンスを逃してしまう。

そして、楓香殿に向けて“闇”がニヤリと笑った・・・

――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　楓香

「（バカな！？こいつは意思なんてないはず！・・・まさか）」

その時・・・“声”が聞こえてきた。

――ユルセナイ・・・！――

――フクシュウ・・・ヲ！！――

――コロ・・・ス！！――

・・・そうか。

戦闘力が高いのは“暴走”なんかじゃない。

その“執念”だったんだ・・・

グオオオオオオオオオオオオ！！！！！

その叫びと共に、オレに迫る無数の？闇”の槍。

「（くっ・・・避けきれねぇ・・・！）」

空中でのオレは、ツナと違って身動きがとれない。

「楓香！！」

ツナの声が聞こえる・・・

・・・ここまでかよ。

いや・・・まだだ。

オレの・・・いや、オレ達の“覚悟”はそんなもんじゃない！！

「オレは諦めねぇ・・・
大切な仲間を守る、“闇”がそれを遮るなら。
オレが、その“闇”を祓ってやる！」

その時。

カッ！！

「「！！！」」

糸のようなものが、視界に溢れた・・・

校舎まで届く無数の糸を伸ばす、輝く“何か”。

それは・・・

「レオン・・・！」

―――――――――――――――――――――――――

Ｓｉｄｅ　リボーン

楓香そう叫んだ、その時だった。

ピカーーーーーーーッ！！！

辺りを真昼のように照らす、それは。

「うっ！！」

「レオンが！？」

「ニッ。
どーやらこの戦いで一番の成長を見せたのは、あいつだったみてーだな」

今の今までマユのままだったレオンが宙に躍り出て、輝く。

そして・・・“羽化”した。

「おい、リボーン・・・それって、まさか！」

「ついに、羽化したな」

オレの生徒がピンチになると何故か羽化し、その生徒の成長を表すかのように生徒専用の“新（ニュー）アイテム”が生まれる。
つまり・・・

「楓香殿の、“新（ニュー）アイテム”・・・・！」

タッ・・・

「・・・！」

突然の出来事に、？闇”は動きを止めていた。
その隙に地面に降り立った楓香は、輝くレオンを面を喰らったように目を見開いて見ていた。

だが、その？闇”も次の瞬間レオンを敵とみなし、真っ二つのしてしまう。

ザシュッ！！

「レオンが！？」

輝きを失い、ベチャッと地面に落ちるレオン。
だが・・・

「死ぬ気の炎で“闇”が効かねーのなら、心配いらねーぞ。
それに、レオンは形状記憶カメレオンだからな」

ムニョーンと一つに戻るレオン。
それより・・・

「それに、上に何か弾かれたぞ」

輝く？それ”は、レオンから弾き出されたもの。
それが楓香の手元に落ちる。

ポトッ・・・

そして輝きが収まり、姿を現したそれは・・・

ジャラ・・・

「これは・・・
鉄の・・・鎖・・・？」

楓香の手に収まったのは、杭のようなものが付いた細い金属の輪が連なる、大鎌と同じ？漆黒の鎖”だった。

標的９２　【新アイテム　来る！】（後書き）

次回あたり、完結したいです

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0339n/

‘闇’の守護者

2011年10月26日13時02分発行